

カール・マルクス著
高 島 素 之 譯

資 本 論

第一卷第二册

改 造 社 版

昭和二年十二月一日印刷
昭和二年十二月三日發行

資本論第一卷第二冊

譯者 高 島 素 之

發行者 山 本 美

東京市麹町區內幸町一ノ三

印刷者 杉 山 愛 二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二

版 權
所 有



發 兌

東京市麴町區內幸町一ノ三

改 造 社

振替東京八四〇二番
電話銀座一五四三番
四五三六八番

資本論第一卷 第二册目次

第五篇 絶対的並びに相對的餘剩價値の生産……………四九二—五八

第十四章 絶対的並びに相對的餘剩價値……………四九三

第十五章 勞働力の價格と餘剩價値との大小變化……………五〇四

(I) 勞働日の大小及び勞働の能率が不變であつて、勞働の生産力が可變なる場合……………五〇四

(II) 勞働日と勞働の生産力とが不變であつて、勞働の能率が可變なる場合……………五〇八

(III) 勞働の生産力と能率とが不變であつて、勞働日が可變なる場合……………五〇

(IV) 勞働の持續と生産力と能率とが同時に變化する場合……………五二

第十六章 餘剩價値率の種々なる公式……………五一五

第六篇 勞銀……………五一八—五五〇

第十七章 勞働力の價値(又は價格)の勞銀化……………五一八

第十八章 時間賃銀……………五二七

第十九章 請負賃銀……………五三五

第二十章 勞銀の國民的差異……………五四五

第七篇 資本の蓄積行程 五五—七六八

緒言 五五二

第二十一章 單純なる再生産 五五三

(資本の附屬物としての勞働者階級。資本制生産行程に依つて再生産される資本家對勞働者の關係)

第二十二章 餘剩價値の資本化 五六一

(一) 規模の擴大されつつある資本制生産行程。商品生産の所有律の資本制的占有律への推轉 五六七

(二) 規模の擴大されつつある再生産に關する經濟學上の認想 五六八

(三) 餘剩價値の資本及び收入への分割。節欲説 五七九

(四) 資本及び收入への餘剩價値の比例的分割から獨立して蓄積の大小を決定する所の諸事情——勞働力の搾取程度——勞働の生産力——充用資本と消費資本との差の増進——前貸資本の大小 五七九

(五) 謂はゆる勞働基金 五八九

第二十三章 資本制蓄積の一般的法則 六〇二

(一) 資本の組成不變なる場合に於ける蓄積に伴ふ勞働力の需要増加 六〇三

(二) 蓄積及びそれに伴つて生ずる集積の進行中に行はれる不變資本分の相對的減少 六二三

(三) 相對的の過剩人口たる産業豫備軍の累進的生產 六〇八

(四) 相對的過剩人口の種々なる存在形態。資本制蓄積の一般的法則 六〇九

(五) 資本制蓄積の一般的法則の例解 六一七

a	一八四六年より一八六六年に至るイギリス	六三
b	イギリスに於ける産業労働者階級中の薄給部分(榮養状態——住宅状態——ロンドン——ニューキアッスル・アボン・タイン——ブラッドフォード——プリストル)	六四
c	浮浪労働者(住宅事情——鐵道労働者——炭坑その他の鑛山に於ける労働者)	六五
d	恐慌が労働者階級中の最厚給部分に及ぼす影響(ロンドン東部に於ける造船船労働者)	六六
e	イギリスの農業プロレタリア(浮浪労働隊)	六七
f	アイルランド	六八

第二十四章 謂はゆる本來的の蓄積……………七〇八

(一)	本來的蓄積の祕密……………七〇八
(二)	農民に對する土地收奪——(十五世紀の七十年代以後及び十六世紀初期の數十年代に於ける耕地の牧場化——宗教改革、及び寺領の奪取——封建的所有のブルジョアの所有化——王政復古と光輝燦爛たる革命)——國有地の奪取——共同地及びその盜掠——スコットランド高地に於ける所有地の解放、耕地の羊牧場化、及び羊牧場の獵場化)……………七一
(三)	十五世紀終末以降に於ける被收奪者に對する殘虐な立法。賃銀引下げの法律……………七二
(四)	資本家の小作農業者の發生……………七三
(五)	農業革命が工業の上に及ぼした反應作用。工業資本のための國內市場の形成……………七四
(六)	工業的資本家の發生(植民制度——國債制度——近世的の租稅制度及び保護制度——大工業の初期に於ける兒童掠奪)……………七五
(七)	資本制蓄積の歴史的傾向……………七五

第二十五章 近世植民説……………七五八

○ 原語及び譯註……………1—45

カール・マルクス原著

高 畠 素 之 翻譯

資 本 論 第 一 卷

カール・マルクス著

資 本 論

經濟學の批判

第一卷 資本の生産行程

この書を私の忘れ難き友勇敢にして忠實且つ高

潔なるプロレタリア先鋒の闘士ウ・ヘルム・ウ・

ルフ（一八〇九年六月二十一日タルナウに生れ、一八六
四年三月九日、亡命中マンチェスターに客死す）に捧ぐ。

第五篇 絶對的並びに相對的餘剩價値の生産

第十四章 絶對的並びに相對的餘剩價値

我々は勞働行程をば、先づ（第五章を見よ）その歴史的の諸形態から獨立して、抽象的に、人類と自然との間の行程として考察したのであるが、その時述べて曰く『この全行程をば、結果たる生産物の立場から觀察すれば、勞働要具と勞働對象との雙方は生産機關として、また勞働それ自身は生産的勞働として現はれることになる（第一五二頁）と。而してまた、註（七）にこれを補足して曰く、『この意味の生産的勞働は、『單純なる勞働行程の立場から與へられるものであつて、これだけの定義では、資本制生産行程の下に於ける生産的勞働については決して十分でない』（第一五二頁）と。これより、更らにこの問題を展開せねばならぬ。

勞働行程が純然たる個別的の一行程である限り、後に至つて相分離さるべき一切の機能は、同一の勞働者に於いて統合されてゐる。彼れは自然對象をば、彼れの生活目的のために、個人的に占有するに當り、己れみづからを統制する、後に至り、彼れは他人に依つて統制されることになるのである。單一の人類は、彼れ自身の頭腦の統制に依つて、彼れ自身の筋肉を運轉することなくしては、自然の上に作用することが出来ぬ。自然の身體體系に於いて頭と手とが互ひに相まつ如く、勞働行程に於いては、頭の勞働と手の勞働とが統合される。後に至り、兩者は相分離して對抗するやうになるのである。總して生産物はその初め直接に個別的生産者の手で造られてゐたものであるが、それが後には一の社會的生産物に、總勞働者の共同生産物に轉化される。換言すれば、大なり小なりの程度で勞働對象の取扱に關與する所の諸分子から成る結合勞働總員の共同生産物に轉化されるのである。斯様に勞働行程それ自身の協業的性質が擴大されるにつれて、生産的勞働及びその負擔者たる生産的勞働者なる概念も亦、必然に擴大されて来る。生産的に勞働するためには、最早みづから手を下す必要がなくなる。總勞働者の器官となつて、彼れの何等かの副機能を盡せば、それで十分なのである。上述の如き生産的勞働の本來の定義は、物質的生產それ自身の性質から推論したものであつて、全一體として見た總勞働者については依然通用し得るのであるが、斯かる總勞働者

の個別的に見た各分子については、それはもはや通用しないのである。

だが他方にまた、生産的労働なる概念が狭められることになる。資本制生産なるものは、単に商品の生産たるのみではなく、また本質に於いて剰余価値の生産をも意味するものである。労働者は自分自身のために生産するものでなく、資本のために生産するのであるから、単に生産するといふだけでは、もはや十分でない。彼れは剰余価値を生産せねばならぬのである。資本家のために剰余価値を生産する所の労働者、換言すれば資本の自己増殖に仕へる所の労働者のみが、生産的なのである。物質的生産の例外から一例を選ぶことが許されるとすれば、學校教師といふものは、單に兒童の頭腦に加工するといふだけではなく、更らに企業者を富裕にする目的で労働するといふ意味が加はるとき、茲に初めて生産的労働者となるのである。企業者が腸詰工場に投資しないで教育工場に投資するといふことは、問題の上に些かの變化をも與へるものでない。要するに、生産的労働者なる概念は、單に活動と利用效果、労働者と労働生産物との間の一關係を含むのみでなく、尙また、労働者を資本價值増殖上の直接の手段たらしむる、歴史的に發生した特殊社會的なる生産關係をも含むものである。されば生産的労働者たることは、幸運ではなく寧ろ不運なのである。正統派經濟學が剰余価値の生産を以つて、或る時は本能的に、或る時はまた意識的に、最初から生産的労働者なるものの決定的特徴となして來たことは、剰余価値學說史を取扱ふ本書第四部の中で詳しく説く。正統派經濟學が剰余価値の性質を如何なる具合に理解したか、それに従つて生産的労働者の定義も亦色々に異なつて來た。例へばフキジオクラットの如きは、剰余価値を供給するものは農業労働のみであるとの見地から、生産的のものは農業労働のみであると主張した。

労働者が彼れの労働力の價值に相當した價值を生産するだけの限點以上に労働日を延長して、この剰余労働を資本の占有に歸せしめること、これ即ち絶對的剰余価値の生産であつて、資本制度の一般的基礎たり、相對的剰余価値生産の起點たるものである。相對的剰余価値なるものは、労働日が最初から必要労働と剰余労働との兩部分に分割されることを前提する。剰余労働部分を延長しようとするれば、ヨリ短時間を以つて勞銀に相當した價值を生産せしむる方法に依つて必要労働部分は縮小されることになる。絶對的剰余価値の生産は、労働日の大小といふことを中心として回轉し、相對的剰余価値の生産は、労働の技術的行程と社會的の組合配置とを徹底的に革命する。

要するに、相對的剰余価値の生産は特殊資本制的な生産方法を前提するものであつて、この生産方法は最初、資本の下への労働の形式的包摂といふ事實の基礎上に、その方法、要具及び條件と相共に原生的に生起し發展するものであるが、後には斯

かる形式的包攝に代つて現實的の包攝が生じて來るのである。

直接の強制に依つて生産者から餘剩勞働を汲み取るでもなく、また資本の下に生産者を形式的に従屬せしむるに至ることもない中間的の形態については、ヨリ立ち入つた説明を與へるに及ぶまい。斯かる形態の下に於いては、資本は尙未だ直接に勞働行程を征服するには至つて居らぬ。其處には、在來の太初的な經營方法を以つて、手工業なり農業なりを営む個別獨立的の生産者と相並んで、寄生蟲的に此等の生産者を吸ひ盡す所の高利貸附業者又は商人が、高利貸附資本又は商業資本が存在してゐるのであつて、斯種の搾取形態が一社會に主として行はれてゐる限り、資本制生産方法なるものは存在し得るに至らぬ。尤も斯かる搾取形態が資本制生産方法への過渡段階たり得ることは、中世紀の末葉に見られた所である。最後に、斯種の中間的形態の中には、外貌こそ異なれ、大工業の背後に此處彼處で再生産されるものもあることは、近世家内勞働の實例が示す通りである。

絶對的餘剩價值を生産せしめるためには、勞働が形式的にのみ資本の下に包攝されるといふ條件だけで十分である。一例を擧ぐれば、従前自身自身のため、又はツフト親方の職人として、勞働してゐた手工業者が、貸銀勞働者となつて、資本家の直接の支配下に立つといふことだけで十分なのである。然るに、相對的餘剩價值を生産する方法は、同時にまた、絶對的餘剩價值を生産する所の方法たるものであることは、曩に述べた通りである。のみならず、勞働日の無制限延長が大工業の特殊産物たることも、我々の説明に依つて明かにされた。總じて特殊資本制的の生産方法なるものは、それが一の生産部門全體に互つて行はれるやうになるや否や、もはや單に相對的餘剩價值だけを生産する所の方法ではなくなる。況や、それが各種の生産部門を通じて行き渡るやうになつた時は、尙更らさうであつて、資本制生産方法は今や生産行程の一般的、社會的に支配的な形態となるのである。資本制生産方法が相對的餘剩價值生産上の特殊方法として作用することは、もはや次の兩方面に限られてしまふ。第一には、従來形式的にのみ資本の下に隸屬してゐた産業がこの生産方法に依つて征服されるといふ方面、換言すれば、資本制生産方法が新たにその作用領域を擴大するといふ方面、第二には、既に資本制生産方法の勢力範圍に屬してゐる産業が、生産上の方法の變化に依つて革命されるといふ方面、この二つである。

觀方に依つては、絶對的餘剩價值と相對的餘剩價值との區別は總じて幻想的のものであるやうに見える。勞働者自身の生存に必要な勞働時間を超えて絶對的に勞働日を延長することを必要ならしめるといふ點から觀察すれば、相對的餘剩價值も絶對的となり、勞働生産力が發展して、必要勞働時間が勞働日の一部に制限されることを必要ならしめるといふ點から觀察すれば

絶對的餘剩價值も相對的となる。だが、餘剩價值の運動を念頭に置くとき、斯かる無區別の外觀は消滅してしまふ。資本制生産方法が一度確立されて普遍的となるや否や、總じて餘剩價值率の増進が問題となるとき、絶對的餘剩價值と相對的餘剩價值との區別は感知され得るやうになる。いま、勞働力の代價が價值通りに支拂はれるとして、斯かる假定の下に、餘剩價值率を増進しようとすれば、次の兩方法のいづれか一方に依るの外はなくなる。即ち、勞働生産力と勞働能率の準程度とが與へられてゐる場合には、勞働日を絶對的に延長すること、また勞働日の限界が與へられてゐる場合には、勞働日の兩部分たる必要勞働と餘剩勞働との相對量を變ぜしめること、このいづれかである。而して貨銀が勞働力の價值以下に低落することを假定しない限り、右の後の方法はまた、勞働の生産力なり能率なりの變化を前提することになるのである。

勞働者が彼れ自身及び彼れの一家の生存に必要な生活資料を生産するために時間の全部を要するとすれば、第三者のために無償で勞働すべき時間は残されぬことになる。一定の程度に發達した勞働の生産力がないとすれば、勞働者は斯種の利用し得べき時間を有しないことになり、斯かる過剰の時間がないとすれば、何等の餘剩勞働も存在せず、隨つて何等の資本家、何等の奴隸所有者、何等の封建領主、一言すれば何等の大なる所有階級も存在しないことになるであらう(一)。

(一)『特殊の一階級としての資本的企業者なるものが存在してゐるといふ、單にそれだけの事實でも既に、勞働の生産力に依存するものである』ラムセー著『富の分配論』第二〇六頁。『各人の勞働が自身の生活資料を造るに足るだけであるとすれば、何等の所有も存在し得ないであらう』(レヴンストン著『公債制度に關する考察』第一四及び一五頁)。

されば、餘剩價值に自然基礎があるとは言ひ得るにしても、それはただ次の如き一般的意義に於いてのみ言ひ得ることなのである。即ち、人が己れの生存に必要な勞働をやめて、これを他人に轉嫁することを絶對的に阻止する所の自然障礙は存在するものでないといふことであつて、これは例へば、他人の肉を食用することを阻止する絶對的の自然障礙なるものが存在しないのと同様である(一a)。

(一a)最近與へられた計算に依れば、既に探險された地球部分だけでも尙少なくとも四百萬の食人者を有してゐる。

斯かる原生的勞働生産力に神祕的觀念を伴はせることは、往々見る所であるが、これは決してなすべきことでない。人類が最初の動物状態から脱却して、その勞働が既に或る程度まで社會化されるに至つたとき、茲に初めて、一方の人の餘剩勞働が他方の人の生存條件になるといふ事情が生じて來るのである。文化の初期に於いては、勞働の達成する生産力が低微であると同時に、欲望も亦低微に止まつてゐる。蓋し人類の欲望は、それを充足すべき手段の發達と共に、またこの發達に依つて、發

展するからである。更らに、斯かる文化初期に於いては、他人の労働に依つて生活する社會部分は、直接的生産者の數に比すれば有るか無きかに小さい。而してこの比率は、労働の社會的生産力が増進するにつれて、絶對的にも相對的にも増進して来る(一)。尙また、資本關係なるものは、久しきに亙る發展行程の產物として與へられる經濟的地盤の上に生ずるものであつて、資本關係の起點たり基礎たる労働生産力の發達は、自然の賜物ではなく、幾萬年に及ぶ歴史の賜物なのである。

(二)『アメリカ土著のインド人に於いては、殆んど一切の物が労働者の所有に屬して居り、生産物の九割九分までは、労働に歸すべきものとされてゐる。イギリスに於いては、労働者に歸し得る部分は恐らく三分の二に及ばないであらう』(匿名著『東インド貿易の利益』第七三頁)。

社會的生産の發達の大小は暫く措き、如何なる形態の社會的生産に於いても、労働の生産力は諸種の自然條件から獨立することは出来ぬ。此等の條件はいづれも、人種などの如き、人類を自身に於ける自然と、人類を圍繞する所の自然とに歸著せしめることが出来る。外部的の自然條件は、經濟上二つの大部類に分割される。一は生活資料の自然的富源たる肥沃な土地や魚類に富む河海湖沼など、他は急激なる落流や、航行し得べき河川や、森林や、炭坑や、金屬鑛山などの如き、労働要具の自然的富源であつて、文化の初期に於いては、前の種類に屬する自然的富源が決定を與へ、ヨリ發達したる文化階段に於いては、後ちの種類 of 自然的富源が決定を與へる。一例として、イギリスとインド、又は古代世界に於けるアテネ及びコリントと黒海沿岸の諸邦とを比較せよ。

充足を避けることを絶對に許さない自然欲望の數が減じ、而して天然の土地肥沃と氣候の恩澤とが増大するに従ひ、生産者の生存と生殖に必要な労働時間は、ますます小となり、斯くしてまた、彼れ自身のためにする労働以上に出づる所の、他人のためにする労働部分は、ますます大となり得るのである。そこでデオドルスも、古代エジプト人について斯う述べた。

『彼等の兒童の教育に必要な努力と費用とが如何に僅少であつたかは、全く信じ難き程であつた。彼等は兒童のために、手近にある極めて單純な食物を料理して與へる。また、紙草の莖の食し得る部分をローストにして與へたり、いろ／＼な水草の根や莖を、或は生ままで、或は煮たり燻いたりして食へさせる。空氣が溫暖なため、大抵の兒童は靴を穿かず、衣服も著ずに歩行するといふ有様であるから、一人の兒童を育て上げる迄には概して二十ドラム(一)以上を要しない。エジプトの人口が何故かく多數となり、また何故かく多量の大營造物が同國に與へられたかは、主としてこの點から説明し得る所である』(三)。けれども、古代エジプトの大建築なるものは、その人口が大であつたといふ事實よりも、寧ろ利用し得べき位置にある人口部分が

大であつたといふ事實に起因してゐるのである。個々の労働者の場合に、必要労働時間が小なれば小なるほど、供給され得る餘剩労働はますます大となる如く、それと同様に、生活必需品の生産に必要な労働者の人口部分が小なれば小なるほど、他の労働に利用し得べき人口部分はますます大となるのである。

(三) デオドルス・シクルス著『歴史文庫』第一卷、第八〇章。

資本制生産が行はれると假定して、他の事情に變化なく、且つ労働日の大小が一定してゐるとすれば、労働の自然條件、なにかんづく土地豊度の如何につれて、餘剩労働の量に變化が生じて来る。斯くいへばとて、豊度の最も高い土地は、資本制生産方法の發達に最も適した土地であるといふ反對の結論は生じて來ない。資本制生産方法の成立は、自然に對する人類の支配を前提するものである。餘りに豊饒な自然は、『人類を手放さないこと、恰も引綱』に頼つてゐる子供の如くである。斯かる自然の下に在つては、人類自身の發達は自然必然事たらしめられるものでない(四)。資本の母國たるものは、鬱蒼たる草木を有する熱帶地でなく、寧ろ溫帶地なのである。社會的分業の自然基礎となり、且つ人類を圍繞する自然事情の變化を通して人類の欲望や、能力や、労働要具や、労働方法などを多様化する刺戟となるものは、土地の絶對的豊度ではなく、寧ろ土地の分化であり、土地の自然的産物の多様性である。自然力を社會的に統制し、節約し、人類の手の勞作に依つてこれを大規模に占有又は馴致することが必要であるといふ事實こそ、産業史上最も決定的な役割を演ずるものであつて、エヂプト(五)や、ロンバルデーや、オランダなどに行はれた灌漑工事の如きはその例證たるものである。インドやペルシアその他の國々に行はれた灌漑工事も亦、同様であつて、此等の諸國に於いては、運河に依る灌漑が單に必要缺くべからざる水を土地に供給したのみではなく、更らに沈泥の形で礦物性の肥料を山から流し寄せて來たものである。アラビアの版圖に屬するスペインやシシリーに産業が隆興した祕密も、斯かる運河工事にあつたのである(六)。

(四) 『前者(自然的の富)は貴重にして有利なるものであるとはいへ、これがため人々は不注意となり、傲慢となり、凡ゆる不節制に没頭することになる。反對に、後者は周到と、勉學と、技藝と、政策とを強制するものである』(トマス・マン著

『外國貿易に依るイギリスの富。別題、外國貿易の差額は富の規準』ロンドン、一六六九年刊、第一八一及び一八二頁(三)。

『生活資料が大抵は自然的に生産され、且つ衣服や住宅については、殆んど何等の注意を必要とすることなく又は許容することなき地帯に置かれること——それにも増して、一國民に取り扱はしきことは、私の想像し得ざる所である。……尤も、

これと全く反對の極端な場合も存し得る。要するに、労働をしても生産物を得ることの出來ない土地は、労働なくして豊富

な生産物を供給する土地と同様に悪しきものである』(匿名者著『現在に於ける食糧高價の原因研究』ロンドン、一七六七年刊、第一〇頁)。(五)

(五) ナイル河の増水や減水の時期を豫め確定する必要から、エヂプトには天文学と農業指導者たる僧侶階級の支配とが生ずるに至つたのである。『日至とはナイル河が氾濫し始める時期であつて、エヂプト人は最大の注意を以てこれを觀察せねばならなかつたのである。……この時期を確定して、適當なる農業上の處置を誦じ得るやうにすることは、彼等にとつて重要な問題であつた。そこで、彼等はこの時期の回來の明徴を天空に求めねばならなくなつたのである』(キエヴキエ著『地球回轉論』アーフエル版、パリ、一八六三年刊、第一四一頁)。(六)

(六) インドには、相互の間に聯絡のない微小な生産組織があつて、いづれも國家權力の下に立つてゐたのであるが、斯かる國家權力の物質的基礎の一となつたものは、給水の調節といふことであつた。インドの回教支配者は、後に支配者となつたイギリス人よりもこの點をよく理解してゐた。一八六六年の飢饉のため、ベンガル州オリッサ地方に於いて一百萬以上のインド教徒の生命が犠牲にされた事實だけを想起すれば十分であらう。

有利なる自然條件に依つて與へられるものは、餘剩労働(隨つて餘剩價值又は餘剩生産物)の可能のみであつて、その現實ではない。労働の自然條件に差異ある結果、同一量の労働を以つてしても、充足される欲望量は國に依つて異なり(七)、隨つて他の事情に差異なき限り、必要労働時間も種々異なることになる。斯かる自然條件は單に自然的制限としてのみ、換言すれば他人のための労働が開始され得る限點を決定するものとしてのみ、作用するものである。産業の進歩に比例して、この自然的制限は退却することになる。西歐社會の労働者は、餘剩労働を以つて自己の生存のために労働する許可を購ふの外なき位置に立つものであるが、斯かる社會の内部に於いては、餘剩生産物を供給することは、人間労働本有の一性質であるといふ風に得て考へられ易い(八)。だが一例として、莎麩樹が森林に野生してゐるアジア群島東部諸島の住民を考察せよ。『住民は莎麩樹に孔を穿ち、斯くすることに依つて髓の熟したことを確めたとき、幹を伐り倒して斷ち切り、髓を掻き出して、それに水を混じたものを瀝過する。斯様にして、完全に使用し得る莎麩粉が出来上るのである。一本の樹から採れる莎麩粉の量は、三百斤を通過とするが、時には五百乃至六百斤も採れることがある。要するに、この住民は、森林に行き薪木を切るやうにしてパンを切り採つて來る譯である』(九)。いま、斯様な東アジアのパン採取者がその一切の欲望を充足するためには、一週に十二労働時間を要すると假定する。自然の恩澤が直接彼れに與へる物は、多大の閑暇時間である。この閑暇時間を彼れ自身のために

生産的に利用するには、一列の歴史的事情を必要とし、これを他人のための餘剰労働として支出するには、外部的の強制を必要とする。若し資本制生産が實施されたとすれば、この善良な男は恐らく、一労働日の生産物を己が手に占有するため、一週の中、六日間労働せねばならぬことになるであらう。彼れが何故かく一週に六日間労働し、何故五日分の餘剰労働を供給するやうになるか、それは自然の恩澤に依つては説明し得ぬことである。自然の恩澤に依つて説明し得ることは、何故彼れの必要労働時間が一週一日に限られるかといふ一點のみである。いづれにしても、彼れの餘剰生産物は、人間労働本有の隠秘的性質から生ずるものではないであらう。

(七) 『同一量の労働支出を以つて、數量の相等しい生活資料を供給する二つの國が存在することはない。人類の欲望といふものは、その生活する土地の氣候が酷烈であるか温順であるかに従つて、増大したり減小したりするものである。随つて、人類が必要となさねばならぬ努力勤勉の程度は、國に依つて色々な差異を生ずることになる。而してこの差異の大小は、寒暑の程度を以つてするよりもヨリ正確に確め得るものではない。そこで、一定數の人口にとつて必要な労働量は氣候の嚴寒なる處に於いては最大であり、酷暑なる處に於いては最小であるといふ普通の結論を引き出すことが出来る。蓋し前者に於いては、ヨリ多くの衣類を要し、且つ土地耕作の上にもヨリ多くの労働を要するからである。』(匿名著『自然的利子率の支配原因論』ロンドン、一七五〇年刊、第六〇頁(6)。この劃時代的なる匿名書は、ジョセフ・マッシー(?)の手に成つたものであつて、ヒュームの利子説は、この書から採用したものである。)

(八) 『如何なる労働も、一の過剰を與へねばならぬ(而してこれはまた、市民たるものの權利義務に屬する所であるやうにも見える。』(ブルドーン)。

(九) フリードリヒ・ショーヴ著『土地と植物と人類』第二版、ライプチヒ、一八五四年刊、第一四八頁(8)。

自然を條件とする労働生産物も亦、労働が合體されてゆく資本の生産力として現れることは、歴史的に發達した社會的の労働生産力と異なる所がない。

リカルドは、餘剰價値の起原については何等顧慮する所がなかつた。彼れは餘剰價値をば、資本制生産方法に本有のものとして取扱つてゐる。蓋し彼れの目から見れば、資本制生産方法なるものは、社會的生產の自然的形態に外ならなかつたのである。彼れが労働生産力について語るとき求めてゐる所のものは、餘剰價値の存在の原因ではなく、寧ろ餘剰價値の大小を決定する原因に外ならぬ。然るに、彼れの學派は、労働生産力を以つて利潤(餘剰價値の意)の發生原因なりと揚言した。いづれ

にしても、マーカンチリズムに比し一段の進歩たりしことは確かである。蓋しマーカンチリストは、生産物の價格が生産費に超過する原因を交換に求めた。換言すれば、生産物を價值以上に販賣することに求めたのである。だが、リカルド學派も、この問題を回避しただけで、解決するには至らなかつた。實際のところ、此等のブルジョアの經濟學者は、餘剩價値の起原に關するこの囂々たる問題を餘りに立ち入つて論究することは極めて危険だとする當然な本能を有してゐた。然るに、リカルド以後半世紀に至り、ジョン・スチュアート・ミル君が出て來て、リカルドの學說を俗惡化した最初の人々の空虚な口上をば拙劣に反復し以つてマーカンチリストに對する優越を儼かに主張したといふことは、そも／＼何たる現象であらう？

ミルは曰く『利潤の原因となるものは、勞働がその維持に必要であるよりも以上のものを生産するといふ事實である』と。これだけのことならば、舊來の話と違ふ所は少しもない。だが、彼れは尙、獨特なるものを附け加へようとしてゐる。即ち曰く『これを異つた形に言ひ現すと、資本は何故、利潤を供給するかといへば、食物、衣服、原料、勞働器具等はその生産に要するよりも長時間持續するから、といふことになる』と。彼れはこの場合、勞働時間の持續を以つて生産物の持續と混同してゐる。この見地からすれば、一日きり存在しない生産物を供給する所のパン焼業者は、二十年又はそれ以上も持續する所の生産物を供給する機械製造業者に比して、同一の利潤を賃銀勞働者から得ることは決して出來ぬことになつてしまふ。なるほど、若し鳥の巢がそれを造るに要するよりも長時間存続しないとすれば、鳥は巢を有たないでやつて行かねばならなくなることは確かである。

この根本眞理を確立してしまつてから、ミルはマーカンチリストに對する彼れ自身の優越を確立してゐる。即ち、彼れは曰く、『斯くの如く、利潤なるものは、交換といふ附帶事項から生ずるものではなく、勞働の生産力から生ずるものであることは、我々の知る所である。而して一國の利潤總額は、交換の行はれると否とを問はず、常に勞働の生産力に依つて決定されるものである。職業の分化が存在しないとすれば、購買も販賣も存在しなくなるであらう。だが、その場合にも利潤は存在するのである』と。即ちこの場合には、資本制生産の普遍的條件たる交換即ち賣買は純然たる附帶事項にされてしまふのであつて勞働力の賣買なくしても、利潤は依然として存在するといふことになる！

彼れは更らに曰く、『若し一國の總勞働者が、その賃銀總額よりも二〇パーセント多く生産するとすれば、物價の如何を問はず、利潤は二〇パーセントになるであらう』と。これは一方からいへば、極めて見事な重語である。蓋し勞働者が資本家のために二〇パーセントの餘剩價値を生産するとき、勞働者の得る賃銀總額に對する利潤の比例は、 $\frac{20}{120}$ となるからである。

が、他方にまた、『利潤は二〇パーセントになるであらう』との結論は全く誤つてゐる。利潤はそれよりも小なることを常とせねばならぬ。蓋し利潤といふものは、前貸資本の總額に對して計算されるからである。例へば、資本家が五百磅を前貸するとして、その中、四百磅は生産機關に、一百磅は勞銀に投せられると假定する。上に假定せる如く餘剩價值率が二〇パーセントであるとすれば、利潤率は $\frac{20}{100} = 20\%$ 即ち四パーセントであつて、二〇パーセントとはならぬであらう。

次に、社會的生産の種々異なつた歴史的形態をばミルが如何に取扱つたかを示す所の立派な標本が與へられてゐる。彼れは曰く、『勞働者と資本家が相異つた階級をなす處にあつては、殆んど例外を存せしめることなく普遍的に行はれてゐる事態をば、私は本書全體に互つて假定するのであるが、それは即ち勞働者に對する全支拂をも含む一切の經營が資本家に依つて前貸されるといふことである』と。今日尙例外的にのみ地球上に行はれてゐるに過ぎぬ一状態をば普遍的に行はれると見る稀代な幻覺！ たが、論歩を進めよう。『尤も資本家が斯くすることは、必ずしも絶対に必要なことではない』と、ミルは素直に譲歩してゐる。然るに『勞働者は、その間に於ける生活維持に必要な資力を有してゐるとすれば、彼れの勞働が完成される時まで全賃銀が支拂はれなくとも、やつて行けるであらう。だが、この場合には、彼れは營業の遂行に必要な基金の一部を提供することになるのであるから、その限りに於いて、現實的に一の資本家となる譯である。』同じ筆法で、ミルは次の如くにも言ひ得るであらう。即ち自分自身のために生活資料のみでなく勞働要具をも前貸する所の勞働者は、現實に於いて彼れ自身の賃銀勞働者である。或はまた、領主たる他人のためでなく自分自身のためにのみ僱役勞働するアメリカの自營農民は、彼れ自身にとつての奴隸である、とも言ひ得るであらう。

ミルは斯様に、資本制生産の存在せざる處にも、尙それが存在すべきことを明かに論證した後、こんどは反對に、資本制生産の存在せる處にも、尙その存在を見まいとする首尾一貫した論證を與へてゐる。彼れは曰く、『而して前の場合（資本家が賃銀勞働者に生活資料の全部を前貸する場合）にも、勞働者は右と同一の見地を以つて（換言すれば、一の資本家として）觀察せられ得る。蓋し彼れは市場價格以下（ $<$ ）に勞働を提供するのであつて、その差額（ $>$ ）を企業者に前貸する……ものと見做され得るからである（**九五**）と。現實に於いては、勞働者は一週又はその他の期間、無料で資本家に勞働を前貸して、此等の期間の終末に、この勞働の市場價格を受けるのである。これが、ミルに従ふと、勞働者を資本家たらしむる所以である！ 坦々たる平地にあれば、堆土も尙、山として現れる。現代ブルジョアの平坦さは、その『偉大なる才能者』の口徑を以つて、測量すべきである。

(九 a) ジョン・ステュアート・ミル著『經濟原論』ロンドン、一八六八年刊、第二五二—五三頁及び隨所(9)。——〔此等の引抄は、フランス版『資本論』に従つてドイツ譯したものである。——D・H・L(10)〕

第十五章 勞働力の價格と餘剩價值との大小變化

勞働力の價值は、平均勞働者の生存上習慣的に必要な生活資料の價值に依つて決定される。この生活資料の形態は色々に変化し得るとはいへ、一定社會の一定時代について考へるとき、その量は一定してゐるものであり、隨つて不變の大きさとして取扱ひ得るのである。變化するものは、この量の價值なのである。勞働力の價值決定には、尙二つの因子が關與する。一は勞働力の發達に要する費用であつて、これは生産方法の如何につれて變化する。他は自然に依つて與へられる勞働力の區別、即ち男性勞働力か、女性勞働力か、成熟勞働力か、未成熟勞働力かといふ區別である。此等の相異つた勞働力の使用はまた、生産方法に依つても必要とされるものであるが、使用勞働力の上に於ける斯種の區別は、勞働者家族の再生産費及び成年男子勞働者の價值の上に、大なる區別を生ぜしむるものである。だが、この兩因子は、以下の研究では排除して考へる(九七)。

(九七) 第二九六頁に取扱つた事項も、この場合、排除して考へることは言ふ迄もない(第三版註——D・H)。

茲には(一)商品がその價值通りに販賣され、而して(二)勞働力の價格は時折り價值以上となることはあるが、價值以下となることは、決してないと假定する。

斯様に假定するとき、勞働力の價格と餘剩價值との相對的大小が、次の三事項に依つて決定されることは、曩に述べた通りである。即ち(一)勞働日の大小、換言すれば勞働の外延的大小、(二)平準的の勞働能率、換言すれば勞働の内包的大小(これに依つて、一定時間に一定の勞働量が支出されるやうになる)、最後に(三)勞働の生産力(これに依つて、生産條件の發達程度の如何に従ひ、同一量の勞働が同一の時間に、或は大、或は小なる生産物量を供給することになる)。此等の三因子中の一つが不變で二つが可變であるか、又は二つが不變で一つが可變であるか、最後にまた、三つとも同時に可變であるか——その如何準じて、極めて多種多様の結合が可能となることは明かである。而してまた、此等の結合は、各因子が同時に變化する場合、その變化の大小及び方向の上に種々なる差異が生じ得るといふ事實に依つて、更らに多様なものになつて来る。以下に説く所は、主要の結合のみである。

(1) 勞働日の大小及び勞働の能率が不變であつて、

勞働の生産力が可變なる場合

この假定の下では、労働力の價值と餘剩價值とは三つの法則に依つて決定される。

即ち一、労働の生産力、随つてまた、生産物の量並びに個々の商品の價格が、如何に變化しやうとも、與へられたる大きさの労働日は、常に同一の價值生産物を以つて表現される。

労働生産力の如何につれて、産出使用價值の量には種々なる差異が生じ、随つて一定量の價值生産物も、或は多量の、或は少量の商品の上に配分されることになるとはいへ、十二時間なる一労働日の價值生産物が、例へば六志であることには變りがない。

二、労働力の價值と餘剩價值とは、相反した方向に變化する。労働生産力の上に生ずる變化、即ちその増進又は減退は、労働力の價值に對しては反對の方向に、餘剩價值に對しては同一の方向に作用する。

十二時間なる労働日の價值生産物は、例へば六志といふ不變の大きさである。この不變量は等價に依つて労働者 手に回収される労働力の價值と、餘剩價值との和に等しい。ところで、一の不變量を構成する二部分の中、いづれか一方を減少せしめることなくして、他方を増大せしめ得るものではないことは自明である。餘剩價值を三志から二志に減少せしめずしては、労働力の價值を三志から四志に増大せしめ得るものではなく、労働力の價值を三志から二志に減少せしめずしては、餘剩價值を三志から四志に増進せしめ得るものではない。斯かる事情の下に、労働力の價值なり餘剩價值なりの絕對量は、その相對量（相互に比較して考へた大小）を變化せしめずして變更し得るものではないのであつて、雙方を同時に減少又は増大せしめることは不可能である。

更らにまた、労働の生産力が増進しないでは、労働力の價值は低下し得ず、随つて餘剩價值は増進し得るものではない。上例についていへば、労働の生産力が増進して、生産上に從來六時間を要しただけの生活資料が、今や四時間で生産し得るに至らずしては、労働力の價值は三志から二志に低落し得るものではないのである。反對に、労働生産力が低下して、従前六時間で造り得ただけの生活資料を生産するのに八時間を要するやうにならないでは、労働力の價值は三志から四志に増進し得るものではない。この事實から、次の結論が生じて来る。即ち、労働の生産力が増進する時は、労働力の價值は減少して、餘剩價值は増大することになり、反對に、労働の生産力が低下する時は、労働力の價值は増大して、餘剩價值は減少することになるのである。

この法則を立つるに當つて、リカルドは一の事實を見落した。即ち餘剩價值（又は餘剩労働）の量に於ける變化は、労働力

の價值(又は必要勞働)の大小に反對の變化を生ぜしめるとはいへ、さればといつて、雙方が同一の比例を以つて變化するといふことには決してならぬといふ事實である。雙方とも、同じだけ増大し又は減少する。けれども、價值生産物又は勞働日の各部分が、如何なる比例を以つて増大し又は減少するかといふことは、勞働生産力の變化以前に行はれた本來の分割の如何に懸るものである。假りに勞働力の價值は四志、必要勞働時間は八時間であり、また餘剩價值は二志、餘剩勞働は四時間であつたとして、勞働の生産力が増進した結果、勞働力の價值が三志に、必要勞働が六時間に減少するとすれば、餘剩價值は三志に、餘剩勞働は六時間に増進する。一方に附加され、他方に控除されたものは、二時間又は一志といふ同一の數量である。然し、雙方の比例的大小變化は同一でない。勞働力の價值は四志から三志に低下して、四分の一即ち二五パーセントの減少を來たすが、餘剩價值は二志から三志に増進して、二分の一即ち五〇パーセントの増大を來たすことになる。この事實から次の結論が生じて来る。即ち勞働生産力上の與へられたる變化に依つて生ずる餘剩價值の比例的増減は、餘剩價值に依つて代表される勞働日部分が本來小であれば小である程ますます大となり、本來大であれば大である程ますます小となる。

三、餘剩價值の増大又は減少は、勞働力の價值に於ける、それに照應した減少又は増大の結果たることを常とするものであつて、決してその原因たるものではない(十)。

(十)この第三の法則に對しては、殊にマカロックが馬鹿々々しい追加を與へてゐる。彼れは曰く、勞働力の價值は低下することなくとも、資本家が從前納附せねばならなかつた租税を廢止すれば、餘剩價值は大となり得ると。斯かる租税の廢止は、産業資本家が直接に勞働者から汲み取る餘剩價值量の上には斷じて何等の變化をも與へるものでなく、ただ産業資本家が餘剩價值の總分を己れの懐ろに入れるか、又は幾許づつ第三者との間に分割するかの比率に影響を及ぼすだけである。随つて、勞働力の價值と餘剩價值との比例は、これに依つて何等の變化をも與へられるものでない。要するに、マカロックが例外としてゐる所のものは、彼れが如何に原則の理解を誤つてゐたかを示すに過ぎぬのであつて、彼れはリカルドを俗惡化するに當り、アダム・スミスを俗惡化せる際に於けるジョン・バチスト・セーと同様に、しばしばこの不運に遭遇したのである。

勞働日は不變の大きさであつて、不變の價值量を以つて表現されるものであり、而して餘剩價值量に何等かの變化が生ずるとき、それは勞働力の價值量に反對の變化が生じたことを示すものであり、且つ勞働力の價值は勞働の生産力に變化があるときのみ變化し得るものであるから、斯かる條件の下に、餘剩價值量の各變化は、勞働力の價值量に於ける相反した變化に起因する。

するといふ、結論が生じて來ることは、明かな事實である。勞働力の價值と餘剩價值とに於ける如何なる絶對的の大小變化も、比等のものの相對的の大小に變化を生ぜしむることなくして行はれ得るものでないことは曩に述べた所であるが、今や勞働力の價值と餘剩價值との相對的の大小に於ける如何なる變化も、勞働力の價值の絶對的の大小が豫め變化することなくして行はれ得るものでないといふ結論が生じて來る。

この第三の法則に従へば、餘剩價值の大小變化なるものは、勞働生産力の變化に依つて勞働力の價值に一の運動が生ずることを前提する。勞働力の新たなる價值限界に依つて、餘剩價值の大小變化の限界が定まつて來るのである。然し、四圍の事情がこの法則の作用を許す處にあつても、尙その間、諸種の補助的運動が生じ得る。例へば、勞働の生産力が増進して、勞働力の價值は四志から三志、必要勞働時間は八時間から六時間に減少する場合にも、勞働力の價格は三志八片なり、又は三志六片なり、三志二片なりまで低下するだけで、隨つて餘剩價值の方は三志四片なり、三志六片なり、三志十片なりを越えて増進するに至らぬといふ場合も生じ得る。三志を極限とする勞働力價格のこの低下が如何なる程度に落ち著くかは、一方からは資本の壓迫が、他方からは勞働者の反抗が、秤皿に投げ入れる所の相對的の重量の如何に懸るものである。

勞働力の價值は、一定量の生活資料の價值に依つて決定される。勞働生産力の變化につれて變動するものは、この生活資料の價值であつて量ではない。量の方は、勞働生産力が増進するとき、勞働力の價格と餘剩價值との間に何等の量的變化をも生ぜしめずして、勞働者と資本家との雙方にとり、同時に、同一の比例を以つて、増大し得る。勞働力の價值は本来三志であつて、必要勞働時間は六時間、同様に餘剩價值も三志であつて、餘剩勞働時間が六時間であつたとすれば、勞働の生産力は二倍に増進しても、勞働日の分割に變化なき限り勞働力の價格と餘剩價值とは變化が生じないであらう。ただ、兩者いづれも、二倍に増量した所の、然しそれだけ價安くなつた所の使用價值を以つて表現されるやうになるといふ一點が違ふだけである。勞働力の價格は不變であるといへ、而も價值以上となるであらう。勞働力の價格は低落しても、新たなる勞働力價值に依つて與へられる一志半といふ極限までは低落することなく、二志十片なり二志六片なりに止まつてゐるとすれば、この低落した勞働力の價格に依つて代表される生活資料の量は、矢張り増大することになるであらう。要するに、勞働力の價格なるものは、勞働生産力の増進につれて不斷に低落するといへ、勞働者の生活資料は同時に絶えず増大し得るのである。だが、相對的に、換言すれば餘剩價值と比較して考へる時は、勞働力の價值は不斷に低下するのであつて、勞働者對資本家の生活位置間の溝渠は擴大されたことになるであらう(十一)。

(十一) 『産業の生産力に變化が生じ、一定量の労働及び資本を以つて、従前に比しヨリ多量又はヨリ少量の生産物が造られるやうになつたとき、貨銀の比準は變化して而もこの貨銀に依つて代表される生産物の量は變化することなく、又は後者が變化して而も前者は不變であるといふ場合も生じ得ることは明かである』(匿名著『經濟要論』ロンドン、一八三二年刊、第七頁)。

以上三つの法則を初めて嚴密に樹立したのは、リカルドであつた。然し彼れの證明には次の缺點が含まれてゐた。(一)彼れは、此等の法則の行はるべき特殊の條件をば、資本制生産の自明的にして普遍的且つ專屬的な條件と見た。彼れは、労働日の大小の上にも、労働能率の上にも、何等の變化を認めなかつたため、おのづから労働の生産力のみを唯一の可變因子とするに至つたのである。(二)次に——これは彼れの分析をヨリ甚しく不純化した缺點であるが——彼れは他の經濟學者たちと同様に、餘剩價值をばそれ自體として、換言すれば利潤地代などの如き特殊の形態から獨立して、研究するに至らなかつた。これがため、彼れは餘剩價值率の法則をば直接に利潤率の法則と混同するやうになつてしまつたのである。曩にも述べた如く、利潤率なるものは前貸總資本に對する餘剩價值の比率であるが、餘剩價值率の方は前貸總資本中の可變分のみに對する餘剩價值の比率である。いま、五百磅なる一資本(C)が、合計四百磅なる原料や労働要具など(c)と、一百磅の勞銀(v)とに分割され、而して餘剩價值(m)は一百磅に等しいと假定する。然る時には餘剩價值率は $\frac{m}{C} = \frac{m}{100\%}$ であるが、利潤率は $\frac{m}{C+v} = \frac{m}{150\%}$ となる。尙また、利潤率なるものは、餘剩價值率の上に何等影響する所のない事情に依つても左右され得ることは明かである。同一の餘剩價值率が種々異つた利潤率に依つて言ひ現され、また、種々異つた餘剩價值率が一定事情の下に於いては、同一の利潤率を以つて言ひ現され得ることは、本書第三部(第三卷)の中に論證せんとする所である。

(II) 労働日と労働の生産力とが不變であつて、

労働の能率が可變なる場合

労働の能率が増進するといふことは、同一の時間にヨリ多量の労働が支出されるといふことである。されば能率の高い労働日は、同一數の時間から成る能率の低い労働日に比べてヨリ多くの生産物に體化される。生産力の増進した場合にも、同一の労働日に依つてヨリ多くの生産物が供給されることは事實である。だが、この場合には、個々の生産物に要する労働が減少せするため、個々の生産物の價值は低下することになる。然るに、能率増進の場合には、個々の生産物に要する労働量に不變であ

るから、随つて、その價值にも變化がない。この場合には、價格の低落を伴はずして生産物の數は増大することになるであつて、生産物の數が増大すると共に、價格總額も亦、膨脹して來るのである。然るに、生産力増進の場合には、同一の價值總額がヨリ多量の生産物に依つて表現されるといふに止まる。されば時間數に變化なき限り、能率のヨリ大なる労働日は、ヨリ大なる價值生産物に體化され、随つて貨幣の價值に變化がないとすれば、ヨリ多大の貨幣に體化されることになる。この労働日の價值生産物は、労働の能率が社會的の水準程度と一致しなくなるに應じて色々に變化するものである。そこで同一の労働日にはもはや、従前の如く不變的の價值生産物に依つて表現されることなく、寧ろ可變的の價值生産物に依つて表現されることになるのであつて、例へば能率のヨリ大なる十二時間労働日は、通例の能率を有する十二時間労働日の如く六志から八志に増大することなく、七志なり八志なりを以つて表現されることになるのである。労働日の價值生産物が例へば六志から八志に増大するとき、この價值生産物の兩部分たる労働力の價格と餘剩價值とは、同一の程度に於いてにしろ、異なつた程度に於いてにしろ、兎にかく同時に増大し得ることは明かである。價值生産物が六志から八志に増大するとき、労働力の價格と餘剩價值とはいづれも同時に、三志から四志に増大し得る。労働力の價格増進は、この場合必ずしも、労働力の價格が價值以上となつたことを意味しない。反對に、労働力の價值の低落をも伴ひ得る。これは、労働力の價格増進が労働力の磨滅増進を埋合はさない場合に、行はれることを常とするものである。

一時的な例外はあるにしろ、労働生産力の變化が、労働力の價值大小随つてまた餘剩價值の大小に變化を生ぜしめるのは、當該産業部門の生産物が労働者の通例の消費に歸する場合だけに限られることは、我々の知る所である。だが、當面の場合には、この制限は消滅してしまふ。労働の大きさが外延的(時間的)になり、内包的(能率的)になり變化するとき、これに應じて價值生産物の大きさにも、この價值を代表する物品の性質からは獨立した一變化が行はれる。

労働の能率が凡ゆる産業を通じて、同時に均等に増進するとすれば、斯くして與へられる所の新たなヨリ高き能率程度は通例の社會的水準程度となつて、外延的の大きさとしては計算に入らなくなるであらう。だが、斯様な場合にも、労働能率の平均程度は國民によつて相異なるものであり、これがため相異なつた國民的労働日に對する價值法則の應用は變化を受けることになるであらう。一方の國民の能率大なる労働日は、他方の國民の能率小なる労働日に比し、ヨリ大なる貨幣表章を以つて表現されるのである(十二)。

(十二)『他の事情に變化なき限り、イギリスの製造業者は他國の製造業者に比し、一定の時間に極めて多量の生産物を供給

し得るのであつて、これがため、イギリスに於ける一週六十時間の労働と他國に於ける七十二時間又は八十時間の労働との區別は平均に歸してしまふ（『工場監督官報告、一八八五年十月三十一日』第六五章）。歐洲大陸諸國に於いて労働日をば法律上更に短縮することこそ、大陸諸國の労働時間とイギリスの労働時間との斯かる區別を小ならしむべき最も確かな手段たるであらう。

(III) 労働の生産力と能率とが不變であつて、 労働日が可變なる場合

労働日は二つの方向に變化し得る。即ち短縮するか、延長するかし得るのである。

(一)労働日の短縮。茲に假定する如き條件（即ち労働の生産力と能率とが不變であるといふこと）の下に於いては、労働日を短縮しても、労働力の價值隨つてまた必要労働時間の上には變化が生じない。然し餘剩労働及び餘剩價值は縮小されることになる。餘剩價值の絶対量が減ずると共に、その相對量（換言すれば、労働力の不變なる價值量と比較した餘剩價值の大きさ）も減じて来る。この場合、資本家は労働力の價格を價值以下たらしめることに依つてのみ、損害を免れ得るであらう。

従來、労働日の短縮に向けられた一切の反對論は、茲に假定する如き條件の下に短縮が行はれることを前提してゐる。だが現實に於いては寧ろ、労働日の短縮には、労働の生産力と能率との變化が先行するか、又は直接相伴ふことになつてゐるのである（十三）。

(十三)『十時間労働法の運用に依つて露はにされた……諸種の埋合せ的事實がある』（『工場監督官報告、一八四八年十二月一日』第七頁）。

(一)労働日の延長。いま、必要労働時間が六時間、労働日の價值が三志であり、同様に餘剩労働時間も六時間、餘剩價值も三志であるとすれば、總労働日は十二時間となり、これが六志なる價值生産物に依つて表現される譯である。この場合、労働日を二時間延長して、而も労働力の價格が不變であるとすれば、餘剩價值の絶対量と共に相對量も増大することになる。労働力の價值量は絶対的には不變であるが、相對的には減少する。前項に假定せる條件の下に於いては、労働力の相對的價值大小は絶対的價值大小の變化なくして變化し得るものではなかつた。然るに今や、労働力の價值に於ける相對的の大小變化は、餘剩價值に於ける絶対的の大小變化の結果となるのである。

勞働日を表現する所の價值生産物は、勞働日それ自身の延長につれて増大するものであるから、勞働力の價格と餘剩價值とは、等量に於いてか、不等量に於いてか、兎にかく同時に増大し得る。つまりこの同時的増大は、二つの場合に行はれ得る。即ち、勞働日が絶對的に延長される場合と、斯かる延長なくして勞働の能率が増進せしめられる場合と、この二つである。

勞働日が延長されるとき、勞働力の價格は名目上には變化する所なく、或は寧ろ増進することがあるとはいへ、而も價值以下となり得るのである。蓋し勞働力の日價值なるものは、勞働日の平準的な平均持續（換言すれば、勞働者の平準的な生存期間）と、それに照應して行はれる所の、人體に適合せる、生命物質の平準的な運動化とに基いて計算されることは、我々の記憶する所である（十四）。勞働日の延長と不可分の關係に在る勞働力磨滅の増進は、一定の點までは賃銀の増大に依つて償ひ得るのであるが、この點を超えると、磨滅は幾何級數的に増進して、勞働力の平準的の再生産及び活動に必要な一切の條件は破壊され、勞働力の價格と搾取程度とは、相互に通約し得る所の大きさでなくなる。

（十四）『或る一人が二十四時間中になした勞働の量は、彼れの身體の上に生じた化學的變化を研究することに依つて、ほぼこれを確めることが出来る、蓋し物質の形態變化なるものは、それに先だつて行はれる諸種の運動力の作用を示す所の尺度となるからである』（グロウツ著『各種物理力の相互關係について』ロンドン、一八六四年刊）。

（IV） 勞働の持續と生産力と能率とが同時に變化する場合

この場合には、幾多の結合が生じ得ることは明かである。いづれか二つの因子が變化して、殘餘の一因子が不變であることも可能であるし、又は三因子の總べてが同時に變化することも可能である。此等の三因子は同じ程度に於いても、相異なつた程度に於いても、同じ方向にも、相異つた方向にも、變化し得るのであつて、各變化は一部分的又は全部的に相殺し得る。だが、これについて可能な各場合の分析は、前記（一）（二）（三）の下に掲げた説明を以つてすれば、容易に與へ得る所であつて、それ／＼の因子を順次に可變なるものとし、他を差し當り不變なるものとして取扱ふことに依り、可能なる各結合の結果を見出し得るのである。そこで以下、二つの重要な場合だけについて簡単な考察を與へることにする。

（一）勞働の生産力が低下して、同時に勞働日が延長される場合。

茲に勞働生産力の低下といふのは、勞働力の價值を決定する所の生産物を供給する勞働部門についていふのであつて、例へば土地の豊度が減じ、それに應じて土地生産物の價が高くなる結果、勞働の生産力が低下する如き場合を念頭に置くのであ

る。いま、労働日が十二時間、一労働日の價值生産物が六志であつて、その一半は労働力の價值に相當し、他の一半は餘剩價值を形成するものと假定すれば、労働日は六時間の必要労働と六時間の餘剩労働とに分割される譯である。ところで、土地生産物の價が高くなつた結果、労働力の價值は三志から四志、隨つて必要労働時間は六時間から八時間に増大したと假定し、而して若し労働日に變化がないとすれば、餘剩労働は六時間から四時間に、餘剩價值は三志から二志に減少する。労働日が二時間延長されて、十二時間から十四時間になるとすれば、餘剩労働は依然として六時間、餘剩價值は三志であるが、必要労働に依つて秤量さるべき労働力價值に比較した餘剩價值の大きさは減少することになる。労働日が四時間延長されて、十二時間から十六時間になるとすれば、餘剩價值と労働力の價值との、餘剩労働と必要労働との比較の大小は不變であるとはいへ、餘剩價值の絶對量は三志から四志となり、餘剩労働は六時間から八時間となつて、三分の一（即ち三三パーセント三分の一）の増加を來たすことになる。要するに、労働の生産力が低下して、同時に労働日が延長される場合には、餘剩價值の絶對量は不變であつて、而も同時にその相對量は減少し得るし、また相對量は不變であつて、而も同時にその絶對量は増大し得る。而して労働日延長程度の如何に依つては、雙方とも増大し得るのである。

一七九九年から一八一五年に至る間、イギリスでは生活資料の價格が昂騰して、生活資料に言ひ現された實質上の賃銀は低落したに拘らず、名目上の賃銀は昂騰することになつた。この事實から、ウエスト及びリカルドは、農業労働の生産力が低下せるため餘剩價值率も低下するに至つたと結論し、彼等の幻想の内部にのみ通用し得べき斯かる假定を以つて、勞銀と利潤と地代との相對的の大小比例に關する重要な分析の出發點たらしめた。けれども事實に於いては、労働の能率増進と、労働時間の強行的延長とに依つて、當時餘剩價值は絶對的にも相對的にも増大したのであつて、正にこれ労働日の無制限延長が市民權を獲得した時代であり（十五）、一方には資本の増加、他方には被救恤の窮乏の増加の促進を以つて、格別の特徴とした時代であつた（十六）。

（十五） 戦時中、資本を増加せしめた主要原因の一は、如何なる社會に於いても最多數の人口を占めてゐる労働者階級の努力と、恐らくはまた窮乏との増進に依つて與へられたものである。ヨリ多くの婦人や兒童が、境遇上已むなく努力を要する労働に従事することになつたと同時に、従前から労働に従事してゐた人々も、同一の原因に依つてヨリ多くの時間部分をば生産増加のために供することを餘儀なくされたのである』（匿名者著『現在に於ける國民的不景氣の主要原因を説明せる經濟論文』ロンドン 一八三〇年刊、第二四八頁）。

(十六)『穀物と労働とが價格の點で相並行することは減多にない。けれども、雙方をば最良の土分離し得ざらしめる明瞭な限界の存することは事實である。物が昂騰して、一八一四——一五年の議會調査委員に與へられた供述の中に高調されてゐる如き賃銀低落を生ぜしめた時代に在つては、労働階級は異常なる努力をなすものであつて、斯かる努力は當該個人にとり極めて賞讃の價値あるものであると同時に、また資本の増殖を助長することも確かである。然し、この努力が永続的に且つ無制限になされることは、何人も欲せざる所であらう。それは、一時の應急策としては極めて嘆賞すべきものであるが、永続的になされるときは、恰度一國の人口が食物範圍の最極限まで増殖した場合と同様の結果を生ぜしめるであらう』(マルサス著『地代の性質及び進歩の研究』ロンドン、一八一五年刊、第四八頁註)も。リカルド及びその他の學者が、明々白日の事實を無視して、労働日大小の不變といふことを彼等の凡ゆる研究の共通基礎となしてゐたときに當り、マルサスが彼れの著書の他の個所に於いても直接に言及してゐる如き労働日の延長といふ事實を強調したことは、名譽とすべきである。だが、彼れは保守的利害の奴隸であつたため、機械の驚くべき發達と婦人労働及び兒童労働の搾取とに伴へる労働日の無制限延長が、殊に戦争の需要がなくなり、世界市場の上に有するイギリスの獨占が存在しなくなつたとき、労働階級の大きな部分を『過剰』にしなければならなかつた事實を看取するに至らなかつた。この『過剰人口』を資本制生産の單に歴史的なる自然律に依つて説明するよりも寧ろ自然の永久的法則に依つて説明する方が、溢かに便利であり、且つマルサスが全く僧侶的に崇拜してゐた階級の利害とも遙かによく一致する所でもあつたことは論を俟たぬ。

(二)労働の能率と生産力とが増進して、同時に労働日が短縮される場合。

労働の能率と生産力との増進は、同一の方面に均等に作用するものであつて、いづれの場合にも各期間に得られる生産物の量はヨリ大となる。随つてまた、いづれの場合にも、労働者の生活資料乃至その等價の生産に必要な労働日部分はヨリ小となるのである。總じて労働日の絶對的な最低限界は、この必要な然し收縮し得る労働日部分に依つて與へられる。若し全労働日がこの限界まで收縮されるとすれば、餘剩労働は消滅することになるであらう。これは資本の支配下に於いては不可能なことである。資本制生産形態を廢除したとき、労働日は必要労働の水準まで短縮せられ得るであらうが、他の事情に變化なき限り、必要労働それ自身の範圍は擴大されることになるであらう。蓋し一方には、労働者の生活條件が擴充され生活上の要求が増進すると同時に、他方にはまた、今日餘剩労働となつてゐるものの一部が社會的の準備金、蓄積基金を造るに必要な労働となりこの意味に於いて、それは必要労働と見做されることになるからである。

労働の生産力が増進すればする程、労働日はますます短縮し得ることになり、労働日が短縮されるればされる程、労働の能率はますます増進し得ることになる。社會的に觀察すれば、労働の生産力なるものはまた、労働節約の増進につれても増進する。この労働節約といふ中には、單に生産機關の節約のみでなく、また凡ゆる不用な労働の防避も含まれる。蓋し資本制生産方法は、各個の營業の内部に於いては節約を厲行せしめるとはいへ、その無政府的なる競争制度は社會的生產機關及び労働力の無制限的な浪費、並びに今日でこそ必要缺くべからざるものとなつてはゐるがそれ自體としては不用なる諸種の機能を造り出すものとなつてゐるからである。

労働の能率と生産力とが與へられてゐるとき、労働が社會の凡ゆる労働有能者間に均等に配分され、一部の者が必然的なる労働の負擔を自己の手から他の者の手に轉嫁することが不可能となるに従つて、社會的労働日中の物質的生産に必要な部分はず／＼小となり、隨つて個々人の自由なる精神的並びに社會的活動のため贏得される時間部分はますます大となる。この方面から見れば、労働日短縮の絶對的限界となるものは即ち労働の普遍化である。資本制社會に於いては、一階級の自由な時間は、大衆の生活時間の全部を労働時間に轉化せしめることに依つて生ぜしめられるのである。

第十六章 餘剩價值率の種々なる公式

餘剩價值率が左の公式に依つて表現されることは、我々の既に見た所である。

$$(I) \quad \frac{\text{餘剩價值} (m)}{\text{可變資本} (v)} = \frac{\text{餘剩價值}}{\text{勞働力の價值}} = \frac{\text{餘剩勞働}}{\text{必要勞働}}$$

最初の二公式は價值と價值との比例を示し、第三の公式は此等の價值が生産される時間と時間との比例を示す。此等の相補充する公式は、概念上嚴密に區別されるものであつて、正統派經濟學に於いても、意識されることはなかつたとはへい、本質的には既に造り上げられてゐたことを見るのである。正統派經濟學に於いては、我々は次の派生的公式に逢着する。

$$(II) \quad \frac{\text{餘剩勞働}}{\text{勞働日}} = \frac{\text{餘剩價值}}{\text{生産物價值}} = \frac{\text{餘剩生産物}}{\text{總生産物}}$$

此等の公式はそれ／＼、同一の比例をば勞働時間として、勞働時間を體化せる價值として、また、この價值の存在形態たる生産物として言ひ現してゐる。茲に生産物價值といふのは、勞働日の價值生産物だけを指すのであつて、生産物價值の不變部分は排除さるべきものと解されてゐることは言ふ迄もない。

右の(II)に示す一切の公式は、現實的の勞働搾取程度たる餘剩價值率をば虚偽の形に言ひ現してゐる。いま、勞働日が十二時間であると假定する。この場合、他の條件が前章の例解に假定した通りであるとすれば、現實的の勞働搾取程度は次の比例に依つて示される。

$$\frac{6 \text{ 時間の餘剩勞働}}{6 \text{ 時間の必要勞働}} = \frac{3 \text{ 志の餘剩價值}}{3 \text{ 志の可變資本}} = 100\%$$

然るに前記(II)の公式に依れば、次の如くなる。

$$\frac{6 \text{ 時間の餘剩勞働}}{12 \text{ 時間の勞働日}} = \frac{3 \text{ 志の餘剩價值}}{6 \text{ 志の價值生産物}} = 50\%$$

此等の派生的公式は、實際のところ、勞働日又はその價值生産物が資本家と勞働者との間に分割される比例を言ひ現すものである。そこで若し此等の公式が資本の自己増殖の直接の表章たるものとすれば、餘剩勞働又は餘剩價值は決して一〇〇パー

セントたるを得ぬといふ虚偽の法則が行はれることになる(十七)。餘剩労働は常に労働日の一部を代表し、餘剩價值は常に價值生産物の一部を代表し得るに過ぎぬものであるから、餘剩労働は常に労働日より小、餘剩價值は常に價值生産物よりも小たるを免れないのである。然るに若し $\frac{100}{100}$ なる比例に達すべきであるとすれば、雙方は等量とならねばならぬ譯である。餘剩労働が全労働日(茲では、労働週、労働年等の平均日を指す)に互るやうになるには、必要労働が零に歸することを必要とする。然し必要労働が消滅すれば、餘剩労働も亦消滅してしまふ。餘剩労働なるものは、必要労働の一機能に過ぎぬからである。ゆれば、 $\frac{\text{必要労働}}{\text{労働日}} = \frac{\text{必要價值}}{\text{價值生産物}}$ なる比例は決して $\frac{100}{100}$ の限界に到達し得るものでなく、況や $\frac{100+x}{100+x}$ となり得ないことは尙更らである。然るに現實的の労働採取程度たる餘剩價值率はこの比例に到達し得るのである。一例としてレオン・ド・ラヴェルニユの計算を採らう。これに依れば、イギリスの農業労働者は生産物(十八)又はその價值の四分の一を受くるに過ぎず、反對に小作農業者たる資本家は四分の三を受けてゐる(この四分の三が、後に及んで資本家と土地所有者その他との間に如何やうに再分割されるかといふ問題は暫く措く)。即ちイギリスに於ける農業労働者の餘剩労働は必要労働に對して $\frac{3}{1}$ の比例を示してゐる譯であつて、三〇〇パーセントといふ搾取率を與へることになる。

(十七)これは、例へばロッドベルトスの『フォン・キルヒマンへの第三書翰、リカルド地代説の反駁及び新地代説の樹立』(ベルリン、一八五一年刊)の中に見られる所である。この書については、後に尙述べることにするが、其處には誤つた地代説が與へられてゐるとはいへ、著者が資本制生産の本體を看破してゐる點は認めなければならぬ。〔第三版註——この一語は、マルクスが先行者の中に現實の進歩、純正なる新思想を見出したとき、如何に好意を以つてこれを批判したかを示すものである。だが、次いで刊行されたロッドベルトスのルドルフ・マイヤーに宛てた書翰は、右の評価を幾分傷けることになつた。その中に曰く、『資本は單に労働から救ひ出されるばかりでなく、またそれ自身からも救ひ出されねばならぬものである。而してこの救済は實際のところ、企業資本家の活動なるものは資本所有を通して彼れの手託された國民經濟上及び國家經濟上の機能であると解し、且つ彼れを受くる利得を以つて一の俸給形態なりと解する時に、最もよく達成されるのである。蓋し我々は斯く解するほかは他の何等の社會的體制をも知らないからである。然し俸給なるものは規制し得るものであり、また餘りに勞銀の範圍を侵す場合には輕減し得るものである。同様にマルクスの社會侵入——私は彼れの著書を斯く名づけたい——も亦防止すべきである。……總じてマルクスの述作は、資本についての一研究といふよりも、寧ろ今日の資本形態に對する一論撃を意味するものであつて、彼れは今日の資本形態を資本概念それ自身と混同してゐる。其處に彼れの觀

謬の原因が存してゐるのである』『ヤゲットオーのロドベルトス書翰集』ドクトル・ルードルフ・マイヤー編、ベルリン、一八八一年刊、第一卷、第一一一頁、ロドベルトス第四八翰(3)。——ロドベルトスが『社會書翰』中に示した眞に大膽な突撃も、遂には斯様な觀念論的陳套語に埋もれてしまつたのである。——D・H・J

(十八) 放不變資本に相當するだけの生産物部分はこの計算では控除されてゐることは言ふ迄もない。盲目的イギリス嘆賞家なるレオンス・ド・ラヴェルニュ君は、資本家の受分を高く計算し過ぎるといふよりも、寧ろ低く計算し過ぎてゐる。

労働日の大きさを不變のものとして取扱ふ學校的方法は、上記(工)に屬する諸公式の應用に依つて鞏固にされた。蓋し此等の公式に於いては常に、餘剩労働をば與へられたる大きさの一労働日と比較するからである。價值生産物の分割のみを念頭に置く場合も同様であつて、既に一の價值生産物に對象化されてゐる労働日は必然、與へられたる限界の労働日たるのである。

餘剩價值と労働力の價值とを價值生産物の組成部分として表現することは、資本制生産方法それ自身から生ずる表現様式であつて、これが如何に重要な意義を有つかは後に尙説かんとする所であるが、この表現の内部には資本關係の特徴たる、可變資本が生きた労働力と交換されるといふ事實、隨つてまた労働者が生産物から排除されるといふ事實が隱蔽されてゐる。然るに、この事實は現れて來ないで、寧ろ労働者と資本家とが生産物をば夫々の形成因子に比例して分配するといふ協合關係の誤れる外觀が現れて來るのである(十九)。

(十九) 資本制生産行程の發達したる諸形態はいづれも協合の形態であるから、かのアレキサンドル・ド・ラボルト伯が『社會の總利害に於ける協合の精神』(パリ、一八一八年刊)の中になしてゐる如く、資本制生産行程をばその獨特の對立的性質から抽象して、これを自由なる協合形態に妖變させてしまふほど、容易なことのないとは言ふ迄もない。ヤンキーのエイチ・ケリーは奴隸制度の事情についても、時折りこの妖術を應用して同一の成績を納めてゐる。

尙また(II)の公式は常に、(I)の公式に再轉化し得るものである。いま、 $\frac{6 \text{ 時間の餘剩労働}}{12 \text{ 時間の必要労働}} = \frac{100}{100}$ なる公式について見るに、必要労働時間は十二時間なる労働日から六時間なる餘剩労働を控除したものに等しいのであるから、次の結果が得られることになる。

$$\frac{6 \text{ 時間の餘剩労働}}{6 \text{ 時間の必要労働}} = \frac{100}{100}$$

第三の公式は、曩にも時折り先鞭的に言及した所であつて、左の如きものである。

$$(III) \quad \frac{\text{餘剰價值}}{\text{勞働力の價值}} = \frac{\text{餘剰勞働}}{\text{必要勞働}} = \frac{\text{不拂勞働}}{\text{支拂勞働}}$$

不拂勞働なる公式は動もすれば、資本家の支拂ふものは勞働の代價であつて勞働力の代價ではないといふ誤解に導くものであるが、この懸念は曩に掲げた説明に依つて一掃されてゐる。

不拂勞働なる公式は、 $\frac{\text{不拂勞働}}{\text{支拂勞働}}$ なる公式は、 $\frac{\text{餘剰勞働}}{\text{必要勞働}}$ なる公式をヨリ通俗的な形に言ひ現したものに過ぎぬ。資本家は勞働力の價值（又はそれと一致しなくなつてゐる價格）を支拂つて、その代りに生きた勞働力それ自身を利用すべき自由を與へられるのである。資本家がこの勞働力から得る利益は二つの時間に分かれたる。一は勞働者が彼れの勞働力の價值に等しき價值たる等價を生産する時間であつて、これに依り資本家は、前貸した勞働力の價格に等しき價格ある生産物を受けることになる。これは恰度、彼れが出来合の生産物を市場で購買するのと同様である。然るに他の時間（餘剰勞働のなされる時間）に於いては、資本家は勞働力の利益に依つて、何等の等價をも要しなかつた價值を得る（二十）。この時間に實現される勞働は、無料で彼れの手に歸するのである。この意味で、餘剰勞働は不拂勞働といひ得る。

(二十) フキジョクラットは餘剰價值の祕密を看破しなかつたとはいへ、それでも、これだけのことは明かにしてゐた。即ち餘剰價值なるものは『その所有者が購買せずして販賣する所の、獨立した、自由に利用し得べき富なのである』（チユルギー著『富の形成及び分配に關する考察』第一頁(5)）。

されば資本なるものは、アダム・スミスの言ふ所とは異なり、單に勞働の命令といふだけではなく、本質に於いて不拂勞働の命令を意味してゐるのである。餘剰價值なるものは、後に及んで利潤、利子、地代など如何なる特殊形態に結晶しやうとも、實體に於いては總べて不拂勞働時間の體化されたものである。資本の自己増殖の祕密は、畢竟、一定量の他人の不拂勞働が資本に依つて支配されるといふ事實に歸著する。

第六篇 勞 銀

第十七章 勞働力の價值(又は價格)の勞銀化

ブルジョアの社會の外面に於いては、勞働者の賃銀は勞働の價格として、一定量の勞働について支拂はれる一定の貨幣として現れる。そこで、勞働の價值といふことが云爲され、この價值を貨幣で言ひ現したものを勞働の必要價格又は自然價格⁽¹⁾と名づけるやうになつた。他方にまた、勞働の市場價格⁽²⁾なるものについても、云爲されるやうになつた。これは右の必要價格を上下してゐる價格の謂である。

だが、商品の價值とは何であるか？ それは商品の生産上に支出された社會的勞働の對象的形態である。然らば、商品の價値の大小は、何に依つて秤量されるか？ 商品の内に含まれてゐる勞働の大小に依つて。然らば一例として、十二時間なる勞働日の價値は、何に依つて決定されるか？ それは十二時間なる勞働日の内に含まれてゐる十二勞働時間に依つて決定されるといふ馬鹿々々しい重語に終つてしまふ^(三十一)。

(三十一)『リカルド君は、價値が生産上に支出された勞働量に懸るといふ彼れの學說の障礙となるやうに見える一難關をば、巧みに避けてゐる。蓋し、この原理を嚴密に固守すると、勞働の價値なるものは、勞働の生産上に支出された勞働の量に懸るといふ、明かに不條理的結論が生ずることになる。そこでリカルドは巧みに論鋒を轉じて、勞働の價値は賃銀の生産に必要な勞働量に懸る、と主張するやうになつた。即ち、彼れ自身の言ひ現しを以つていへば、勞働の價値は賃銀の生産に必要な勞働量を以つて秤量すべきである、といふことになる。この勞働量といふのは、勞働者に與へられる貨幣又は商品の生産に必要な勞働量を指してゐるのであつて、これ恰も、布の價値は布の生産上に支出された勞働量ではなく、布を以つて交換される銀の生産上に支出された勞働量に従つて計算されるべきだといふに似てゐる』(匿名著『價値の性質批判論文』第五〇及び五一頁)。

勞働は商品として市場で販賣されるためには、販賣されるに先だち必ず存在してゐることを要する。だが若し、勞働なる

ものが労働者に依つて獨立した存在を與へられ得るとすれば、彼れは商品を販賣するのであつて、労働を販賣するのではないといふことになるであらう(二十一)。

(二十二)『労働を商品と呼ぶにしても、それは最初交換の目的を以つて生産され、然る後、市場に持ち行かれて、其處に見出される他の商品と一定の分量比率に従つて交換されることを要する商品の如きものではない。労働は市場に持ち行かれる瞬間に造り出されるものである。否寧ろ、造り出されるに先だつて、市場に持ち行かれるものである』(匿名者著『言葉上の論争』について)の觀察(第七五及び七六頁)。

此等の矛盾は暫く置き、貨幣といふ對象化された労働を以つて、直接、生きた労働と交換するといふことは、これ取りも直さず資本制生産の基礎上に初めて自由に展開される所の價值法則を止揚する所以であり、又は賃銀労働に立脚する所の資本制生産それ自身をも止揚する所以たるであらう。例へば十二時間なる労働日は、六志といふ貨幣價值を以つて表現される。この場合、等價と等價とが交換されるとすれば、労働者は十二時間の労働を以つて六志の支拂を受け、彼れの労働の價格は、彼れの生産物の價格と等しいことになる。斯くて、労働者は彼れの労働の購買者のために何等の餘剩價值をも生産せず、六志は資本に轉化されないで、資本制生産の基礎は消滅することになるであらう。而も彼れは正にこの基礎上に立つて労働を販賣し、彼れの労働はこの基礎上に於いて初めて賃銀労働となるのである。以上は等價と等價とが交換される場合であるが、それなくて若し十二時間労働に對して六志以下、換言すれば十二時間労働以下の代價が支拂はれるとすれば、十二時間の労働は十時間労働なり六時間労働なりと交換されることになる。而も斯く不等の大きさを等位に置くことは、單に價值決定を止揚する所以たるのみではない。斯かる自己止揚的な矛盾は、これを法則として單に表述し又は樹立することでも不可能なのである(二十三)。

(二十三)『労働を商品として、また労働の産物なる資本をも同様に商品として取扱ふとき、若しこの兩商品の價值が等量の労働に依つて決定されるとすれば、一定量の労働が……それと等量の労働を以つて生産される一定量の資本と交換されることになるであらう。即ち等量なる過去の労働が……等量なる現在の労働と交換されることになるのである。然し他の商品と比較した労働の價值は……等量の労働に依つて決定されるものでない』(エドワード・ギボン・ウエーキフィールド編アダム・スミス著『富國論』ロンドン、一八三六年刊、第一卷、第二三頁註)。

一方は對象化された労働であり、他方は生きた労働であるといふ形式上の區別からして、ヨリ少量の労働がヨリ多量の労働

と交換されると推論することは無益の沙汰である、(二十四)。殊に、商品の價值は現實に於いてその商品の上に對象化されてゐる勞働の量に依つて決定されるものではなく、寧ろその商品の生産に必要な活勞働の量に依つて決定されるといふことを念頭に置くとき、右の推論はますます不條理なものとなつて來るのである。一の商品が六勞働時間を代表するものとして、いま、この商品を三時間で生産することを可能ならしむる發明が與へられたとすれば、既に生産されてゐる商品の價值も半減することになる。それは従前六時間を代表してゐたが、今では三時間といふ必要な社會的勞働を代表することになる。要するに、商品の價值の大小を決定するものは、その商品の生産に必要な勞働量であつて、勞働の對象的形態ではないのである。

(二十四)『過去の勞働を以つて將來の勞働と交換する如何なる場合に於いても、後者(資本家)は前者(勞働者)に比してヨリ大なる價值を得べきである』と合意されねばならぬ『社會契約』の新版!』(シモンドルシスモンチ著『商業上の富について』デネウア、一八〇三年刊、第一卷、第七頁)。

商品市場に於いて直接、貨幣所有者に對立する者は、實際のところ勞働ではなく勞働者である。而して後者が販賣する所のは、彼れ自身の勞働力である。彼れの勞働が現實に於いて開始されたとき、それはもはや彼れの所有物ではなくなり、彼れに依つて販賣され得るものではなくなる。勞働は價值の實體であり内在的尺度であるとはいへ、それ自身に於いては何等の價值をも有するものでない(二十五)。

(二十五)『價值の唯一の標準であり……一切の富の創造である勞働は何等の商品でない』前掲トマス・ホッチスキンス著『通俗經濟學』第一八六頁)。

『勞働の價值?』といふ言ひ現しに於いては、價值概念は單に全く消滅するばかりでなく、また反對のものに轉倒されてしまふ。この言ひ現しは、土地の價值などといふ言ひ現しと同様に、假想的のものである。此等の言ひ現しは、生産事情をれ自身に起因するものであつて、本質的事物の現象形態を示す所の範疇となつてゐるのである。事物は現象の上に屢々轉倒されて表現されるといふことは、經濟學以外の一切の科學に於いても可なりよく知られてゐる所である(二十六)。

(二十六)斯種の言ひ現しを以つて單なる詩的破格に過ぎぬとすることは、分析の無力を表白するだけである。ブルドーンは『勞働が價值を有する』といふは、勞働をれ自身が嚴密の意味の商品だといふのではなく、寧ろ勞働の内部に潛勢的に含まれてゐるものとして受け取られる價值を指すのだと言はれてゐる。勞働の價值とは、一の比喩的な言ひ現しである云々』と述べたが、私はこれに反對して曰く、『彼れが驚くべき現實たる商品勞働の上に見る所のもの、は、文法上の省約に過ぎぬ。』

これがため、労働の商品性に立脚せる現在の全社會は、今から後、一の比喩的言ひ現しに立脚した詩文上の破格となつてまふ。社會を苦しめてゐる一切の不便を驅除しようとするれば、諸種の曖昧な言ひ現しを驅除すべきであり、言語を變改すべきである。而してこの目的のためには、大學に行つてその辭典の新版を求むれば足りるのである（拙著『哲學の窮乏』第三四及び三五頁）と。寧ろ價值は何ものをも意味しないと考へた方が便利であることは言ふ迄もない。斯く考へるとき、一切の事物は困難なくこの範疇の下に包括し得ることになる。例へば、バチスト・セーは曰く、『價值』とは何ぞや？ 答へて曰く、『一物が價する所のもの。』然らば『價格』とは何ぞや？ 答へて曰く、『貨幣に言ひ現された一物の價值。』而して『土地の勞働は……何故價值を有するか？』曰く『それは價格を有するものとされるから。』即ち價值とは、一物が價する所のものであり、而して土地はその價值を『貨幣で言ひ現される』が故に『價值』を有するといふのである。兎にかく、これは事物の『何故』と『如何にして』とを理解するについての極めて單純な方法なのである。

正統派經濟學は、日常生活から、批判を加へずに『労働の價格』といふ範疇を借り來たつて、然る後、この價格は如何にして決定されるかと問うたのであるが、やがて需給關係上の變動なるものは、他の凡ゆる商品の價格に於ける如く、労働の價格についても、その變動（換言すれば、市場價格が一定の大きさを上下する運動）以外には何等説明する所がないことを認むるに至つた。需要と供給とが相一致したとき、他の事情に變化がないとすれば、價格の變動は存在しなくなる。と同時に、需給は何ものをも説明しないものとなつてしまふ。需要と供給とが相一致したとき、労働の價格は需給關係から獨立して決定される所の自然價格となる。而もこの自然價格こそ、眞に研究の對象たるべきものであることが見出されたのである。或はまた、市場價格の變動について例へば一年といふ如きより大なる期間を採つて考へた結果、市場價格の騰落は相殺されて、結局一の不變量たる中間的平均數量に歸著することが見出された。斯かる平均數量は、相殺されてそれに歸著すべき變動中の數量とは異つた様式で決定されるべきものであることは言ふ迄もない。斯くの如き、偶然的な市場價格の上に立つてこれを調節する所の價格（フキジオクタイトの謂はゆる『必要價格』、アダム・スミスの謂はゆる『自然價格』は、他の商品に於ける如く、労働に於いても亦、貨幣に言ひ現はされた價值以外のものではあり得ないのである。

經濟學は斯くして、労働の偶然的な價格を通して價值に到達しようとする期待してゐた。而して次に、この價值は他の商品に於ける如く、生産費に依つて決定されるものとしたのである。だが、労働者の生産費 換言すれば、労働者そのものを生産又は再生産する所の費用）とは何ぞや？ 經濟學は無意識の間に、この問題を以つて本來の問題に代置してしまつた。蓋し労働で

れ自身の生産費を以つてしては徒らに同じ處を循環するだけであつて、新たな方向に轉ずることはないからである。そこで經濟學が勞働の價值と名づけてある所のは、實は勞働力の價值であるといふことになる。勞働力なるものは、勞働者の人格の内に存在するもので、その機能たる勞働と異なること、恰も機械がそれ自身の作用と異なる如くである。經濟學は、勞働の市場價格と謂はゆる價值との區別に没頭し、この價值と利潤との、又は勞働に依つて生産された商品價值などの關係に専念してゐたため、分析が進むにつれて勞働の市場價格から假想の價值を推論したのみでなく、更らにこの勞働それ自身の價值をば、勞働力の價值に歸著せしめるやうになつたことを、發見するに至らなかつた。正統派經濟學は自己の分析の斯かる結果について意識する所なく、『勞働の價值』とか『勞働の自然價格』とかいふ範疇をば、問題たる價值關係の最後の適當な言ひ現しとして無批判的に採用した結果、遂に解き難き混亂と矛盾とに陥つたことは後に見る通りである。同時にまた、正統派經濟學は、ただ外觀のみ忠節を盡すことを主義としてゐる淺薄な俗學的經濟學のために、活動上の確實な地盤を與へることにもなつたのである。

これより先づ、斯く轉化された形態に於ける勞働力の價值及び價格なるものが、如何に勞銀として表現されるかを見ることにしよう。

勞働力一日分の價值は、勞働者の一定の生存期間——これに應じて、勞働日の大小が一定することにもなるのであるが——を基礎として計算されることは、我々の知る所である。いま、通例の勞働日が十二時間、勞働力の日價值が三志であつて、三志に即ち六勞働時間を表現した價值の貨幣表章であると假定する。勞働者は三志を受くるとき、十二時間に互つて作用すべき彼れ自身の勞働力の價值を與へられる譯である。ところで、勞働力一日分のこの價值が、一日分の勞働の價值として言ひ現されるとすれば、十二時間勞働は三志の價值を有するといふ公式が生じて来る。勞働力の價值なるものは斯くして、勞働の價值又はその貨幣表章たる勞働の必要價格を決定することになる。若し勞働力の價格が勞働力の價值と一致しないとすれば、勞働の價格も亦、勞働の價值と稱する所のものとは一致しないことになるのである。

勞働の價值なるものは、勞働力の價值を無理な形に言ひ現したものに過ぎぬのであるから、勞働の價值は常に勞働の價值生産物よりも小でなければならぬといふ結論が、おのづから生じて来る。蓋し資本家は常に、勞働力をばそれ自身の價值の再生産に必要であるよりも長時間作用せしめるからである。上例についていへば、十二時間に互つて作用する勞働力の價值は三志であつて、この價值の再生産には六時間を要する譯である。然るに、この勞働力の價值生産物は六志である。なぜならば、勞

働力は實際十二時間作用し、而して労働力の價值生産物は労働力それ自身の價值に懸るものではなく、労働力の機能期間に懸るからである。そこで、六志なる價值を造る労働の價值は三志であるといふ、一見して不條理なることの明かな結論が生じて来る(二十七)。

(二十七) 拙著『經濟學批判』第四〇頁參照。同じ場所、私は、資本を考察するに當つては次の問題を解決すべきであると告げた。即ち『單なる労働時間のみに依つて決定される所の交換價值を基礎として考へるとき、労働の交換價值は労働生産物の交換價值よりも小であるといふ結論に、生産上如何にして到達すであらうか?』

更らに、労働日の支拂部分たる六時間の労働を代表してゐる所の三志なる價值が、六時間の不拂労働を含む十二時間なる總労働日の價值又は價格として現れることも、我々の認める所である。斯くて、労働日が必要労働と餘剩労働、支拂労働と不拂働に於いては、労働者が自分自身のためにする労働と、領主のためにさせられる強制労働とは、空間的にも、時間的にも、感性的に分明に區別されてゐる。奴隸労働に於いては、奴隸が自分自身の生活資料の價值を償ふに止まる労働日部分、換言すれば彼が實際自分自身のために就業する所の労働日部分でさへも、主人のための労働として現れる。彼れの労働は一切不拂労働として現れるのである(二十八)。然るに、賃銀労働に於いては、餘剩労働即ち不拂労働でさへも、支拂労働として現はれる。即ち奴隸労働に於いては、所有關係が奴隸自身のためにする労働を隠蔽し、賃銀労働に於いては、貨幣關係が賃銀労働者の無償労働を隠蔽する譯である。

(二十八) 愚鈍といふべきほど素朴なロンドンの自由貿易機關なる『モーニング・スター』紙は、アメリカ南北戦争の當時、人間に可能なる一切の義憤を以つて、南方の聯合諸州に於ける黒人は全く無償で労働してゐるのだと、繰返し繰返し主張した。斯様な黒人一日の生活費用を例へばロンドンのイースト・エンドに於ける自由労働者一日の生活費用と比較して貰ひたいものだ。

以上説く所に依つて、労働力の價值及び價格をば賃銀なる形態に、又は労働それ自身の價值及び價格に轉化せしむるに至つたことの、決定的に重要な所以を理解し得るのである。この現象形態は現實的の關係を人目から隠蔽し、寧ろそれと正反對のものを示すのであつて、それは労働者並びに資本家の凡ゆる權利觀念が、資本制生産方法の凡ゆる欺瞞が、この生産方法の下に於ける一切の自由幻想が、俗學的經濟學の凡ゆる辯護的空言が、依つて立つ所の基礎となつてゐるのである。

勞銀の祕密の堂奥に達するためには、世界史にとつて多大の期間を要したのであるが、これに反して、上記の如き現象形態の必然性を、存在の理由を、理解するよりも容易なことではないのである。

資本と勞働との間の交換は最初、他の凡ゆる商品の賣買と全く同一の形で我々の知覺に現れて来る。購買者は一定額の貨幣を提供し、販賣者は貨幣とは異なる所の物品を提供する。これについて權利意識の認める所は『汝が與へんために予は與ふ。汝がなさんために予は與ふ。汝が與へんために予はなす。汝がなさんために予はなす』(8)といふ、權利上價值等しき四公式(ローマ債權法の基本形態)の上に言ひ現された素材の區別以上には出でないのである。

尙また、交換價值と使用價值とは、それ自身に於いては相互通約し得ざる大きさであるから、『勞働の價值』『勞働の價格』なる言ひ現しは、『棉花の價值』『棉花の價格』なる言ひ現しに比べて、ヨリ無理なものとは見えない。加ふるに、勞働者は勞働を供給した後に支拂を受ける。而して支拂要具たる貨幣は、供給された物品の價值又は價格 當面の場合でいへば、供給された勞働の價值又は價格)を後に及んで實現することになるのである。最後にまた、勞働者が資本家に供給する所の『使用價值』は、實際のところ勞働者の勞働力ではなく、勞働力の機能たる一定の有用勞働、即ち裁縫勞働や、製靴勞働や、紡績勞働などである。この同じ勞働が一方に一般的の價值形成要素でもあるといふことは、他の凡ゆる商品から勞働を區別する所の特性となつてゐる事實であるが、これは通例の領域外に屬する問題なのである。

十二時間勞働の代價として、例へば六時間勞働の價值生産物たる三志を與へられる勞働者の立場に身を置いて考へて見よう。彼れからいへば、十二時間の勞働に實際のところ、三志を得るための購買要具である。彼れの勞働力の價值は、彼れの通例の生活資料の價值の如何につれて、三志から四志に増進することもあれば、また二志に低下することもあり得る。或は彼れの勞働力の價值は不變であつても、需給關係の變動に依り價格は四志ともなれば、二志ともなり得るのであるが、彼れの提供するものは、常に十二時間勞働である。そこで、彼れに支拂はれる等價の各數量變化は、彼れから見れば、必然にこの十二時間勞働の價值又は價格の變動として現れることになる。この事實から、アダム・スミスは反對に、生活資料の價值に變動が生じて、同一の勞働日が勞働者にとつて代表する所の貨幣額を大ならしめたり小ならしめたりするといへ、而も勞働の價值は不變であるといふ、誤つた主張に導かれた。彼れは勞働日を不變の大きさとして取扱つてゐたからである(二十九)。

(二十九) アダム・スミスは請負賃銀を取扱つた際、ただ偶然性的にのみ勞働日の變化を仄めかしたに過ぎぬ。

一方、資本家を考へて見るに、彼れは出來得る限り僅少の貨幣を以つて、出來得る限り多大の勞働を得ようとしてゐること

は事實である、そこで實際上、彼れによつて利害關係あることは、勞働力の價格と勞働力の機能に依つて造り出される價值との間の差額のみだといふことになる。だが、彼れは如何なる商品をも出來得る限り價安く買はうとするのであつて、彼れの利潤なるものは、如何なる場合にも、價值以下に買つて價值以上に賣るといふ單純な欺瞞に由因するものだとする。されば、假りに勞働の價值といふ如きものが現實に存在してゐて、彼れが現實にこの價值を支拂ふとすれば、その場合には何等の資本も存在することにならず、彼れの貨幣は資本化するものではないといふ見解には、彼れは到達することがないのである。

しかのみならず、支拂はれるものは勞働力の價值ではなく、勞働力の機能たる勞働それ自身の價值であることを證明するやうに見える諸種の現象が、勞銀の現實の運動の上に示されてゐる。此等の現象は、二つの大部に要約し得る。即ち(一)勞働日の大きさが變ずれば、勞銀の上にも變化が生ずるといふこと。若しこの論據が正しいとすれば、同じ一臺の機械を一週間賃借りするには一日だけ賃借りするよりも要費する所が多いといふ理由から、機械の價值ではなく機械の作用の價值が支拂はれるのだと結論し得ることもなるであらう。(二)同一の機能を盡くす相異つた勞働者の得る勞銀の上に、個人的區別が存してゐるといふこと。斯かる個人的區別は、勞働力そのものを、曲折なく、あからさまに販賣する奴隸制度の中にも見出される所であるが、この場合には何等の幻想をも誘致することがないのである。ただ、奴隸制度に比して異なる所は、平均以上の位置にある勞働力の利益、又は平均以下の位置にある勞働力の不利益は、奴隸制度に於いては奴隸所有者の得失に歸し、賃銀勞働制度に於いては勞働者自身の得失に歸するといふ一點のみである。蓋し、賃銀勞働制度に於いては、勞働力は勞働者自身に依つて販賣され、奴隸制度に於いてはそれは第三者に依つて販賣されるからである。

それに、現象となつて現れる所の本體的關係たる、勞働力の價值及び價格から區別した意味での『勞働の價值及び價格』又は『勞銀』なる現象形態については、一切の現象形態とその隠れたる背景とについて言ひ得る所と同一のことが通用するのである。即ち現象形態の方は、直接的におのづから一般通用の思维形態として再生産されるのであるが、本體の方は科學に依つて初めて發見されることを要するのである。正統派經濟學は問題の真相に觸れんとする所まで進んでゐたが、これを意識的に組織立てるに至らなかつた。これは正統派經濟學がブルジョアの皮に密著してゐる限り、なし得ないことなのである。

第十八章 時間賃銀

勞銀といふものは、それ自身また様々の形態を採るものであるが、この事實は、普通の經濟學教本からは認識し得ない。蓋し、普通の經濟學教本といふものは、専ら素材に關心するあまり、形態上の區別は悉く閑却してしまふからである。だが、勞銀の凡ゆる形態について説明を與へることは、賃銀勞働の特殊研究に屬する問題であつて、本書のなすべきことではない。茲にはしかし、二つの支配的な根本形態について、簡単な説明を與へて置く必要がある。

我々の記憶することく、勞働力は常に一定の期間について販賣されるものである。それ故、勞働力の日價值や、週價值や、その他を直接に表現する所の轉化された形態となるものは、即ち日賃銀、週賃銀等の如き『時間賃銀』の形態である。

ところで先づ、注意を要することは、曩に第十五章に述べた勞働力の價格と餘剩價值との大小變化に關する法則は、單純に形態を變へるだけで勞銀の法則に轉化せしめられるといふ一事である。同様に、勞働力の交換價值と、この價值が轉化されてゆく生活資料の量との區別は、今や名目賃銀と現實賃銀との區別として現れることになる。本體的の形について既に説明した所のを、現象形態について反覆するのは、無用のことであらう。そこで以下、時間賃銀の特徴たるべき僅少な點にのみ説明を限ることにする。

勞働者が一日分の勞働、一週四分の勞働等について受ける貨幣額(三十)は、彼れの名目賃銀、換言すれば價值に従つて計算された賃銀の額をなすものである。だが、勞働日の大小、隨つてまた、勞働者が一日に供給する勞働量の大小如何に準じて、同じ日賃銀や、週賃銀なども、相異なつた勞働價格、換言すれば同一量の勞働について支拂はるべき相異つた貨幣額を代表し得ることは明かな事實である(三十一)。そこで時間賃銀についても、勞銀たる日賃銀、週賃銀等の總額と、勞働の價格とを區別することが必要になつて來る。然らば、この價格(即ち與へられたる勞働量の貨幣價值)は如何にして見出されるか？ 勞働の平均價格なるものは、勞働力の平均日價值を平均勞働日の時間數で割ることに依つて得られる。一例として、勞働力の日價值は三志であつて六勞働時間の價值生産物を代表し、而して勞働日は十二時間であるとすれば、一勞働時間の價格は二志即ち三片となる。斯くして見出される一勞働時間の價格こそ、勞働の價格を秤量すべき單位尺度として役立つものである。

(三十一) この場合、貨幣價值それ自身はつねに不變であると假定する。

(三十一)『労働の價格とは、一定量の労働の代償として支拂はれる所の貨幣額である』(サー・エドワード・ウエスト著『穀物の價格と労働』ロンドン、一八二六年刊、第六七頁)②。ウエストは經濟學史上に一新時代を劃した『土地への資本充用論、オックスフォード大學一校友著』(ロンドン、一八一五年刊)③の著者たりし人である。

以上の説明に依つて、労働の價格は不斷に低落しても、日賃銀や、週賃銀などは不變たるを得るといふ結論が生じて来る。一例として、通例の労働日が十時間、労働力の日價值が三志であるとすれば、一労働時間の價格は三片五分の三となる譯であるが、若し労働日が十二時間に延長されるとすれば、一労働時間の價格は三片となり、十五時間に延長されるとすれば二片五分の二となる。而も日賃銀又は週賃銀の上には、變化がないのである。反對に、労働の價格が不變である場合、甚しきは低落した場合にも、日賃銀又は週賃銀は増進することを得る。一例として、労働日が十時間、労働力の日價值が三志であるとすれば、一労働時間の價格は三片五分の三となる譯であるが、いま、營業が擴大された結果、労働日は十二時間に延長されて、而も労働の價格は不變であるとすれば、今や労働價格の變化なくして日賃銀は三志七片五分の一に増大することになる。労働の外延的(時間的)な大きさではなく、内包的(能率的)な大きさが増進する場合にも、同様の結果が生じ得るであらう(三十二)。

の如く、名目上の日賃銀なり週賃銀なりの増大は、労働價格の不變又は低下を伴ひ得るのである。一家の首腦たる人に依つて供給される労働の量が、同じ一家に屬する他の人々の労働に依つて増大された場合に於ける労働者家族の收入についても同一のことが言ひ得る。要するに、労働價格の引下げについては、名目上の日賃銀なり週賃銀なりの縮小から獨立した諸種の方法が存在してゐるのである(三十三)。

(三十二)『労働の大小は、労働の價格と供給労働量との大小に懸るものである。……労働の増大は、必ずしも労働價格の増進を意味することを要しない。労働時間が延長され、労働者の努力が増大する時は、労働の價格は不變であつても、労働は著しく増加し得るのである』(ウエスト前掲第六七、六八及び一一二頁)。だが『労働の價格』なるものは如何にして決定されるかといふ主要な問題については、ウエストはこれを平凡な言葉で片付けてゐる。

(三十三)曩に屢々引用した『商工業論』の著者であり十八世紀に於ける産業ブルジョアの狂熱的な代表者であつた匿名氏は、この點を混亂した表現を以つてながら正確に捕捉してゐる。彼れは曰く『食糧品やその他の生活必需品の價格に依つて決定されるものは労働の量であつて、労働の價格(名目上の日賃銀又は週賃銀のこと)ではない。生活必需品の價格が甚しく低落するとすれば、労働の量もそれに比例して減少することは言ふ迄もない。……名目上の額を變更するといふ以外にも

労働の價格を増進し又は低下せしむる様々の方法があることは、製造業者たちの知る所である（『前掲第四八及び六一頁』）。ナソー・ウヰリアム・シーニョアの『賃銀率三講』（ロンドン、一八三〇年刊）は、毎週でウエストの述作を利用して成つたものであるが、この書の中に曰く『労働者は主として賃銀の如何に利害關係を有するものである』（第一五頁）と。つまり、労働者の利害關係なるものは主として、彼れに支拂はれる所のもの（即ち賃銀の名目額）に在るのであつて、彼れが與ふる所のもの（即ち労働の量）に在るのではないといふのである。

ところで、一般的の法則として、次の結論が生じて来る。即ち日労働なり週労働なりが與へられてゐるとすれば、日賃銀なり週賃銀なりの大小は労働の價格の大小に懸るものであり、而して労働の價格なるものはまた、労働力の價値の如何につれ、乃至は労働力の價格が如何なる程度まで價値から離れてゐるかにつれて、色々に變化することになるのである。反對に、労働の價格が與へられてゐるとすれば、日賃銀なり週賃銀なりの大小は、日労働なり週労働なりの量の如何に懸るものである。

時間賃銀の尺度單位たる、一時間の労働の價格は、労働力の日價値をば通例の労働日の時間數で割ることに依つて得られる。假りに、通例の労働日が十二時間、労働力の日價値が六労働時間の價値生産物たる三志であるとすれば、一労働時間の價格は三片、その價値生産物は六片となる。いま、労働者が一日十二時間以下（或は一週に六日以下）例へば六時間か八時間きり就業しないとすれば、同一なる労働價格の下に彼れの得る日賃銀は、二志か一志半に過ぎなくなるであらう（三十四）。右の假定に依ると、彼れは労働力の價値に一致した日賃銀だけを生産するのに、一日平均六時間労働せねばならず、且つ同じ假定に従へば、各時間の半分だけ、彼れ自身のために労働し、殘餘の半分は資本家のために労働するものであるから、彼れは十二時間以下就業するやうになつた場合、六時間の價値生産物を打出し得なくなることは明かな事實である。曩には過度の労働が齎らす破壊的結果を見たのであつたが、茲には就業の減少から生ずる労働者の苦痛の源泉が見出される譯である。

（三十四）斯種の變則的な就業減少の影響は、法律を以つてする労働日の一般的短縮に依る影響とは全く相異なるものである。前者は労働日の絶對的大小とは何等關係する所なきもので、十五時間労働日に於いても、六時間労働日に於いても、等しく行はれ得る。労働の平準的價格は、十五時間労働日の場合には一日に平均十五時間、六時間労働日の場合には一日に平均六時間労働することを基礎として計算される。隨つて前の場合には七時間半、後の場合には三時間切り就業せしめられな

いとしても、歸する所は結局同じである。

資本家は日賃銀なり週賃銀なりを支拂ふ義務なく、ただ彼れの欲する儘に就業せしめた時間數だけについて支拂へばいいと

いふ立場から毎時間賃銀(5)が確定されるとすれば、その場合には、彼れは本來労働價格の尺度單位たる一時間の勞銀の計算基礎となつてゐた所よりもヨリ短時間就業せしめることが出来る。この尺度單位は測入ヤクを三錢の勞銀なる比例に依つて決定されるものであるから、労働日が一定數の時間を含まなくなるや否や、この尺度單位に於ける一切の意義が消滅に歸することは言ふ迄もない。支拂労働と不拂労働との關聯は止揚される。資本家は今や、労働者の生存に必要な労働時間を與へないで一定量の餘剩労働を打出することが出来る。彼れは就業上の凡ゆる規整を破壊し、自己の便宜と、專擅と、當面の利害とに従つて、驚くべき過度の労働と相對的又は全部的の失業とを交々強行し得るやうになる。彼れは『労働の標準的價格』を支拂ふといふ口實の下に、労働者に何等相當の代價を與へずして、労働日を異常に延長することが出来る。斯くして、この毎時間賃銀を課さうとした資本家の企圖に對し、ロンドンの建築労働者は（一八六〇年、全く合理的な暴動を起すに至つた。労働日の法定制限が行はれても、機械に依る競争や、充用労働者の質の變化や、部分的及び全般的の恐慌やに起因する就業減少は勿論防止されないとはいへ、それでも如上の害悪は絶滅されることになる。

日賃銀又は週賃銀が増大するとき、労働の價格は名目上不變であつて而も通例の水準以下に低落し得る。この現象は、労働の價格随つて一労働時間の價格が不變であつて労働日が通例の時間以上に延長されるに至つたとき、常に行はれる所である。（三十四）の口實

なる分數の分母が増大すれば、分子はヨリ急速に増大する。労働力の機能期間が増進すれば、労働力の磨減も増進する譯であるから、労働力の價值も亦増進することになる。且つ機能期間の増進に比すれば、この價值増進の方がヨリ急速な比率を以つて行はれるのである。そこで、労働日の法定制限なくして時間賃銀が専ら行はれてゐる多くの産業には、例へば十時間目の了はる處といふ如き一定の時點までは労働日を標準的とするといふ習慣（標準労働日『日労働』『正規の労働時間』）が原生的に成立して來た。この限界を越えようと、労働時間は残外時間(6)とされて一時間を尺度單位として計算するときにはヨリよく支拂はれる（臨時給與(7)）。それも屢々、滑稽なほど少しばかりではあるが（三十五）。標準労働日はこの場合現實的労働日の一部として存在し、一年間についていへば後者の方が前者よりも長時間に互る場合が屢々ある（三十六）。労働日が一定の標準限界を越えて延長されるとき労働の價格が増大するといふ事實は、イギリスの種々なる産業部門に於いては次の如き形態を探るに至つた。即ち、謂ふ所の標準時間中に於いては労働の價格が低廉であるため、労働者にしても苟も十分の賃銀を打出しようとすれば、勢ひ支拂のヨリよき残外時間にも勤務せねばならなくなるといふことが、それである（三十七）。資本家にとつてのこの満足は、労働日の法定制限に依つて無くなされてしまふのである（三十八）。

(三十五) 『残外時間 (レース製造業に於ける) 』についての支拂率は極めて低く、一時間に半片又は四分の三片から二片に至る間であつて、労働者の健康及び活力の上に與へられる害悪の大なるに比して痛々しき對照をなしてゐる。……尙また、斯くして得られる僅少の臨時収入が臨時の榮養に支出されねばならなくなることは、屢々見る所である。『兒童雇傭委員、第二報告』別丁第一六頁、第一一七號)。

(三十六) これは例へば、最近工場法の實施された以前に於ける壁紙印刷業の如きに見る所である。『我々は食事上の休憩もなく労働を続けるので、十時間半の日労働 午後四時半には終了してしまふ。それから後は續べて残外時間であつて、これが八時間に了ることは減多にない。要するに、我々は實際、一年間を通じて残外労働してゐるやうなものである。』(『兒童雇傭委員第一報告』第一二五頁所載スミス氏の供述)。

(三十七) これは例へば、スコットランドの漂白業の如きに見る所である。『スコットランドの若干地方に在つては、一八六二年の工場法實施以前、漂白業は残外時間の制度に従つて經營され、正規の労働日は十時間であつた。この労働日に對しては、一人當り一日に一志二片の名目賃銀が支拂はれた。ほかに、毎日三時間乃至四時間の残外時間があつて、これは一時間當り三片の割合で支拂はれた。この制度の結果は次の如くであつた。……正規の時間だけ労働したのでは、一人一週に八志以上取得するは不可能であり。……残外時間なくしては、日賃銀 十分の程度に達しなかつたのである。』(『工場監督官報告、一八六三年四月三十日』第一〇頁)、『長時間就業せしむるためのヨリよき賃銀といふ誘惑は、成年男工にとつては抵抗し得ざる所である。』(『工場監督官報告、一八四八年四月三十日』第五頁)。ロンドンの製本業に於いては、十四乃至十五歳の少女が多數に使用され、彼等は一定の労働時間を規定せる徒弟契約の下に就業してゐるのであるが、それにも拘らず毎月最終の週間には、年長の男工と混合して夜の十時、十一時、十二時、又は一時迄も労働するのである。『工場主は臨時給與と夕食とを以つて彼等を誘惑する。』この夕食は、附近の居酒屋で認められるのである。斯くして此等の『年若き永生者』の間には、非常なる淫逸が生ぜしめられることになるのであるが(『兒童雇傭委員、第五報告』第四四頁、第一九一號)、それも彼等が他の書籍以外に多數の聖書やその他の徳育上有益な書物を製本するといふことに依つて埋合はされる譯である。

(三十八) 『工場監督官報告、一八六三年四月三十日』第五頁を見よ。一八六〇年に於ける大罷工と締出との際、ロンドンの建築工たちは事態に對する正確な理解を以つて左に掲ぐる二條件の下にのみ毎時間賃銀を承認すべしと宣明した。(一) 労働時間の價格を定め、同時に九時間及び十時間の標準労働日をそれと確定して、十時間労働日に於ける一時間の價格は、

九時間労働日に於ける一時間の價格よりも大となすべきこと、(二)標準労働日以上に出づる時間は、すべて残外時間とし、これに對してはヨリ高き賃銀を支拂ふべきこと。

一の産業部門に於ける労働日が大なれば大なるほど、勞銀がますます小となることは周知の事實である(三十九)。この事實は、アレキサンダー・レッドグレイヴが一八三九年から五九年に至る二十年期間の比較概觀に依つて例證した所であつて、これに依れば、十時間労働法の取締を受くる工場の勞銀は増大したが、一日に十四時間乃至十五時間就業せしめる工場の勞銀は低下したことが知られる(四十)。

(三十九)『長時間の労働が常則となつてゐる處では、低小なる賃銀も亦常則となつてゐることは、周知の事實である』(『工場監督官報告、一八六三年十月三十一日』第九頁)、『最も貧弱な榮養を與へられる労働は、大抵みだ過度に延長されるものである』(『公衆健康、第六報告、一八六四年』第一五頁)。

(四十)『工場監督官報告、一八六〇年四月三十日』第三一及び四二頁。

『労働の價格が與へられてゐるとすれば、日賃銀なり週賃銀なりの大小は供給労働量の如何に懸る』といふ上記の法則から、労働の價格が小なれば小なるほど、労働者のために貧弱な平均賃銀でも確保すべき労働量はますます大となり、労働日はますます長時間とならねばならぬといふ結論が先づ生じて来る。労働價格の低小といふ事實は、この場合、労働時間延長の刺戟として作用する譯である(四十一)。

(四十一)一例を挙げれば、イギリスに於ける手製釘の製造工は、労働の價格が低廉であるため、極めて貧弱な週賃銀を得るのにも、一日に十五時間労働せねばならぬ有様である。『一日の労働時間は極めて多く(午前六時から午後八時迄)彼れは十一片乃至一志を打出するために、此等の時間、激しく労働せねばならぬ。而もこの中から、道具の磨滅や、燃料の消費や、鐵の消耗などに伴ふ費用として二片半乃至三片控除されることになる』(『兒童雇傭委員、第三報告』第一三六頁第六七一、號)。同一の労働時間を以つて女工の得る週賃銀は五志にすぎぬ。(前掲報告、第一三七頁、第六七四號)。

然るに、労働時間の延長はまた、労働の價格隨つて日賃銀なり週賃銀なりの低下を齎らすことにもなる。

労働の價格が労働力の価値に依つて決定されるといふ事實から、何等の代償をも與へずして労働日を延長するとき労働の價格は低下することになるといふ結論が生じて来る。然るに久しい間には結局、労働日を延長することを可能ならしむるその同じ事情に依つて、資本家は先づ、労働の價格を名目的にも低下し得る立場に立ち、遂にはまた斯くせざるを得

なくなつて来る。斯くして増大した一日の労働時間の總価格は減少し、随つて日賃銀なり週賃銀なりも減少することになるのである。茲では二つの事情を指示すれば十分であらう。即ち、若し一人の労働者が一人半又は二人分の労働をする様になるとすれば、市場に存在してゐる労働力の供給は不變であるとしても労働の供給は増大することになる譯である。斯くして労働者の間には競争が生じ、これがため資本家は労働の価格を低下せしめ得る様になる。而してまた、労働の価格が低下するとき、彼れは更らに労働時間を延長し得るに至る(四十二)。だが、社會的の平均水準以上に出づる變則的の不拂労働量を、斯く支配することは、やがて資本家たち自身の間で競争を生ぜしめる手段ともなるのである。商品価格の一部は労働の価格から成る。労働価格の不拂部分は、商品価格の中に算入するを要しないものである。それは商品購買者に贈與され得る。これ、競争に依つて導かれる第一歩である。競争に依つて導かれる第二歩は、労働日の延長が齎らず變則的餘剩價値の少なくとも一部をば、同様に商品の販賣價格中から排除することである。斯くして、商品の變則的に低廉な販賣價格が最初は自生的に造り出され次いで次第に固定して来るのであつて、その時以後この販賣價格が過大な労働時間に於ける貧弱な労働の不變的基礎となる。本來は寧ろこの貧弱な労働に依つて、斯様な販賣價格が造り出されたのであつた。この運動については、茲では單なる暗示を與へるに止める。競争の分析を與へることは、當面の攻究範圍に屬する所でないからである。だが暫らく、資本家自身に語らめよう。

(四十二) 例へば、或る工場労働者が在來の長時間労働を拒むとすれば、『彼れは馳て、幾時間の労働でも辭さない他の労働者に位置を奪はれ、職から離れることになるであらう』(『工場監督官報告、一八四八年十月三十一日』) 證述第三九頁第五八號)、『若し一人の労働者が二人分の労働をするとすれば、……この追加的労働供給のために、労働の價格は低下し、……斯くして利潤率は一般に増騰することになるであらう』、シーニョ著『貨銀率三講』ロンドン、一八三〇年刊、第一四頁)。

『パーミンガムの雇主間には激烈な競争が行はれてゐるため、彼等の多くは、平素ならば恥とするであらう様なことをも、雇主としてはなさざるを得なくなる。而も利潤はもはや得られず、ただ公衆を利するに過ぎないのである』(四十三)。

(四十三) 『兒童雇賃委員、第三報告』證述、第六六頁、第二二號。

ロンドンに於ける二種のパン焼業者が、茲に想起される。一は十分の價格で販賣する所のパン焼業者(The Full-priced Baker) 他は平準價格以下に販賣する所のパン焼業者(The underpriced, the undersellers) である。前者は、議會調査委員に對し競争者たちを難して曰く『彼等は第一に公衆を欺瞞し(不純商品の製造に依つて)、第二に十二時間分の賃銀を以つて十八

時間分の労働を得ることに依つてのみ、存在してゐるものである。職人の不拂労働こそ競争戦を行はしめる源泉たりしものであつて、今日に於いても矢張りさうなのである。…親方間に競争があるため、夜間労働を廢止することは困難となつてゐる。パン粉の價格に相應した生産費以下にパンを販賣する安賣業者は、職人からヨリ多くの労働を打出することに依つてこれが埋合せをつけねばならぬ。…私が十二時間の労働をさせてゐるとき、近隣の同業者が十八乃至二十時間の労働をさせるとすれば、彼れは販賣價格に於いて私に打勝つこと必定である。若し残外労働についての支拂を、職人が要求し得る様になるとすれば、この悪弊は矯治されるであらう。…安賣業者に使用されてゐる澤山の職人は、外國人や、未成年者や、その他得られるものなら殆んど如何なる賃銀にも甘んずるといつた人々から成つてゐる』(四十四)と。

(四十四)『パン焼職人の不平の原因に關する報告』(別丁第五二頁。並びにその證述第四七九、三五九及び二七號)。だが、十分の價格で販賣するパン業者も、曩に述べた如く、且つその代辯者たるベンネットが白狀してゐる如く『午後十一時に就業を開始して…朝の八時までも労働を持續させる』前掲報告、第二二頁)。

以上の愁訴は、資本家の頭腦には如何に生産事情の外観だけしか反射されないかを示す點から見ても、興味あることである。労働の平準價格にも一定量の不拂労働が含まれてゐて、この不拂労働こそ資本家の利得の標準的な源泉となつてゐることは、彼れの氣づかない所である。彼れから見ると、餘剩労働時間の範疇なるものは總して存在して居らぬ。蓋し、この範疇は、彼れが日賃銀を以つて代價を支拂つたと信じてゐる標準労働日の中に含まれるからである。然るに、通例の労働價格に相應せる限界以上に延長された労働日を意味する所の残外時間なるものは、彼れから見れば、確かに存在してゐるのである。しかのみならず、彼れはその競争者たる安賣業者に反對して、この残外時間につき臨時給與を支拂ふべしと主張する。彼れはこの場合にも亦、通例の各労働時間の價格に於けると同じく、斯かる臨時給與の中にも不拂労働が含まれてゐることを知らないのである。一例として十二時間労働日に於ける一時間の價格は三片であつて、半時間の價值生産物を代表し、残外一時間の價格に四片であつて、三分の二時間の價值生産物を代表するとすれば、前の場合には資本家は各労働時間の中から不拂で二分の一を占有し、後の場合には三分の一を占有する譯である。

第十九章 請負賃銀

時間賃銀は勞働力の價值又は價格の轉化した形態であるが、請負賃銀(一)はまた、この時間賃銀の轉化した形態に外ならぬものである。

請負賃銀に於いては一見、勞働者に依つて販賣される使用價值は彼れの勞働力の機能たる生きた勞働ではなく、既に生産物の上に對象化されてゐる勞働であり、且つこの勞働の價格は時間賃銀に於ける如く勞働力の五箇言といふ分數に依つてではなく、生産者の功程に依つて決定されるものであるかの如くみえる(四十五)。

(四十五)『請負勞働の制度は、勞働者の歴史上に於ける一定の時代を示すものであつて、資本家の意志・懸單なる日傭勞働者の位置と、遠からざる將來に於いて勞働者と資本家とを一身に兼ねる見込のある共同組合的勞働者との中間段階を成すものである。請負勞働者は雇主の資本を以つて勞働するとはいへ、事實に於いては、自分自身の雇主たるものである』(ジョン・ワッツ著『勞働組合と罷工、機械と共同組合』マンチェスター一八六五年刊、第五二及び五三頁)(二)。この書は久しく腐敗停滯してゐた辯護的平凡の下水であるが故に、茲に以上の引抄を與へた譯である。このワッツ君は従前オーウェン主義と振廻はしてゐたもので、一八四二年には他の『經濟學上の事實及び擬制』(三)といふ一小著を刊行した。彼れはその中で、所有は盜掠だと述べてゐる。その時から久しく經つゝゐる。

この外觀についての確信は先づ、勞銀の以上兩形態は同一の營業部門に同時に並び存するといふ事實に依つても、したたか動搖を受けねばならぬであらう。例へば『ロンドンの植字工は請負勞働をなすことを通例とし、時間勞働は例外となつてゐるが、地方の植字工に於いては時間勞働が通例であつて、請負勞働は例外となつてゐる。ロンドンの港の船大工は請負勞働をなし、イギリスに於ける他の諸港の船大工は時間勞働をなしてゐる』(四十六)。ロンドンの馬具製造場では、同一の勞働に對しフランス人には請負賃銀、イギリス人には時間賃銀を支拂ふことが屢々ある。請負賃銀が一般に行はれてゐる嚴密な意味の工場に於いても、若干の勞働機能に限り、技術上の原因からこの計算法をやめて時間賃銀を支拂つてゐる(四十七)。だが、勞銀支拂上の形態差異なるものは、一方の形態が他方の形態に比して、資本制生産の發達上ヨリ有利な場合があり得るとしても、勞銀の本質上には何等の變化をも與へるものでないことは自明である。

(四十六) タイ・ジェー・ダンキング著『労働組合と罷工』ロンドン、一八六〇年刊、第二二頁。

(四十七) この二つの勞銀形態の同時並存は、工場主の詐欺を助長する上に如何に有利なものであつか、それは次の報告に依つて知られる。『某工場には四百人の勞働者が使用されてゐるが、その半数は請負勞働をなす者であつて、残外勞働に従事することを直接の利益としてゐる。他の二百人は時間賃銀を支拂はれ、請負勞働をなす人々と同じ時間だけ就業するが、残外時間については何等の支拂をも受けないのである。……此等の二百人が給付する一日に半時間づつの勞働は、一人に依つて給付される五十時間の勞働（換言すれば一人が一週間に給付する勞働）の六分の五に等しいものであつて、これは雇主にとつて積極的の利得となるのである』（『工場監督官報告、一八六〇年十月三十一日第九頁』）。『残外勞働は、今尙甚しく行、大抵は發覺の恐れなく、法律の命ずる刑罰に對しても安全の位置にある。請負賃銀を受くることなく、週賃銀を受けてゐる一切の勞働者に對してなされる非行については、曩に諸報告に示した通りである』（『工場監督官報告、一八五九年四月三十日』^三八及び九頁レオナード・ホーナーの所述）。

いま、通例の勞働日は十二時間であつて、その中、六時間は代價を支拂はれるが、六時間は不拂であるとし、而してこの勞働日の價值生産物は六志、随つて一時間の價值生産物は六片であると假定する。更らに、平均程度の能率及び熟練を以つて勞働し斯くして一の物品を生産するに事實上社會的に必要な勞働時間のみを支出する所の一勞働者は、十二時間に二十四個——個々別々の物品であると、聯絡した總製品の秤量し得る部分であるとを問はず——を供給するといふことが、經驗に依つて確められたと假定する。然る場合、この二十四個の價值は、その中に含まれてゐる不變資本部分を控除すると六志であつて、各個の價值は三片となる。勞働者は一個當り一片半を興へられ、十二時間には三志支拂はれる譯である。勞働者が自分自身のために六時間、資本家のために六時間勞働すると假定しても、又は各時間の一半は自分自身のため、他の一半は資本家のために勞働すると假定しても、時間賃銀にとつては異なる所がないのであるが、それと同様に、各個の物品の半分が支拂部分、半分が不拂部分であると假定しても、又は十二個の價格は勞働力の價值を回收せしめ、他の十二個が餘剩價值を體化するものと假定しても、請負賃銀の上には何等區別する所がないのである。

請負賃銀といふ形態は時間賃銀といふ形態と同様に不合理なものである。例へば、二個の商品はその生産上に消費された生産機關の價值を控除すると一勞働時間の生産物として六片に價してゐるのに、勞働者はこれが價格として三片支拂はれる。請負賃銀なるものは實際のところ、何等の價值關係をも直接には言ひ現すものでない。問題となるのは、各個の商品の價值が、

その商品の上に體化してゐる労働時間に依つて秤量されるといふことではなく、寧ろ労働者の支出する労働が生産品の個數に依つて秤量されるといふことである。時間賃銀に於いては、労働は直接の時間的持續に依り、また請負賃銀に於いては、一定の時間に互つた労働が凝縮して成る生産物量に依つて秤量される(四十八)。労働時間それ自身の價格は、結局に於いては「労働の時間的持續力」の「時間」といふ方程式に依つて決定されるものであつて、請負賃銀なるものは時間賃銀の轉化した形態に過ぎぬのである。

(四十八)『賃銀は労働の持續時間に依つてと、生産物に依つてと、二様に秤量し得るものである』匿名者著『經濟要』「パ」
リー、一七九六年刊、第三二頁(5)。この書の眞の著者はジェルマン・ガルニエ(6)である。

これより、請負賃銀の特質を稍々立ち入つて考察しよう。

請負賃銀に於いては、労働の質は作物そのものに依つて處理されるのであつて、十分の價格を得ようとするれば、作物が平均程度の出来榮えであることを要する。この點に於いて、請負賃銀なるものは、賃銀の削減及び資本主義的詐欺にとつての最も豊饒な源泉となるのである。

資本家は請負賃銀に依つて、労働の能率を秤量する正確な尺度を與へられる。豫め決定され經驗上確立された商品量に體化する所の労働時間のみが、社會的に必要な労働時間と見做され、斯様な労働時間として代價を支拂はれることになる。さればこそ、ロンドンの大規模な裁縫作業場に於いては、一數量單位の作物例へば一著のチョッキなどが一時間又は半時間などと呼ばれ、一時間の價は六片とされてゐるのである。一時間の平均生産物が幾許に上るか、實地の經驗で知られる。新たる流行が生じたり、修繕に従事したりする場合には、一數量單位の生産物が一時間なり、その他の時間なりに等しいか否かにつき、雇主と労働者との間に爭議が醸されるが、この場合にも、結局は經驗が決定するのである。ロンドンの家具製造所その他に於いても同様である。労働者が平均的の功程を有せず、隨つて一日に一定最低限量の作物を供給し得ないとすれば、雇主は彼れを解雇してしまふ(四十九)。

(四十九)『彼れ(紡績工)は一定重量の棉花を渡され、一定の時間を経た後、これを一定織度を有する一定重量の縞絲又は紡績綿絲となして返還せねばならぬ。彼れはこの返還する作物一斤につき、斯々の賃銀を受けるのである。若し作物の出来榮えが十分でない時は罰が課され、また若し作物の量が一定時間について定められた最低限度に達しない時は、解雇してヨリ堪能な労働者を採用する』前掲ユニア著『マニユファクチュアの哲學』第三一七頁。

この場合、勞働の質及び能率は勞銀それ自身の形態に依つて處理される譯であるから、勞働上の監督は著しく不用に歸する譯である。斯くしてこの勞銀形態は、曩に叙述した近世的家内勞働並びに等級制的に組織された搾取制度及び壓迫制度の基礎となるのである。斯かる搾取制度及び壓迫制度には二つの根本形態がある。請負賃銀なるものは一方に、資本家と勞働者との間に寄生者が介在し來たつて、勞働の轉貸^テをなすことを容易ならしめる。この仲介者の手に歸する利得は、資本家に依つて支拂れる勞働の價格と、仲介者自身が現實的に勞働者に支拂ふ價格部分との間の差から専ら生じて來るものである(五十一)。

イギリスでは、この制度をば特徴的に『膏血制度』と呼んでゐる。他方にまた、資本家が首腦勞働者(マニユファクチュア)に於ける組長、鑛山に於ける石炭その他の物の採掘工、工場に於ける嚴密の意味の機械工)との間に一個當り幾許を支拂ふといふ契約を結び、この價格に基き、後者自身をして補助工の募集と賃銀支拂とを請負はしめるといふ方法も、請負賃銀制の下に行はれ得る。資本に依る勞働者の搾取は、この場合、勞働者に依る勞働者の搾取を通して實現されることになる譯である(五十一)。

(五十一) 『同一の作物が、それ／＼利得を望んでゐる多くの人々の手を通して、而も最後の人だけが現實的に勞働をするといふ場合には、現實に於いて女工の受ける支拂は均衡のとれぬほど貧弱なものとなる』(『兒童雇傭委員』第二報告、別丁第七〇頁、第四二四頁)。

(五十一) 辯護的なワツツでさへも述べて曰く『一人の勞働者が自分自身の利益のため仲間の者を過度に勞働させる方法を廢して、同一の勞作に關與する一切の人々が、おの／＼能力に應じて連帶的に契約するといふことにすれば、請負勞働制度は著しく改善されることになるであらう』(ワツツ前掲第五三頁)と。この制度の忌はしき點については、『兒童雇傭委員』第三報告、第六六頁、第二二號、第一一頁、第一二四號、別丁第一一頁、第一三、五三、及び五九頁を参照せよ。

請負賃銀が一定してゐるとすれば、勞働力を出來得る限り能率的に緊張させることは、言ふ迄もなく勞働者自身の利益となるのであるが、資本家はまたこれに依つて、勞働能率をば標準程度以上に増進することを容易ならしめられるのである(五十一 a)。同様に勞働日の延長も、日賃銀なり週賃銀なりを増進する故に勞働者自身の利益となる(五十二)。と、同時にまた一勞働日の延長なるものは、請負賃銀が不變であるとしても、それ自體に於いて勞働價格の低落を含むといふ事實は暫く措き曩に時間賃銀を取扱ふ際に述べた反應作用が生じて來るのである。

(五十一 a) この原生的の結果はまた、しば／＼人爲的に助長される。例へば、ロンドンの機械製造業に於いては、従前

から次の如き手管が行はれてゐた。——『資本家は優秀な體力と熟練とを有する一人の労働者を工長に選び、彼れの下に在つて普通の賃銀だけしか得て居らぬ労働者たちが、彼れに依つて懸命に働くやう全力的に激勵するといふ約束で、四ヶ月又はその他の期間を定めて彼れに追加の賃銀を支拂ふ。……これ、何等の説明を俟たずして、労働組合なるものは労働者の活動や、卓絶した熟練や、労働能力やを委縮せしめるといふ資本家の怨嗟が生ずる所以を明かにするものである』（ダニング著『労働組合と罷工』ロンドン、一八六〇年刊、第二二及び二三頁）。この書の著者は彼れ自身労働者であり且つ或る労働組合の書記であるから、以上の叙述は誇張に失してゐると見られるかも知れぬ。だが例へば、ジョン・チャーミーズ・モルトンの『極めて品位ある』農業百科辭典中に於ける『労働者』の項を見よ。彼れはこれを確かな方法として小作農業者たちに推奨してゐるのである。

（五十二）『請負賃銀を受くる總べての労働者は……労働日の法定限界を犯すことに依つて利益を得てゐる。殘外労働を甘受する傾向についての斯かる觀察は、別して、機械や絲繰りに使用される女工たちに當て嵌る所である』（『工場監督官報告』一八五八年第九頁）。『雇主にとつて斯く有利な請負制度は……請負賃銀とはいへ極めて低廉なる賃銀を以つて、少年製陶工をば四年乃至五年の間、驚くべき過度の労働に従事せしむる直接の刺戟となるのであつて……製陶工の身體悪化を生ぜしむる大原因の一となつてゐるのである』（『兒童雇傭委員』第一報告、別丁一三頁）。

時間賃銀に於いては、多少の例外もあるが、同一の勞作に對しては同一の賃銀が支拂はれることになつてゐる。然るに請負賃銀に於いては、労働時間の價格が一定量の生産物に依つて秤量されることは事實であるが、日賃銀なり週賃銀なりは、労働者の個人的差異につれて變化を生じ、或る者は與へられたる時間に最低限量の生産物を供給され、或る者は平均量、或る者はまた平均量以上の生産物を供給されることになる。隨つて實收入の上からいふと、個々の労働者の熟練や、體力や、精力や、持久力やの如何につれて、大なる區別が生ずる譯である（五十三）。が、これがため、資本對賃銀労働の一般的關係の上には何等の變化も生じないことは言ふ迄もない。第一に、作業場全體の上からいへば、個人的各區別は互ひに相殺されて、一定の労働時間平均生産物が供給され、支拂賃銀の總額は當該營業部門の平均賃銀となるであらう。第二にまた、賃銀對餘剩價值の比例は變化することがない。個々の労働者に依つて個別的に供給される餘剩價值の量は、彼等の個別的賃銀に照應するからである。けれども、請負賃銀は個性のためにヨリ大なる作用範圍を與へるから、一方には労働者の個性、隨つて自由の精神、獨立、克己等を發展せしめると同時に、他方にはまた、彼等相互間の競争を發展せしめる傾きがある。斯くして請負賃銀なるも

のは、個々の勞銀を平均水準以上に引き上げると同時に、また平均水準を自身を低下せしむる傾向を有つこともなるのである。けれども、一定の請負賃銀が久しく傳統的に固定して、これを低減することに特殊の困難が伴はれる處に在つては、強いて時間賃銀に轉化させるといふ方法に訴へることも、例外的には行はれた。一例を擧ぐれば、一八六〇年コヴェントリ市リボン織工の間に生じた大罷工の如きは、雇主の斯かる手段に反抗して起されたものである(五十四)。請負賃銀なるものは、最後にまた、前章に述べた如き時間制度の主なる一支柱ともなるものである(五十五)。

(五十三) 『何等かの産業に於ける勞働が請負賃銀を支拂はれる處に在つては……賃銀の高は甚しく相異なり得るものである。然るに日賃銀に於いては、一般に均等の水準が行はれてゐるのであつて、……雇主も勞働者も、これを當該産業の勞働者の平均能力に對する賃銀の規準と見做してゐる』(『ダニング著『勞働組合と罷工』ロンドン、一八六〇年刊、第一七頁)。

(五十四) 手工職人の勞働は、日賃銀なり又は請負賃銀なりに依つて(9) 規制される。……各産業の勞働者が一日に幾許の勞作をなすかといふことは、親方の略々知悉してゐる所である。そこで彼等はしばしば、なされた勞作に比例して賃銀を支拂ふ。これがため、職人は何等の監視なくとも、彼等自身の利益の上から、出來得る限り多く勞働するやうになるのである』(『フリーリップ・カンチオン著『商業の一般性質論』一七五六年アムステルダム版、第一八五及び二〇二頁¹⁰)。この書の第一版は一七五一年刊行)。ケネーや、サー・ジェームズ・スチュアートや、アダム・スミスなどは、このカンチオンの所論を豊かに利用したのであるが、以上の引抄に依ると、彼等は請負賃銀をば時間賃銀の轉化した形態に過ぎぬと見てゐることは明かである。カンチオンの上掲著書のフランス版は、イギリス版からの翻譯なる旨を表題に示してゐるが、イギリス版(『囊にロンドン市の商人たりしフリーリップ・カンチオン著、商業の分析』)頁はフランス版よりも發行の日附(一七五六年)が遅れて居り、且つ内容の上から見てもヨリ後年の訂正版たることは明かである。例へばフランス版にはヒュームに言及した處がなく、反對にイギリス版ではベテを省いてゐる。イギリス版は學說方面の敘述に於いて劣つてゐるが、イギリスの商業、貴金屬賣買等に關する、フランス版に含まれて居らぬ幾多の事項を含んでゐる。イギリス版の表題に依ると、この書は『主として、極めて創意ある囊に物故した某紳士の草稿から採用して改作したもの』云々となつてゐるが、これは寧ろ、當時慣例となつてゐた單なる擬制に過ぎぬやうに見える。

(五十五) 『作業場に依つては、事實上作業が必要としてゐる所よりも遙かに多くの勞働者を使用してゐるものが少なくないことは、我々の如何に屢々見る所であるよ！ 全く不確かな、往々想像の内にのみ存在してゐるに過ぎぬ註文をば豫期し

て、労働者を採用することが屢々ある。雇主たちは曰く、労働者は請負賃銀を受けるのであるから、雇主の側では何等買値する所がない。時間についての損失は悉く、失業労働者の負擔とならねばならぬからである」と（アッシュ・グレゴアール著「ブリュッセル憲治法廷に於ける印刷業者」ブリュッセル、一八六五年刊、第九頁）¹³。

以上説く所に依つて、請負賃銀なるものは資本制生産方法に最も適應した労働形態であることが知られる。請負賃銀は決して斬新なるものではなく、十四世紀に於ける佛英兩國の労働者法に於いても既に、時間賃銀と等しく政府の認むる所となつてゐたのであるが、それが大なる活動範圍を得るに至つたのは、嚴密の意味のマニユファクチュア時代の時代であつた。大工業のどよめき時代、殊に一七九七年から一八一五年に至る間、請負賃銀は労働時間の延長と時間賃銀の低下とを得べき槓杆として役立つた。この時代に於ける労働の變動についての極めて重要な材料は、青表紙本『穀物條例請願に關する特別調査委員の報告及び證述』¹⁴（一八一三——一四年の議會）と『穀物の栽培、通商、消費狀態、及びこれに關する一切の法律についての勅命委員報告』¹⁵（一八一四——一五年の議會）との中に見出される。其處には、反ジャコピン競争の開始以來行はれた不斷の労働價格低落に關する立證文書が見出されるのである。例へば機織業に於いては、請負賃銀が甚しく下落した結果、労働日は極めて延長されたに拘らず、日賃銀は従前よりも低微の狀態にあつた。

『織工の實収入は今や、従前に比し遙かに減少してゐる。通例の労働者に對する彼等の優越は最初極めて著しかつたが、今や殆んど全く消滅に歸してゐる。實際のところ……熟練労働者と通例の労働者との間に於ける賃銀の差は、今や過去の如何なる時代に於けるよりも遙かに微弱となつてゐるのである』¹⁶。

（五十六）匿名者『大英國の商業政策評述』ロンドン、一八一五年刊、第四八頁¹⁵。

請負賃銀に伴ふ労働の能率並びに時間の増進が農業プロレタリアを利すること如何に少なかつたかは、地主及び小作農業者に擁護せる一書からの左の引抄が示す通りである。——『農業上の作業といふものは、大抵みな日雇又は請負の労働者に依つてなされる。彼等の週賃銀は約十二志である。而して請負労働の場合には労働に對する刺戟が多くなるから、週賃銀の場合に比し一志又は恐らく二志の増收あるものと假定し得るのであるが、それにしても一年の總収入についていへば、就業の喪失に因る減收は右の増收を凌駕するに至ることが知られるのである。……尙また、労働者の賃銀は生活必需品の價格との間に一定の比率を保つものであるから、二人の子女を有する成年労働者は、教區當局の救恤に訴へずして一家を扶養し得るに至ること、一般に見出される所である』¹⁷。

(五十七) 匿名者著『大英國の地主及び小作農業者擁護』ロンドン、一八一四年刊、第四及び五頁目。

マルサスは、當時、議會の發表にかかる諸種の事實について述べて曰く『請負賃銀の實行が斯く流行して來た事實については、私は疑懼の目を以つてこれを見てゐるものであることを白狀する。一日に十二時間乃至十四時間、又はヨリ長時間に亙つて、眞に苦役的な勞働をさせることは、苟くも人間の勞働として餘りに酷である』(五十八)と。

(五十八) マルサス著『地代の性質研究』ロンドン、一八一五年刊行。

工場法の取締を受くる作業場に於いては、請負賃銀が一般の常則となる。蓋し斯かる作業場に於いては、資本はただ能率的にのみ勞働日を擴大し得るに過ぎぬからである(五十九)。

(五十九) 『請負賃銀を受くる者は：：恐らく工場勞働者總數の五分の四を占めるであらう』(工場監督官報告、一八五八年四月三十日)第九頁。

勞働の生産力が變化するにつれて、同一量の生産物に表現される勞働時間は色々に異なつて來る。隨つて請負賃銀も亦、色々に異なつて來る。請負賃銀なるものは、一定勞働時間の價格表章となつてゐるからである。上例に依れば、十二時間に二十四個の生産物が造られ、而して十二時間の價值生産物は六志、勞働力の日價值は三志、一勞働時間の價格は三片、生産物一個當りの賃銀是一片半であつた。生産物一個の中には、二分の一勞働時間が吸収されてゐるのである。いま、勞働の生産力が二倍に増進した結果、同一の勞働日に供給される生産物は二十四個から四十八個に増大するとして、他の事情に變化がないと假定すれば、請負賃銀是一片半から四分の三片に低下することになる。各個の生産物は今や二分の一勞働時間でなく四分の一勞働時間を代表するに過ぎなくなるからである。ヒ×ヒ片は三志であり、ニ×ニ片も同様に三志である。別言すれば、同一の時間を以つて生産する物品の個数が増大して(六十)、各個に對する支出勞働時間が減少するに比例し、請負賃銀は低下することになるのである。請負賃銀の斯かる變動は、これだけではまだ純名目的のものに止まつてゐるとはいへ、それでもこれがため、資本家と勞働者との間には、不斷の闘争が喚び起される。蓋し、資本家はこれを口實として、現實的に勞働の價格を低減するか、又は勞働生産力の増進が勞働能率の増進を伴ふことになるか、然らずんば、勞働者が、彼れの生産物の代價を支拂はれるのであつて勞働力の代價を支拂はれるのではないかのやうに思はしめる請負賃銀の外觀を眞に受けて商品の販賣價格の低下を伴ふことなき勞働の低減には反對するに至るからである。『勞働者は原料及び製品の價格を注意深く觀察してゐるため雇主の利潤を正確に計算し得るやうになる』(六十一)。資本は勞働者の斯かる要求をば當然に、賃銀勞働の性質に關する一大誤謬として

片づけてしまひ(六十二)、産粟の進歩に課税せんとするこの僭越を馬倒して、労働の生産力なるものは労働者とは何等鬪する所ないものと、斷然宣明するのである(六十三)。

(六十)『彼れの紡績機械の生産力は正確に測定される。而してこの機械を以つてなされた労働についての支拂率は、この機械の生産力が増進するにつれて、同一の比率に於いてではないにしても、兎にかく低下することになるのである』(ユーア著『マニユファクチュアの哲學』第三一七頁)。この最後の辯護的な言廻しは當のユーア自身に依つて取消されてゐる。例へば、ミュール紡績機の長さを大にすると、追加労働が必要となることは、彼れの認めてゐる所である。されば労働は、生産力の増進と同じ比率で減少するものではない。尙また『この労働増加に依つて機械の生産力は五分の一だけ増進することになる。かうなると、紡績工はもはや彼れのなした労働について従前と同じ比率の支拂を受けるものではなくなる。然し、彼れの賃銀は五分の一といふ同じ比率で低下するものではないから、彼れの労働の各時間に對する貨幣収入は機械の改善に依つて増大することになる譯である。』——だが然し——『以上の説明は或る訂正を要するものである。……紡績工は今や彼れの追加六片の中から、未成年補助工のために若干の追加賃銀を支拂はねばならず、同時に成年工の一部は驅逐されることになるのである』(前掲、第三二一頁)。この事實は決して、賃銀増騰の傾向を示すものではない。

(六十一) (ヘンリー・フォセット著『英國労働者の經濟的位置』(ケンブリッジ及びロンドン、一八六五年刊、第一七八頁) 180。

(六十二) 『ロンドン・スタンダード』一八六一年十月二十六日號紙上に、ジョン・ブライイト商會がロチデール地方裁判所に提出した告訴の報道が載つてゐる。これは『絨氈工組合代表者の脅迫を訴へたものであつて、ブライイト商會では、これより曩、従前百六十ヤールの生産に要した所と同一の時間及び同一の労働(一)を以つ、二百四十ヤール生産すべき新機械を採用了のであつた。労働者は機械改良上の投資に依つて得られた利潤の分配を受くべき何等の請求權とも有しないのである。そこで商會は、賃銀率(一ヤール當り)を一片半から一片に低下しようとした。即ち同一の労働に對する労働者の収入は、従前通りにされてあつたのである。が、名目上の賃銀は低下するに至つた。而もこれについて、労働者側は何等當然の豫告を受けなかつたと主張するのである。』

(六十三) 『労働組合は賃銀を維持しようとする所から、改良機械に依る利益の分配に與からうと努める(戰慄すべきことである)』。……労働が短縮されたため賃銀の増加を要求することは、これ取りも直さず、機械の進歩に課税せんとするもので

發 本 論 第一卷

ある『匿名者著『諸業の結合について』新版、ロンドン、一八三四年刊、第四二頁〇頁。』

第二十章 勞銀の國民的差異

勞働力の絶對的又は相對的（換言すれば、餘剩價值と比較せる）價值大小の上に變化を喚び起し得る様々の結合については、第十五章に攻究した所である。他方に、勞働力の價格が實現されてゆく生活資料の量はまた、この價格の變化からは獨立した（六十四）乃至それとは異つた運動をなし得ることも、同様に述べた所である。既に述べた如く、勞働力の價值又は價格をば單純に勞銀といふ外顯的の形態に翻譯するだけのことで、此等一切の法則は勞銀變動の法則に轉化されるのであつて、この變動の内部に種々變化しつつある結合として現れる所のものは、これを相異つた國々についていへば、國民的勞銀の同時的差異として現れ得るのである。そこで、國民的勞銀を比較するに當つては、勞働力の價值大小に於ける變化を決定する一切の要件——自然的並びに歴史的に發達した第一次生活必需品の價格及び範圍や、勞働者の教育費や、婦人勞働者及び幼年勞働者の演ずる役割や、勞働の生産力や、勞働の外延的（時間的）並びに内包的（能率的）大小などを考慮することが必要になつて來る。極めて皮相的な比較に於いても先づ、相異なつた國々の同一産業に於ける平均的の日貨銀をば同じ大きさの勞働日に約元せねばならぬ。而して諸種の日貨銀を斯く平均化した後、更らに時間貨銀を請負貨銀に換算することが必要になつて來る。蓋し請負貨銀のみが、勞働の産生力並びに能率程度の分度器となるからである。

（六十四）『價の安い物品をヨリ多く買へるやうになつたから、貨銀（茲ではその貨幣表章についていふのであるが）は増騰したといふのは、正確な言ひ方ではない』（デーウキッド・ブリーカナン編、アダム・スミス著『富國論』一八一三年刊、第一卷、第四一七頁、編者註）。

各國には一定の中位的な勞働能率があつて、商品の生産に支出される勞働の能率がこの水準以下である時は、該商品は社會的に必要な時間以上を要し、隨つて標準的品質の勞働としては計算に入らぬことになる。與へられたる一國についていへば、國民的の平均以上に出づる能率程度のみが、單なる勞働時間の大小を以つてする價值秤量の上に影響を及ぼすのである。個々の國々を組成分子とする世界市場に在つては、さうではない。勞働の中位能率は國に依つて相異なるもので、或る國では大きく、或る國では小さい。要するに、國民的の各平均に、世界的勞働の平均單位を尺度單位とする所の一階梯を形成するのであつて、能率のヨリ大なる國民的勞働は、能率のヨリ小なる國民的勞働に比し、同一時間にヨリ多くの價值——ヨリ多くの貨幣を以つて言ひ現されるもの——を生産することになるのである。

尙また、價值法則なるものは、その國際的應用上、次の事實に依つて影響を受くることは更らに甚しいのである。即ち、生産力のヨリ大なる國民がその商品の販賣價格を價值の水準まで低下することを競争上餘儀なくされることがないとするれば、生産力のヨリ大なる國民的勞働は、世界市場に於いては能率のヨリ大なる國民的勞働としても計算に入るといふ事實が、それである。

資本制生産が一國に發達すればする程、その國の勞働の平均的な能率及び生産力は、それと同じ比例で國際的の水準以上に高められることになるのである(六十四a)。されば相異つた國々で同一の勞働時間に生産される種々異つた量の同種商品は、それ〴〵不等の國際的價值を有することになり、而して此等の價值は相異つた價格へ換言すれば、國際的の價值に準じて相異なる所の貨幣額を以つて言ひ現されるのである。そこで、資本制生産方法のヨリ發達した國民に於ける貨幣の相對的價值は、資本制生産方法の發達微弱なる國民に於けるよりもヨリ小であるといふことになる。而してまた、この事實から、貨幣に言ひ現された勞働力の等價たる名目賃銀も亦、前の國民に於いては、後ちの國民に於けるよりもヨリ大であるといふ結論が生じて來る。勿論、斯くいへばとて、勞働者の支配に委せられる所の生活資料たる現實賃銀についても同様だといふことは、決してならぬのである。

(六十四a) 生産力に關聯した如何なる事情に依つて、この法則が個々の生産部門について變更されることになり得るかは、尙他の場所て研究するであらう。

だが、相異つた國々に於ける貨幣價值の斯かる相對的差異は暫く措くとしても、日賃銀なり、週賃銀なりは、資本制生産方法のヨリ發達した國民に於いての方が、然らざる國民に於けるよりも大であるに反し、相對的の勞働價格(換言すれば、餘剩價值並びに生産物の價值と比較した勞働價格)になると、後ちの國民に於いての方が前の國民に於けるよりも大であるといふ事實は、屢々見出される所であらう(六十五)。

(六十五) ジェームズ・アンダーソンはアダム・スミスとの論戰中に述べて曰く『土地生産物總じてまた穀物の價がヨリ安い貧國に於いては、外見上の勞働價格はヨリ小なることを常とするといへ、現實的の勞働價格は他の諸國に於けるよりも事實に於いてヨリ大きい場合が多いといふことは、これまた注目し得る現象である。蓋し勞働者に目拂ひされる賃銀は、勞働の外見的價格であつて、現實の價格ではないからである。勞働の現實の價格とは、一定量の完成された勞作物について事實上企業者が要費する所のものを指すのである。斯ういふ風に考へて來ると、穀物その他の生活資料の價格は、貧國に於いて

の方が遙かに安いことを常とするとはいへ、労働の価格は殆んど凡ゆる場合を通じて、富國の方が安いのである。……日労働についていへば、スコットランドの方がインゲランドに於けるよりも遙かに廉價であるが、……請負労働は、總じてインゲランドの方が廉價である『ジェームズ・アンダーソン著『國民的産業心振興策についての觀察』エデンバラ、一七七七年刊、第三五〇及び三五二頁』。反對に、低廉な労働はまた、労働の騰貴を喚び起す。『アイルランドに於いてはインゲランドに比し労働の價が高い。……これは労働がそれだけより低廉な結果なのである』(『鐵道勅命委員、議事録一八六七年』第二〇七九號)。

一八三三年の工場委員會の一員なるジェー・ダブリュー・カウエルは、紡績業について周到なる調査をなした後『歐洲大陸に比し、イギリスの賃銀は労働者にとつてはより大であるとはいへ、資本家にとつては事實に於いてより小である』(『前掲ユニア著『マニユファクチャーの哲學』第三一四頁)との結論に達した。イギリスの工場監督官アレキサンダー・レッドグレーヴは、一八六六年十月三十一日の工場報告中に大陸諸國との比較統計を掲げ、大陸諸國に於いてはイギリスに比し賃銀が低廉で、労働時間は遙かに大であるに拘らず、生産物に比較した労働の價格は寧ろ大であることを論證してゐる。オールデンブルヒ公國(ドイツ)に於ける或る木綿工場の一支配人(イギリス人)の言明によれば、この工場の労働時間は(土曜日をも込めて)午前五時半から午後八時迄であるが、斯様な長時間を以つてイギリス人の監督の下に労働しても、イギリスの労働者が十時間に供給するだけの生産物を供給し得ず、ドイツ人の監督の下に於いては更らに供給量が減じて来る。この工場の賃銀はイギリスに於けるよりも遙かに——場合によつては六〇パーセントも——低いのであるが、機械に比較して計算した職工の數は遙かに多く、場合によつては六〇の比例を示してゐることである。

レッドグレーヴ氏はロシアの木綿工場について細目に互つた報道を興へてゐる。その材料は、最近迄ロシアの工場に勤務してゐたイギリス人たる或る支配人に依つて供給されたものである。凡ゆる醜惡な事象を産することに豐饒なこのロシアの土地はまた、イギリスに於ける工場の幼少期に見られた舊來の戦慄すべき諸事象をも滿開せしめてゐる。土著のロシア人たる資本家は工場の營業に役をなさないため、經營の位置に在るものは、言ふ迄もなくイギリス人である。過度の労働や、晝夜連続の労働や、労働者に對しての非道極まる支拂不足など、凡ゆる極端な手段を講じてゐるにも拘らず、ロシアの製造品はただ外國の競争を防遏することに依つてのみ、僅かに餘喘を保つといふ有様である。

最後にヨーロッパ諸國に於ける紡績工場及び紡績工各一に對する紡錘の平均數を示したレッドグレーヴ氏の比較概表を掲げ

よう。此等の數字に數年前に蒐集されたもので、爾後イギリスに於ける工場の規模及び勞働者一人當り紡錘數が増大を來たしてゐるとは、彼れ自から述べてゐる所である。然し彼れは表中の大陸諸國についても、イギリスと均等の進歩を假定してゐる故、各數字に於ける比較上の價値に維持されてゐる譯である。

一工場當り紡錘平均數

イギリス	一二、六〇〇
スウェーデン	八、〇〇〇
オーストリア	七、〇〇〇
ザクセン	四、五〇〇
ベルギー	四、〇〇〇
フランス	一、五〇〇
プロイセン	一、五〇〇

勞働者一人當り紡錘平均數

フランス	一四
ロシア	二八
プロイセン	三七
バイエルン	四六
オーストリア	四九
ベルギー	五〇
ザクセン	五〇
ドイツ諸小國	五五
スウェーデン	五五
大英國	七四

レッドグレーヴ氏に曰く『この比較は、就中、次の理由からしても、大英國にとり不利なるものである。即ち大英國には、

機械機織と紡績とを兼ねた工場が極めて多いのであるが、右の表には織工は含まれて居らぬのである。他の諸國の工場は大抵紡績のみを専業としてゐる。若し嚴密に同等なものを比較することが出来るるとすれば、ただ一人の職工（『機械見張工』）と二人の補助工とだけで、二千二百個の紡錘を備へたミュール紡績機を見張り、一日に長さ四百英哩に及ぶ二百二十斤の綿絲を生産する多數の綿紡工場を、私の管區内に見出し得るであらう（六十五a）。

（六十五a）（工場監督官報告、一八六六年十月三十一日）第三一——三十七頁、隨所）。

東部ヨーロッパやアジアに於けるイギリスの諸會社が鐵道の敷設を企て、これに土著の勞働者のほか一定數のイギリス人も使用してゐることは、我々の知る所である。そこで實際上の必要から、勞働能率の國民的差異を計算に入れることを餘儀なくされた譯であるが、これは會社にとつて何等の損失ともならなかつた。蓋し勞銀の大小は多かれ少なかれ中位の勞働能率に照應するといへば、生産物と比較した相對的の勞働價格は總じて寧ろ反對の方向に運動するものであることは、彼等の經驗が教ふる所である。

エイチ・ケリーは極めて初期に於ける彼れの經濟論著の一たる『賃銀率論』（六十六）の中で、各國の國民的勞銀は國民的な各勞働日の生産率の程度に正比例する所以を論證し、この國際的の關係に基いて、勞銀なるものは一般に勞働の生産率に比例して増騰又は低下するといふ結論を引き出さうとしてゐる。無批判的且つ皮相的に掻き集めた統計上の材料をば雜然と並べ立てることは、ケリーのお定まりな遣り方であるが、彼れが若しこの方法をやめて、右の如き結論に到らしむる前提を論證したとしても、餘剩價値の生産に關する我々の全分析に依つて、この論結の不合理なる所以は明かとなるであらう。事物は現實に於いて、學說のいふ通りになつてゐるとは、彼れは主張しないのであつて、この點はせめてもの取柄である。蓋し自然的の經濟事情は、國家の干渉に依つて不純にされてゐる。これがため、租税の形で國家の手に歸する賃銀部分も、假りに勞働者自身の手に歸するかのやうにして、國民的の各勞銀を計算する必要が生じて來るのである。ケリー君は更らに、此等の『國費』も亦資本主義發展の『自然的果實』でないかと、考ふべきではないだらうか？ 右の推論は、この男に全く相應しいものである。彼れは先づ、資本制生産事情なるものは永久の自然律であり合理律であるとなし、自由の内に調和あるこの法則の作用を破壊するものはただ國家の干渉のみだと論じ、然る後、世界市場に及ぼすイギリスの兇惡な影響——それは、資本制生産の自然律に起因するものではないと見える——の上から、國家の干渉が、右の自然律及び合理律に對する國家の保護が、語を換へていへば保護稅制度なるものが、必要になるといふ發見に到達したのである。彼れは更らに、現存せる社會的の對立や矛盾を

學説化したりカルド等の定理は、現實に於ける經濟上の運營の觀念的產物ではなく、寧ろ反對にイギリスその他の國に於ける資本制生産の現實的對立こそ、却つてリカルド等の學説の結果であるといふ發見に到達した！ 最後にまた、彼れは資本制生産方法本有の美と調和とを破壊するものは、終局に於いて商業であるとの發見にも到達した。更らに一步を進めたとすれば、彼れは恐らく、資本制生産に於ける唯一の害惡は、資本そのものであるとの發見にも到達したであらう。このやうな驚くべき無批判と誤れる學識とを有つた男のみが、保護主義的異端の信奉者であつたにも拘らず、バスターアの如き人やその他現在の凡ゆる自由貿易主義樂天家たちの調和的智恵の祕密の源泉となるに相當してゐたのである。(六十七)

(六十六) ケリー著『賃銀率論。世界に於ける勞働者の状態に差異を生ぜしむる原因の研究』フィラデルフィア、一八三五年刊(イ)。

(六十七) 彼れの學識の淺薄なる所以については、本書第四部『餘剩價值學説史』の中に尙立ち入つた論證を與へるであらう。

第七篇 資本の蓄積行程

緒言

一の貨幣額の生産機關及び勞働力への轉化は、資本として作用すべき價值量がなす第一の運動である。この運動は流通部門たる市場に行はれる。第二段の運動たる生産行程は、生産機關がその組成分子の價值以上に出づる價值を有する商品、換言すれば最初貸された資本のほかに尙、一の餘剩價值をも含む商品に轉化されたとき結了するものである。この商品は次いでまた、流通部門に投せられねばならぬ。それは販賣されて、その價值を貨幣に實現し、この貨幣がまた新たに資本化され、斯くして絶えず同一の行程を反覆更新してゆくことを要する。斯くの如き、絶えず同一の逐次的諸段階を通過する循環は、即ち資本の流通たるものである。

蓄積の第一條件となるものは、即ち資本家が彼れの商品を販賣し、斯くして得た貨幣の大部分をば資本に再轉化する所の行程を成し了へるといふことである。以下、資本は順當にその流通行程を通過するものと假定する。この行程についてのヨリ立ち入つた分析は、本書第二部（第二卷）に譲る。

餘剩價值を生産する所の、換言すれば勞働者から直接に不拂勞働を汲み取つて、これを商品に固定せしむる所の資本家は、この餘剩價值の最初の占有者たることは事實であるが、決して最終の所有者たるものではない。彼れは次いで、この餘剩價值をば、社會的生産全體の上で他の機能を盡くす所の資本家や土地所有者との間に分配せねばならぬ。斯くして餘剩價值なるものは、種々異つた部分に分割されることになるのである。餘剩價值の此等の斷片は、種々異つた範疇の人々に歸し、利潤、利子、商業利得、地代等の、相獨立した様々の形態を與へられる。此等の轉化した餘剩價值形態は、本書第三部（第三卷）に入つてからでなければ取扱ひ得ないのである。

そこで以下の説明に於いては、一方に商品を生産する資本家はこれを價值通りに販賣すると假定するに止め、それ以上、彼れが商品市場に復歸することや、資本が流通部門の内部に於いて如何なる新形態を探り、またこの形態の中には再生産上の如

何なる具體的條件が含まれるかといふ様なことは、この場合説かぬことにする。他方にまた、生産者たる資本家を以つて餘剰價值全部の所有者（或は寧ろ、餘剰價值の分配に與かる一切の人々の代表者）と見做すことにする。要するに、我々は差し當り、蓄積なるものを抽象的に、語を換へていへば直接的生産行程の單なる通過點として、考察することにするのである。

苟くも蓄積が行はれる限り、資本家は生産商品を販賣して、其處から得た貨幣をば資本に再轉化することを成し遂げてをるべき筈である。尙また、餘剰價值が種々なる斷片に分割されるといふ事實は、餘剰價值の性質の上にも、また餘剰價值を蓄積の要素たらしめるに必要な條件の上にも何等の變化を與へるものでない。生産者たる資本家が餘剰價值の幾分を自己の手に保留し、幾分を他人に譲渡するにしろ、直接に先づ餘剰價值を占有するものは常に彼れである。されば蓄積の説明上に我々が假定することは、現實的蓄積の進行に前提されることと異なる所がないのである。他方にまた、餘剰價值の分割と、流通の媒介的運動とは、蓄積行程の單純な基本形態を曖昧にするものであるから、蓄積行程を純粹の形で分析するには、その機構の内部的作用を隠蔽する所の凡ゆる現象をば暫く問題外に置いて考へることが必要となるのである。

第二十一章 單純なる再生産

生産行程なるものは、その社會的形態の如何を問はず、連續的のものでなくてはならぬ。換言すれば、週期的に絶えず新たに同一の各段階を通過するものでなくてはならぬ。一の社會は、消費することを止め得ざる如く、また生産することをも止め得ないのである。されば社會的の各生産行程は、これをその不斷の關聯と更新の間斷なき流動との方面から觀察すれば、同時にまた再生産行程ともなるのである。

生産の條件は同時にまた、再生産の條件たるものである。如何なる社會も、その生産物の一部を絶えず生産機關に、新たな生産の要素に再轉化することなくしては、絶えず生産し得るものでなく、隨つて再生産し得るものでもないのである。他の事情に變化なき限り、社會は例へば一年といふ如き期間中に消費された生産機關なる勞働要具や、原料や、助成材などを補ふに等量同種の新たな物件を以つてするにあらざれば、同一の規模で富を再生産又は保存し得るものではない。即ち此等の物件は年生産物の中から分離され、新たに生産行程に合體されることになるのであつて、年生産物中の一定量は、生産の領域に屬してしまふ譯である。この一定量の生産物は最初から生産的消費に歸すべきものとされてゐるのであつて、大抵はそれ自身に於いて個人的消費に適せざる現物形態を以つて存在してゐるのである。

生産が資本制的形態を採つてゐるとすれば、再生産も亦同様である。資本制生産方法の下に於いては、勞働行程なるものは價值増殖行程の一段たるに過ぎぬのであるが、同様に再生産も亦、前貸價值を資本として、自己増殖的の價值として再生産する所の一段たるに過ぎぬのである。或る一人に資本家たる經濟的扮裝が與へられるのは彼れの貨幣が絶えず資本として作用する結果に外ならぬ。一例として、一百磅なる前貸貨幣が今年資本に轉化されて、二十磅なる餘剩價值を生じたとすれば、この貨幣額は明年も、その後の年に於いても、同一の作用を反覆せねばならぬ。餘剩價值なるものは、資本價值の週期的附加量たる意味に於いて、作用資本の週期的果實たる意味に於いて、資本から生ずる所の收入⁽¹⁾といふ形態を與へられるのである。

(1) 他人の勞働の生産物を消費する所の富者は、交換行爲(商品の購買)に依つてのみこれを與へられる。だが、若し彼等のムラ氣が求める所の新たな生産物を得るために、彼等が取得し蓄積した富を返還するとすれば、彼等は總て準備金を滿

盡してしまはねばならぬ様になる如く見える。彼等は労働をするものではなく、また全然労働し得ざるものでもないことは、我々の既に述べた所である。そこで、我々は斯く信ぜねばならなくなる。即ち彼等の舊來の富は日を逐うて減少し、何等餘す所がなくなるので、専ら彼等のためにのみ労働する人々との間の交換に於いて提供すべき何物をも有しないことになる。けれども富といふものは、その所有者の労働共與に依らず、専ら他人の労働に依つて自己を再生産する所の力を、社會的秩序の上から與へられることになつたのである。富は労働と同じく、また労働に依つて、富者を貧しくすることなくして、年々消耗され得る所の果實を供給する。この年々の果實が、即ち資本から生じて來る所の収入なのである『シスモンデ著『經濟新原論』第一卷、第八一頁及び八二頁』。

この収入が資本家にとり消費基金として役立つに過ぎぬとすれば、即ち取得される都度週期的に消費されてしまふとすれば、その場合には、他の事情に變化なき限り、單純なる再生産が行はれることになるのである。而してこの單純なる再生産は、生産行程が同一の規模を以つて反覆されることを意味するに過ぎぬとはいへ、而も斯くの如き單なる反覆又は繼續に依つて、生産行程は若干の新たなる性質を印刻される。或は寧ろ、個別分立的な行程としての生産行程に伴はれてゐた外觀的の諸性質は、これがため消滅することになると言ふべきである。

生産行程なるものは、一定の時間に互つた労働力の購買を以つて開始される。而してこの行程は、労働の販賣期限が満了して、一定の生産期間たる一週、一ヶ月等を経過する毎に、絶えず更新されるのである。然るに労働者は、彼れの労働力を作用せしめて、それ自身の價值と餘剩價值とを商品の上に實現せしめた後に、漸く支拂を受けるのであるから、彼れは餘剩價值（今のところ、資本家の消費基金に外ならぬものと見る）と同様に、彼れ自身への支拂基金たるべき可變資本についても、それが労働の形で彼れの手に回流するよりも以前すでに生産したことになる。而して彼れは、この基金を不斷に再生産する間だけ雇傭されるのである。労働をば生産物そのものについての配當なりとする、第十六章(II)の下に掲げた經濟學者たちの公式は、茲に由來してゐるのである(二)。労働の形で絶えず労働者の手に回流し來たるものは、労働者自身に依つて不斷に再生産される生産物の一部である。資本家は貨幣を以つて労働者に商品價值を支拂ふことは事實である。が、この貨幣は労働生産物の（或は寧ろ労働生産物の一部の）轉化した形態に外ならぬ。労働者が生産機關の一部を新たなる生産物に轉化せしめてゐる間に、従前に於ける彼れの生産物の一部は市場に在つて貨幣に再轉化される。今日又は現半年間に於ける彼れの労働の代價として支拂はれるものは、前週又は前半年間に於ける彼れの労働である。貨幣形態に依る幻想は個々の資本家や個々の労働者を

考察する代りに、資本家階級や労働者階級を考察するに至つたとき、忽ちにして消滅してしまふ。労働者階級に依つて生産される資本家階級に依つて占有される生産物の一部を支拂ふに當り、後者は絶えず貨幣形態を以つて前者に小切手を交付する譯である。而して労働者も亦、絶えずこの小切手を資本家階級に返還し斯くして彼れ自身の手に歸する彼れ自身の生産物部分をは資本家階級から移轉されることになる。この取引は生産物の商品形態と商品の貨幣形態とに依つて假裝されてゐるのである。

(二)『賃銀も、利潤も、共に完成された生産物の一部と見做すべきである』(ラムセー著『富の分配論』エヂンバラ、一八三六年刊第一四二頁)、『賃銀の形で労働者の手に歸する生産物の配當分』(ジェームズ・ミル著『經濟要論』パリソン佛譯本、バリ、一八二三年刊、第三四頁)。

要するに、可變資本とは、労働者が彼れ自身の生存及び再生産に要する所の、而して社會的生產の如何なる制度の下に於いても、常に彼れみづから生産し再生産することを要する所の、生活資料の基金(労働基金)が採る特殊の歴史的な一現象形態に過ぎぬものである。労働基金が絶えず彼れ自身の労働の支拂要具といふ形で彼れの手に流れて來るのは、これ即ち彼れ自身の生産物が絶えず資本の形で彼れの手から遠ざかるが故に外ならぬ。けれども、労働基金の斯様な現象形態は、資本家に依つて労働者に前貸されるものが労働者自身の對象化された労働であるといふ事實を、些かも變ぜしめるものではないのである(三)。

(三)『労働者に賃銀を前貸すべく資本が充用されたとき、労働の維持に要する基金は何等の追加も與へられぬ』(ジョン・カゼノウエ編マルサス著『經濟學の定義』ロンドン、一八五三年刊、第二二頁、編者註)。

徭役農夫を例に採らう。彼れは一週の中、例へば三日間は、自己の生産機關を以つて、彼れ自身の田圃を耕し、他の三日間は、領主の土地で徭役労働をする。彼れは不斷に自己の労働基金を再生産するのであるが、この労働基金は彼れの労働の代價として第三者から前貸される所の支拂要具たる形態を採つて彼れに對立するものではない。その代りにまた、彼れの不拂強制労働は決して、自發的な支拂労働たる形態を受けない。若し彼れの田圃や、輓獸や、種子など、約していへば彼れの生産機關が明日にも領主の手占有されることになるるとすれば、その時以後、彼れは自己の労働力を徭役主に販賣せねばならなくなるであらう。他の事情に變化がないとすれば、彼れは依然として一週に六日間労働し、その中の三日間は自分自身のため、殘餘の三日間は、今や賃銀支拂主と化した舊徭役主のために労働することになるであらう。彼れが生産機關を生産機關として消費し、その價值を生産物に移轉することは、従前と異なる所がない。生産物の一定部分は、従前通り再生産に充用されるであらう。けれども、徭役労働が賃銀労働なる形態を採ると同様に、徭役農夫に依つて従前通り生産し再生産される労働基

金は、舊僑役主が彼れに前貸する所の資本といふ形態を探るのである。今日に於いても労働基金なるものはただ例外的にのみ資本の形で地球上に現れてゐるに過ぎぬといふ事實の前に、ブルジョア經濟學者は目を閉ぢてゐる。彼等の局限された頭腦は現象形態をばその上に現れる所の本體から分離することが出来ぬのである(四)。

(四)『労働者の賃銀が資本家に依つて前貸されることは、今日でも地球上の労働者の四分の一以下についてのみ見られる所である』(リチャード・ジョンズ著『國民經濟講義教科書』ハートフォード、一八五二年刊、第一六一頁)。

可變資本が資本家自身の基金の中から前貸された價值であるとの意義を失ふのは、資本制生産行程をばその更新の間斷なき流動といふ點から觀察する場合にのみ言ひ得るものであることは論を俟たぬ(四a)。が、それにしても、この行程は何處に於いてか、また如何なる時にか、開始されねばならぬものである。そこで、以上の説明に於ける我々の立場から、かういふことも有りさうなことに見える。即ち、資本家は嘗て何等かの時に、他人の不拂労働から獨立した何等かの本來的蓄積に依つて貨幣所有者となり、以つて労働力の購買者たる資格で市場に出入し得るやうになつたといふのである。が、それは兎にかく、資本制生産行程が連続するといふだけの事實、換言すれば單純なる再生産が行はれるといふだけの事實に依つても、單に可變資本のみでなく總資本の上にも影響する所の、他の驚くべき變化が生じて來るのである。

(四a)『製造業者(労働者のこと)は雇主から賃銀の前貸を受けるとはいへ、現實に於いて何等の費用をも雇主に負せしめるものではない。この賃銀の價值は、彼れの労働が附與された對象の増進した價值の中に、利潤と相合して保存されてゐることを常とするからである』(アダム・スミス著『富國論』第二部、第三章、第三一頁)。

一千磅の資本を以つて、例へば年一回といふ如く週期的に造り出される餘剩價值が二百磅であるとして、この餘剩價值が年々消費されてしまふものとすれば、同一の行程を五年間反覆した後、消費される餘剩價值の總額は £1000。即ち一千磅となり、最初に前貸した一千磅なる資本價值と等しいことになる。年々造り出される餘剩價值の一部だけ、例へば半分だけしか消費されないとするれば、この生産行程を十年間反覆した後、右と同一の結果が生ずることになるであらう。10x100は一千磅に等しいからである。概括していふと、一年間に消費される餘剩價值で前貸資本價值を割ると、最初に前貸した資本が資本家のために消費されて消滅するに至る年數(再生産期間の數)が得られる譯である。

他人の不拂労働の產物たる餘剩價值を消費して、原資本價值をその確保するといふ風に資本家は考へてゐるが、然しこの觀念は、事實の上に何等の變化をも與へ得るものでない。一定の年數を経過した後、彼れの占有せる資本價值は、同一の期間

に等價を與へずして占有した餘剩價値の額に等しくなり、また彼れの消費した價値高は原資本價値に等しくなるのである。大きさが不變であつて、且つその一部たる建物、機械等は營業開始の當時すでに存在してゐた一資本が、彼れの手に入有されてゐることは事實である。だが、茲に問題となるものは、資本の價値であつて資本の物質的組成分ではない。或る人がその所有財産の價値に等しい債務を負ふことに依つて財産の全部を消費してしまつたとすれば、この全財産は彼れの債務の總額を代表するに過ぎぬものとなる。資本家がその前貸資本と等額の價値を消費した場合にも同様であつて、この資本の價値は彼れが無償で占有した餘剩價値の總額を代表するに過ぎず、彼れの原資本價値は一微分子も存続するものではないのである。

要するに、蓄積のことは暫く措き、生産行程が單に繼續するといふだけでも、換言すれば、單純なる再生産が行はれるといふだけでも、大なり小なりの期間後には、如何なる資本も必然的に、蓄積された資本又は資本化された餘剩價値に轉化される譯である。資本は初めて生産行程に入る際、その充用者自身の勞働に依つて得られた所有物であつたとしても、晩かれ早かれ、等價を與へずして占有した價値となり、換言すれば貨幣形態を以つてすると、その他の形態を以つてするとを問はず、兎にかく他人の不拂勞働を體化したものとなるのである。

貨幣を資本に轉化せしめるのには、單に商品生産及び商品流通が存在するといふだけでは十分でないことは、第四章に述べた通りである。それには先づ、價値又は貨幣の所有者と、價値造出實體の所有者とが、換言すれば生産機關及び生活資料の所有者と、勞働力以外には何物をも所有せざる人とが、一方は購買者、他方は販賣者として相對立するやうになることを要すると述べた。即ち、勞働生産物と勞働それ自身と、客觀的なる勞働條件と主觀的なる勞働力との分離は、資本制生産行程の成立すべき、事實上與へられた基礎であり出發點であるとしたのである。

然るに、最初出發點に過ぎなかつたものが、後には生産行程の單なる繼續に依り、單純なる再生産の反覆に依つて、資本制生産の特殊の結果として絶えず新たに生産され永久化されることになるのである。一方に於いて、素材的の富は生産行程に依つて絶えず資本に轉化され、資本家のために價値を増殖し享樂を與へるの手段に轉化されると同時に、他方にまた、勞働者は生産行程に入つた儘の姿で、絶えず其處から出て來るのであつて、富の人的源泉であるといへ、己れ自身のためにこの富を實現すべき一切の手段を剝奪されたものとなつてゐるのである。彼れの勞働は、彼れが生産行程に入るに先だち、彼れ自身から引離されて、資本家のものとなり、資本に併合されてゐるため、生産行程の進行中絶えず他人の生産物に對象化されることになる。生産行程なるものは、資本家に依る勞働力の消費行程を意味するものであるから、勞働者の生産物は絶えず商品に轉

化されるのみでなく、また資本に、價值造出力を吸収する所の價值に、人を購買する所の生活資料に、生産者を充用する所の生産機關に轉化されることにもなるのである(五)。即ち、労働者は客觀的の富を絶えず資本として、彼れの外部に立ち彼れを支配し搾取する所の力として、生産すると同時に、資本家も亦絶えず労働力をば、それ自身の對象化及び實現に必要な手段から分離された主觀的の富源として、労働者の單なる現身中に存在してゐる抽象的の富源として生産する。約していへば、資本家は労働者をば絶えず賃銀労働者として生産するのである(六)。労働者を斯く不斷に再生産して永久の存在たらしめることは、これ正に資本制生産の死活條件なのである。

(五)『これは生産的消費の注目すべき特質となつてゐる。生産的に消費される如何なる物も、資本である。それは消費に依つて、資本となるのである』(ジェームズ・ミル著『經濟要論』第二四二頁)。が、ジェームズ・ミルはこの『注目すべき特質』を進んで追究するに至らなかつた。

(六)『新たに開始された一製造業に依つて、多數の貧困者が職を與へられることは確かに事實である。然しこれがため、彼等は貧困者でなくなる譯ではない。否、この製造業が持續して經營されるとき、更らに多くの貧困者が造られることになるのである』(匿名者著『羊毛輸出制限の理由』ロンドン、一六七七年刊、第一九頁)。『小作農業者は今や、彼等に依つて貧民が生計を維持してゐるのだといふ、馬鹿々々しい主張をなしてゐる。實際のところ、貧民は窮乏状態に維持されてゐるのである』(匿名者著『最近に於ける救貧税増加の理由、又は労働及び食糧の價格比較觀察』ロンドン、一七七七年刊、第三七頁)。

労働者の消費は二様に行はれる。先づ生産の方面からいへば、彼れは労働に依つて生産機關を消費し、これを前貸資本よりもヨリ大なる價值の生産物に轉化せしめる。これは彼れの生産的消費である。この消費はまた同時に、彼れの労働力を購買した資本家に依る彼れの労働力の消費を意味する。次に、労働者は彼れの労働の代價として支拂はれた貨幣を生活資料の購買に支出する。これは彼れの個人的消費である。斯くの如く、労働者の生産的消費と個人的消費とは全く相異なるものである。生産的消費に於いては、彼れは資本の動力として行動し、資本の支配に屬するものであるが、個人的消費に於いては、彼れ自身の支配に屬し、生産行程の外部にある個人的生命機能を營むのである。前者の結果は資本家の生命であり、後者の結果は労働者彼れ自身の生命なのである。

労働者が彼れ自身の個人的消費をも生産行程の單なる附隨事項たらしめることを餘儀なくされる場合が屢々あるといふ事實

は、労働日(第八章)並びに機械及び大工業(第十三章)を考察せる際、例證した所である。その場合には、彼れは労働力を運轉状態に維持すべく、自己のために生活資料を供給することになるのであつて、蒸氣機關に石炭や水を供給し、車輪に油を供給するのと異なる所はない。この場合、彼れの消費資料は生産機關の消費資料に外ならず、彼れの個人的消費は直接に生産的消費となるのである。だが、斯様な現象は、資本制生産行程の本質には屬しないの濫用として現れる(七)。

(七) ロッシも、現實に於いて『生産的消費』の祕密を道破したとすれば、斯く力をこめてこの點を論難するには至らなかつたであらう。

ところで、個々の資本家及び個々の労働者についていふよりも、寧ろ資本家階級及び労働者階級を總體的に觀察し、個々の商品生産行程についていふよりも、寧ろ流動状態にある資本制生産行程をばその社會的範圍に互つて觀察するとき、問題は異つた形に現れて來る。

資本家はその資本の一部を労働力に轉化することに依つて、資本總體の價值を増殖することになる。彼れは一舉兩得するのである。彼れは單に労働者から受くる所のものに依つて利益を得るのみでなく、また労働者に與へる所のものに依つても利益を得るのである。

労働力と交換して手放された資本は、労働者に依つて生活資料に轉化され、この生活資料の消費は、彼れの筋肉や、神経や、骨や、腦髓や、その他を再生産して新たな労働者を送り出すことに役立つのである。されば、労働者階級の個人的消費なるものは、絶對的必需の限界内についていへば、労働力の代價として資本から讓渡された生活資料が、資本に依つて新たに搾取され得べき労働力に再轉化されることを意味するものであつて、資本家の必要不可欠な生産機關である労働力それ自身を生産し再生産することに外ならぬのである。要するに、労働者の個人的消費なるものは、作業場や、工場や、その他の物の内部に行はれると外部に行はれるとを問はず、資本の生産及び再生産の一要素たるを失はないのであつて、この意味に於いてそれは、機械の掃除といふことが労働行程の進行中になされると労働行程の一定の休止期間中になされるとを問はず、資本の生産及び再生産の一要素たるのと異なる所がないのである。

労働者はその個人的消費をば自分自身のためにするのであつて、資本家のためにするのではないといふことは、問題の上にて何等影響する所がない。それは恰度、馱獸が食ふ所の物は彼れ自身に依つて享樂されるからといつて、馱獸のなす消費が生産行程に必要な一要素たることを減ずるものでないのと同様である。労働者階級の不斷の生存及び再生産は、資本の再生産に必

要な不漸の條件となつてゐるのである。資本家はこの條件の成就をば、安んじて労働者の自己保存衝動と生殖衝動とに委ねることが出来る。彼れはただ、労働者の個人的消費をば出来得る限り必要な範圍に制限する勞を執るだけである。この點に於いて彼れは、労働者が實質の少ない榮養資料よりも寧ろ實質の多い榮養資料を攝るやうに強制する所の、かの南アメリカ的な粗暴を距ること雲泥なのである(八)。

(八)『南アメリカの鐵山に就業してゐる労働者は、恐らく世界中に於いて最も過激な労働に従事してゐるものであらう。彼等の一日分の労働といへば、百八十斤乃至二百斤もある生鐵を、地下四百五十呎の處から地上へ背負ひあぐることに存してゐる。彼等はパンと長豆だけを食べて生きてゐる。彼等はパンだけを食べたいのであらうが、パンだけ食べたのではこの様に過激な労働をなし得ないことを見出した彼等の雇主は、彼等を馬と同様に取扱ひ、強いて長豆をも食はせるのである。だが、長豆はパンに較べると、遙かに多く骨土を含んでゐるのである』(リービヒ著『農業及び生理に應用したる化學』第七版、一八六二年刊、第一部、第一九四頁、註)。

そこで資本家や、その觀念代表者たる經濟學者は、労働者の個人的消費中生産的と目すべきものは、労働者階級の永久存続に、語を換へていへば資本が労働力を消費する上に必要な部分のみであると考へるやうになる。それ以上、労働者が彼れ自身の慰樂のために消費するかも知れない部分は、不生産的消費たるものと見るのである(九)。資本の蓄積が若し、資本に依る労働力消費の増加を伴はずして、勞銀を昂騰せしめ、斯くしてまた労働者の消費資料を増大せしめることになるとすれば、追加された資本は不生産的に消費されてしまふ譯である(十)。實際のところ、労働者の個人的消費なるものは、窮乏的の個人を再生産するに過ぎぬのであるから、労働者自身から見れば不生産的のものである。然し、それは他人の富を造る力を生産するのであるから、資本家及び國家の立場から見れば生産的のものである(十一)。

(九) ジェームズ・ミル著『經濟要論』パリソ・佛譯本、パリイ、一八二三年刊、第二三八頁以下。

(十)『労働の價格が昂騰して、資本を増大しても最早ヨリ以上の労働を充用し得なくなるとすれば、この増加資本は不生産的に消費される——と、私は言ふ』(リカルド著『經濟原論』第三版、ロンドン、一八二一年刊、第一六三頁註)。

(十一)『嚴密の意味で生産的の消費といひ得るものは、資本家が再生産の目的を以つてする富の消費又は破壊(生産機關の消費を謂ふ)のみである。…労働者をが用する所の人や國家の立場から見れば、労働者は生産的の消費者であるが、彼れ自身の立場から見れば、嚴密には生産的消費者たるものでない』(マルサス著『經濟學の定義』ロンドン、一八五三年刊、第三

そこで社會的見地からすれば、勞働者階級なるものは、直接の勞働行程の内部に於いても死んだ勞働器具と同様に資本の附屬物であるといふことになる。彼等の個人的消費でさへも、一定の限界内についていへば資本の再生産行程の一要素たるに過ぎぬのである。これらの意識的生産器具が逃げ去らぬやうにすることは、資本の再生産行程それ自身が處理するところであつて、それは彼等の生産物をば絶えず彼等の極から資本の對極に遠ざけてゆくのである。個人的消費なるものは一方に、彼等自身の生存と再生産とを處理すると同時に、他方にはまた、生活資料を破壊することに依つて、彼等が絶えず勞働市場に再出現するやうに處理する。ローマの奴隸は鎖で所有者に繋がれてゐた。賃銀勞働者は見えざる糸を以つて所有者に繋がれてゐる。彼れが獨立してゐるかの如き外觀に、個々の雇主の顔觸れが不斷に換はるることと契約の擬制とに依つて維持されるのである。

初期の時代に於いては、資本は自己にとつて必要と見えた處では強制法律に依つて自由勞働者に對する所有權を主張したものである。例へばイギリスでは、一八一五年に至るまで、機械製造工の國外移住をば重刑を以つて禁止してゐた。

勞働者階級の再生産は、勞働者の熟練を一の代から他の代に移轉し蓄積することをも意味するものである(十二)。資本家が如何に熟練勞働者階級の存在を自己に屬する生産條件の一部となし、これを實際のところ可變資本の現實的存在と見てゐるか、それは恐慌がこの勞働者階級の消滅を脅威するとき明かとなつて來る。アメリカ南北戦争と、それに伴つて生じた棉花窮乏のため、ランカシャー州その他に於ける木綿工の多數が職を追はれるやうになつたことは人の知る所である。他の社會部類に於いてもさうであつたが、勞働者階級それ自身の間からも、イギリスの植民地なりアメリカ合衆國なりへ『過剩者』を移住し得るやうにするため、國家の補助又は國民の任意の寄附を必要とするといふ叫びがあげられた。當時『タイムズ』一八六三年三月二十四日號)紙上に、元マンチェスター商業會議所長エドモンド・ポッターの一書翰が掲載された。この書翰は、『工場主の宣言』といふ妥當な名稱を下院に依つて與へられたものである(十三)。いま左に、勞働力に對する資本の所有權をば無遠慮に言ひ現した若干の特徴的章句を摘録する。

(十二)『勞働者の熟練こそ、蓄積され壞れ生産されてゐると稱し得る唯一のものである。……熟練勞働の蓄積貯藏といふ、この最も重要な作業は、これを勞働者の多數についていふならば、何等の資本なくして行はれるものである』(トマス・ホッヂキンス著『勞働擁護』第一三頁)。

(十三)『この書翰は工場主の宣言と稱し得るものである』(一八六三年四月二十七日、下院に於けるフェランドの『棉花窮乏

に關する動議』(10)。

『失業者たちに告げたいことは、木綿労働者の供給が餘りに多く……恐らくその三分の一は減員せしめる必要があるといふ一事である。斯くすることに依つて初めて、殘餘の三分の二は健全なる需要を有ち得ることになるであらう。……輿論は、國外移住を要求してゐる。……木綿工場主たちは、労働供給が除去されることを默視し得るものでない。それは邪惡であり、不健全なことである、と彼等は考へるかも知れぬ。……若し移住のために公債を流用すべしといふことになれば、その場合には雇主は主張の權を有し、恐らくまた抗議の權をも有するものである。同じポッターは更らに語を續けて、木綿工業が如何に有用なものであり、如何に『疑ひもなく、アイルランド及び農業諸地方から過剩人口を吸引した』か、またその範圍が如何に巨大であつて、一八六〇年にはイギリスに於ける輸出總額の十三分の五を供給したか、且つ市場殊にインド市場が擴大され、一斤當り六片で十分の棉花を供給し得ることになる結果、數年後にはこの工業の範圍が如何に大となるべきか、等を説明してゐる。

彼れは更らに語を續けて曰く『恐らく一年乃至三年を出でざる中に、必要なだけの生産物は供給されることになるであらう。……その時、私は斯ういふ問を提出したい。この工業は果して維持に値するものであるか？この機械(即ち生きた労働機械)を整頓させて置くことは、果して骨折り甲斐のあることであるか？これを放棄しようと思へることは最大の迂愚ではないだらうか？私はさう信ずるものである。労働者は他人の所有に屬するものでなく、ランカシャー州や雇主たちの所有物でないことは、私の認める所である。だが、これらの何づれにとつても、彼れが強き力となつてゐることは事實である。彼れは一代を通じて代置し得ざる靈性的な訓練された力である。然るに、彼れの運轉する他の機械は、大抵みな十二ヶ月の間に、有利に代置し改善し得るものである(十四)。労働力の國外移住を奨励し又は許容(一)するに至つたとすれば、その場合、資本家はどうかであるらうか？……労働者といふクリムを抜き去つてしまへば、固定資本は甚しく價値を減損することになり、而して流通資本は、劣等なる労働の不足した供給を以つて充用されることを欲しなくなるであらう。……國外移住は、労働者自身の望む所であると言はれてゐる。労働者がそれを希望するのは、極めて當然なことである。……労働力を殺滅し、労働者に對する貨銀支出を五分の一又は五百萬磅節減して、これに依り木綿工業を縮小せしめるとすれば、労働者の一段上の階級なる小賣商人は果してどうなることであらう？地代や住宅小屋の賃料などは、果してどうなつてしまふであらう？小規模なる小作農業者や、優良なる獨立生計者や、地主などは、果してどうなることであらう？一國の最良な工場労働者を輸出し、

彼等の最も生産的な資本と富との一部の價值を消滅せしめ、以つて國民を虛弱ならしめること以上に、一國の凡ゆる階級にとつて自殺的な計畫が果して存在し得るであらうか？…被救恤者の道徳的水準を高めるためには、木綿諸地方の救貧管理局に附屬する特別委員の監督を受け、且つ一定の強制労働を規定した特殊の法律規則に依つて取締られる所の、二年又は三年に互つた五百萬乃至六百萬磅の公債を募集することが、策の得たるものであると私は信じてゐる。最良な労働者を放棄した上に、尙、大規模の掃一的な國外移住と一地方全體に互つた資本及び價值の掃一とに依つて、殘餘の労働者を墮落し意氣銷沈せしめるよりも以上に邪惡なことが、土地所有者や雇主にとつて果してあり得る所であらうか？」と。

(十四) 通例の事情の下に、勞銀を引き下げることが問題となる場合、同一の資本が全く異つた音を出すやうになることは、我々の記憶する所である。その場合、雇主たちは異口同音に宣明して曰く(第四篇、註一八八、第四〇六頁)——『工場労働者の労働は實際低級な種類の熟練労働であつて、これ以上容易に修得され、また、その質に比してこれ以上よく報酬されてゐる労働はなく、且つ最小な熟練者に依る短期間の修練を以つて、これ以上敏速に豊富に修得され得る労働はないといふこと——この事實を彼等は固く念頭に置くべきである。雇主の機械は、十二月にして有利にヨリ改良されたものを以つて代置し得るとのことであるが、この機械でさへ、六ヶ月の教育で如何なる農僕にも修得し得る所の、三十ヶ年を以つても代置し得ない労働者の労働や熟練に比すれば、生産の營業上遙かに重要な役割を演ずるものである』と。

木綿製造業者の選ばれた器官であるポッターは、二種の機械を區別してゐる。いづれも資本家に屬するものであるが、一は彼れの工場の内部に在り、他は夜間と日曜日とに限り工場の外部の住宅小屋に置かれてゐる。一は死んだ機械であり、他は生きてゐる機械である。死んだ機械は單に、日々悪化して價值を消滅せしめられるのみでなく、その存在してゐる機體の中でも少なからざる部分は、技術上の間斷なき進歩に依つて絶えず廢朽してしまふものであるから、數ヶ月にして有利に新たな機械を以つて代置し得るのである。然るに、生きた機械の方は、長く持續すればするほど、累代の熟練を自己の手に蓄積することと多ければ多きほど、ますますヨリよきものとなるのである。『タイムズ』紙が木綿王に答へた一節に曰く——『エドマンド・ポッター氏は木綿製造業者たちの異常にして至高なる重要性に感銘した結果、この階級を維持し、その職業を永久化するため、五十萬の労働者をば強いて道徳的の一大貧民收容所に押し込めようとしてゐる。ポッター氏は問うて曰く、この職業は維持する値のあるものであるかと。我々は答へて曰く、然り、純潔なる一切の方法に依つてと。ポッター氏は再び問うて曰く、機械を整頓して置くことは、骨折り甲斐のあることであるかと。この場合には、我々は答へに躊躇する。ポッター氏が機械と謂つ

てゐるのは、人間機械のことである。彼れはこれを絶對的の所有物として取扱はんとするものでないと言つてゐるからである。我々は告白せねばならぬ、人間機械を整頓して置くこと、換言すれば必要の時までこれを幽閉し油を施して置くことが「骨折り甲斐のあること」だとは、我々は考へない。否、それが可能であるときさへも、我々は考へないのである。人間機械といふものは、如何に油を施したり磨いたりしても、活動しなければ錆るであらう。尙また、この機械は、我々が現に目撃した如く、任意に蒸氣を放ち、また大都市に於いて破裂したり狂亂したりするのである。ポッター氏の言ふ如く、労働者を再生産するには長期の時間を要するかも知れぬ。だが、我々は機械と資本とを持ち合はせてゐるので、いつでも節儉にして勤勉なる、忍耐力ある労働者を見出し、必要以上に多數の工場主のためこれを即時に供給し得るであらう(1)。注：ポッター氏は一年乃至三年を出でずして木綿製造業が復活すべきことを語り、労働者の国外移住を奨励又は許容(！)しないやうにと、我々に要求してゐる。労働者が移住を望むは極めて當然のことだと、彼れは言ふ。だが、彼れはまた曰く、この五十萬の労働者は、その七十萬の一家眷屬もともに、彼等の要求に逆ひこれを木綿製造地方に幽閉して置くべきであり、若し必然の結果として彼等の不満が現れた場合には、暴力を以つてこれを抑壓し、布施に依つて彼等の生存を維持し、斯くして他日、彼等が必要とするに至る機會を待つべきである。……この「労働力」を鐵や石炭や木綿などの如くに取扱はんとする人々の手から救ひ出すために、我國の大なる輿論が發動すべき時は既に來てゐるのである(15)と。

(15) 『タイムズ』紙、一八六三年三月二十四日號。

『タイムズ』紙のこの主張は、機智に富んだ言ひ廻しに過ぎなかつた。『大なる輿論』は寧ろ事實に於いて、工場労働者は工場 の動産的な附屬物であるといふ、ポッター君の見解と一致したのである。彼等は国外移住を阻止されて(16)木綿諸地方の『道徳的な貧民收容所』に幽閉された。而も彼等がランカシア州に於ける木綿製造業者の『強き力』となつてゐることに變りはないのである。

(16) 議會は国外移住のために鉅一文の支出をも可決せず、ただ労働者をば生死の境に繋いで置く權能、換言すれば標準賃銀を支拂はないで彼等を搾取するの權能をば、自治體に賦與する所の法律を通過したに過ぎぬのである。然るに、三年後に至り、牛疫が流行したとき、議會は亂暴にも慣例を破つて、百萬長者なる地主たちの損害を賠償するため、瞬く間に數百萬金の支出を可決した(此等の地主の下に立つ小作業者に至つては、さらに内に肉價昂騰のため損害を免れてゐたのである)。一八六六年の議會開始當時にあげられた地主たちの牛吼は、インド教徒たらずともサバラ牛神を禮拜し得ること、またジェ

ピター神たらずとも牛となり得ることを示してゐるのである。

要するに、資本制生産行程なるものは、それ自身の進行に依つて労働力と労働条件との分離を再生産し、斯くすることに依つてまた、労働者の搾取條件を再生産し永久化するに至るのである。資本制生産行程の下に於いては、労働者は生活のため絶えず労働力の販賣を餘儀なくされ、資本家はまた、富を得るため絶えず労働力の購買をなし得る位置に置かれるのである（十七）。資本家と労働者とが購買者と及び販賣者として商品市場に相對立するのは、もはや偶然の出來事ではなくなる。生産行程それ自身の上下戯板的な運動に依つて、労働者は労働力の販賣者として絶えず商品市場に投げ戻され、而して彼れの生産物はまた、絶えず資本家の購買要具に轉化されるのである。實際のところ、労働者は己れ自身を資本家に販賣する以前、すでに資本のものとなつてゐる。彼れの經濟的隷從（十八）は、彼れの自己販賣が週期的に更新され、個々の貸銀支拂主の顔觸れが換り、且つ労働の市場價格に變動がある等の事實に依つて、媒介されると同時にまた隠蔽されることにもなるのである（十九）。

（十七）『労働者は生活し得んがために生活資料を要求し、企業者は利潤を造り得んがために労働を要求した』（シスモンチ著『經濟新原論』第一卷、第九一頁）。

（十八）この隷從の農民的に蕪雜な一形態は、デウラム州に存在してゐる。イギリスには、四圍の事情の上から農業上の日傭労働者についての争ふべからざる所有權を小作農業者に確保して居らぬ州が幾個がある。而してデウラム州の如きは、その一である。鑛山業では、此等の農業日傭労働者に選擇の自由を與へてゐる。そこで、この州の小作農業者は、慣例に反して、労働者の宅住小屋が設けられてゐる處にのみ借地するやうになる。これらの小屋の賃借料は、賃銀の中から控除されるのである。これらの小屋は『僕令』¹³と呼ばれてゐる。それは一定の封建的義務の下に、賃貸されるのであつて、その契約は『ボンデー』¹³と呼ばれ、労働者が他に就業する如き場合には、娘などを代りに立て、勞役の義務を負はせるのである。労働者自身は『ボンドマン』¹⁴（隷農）¹⁴と呼ばれる。この關係はまた、左に掲ぐる如き全く新たな方面からも、労働者の個人的消費なるものが如何に資本のための消費（生産的消費）となるかを示すものである。即ち『このボンドマンの糞尿でさへも、如何に彼等の主人である打算的な小作農業者の餘祿となるかは、注目すべき事實である。……小作農業者は、自用のもの以外には附近を通じて一の便所を設けることをも許さぬ。彼等はその領主權の一部を失はんよりは、寧ろ庭園の此處彼處に糞尿を施させた方がいと考へてゐるのであらう』『公衆健康』第七報告、一八六四年、第一八八頁）。

（十九）幼童などの労働に於いては、自己販賣の形式でさへも消滅するに至ることは、我々の記憶する所である。

斯くの如く、資本制生産行程なるものは、これを關聯的の行程として、再生産行程として觀察するならば、單に商品を生産し餘剩價値を生産するといふのみでなく、また資本關係をれ自身をも、一方に於ける資本家と、他方に於ける賃銀労働者との雙方をも生産し再生産するものである(二十)。

(二十) 資本は賃銀労働を、賃銀労働はまた資本を前提する。兩者は互ひに條件となり、互ひに存在せしめ合ふものである。木綿工場に於ける労働者はただ木綿品だけを生産するものであらうか？ 否、彼れは資本をも生産するのである。即ち彼れ自身の労働について命令し、斯くすることに依つてまた、新たなる價値を造り出すに役立つ所の價値をも生産するのである』(拙著『賃銀労働と資本』新ライオン新聞、第二六六號、一八四九年四月七日)。(16)。この標題の下に『新ライオン新聞』紙上に發表した拙文は、同じ問題について私が一八四七年ブリュッセル市のドイツ労働者協會に試みた講演(その刊行は二月革命のため中絶するに至つた)の斷片なのである。

第二十二章 餘剩價値の資本化

(一) 規模の擴大されつつある資本制生産行程。商品

生産の所有律の資本制占有律への推轉。

餘剩價値が如何にして資本から生ずるかといふことは、曩に攻究を要した所であるが、これより資本が如何にして餘剩價値から生ずるかを攻究せねばならぬ。餘剩價値を資本として充用すること、換言すれば餘剩價値を資本に再轉化せしめること——これ即ち資本の蓄積——と呼ばれる所のものである(二十一)。

(二十一) 『資本の蓄積、即ち収入の一部を資本として充用すること』(マルサス著『經濟學の定義』ジョン・カゼノーヴェ版、第一一頁)。『収入の資本化』(マルサス著『經濟原論』第二版ロンドン、一八四六年刊、第三一九頁)。

先づ個々の資本家の立場から、この行程を觀察しよう。例へば、或る紡績業者が一萬磅なる資本を前貸して、その五分の四を棉花や機械などに投じ、殘餘の五分の一を勞銀に投じたとし、一年に一萬二千磅の價値ある二十四萬斤の綿絲を生産するものと假定する。餘剩價値の率が一〇〇パーセントであるとすれば、餘剩價値は綿絲四萬斤といふ餘剩生産物(純生産物)の中に存することになる譯であつて、これは總生産物の六分の一に該當する。この餘剩生産物の價値なる二千磅は、販賣に依つて實現される。二千磅といふ價値高は、二千磅といふ價値高である。この貨幣を見ても嗅いでも、それが餘剩價値であることは分らぬ。一の價値の餘剩價値たる性質は、その價値が如何にして所有者の手に來たつたかを示すけれども、價値又は貨幣の性質には何等の變化をも與へるものでない。

そこで、新たに追加されたこの二千磅といふ貨幣額を資本に轉化するためには、紡績業者は他の事情に變化なき限り、その五分の四を棉花その他の物の購買に前貸し、五分の一を新たな紡績労働者の購買に前貸するであらう。(而して此等の労働者は、紡績業者に依つて前貸されただけの價値ある生活資料を市場に見出すのである)。斯くして二千磅といふ新資本は紡績所に於いて機能を盡くし、これまた四百磅といふ餘剩價値を齎らすことになるのである。

資本價値は本來、貨幣形態を以つて前貸されたものである。然るに餘剩價値は最初から、總生産物の一部分の價値として

存在してゐる。この總生産物が販賣されて貨幣に轉化されるとき、資本價值はその本來の形態を回復する。と同時に、餘剩價值は本來の存在様式を變へてしまふのである。この瞬間以後、資本價值も餘剩價值も共に貨幣額となつて、兩者の資本への再轉化は全く同一の様式で行はれる。資本家はそのいづれをも商品の購買に支出するのであつて、斯く購買した商品に依り、彼れは新たに物品の生産を、更らに擴大された規模で開始し得ることになる。だが、この商品を購買するためには、それが市場に見出されることを要するのである。

彼れも亦、他の總べての資本家が夫々の商品についてすると同様に、年生産物を市場に送り出すのであつて、斯くするにあらざれば、彼れ自身の綿絲は流通するものでない。だが、此等の商品は市場に來たる以前、すでに年生産基金の一部として存在してゐた筈である。茲に年生産基金といふのは、個々の資本の總額たる社會的總資本が、一年間に轉化して行く凡ゆる種類の對象の總額を指すのであつて、各個の資本家は、單にその一部分だけを保有してゐるに過ぎぬのである。市場の取引なるものは單に個々の年生産組成分の轉換を行ふだけであつて、此等の組成分を一方の人の手から他方の人の手に移轉せしめるに過ぎず、年生産の總額を増大し得るものでもなければ、また生産された對象の性質を變更し得るものでもない。されば、年生産物の總額が如何なる方面に使用され得るか、この總生産物それ自身の組成の如何に懸ることであつて、決して流通の如何に懸ることではないのである。

年生産は先づ、一年間に消費された物的資本の成分を回復すべき一切の對象（使用價值）を供給するものでなくてはならぬ。此等の部分を控除した後に残るものが、即ち餘剩價值の存在形態たる純生産物であり餘剩生産物である。然らば、この餘剩生産物は如何なる物から成るか？ 餘剩生産物の中には、資本家階級の欲望や願望の充足用に定められた諸種の物が含まれてゐることは疑ひを容れぬ。此等の物は、資本家階級の消費基金に屬するものとなるのである。が、若しそれだけであるとすれば、餘剩價值なるものは餘す所なく享樂に消費されてしまつて、單純なる再生産が行はれるに過ぎなくなるであらう。

蓄積するためには、餘剩生産物の一部を資本に轉化せしめることが必要である。だが、奇蹟を行ふにあらざる限り、我々が資本に轉化せしめ得るものは、勞働行程に利用し得る如き物（生産機關）と、更らに、勞働者の生存に役立ち得る如き物（生活資料）とだけに限られてゐる。そこで、年餘剩勞働の一部をば、前貸資本の現物形態の回復に要するよりも以上に出づる追加的の生産機關及び生活資料の生産に充用することが必要となつて來る。一言以つてこれを蔽へば、餘剩價值なるものは、それを價值とする所の餘剩生産物が新たな資本の物的成分を豫め含むにあらざれば、資本に轉化され得るものではないのであ

(二十一 a) 輸出貿易なるものは一國の奢侈品を生産機關なり生活資料なりに轉化せしめ、また、その反對の轉化をも可能ならしめるのであるが、斯かる輸出貿易のことは、この場合措いて問はない。茲では、諸種の擾亂的な附隨事情から離れて、研究の對象を純粹に理解するため、商業上の世界總體を一國民と見做し、且つ資本制生産が到る處に確立されて、凡ゆる産業を征服せるものと假定せねばならぬ。

ところで、此等の物的成分をば、事實上資本として作用せしむるためには、勞働の追加をなすことが資本家階級にとつて必要である。既に使用中の勞働者に對する擔取が、外延的(時間的)にも内包的(能率的)にも最早増進されないとすれば、その場合には追加的の勞働力を採用せねばならなくなつて來る。このことも、資本制生産それ自身の機構に依つて處理される。蓋し資本制生産の下に於いては、勞働者階級は貨銀に倚存した階級として再生産されるのであつて、彼等の通常の貨銀は單に彼等の生存を確保するに足るのみではなく、また彼等の増殖を確保するにも足るからである。勞働者階級は年々種々なる年齢の追加勞働力を供給するのであつて、資本はただこれを豫め年生産中に含まれてゐる追加生産機關に合體せしめさへすればよい。それで餘剩餘値の資本化は、完成されることになるのである。具體的にいへば、蓄積とは畢竟するところ資本が累進的に擴大された規模を以つて再生産されることに外ならぬ。單純なる再生産の循環は變じて、シスモンデの謂はゆる螺旋形運動に轉化されるのである(二十一 b)。

(二十一 b) シスモンデは『收入の資本化』なる言葉に満足し過ぎて、この作用の物質的條件を探究するに至らなかつた。其處に彼れの蓄積分析の大缺點が存してゐるのである。

これより、上例に論を展さう。要するに、アブラハムはイサクを生み、イサクはヤコブを生み云々といふ昔物語に外ならぬのであつて、一萬磅といふ原資本が二千磅といふ餘剩價值を生み、これが資本に轉化されて、新たに四百磅といふ餘剩價值を生み、これがまた資本に轉化され、第二の追加資本となつて、八十磅といふ新たな餘剩價值を生むといふ風に、綿々と續いて行くのである。

茲では資本家の消費する餘剩價值部分は措いて問はない。また、追加資本が原資本に組み込まれるか、それとも原資本から分離され獨立した地步を以つて、價值増殖を遂げしめられるか、それが蓄積の衝に當つたその同じ資本家に依つて利用されるか、それとも他の資本家の手に移轉されるか、といふことも、今のところ我々の説明に關係のない問題である。ただ、原資本

も亦、新たに形成された資本と相竝んで、自己を再生産し餘剰價值を生産することを續けるといふ點、及びこの事實は如何なる蓄積資本から生じた追加資本についても同様に言ひ得ることであるといふ點だけは、念頭に置くことを忘れてはならぬ。

原資本は一萬磅の前貸に依つて形成されたものである。所有者は何處からそれを得て來たのであるか？ 彼れ自身並びに先祖たちの勞働に依つて——と、經濟學の代辯者たちは異口同音に答へる(二十一)。而してまた、これは實際のところ、商品生産の法則に一致する唯一の假定であるやうにも見える。

(二十一) 『彼れの資本を生ぜしめたものは即ち本來の勞働なのである』(シスモンデ著『經濟新原論』パリ版、第一卷、第一〇九頁)。

然るに、二千磅といふ追加資本については、全く趣きが異なつて來る。その發生行程は、全く正確に我々の知る所である。この資本は資本化された餘剰價值であつて、他人の不拂勞働以外の處から來た價值は、最初から一微分子もその中に含まれて居らぬのである。追加勞働力を併合する所の生産機關と、この勞働力を維持せしめる所の生活資料とは、資本家階級が年々勞働者階級から強取する所の貢賦たる餘剰生産物の組成部分に外ならぬ。資本家階級はこの貢賦の一部を以つて、勞働者階級から追加勞働力を十分の價格で購買し、等價を以つて等價と交換するとはいへ、而もそれは、征服者が被征服者から奪ひ取つた貨幣を以つて同一の被征服者から商品を買ひ取るといふ、舊來の遣り方と異なる所はないのである。

追加資本の下に就業せしめられるものが、この資本を生産した所の同じ勞働者であるとすれば、彼れは引續き原資本の價值を増殖せねばならぬ上に尙、過去に於ける自己勞働の生産物をばその生産に要した所よりもヨリ多大の勞働を以つて新たに購買せねばならなくなる。資本家階級全體と勞働者階級全體との間の取引として見れば、従前使用された勞働者の不拂勞働を以つて追加勞働者を使用するといふことは、問題の上に何等影響する所がないのである。資本家は追加資本をば、その生産者たる勞働者を驅逐し、若干の兒童を以つてこれに代はらしむる一機械の購買に充用することも出来る。以上いづれの場合にも、勞働者階級は或る一年の餘剰勞働を以つて、翌年に追加勞働を使用すべき資本を造り出したことになるのであつて(二十二)、これ即ち資本に依つて資本を造り出すと呼はれてゐる所のものである。

(二十二) 『資本が勞働を充用するに先だつて、勞働は資本を造り出すものである』(エドワード・ギボン・ウエーキフキールド著『イギリス及びアメリカ』ロンドン、一八三三年刊、第二卷、第一一〇頁)。

二千磅といふ第一の追加資本の蓄積の前提となつたものは、資本家に依つて前貸された所の、而して彼れの『本來の勞働』

の結果たるが故に彼れの所有に屬してゐた所の一萬磅といふ價值高である。然るに四百磅なる第二の追加資本の前提となつたものは、二千磅といふ第一の追加資本が豫め蓄積されてゐるといふ事實に外ならぬのであつて、その餘剩價値の資本化されたものが即ち右の四百磅なのである。過去に實現された不拂勞働の所有は、斯くして現在の生きた不拂勞働を益々大規模に占有すべき唯一の條件となる。資本家は過去に於いて蓄積したことが大なれば大なるほど、益々多く蓄積し得るのである。

斯く第一の追加資本を構成する所の餘剩價値は、原資本の一部を以つてする勞働力の購買（この購買は商品交換の法則に一致せるものであつて、これを法律的に觀れば、勞働者の側に於いては彼れが自身の能力を自由に處分するといふこと、貨幣又は商品の所有者側に於いては彼れが自己所有の價值を自由に處分するといふこと、この兩面の事實以外には何等前提する所がないのである）の結果であるとする限り、更に第二以下の追加資本は、第一の追加資本の結果であつて右の第一關係の歸結に過ぎぬとする限り、而して各個の取引は常に商品交換の法則に一致して行はれるものであつて、資本家は常に勞働力を現實的の價值通りに購買し、勞働者は常に勞働力を現實的の價值通りに販賣すると假定する限り、商品生産と商品流通とに基く占有又は私有の法則は、それ自身の内部に作用する不可避的の辯證的法則に依つて、寧ろ正反對のものに轉倒されることは明かである。本來の取引として現れた等價と等價との交換は、今や轉じて、交換の外觀のみを止めるに過ぎなくなる。蓋し第一に、勞働力と交換される所の資本部分は、等價を與へずして占有した他人の勞働生産物の一部に過ぎぬものであり、而して第二に、この資本部分は、その生産者たる勞働者に依つて代置されることを要するのみでなく、更に新たな餘剩生産物を加へて代置されることをも要するからである。斯くして資本家と勞働者との間の交換關係は、流通行程に屬する所の單なる外觀——内容それ自身とは無關係であつて、寧ろ内容を紛はしくするに止まる所の單なる形式に過ぎぬものとなつてしまふ。勞働力の不斷の賣買といふことは形式に過ぎず、等價を與へずして絶えず資本家の手に占有される所の對象化された他人の勞働の一部が、ヨリ多量な他人の活勞働と常に再交換されるといふことがその内容となつてゐるのである。所有權なるものは本來、自己の勞働に基くものとして現れた。少くとも、斯く假定することが必要であつたのである。蓋し相對立するものは權利の相等的しい商品所有者であつて、自己の商品を讓渡すること以外には、他人の商品を占有する手段はなく、而して自己の商品なるものは勞働を以つてするの外は得られぬからである。所有なるものは、今やこれを資本家の側についていへば、他人の不拂勞働なりその生産物なりを占有する所の權利として現れ、勞働者の側についていへば、彼れ自身の生産物を占有することの不可能として現れる。所有と勞働との分離は、本來雙方の一致に由來してゐる如く見える一法則の必然的の歸結となるのである。

(三十三)。

(三十三) 他人の労働生産物に對する資本家の所有は、『占有律の嚴密なる歸結であるが、この法則の根本原理は寧ろ、各労働者が自己の労働の生産物について絶對的の所有權を有してゐるといふことであつた』(アントアヌ・エリゼー・シェルビエリエ著「富か貧か」バリー、一八四一年刊、第五八頁、4)。だが、著者はこの辯證法的轉倒について、其處に妥當な説明を與へて居らぬ。

要するに、資本制占有方法なるものに、如何ばかり商品生産の本來の法則を面打する如く見えても、決してこの法則の違反から生ずるものではなく、寧ろ反對に、その適用から生ずるものである。これを明かにするためには、資本の蓄積に到らしむる運動の逐次的諸段階を溯つて一瞥しさへすればいい。

最初に一の價值高が資本に轉化されるのは、全く交換の法則に従つて行はれるものであることは、我々の先づ見た所である。交換者の一方は自己の労働力を販賣し、他方はそれを購買する。前者は彼れの商品の價值を受け、この商品の使用價值なる労働は斯くして後者に譲渡される。然る後、後者は斯く彼れの所有に屬するに至つた労働の助けに依つて、同様に彼れの所有に屬してゐる所の生産機關をば新たな生産物に轉化するのであつて、生産物も法律上當然、彼れの所有に屬することになるのである。

この生産物の價值に含まれるものは、先づ消費された生産機關の價值である。この生産機關は、その價值を新たな生産物に移轉することなくしては、有用労働に依つて消費され得るものでない。而して労働力なるものは、それが販賣可能のものとなるためには、その使用さるべき産業に於いて、有用労働を供給し得るものであることを要する。

新たな生産物の價值は更らに、労働力の價值に相當した價值と一の餘剩價值とを含む。これ蓋し、一日とか一週とかいふ如き一定の期間に互つて販賣された労働力は、同一の期間に於けるその使用に依つて造り出される所よりもヨリ小さき價值を有するが故である。而も労働者は、彼れの労働力の交換價值を受け、その使用價值を譲渡したことになるのであつて、この點は他の總べての賣買に於けると異なる所がない。

この特殊の商品労働力が、労働を供給して價值を造り出すといふ一種特別の使用價值を有するといふ事實は、商品生産の一般的法則の上には何等變化を生ぜしめるものでない。要するに、勞銀を以つて前貸された價值高が單に生産物の上に再現するといふのみでなく、その上に尙、一の餘剩價值を附け加へて現れるといふ事實は、販賣者を出し抜いて利得する結果ではなく

(販賣者はその商品の價值を受けるのであるから)、購買者がその購買した商品消費する結果に外ならぬのである。

交換の法則は、交換される商品の交換價值の相等しきことを必要とするに止まる。且つ此等の商品の使用價值が相異なつたものであることは、交換の法則が最初から前提する所である。而もこの法則は、購買品の消費については何等關係する所がない。それは賣買取引の終了後に、初めて開始されるのである。

斯くの如く、貨幣の本來の資本化は、商品生産の經濟的法則、及びそれから派生して來る所の所有權と嚴密に一致して行はれるものであるが、それにも拘らず、左の如き結果を生ぜしめるのである、

(一) 生産物は資本家の所有に屬するものであつて、勞働者の所有に屬するものではない。

(二) 生産物の價值は前貸資本の價值以上に尙、一の餘剩價值を含み、而してこの餘剩價值は勞働者にとつては勞働を要したものであるが、資本家にとつては何等要費する所なかつたものである。而もそれは、資本家の合法的な所有に歸してしまふのである。

(三) 勞働者は引續き勞働力を保有してゐて、購買者を見出した時には新たにこれを販賣し得る。

單純なる再生産とは、この第一の操作の週期的反覆に外ならぬものであつて、その都度、新たに貨幣を資本化してゆくのである。斯くして法則は破壊されることなく、寧ろ永久に發動する機會を與へられることになる。『多くの交換取引が順次に行はれるとき、最終の取引は最初の取引の代表とされるに過ぎぬのである』(二十三a)。

(二十三a) シスモンチ著『經濟新原論』第一卷、第七〇頁。

而も單純なる再生産は、この第一操作(貨幣の資本化)が個別的の取引として有する性質を根柢から一變してしまふに十分のものであることは、我々の既に見た所である。『國民的収入の分配に與かる人々の中、一方の者(勞働者)は新たな勞働に依つて、この分配に與かるべき新たな權利を年々取得し、他方の者(資本家)は本來の勞働に依つて、それに與かるべき永久の權利を豫め取得してゐる』(二十三b)。だが、長子權が奇蹟を行ふのは、單に勞働の領域だけでないことは、我々の知る所である。

(二十三b) 前掲、第一二二頁。

單純なる再生産が規模の擴大された再生産に依つて、蓄積に依つて、代置されたとしても、問題の上には何等影響する所がない。前者に於いては資本家は餘剩價值の全部を消費し、後者に於いてはその一部だけを消費して、殘餘の部分を資本に轉化

せしめ、斯くすることに依つて彼れの公徳を證示するのである。

餘剩價值は彼れの所有に屬するものであつて、決して他の何人の所有に屬するものでもない。彼れは、それを生産上に前貸するとき、初めて市場に入つた日に於けると全く同様に、彼れ自身の基金の中から前貸するのである。この基金が今や彼れの労働者の不拂労働から來ることになつたといふ事實は、問題の上に何等の變化を生ぜしめるものでない。Bなる労働者がAなる労働者に依つて生産された餘剩價值を以つて雇傭されたとした場合、第一にAはその商品の正當なる價格を鑑一文も減損されずして、この餘剩價值を供給したものであり、第二にこの取引はBの上には總じて何等關係する所なきものである。Bが要求する所の、また要求すべき權利を有する所の唯一の條件は、資本家が彼れに労働力の價值を支拂ふべきだといふ一點のみである。『それでも、雙方が利得することになる。即ち、労働者の方はその労働をなしたへるに先だつて（その労働が果實を結ぶに先だつて、と謂ふべきである）彼れの労働の（他の労働者の不拂労働の、と謂ふべきである）果實を前貸されたるが故に利得し、雇主の方はまた、この労働者の労働が支拂貨銀以上の價を有してゐるが故に（支拂貨銀の價值よりも大なる價值を生産せるが故に、と謂ふべきである）利得することになるのである』（二三三c）。

（二三三c）前掲、第一三五頁。

資本制生産をその更新の間斷なき流動の上から觀察し、個々の資本家、個々の労働者ではなく、總體たる資本家階級及びそれと對立せる労働者階級を念頭に置くとき、問題の趣きが一變して來ることは確かである。だが、この場合には、商品生産とは全く無關係なる一標準を適用したことになるであらう。

商品生産に於いては、販賣者と購買者とが互ひに獨立して相對立するだけであつて、彼等の相互關係は彼等の間に締結された契約が満期となつたとき終了するのである。この取引が反覆されるのは、従前の契約とは何等關係することなき新たな契約の結果であつて、この場合従前と同一の購買者が同一の販賣者と再取引することがあるとしても、それは單なる偶然的作用に外ならぬのである。

そこで、商品生産又はその領域に屬する一の取引をば、それ自身の經濟的法則に従つて判斷せんとする場合には、各交換行為をそれに前後した交換行為との凡ゆる關聯から引き離し、それ自身として考察することが必要となつて來る。而して賣買なるものは個々人の間に取引されるものであるから、賣買の中に總體としての社會階級對社會階級の關係を求むるのは許し難いことである。

今日機能しつつある資本は、過去に於いて如何に長き週期の再生産と先行蓄積との系列を通過して来たものであるにしろ、常に本来の處女性を維持してゐる。個別的に觀察した各交換行爲の上に交換の法則が適用される限り、商品生産に準應した所有權に何等影響する所なくして、占有方法の上に全くの革命が生じ得る。社會的の富をば益々甚しく、絶えず新たに他人の不拂勞働を占有し得る位置に在る人々の所有に歸せしめる所の資本制時代に於いても、この所有權が依然として有效となつてゐることは、生産物が生産者自身の所有に歸し、而して生産者は等價を以つて等價と交換しつつ、ただ己れ自身の勞働に依つてのみ富を與へられ得るに過ぎなかつたといふ初期の時代に於けると異なる所はないのである。

而して斯ういふ結果は、勞働者自身が勞働力をば商品として自由に販賣するやうになるや否や、避け難き所となつて來る。が、同時にまた、その時以後初めて商品生産は普遍化され、標本的の生産形態となり、その時以後初めて各生産物は最初から販賣を目的として生産され、一切の生産された富は流通を通過することになるのである。賃銀勞働を基礎とするに至つたとき茲に初めて商品生産なるものは全社會の上に強要されることになり、初めてその一切の隠れたる力を發揮するのである。賃銀勞働が介在して來たため、商品生産は不純のものとなされるやうになつたと言ふのは、これ取りも直さず、商品生産は不純のものとなれないためには發展してはならぬと言ふに等しい。商品生産がそれ自身の内在的法則の上から資本制生産となるに比例して、商品生産の所有律は資本制占有の法則に轉化されるのである(二十四)。

(二十四)そこで、商品生産の永久的所有律を主張することに依つて資本制所有を廢除しようとしたブルドーンの狡猾さを嘆賞せよ！

單純なる再生産に於いても、一切の前貸資本は、本來それが如何にして獲得されたものであるにしろ、蓄積された資本に、資本化された餘剩價値に轉化されることは、曩に述べた所である。だが、生産の流れに於いては、最初に前貸された如何なる資本も、これを直接蓄積せられた資本(換言すれば、蓄積した人の手の中で作用すると、他の人の手の中で作用するに至るとを問はず、兎にかく資本に再轉化された餘剩價値又は餘剩生産物)に比すれば、一の極少量(數學上の零に近い數量)となつてしまふことを常とするのである。そこで、經濟學の上では一般に、資本のことを『新たに餘剩價値の生産に利用される所の一(二十五)』『蓄積された富』(轉化された餘剩價値又は收入)といひ、資本家のことを『餘剩生産物の所有者』(二十六)といつてゐる。現存してゐる一切の資本を以つて、蓄積され又は資本化された利子であるとする見解は、同一の内容を異つた形に言ひ現したものに過ぎぬ。利子とは、餘剩價値の一斷片に外ならぬからである(二十七)。

(二十五) 『資本とは、利潤を目的として充用される所の蓄積された富を謂ふ』(マルサス著『經濟原論』第二六二頁)。「資本は……收入の中から貯蓄され利潤を目的として利用される所の富より成るものである」(リチャード・ジョンズ著『經濟學序講』ロンドン、一八三三年刊、第一六頁)。

(二十六) 『餘剰生産物即ち資本の所有者』(匿名者著『國民的難局の原因及び救済』ジョン・ラッセル卿への一書』ロンドン一八二一年刊)。

(二十七) 『資本は、貯蓄された資本の各部分が齎らす複利を以つて驚くべき程度に膨大されてゐる。それで、世界に於ける所得の源泉たるべき一切の富は、既に久しき以前から資本利子の蓄積されたものに外ならなくなつてゐるのである』(『ロンドン・エコノミスト』誌、一八五九年八月十九日號)。

(二) 規模の擴大されつつある再生産に關する經濟學上の謬想

これより蓄積(即ち餘剰價値の資本への再轉化)について、尙立ち入つた分析を與へようとするのであるが、その前に一應、正統派經濟學に依つて案出された一の曖昧を排除して置かねばならぬ。

資本家が餘剰價値の一部を以つて彼れ自身の消費のために購買する所の商品は、彼れの生産機關及び價値増殖要具として役立つものではないが、それと同様に、彼れの自然的並びに社會的欲望を充足せしむるために購買する所の勞働も、生産的勞働たるものではない。この商品及び勞働の購買に依つて、彼れの餘剰價値は資本に轉化されるのではなく、寧ろ收入として消費され又は支出されることになるのである。舊來の封建貴族は、ヘーゲルが適切に言つてゐる如く『自己の手にある物を消費してしまひ』殊に家臣屬從の豊かなることを得々としてみたものであるが、斯ういふ傾向に反對して、資本の蓄積は市民たるものの第一義務であるとなし、而もこの蓄積は、費用に比してヨリ多くを齎らす所の追加的生產勞働者を雇備するため、收入の可なりな部分を支出する處にのみ行はれるのであつて、收入の全部を消費してしまふ處には行はれ得るものでないと、倦む所なく説教するのは、ブルジョアの經濟學にとつて決定的に重要なことであつた。他方にまた、ブルジョアの經濟學は、資本制生産を貨幣退藏と混同する所の俗見(二十八)と、換言すれば蓄積された富とはその既存の現物形態の破壊たる消費を免れた富であり、隨つてまた流通の内部に投せられることなき富であると想像する俗見と闘はねばならなかつた。即ち貨幣を流通から排除することは、これを資本として利用することは全く反對であつて、貨幣退藏の意味に於ける商品蓄積なるものは純粹

の迂愚に過ぎぬとするのである(二十八 a)。大量の商品蓄積は寧ろ、流通の停滞なり過剰生産なりの結果であるとする(二十九)。右の俗見が、一方には、富者の消費基金として蓄積され徐々に消費される所の財貨といふ現象に依つて影響を受け、他方にはまた、凡ゆる生産方法に共通の一現象たる在庫準備品の形成といふ事實(これについては、流通行程の分析を與へる際一寸述べる)に依つて影響を受けてゐることは確かである。

(二十八)『現時の如何なる經濟學者も、貯蓄を以つて單なる退藏の意味に解し得るものはない。而してこの局限された不十分な行爲を指して問はないとすれば、右の貯蓄といふ言葉は、國民的の富についてただ一つの意義を有するのみである。即ち、それは貯蓄物の利用の差異に係るものであつて、この差異はまた、貯蓄物に依つて維持される労働の種類に依りて異なる』(マルサス著『經濟原論』第三八及び三九頁)。

(二十八 a) 例へば、バルザックがさうであつた。彼れは凡ゆる色合ひの貧慾を根本的に研究し、老高利貸のゴブセックが蓄積品を退藏し始めたことを以つて、老耄の致す所であるとしたり。

(二十九)『資本の蓄積……交滞の停滞……過剰生産』(トマス・コアベット著『個人の富の原因及び態様に關する研究』ロンドン、一八四一年刊、第一四頁)。

斯くの如く、正統派經濟學は不生産的労働者ではなく生産的労働者に依る餘剰生産物の消費を以つて蓄積行程の特徵的要素なりとし、これを強調してゐるのであるが、それだけの限りに於いて、正統派經濟學の謂ふ所に當を得てゐる。と、同時にまた、この點から正統派經濟學の誤謬が發足してゐるのである。蓄積とは、生産的労働者に依る餘剰生産物の消費に外ならず、餘剰價値の資本化とは、餘剰價値を労働力に轉化することに過ぎぬとする見解を流行せしめたものは、アダム・スミスであつた。

一例として、リカルドの謂ふ所を聽かう。彼れは曰く『一國の生産物が全部消費されてしまふことは、我々の認めねばならぬ所である。けれども此等の生産物が、他の價値を再生産する所の人々に依つて消費されるか、それとも斯様な價値を再生産することなき人々に依つて消費されるかといふことから、非常な差異が生じて来る。収入が貯蓄されて資本に組み込まれるといふのは、斯く資本に組み込まれると見做される収入部分が、不生産的労働者ではなく生産的労働者に依つて消費されるとの意味である。消費されないことに依つて資本が増殖すると假定することよりも以上に、大きな誤謬はないのである』(三十)。

(三十) リカルド著『經濟原論』第三版ロンドン、一八二一年刊、第一六八頁、註。

リカルド及び彼れ以後に於ける一切の經濟學者がアダム・スミスから倣ひ覺えた所の、『斯く資本に組み込まれると見做される収入部分は生産的勞働者に依つて消費される』といふ見解以上に、大きな誤謬はないのである。この見地からすれば、資本に轉化される一切の餘剩價値は可變資本となる譯である。が、事實は寧ろ、この餘剩價値も亦、最初に前貸された價値と同じく、不變資本と可變資本とに、生産機關と勞働力とに分割されるのである。勞働力とは、可變資本が生産行程の内部に存在する所の形態であつて、この行程の内部に於いては、勞働力それ自身が資本家に依つて消費される。而して勞働力はまた、その機能たる勞働を通して生産機關を消費するのである。と同時に、勞働力の購買に支出された貨幣は『生産的勞働』といふよりも寧ろ『生産的勞働者』に依つて消費される所の生活資料に轉化される。アダム・スミスは、根本に於いて歪められた一の分析に依つて、次の如き馬鹿々々しい結論に到達してゐる。即ち、各個の資本は不變分と可變分に分割されるとはいへ、社會的の資本は可變資本にのみ歸著するものであつて、勞銀の支拂にのみ支出されるといふのである。例へば、或る毛布製造業者が二千磅を資本に轉化するとして、この貨幣の一部は機械工の購買に、殘餘の部分は毛織絲や毛織機械などの購買に投せられると假定する。然るに、毛織絲や機械を彼れに販賣する所の人々も亦、賣上げ貨幣の一部を以つて勞働の代價を支拂ふといふ風に、この關係が綿々と續いて、遂には二千磅の全部が勞銀の支拂に支出され、二千磅の代表する生産物の全部が生産的勞働者に依つて消費されるに至つたとする。この論旨の全神髓は『と、いふ風に……續いて』といふ一語に存するのであつて、それからそれれへと資本家を辿つてゆくといふ以外に意味のないことは、我々の見る所である。實際のところ、アダム・スミスは、恰度困難の始まる處で研究を打ち切つてゐるのである(三十一)。

(三十一) ジオン・スチュアート・ミルは、『論理學』の著者なるにも似ず、ブルジョアの眼界の内部に於いても純専門的の立場から訂正を要する所の、先行學者たちの斯かる錯誤的分析を看破するに至つて居らぬ。彼れは何處に於いても門弟的のドグマチズムを以つて師匠の思想混亂を登錄してゐる。この場合にも亦『資本それ自身は終局に於いて悉く賃銀に歸著してしまふ。それは生産物の販賣に依つて回收されるとはいへ、更らにまた賃銀に再轉化されるものである』といつてゐる。

年生産の總額といふことだけを念頭に置く限り、年々行はれる再生産の行程は容易に理解し得る所である。だが、年生産の如何なる部分も商品市場に送り出されねばならぬものであつて、其處に困難が始まるのである。個々の資本と各人の手に歸する収入との運動は、互ひに交錯し混淆して社會的富の流連といふ一般的の位地轉換に消え入つてしまひ、これがため我々の目は惑亂させられて、解決を要すべき極めて錯雜した問題が研究上に提出されることになるのである。現實に於ける事實關係の分

析は、本書第二部（第二卷）第三篇の中に與へる。——フキジオクラット派はケネーの『經濟表』⁽⁸⁾の中で、流通を通過したつた形態に於ける年生産を描寫せんとする最初の企圖をなしたものであるが、これは彼等の偉大なる功績となつてゐるのである（三十二）。

(三十二) 再生産行程隨つてまた蓄積の説明に於いては、アダム・スミスは彼れの先行學者、就中フキジオクラット派に比して、種々なる方面に何等の進歩をも遂げなかつたのみでなく、寧ろ確たる退歩を示してゐるのである。本文に掲げた彼れの幻想と關聯して、いま一つ、彼れが經濟學の上に遺した寔に荒唐無稽な教理がある。それは即ち、商品の價格なるものは、勞銀と利潤（利子）及び地代とから、換言すれば、勞銀と餘剩價值とのみから成るといふ説である。この基礎から出發して少なくともストルヒだけは素朴に白狀してゐる。曰く『必要價格をその最も單純な要素に分解せしめることは不可能である』（ストルヒ著『經濟學教課』ペテルスブルグ版、一八一五年刊、第一卷、第一四〇頁註⁽⁹⁾）。商品の價格をその最も單純な要素に分解せしめることが不可能であるとすると、何と美しい經濟科學であるよ！これについての詳細は本書第三部（第三卷）第二篇第三節及び第七篇の中に究める。

尙また、純生産物中の資本に轉化される部分は悉く勞働者階級に依つて消費されるといふアダム・スミスの主張をば、經濟學が資本家階級のために利用するを誤まらなかつたことは、自明の事實である。

(三) 餘剩價值の資本及び收入への分割。節慾説

我々は餘剩價值又は餘剩生産物をば、前章に於いては資本家の個人的消費基金に過ぎぬものとして、また本章上段に於いては單なる蓄積基金に過ぎぬものとして取扱つて來た。だが、餘剩價值といふものは、單に前者だけでもなければ、後者だけでもなく、寧ろ兩者を兼ねてゐるのである。資本家は餘剩價值の一部をば收入として消費し（三十三）、殘餘の部分をば資本として充用又は蓄積するのである。

(三十三) 收入といふ言葉が二重の意義に使用されることは、讀者の認める所であらう。即ちそれは第一に、資本から週期的に生ずる所の果實たる餘剩價值を意味し、第二に、この果實の中、資本家に依つて週期的に消費され又は彼れの消費基金に組み込まれる部分を意味するものである。私も、この兩面から收入といふ言葉を使用する。それは英佛兩國に於ける經濟學者の用語法と一致してゐるからである。

餘剩價値の量が與へられてゐるとすれば、以上兩部分の一方が小なれば小なるほど、他方は益々大となる。他の一切の事情に變化なき限り、この兩部分に分割される比率の如何に従つて、蓄積の大小が決定されるのである。だが、この分割を行ふものは、餘剩價値の所有者たる資本家である。即ち、この分割は資本家の有意行爲となつてゐるのである。資本家がその徴收した貢賦の一部を蓄積するのは、彼れがこれを消費しないで貯蓄し、換言すれば資本家たる職分を、即ち富裕になるといふ職分を盡すために貯蓄するからだと言はれてゐる。

資本家は人格化された資本たる限りに於いてのみ、一の歴史的價値と、かの機智あるリヒノズキーの言つた如き日附なしではない歴史的の存在權とを有するものである。ただこの限りに於いてのみ、彼れ自身の經過的必然は資本制生産方法の經過的必然の中に含まれてゐる。だがまた、この限りに於いて、使用價値及び享樂ではなく、交換價値とその増殖とが、資本家の起動動機となるのである。資本家は價値増殖の狂熱的な渴望者として、顧慮する所なく生産のための生産を人類に行はしめる。斯くして社會的の生産力は發展せしめられ、各個人の完全にして自由なる發展を根本原理とする所の、ヨリ高級な社會形態の唯一の現實的基礎たり得べき物質的生產條件が造り出されることになるのである。資本家は單に資本を人格化したものといふ意味に於いてのみ尊重に値するものである。彼れはこの資格に於いて、貨幣蓄積者と共進の絕對的致富衝動を興へられる。けれども、貨幣蓄積者に於いて個人的の狂想として現れる所ものは、資本家に於いては彼れを一の推進車として含む社會的機構の作用となるのである。尙また、資本制生産が發達するにつれて、産業上の一企業に投すべき資本を不斷に大ならしめることが必要となつて来る。而してまた競争は、資本制生産方法の内在的法則をば外部的の強制律として個々の資本家に課してゆくのである。資本を維持せんがためには、資本家は競争上絶えずますますこれを擴大せねばならなくなる。而してこの資本擴大は、累進的の蓄積を以つてする外は行ひ得ないのである。

斯くの如く、資本家の一舉手一投足が、彼れを通して意志と意識とを賦與された資本の機能に過ぎぬ限り、彼れ自身の私消費は彼れの資本の蓄積に對する盜掠とされる。これ恰も、イタリーの複式簿記に於いて、資本家の私支出が彼れの資本に對する借方に記入された如くである。蓄積とは社會的富の世界を征服することであつて、それは被搾取人間材料を大ならしめると同時にまた、資本家の直接間接の支配をも擴大することになるのである(三十四)。

(三十四) 高利貸附業者なるものは、舊式にして而も不斷に更新される所の資本家形態であるが、ルーテルはこの高利貸附業者について、權勢慾は致富衝動の要素であるといふ極めて適切な説明を與へてゐる。彼れは曰く『異教徒は理性の光りに依

つて、高利貸附業者なるものが四重の盜賊であり殺人者であるとの結論に達し得た。然るに、我等キリスト信徒は、彼等を尊敬し、彼等の有する貨幣のために彼等を禮拜してゐる。……他人の榮養を吸ひ盡し、強奪し、盜掠する者は、人を餓死せしめ、又は全く破滅せしめると同一の大きな殺人罪を犯すことになるのである。高利貸附業者は斯かる大罪を犯してゐるのだ。彼等は自ら絞首臺上の人となるべきであり、その盜掠せる金貨の數ほどの鴉に依つて啄ばまるべきであるのに（そんなに澤山の鴉に啄ばみ得るほどの肉が彼等の身に存在してゐる限り）安閑として床机に坐してゐる。而も斯かる間に小盜は繰られるのである。……小盜は枷を拵められてゐるのに、大盜は黄金と絹を著けて得々としてゐる。……されば、この世には、守錢奴や高利貸附業者に優る人類の大敵（惡魔に次いで）はないといふことになる。彼等は一切の人類に對して神たらんとしてゐるからである。トルコ人や、武人や、暴君なども、惡人であるには違ひないが、彼等は人民に生活を與へねばならず、且つ己れの惡人たり人類の敵たる所以を認めてゐるのである。尙また彼等は、時々幾許かの人々に對して同情を示し得るし且つ示さねばならぬのである。然るに、高利貸附業者や貪慾者は、力の及ぶ限り全世界を飢餓窮乏の淵に陥らしめて一切の物を己れの有となし、神の如き位置に立つて人に物を授け、人は永へに彼等の奴隸とされてしまふのである。彼等は美しき外套や、黄金や、鑽や、指環を身に著け、口を拭つて高貴なる敬虔者を裝はうとする。……彼等は人狼のやうな恐るべき大怪物であつて、凡ゆる物を劫掠することカクスやゲリオンやアンテウスにも優るのである。而も彼等は身を裝ひ篤信家らしく見せようとする。斯くして彼等の洞窟に引き還へされた牝牛が何處に行つたか、それは世人には分らなくなつてしまふ。けれども男者ヘルクレスは、牝牛と囚はれ人の叫びを聴きつけ、斷崖や巖石の間にカクスを捜し出し、牝牛を兇漢の手から解放してやるであらう。カクスとは、敬虔を裝ふ高利貸附業者のことであつて、一切の物を盜み喰ふ兇漢を意味してゐるのである。彼れはこの惡事を働く者が自分であることを白狀しようとはせず、何人にも捜し出されないと信じてゐる。洞窟に引き還へされた牝牛は、その足跡に依つて既に解放されたかの如く信ぜしめるからである。高利貸附業者も同様に、みづから有用なるものであつて世に牝牛を與へたかの如く（その實、一切の牝牛を獨占し自分ひとりで喰つてしまふのであるが）信ぜしめようとする。……苟くも追剥や、殺人者や、強盜などを車刑にしたり刎首したりするからには、凡ゆる高利貸附業者をば車刑にし、殺し……追捕し、呪咀し、刎首すべきであるは、尙更らることであらう（マルチン・ルーテル著『高利貸附業者に反對すべく、僧侶等へ』ウキッテンベルヒ、一五四〇年刊）。

だが、原罪は到る處に作用してゐる。資本制生産方法と、蓄積と、富とが發展するにつれて、資本家はもはや人格化された

資本といふだけの者ではなくなる。彼れは己れ自らのアダムに對して『人情のどよめき』を感じ、禁慾の熱中を舊式な貨幣蓄藏者の僻見として嘲笑するやうになつて来る。古典的の資本家は、個人的消費をば自己の職分に對する罪惡として、また蓄積の「抑制」として烙印したのであるが、近世化された資本家は、蓄積を以つて享樂衝動の「節制」と見做し得るやうになつたのである。『ああ彼れの胸には、互ひに分かたれんと欲する二つの靈が宿つてゐる！』

資本制生産方法の歴史的初期（それは成上りの各資本家に依つて個別的に通過されるのであるが）に於いては、致富衝動と貪慾とが絶對的の慾情として支配してゐるのであるが、資本制生産が進むにつれて、單に享樂の新たなる世界が造り出されるのみでなく、更らに投機や信用制度が生じて、突如たる致富を興ふべき幾多の源泉が開發されることになる。一定の發展段階に達すると、従來富の展示たると同時にまた信用を得るための手段ともなつてゐた世間並みの驕奢は、今や『不運なる』資本家の營業上の必要となつて来る。奢侈は資本の代表費用の一部を占めるやうになるのである。さらでだに資本家は、貨幣蓄藏者の如く己れ自身の勞働と私消費の節約とに比例して富裕となるものではなく、寧ろ他人の勞働力を吸收し、勞働者に一切の生活享樂の抑制をなさしめる程度に比例して、富を積むやうになつてゐるのである。斯くの如く、資本家の驕奢は決して、かの拘束される所なき封建君主の驕奢に見るやうな天真爛漫な性質を有するものではなく、寧ろその背後には、常に不潔極まる貪慾と氣遣はしげな打算とが伏在してゐるとはいへ、而も彼れの驕奢は蓄積と共に増大するものであつて、必ずしも一方が他方を制限するに至ることを要しないのである。以上の經過と共にまた、資本個人の突つ張つた胸の内には、蓄積衝動と享樂衝動とのフアウスト的衝突が展開して来るのである。

ドクター・ジョン・エーキンは、一七九五年に刊行した一書の中に曰く『マンチェスターの工業は四期に區分することが出来る。第一期に於いては、工場主たちは生活のために激しく勞働せねばならなかつた。當時、彼等は主として、自己の子女をば徒弟として彼等に預けた父母たちからの盜掠に依つて富を得てゐた。子女を徒弟とするには、多額の謝禮を拂はねばならなかつたのである。而も徒弟に採用された子女は、飢餓に委ねられるといふ有様であつた。他方にまた、當時平均利潤は低く、蓄積するには非常な節儉を要したのである。工場主は貨幣蓄藏者の如く生活してゐて、なか／＼資本の利子を消費するどころでさへなかつたのである。』第二期に入つて、彼等は漸く小財産を有し始めたが、それでも矢張り従前と同様に激しく勞働してゐた。蓋し總べての奴隸使役者が知る如く、勞働の直接の搾取には勞働を要するからである。『而して彼等は従前の如く質素に生活してゐた。』第三期に入つて、奢侈が始まつた。國內の各市場都市に騎馬の註文取を派遣して、營業を擴大した。工

業から得た資本で三千乃至四千磅に及ぶものは、一六九〇年以前には殆んど、或は全く、存在して居らなかつたらしく見える。然るにこの頃から、或は少し後になつて、工業家たちは既に貨幣を蓄積してゐた。彼等はこれを以つて、木造や漆喰塗の家の代りに近代式の石造建を作り始めたのである。……十八世紀初葉に於いても、マンチェスターの工場主で一ポイントの外國製葡萄酒を來客に進めるものは、近所中の噂や警戒の的となる程であつた。機械が現れて來る以前、工場主が庶亭の集會に支出する一夕の費用は、一杯のボンズ水六片と、一卷きの煙草一片とを超過せることは決してなかつた。一七五八年は新たな時代を劃してゐるのであるが、この年初めて『實際營業に従事してゐる人々の間に、自分自身の馬車を有するものが一人』見られた。「第四期（十八世紀最終の三十年代）」には營業が擴大されて、奢侈と濫費が甚しく進んで來た（三十五）。若しこの善良なるドクター・エーキンを今日マンチェスターに甦へらしたならば、彼れは果して何と言ふであらう！

（三十五）ドクター・ジョン・エーキン著『マンチェスター周圍三十哩乃至四十哩地方の描述』ロンドン、一七九五年刊、第一八二頁以下（10）。

蓄積せよ、蓄積せよ！ これ、モーゼともろくの預言者たちである！ 『資本蓄積の直接の原因となるものは、節約であつて、勞働ではない。勞働は節約に依つて蓄積される所の材料を供給するに過ぎぬ』（三十六）。故に貯蓄せよ、貯蓄せよ！ 語を換へていへば、餘剩價值又は餘剩勞働の出來得る限り大部分を資本に再轉化せよ！ 蓄積のための蓄積、生産のための生産——この公式を以つて、正統派經濟學はブルジョアの時代の歴史的使命を言ひ現したのである。富の産みの苦しみについては正統派經濟學は瞬時も見ると誤まつたことがない（三十七）。だが、歴史的必然の前に哀傷が何にならう！

（三十六）アダム・スミス著『富國論』第三部、第三章。

（三十七）ジャン・バチスト・セーでさへも言つた。「富者の貯蓄は貧者を犠牲にしてなされるものである」と。『ローマのプロレタリアは殆んど全く社會を犠牲にして生活してゐた。……近世の社會はプロレタリアを犠牲にして、プロレタリアの勞働の收益中から奪つた所のものを以つて、生活してゐるとも言ひ得やう』（シスモンデ著『經濟學研究』第一卷、第二四頁）。

正統派經濟學から見れば、プロレタリアとは餘剩價值を生産する機械に過ぎぬのであるが、資本家も亦、この餘剩價值を餘剩資本に轉化せしめる所の機械に外ならぬものである。

正統派經濟學は、資本家の歴史的職分を極めて眞剣に取扱つてゐる。資本家の胸中を享樂的衝動と致富的衝動との忌ほしき衝突から安全にするため、十九世紀二十年代の初葉にマルサスが一種の分業を擁護した。それは即ち、現實に於いて生産に従

事してゐる資本家には蓄積の任務を擔はせ、餘剩價値の分配に與かる他の人々たる土地貴族や、國家又は教會からの受祿者たちには濫費の任務を擔はせるといふのである。彼れは曰く『支出の欲情と蓄積の欲情とを分離させて置くことは』極めて重要なことである(三十八)と。既に久しくこの世の享樂兒と化してゐた資本家諸君は絶叫した。彼等の代辯者の一人なる或リカルド論者は叫んで曰く、マルサス君が高率の地代や租税を説教するのは、これ畢竟する所、不生産的消費者からの不斷の刺戟を産業者の上に強捺せんがためである！勿論、生産といふことが、ます／＼大規模に進む所の生産といふことが、彼れの標榜となつてゐることは事實である。けれども『斯かる方法に依つて生産は促進されるといふよりも、寧ろ遙かにヨリ甚しく阻止されることになるのである。尙また、性格の上から見て仕事をさせれば恐らく好結果を擧げ得るであらうと考へられる一群の人々をば、斯く他人をいたぶらせんがためにのみ無爲に生活させて置くことは、決して眞に公正な處置とはいへないのである(三十九)。彼れは、斯く御馳走の正味を奪ひ取ることに依つて産業資本の蓄積を刺戟せんとするは公正な處置でないと見たのであるが、然し労働者を『勤勉ならしむるためには』賃銀を出來得る限り最低限度まで節減することが必要であると考へたのである。彼れはまた、餘剩價値獲得の祕密は不拂労働の占有に在ることを隠しも隠蔽しなかつた。『労働者の側に於ける需要増加とは、要するに彼等がその生産物の中から己れ自身のために少なく取り、ヨリ大なる部分を雇主の手に委ねんとすることに外ならぬ。で、若し斯くする時は、消費(労働者の側に於ける)の縮小に依つて過充(市場過充、過剰生産)を生ぜしめることになる』と言ふ者があるとすれば、私はただ、過充は大なる利潤と同意義だと答へ得るのみである(四十)。

(三十八) マルサス前掲、第三一九及び三二〇頁。

(三十九) 匿名者著『需要の性質に關する原理の研究』第七六頁下。

(四十) 前掲第五〇頁。

労働者から汲み取つた産物を如何にして産業資本家と無爲なる土地所有者その他との間に分割することが、蓄積の上に最も有利であるかといふ學者的論争は、七月革命(一八三〇年)の面前に鳴りを鎮めてしまつた。それから間もなく都市のプロレタリアはリオンに警鐘を鳴らし、農村プロレタリアはイギリスに赤旗を翻した。海峡の此岸にはオーウエン主義、彼岸にはサン・シモン主義とフリエー主義とが猖獗を極めた。俗學的經濟學の寂滅を告げる鐘は既に鳴つてゐたのである。ナソー・ウヰリアム・シーニョアが、資本の利潤(利子を含む)なるものは十二時間労働日の最終の不拂一時間の産物であるとの發見をマンチエスターでした恰度その一年前に、彼れはいま一つの發見を世に傳へたのであつた。彼れは儼かに曰く『私は生産器具の意

味に解した資本といふ言葉に換ふるに、節慾⁽¹²⁾といふ言葉を以つてする『(四十一)』と。俗學的經濟學に於ける『發見』の無比の標本！これ經濟學上の節慾に換ふるに、阿諛者的の文句を以つてするものである。それだけのこと。

(四十二) シーニョア著『經濟學論』アリヴァアアー佛譯、バリー一八三六年刊、第三〇八頁⁽¹³⁾。これは舊正統派の學徒から見ると、餘りに馬鹿々々しい主張であつた。『シーニョア君は勞働及び資本といふ言葉に換ふるに勞働及び節慾といふ言葉を以つてした。……節慾とは單なる否定に過ぎぬ。利潤の源泉たるものは、節慾でなく資本の生産的充用である』(ジョン・カゼノーヴェ編輯マルサス著『經濟學の定義』ロンドン、一八五三年刊、第一三〇頁編者註)。ジョン・スチュアート・ミル君は反對にリカルドの利潤説を反復しつつ、一方にシーニョアの『節慾報酬説』を採用した。彼れは凡ゆる辯證法の源泉たるヘーゲル流の『矛盾』については知る所なかつたが、平凡皮相の諸矛盾には極めて通曉してゐたのである。

第二版追加——如何なる人類行爲も反對の方面から觀察すれば『節慾』と考へられ得るといふ單純な思想も、俗學的經濟學者には決してなされなかつた。食事は斷食の節慾、歩行は佇立の節慾、勞働は怠惰の節慾、怠惰は勞働の節慾、等、等。此等の諸君は、試みにスピノーザの『斷定は否定なり』について熟考してみるのが宜からう。

シーニョアは教へて曰く『野蠻人は弓を造るとき、一の産業を行ふことは事實であるが、然し節慾をなすものでない』と。これ初期の社會狀態に於いては、如何にして、また何故に、資本家の『節慾なくして』勞働要具が造られたかを説明するものである。『社會が進むにつれて、ますます節慾(即ち他人の勞働とその生産物とを占有する所の産業をなす人々の側に於ける)が必要となつて来る』(四十二)。斯くして勞働行程の凡ゆる條件は、資本家側に於けるそれだけの數の節慾行爲に轉化されるのである。穀物を食ふのみでなく、更らに蒔くといふこと、それも資本家の節慾！葡萄酒に醗酵の時間を與へるといふこと、それも資本家の節慾！(四十三)。資本家が、『生産機關を勞働者に貸與する』とき、換言すれば蒸氣機關や、棉花や鐵道や、肥料や、輓馬などを己れ自ら食ひ盡してしまはないで(俗學的經濟學のあどけなき言ひ現しを藉りていへば『此等の物の價值』を奢侈品やその他の消費資料に蕩盡してしまはないで)寧ろ勞働力の併合に依りこれを資本として利用するとき、彼れは己れ自身のアダム(欲望)を奪ひ去つたことになるのである(四十四)。資本家階級は如何にしてこれを行ふか、それは今日に至るまで俗學的經濟學が執拗に秘してゐた所の一祕密である。世界はヴィシユヌーの神前に於けるこの近世的苦行者たる資本家の難業に依つてのみ存在を維持してゐる、それで十分なのだ。ひとり蓄積のみでなく、また單純なる『資本保存の點から見ても、資本を消費しようとする誘惑に打ち克つたためには、不斷の努力を要するのである』(四十五)。この殉道と誘惑

との間から資本家を救ひ出さうとすることは、單純なる人道の命ずる所であつて、これ恰も奴隸制度の廢止に依つて、最近デオルチア州の奴隸所有者が、黑人奴隸から鞭うち取つた餘剩生産物の全部をシアンパン酒のために消費すべきか、それともその一部をヨリ多くの黒人と土地とに再轉化すべきか、との苦しき板挟みから救ひ出された如くである。

(四十二) シーニョア前掲、第三四二頁。

(四十三) 『ヨリ多くの價値が得られるといふことを期待せずしては、……何人も例へば小麦や葡萄酒、又は此等の物の等價を直接消費する代りに、寧ろ小麦を蒔いて十二ヶ月の間地中に保留したり、葡萄酒を數年間酒窖内に放置したりすることは、ないであらう』(『スクロップ著『經濟學』ポッター編、ニューヨーク、一八四一年刊、第一三三及び一三四頁)。

(四十四) 『資本家は彼れの生産機關を生活資料なり奢侈資料なりに轉化して、その價値を消費してしまふ代りに、寧ろこれを勞働者に貸與するのであるが(この婉曲な言ひ廻しは、俗學的經濟學の效驗請合ひな流儀に従つて、産業資本家の搾取を受ける賃銀勞働者をば、貨幣貸附資本家の債務者となつてゐる産業資本家自身と等位に置かため使用されてゐるのである)、これがため彼れはそれだけ不自由を忍ぶことになるのである』(ギュスタウ・ド・モリナリ著『經濟學研究』パリ、一八四六年刊、第四九頁)。

(四十五) クールセル・スヌウイユ著『産業的企業の學理及び實際論』第二版、パリ、一八四六年刊、第四九頁。

啻に單純なる再生産のみでなく、また程度は一樣ではないが、規模の擴大されつつある再生産も、種々なる經濟的社會形態の下に見出される。ます／＼多く生産され、ます／＼多く消費され、隨つてまた、ます／＼多くの生産物が生産機關に轉化されることになる譯である。けれども、生産機關や、隨つてまた生産物や、生活資料などが、資本の形態を以つて勞働者に對立して來ない限り、右の行程は資本の蓄積たるものではなく、隨つて資本家の職分として現れるものでもないのである(四十六)。數年前に物故したりチャード・ジョンズ(マルサスの後繼者としてハイレーブリー市東インド大學の經濟學講座を擔任した人)は、二つの大きな事實についてこの問題をよく論究した。インド民族の大多數は自營農民であるから、彼等の生産物、彼等の勞働要具や生活資料は、決して『收入の中から貯蓄された、隨つて蓄積の先行過程を通過した、基金の形では』存在して居らぬ(四十七)。他方にまた、イギリスの支配が舊來の制度を分解せしめたこと最も少ない諸地方で農業以外の方面に活動してゐる勞働者は、農業上の餘剩生産物の一部を貢賦又は地代として受ける所の大官たちに依つて直接使用されてゐる。この生産物の一部は現物形態のまま大官たちに依つて消費され、殘餘の一部は勞働者をして彼等大官たちの消費すべき奢侈品やそ

の他の消費資料に轉化せしめる。而してその他の殘餘分は、使用勞働器具の所有者たる勞働者の賃銀となるのである。即ちこの場合、生産と規模の擴大されつつある再生産とは、かの奇異なる聖者たり、悼ましき風貌の騎士たる「節慾的」資本家の介在し來たることなくして、行はれるのである。

(四十六) 『如何なる種類の所得が國民的資本の發達に貢獻すること最も多きかは、各種所得の進歩の段階につれて種々異なるものであり、随つてこの進歩の上に相異つた地位を占むる國民の如何に依つて、差異を生ずることになるのである。：：社會の初期の段階についていへば、利潤は賃銀や地代に比し、蓄積上の源泉としては左程重要でない。：：國民的産業の能力が幾許か増進したとき、利潤は蓄積の源泉として比較的重要なものとなつて來るのである』(リチャード・ジョンズ著『國民經濟講義教科書』ハートフォード、一八五二年刊、第一六及び二一頁) (16)。

(四十七) 前掲第三六頁以下。(第四版追加——この引抄は誤りに違ひない。こんな句は何處にも見出されないのである。——I. D. H.)

(四) 資本及び收入への餘剩價値の比例的分割から獨立して蓄積の大小を決定する所の諸事情——勞働力の搾取程度——勞働の生産

力——充用資本と消費資本との差の増進——前貸資本の大小

餘剩價値を資本及び收入に分割する所の比率が與へられてゐると假定すれば、蓄積資本の大小が餘剩價値の絶對量に準據することになるは、明かな事實である。八〇パーセントを資本化し、二〇パーセントを消費するとすれば、餘剩價値の總額が三千磅であるか一千五百磅であるかの如何に従つて、蓄積資本は或は二千四百磅となり、或は一千二百磅となるであらう。斯くの如く、蓄積の大小の決定には餘剩價値の量を決定する一切の事情が共に作用するのである。以下、此等の事情をば、蓄積上に新たな見地を提供する方面からのみ、いま一度概括することにしよう。

餘剩價値の率が先づ第一に勞働力の搾取程度に懸ることは、我々の記憶する所である。この役割は經濟學上極めて重要視されてゐるものであつて、勞働生産力の發達に因る蓄積速度の増進も、往々にして、勞働者搾取の増進に因る蓄積速度の増進と同一視されるといふ有様である(四十八)。勞銀が少なくとも勞働力の價値に等しくなければならぬことは、餘剩價値の生産を取扱つた諸章の中に絶えず假定した所である。だが、實際上の運行には、勞銀をこの價値以下に強いて低下せしめることが

極めて重要な役割を演ずるのであるから、以下この問題について暫らく考察することにする。この意味の勞銀低下は、事實上、一定の限界内に於いて勞働者の必要消費基金を資本の蓄積基金に轉化せしめるものである。

(四十八)『リカルドは曰く「社會の發達段階の如何につれて、資本又は勞働充用手段(換言すれば勞働搾取手段)の蓄積の速度には、大小の差が生じて來るのであつて、この蓄積は一切の場合を通じて、勞働生産力の如何に懸るべきものである。而して勞働の生産力なるものは總じて、豊富なる沃地の存する處に最大のものである」と。若しこの章句に於ける勞働の生産力といふ言葉が、生産物の中、手の勞働を以つてこれを生産した人の手に歸する部分が小であるとの一事を指すものとすれば、リカルドの謂ふ所は重語に近いものである。蓋し殘餘の生産物部分は、所有者の望む所に従つて資本蓄積の財源たり得る所の基金となるからである。だが斯様なことは、土地の最も肥沃な處には行はれぬことが多いのである。』(匿名者著『經濟學に於ける言葉上の論争』第七四、七五頁)。

ジョン・スチュアート・ミルは曰く、『勞銀には何等の生産力もない。それは生産力の價格なのである。勞銀が勞働それ自身と相並んで商品の生産に貢獻するものでないことは、恰も道具の價格と道具それ自身との關係に於けるが如くである。若し購買しないで勞働が得られるとすれば、勞銀なるものは無用に歸するであらう(四十九)と。だが、若し勞働者が空氣を食つて生活し得るとすれば、彼れは如何なる價格を以つても購買し得ないであらう。故に、勞働者についての費用絶無といふことは、數學上の意義に於ける一限界であつて、常に接近し得るとはいへ、常に到達し得ざるものとなつてゐるのである。勞働者を斯かる虛無的の立場に壓下せんとすることが、資本の不斷の傾向なのである。』

(四十九)ジョン・スチュアート・ミル著『經濟學上未解決問題に關する論文』ロンドン、一八四四年刊、第九〇頁(尾)。

曩に屢々引抄した十八世紀の一著述家にして『商工業論』の著者たる匿名氏はイギリスの勞銀をフランス及びオランダの勞銀水準に低下せしめることは、實にイギリスの歴史的使命だと論じたのであるが、この見解はイギリスに於ける資本の魂の奥に伏在する祕密を暴露したものに外ならぬ(五十)。彼れが素朴に述べてゐる中の一節に曰く『されど我國の貧困者(勞働者を示す術語)が若し贅澤に生活しようとするやうになれば……勞働は勿論騰貴せねばならぬ。……工業勞働者がブランデーや、デン酒や、茶や、砂糖や、外國産の果實や、強ビールや、捺染リンネルや、喫煙草や、喫煙草などの如き奢侈品を多量に消費するやうになつた場合を考へて見よ(五十一)と、』

(五十)匿名者著『商工業論』ロンドン、一七七〇年刊、第四四頁(尾)。一八六六年十二月及び一八六七年一月發行の『ダイ

『タイムズ』紙も同様、イギリスに於ける鑛山主たちの心情の迷いを掲載した。其處には、雇主のために生活してゆくのみに厳密に必要な程度以上を要求することもなく支拂はれることもない、ベルギーに於ける鑛山労働者たちの幸福な状態が描述されてゐる。彼等は『タイムズ』紙上で標本的労働者とされてゐる一事を除けば、非常な苦しみを受けてゐるのである。一八六七年二月初旬、マルシーネに於けるベルギーの鑛山労働者たちは罷工を以て應復したが、それは火薬と彈丸とを以て應復されてしまつたのである。

(五十一) 前掲、第四四及び四六頁。

彼れはノースアンブトンシア州に於ける或る工場主の手に成つた一文を引抄してゐる。この工場主は天の一方を偷み見しながら哀嘆して曰く、『フランスの労働はイギリスの労働に比べると、三分の一廉價である。蓋しフランスの貧民は激しく労働し而も粗衣粗食に甘んじてゐるからであつて、彼等は減多に肉を食べることがなく、小麥の價が高い時にはパンすら稼々食べない位である』(五十二)と。この論文家は更らに語を續けて曰く、『加ふるに、彼等の飲物は水又はそれに類した稀弱な飲料であるから、これには幾許の費用も要しない。斯様な状態に至らしむるのは極めて困難なことには相違ないが、然し實行し得ないといふことはない。それはフランスにも、オランダにも、既に實行されてゐるのである』(五十三)と。

(五十二) このノースアンブトンシア州の工場主は、感極まつた上のこととして恕すべきであらうとは思ふが、兎にかく一の敬虔なる欺瞞を行つてゐる。彼れはイギリスに於ける鑛山労働者とフランスに於ける鑛山労働者との生活を比較すると言ひながら、實は本文に引抄した言葉でフランスの農業労働者を描述してゐるのであつて、これは彼れみづから後段に及んでシドモドロに白狀してゐる所である！

(五十三) 前掲、第七〇及び七一頁。第三版註——爾後、資本制生産の發達に依つて全世界の労働者に課された國際的競争のため、この事態は更らに一步を進めることになつた。イギリスの下院議員ステープルトンは、選挙人たちの前に述べて曰く『支那が若し一大工業國たるに至るとすれば、ヨーロッパの工業労働者は彼等の競争者たる支那人の水準にまで低下せしめられることなくして、如何にしてこの競争に堪え得るであらうか——これ予の知り得ざる所である』と『タイムズ』紙、一八七三年九月三日號)。——今日イギリスに於ける資本の熱望標的となつてゐるものは、もはやヨーロッパ大陸の勞銀ではなくて、支那の勞銀なのである。

それから二十年後に、アメリカの一山師でイギリスの貴族に列せられたベンジャミン・タムソン(別名ルムフォード伯爵)も

亦、神と人類のお思召に叶ふやうに同一の仁愛的な傾向を採つた。彼れの『論文集』は労働者の價高き常食物に換ふべき凡ゆる種類の代用品を處方した一の料理書とも言ふべきものである。この驚くべき『哲人』に依つて與へられた特別大當りの一處方は左の通りである。——『割麥（大麥）七片半（五斤）、玉蜀黍六片四分の一（五斤）、赤鯿三片、鹽一片、醋一片、胡椒及び野菜二片、合計二十片四分の三を以つて、六十四人前のスープが得られる。而して割麥及び玉蜀黍の價格が平均水準にあるとすれば：このスープ一人前（二十オンス）の費用は、四分の一片に節減し得るのである（五十四）。資本制生産が進み商品の不純製造が發達するにつれて、タムソンのこの理想は無用に歸することになつた（五十五）。

（五十四）ベンジヤミン・タムソン著『政治、經濟、哲學論文集』全三卷、ロンドン、一七九六——一八〇二年刊、第一卷、第二八八頁（18）。サー・フレデリック・モルトン・イーデンはその著『イングリランドに於ける貧民狀態又は勞働階級史』¹⁹の中に、ルムフォード流の乞食スープを貧民收容所の監督人たちに極力推奨し『スコットランドには、小麥や裸麥や肉などの代りに、水と鹽を混じた燕麥や大麥の碾き割を食べて、數ヶ月間而かも頗る氣樂に生活してゐる貧民が多くある』と言つて、イングリランドの労働者を駭めてゐる（前掲、第一卷、第二章、第五〇三頁）。十九世紀になつても同様の『指示』が與へられた。例へば『イングリランドの農業労働者は、健康上極めて有益な混合麥粉を食べようとしなが、教育のヨリ優良なスコットランドには、恐らくこの僻見は知られて居らぬであらう（チアールズ・ヘンリー・パリー著『現行穀物條例を必要とすべき問題考察』ロンドン、一八一六年刊、第六九頁）』。この同じパリーは、更らに嘆じて曰く、イーデン時代（一七九七年）に比すれば、今日（一八一五年）のイングリランド労働者は更らに墮落してゐると。

（五十五）生活資料の不純製造について最近議會委員の與へた報告に依れば、藥料の不純製造でさへもイギリスでは例外でなく、寧ろ常則となつてゐることが知られる。例へば、ロンドンに於ける三十四の藥劑所から購つて來た夫々の阿片を試験したところ、その中、三十一は罌粟頭、小麥粉、護謨、粘土、砂等を混合せるものであることが知られた。なかには、モルフィンの一原子をも含まぬものさへ、澤山あつた。

十八世紀末から十九世紀初葉の十數年に至る間、イギリスの小作農業者及び地主は絶對的の最低賃銀を厲行した。彼等は農業上の日傭労働者に最低限以下の賃銀を支拂ひ、殘餘の額は教區當局からの救恤金の形で支拂ふことにしたのである。イギリスの田舎紳士たちが如何にして賃銀率を『合法的』に確立したかを示す道化の一例——『一七九五年スピナムランドの労働者に支拂ふべき賃銀を確定したとき、大地主たちは晝食をしてゐた。而も彼等は労働者には晝食させるに及ばぬと考へてゐた

ことは明かである。彼等が確定した所に依れば、八斤十一オンスのパン一本の價が一志である場合には、一人當りの週賣銀は三志とし、パンの價が増騰して一志五片に達する迄は、賃銀も相當に増額してゆくが、更らに昂騰してこの水準を突破した場合には、それに比例して賃銀を減額し、パンの價が二志に達したとき、勞働者の榮養量は従前に比して五分の一少たくなればならぬといふのである。(五十六)。

(五十六) デービー・ニューナム(辯護士)著『兩院穀物條例委員に與へられたる證述の評論』ロンドン、一八一五年刊、第二八頁、註(21)。

治安裁判官にして救貧局管理委員たり賃銀調節官たる大規模の小作農業者エー・ペンネットといふ人が、一八一四年の上院調査委員に依つて審問を受けた。『勞働者は、一日の勞働の價値の幾分かを救貧税の中から補充されてゐるか?』答へて曰く『然り、各家族の一週間の所得は、一人當り八斤十一オンスのパンと貨幣三片との限界まで補充されてゐる。我々の見る所に依ると、八斤十一オンスのパンがあれば各人一週間の生存を維持するに十分である。三片は衣類に充用する。教區當局が現品で衣服を供給することを可とした場合には、三片を控除する。この方法はウキルトシア州の西部一帯に行はれてゐることは勿論だが、更らに全國に亘つても行はれてゐると私は信ずる』(五十七)。當時の或るブルジョア著述家は叫んで言つた。『彼等(小作農業者)は斯くして幾年間にも互り、國民中の尊敬すべき一階級をば貧民收容所に頼らしめることに依つて墮落させてゐた。彼等は勞働者側の蓄積を妨げることによつて、己れ自身の利得を増殖してゐたのである』(五十八)と。

(五十七) 前掲、第一九及び二〇頁。

(五十八) チャールズ・ヘンリー・パリー前掲第七七及び六九頁。地主諸君はまた、彼等がイギリスの名で遂行せしめた反ジャコビン黨戦のため何等の損失をも蒙らなかつたのみでなく寧ろ莫大の富を積んだのである。『彼等の地代は十八年間に二倍し、三倍し、四倍し甚しきは六倍した場合も見られた』(前掲、第一〇〇及び一〇一頁)。

勞働者の必要消費基金に對する直接の盜掠が、今日、餘剩價値の形成上に、隨つてまた資本の蓄積基金の形成上に、如何なる役割を演じてゐるかは、例へば謂ふ所の家内勞働なるものについて示した所である(第三章、第八節、d)。ヨリ立ち入つた事實については、本篇の進行中に述べる。

如何なる産業部門に於いても、勞働要具から成る不變資本部分は、企業の規模に依つて決定される一定數の勞働者に對比して不足する所なきを要するのであるが、さればといつて、この資本部分は充用勞働量と必ずしも同一の比例を以つて増加せし

められることを要するものでない。いま、或る工場で一百人の労働者が各八時間づつの労働を以つて、一日に八百労働時間を供給するものと假定し、この場合、資本家が更らに四百労働時間を得ようとすれば、新たに五十人の労働者を雇ふことが出来る。だが、斯くする時は、單に賃銀についてのみでなく、労働要具についても、新たな一資本を前貸せねばならぬことになる。然るに資本家はまた、舊來の一百人の労働者を八時間づつの代りに寧ろ十二時間づつ就業させることも出来る。この場合には、既存の労働要具で十分である。ただ、それがヨリ急速に磨滅するといふ一點が異なるだけである。斯くの如く、労働力の緊張の増進を以つてする追加労働の生産は、不變資本を豫め比例的に増大することなくして、蓄積の實體たる餘剰生産物及び餘剰價值を増大せしめ得るのである。

抽出的産業たる例へば採鑛業の如きに於いては、原料が前貸資本の一部を成すといふことがない。この場合、労働對象は過去に於ける労働の産物ではなく、自然に依つて無償で贈與されたものである。金屬や、鑛物や、石炭や、石材などの如き即ちそれである。この場合に於ける不變資本は、殆んど全く労働要具のみから成るものであつて、此等の労働要具は、例へば労働者の晝夜交代などに依る労働量の増大に極めてよく堪え得るのである。然るに、生産物の量及び價值は、他の事情に變化なき限り、充用労働に正比例して増大するであらう。生産の第一日に於ける如く、この場合にも亦、本來の生産物形成者たる、随つてまた資本の素材的要素の形成者たる、人類と自然とは互ひに協力して作用する。労働力の伸縮性に依り、蓄積の領域は豫め不變資本を増加することなくして擴大されたことになるのである。

農業に於いては、種子及び肥料の追加前貸をなさずして耕地を擴大し得るものでないことは事實である。だが、一度はこの前貸をなした後は、土地に對する純機械的の加工を以つても、生産物の量の上に奇蹟的な影響が與へられる。斯くして従前に於けると同一數の労働者に依つてヨリ多量の労働が供給される結果、労働要具の上に新たな資本前貸をなすことを要せずして土地の肥沃が増進せしめられることになる。この場合にも亦、自然に對する人類の直接の作用が、新たな資本を介在せしめることなくして蓄積の増進を齎らす所の直接的源泉となるのである。

最後に、嚴密の意味の工業についていへば、茲では労働の追加支出ある度毎に、それに照應した原料の追加支出を要することは事實であるが、然し必ずしも労働要具の追加支出を必要とするものではない、而して抽出的産業及び農業に、製造工業に直接の原料と労働要具の素材たるべき原料とを供給するものであるから、前者が追加的の資本前貸をなさずして造り出す所の追加生産物は、後者にとつて有利となるのである。

總括的の結論——資本は富の本來の兩形成者たる勞働力と土地とを併合し、斯くするこゝに依つて、それ自身の大小に基くかの如く見ゆる限界、換言すればそれ自身の存在形態たる既に生産された生産機關の價值と量とに基くかの如く見ゆる限界を超えて、自己の蓄積要素を擴大せしめることを許す所の伸張力を獲得するに至るのである。

資本蓄積上の、いま一つの重要因子は、社會的勞働の生産力程度である。

勞働の生産力が増進するにつれて、一定量の價值、隨つてまた一定量の餘剩價值を代表する所の生産物量は、ますます大となつて来る。餘剩價值の率に變化なき場合は勿論であるが、それが低下する場合と雖も、この低下が勞働生産力の増進に比して緩慢であるとするれば、餘剩生産物の量は増大することになるのである。隨つて、餘剩生産物を收入及び追加資本に分割する所の比率に變化なき限り、蓄積基金を減少せしむることなくして資本家の消費は増大せしめられ得ることになる。更らに、蓄積基金の比例的大きさは、消費基金を犠牲としても増大せられ得る。蓋し、勞働の生産力が増進して商品の價が安くなる結果、資本家は減少した消費基金を以つてしても、従前と等量又はヨリ多量の享樂資料を支配し得ることになるからである。更らに、現實的の賃銀が昂騰した場合にも、勞働の生産力が増進して勞働者の價が安くなるため、餘剩價值の率が増進するに至ることは曩に述べた所である。現實的の賃銀は決して、勞働の生産力と同一の比例を以つて増進するものではない。されば、同一の可變資本價值を以つて、ヨリ多くの勞働力、隨つてまたヨリ多くの勞働を運轉し得ることになる。同一の不變資本はヨリ多くの生産機關、換言すればヨリ多くの勞働要具や、勞働材料や、助成材などに表現され、隨つて生産物並びに價值の形成要素たるヨリ多くの勞働吸收材を供給することになるのである。されば、追加資本價值が不變なる場合は勿論であるが、それを減少する場合にも、蓄積の速度は増進するのであつて、單に生産の規模が素材的に擴大されるといふのみではなく、更らに餘剩價值の生産が追加資本の價值に比してヨリ急速に擴大されることにもなるのである。

勞働生産力の發達はまた、既に生産行程の内部に置かれてゐる原資本の上に反應作用するものである。機能不變資本の一部は、長期間内のみ消費され、再生産され、換言すれば同一種類の新たな品を以つて代置される所の、機械その他の如き勞働要具から成つてゐる。けれども、この勞働要具は年々一部分づつ死滅し、年々一部分づつその生産的機能の終局點に達するものである。即ち、それは年々一部分づつ週期的に再生産され、同一種類の新たな品を以つて代置されてゐるのである。いま、この勞働要具の生産部面に勞働生産力の増進が行はれたとすれば、これは科學と技術との不斷の發達につれて、絶えず行はれてゐる所であるが、その結果、ヨリ有効にして且つ功程の大なる割合に價安き機械、道具、器具などが舊來の物に取つて

代はることになる。斯くて、既存の労働要具に加へられる不斷の細目的變化を別にして考へても、舊來の資本はヨリ生産的な形態に再生産される譯である。

不變資本の他の部分たる原料や助成材は、一年間に絶えず再生産され、而して農業から來るものは大抵みな一年毎に再生産される。そこで、この方面の生産にヨリ善き方法その他が採用されるとすれば、それは追加資本と、既に機能を盡しつつある資本との雙方に對して、殆んど同時に影響することになる。化學上の如何なる進歩も、單に有用素材の數を多くし、既に知られてゐる素材の利用を多様にし、資本の増大に伴ひその放下部面を擴大せしめるといふだけではなく、それと共にまた生産行程上及び消費行程上の排泄物をば再生産行程の循環に返還せしめることを教へ、以つて豫め投資する所なくして新たな資本素材を造り出さしめるのである。労働力緊張の増進といふ單なる原因に依つて自然富の利用が増大されると同様に、科學や技術の發達に依り、機能資本はその與へられたる大小から獨立した伸張力を附與されることになる。而してこの伸張力はまたすでに更新段階に入つてゐる原資本部分の上に反應作用するのである。斯くして、この資本部分は、その舊來の形態の背後に行はれた社會的進歩をば無償で新たな形態の中に併合してしまふ。生産力の斯かる發達が、同時にまた、機能しつつある資本の部分的な價值減損を伴ふことは言ふ迄もない。この價值減損が競争上痛切に感ぜられるやうになる限り、その主なる負擔は労働者にかかつて來る。資本家は労働者に對する搾取の増進に依つて、これが賠償を求めようとするからである。

労働は消費した生産機關の價值を生産物に移轉する。然るに、與へられたる労働量に依つて運轉される生産機關の價值及び量は、労働の生産力が増加するにつれて益々増大する。されば、同一量の労働は常に同一量の新たな價值を生産物に附け加へるだけであるといへ、それと同時に、生産物に移轉される舊來の資本價值は、労働の生産力が増進するにつれて益々大となる譯である。

一例として、紡績工たる一人のイギリス人と支那人とが同一の能率を以つて同一數の時間労働するとすれば、彼等が夫々一週間に造り出す價值は同一であらう。然し、この價值は同一であつても、強力な自動機械を以つて労働するイギリス人の週生産物と、單に紡車しか有たない支那人の週生産物との間には、非常なる價值の差があるであらう。支那人が一斤の棉花を紡績するのと同じ時間を以つて、イギリス人は數百斤の棉花を紡績する。支那人のに比べて數百倍にも及ぶ舊來の價值がイギリス人の生産物には移轉され、新たな有用形態を以つて保存され、斯くして新たに資本たる機能を盡し得ることになるのであつて、これがたゞイギリス人の生産物の價值は膨大なものとなつて來る。

フリードリヒ・エンゲルスは我々に教へて曰く、『一七八二年、イギリスに於ける過去三年間の羊毛全收穫は、労働者の不足せるため、加工されずに寝かされてあつた。而してそれは、新たに發明された機械の助けを得て紡績されることがなかつたとすれば、尙引續きその儘に寝かされて置かれねばならなかつたであらう(五十九)』と。機械の形態に對象化された労働が、直接に何等の人間をも出現せしめたものでないことは論を俟たぬ。けれども、それに依つて、ヨリ少數の労働者が相對的に少量なる活労働の追加を以つて羊毛を生産的に消費し、これに新たな價值を附け加へ得るやうになつたのみではなく、更らに毛織絲その他の形で舊來の羊毛價值を保存し得るやうにもなつたのである。と、同時にまた、羊毛の再生産を擴大すべき手段と刺戟とが供給されることにもなつたのである。新たな價值を創造しつつ舊來の價值を保存することは、生きた労働の天與の資格である。されば、生産機關の功程や範圍や價值が増大して、労働生産力の發達を喚び起し蓄積の増進を伴ふにつれて、労働は益々多量の資本價值を絶えず新たな形態に保存し永久化することになる(六十)。然るに賃銀労働制の下に於いては、労働の斯かる自然力は、労働を併合した資本の自己保存力として現れる。それは恰度、労働の社會的生産力が資本の資格として現れ、資本家に依る餘剩労働の間斷なき占有が資本それ自身の間斷なき價值増殖として現れるのと同様である。商品の凡ゆる價值形態が貨幣の形態として表現されると同様に、労働の如何なる力も悉く資本の力として表現されてゐるのである。

(五十九) フリードリヒ・エンゲルス著『イギリスに於ける労働階級の位置』第二〇頁。

(六十) 正統派經濟學は労働行程及び價值増殖行程について十分の分析をなし得なかつたため、再生産上の斯かる重大要素を正當に理解するに至らなかつた。これは例へば、リカルドに於いて見られ得る所である。一例を舉ぐれば、彼れは次の如く述べてゐる。——生産力の上に如何なる變化が生じやうとも、『一百万人の労働者が工場で生産する所の價值は常に同一である』と。此等の労働者の労働時間と労働能率とが一定してゐるとすれば、なるほどその通りである。勿論、斯く言ふことは、労働の生産力に差異があるとすれば、同じ一百万人の労働者に依つて生産物に轉化される生産、關の量は決して同一でなく、彼等の生産物の中に保存される價值量、随つてまた彼等に依つて供給される生産物價值の上にも種々なる差異が生じて來るといふ事實を否認する所以でない。(而もリカルドの推論には、この點を看過した處が若干ある)。ついでに一言したいことは、リカルドは上例に依つて、ジャン・バチスト・セーのために使用價值(この場合、彼れが富又は物質的富と呼んでゐる所のもの)と交換價值との區別を明かにしようとしたが、それは徒勞に終つてゐる。セーは答へて曰く、『同じ一百万人の労働者も、ヨリ完全な方法を應用すれば、ヨリ多くの價值を造り出すことなくして二倍又は三倍の富を造り出し得るといふ

點に、リカルドは經濟學上の難關を求めてゐるやうであるが、若し生産なるものを労働や土地や資本の生産的奉仕を提供して生産物を得る所の交換として見るとき(當然さう見なければならぬのであるが)この難關は最早存在しないことになる。我々が世界に存する一切の生産物を受けるのは、斯かる生産的奉仕の媒介に依るのである。ところで：：生産と名づけられる交換に於いて、我々の生産的奉仕に依つて得る所の有用物が大なれば大なる程、我々は益々富裕となり、我々の生産的奉仕は益々大きな價值を有することになるのである』(ジャン・バチスト・セー著『マルサス君に與ふる書』パリ、一八二〇年刊、一六八及び一六九頁)⁽²⁾。セーが説明しようとしてゐる『難關』それはセーにとつて存在するのであつて、リカルドにとつて存在するのではないのであるが)とは次の如きものである。労働の生産力が増進した結果、一定量の労働に依つて造り出される使用價値の量が増大するとき、何故その價値も増大することにならないのか? 答へて曰く、この難關は使用價値を交換價値と呼んで下さることに依つて解決されると。交換價値とは、何等かの形で交換と關聯した一の物である。労働及び生産機關を以つて生産物と交換することを生産と名づけるとすれば、生産に依つて供給される所の使用價値が大であれば大であるほど、益々多くの交換價値が得られることは、水の如く鮮明な事實である。例へば、一日の労働に依つて靴製造業者に供給される使用價値(靴)が多ければ多いほど、彼れは益々靴に於いて富裕となる。然るに、セーは突然かう考へるやうになつた。即ち靴の『量が大となれば』その價格(これは言ふ迄もなく、交換價値とは何等關係する所なきものであるが)は低落することになる。『なぜならば彼等(生産者)は競争のため、生産物を費用通りの價で提供せざるを得なくなるからである。』けれども資本家が若しその商品を費用通りの價格で販賣するとすれば、利潤なるものは抑も何處から生ずることになるか? 心配無用。セーは説明して曰く、生産力が増進する結果、各人は同一の等價を以つて、従前一足の靴を得てゐた所を今や二足得ることになると。要するに、セーが到達した所の結論は彼れが反駁しようとしてゐたりカルドの命題と全く同一の點に歸著する譯である。彼れは斯く思ひ切つた思考上の努力をなした後、意氣揚々と次の言葉を以つてマルサスに呼び掛けてゐる。——『君! これが本當に適切な學說なのだ。この學說に依らないでは、經濟學上の最大難關も、特にまた、富は價値から成るにも拘らず、生産物の價値が減じた場合國民がヨリ富裕になり得る所以は如何といふ問題も解決することとは出来ぬ、と自分は信じてゐるのだ』(前掲第一七〇頁)。イギリスの一經濟學者は、セーの『マルサス君に與ふる書』に見出される所の、これと類似の計略につき述べて曰く『斯かる虚飾的な言ひ方こそ總じて、セー君が彼れ自身の學說なりとしてゐる所のものを形成するのであつて、彼れはマルサスがこの學說をば「ヨーロッパの各地に於いて」既になされてゐる如

く、ハートフォードに於いても教授するに至らんことを熱心に慫慂したのである。彼れは曰く「貴下が若し以上一切の命題について遊說的の點を見出したとすれば、寧ろ此等の命題に依つて言ひ現されてゐる所の根本に溯つて考察せられたい。斯くするとき、此等の命題は極めて單純且つ合理的なものとして現れるに至るであらうと信ぜられる」と。同一の行程に依つて、それらの命題が獨創的たる以外の凡ゆるものとして現れるやうになることも、疑ひを容れない『匿名者著』最近マルサス君の唱道せる需要性質の原理に關する研究』第一一六及び一一〇頁(21)。

資本が増大するにつれて、充用資本と消費資本との差が著しくなつて来る。語を換へていへば、建物や、機械や、排水管や、労働家畜や、各種の器具類の如き労働要具の量が、價値に於いても増大することになるのであつて、此等の労働要具は、不斷に反復される生産行程の内部に在つて大なり小なりの期間、全體的に作用し一定の利用效果の獲得に役立つのであるが、漸次的に磨滅するものであるから價値を失ふことも斷片的であつて、ただ斷片的のみにこれを生産物に移轉してゆくに過ぎぬのである。此等の労働要具は、それが生産物に價値を附加することなくして生産物の形成に役立つ程度、換言すれば全體として充用され、ただ部分的のみに消費される程度に應じて、自然力たる水や、蒸氣や、空氣や、電氣などと同様に無償奉仕をなすものであることは、曩にも述べた通りである。過去の労働が現在の生きた労働に依つて捕捉され生氣を附與されたとき發揮する所の斯かる無償奉仕は、資本蓄積の規模が擴大されるにつれて、ますますヨリ多く蓄積されることになるのである。

過去の労働は常に資本として假裝されるものであり、換言すればA B C等の労働の被動態は非労働者たるXの能動態として假裝されるものであるから、ブルジョアや經濟學者たちは過去労働の功德を賞め讃へることが夥しいのであつて、スコットランドの天才マカロックに依れば、過去の労働は特殊の報酬(利子、利潤等)を受くべきものとさへされてゐるのである(六十一)。(六十二)そこで、過去の労働が生産機關なる形態を以つて現在の生きた労働行程の上に與へる所の不斷に増大しつつかつある功德は、過去に於いてそれを不拂労働として提供した労働者からは切り離されたその労働をれ自身の形態に、資本形態に起因するものとされる。奴隸所有者は労働者とその奴隸たる性質から引き離して考へることが出来なかつたのであるか、恰度それと同様に、資本制生産の實地方面に於ける代理人やイデオロギー上の代辯者たちは、生産機關をば今日それに附著してゐる所の對抗的な社會的扮裝から引き離して考へる能力を缺いてゐるのである。

(六十三) シーニョアは『節慾の貨銀』の特許を取つたのであるが、それよりも遙か以前にマカロックは『過去労働の貨銀』

の特許を取つてゐたのであつた。

勞働力の搾取程度が與へられてゐるとすれば、餘剩價値の量は時を等しうして搾取される勞働者の數の大小に依つて決定される。而して斯かる勞働者の數は、いろ／＼な比率に於いてであるとはいへ、兎にかく資本の大小に照應するものである。そこで、累次的の蓄積に依つて資本の量がたとへば大となるに従ひ、消費基金と蓄積基金とに分割される價値總額も亦ます／＼大となる譯である。即ち資本家はます／＼安樂に生活して、而も同時にます／＼『節慾』し得ることになるのである。最後にまた、生産上の凡ゆる彈條は、前貸資本の量が增大して生産の規模が擴大すればするほど、ます／＼力強く作用するのである。

(五) 謂はゆる勞働基金

資本といふものは固定した大きさではなく、餘剩價値が収入と追加資本とに分割される變化の如何につれて絶えず變動しつゝある所の、社會的富の伸縮自在な一部であることは、これまで述べて來た所に依つて明かとなつた。更らに、機能資本の大きさが一定してゐる場合にも、それに併合される所の勞働力や、科學や、土地（經濟學上で土地といふのは、人類の關與なくして天然自然に存在する一切の勞働對象を指すのであるが）などは、一定の限界内に於いて資本にそれ自身の大小から獨立した作用面を許す所の伸縮自在な力となつてゐることも、我々の既に見た所である。此等の研究に於いては、同一量の資本に種々異つた作用程度を可能ならしめる流通行程上の事情は、悉くこれを措いて問はなかつた。我々は資本制生産の制限を前提し、隨つて社會的生產行程の純粹に原生的な一形態を前提するものであるから、現在の生産機關並びに勞働力を以つて直接的且つ計畫的に實現し得べき一切のヨリ合理的な結合については、暫らく問はぬことにしたのである。

社會的資本をば固定した作用程度を有する固定した大きさであることは、正統派經濟學が最初から好んで抱いてゐた所の見解である。而してこの僻見を初めて一の信條に固め上げたものは、かの十九世紀に於けるブルジョアの常識の冷靜的に術學多辭な神託者である俗物の元祖ジェレミー・ベントムであつた(六十二)。彼れの哲學者間に於けるは、恰もマーチン・タツパの詩人間に於けるが如くであつて、いづれもイギリス以外の處には造られ得ないものである(六十三)。ベントムのドグマを以つてすると、生産行程上の最も通例な現象たる例へば突然生産行程の上に生じて來る伸張收縮の如きは勿論、甚しきは蓄積の如きでさへも、全く理解し得ざるものとなつてしまふのである。

(六十二) 主として、ジェレミー・ベントム著『犯罪及び刑罰論』エティエンヌ・デュモン佛譯、第三版、パリ、一八二六

年刊、第二卷、第四篇、第二章(2)を参照せよ。

(六十三) ジェレミー・ベントムは、純粹にイギリス的の一現象である。我が哲學者クリスチアン・ウォルフを除かずに考へたところで、如何なる時代、如何なる國に於いても、この位のお粗末な平凡さが斯くまで自己満足的に巾を利かしたことはない。功利主義なるものは、彼れの發明でも何でもない。彼れはただ、エルヴェシウスその他十八世紀のフランス人たちが才氣煥發的に語つた所を氣ぬげに再生産しただけである。一例として、或る犬にとり如何なるものが功利となるかを知らんとすれば犬の性質を究めねばならぬ。この性質それ自身は『功利主義』に依つて推論し得るものでない。これを人間に應用して、人間の凡ゆる行爲、運動、關係等を功利主義に従つて批判しようとするれば、先づ人間性一般を研究し、次に各時代に於いて歴史的に變更された人間性を研究する必要がある。ベントムは何等躊躇する所なく、素朴極まる乾燥さを以つて近世の素町人(殊にイギリスの)を標準的の人間として假定した。而してこの奇妙な標準的の人間と彼等の世界とにとつて功利となるものは、それ自身に於いて功利となるものだとしたのである。彼れは次に、この標尺を以つて、過、現、未を評價した。一例を擧ぐれば、クリスト教なるものは、刑法典に依つて法律上の制裁を受ける罪行をば宗教的に禁ずるものであるから『功利的』であるとされ、藝術批評は尊敬すべき人々がマーチン・タッパを樂しむことを妨げるものであるから『有害』であるとされる、等。『筆とらぬ日は無し』といふことを座右の銘としてゐるこの勇士は、かやうなガラクタを以つて山なす典籍を充たしたのである。私に若し友人ハインリヒ・ハイネ程の勇氣があつたとすれば、私はジェレミー君を呼ぶにアルデオアの愚鈍の天才を以つてしたのであらう。

(六十四) 『經濟學者たちは、一定量の資本及び一定數の労働者を以つて、劃一的の力があり又は劃一的の能率を以つて作用する所の生産機關であるといふ風に考へる傾がある。：：商品は生産の唯一の動因であると主張する人々は、生産なるものは決して擴大し得るものでないと主張する。蓋し生産を擴大するには、食物や、原料や、道具などが豫め増大されてゐることを不可欠的の條件とするからである。要するに、如何なる生産擴大も豫めこれを擴大することなくしては行はれ得ないといふことになる。換言すれば、如何なる生産擴大も不可能だといふことに歸著するのである』(サムエル・ペリー著『貨幣及びその轉變』第二六及び七〇頁)。ペリーは主として流通行程の立場から、このドグマを批判してゐる。

このドグマは、ベントム自身に依つても、またマルサスや、ジェームズ・ミルや、マカロックなどに依つても、辯護上の目的に利用された。彼等は別してこれを資本の一部たる、勞働力に轉化し得べき可變資本をば、固定の大きさなりとして示す目的に

利用したのである。斯くして可變資本の素材的存在、換言すれば可變資本が労働者のために代表する生活資料の量、即ち労働基金と稱せられる所のものは、自然の鎖に依つて社會的富の中から分界され超ゆべからざるものとされた特殊部分に假作されることになつた。社會的富の中、不變資本又は——素材的の方面からいへば——生産機關として作用すべき部分を運轉するには、一定量の生きた労働が必要である。この労働量は、工藝上から定まつて來るのである。だが、この労働量を發動せしめるに必要な労働者の數は一定してゐるものでない。それは個々の労働力の搾取程度につれて、色々に變化するのである。また、この労働力の價格も一定してゐるものでなく、單にその最低限界が與へられてゐるに過ぎぬのであつて、それも極めて伸縮自在なものである。如上のドグマの根柢に横はつてゐる事實は次の如きものである。即ち苟くも労働者たるものは、一方に於いて、社會的の富が非労働者の享樂資料と生産機關とに分割されることについて容喙すべきではなく、他方にまた、彼れは、幸運な例外的の場合を除いては富者の『收入』を犠牲として『労働基金』と稱するものを擴大し得ることはないといふ事實がそれである(六十五)。

(六十五) ジョン・スチュアート・ミルはその著『經濟原論』の中に曰く『眞に疲勞を覺えしめる厭はしい労働は、他の労働以上の支拂を受くるものではなく、寧ろ殆んど定まり切つて、凡ゆる労働中最惡の支拂を受けてゐる。：：厭はしい労働ほど、ます／＼最低限度の支拂を受くることは確かな事實である。辛勞と收益とは、公正なる社會配制の下に行はれるであらう如く相互正比例するものでなく、寧ろ逆比例することを常とするものである。』誤解なきやうに一言して置きたいことは、ジョン・スチュアート・ミルその他の如き人々は經濟學上の舊來のドグマと近世的傾向との矛盾に陥つてゐた缺點はあるが、而も彼等を以つて俗學的辯護學者の一味と同じに論ずることは、全く不當であらう。

労働基金の資本制的制限をば社會的の自然制限に作り換へてしまふことが、何といふ馬鹿々々しい重語に到らしめるか、それは別してフォーセット教授の所述に見られる所である。彼れは曰く『一國の流通資本(六十六)は、その國の労働基金である。そこで各労働者の受くる平均的の貨幣賃銀を算出するには、單純にこの資本を労働者の人口數で割りさへすればいい(六十七)と。語を換へていへば、先づ現實的に支拂はれる個々の労働を合計し、然る後この合計額は神と自然とに依つて命ぜられた『労働基金』の價值總額たるものであると主張する。而して最後に、斯くして得た總額を労働者の人數で割り、茲にまた各個の労働者が平均幾許つづ受け得るかを發見するといふのである。これは非常にずい遣り口である。而もフォーセット君は同じ口の下から次の如く言ふことを妨げられなかつたのである。——『イギリスに於いて年々蓄積される富の總額は、二つの部分に

分かたれる。一はイギリスに於いて自國の産業を維持する方面に利用され、他は外國に輸出される。……イギリス自身の産業に利用されるものは、この國に於いて年々蓄積される富の何等顯著なる部分を占めるものでない(六十八)。斯く等價を與へずしてイギリスの労働者から盗み取る所の餘剰生産物は、年々増殖しつつあるものであつて、その大部分はイギリスの國內ではなく、寧ろ外國に於いて資本化される。が、斯く輸出される追加資本と共に、また神とペンタムとに依つて發明された『勞働基金』の一部も輸出されることになるのである(六十九)。

(六十六) ケンブリッジ大學經濟學教授ヘンリー・フォーセット著『イギリス労働者の經濟的位置』ロンドン、一八六五年刊、第二二〇頁(註)。

(六十七) 可變資本及び不變資本なる範疇は私が初めて使用したものであることを、この場合讀者に想起させたい。アダム・スミス以降の經濟學は、此等の範疇に含まれてゐる本質的の區別をば、流通行程から生ずる所の、固定資本及び流通資本なる形式上の區別と混淆したのである。この問題については、尙、第二卷第二篇で立ち入つた説明を與へる。

(六十八) フォーセット前掲、第一二二及び一二三頁。

(六十九) 資本のみでなく、更らに労働者も亦、國外移住の形で年々イギリスから輸出されてゐると言ひ得るであらう。だが、國外移住者に依つて持ち出される家財道具のことは本文の中に説いてない。此等の移住者の中には、労働者でない者が澤山ある。即ち小作農業者たちの伴がその顯著なる部分を占めてゐるのである。年々營利の目的を以つて外國に輸出されるイギリスの追加資本が、年々行はれる資本の蓄積に對して有する比例は、年々行はれる國外移住が、年々與へられる人口の増殖に對して有する比例よりも遙かに大きいのである。

第二十三章 資本制蓄積の一般的法則

(一) 資本の組成不變の場合に於ける、蓄積に伴ふ

勞働力の需要増加

本章に於いては、資本の増大が勞働者階級の運命に及ぼす影響を研究する。この研究の最も重要な因子となるものは、資本の組成(1)並びにそれが蓄積行程の進行中に受ける所の變化である。

資本の組成は、二重の意義に解すべきである。價値の方面からすれば、それは資本が不變資本即ち生産機關の價値と、可變資本即ち勞働力の價値(勞銀の總額)とに分割される所の比率に依つて決定される。生産行程の内部に作用する素材の方面からすれば、一切の資本は生産機關と生きた勞働力とに分割される。この組成は、一方に於ける使用生産機關と、他方に於けるその充用に必要な勞働量との間の比率に依つて決定される。私は前者を資本の價値組成(2)と名づけ、後者を資本の技術的組成(3)と名づける。この二つの組成の間には密接な交互關係が存在してゐる。私はこれを言ひ現すために、資本の技術的組成に依つて決定されその諸變化を反映する方面から見た資本の價値組成をば、資本の有機的組成(4)と名づける。私が簡単に資本の組成といふ時には、つねにこの有機的組成を指してゐるのである。

一定の生産部門に放下される幾多の個別的資本は、いづれも多かれ少なかれ相異つた組成を有してゐる。此等の資本の個別的組成の平均に依つて、この生産部門に於ける總資本の組成が知られる。最後に、各生産部門の平均的組成を合計して得る所の總平均に依つて、一國に於ける社會的資本の組成が知られる。以下の説明では、終審的にこの社會的資本の組成だけについて語る。

資本の増大といふ中には、勞働力に轉化される可變資本部分の増大も含まれてゐる。追加資本に轉化される餘剩價値の一部は、常に可變資本たる追加勞働基金に再轉化されねばならぬものである。他の事情に變化なくして、資本の組成が不變であり、隨つて一定量の生産機關たる不變資本を運轉するのに常に同一量の勞働力が必要であると假定すれば、その場合、勞働の需要並びに勞働者の生存基金は資本の増加と同一の比例を以つて増加し、資本の増大が急速なるに従つて益々急速に増加する。

に至るは、明かな事實である。資本は年々一の餘剩價值を生産し、この餘剩價值の一部は年々原資本に組み込まれるが故に、而して斯かる追加量はまた、既に機能しつつある資本が擴大されると共に、年々増加するものなるが故に、最後に例へば、新たに生じて來た社會的需要に依つて、新たな市場が、新たな投資部面が開始される等の如き致富衝動の特殊の刺戟を受けて、資本及び收入への餘剩價值（又は餘剩生産物）の分割が單に變化するといふだけの原因から、蓄積の規模が突然擴大し得るものとなる故に、これがため、資本の蓄積欲望は勞働力又は勞働者數の増大を、勞働者に對する需要は供給を凌駕し、斯くして勞銀は昂騰を來たすことになり得るのである。

而してこれはまた、上に假定する所の事實が變化なく持續するとき、終局に於いて事實となつて現れて來ねばならぬのである。前年に於けるよりも多數の勞働者が年々使用されるのであるから、蓄積の欲望が通例の勞働供給以上に出で始め、斯くして勞銀の昂騰を生ぜしめる所の限點に、結局早かれ晩かれ到達せねばならない譯である。斯ういふ傾向を訴へる所の怨嗟は、十五世紀の全體及び十八世紀の前半期中、イギリスに聽かれた所である。だが、賃銀勞働者を維持し増殖せしめる所の、多かれ少なかれ有利な状態は、資本制生産の根本性質の上には何等の影響をも及ぼすものでない。單純なる再生産は、絶えず資本關係それ自身を、即ち一方には資本家、他方には賃銀勞働者を再生産するものであるが、それと同様に、規模の擴大しつつある再生産（即ち蓄積）も亦、規模の擴大しつつある資本關係を、即ち一方の極にはヨリ多くの資本家又はヨリ大なる資本家を、他方の極にはヨリ多くの賃銀勞働者を再生産する。勞働力なるものは絶えず價值増殖要素として資本に併合されねばならず、資本から切り離され得るものではないのであつて、それが資本の下に隸從せしめられてゐるといふ事實は、勞働力の購買者たる個々の資本家の顔觸れの變化に依つて隱蔽されるに過ぎぬのであるが、斯くの如き勞働力の再生産は、實際のところ、資本それ自身の再生産の一要素となつてゐるのである。そこで、資本の蓄積はプロレタリアの増殖を意味することになる（七十）。

（七十）拙著『賃銀勞働と資本』ベルリン版、一九〇七年刊、第二八頁。『民衆の壓迫に變化がないとすれば、一國の有するプロレタリアの數が大なれば大なるほど、その國は益々富裕となるのである』（コラン著『經濟學、革命と社會主義ユートピアとの源泉』パリ、一八五七年刊、第三卷、第三三一頁）を。經濟學上からいへば『プロレタリア』とは『資本』を生産し増大する所の賃銀勞働者、而してベクルが『資本君』と名づけてゐる人々の價值増殖欲望にとつて不用となるや否や驅逐される所の賃銀勞働者に外ならぬものである。『原始森林の病弱なプロレタリア』とは、ロッシア式の美しい幻想であ

る。原始森林に棲息せる者は、原始森林の所有者であつて、彼れは狸々の如く毫も憚る所なく原始森林を自己の所有として取扱つてゐるのである。それ故に、彼れはプロレタリアではない。彼れが原始森林を利用するのでなく、原始森林が却つて彼れを利用するに至つた場合にのみ、彼れはプロレタリアたるであらう。健康状態からいへば、彼れは單に近世プロレタリアとの比較のみでなく、また徹毒的な瘰癧的な上流階級との比較にもよく耐え得るのである。だが、ウエルヘルム・ロッシア

一君の謂ふ原始森林とは、恐らく彼れの故郷リューネブルヒの叢林のことであらう。

正統派經濟學はこの事實を十分に捕捉したものであつて、アダム・スミスヤリカルドその他の如きに至つては、曩にも述べた如く、著積をば資本に轉化された餘剰生産物部分の全部が生産的勞働者に依つて消費されること、換言すればそれが追加勞働者に轉化されることと同一視するの誤謬に陥つたほどである。

ジョン・ペラーズは一六九六年すでに述べて曰く『若し或る人が十萬エーカーの土地と、十萬磅の貨幣と、十萬頭の家畜とを有し、而も一人の勞働者をも有しないとすれば、この富者はみづから勞働者となる以外に果して如何なるものとなるであらうか？ 而して勞働者は人々を富裕にするものであるから、勞働者が多ければ多いほど、富者も亦ますます／＼多くなる譯である。：：貧者の勞働は富者の鑛山なのである』(七十一)と。

(七十一) ジョン・ペラーズ著『産業大學設立案』ロンドン、一六九六年刊、第二頁。

バーナード・ド・マンデウキルも亦、十八世紀初葉に次の如く言つた。——『所有がよく保護されてゐる處にあつては、貧民なくして生活するよりも寧ろ貨幣なくして生活することの方が容易な位みであらう。蓋し貧民がないとすれば、一體たれが勞働するであらうか？：：貧民は饑餓に對して保護せらるべきであるから、貯蓄に値する何物をも受くべきでない。若し此處彼處に於いて、最下級民の一人が非常なる勤勉に依り、食ふ物も食はないやうにして、彼れの生ひ立つ地位以上に立身せんとする時、何人も彼れを妨ぐべきではない。否、簡儉こそ、社會の凡ゆる私個人、凡ゆる私家族にとつて、最も賢明な方法であることとは拒み難い所である。けれども貧民の大部分が決して怠惰となることなく、而もその得る所のものを常に支出するといふ傾向は、如何なる富裕國にとつても有利なことである。日々の勞働に依つてその生計を營んでゐる人々は：：欲望以外には勤勞を刺戟すべき何等の原因をも有たない。されば、欲望を緩和するは賢明な策であるが、治療するは愚策なのである。勞働者を勤勉ならしめ得べき唯一の手段となるものは、適度の賃銀即ちこれである。賃銀が餘りに少ないと、氣質に依つては意氣沮喪したり自暴自棄に陥つたりする。が、また賃銀が餘りに多いと、傲慢になつたり懶惰になつたりする。以上説く所に依つて、

奴隷の存在を許さない自由國に於ける最も確實な富が、勞働貧民の多數といふ點に存することが知られるであらう。蓋し此等の貧民は陸海軍に對して盡くる所なき供給源泉となつてゐるのみではなく、彼等なくんば何等の享樂も存在し得ず、一國の如何なる生産物も利用し得なくなつてしまふからである。社會（言ふ迄もなく勞働者以外の人々から成る所の）を幸福にし、人民をその最も貧弱なる境遇の下にも満足するやうにさせるには、人民の多數が貧困であり且つ無知であることを要する。知識は願望を擴大し倍加する。而も我々の願望する所が少なければ少ないほど、我々の欲望は益々容易に充足され得るのである（七十二）。

（七十二）バーナード・ド・マンデウキル著『蜜蜂物語』第五版、ロンドン、一七二八年刊、評述、第二一二、二一三及び三二八頁（六）。「節度ある生活と不斷の勞働とは（著者は出來得る限り長時間の勞働日と、出來得る限り僅小なる生活資料とをことを斯く言ふのである）、貧者を合理的幸福に至らしめ、國家（即ち地主、資本家及び政治上に於ける彼等の高官者や代理人）を富と力とに至らしめる直接の通路となるものである（匿名著『商工業論』ロンドン、一七七〇年刊、第五四頁）。

正直で頭腦の明晰なマンデウキルでさへ、尙且つ理解するに至らなかつた一事がある。それは即ち、蓄積行程それ自身の機構に依つて、資本と共にまた「勞働貧民」の數が増大せしめられるといふ事實である。而してこの勞働貧民とは、自己の勞働力をば、増大しつゝある資本の増大しつゝある價值増殖力に轉化せしめ、斯くすることに依つて、資本家なる存在の上に人格化された己れ自身の生産物に對する隷從關係をば永久化せねばならぬ賃銀勞働者を謂ふのである。この隷從關係につき、サー・フレデリック・モルトン・イーデンはその著『貧民の状態、又はイギリスに於ける勞働階級史』の中に述べて曰く「我國に於ける土地の自然的產物が我々の生活に十分でないことは確かである。我々は過去に於ける何等かの勞働に依らずしては、衣食住するものが出來ない。少なくとも社會の一部の人々は摸まざる勞働せねばならぬ。……ほかに尙一紡がず働かざれども、産業の生産物を支配し得る所の人々がある。然し彼等が斯く勞働を免れ得るのは、ひとえに文明と秩序とのお蔭である。……即ち人が己れ自身の勞働以外の方法に依つても富を占有し得ることを認めた市民制度（？）が、彼等を造り出すに至つたのである（七十三）。獨立した財産を有する人々は……決して自己の卓越した能力に依つてではなく、殆んど全く……他人の勤務に依つて……彼等の財産を得たのである。社會に於ける富裕分子を勞働分子から區別する所のもの、土地又は貨幣を所有するといふことではなく、他人の勞働を支配するといふことである。……斯かる計畫（イーデンの贊助を受けてゐるもの）に依つて、有産者は自己のために勞働する所の人々に對して揮ふべき十分決して過分ではないの影響と權力とを與へられ、これらの勞働者を

ば、下賤な又は奴隸的な状態ではなく、寧ろ安易にして寛大な隷屬状態に置くことになるであらう。斯かる隷屬状態が勞働者自身の幸福のために必要であることは、苟くも人間性とその歴史とを知る者の等しく認める所である(七十四)。ついでに言つて置くが、サー・フレデリック・モルトン・イーデンは、アダム・スミスの門弟中、十八世紀に於いて何等か重要な功績を擧げた唯一の學者なのである(七十二)。

(七十三) イーデンは寧ろ『市民制度』とは一體何から生れて来たかと問ふべき所である。彼れは法律的幻想の立場から、法律を以つて物質的生産事情の産物となさず、寧ろ反對に、生産事情を以つて法律の産物であるとなした。リングゲはモンテスキューの幻想の内に築かれた『法の精神』をば、『法の精神は所有なり』との一語を以つて覆へてしまつたのである。

(七十四) イーデン著『貧民の状態、又はイギリスに於ける勞働階級史』第一卷、第一篇、第一章、第一及び第二頁、及び別丁第二〇頁。

(七十五) これについて、讀者が若し一七九八年に『人口論』を刊行したマルサスのことを私に想起せしめるとすれば、私はまた讀者に次の事實を想起せしめる。即ち、最初に刊行された當時の形についていへば、この書はデ・フォーヤ、サー・ジェームズ・スチュアートや、タウンセンドや、フランクリンや、ワレースなどからの、學生的に淺薄な且つ僧侶流に書き換へられた剽竊に外ならぬものであつて、一の獨創的命題をも含んで居らぬといふことである。この書が非常な人氣を博した所以は、全く黨派的利害に因るものである。これより曩、フランス革命はイギリス王國內に熱心な辯護者を見出してゐたのである。『人口の原理』は十八世紀中に徐々と作り上げられ、次いで一大社會的危機の眞中に鐘鼓と喇叭とを以つてコンドルセー等の所説に對する無缺の反對毒として宣揚されたものであるが、イギリスの寡頭政治はこれを人間進歩に對する一切の熱望を絶滅する所の一大要素なりとして、歡呼を以つて迎へたのである。この成功に驚愕したマルサスは、次いで、皮相的に蒐集した材料を古き型に詰め込み、且つみづから發見したのではなく併合したに過ぎぬ他の新たなる材料を追加することに著手した。ついでに一言して置くが、マルサスはイギリス國教會の僧侶であつたとはいへ、獨身については兼々修道院的な誓ひを立ててゐた。斯くすることは、新教的なケンブリッジ大學の校友たる資格條件の」となつてゐたのである。『既婚者は校友たることを許さない。結婚する者は直ちに本校友たることを止めねばならぬ』(『ケンブリッジ大學委員會々報』第一七二頁)。以上の事實は、僧侶の獨身に關するカトリック的の命令をかなぐり捨てて、勞働者に向ひ『人口の原理』を説法しながら、到る處で眞に不體裁極まる程度を以つて人口増殖に貢獻してゐたほど、それほど『生めよ殖えよ』を特殊に

聖書的なる使命として主張した他の新教僧侶たちから、マルサスを有利に區別する所となつてゐるのである。經濟的に扮装された原罪、アダムの林檎、『差迫つた慾情』、僧侶タウンSENDが快活に言つた如き『キュビッド神の箭を鈍らせようとしてゐる故障』——これらの微妙なものが、新教神學或は寧ろ新教々會の人々に依つて獨占されたこと、獨占されてゐることは、まことに特徴的な現象である。獨創的にして才氣湧くが如きカトリック僧侶オルテス一人を除けば、人口問題の論者は大抵みな新教の僧侶たちなのである。この問題を取扱つた小ツぼけなヘボ僧侶たちは暫く措き、近世人口論の全部を説き盡くした『動物體系論、ライデン、一七六七年刊』この書は人口問題に關するケネーと彼れの門弟老ミラボーとの間に一時行はれた論争から、觀念を得て來たものであるの著者アルククナー(8)の如き、次いで僧侶ワレーレスの如き、僧侶タウンSENDの如き、僧侶マルサス及びその門弟なる大主教トマス・チャーマーズの如き、いづれもみな新教の僧侶であつた。

經濟學なるものは最初、ホップスや、ロックや、ヒュームなどの如き哲學者、トマス・モルス(モーア)や、テンブルや、サリヤー、ド・ウキットや、ノースや、ローヤ、ヴァンダーリントや、カンチオンや、フランクリンやの如き實業家並びに政治家更らに學理的方面では、特に最好結果を以つてペテヤ、バーボンや、マンデウキルや、ケネーやに依つて研究されたものである。十八世紀の中頃に及んでも尙、當時の顯要なる經濟學者であつた僧侶ジョサイア・タッカーは、彼れが黄金問題の研究に携はれることを辯解するといふ有様であつた。その後に至り、實際この『人口の原理』が刊行されると同時に、新教僧侶寂滅の鐘が鳴つたのである。人口を富の基礎として取扱ひ、アダム・スミスと同様に公然と僧侶の敵たることを標榜してゐたペテヤは、宛らこの不手際なお節介を豫覺せるもの如く述べて曰く『法律家のなす所最も少なきとき、法律は最もよく繁榮する如く、僧侶の苦行する所最も多きとき宗教は最もよく繁榮する』と。そこで彼れは新教の僧侶たちに忠言して曰く、若し諸君にして使徒ポーロの言に従ひ、獨身によつて『苦行』することを欲しないとすれば、『現在の寺祿に依つて吸收され得るよりも以上の教職者を造り出すべきでない。換言すれば、アイルランド及びスコットランドに一萬二千の教職口しかないとき、二萬四千人の教職者を造るは策の得たるものでない。斯くするときは、教職を得ざる一萬二千人は他に活計の道を求めることになるであらう。而してこの目的を達成するためには、世人に向つて、教職にある一萬二千人は諸君の靈を毒し飢えしむるものであり、天國への途を迷はすものであると説き信ぜしめること以上に容易な方法はないのである』と(ペテヤ著『租稅論』ロンドン、一六六七年刊、第五七頁)。當時の新教僧徒に對するアダム・スミスの立場の特徴は左の事實に依つて示される。『エル・ユル・ディー・アダム・スミスに與ふる書。彼れの友デヴィッド・ヒュームの一生と死亡と哲學とに

ついで。クリスト教徒と稱する人民の一人著。第四版、オックスフォード、一七八四年刊』の中で、ノアキック市の監督僧ドクター・ホーンは、次の理由に依つてアダム・スミスを非難してゐる。それはスミスがストレーアンに與へた公開状の中で『彼れの友人デウイッド（ヒューム）を木乃伊的に永久保存せしめよう』としたことや、『ヒュームが臨終の際ルシアンやホイストを讀んで笑んだ』事實を世に知らせたことや、甚しきはヒュームについて『私は彼れを、存命中にも、また死後に於いても、常に人間の脆弱性が許す範圍内に於いて、完全に賢明且つ有徳な人物の理想に近いものと見做してゐた』と書いたことや、さへも宜しくないといふのである。彼れは憤然として叫んで曰く『宗教と稱する一切のものに對して救治すべからざる反感を抱いてゐたやうに見える人、全力を盡して人類の間から宗教の精神を破壊し、抑壓し、剝絶し、能ふべくんば最早その名稱さへも記憶に存せしめないやうにしよう』と努めた人の品性及び行動をば、貴下が「完全に賢明且つ有徳」なものとして示されることは、果して當を得たことであらうか』〔前掲、第八頁〕と。『されど眞理の愛好者よ、落膽するなかれ。無神論は久しく存續し得るものではないから』〔前掲、第一七頁〕。アダム・スミスは『無神論を國內に傳播させようとする（即ちその「道徳感情論」に依つて）恐ろしい惡意を抱いてゐる。……我々は君の計略を知つてゐる。それは大體に於いて巧い考へではあるが、今回は成功覺束ないと信ずる。君はデウイッド・ヒューム君の實例に依つて我々を説服し、無神論は元氣なき者に對する唯一の充奮劑であり死の恐怖に對する適切な解毒劑であると信ぜしめようとしてゐる。君はただ廢墟となつたパピロンを見て微笑み、紅海の滅亡で心かたくなになつたパロ王を祝福し得るのみだ！』〔前掲、第二一及び二二頁〕。アダム・スミスの同窓の一人なる或る正統クリスト教徒は、スミスの死後に書いて曰く『ヒュームに對する彼れの友情は……彼れをしてクリスト教徒たらしむることを妨げた。……彼れは自己の好む正直な人々の言ふことは、殆んど總べて信じてしまふのが常であつた。若し彼れが獨創的の天文學者ホロックスの友であつたとすれば、彼れは澄み渡る上天に懸つた月が雲の作用に依らずして往々見えなくなるといふ説をも信じたであらう。……彼れは、政治上の主義では共和論に近づいてゐた』〔ジェームズ・アンダーソン著『蜜蜂』エヂンバラ、一七九一年——九三年刊、第三卷、第一六四及び一六五頁〕¹⁰。僧侶トマス・チアーマーズは、アダム・スミスが全くの惡意から『不生産的勞働者』といふ範疇を専ら新教僧侶たちの上に當て嵌る目的で發明したものであらう——彼等は主の葡萄園で祝福された勞働をしてゐるにも拘らず——との疑ひを懸けてゐる。

以上假定した如き、勞働者にとつて有利なる蓄積條件の下に於いては、資本に對する勞働者の隷從關係は、堪え得べき形態を、又はイーデンの言葉を藉りていへば『安易にして大まかな』形態を、採ることになるのである。この關係は、資本の増大

につれて内包的に益々著しくなるといふよりも、寧ろ外延的に著しくなつて來るに過ぎぬ。換言すれば、資本に依る搾取及び支配の部面は、資本それ自身の大きさと資本の隷従者たる賃銀労働者の數とが増大するにつれて擴大されるに過ぎぬのである。ます／＼膨大となつて絶えず追加資本に轉化される彼等自身の餘剰生産物の中、ヨリ大なる部分が支拂要具の形で彼等自身の手に戻流して來るので、彼等はその享樂の範圍を擴大し、衣類家具等に對する消費基金をヨリ十分に具へ、少額の準備金をも貯え得る様になる。衣食及び待遇の改善や家財道具の増加は、奴隸の隷従關係と搾取とを廢絶するに至らなかつたと同様に、賃銀労働者のそれを廢絶するものでもないのである。資本の蓄積に依る労働力價格の増騰なる現象は、實際、單に労働者自身の鍔へ上げた黄金の鎖が、その大きさと重みとのため緊張に弛みの生ずることを許すといふ事實を示すに過ぎぬ。この問題についての論争を見るに、大抵はみな、資本制生産の特徵的性質といふ根本の問題を看過してゐる。資本制生産の下に於いて労働力が購買されるのは、労働力に依る奉仕又は生産物を以つて購買者一身の個人的欲望を充足しようといふ目的に出づるものではない。彼れの目的は、自己の資本の價値を増加するに在る。換言すれば、彼れに依つて代價を支拂はれた分よりも以上の労働量を含む所の商品を、彼れにとつては何等の費用をも要せず而も販賣を通して實現される價値分を含む所の商品を、生産するに在る。餘剰價値を生産するといふこと、即ち貨殖を行ふといふことは、資本制生産方法の絶対律なのである。労働力なるものは、それが生産機關を資本として保存せしめ、それ自身の價値を資本として再生産し、更らに不拂労働を以つて追加資本の源泉を供給する限りに於いてのみ、販賣され得るものとなるのである(七十六)。

(七十六) 第二版註——『だが、工業労働者に於いても、農業労働者に於いても、彼等を雇傭せしめる限界には差異がない。即ち彼等の労働生産物の中から雇主のために利潤を生ぜしめ得る可能といふことが、その限界となつてゐるのである。賃銀率が高く雇主の利得が資本の平均利潤以下となつた場合には、彼れは労働者を雇傭しなくなるか、又は労働者が賃銀低減を承認するといふ條件の下にのみ、彼等の雇傭を續けることになるであらう』(前掲ジョン・ウエード著『中流階級及び労働階級の歴史』第二版、ロンドン、一八三五年刊、第二四一頁)。

されば労働力販賣の條件中には、労働者にとつて有利たる程度の如何を論ぜず、不斷に労働力を再販賣せねばならぬ必要と、ます／＼大規模に富が資本として再生産される事實とが含まれることになる。既に述べた如く、勞銀なるものはその性質上、労働者の側から一定量の不拂労働が供給されることを常に前提するものである。労働の價格が低落して勞銀が昂騰するといふやうな場合は暫く措き、勞銀の増大といふことは高々、労働者の給付すべき不拂労働の量が減少するといふことを意味す

るに止まる。この不拂労働減少は決して、資本制度そのものの存在を脅やかす點まで進み得るものではない。勞銀の率について激烈な衝突が行はれる場合——この衝突の結果、大體に於いて主人は常に主人たるを失ふものでないことは、アダム・スミスの既に示した所であるが——は暫く措き、資本の蓄積に依る労働價格の昂騰は、左に掲ぐる二條件のいづれか一方を前提するものである。

一、蓄積の進行を妨ぐることなき故に、労働の價格が昂騰を続けるといふこと。この事實には、何等異とすべき點がない。蓋し、アダム・スミスの言ふ如く『利潤は低下しても、資本は單に増加を続け得るといふのみでなく、従前に比して遙か急速に増加を続け得るからである。……利潤の小なる大資本は、利潤の大なる小資本に比し、概してヨリ急速に増加するものである』(七十六頁)。この場合、不拂労働の減少は決して資本支配の擴大を侵害するものでないことは明かである。

(七十六a) 『富國論』第二部、第一八九頁。

二、労働の價格が昂騰して、利得の刺戟が鈍る故に、蓄積が弛んで來ること。この場合、蓄積は減退することになるが、それと同時にまた、斯かる蓄積減退の原因(即ち資本と、搾取し得べき労働力との間の不均衡)は消滅する。要するに、資本制生産行程の機構は、それが暫行的に造り出した障碍をみづから除去することになるのである。斯くして労働の價格は低下し、資本の價值増殖慾に相應した水準——貨銀の昂騰する以前に標準的となつてゐた水準以上であるか、以下であるか、又はそれと同一であるかの如何を問はず——に復歸する。

そこで、斯ういふ事實が認められる。即ち右の第一の場合に於いては、労働力又は労働者數の絶對的乃至比例的増加の減退が資本を過剰ならしめるのではなく、寧ろ反對に、資本の増大が、搾取し得べき労働力を不十分ならしめるものであり、また第二の場合に於いては、労働力又は労働者數の絶對的乃至比例的増加の進行が、資本を不十分ならしめるのではなく、寧ろ反對に、資本の減少が搾取し得べき労働力(或は寧ろその價格)を過剰ならしめるといふ事實である。資本蓄積上の斯かる絶對的運動こそ、搾取し得べき労働力の量に於ける相對的運動として反射されるものであり、隨つてこの労働力の量それ自體の運動に起因するかの如く見える所のものである。數學上の言葉で以つていへば、蓄積の大きさは自變數、貨銀の大きさは他變數であつて、彼此反對ではないのである。斯くて産業循環途上の恐慌期に於いては、商品價格の一般的低落は相對的貨幣價值の昂騰として言ひ現され、營業振興期に於いては、商品價格の一般的昂騰は相對的貨幣價值の低落として言ひ現されることになる。この事實からして、謂はゆる通貨學派の人々は、物價昂騰の場合には、貨幣の流通が餘りに小、物價下落の場合には、貨幣の

流通が餘りに大であるとの結論を抜き出した。事實に對する彼等の無知と全くの誤解とは(七十七)、如上の蓄積諸現象が一方の場合には賃銀労働者餘りに少なき結果であり、他方の場合には賃銀労働者餘りに多き結果であるとする經濟學者たちの見解と好一對である。

(七十七) 拙著『經濟學批判』第一六六頁以下參照。

『自然的人口律』と稱するものの根柢に横はる資本制生産の法則を單純に概括すると、次の如くなる。——資本と蓄積と賃銀率との關係は、資本化された不拂労働と、追加資本の運動に必要な追加労働との關係に外ならぬ。それは、相互獨立した二つの大さ、即ち一方に於ける資本の大さと、他方に於ける労働者の人口數との關係ではなく、寧ろ究竟するところ、同一なる労働者人口の不拂労働と支拂労働との關係に過ぎぬのである。労働者階級に依つて供給され資本家階級に依つて蓄積される不拂労働の量が、支拂労働の異常なる追加を以つてするほか資本に轉化せられ得ないほど急速に増大するとすれば、その場合には賃銀は昂騰して、他の事情に變化なき限り不拂労働はそれに比例して減少することになる。けれども、この減少が進んで、資本を養ふ所の餘剩労働が最早平準の量を以つて供給されなくなる限點に觸れるや否や、一の反應作用が生じて來る。即ち、收入中の資本に轉化される部分は減少し、蓄積は弛滞して賃銀の昂騰運動は阻止されることになるのである。要するに、労働價格の昂騰なるものは、單に資本制度の根柢に抵觸しないと、更らに資本制度の擴大的再生産をも確保せしめる所の限界内に閉ぢ込められてゐるのである。そこで、一の自然律に神祕化された資本制蓄積の法則は、實際のところ次の事實を言ひ現すに過ぎぬものとなる。即ち、資本關係の間斷なき再生産と不斷擴大的の再生産とを、眞劍に危険ならしめ得る如き、労働搾取程度の低下又は労働價格の昂騰は、總べて、資本制蓄積それ自身の性質に依つて排除されるといふことである。斯うなるのは、對象的の富が労働者の發展慾のために存在するのではなく、寧ろ反對に、労働者が既存價値の増殖慾のために存在するといふ生産方法の下に於いては、如何ともすることが出來ないのである。人類は宗教に於いて、己れ自身の頭腦の産物に支配される如く、資本制生産の下に於いては、己れ自身の手の産物に支配されるのである(七十七a)。

(七十七a) 『されど資本そのものが人間労働の産物に過ぎぬことを論證した我々の最初の研究に立ち歸るとき……人類が己れ自身の生産物たる資本の支配下に陥つて、これに隷從せしめられ得るといふことは、全く理解し能はざる所であるやうに見える。而も、現實に於いてさうなつてゐることは、否定すべからざる事實であるから、次の問が我れ知らず起つて來る。

——『労働者は如何にして資本の創造者たる意味に於いて支配者たる位置から、下つて資本の奴隸となるを得たか?』(フオ

ン・チューネン著『孤立國家』第二部、第二篇、ロストック、一八六三年刊、第五及び六頁⁽¹²⁾。斯ういふ問を發したことは、チューネンの功績である。が、これに對する彼れの解答は、單純にあどけないものであつた。

(二) 蓄積及びそれに伴つて生ずる集積⁽¹³⁾の進行中に行はれる

可變資本分の相對的減少

經濟學者たち自身の主張に依れば、貨銀の昂騰を生ぜしむるものは、社會的富の既に與へられてゐる大小でもなければ、また既得資本の大小でもなく、ただ蓄積の不斷の増進とこの増進の速度とのみである(七十七b)。以上の説明に於いては、この行程の特殊の一段階——資本の技術的組成に變化なくして資本増加が行はれる段階のみを考察した。然しこの行程は、さういふ段階を越えて進むものである。

(七十七b) アダム・スミス著『富國論』第一部、第八章。

資本制度の一般的基礎が與へられてゐるとすれば、蓄積進行の途上に於いて、社會的労働の生産力が蓄積の最も有力な槓杆となる限點に逢著する場合が必らず生じて來るのである。アダム・スミスは曰く『貨銀を昂騰せしむる原因たる資本の増大はまた、労働の生産力を増進し、ヨリ少量の労働を以つてヨリ多量の生産物を生産せしむる傾向を有つてゐる』と。

土地の肥沃その他の如き諸種の自然條件や、互ひに獨立して個別的に労働する生産者の熟練——それは製作物の多寡に依つて量的に實現されるといふよりも、寧ろ製作物の良否に依つて質的に實現されるものであるから——に暫く措き、労働の社會的生產力なるものは、一人の労働者が一定の時間に、同一の労働力緊張を以つて、生産物に轉化せしめる生産機關の相對的大小に依つて言ひ現されるものである。彼れの労働に要する生産機關の量は、彼れの労働の生産力が増進するにつれて、ますます大となるのであるが、これについて生産機關は二重の役割を演ずる。即ち、或る生産機關の増大は労働生産力増進の結果であり他の生産機關の増大は労働生産力増進の條件となるのである。例へば、マニユファクチャー的分業と機械の充用とに依つて、同一時間にヨリ多量の原料が加工され、隨つてヨリ多量の原料及び助成材が労働行程に入るといふ如きは、労働生産力増進の結果なのである。他方にまた、充用機械や労働家畜や鑛物性肥料や排水管などの量は、労働生産力増進の條件である。建物や鑛鑛爐や運輸機關などに集積された生産機關の量についても矢張り同様である。だが、條件であるにしろ、結果であるにしろ、併合される労働力に比べてヨリ大となる生産機關の量は、労働生産力の増進を言ひ現すものである。即ち、労働生産

力の増進なるものは、運轉される生産機關の量に比して労働の量が減少するといふ事實、換言すれば労働行程の客觀的因子に比して主觀的因子の量が減少するといふ事實の上に現れるのである。

資本の技術的組成に生ずる斯様な變化、換言すれば生産機關の量が自己に生命を與へる労働力の量に比して増大するといふ事實は、資本の價值組成の上に、資本價值の可變部分を犠牲として不變部分が増大するといふ事實の上に、反射されるものである。百分率的に計算して、最初例へば五〇パーセントは生産機關、五〇パーセントは労働力に投せられてゐた一資本が、後に至つて労働生産力の増進せる結果、八〇パーセントを生産機關とし、二〇パーセントを労働力とするといふ風に變化してゆくのである。可變資本分に比して不變資本分が斯く累進的に増大するといふ法則は、その都度、商品價格の比較分析に依つて確められることは曩に述べた通りである。(同一國民の種々異つた經濟的時代を比較するか、同一時代に於ける種々異つた國民を比較するかといふことは、いづれにしても、この分析にとつて區別する所がない)。消費される生産機關の價值、即ち不變資本分のみを代表する價格要素の相對的大小は、總じて蓄積の進行に正比例し、労働の代價として支拂れる所の、換言すれば可變資本分のみを代表する所の、他の價格要素の相對的大小は、總じて蓄積の進行に逆比例するであらう。

だが、不變資本分に比して可變資本分が減少するといふ、資本價值の組成變化は、斯く資本の素材的成分に於ける組成變化を示すとはいつても、それは大凡の話である。例へば、十八世紀の初期、紡績業に投せられた資本價值は不變分が二分の一、可變分が二分の一といふ比例であつたのに、今日では不變分が八分の七、可變分が八分の一といふ比例になつてゐる。然るに一方、一定量の紡績労働に依つて生産的に消費される原料や労働要具などの量は、今日に於いては十八世紀の初期に比し幾百倍といふ程度に達してゐる。その理由を單純にいふと次の如くである。即ち労働の生産力が増進するとき、労働に依つて消費される生産機關の範圍は擴大されることになるが、單にそれのみでなく、この範圍に比べて、生産機關の價值は減少することになる。生産機關の價值は絶對的には増進するが、この増進は生産機關の範圍の増大に比例するものでない。要するに、不變資本と可變資本との差の増進は、不變資本の轉化される生産機關と可變資本の轉化される労働力との量の差の増進に比すれば遙かに小なるものであつて、前の差は後の差と共に増進するといへ、而もヨリ小さき程度を以つて増進するのである。

だが、蓄積の増進は可變資本分の相對量を小ならしめるとはいへ、決して絶對量の増大の可能を排除するものではない。一の資本價值が最初是不變資本五〇パーセント、可變資本五〇パーセントに分割され、後には不變資本八〇パーセント、可變資本二〇パーセントに分割されると假定する。而してその間に、例へば六千磅であつた原資本が一萬八千磅に増大したとすれ

ば、可變分も亦五分の一だけ増大して、三千磅であつたものが三千六百磅となる。けれども、労働の需要を二〇パーセント増大せしめるには、従前ならば二〇パーセントの資本追加で十分であつたのに、今では原資本を三倍に増大せねばならなくなつたのである。

労働の社會的生産力の發達が如何に大規模の協業を前提するか、而してまた、如何にこの前提の下にのみ、労働の分割及び結合が組織され、生産機關が大規模に集積されて節約され得るやうになるか、また素材的性質の上から見てただ共同的のみに充用し得べき労働要具たる例へば機械體系等の如きものが出現せしめられ、巨大なる自然力が生産の下に奉仕せしめられ、生産行程が科學の技術的應用に轉化され得る様になるか、それは本書第四篇に示した通りである。生産機關が私個人の所有に屬し、随つて、労働者が個別分立的に商品を生産するか、又は獨立經營の資力なきため自己の労働力を商品として販賣するかの外なき商品生産の基礎上に於いては、如上の前提はただ個々の資本の増大に依つてのみ、又は社會的の生産機關及び生活資料が資本家の私有たる程度に比例してのみ、實現されるのである。商品生産の地盤上に大規模の生産が擔はれ得るのは、商品生産が資本制的形態を探るに至つた場合に限られるのである。即ち、個々の商品生産者の手に一定量の資本が蓄積されるといふことが、特殊資本制的なる生産方法の前提條件となるのであつて、手工業から資本制經營への推轉を説く際我々が斯かる蓄積を假定せねばならなかつた所以は茲に在るのである。この蓄積は、特殊資本制的なる生産の歴史的结果といふよりも、寧ろ歴史的基礎たるものであるから、我々はこれを本來的の蓄積（積）と呼ぶことが出来る。この蓄積れれ自身が抑々如何にして生ずるかといふことは、今のところ穿鑿するに及ばない。それが起點となつてゐるといふことだけで十分である。この基礎上に労働の社會的生産力を増進せしむべき諸種の方法が生じて來るのであるが、此等一切の方法はまた同時に、それ自身蓄積の形成要素たる餘剩價值若しくは餘剩生産物の生産を増進する所の方法となるものであり、随つてまた同時に、資本を以つて資本を生産する所の方法、換言すれば資本蓄積の速度を増進する所の方法となるのである。餘剩價值の逐次的資本化は、生産行程に入る資本の量の増大として表現される。而してこの増大はまた、生産の規模を擴大せしめる所の基礎となるものであり、それに伴つて労働の生産力を増進すべき方法を生ぜしめ、且つ餘剩價值生産の速度を増進せしめる所の基礎ともなるのである。斯くして、一定の程度に於ける資本蓄積が、特殊資本制的なる生産方法の條件として現れると同時に、後者はまた、反作用的に資本蓄積の速度を増進せしめる。即ち資本の蓄積が増進するにつれて、特殊資本制的なる生産方法が發達し、資本制生産方法が發達するにつれてまた、資本の蓄積が増進することになるのであつて、この二つの經濟的因子は、相互に附與する所の刺戟

に複比例して、不變資本分に比し可變資本分を益々小ならしめる技術的組成上の變化を齎らすのである。

個々の各資本は、生産機關の大なり小なりの集積であつて、この集積の大小に應じて或は大、或は小なる勞働者軍を命令するものとなるのである。如何なる蓄積も、新たな蓄積の手段となる。如何なる蓄積も、資本として作用する富の量を大ならしめると同時に、また個々の資本家の手への富の集積を大ならしめ、斯くして大規模の生産並びに特殊資本制的なる生産方法の基礎を擴大することになる。社會的資本の増大は、數多き個別的資本の増大を通して行はれる。他の事情に變化なき限り、個別的諸資本と随つてまた生産機關の集積とは、此等の資本が社會的總資本の可除分たるに比例して増大するものである。それと同時に、原資本の嫩枝は、親木から分立して、新たな獨立資本たる機能を盡くすやうになる。これについては、資本家の家族内に於ける財産分割の事實が、なかんづく重要な役割を演ずる。即ち、資本の蓄積が増進するにつれて、資本家の數も亦多かれ少なかれ増加することになるのである。この種の集積は直接、蓄積に立脚するものであり、或は寧ろ蓄積と同一のものであつて、その特徴は二つの事實に依つて示される。

第一に、個々の資本家の手への社會的生產機關集積の増進は、他の事情に變化なき限り、社會的富の増殖程度に依つて制限されるといふこと、第二に、特殊の各生産面に定著せる社會的資本部分は、互ひに獨立し競争する所の商品生産者として對立せる多數資本家の間に分割されるといふこと。そこで單に、蓄積及びそれに伴ふ所の集積が、多くの方面に分散されるといふのみではなく、尙また各機能資本の増加が、新たな資本の形成と舊來の資本の分割とに依つて進行を妨げられることにもなるのである。要するに蓄積なるものは、一方に生産機關及び勞働支配の集積の増進として現れると同時に、他方にはまた、多數個別的資本の相互反撥としても現れるのである。

社會的の總資本が斯く多數の個別的資本に分割されるといふ事實、此等の資本斷片が互ひに反撥するといふ事實の一方にはまた、その相互牽引の事實もあつて、これに反對作用してゆくのである。この後ちの現象はもはや、蓄積と意義を同じくする所の、生産機關及び勞働支配の單純なる集積ではなく、寧ろ既成の諸資本が更らに集積されて、その個別的獨立が止揚されること、資本家に依る資本家の收奪が行はれて、多數の小資本が少數の大資本に轉化されることを意味するものである。この行程は、既に與へられてゐる機能資本の配分上の變化を前提するに過ぎぬのであるから、その作用面は社會的富の絕對的増加に依り、蓄積の絕對的限界に依つて制限されることはない。この點が曩の行程とは異なる所である。一方に多數の人々が資本を失へばこそ、他方に一人の把握する資本が膨大となつて來るのである。これ即ち、蓄積及び集積から區別された嚴密の意

味の集中^らなのである。

資本の斯かる集中（即ち資本に依る資本索引）の法則は、茲に説明することが出来ないから、簡單なる事實上の暗示だけで満足せねばならぬ。營業上の競争戦は、商品の廉價提供を通して行はれる。商品を廉價にするといふことは、他の事情に變化なき限り、勞働生産力の大きさに懸るものであり、勞働生産力の大きさはまた、生産規模の大きさに懸るものである。斯くして大資本は小資本を打ち破る。尙また、資本制生産方法が發達するにつれて、標準的條件の下に一の營業を行ふに必要な個別的資本の最低限量が擴大されることになるのは、我々の記憶する所である。これがため、小資本は、大産業が漸く此處彼處に起り始めたばかりの生産部面、又、大産業に征服されること尙不十分なる生産部面に、競つて流入することになる。この生産部面に於いては、競争は對抗資本の數に正比例し、大小に逆比例して激烈を極め、つねに數多き小資本家の没落を以つて終る。而も彼等の資本は、一部分は勝利者の手に移轉され、一部分は消滅に歸してしまふのである。

この事實は暫く措くとしても、資本制生産の發達に伴つて信用制度といふ全く新たな一勢力が形成されて來る。それは最初、竊かに蓄積の謙遜な助手として忍び來たり、大小様々な量に於いて社會の表面に分散してゐる貨幣資源をば、見えざる絲に依つて、個々の資本家なり結合資本家なりの手に牽引して來る。それはやがて、競争戦上の新たな恐るべき一武器となり、遂には資本集中を助長すべき異常なる社會的一機構に轉化されるのである。

集積の二大楨杆たる競争及び信用は、資本制的の生産と蓄積とが發達するに比例して發達し來たるものである。加ふるに、蓄積が進むにつれて、集中し得べき素材たる個々の資本が増加すると同時に、資本制生産の擴大に依つて、一方には社會的の欲望が造り出され、他方にはまた、經營上に豫め資本集中の存在を必要とする所の巨大な産業的分業の技術的手段が造り出されることになる。個別的資本の相互牽引力と集中の傾向とが、今日、過去の如何なる時代に於けるよりも強い所以は蓋し茲に存するのである。集中運動の相對的な擴大と力度とは、或る程度までは資本的富の既得の大小と經濟的機構の優越とに依つて決定されるとはいへ、而も集中の進行は決して社會的富の積極的増大の如何に懸るものではない。而してこの事實こそ正に、規模の擴大しつつある再生産の別名に過ぎざる集積から、格別に集中を區別する所の特徴なのである。單に既存資本の配分を變へ、社會的資本の成分の量的配置を變へるだけで、集中は行はれ得るのである。この場合、或る一人の手に膨大なる資本が把握され得るのは、一方に多數個人の手から資本が引き上げられる結果なのである。一定の營業部門についていへば、そこに投下された一切の資本が相合して單一の資本となつたとき集中は最極限に到達したことになる（七十七b）。また一定の社會につ

ていへば、社會的總資本が單一の資本家なり資本家會社なりの手に合一されたとき、茲に初めて集中は同一の最極限に到達したことになるのである。

(七十七b) [第四版註——最近英米兩國に發達したトラストは、少なくとも同一の營業部門に屬する一切の大經營を合一して實際上の獨占權を有する一大株式會社たらしめんとするものであつて、この意味に於いて既に如上の標的に達しようとしてゐる譯である。D・H.]

集中は産業資本家に經營の規模を擴大することを得せしめるものであつて、これに依り、蓄積の働きを補充することになるのである。經營の規模擴大が蓄積の結果であるにしろ、集中の結果であるにしろ、また集中が併合といふ強力的な手段に依つて行はれるにしろ(この場合には、或る若干の資本が他の資本に對する壓倒的の重心となつて、後者の個別的凝集を破壊しその個々に分散した諸斷片を吸引する)、乃至は既成もしくは形成中の多數資本の合同が株式會社の設立といふより圓滑な方法に依つて行はれるにしろ、いづれにしても經濟上の作用には變化がない。産業經營所の規模擴大は、何處に於いても多數人の總労働をばより包括的に組織せしめ、彼等の物質的起動力をばより廣大に發展せしむべき、換言すれば習慣的に經營される個別的の生産行程をば、社會的に結合され科學的に規制される所の生産行程にますます轉化せしむべき、起點となるのである。

元來、資本の蓄積なるものは、環狀より轉じて螺旋形となる再生産に依つて資本が漸次に増加することを意味するものであるから、社會的資本の組成分の量的配置を變へさすればよい集中に比して全く徐々たる行程に過ぎぬことは明かである。蓄積に依つて若干の個別的資本が鐵道の敷設をなし得るに至るまで待たねばならぬとしたならば、世界には今尙鐵道が與へられなかつたであらう。而も集中は株式會社に依つて、これを瞬く間に成し遂げてしまつたのである。而して集中は斯く蓄積の作用を大ならしめ、速かならしめつつ、同時に資本の技術的組成上に於ける革命——可變資本分を犠牲として不變資本分を擴大し、以つて労働の相對的需要を減少せしめる所の——をも大ならしめ、速かならしむるものである。

集中に依り一夜にして結合された資本量も亦他の資本と同様に、己れみづからを再生産し増殖し、以つて社會的蓄積の新たなる有力な積杆となるものであつて、異なる所はそれがより急速に進行するといふ一點のみである。されば今日、社會的蓄積の發達について語るとき、集中の作用も暗黙の裡に含めて考へる譯である。

通例の蓄積の進行中に形成される所の追加資本(第二章、第一節を見よ)は、主として新たなる發明や發見を、總括していへば産業上に與へられた諸種の改良を利用すべき媒具として役立つものであるが、然し、舊來の資本も亦、何時かはその四

肢五體を一新する時期に到達して、脱皮され、新たな追加資本と同様に、ヨリ少量の労働を以つてヨリ多量の機械及び原料を運轉することを得せしむる完成された技術的形態に生れ變つて來るのである。これから必然的に生じて來る労働需要の絶對的減少なる傾向は、この更新行程を經過すべき資本が集中運動に依つて既に大量となつてをればをるほど、ますます／＼甚しくなつて來ることは自明の事實である。

斯くして一方には、蓄積の進行中に形成された追加資本の大きさに比してますます／＼僅少の労働が吸引されると同時に、他方にはまた、週期的に新たな組成を以つて再生産される所の舊資本は、ますます／＼従前使用してゐた労働者を驅逐することになるのである。

(三) 相對的の過剰人口たる産業豫備軍の累進的生産

資本の蓄積は本來、資本の量的擴大として現れるに過ぎぬものであつて、この蓄積は資本組成の間斷なき質的變化を通して、不變資本分を犠牲として増大されるといふ事實を通して、行はれること(七十七c)に、我々の既に述べた所である。

(七十七c) 第三版註——これについてマルクスの草稿には左の標註が與へられてゐる。「後に説くことの參考として茲に一言すべきは、資本の擴大が量的のものに過ぎぬとすれば、同一の營業部門に於ける大なり小なりの資本に依つて得られる利潤の大小は、前貸資本の大小に比例する。量的擴大が質的變化を伴ふとすれば、大資本に於ける利潤率は同時にヨリ大となる譯である。』D. H.」

特殊資本制的なる生産方法、それに照應して生ずる労働生産力の發達、及びこれに依つて資本の有機的組成上に與へられる變化——此等のものは單に蓄積の進行乃至社會的富の増大と歩調を揃へて進むといふのみではない。寧ろ比較にならぬ程の急速力を以つて進行するのである。なぜならば、單純なる蓄積即ち總資本の絶對的擴大なるものは、總資本を構成する個別的要素の集中を伴ひ、追加資本の技術的革命は原資本の技術的革命を伴ふことになるからである。即ち、蓄積の進行につれて、可變資本部分に對する不變資本部分の比率に變化を來たすのである。この比率が最初 $\frac{1}{1}$ であつたとすれば、それは次第に $\frac{2}{1}$ 、 $\frac{3}{1}$ 、 $\frac{4}{1}$ 、 $\frac{5}{1}$ 、 $\frac{7}{1}$ 、 $\frac{11}{1}$ 等となり、資本が増大するに従つて、労働力に轉化される分は、最初に總價値の $\frac{1}{2}$ であつたものが $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{8}$ といふ風に益々遞減し、反對に、生産機關に轉化される分は $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{4}{5}$ 、 $\frac{5}{6}$ 、 $\frac{7}{8}$ といふ風に累進してゆく。ところで、労働の需要は、總資本の大小に依つて決定されるものでなく、可變資本分の大小

に依つて決定されるものであるから、それは曩に假定した如く總資本に比例して増進するものではなく、寧ろ總資本の増大につれて累進的に減少することになる。それは總資本の量に比べて相對的に、また、この量が大きくなるにつれて加速度的に、減少するのである。

總資本が大となるにつれて、その可變分も、隨つて總資本に合體される所の勞働力も亦大となることは事實であるが、然しこの増進の比率は絶えず遞減するものである。蓄積が、與へられたる技術的基礎上に於ける生産の擴大として作用するに過ぎぬ中間段階は縮小される。一定數の追加勞働者を吸收するためには、甚しきは、舊資本の上に不斷の轉行が行はれて既に機能を盡しつつある勞働者を引續き就業せしめるためにも、總資本の蓄積が加速度的に増進することを要するのであるが、單にそれのみでなく、この蓄積並びに集中の増進それ自身がまた、資本の組成上に新たな變化を生ぜしめ、斯くして不變資本分に比較せる可變資本分の減少を更らに促進するところの一源泉となるのである。總資本の増大につれてヨリ急速に進行する可變資本分の斯かる相對的減少は、一方に勞働者人口の絶對的増殖が勞働者の雇傭手段たる可變資本よりも常に急速に進行するといふ反對の外觀を採つて現れる。資本制的の蓄積は寧ろ、その力度及び範圍の進行に比例して、相對的に（即ち資本の中位的な價值増殖慾に比して）多すぎるところの、隨つてまた過剩たり超過たるところの勞働者人口⁽¹⁶⁾を不斷に生産してゐるのである。

社會的の總資本についていへば、蓄積の運動に依つて或る時には週期的の變化が喚び起され、或る時にはまた蓄積の諸段階が同時に種々異つた生産部面の上に配分される。或る若干の生産部面に於いては、單なる集積だけの作用に依り資本の絶對量は増大しないで組成の變化が生じ、他の部面に於いては、資本の絶對的増大が可變資本分の、即ち吸收される勞働力の絶對的減少を伴ひ、更らに他の部面に於いては、或る時には與へられたる技術的基礎上に資本の増大が續けられ、この増大に比例して追加勞働力が吸引され、或る時にはまた資本の有機的組成に變化が生じて可變分が收縮される。然しこれらの部面に於いても、可變資本分の、隨つてまた雇傭勞働者數の増大は、常に激烈な變動と過剩人口の暫行的な生産とを伴ふことになる。（この過剩人口生産が、既に使用されてゐる勞働者を反撥するといふ、ヨリ際立つた形態を採るか、又は追加勞働者人口が常例の排水溝に吸收され難くなるといふ、ヨリ地味ではあるが然し作用力は劣らない形態を採るかといふことは、茲には問はないのである）（七十八）。既に作用してゐる社會資本の量が増大し、この増大の程度が進むにつれ、即ち生産の規模が擴大されて運轉される勞働者の數が増殖するにつれ、斯くしてまた、彼等の勞働生産力が發達し、富の凡ゆる源泉がますます廣大に且つ充實的に流

出して来るにつれて、資本に依る労働者のヨリ大なる吸引がヨリ大なる反撥を伴ふ所の規模も擴大され、資本の有機的組成及び技術的形態に於ける變動もヨリ急速となり、而してこの變動を或は同時に或は交代的に受ける生産部面の數もますます大となつて来る。即ち労働者人口なるものは、一方に資本の蓄積を生ぜしめると同時にまた、他方には己れ自身を相對的に過剰ならしむる手段を絶えずますます産出することになるのである(七十九)。これ資本制生産方法獨特の人口律なのである。而して實際のところ、如何なる特殊の歴史的生産方法も、歴史的に妥當なるそれ自身の特殊な人口律を有してゐるのであつて、抽象的の人口律なるものは、人類から歴史的に干渉を受けない限りでの動植物の上のみに存在してゐるのである。

(七十八) イングランド及びウェールズの國勢調査に示されてゐる所に依れば、農業に従事する一切の人々(土地所有者、小作業者、庭師、牧羊者等を含む)の數は一八五一年には二、〇一一、四四七人であつたが、一八六一年には一、九二四、一一〇人となつて、八七、三三七人の減少を來したのである。毛絲製造業は一八五一年には一〇二、七一四人。一八六一年には七九、二四二人。絹製造業は一八五一年には一一一、九四〇人、一八六一年には一〇一、六七八人、キャラコ捺染業は一八五一年には一二、〇九八人、一八六一年には一二、五五六人(この僅少な増加は、營業が非常に擴大された當時の現象であつて、被傭労働者の數がそれに比例して甚しく減少したことを意味する)。製絹業は一八五一年には一五、九五七人、一八六一年には一三、八一四人。麥莖帽及びボンネット製造業は一八五一年には二〇、三九三人、一八六一年には一八、一七六人。麥芽製造業は一八五一年には一〇、五六六人、一八六一年には一〇、六七七人。蠟燭製造業は一八五一年には四、九四九人、一八六一年には四、六八六人(この減少は主として點燈用瓦斯の増加に因るものである)。製糖業は一八五一年には二、〇三八人、一八六一年には一、四七八人。挽材業は一八五一年には三〇、五五二人、一八六一年には三一、六四七人(この僅少な増加は挽材業の流行に因る)。製釘業は一八五一年には二六、九四〇人、一八六一年には二六、一三〇人(この減少は機械の競争が生じた結果)。錫及び銅の探掘業に於ける労働者は一八五一年には三一、三六〇人、一八六一年には三二、〇四一人。他方に木綿紡績業及び機械織業は一八五一年には三七一、七七七人、一八六一年には四五六、六四六人。炭坑は一八五一年には一八三、三八九人、一八六一年には二四六、六一三人。『總じて一八五一年以降、労働者増加の最も著しかった方面は、機械が今日尙好成绩を以つて充用されるに至らないやうな諸産業である』(一八六二年のイングランド及びウェールズ國勢調査)第三卷、ロンドン、一八六三年刊、第三六頁(分)。

(七十九) 可變資本相對量の累進的減少に關する法則、及びそれが賃銀労働者階級の位置に及ぼす影響については、正統派經

濟學者の中でも若干の卓絶した人々は、既にこれを理解——といふよりは寧ろ感づいてゐた。この點について最大の功績を擔ふものはジョン・バートンである。尤も、彼れは他の總べての正統派經濟學者と同じく、不變資本を以つて固定資本と混同し、可變資本を以つて流通資本と混同してゐた。即ち、彼れは曰く『労働需要の増進は、固定資本の増加ではなく流通資本の増加に懸るものである。この二種の資本の相互比例が若し如何なる時にも、如何なる事情の下にも、同一であるとするれば、被僱労働者の數は國家の富に比例するといふ結論が實際生じて來る譯であるが、斯かる假定は事實ありさうなことは思はれぬ。技術が涵養され文明が普及するに従つて、流通資本に對する固定資本の割合はますます大となる。イギリス製モスリン一反の生産に充用される固定資本の額は、インド製モスリン一反の生産に充用される固定資本の額に比し、少なくとも百倍に達してゐる。或は恐らく千倍ともなつてゐるであらう。これに反して流通資本の額は百分の一又は千分の一に過ぎぬ。年々貯蓄する所の全部を固定資本に追加しても、労働需要を増加せしむる上には何等影響する所がないであらう』(『ジョン・バートン著』社會に於ける労働階級の状態に影響を及ぼす事情の觀察) ロンドン、一八一七年刊、第一六六及び一七頁、18。

『この國の純收入を増大せしめ得る原因は、同時にまた人口を過剩にし労働者の状態を悪化せしめ得るのである (リカルド著『經濟原論』第四六九頁)。資本の増加に比して『労働の需要は遞減することになる』(前掲、第四八〇頁註)。『労働の維持に供せられる資本額は、總資本額の如何なる變化からも獨立に變化し得る。雇傭上の著しき變動と労働者の大なる窮乏とは、資本それ自身が豊富となるに従つてますます頻繁となり得るであらう』(リチャード・ジョーンズ著『經濟學序講』ロンドン、一八三三年刊、第一三頁)。『労働の需要は一般資本の蓄積に比例して……増大するものではないであらう。随つて、再生産に充用すべく豫定された國民的資本の各増加が労働者の位置に及ぼす影響は、社會の進歩につれてますます小となるであらう』(ラムゼー著『富の分配論』エヂンバラ、一八三六年刊、第九〇及び九一頁)。

労働者の過剰人口なるものは、蓄積の、又は資本制の基礎の上に於ける富の發達の必然的產物であると同時に、また資本制蓄積の槓杆ともなる。否、資本制生産方法の存在條件の一ともなるのである。それは、資本が恰も自己の費用を以つて養成したものであるかの如く全く絶對的に隷屬せしめてゐる所の、自由に利用し得べき産業豫備軍なるものを形成するのであつて、資本の轉變常なき價值増殖慾のために、何時でも搾取し得るやうに準備された人間材料をば、現實的人口増殖の制限から獨立に造り出すのである。

蓄積が進み、それに伴つて労働の生産力が發達するに従ひ、資本の突然の伸張力はますます増進して來るのであるが、これは

單に機能資本の伸縮が著しくなり、資本を伸縮自在なる一組成分子として包含してゐる絶對的の富が増加する結果たるのみでなく、また特殊の刺戟を受くる度び毎に、信用が隣く間にこの富の異常なる部分を追加資本として生産の支配に委ねしめる結果たるのみでもない。それは更に、生産行程それ自身の技術的條件たる機械や、運輸機關や、その他のものに依つて、餘剰生産物の追加生産機關への急速なる轉化が極めて大規模に可能とされることにも起因するのである。蓄積の進行につれて充溢し來たる所の、追加資本に轉化され得る社會的富の大量は、突然市場を擴大された舊來の生産部門、又はこの生産部門が發展せるためその必要上新たに開始された生産部門（鐵道などの如き）に向つて狂亂的に流れ込んで行く。この種の如何なる場合に於いても、他の部面に於ける生産規模を傷けることなくして、決定的なる生産部面に突然大量の人間供給を與へ得ることが必要となつて來る。この供給は、過剰人口に依つて與へられるものである。營業の中位的な活氣や、生産の繁忙や、恐慌や、營業沈滞などの各時期は、その間諸種の小變動に依つて中斷されつつ、十年毎に循環するものであつて、これが近世産業の進むべき特徴的な経路となつてゐるのであるが、斯かる循環形態は、産業豫備軍たる過剰人口が不斷に形成され、大なり小なりの程度に於いて吸収されては更に再形成されるといふ事實に基くものである。他方にまた、産業循環の轉變は新たな過剰人口を供給するものであつて、その最も有力な再生産要因の一となるのである。

近世産業獨特の斯かる経路は、近世以前の如何なる人類時代にも存在しなかつた所であり、資本制生産の幼少期に於いても尙不可能であつた。資本組成の變化は極めて徐々たるものに過ぎず、労働需要の増大は大體に於いて資本の蓄積に照應したのである。資本蓄積の進歩は、近世のそれに比すれば徐々たるものであつたといへ、而も尙、搾取し得べき労働者人口の自然制限に達した。この制限は後に述ぶる如き強行手段に依つてのみ廢除するを得たのである。生産規模の突然的且つ發作的な伸張は、同様に突然的な生産規模收縮の前提となるものであり、後者はまた前者を喚び起すのであるが、然し利用し得べき人間材料なくしては、絶對的の人口増殖から獨立した労働者の増殖なくしては、前者は不可能なのである。この労働者増殖は、労働者の一部を不斷に「遊離」せしむる所の單純な行程に依つて、増大した生産に比し被傭労働者の數を減少せしむる所に依つて達成される。斯くの如く、近世産業の運動形態は、労働者人口の一部が絶えず失業者又は半就業者に轉化されるといふ事實に胚胎してゐるのである。經濟學の見解が如何に皮相的であるかは、産業循環の週期的轉變の單なる徴候に過ぎぬ信用の伸縮といふ現象を以つて、寧ろその原因なりとする點にも現れてゐる。一度び一定の運動に投ぜられた天體が常に同一の運動を反復する如く、社會的生産も亦一度び如上の伸縮運動に投ぜられると絶えずこれを反復するのである。結果は原因となつ

て、己れ自身の條件を不斷に再生産するに亍程の轉變は、週期性の形態を採るやうになる。而してこの週期性が一度び固定するに至つたとき、經濟學でさへも相對的過剩人口（換言すれば資本の中位的な價值増殖慾に比して過剩なる人口）の生産を以つて近世産業の死活條件なりとするやうになるのである。

曩にオックスフォード大學の經濟學教授を勤め、後ちイギリス植民省の吏僚となつたハーマン・メリヴェールは曰く『斯ういふ恐慌の際、國民が幾十萬の過剩人口を國外に移住せしむることに依つて急場を逃れんと努力するやうになつたとすれば、その結果する所は果して如何？ 勞働需要が先づ再歸したとき、勞働の不足に落著るといふ結果を來たすであらう。人類の生産が如何に迅速に行はれた所で、失はれたる成年勞働者を補充するにはどうしても一代の期間を要する。ところで、我が製造業者たちの利潤は需要の活潑な好機に乗じて緩慢なる時期に蒙つた損失の補償をなす力の如何に主として懸るものである。而してこの力は、機械と筋肉勞働との支配に依つてのみ確保されるのである。彼等は利用し得べき勞働者を準備して置かねばならず、市況の如何に應じて操業の活動を強めたり弱めたりすることをなし得なくてはならぬ。然らずんば、我が國富の基礎たる優勝位置を競争戦上に維持してゆくことは到底不可能たるであらう』(八十)と。

(八十) ハーマン・メリヴェール著『植民地に關する講演』(ロンドン、一八四一乃至四二年刊、第一卷、第一四六頁) 19。
マルサスはその局限された見地に立つて、過剩人口なるものは勞働者の相對的人口過剩に因るものでなく、寧ろ絕對的人口過剩に因るとしたのであるが、そのマルサスでさへも近世産業の一必然を認めたのである。彼れは曰く『結婚についての思慮ある習慣も、それが商工業に主として倚存する一國の勞働階級間に甚しく行はれるときは有害になつて來る。……特殊の需要が生じた場合、追加勞働者を市場に供給することは、人口の性質上十六年又は十八年を経過した後でなければ不可能である。然るに、吟著に依る収入の資本化は、それよりも遙か急速に行はれ得る。一國の勞働基金は、とかく人口に比してヨリ急速に増大する傾きあるものである』(八十一)と。

(八十一) マルサス著『經濟原論』第二五四、三一九、及び三二〇頁。この書の中で、マルサスはシスモンデの助けに依つて遂に過剩生産と過剩人口と過剩消費といふ資本制生産の美しき三位一體——極めて微妙な三つの怪物！——を發見するに至つた。フリードリヒ・エンゲルス著『國民經濟批判要綱』第一〇七頁以下參照。

經濟學に斯く相對的過剩勞働者人口の不斷の生産を以つて資本制蓄積の一必然なりとした後、極めて適切に老處女の姿を以つて、己れ自身の手で造り出した追加資本のために驅逐された『過剩者』に對し、左の言葉を資本家の『美しき理想』の口を

通して語らしめてゐる。——『我等製造業者は諸君の生活に必要な資本を増大せしめることに依つて、諸君のためになし得ることをなしてゐるのであるから、諸君も亦、諸君の人口を生活資料に適合せしめることに依つて自餘のことをなすべきである』(八十二)。

(八十二)ハリエット・マルチノー著『マンチエスター罷工』一八四二年刊、第一〇二頁。

資本制生産は決して、人口の自然的増殖に依つて供給される所の、利用し得べき労働力の量だけで満足するものではない。資本制生産をして自由に作用せしめるためには、この自然的制限から獨立した産業豫備軍を要するのである。

以上の説明に於いては、被傭労働者数の増減が嚴密に可變資本の増減に一致すると假定した。

けれども、個々の各労働者がヨリ多くの労働を供給して、勞銀を増大せしめるとすれば、労働の價格に變化なく、甚しきばそれが低落する場合にも、この低落が労働量の増大に比して緩慢に行はれる限り、可變資本に依つて命令される労働者の數に變化せず、或は寧ろ減少するとしても、可變資本は増大することになるのである。斯かる場合、可變資本の増大はヨリ多くの労働の指標とはなるが、ヨリ多くの被傭労働者の指標となるものではない。一定量の労働を數多き労働者よりも寧ろ數少なき労働者から搾り取ることは、労働の費用が同一であり、又はヨリ大きくなると假定しても、資本家にとつては絶對的に有利とされる所である。蓋しヨリ多くの労働者を使用する場合には不變資本の放下は實現すべき労働の量に比例して大となるのであるが、少數の労働者を使用する場合には、放下不變資本の増加の方がヨリ緩慢となるからである。この動機は、生産の規模が大となるに従つてますます決定的となり、資本の蓄積が進むにつれてますます重味を増して來る。

蓄積の原因ともなり結果ともなる所の、資本制生産方法及び労働生産力の發達が行はれるとき、資本家は個々の労働力の搾取を外延的(時間的)又は内包的(能率的)に増進せしめることに依り、同一の放下可變資本を以つてヨリ多量の労働を實現せしめ得るに至ることは曩に述べた通りである。更らに資本家は、不熟練工を以つて成熟工を、未成熟工を以つて成熟工を、女工を以つて男工を、未成年者又は幼童の労働力を以つて成年労働力を、ますます驅逐することに依り、同一の資本價值を以つてヨリ多くの労働力を購買するに至ることも、我々の既に見た所である。

斯くして蓄積が進むに従ひ、一方にはヨリ大なる可變資本がヨリ多數の労働者を雇ひ入れることなくしてヨリ多くの労働を實現せしめると同時に、他方には、同一量の可變資本が同一量の労働力を以つてヨリ多くの労働を實現せしめ、最後にまた、高級の労働力を驅逐することに依つてヨリ多くの低級労働力を利用せしめることになるのである。

要するに、相對的過剰人口の生産、換言すれば労働者の遊離なる現象は、さらでだに蓄積の發達につれて速度を進められつつある生産行程の技術的の革命、及びそれに伴つて行はれる不變資本分に比較しての可變資本分の減少といふ現象に比し、ヨリ急速に進行するものである。生産機關なるものは、その範圍と作用力とが進むに従ひ、労働者の雇傭手段たる程度を減ずるものであるが、この事情はまた、労働の生産力が増進するに比例して、資本は労働者に對する需要よりも寧ろ労働の供給をヨリ急速に増進せしめるといふ事實に依つて變化を受ける。労働者階級中の就業者部分に依つて過度の労働が供給されるといふ事實は、労働豫備軍の隊列を大ならしめるものであるが、反對にまた、この豫備軍が競争に依つて此等の就業者に加へる壓迫の増大は、後者をして過度の労働をなし、資本の支配の下に服従せしめる所の強制力となる。労働者階級の一部の者に過度の労働をなさしめ、斯くして殘餘の労働者を強制的に遊惰の境地に陥れてしまふこと、及びその反對の事實は、個々の資本家の致富手段（八十三）たると同時に、また社會的蓄積の進行に照應した規模に於ける産業豫備軍の生産を速かならしめるものである。

（八十三）一八六三年の棉花窮乏當時でさへ、過度の労働——これは工場法實施の結果、勿論、成年男工以外の者に對しては許されなくなつたのであるが——について猛烈な難撃が與へられてゐたことは、ブラックバイン市の綿紡工たちに依つて刊行された一小冊子の中に掲げられてゐる所である。その中に曰く『一家を扶養し、且つ同僚が過度の労働に依つて早死するに至るを防ぐためには、不十分な時間の労働をも辭しないと云ふ、遊惰を餘儀なくされた幾百人の労働者が存在してゐると云ふ、この工場の成年工たちは一日に十二時間乃至十八時間も労働させられてゐた』と。更らに曰く『斯く若干の労働者に過度の労働をなさしめる常習が、果して主従間に好感を造り得べきか否かと、我々は問ひたいのである。過度の労働をなす者は遊惰を餘儀なくされる者と同様に、不當なことを強要されてゐると感ずるのである。適當に配分しなすれば、總べての労働者に或る程度の就業を與へるに不足する所なき十分の仕事が、この地方には存在してゐるのである。一部の労働者が労働缺乏のため慈善に依つて生活するを餘儀なくされてゐるとき、他の労働者たちに過度の労働をさせるやうなことをするよりも、寧ろ特に事態が改善されるに至るまでは、一般に短時間採業を實施するに至らんことを我々は要求するものであるが、これは決して不當な要求ではないのである』（『工場監督官報告、一八六三年十月三十一日』第八頁）。『商工業論』の著者は、お定りの誤まらざるアルデオア本能を以つて、相對的の過剰人口が就業労働者の上に及ぼす影響を理解してゐる。彼れは曰く『この國に於ける怠惰のいま一つの原因は、労働者の數が十分でないといふことである。……製造業が非常なる需要

を受けて、労働の不足を來たすに至るとき、労働者は自己の重要性を感ずると同時に、雇主にもこれを感ぜしめようとする。これは驚くべきことである。だが、彼等の精神は墮落し盡してゐるので、さういふ場合には互ひに團合して無爲に終日を消過し、以つて雇主を困惑せしめようとするのである』（匿名著『商工業論』第二七及び二八頁）。要するに、此等の連中は賃銀の値上げを要求してゐたのである。

相對的過剰人口形成上のこの要素が如何に重要であるかは、例へばイギリスに於いて證明される。イギリスに行はれた労働「節約」上の技術的手段は素晴らしいものであつた。だが、明日にも労働が普く合理的な程度に制限され、年齢と男女の別に従つて種々なる労働者部類の間に適當に再配置されるやうになるとすれば、現存の労働者人口を以つてしては、國民的生産を現在通りの規模で續けてゆくには絶対に不十分となるであらう。それで、現在『不生産的』となつてゐる労働者の大多數は、『生産的』労働者に轉化されねばならなくなるのである。

大體についていふと、勞銀の一般的運動なるものは、専ら、産業循環の週期的轉變に伴ふ産業豫備軍の伸縮に依つて調節されるのである。随つてそれは、労働者の絶對的人口數の變動に依つて決定されるものでなく、労働者階級が現役軍と豫備軍とに分割される比率の變動に依り、過剰人口の相對的範圍の伸縮に依つて、換言すれば過剰人口が吸収されては遊離される程度如何に依つて、決定される譯である。資本が伸張する結果、労働市場が相對的に不足となつて現れたり、資本が收縮する結果それが過充となつて現れたりするといふ風に、資本の伸縮随つてまた各場合に於ける資本の價值増殖慾に従つて労働の需給を規制せしめるのではなく、寧ろ反對に、資本の運動の方を人口數の絶對的運動に倚存せしめるといふことは、十年毎に反復される循環と、その週期的なる諸段階——此等の階段はまた、蓄積が進むにつれて、絶えずヨリ急速に續起する所の不規則的な變動に依つて交錯されるのであるが——とを特徴とする近世的産業の立場から見れば、實際、美しい一法則であらう。が、それは經濟學上のドグマなのである。この見解に依れば、資本の蓄積に従つて勞銀は増騰する譯である。斯く増騰した勞銀は、労働者人口のヨリ急速なる増殖を刺戟し、而してこの増殖は、労働市場が過充となり、労働者の供給に比して資本が相對的に不十分となるに至る迄、持續するのである。然に於いて勞銀は低落し、メタルは今や裏返される。勞銀の低落に依つて、労働者の人口は次第に十人に一人といふやうな割合で減少し、これがため資本は再び労働者の人口に比して過剰となるか、又は他の人々が主張する如く、勞銀の低落と、それに伴つて生ずる労働者擲取の増進とは、更らに蓄積の速度を進めしめると同時に一方、低廉なる賃銀は、労働者階級の増大を阻止するに至る。斯くて労働の供給は需要以下となり、賃銀を昂騰せしめる時期

が再び生じて來るといふ風に、この關係が綿々と反復されてゆく。發達した資本制生産にとつては、寔に美しい運動方法である！ 賃銀が増騰して、その結果、現實的に勞働能力ある人口の積極的増殖が生じ得る以前に、産業戰の行はれねばならぬ期間が、闘鬪を開始して勝負を決せねばならぬ期間が、幾度も幾度も経過されることになる譯である。

一八四九年から五九年に至る間、穀物の價格が下落すると同時に、實際上有名無實たるに過ぎぬ賃銀増騰がイギリスの農業諸地方に起つた。例へば、ウケルトシーア州に於いては、週賃銀は七志から八志に、ドーアセットシーア州に於いては七志又は八志から九志に上つた等である。これは戰爭上の需要と、鐵道工事や、工場や、鑛山などの龐大なる擴張とに因り過剩農民人口が非常なる勢ひを以つて流出した結果なのである。賃銀が低ければ低いほど、それが些かでも昂騰したとき、ヨリ高い百分率を以つて言ひ現されることになる。例へば、二十志の週賃銀が二十二志に上つたとすれば、これは一〇パーセントの昂騰を意味するのであるが、七志の週賃銀が九志に上つたとすれば、この場合の昂騰率は二八パーセント七分の四であつて、極めて結構なことのやうに聞える。到る處に、小作農業者は咆吼した。しかのみならず『ロンドン・エコノミスト』誌(八四)の如きは、斯かる賃銀のことを眞面目くさつて『一般的な實質的の増騰』だなどと喋々したのである。ところで、小作農業者たちは何をしたか？ 彼等はこの見事な支拂の結果、農業勞働者が増殖して、教理經濟學的の頭腦が考へる如く、賃銀が再び低落せざるを得なくなる時まで、待つたであらうか？ 彼等はヨリ多くの機械を採用した。そして隣く間に、勞働者は小作農業者をも満足させる比率を以つて再び『過多』となつた。今や従前に比して『ヨリ多くの資本が』ヨリ生産的な形で農業に放下され、斯くして勞働の需要は單に相對的にのみではなく、また絶對的にも減少することになつたのである。

(八十四)『エコノミスト』誌、一六八〇年一月二十一日號。

この經濟學上の抑制は、賃銀の一般の運動又は勞働者階級(換言すれば總勞働力)と社會的總資本との比率を規制する所の法則を以つて、勞働者の人口を特殊の各生産部間に配分せしむる所の法則と混同するものである。一例として市場の景況良好なるため、一定の生産部面に於ける蓄積が特に活潑となり、利潤は平均利潤を超過して、この生産部面に追加資本が流入して來るとすれば、その結果、勞働の需要が増大して賃銀を昂騰せしめるに至ることは、言ふ迄もない。賃銀の昂騰を來した市況の良好なる生産部面には、勞働者人口のヨリ大なる部分が吸収され、この生産部面は遂に勞働力を以つて飽滿されることになる結果、永い間には賃銀に再び従前の平均水準へ低下するか、又は勞働者の流入が餘りに大であるとすれば、この水準よりも以下に低落するであらう。斯くて、この産業部門への勞働者の流入が單に停止されるといふのみでなく、甚しきは流出を

来たすことにもなるのである。經濟學者は茲に、貨銀の増大が労働者の絶對的増殖を伴ひ、労働者の絶對的増殖がまた貨銀の減少を伴ふ所以を見たかと考へる。けれども實際彼れが見た所のものは、特殊の一生産部面を限界とする労働市場の局部的變動に過ぎず、資本の欲求の變動につれて労働者人口が種々異つた投資部面に配分されるといふ現象に過ぎぬのである。

産業上の豫備軍は、營業の沈衰期並びに中位的振興期には現役労働者軍の上に壓迫を加へ、過剰生産並びに發作的營業の時期には現役労働者軍の要求を抑制する。要するに、相對的過剰人口は労働需給律の運動する背景となるものであつて、この運動の範圍をば資本の搾取熱と支配慾とに絶對的に適合した限界内に止まらしむるものである。

今や經濟辯護論の一大行蹟に論を戻すべき場合である。新たな機械の採用又は舊來の機械の擴張に依つて、可變資本の一部が不變資本に轉化されるといふことは、これ取りも直さず、資本が『拘束』されて、その結果労働者が『遊離』せしめられることを意味するものであるが、辯護經濟學者は反對にこれを、労働者のために資本が遊離せしめられるといふ風に解釋することとは、我々の記憶する所である。我々は今に及んで、初めて此等の辯護論者の厚顔無恥を十分に評價することが出来る。遊離せしめられるものは、機械に依つて直接驅逐される所の労働者のみではない。その補充兵員たるべき労働者も、また營業が舊來の基礎上に通例の擴張を許される場合規則正しく吸収される所の追加兵員たるべき労働者も、共に遊離せしめられるのである。彼等は今や悉く『遊離』するのであつて、充用を求めつつある一切の新資本は彼等を自由に利用することが出来る。此等の資本に依つて吸収されるものが彼等であるにしろ、又は他の労働者であるにしろ、機械が市場に投じたのと同數の労働者を市場から引き上げるのに、恰度此等の資本を以つて十分であるとすれば、一般的労働需要の上に及ぼされる影響は零となるであらう。若しヨリ少數の労働者が吸収されるとすれば、過剰者の數は増大し、ヨリ多數の労働者が吸収されるとすれば、一般的労働需要は『遊離者』以上に出づる被備者の超過分だけ増大することになるであらう。要するに、放下を求めつつある追加資本が他の場合一般的労働需要の上に與へるであらう所の刺戟は、以上いづれの場合に於いても、機械のために驅逐された労働者の數に相當せる程度で中和されることになるのである。

語を換へていへば、資本制生産の機構は、資本の絶對的増加がそれに相應した程度に於ける一般的労働需要の増進を伴ふことがないやうに處理するのである。而して辯護論者はこの事實を以つて、職を逐はれた労働者が産業上の豫備軍に編入される過渡期中に蒙る所の窮乏や、苦痛や、可能的の死滅などに對する報償と呼ぶのである！

労働の需要は資本の増加と同じものでなく、また労働の供給は労働者階級の増大と同じものでないから、二つの相獨立した

力（資本の増加と労働者の増殖）が相互に作用し合ふことにはならぬ。穀子は偽造されたのである！ 資本は雙方の側に同時に作用する。資本の蓄積は一方に労働の需要を大ならしめると同時に、他方にはまた『遊離』に依つて労働者の供給を大ならしめる。それと同時にまた、失業者側からの壓迫に依つて、就業者はヨリ多くの労働を實現せねばならなくなり、労働の供給は或る程度まで労働者の供給から獨立したものとなつて来る。この基礎上行はれる労働需給律の運動は、資本の壓制を完成するものである。

さればこそ、労働者たちがヨリ多く労働しヨリ多く他人の富を生産するに比例し、また彼等の労働生産力が増進するに比例して、彼等が資本の價值増殖要具として盡す機能でさへも益々不安になつて來るといふのは、抑々如何なる所以であるかとの祕密が、彼等自身に依つて看破されるや否や、更らに彼等自身の間、於ける競争の強度が全く相對的過剩人口の壓迫の如何に懸るものであることが彼等に依つて發見されるや否や、斯くして彼等が労働組合その他の方法に依り、就業者と失業者との間の計畫的協同行作を組織し、以つて資本制生産の如上の自然律が彼等の階級に及ぼす破壊的影響を打破し又は微弱にしようとするや否や、資本及びその阿諛者たる經濟學者は、これ『永遠』にして謂はば『神聖』なる需給律を侵害するものだと言つて叫喚するのである。蓋し、就業者と失業者との間に與へられる一切の結合は、斯かる需給律の『純粹』の作用を攪亂するからである。他方にまた、例へば植民地の如きに於いて、逆行的な事情のため、産業豫備軍の造出と、隨つて資本家階級に對する労働者階級の絶對的隸従とが妨げられるやうになるや否や、資本はその平凡なるザンホー・パンザ（註）と相共に、需給の『神聖』律に叛逆し、強制手段に依つてこれが發動を阻止しようとするのである。

（四） 相對的過剩人口の種々なる存在形態。

資本制蓄積の一般的法則

相對的過剩人口なるものは、凡ゆる可能の濃淡を以つて存在してゐる。如何なる労働者も、半ば雇傭された状態か或は全く雇傭されない状態に在る間は、相對的過剩人口の一部となつてゐるのである。相對的過剩人口は産業循環の段階轉變に依り、週期的に反復される所の大なる諸形態を印刻されるものであつて、恐慌の際には急性的の形を採つて現はれ、營業緩慢の際には慢性的の形を採つて現はれるのであるが、この點を別にして考へるならば、相對的過剩人口なるものは常に、流動的、潜伏的及び停滯的なる三つの形態を有してゐる。

近世産業の中心たる工場、マニユファクチュア場、鑛所、鑛山などに於いては、労働者は或る時は反撥され、或る時はまた更らに大掛りに吸引されるものであつて、大體についていへば被傭者の数は増殖することになるのである。尤もこの増殖の率は、生産規模に比較して考へれば不斷に低下してゐるのである。この場合、過剰人口は流動的の形態に在るといふ。

嚴密の意味の工場や、機械を生産上の因子として使用するに至つたか、又は僅かに近世的の分業を實施したに過ぎぬ如何なる大作業場にも、丁年未滿の男工が多數に使用されてゐる。一度び丁年に達した後にも、尙同じ産業部門に引續き使用されるものは極めて少數であつて、大抵は型の如く解傭されてしまふのである。此等の者は産業の擴大につれて増殖する所の、流動的過剰人口の一要素となるものであつて、その一部は國外に流出する。それは實際のところ、國外に流出する資本の後を追うて行くに過ぎぬのである。その結果の一として、イギリスに見る如く、女子の人口が男子の人口よりも急激に増殖するといふ現象が生じて来る。労働者数の自然的増殖が資本の蓄積慾を充たすに足らずして、而も同時にそれを超過するといふことは、資本の運動それ自身に含まれる所の一矛盾である。資本は年少の労働者を要すること多く、成年の男子労働者を要すること少ないのである。この矛盾は、幾千の労働者が、分業に依つて一定の部門に拘束されたため失業状態に陥つてゐるとき、一方に労働者の缺乏が訴へられるといふ他の矛盾以上に目に餘るものではない(八十五)。尙また、資本は極めて急激に労働力を消費するものであるから、大抵の労働者は中年にして既に多かれ少なかれ廢朽に屬してしまふ。彼等は過剰者の隊列に落ち込むか、然らずんば高級労働者たる地位から下級労働者たる地位に引き下げられることになる。我々は大工業の労働者こそ、最も短命であるといふ事實に逢着するのである。

(八十五) 一八六六年の後半期に、ロンドンでは八萬乃至九萬の労働者が業を失つてゐた。然るに、その同じ半年間の工場報告中に曰く「需要は供給を要するに至つた瞬間にこれを造り出すといふことは、全然背腹に當つた主張だとは思はれぬ。労働についてはその通りに行はれなかつたのである。昨年、幾多の機械は職工缺乏のため變かされてゐるといふ有様であつた」(『工場監督官報告』一八六六年十月三十日、第八一頁)。

マンチェスターの保健醫吏ドクター・リー(22)は斷言して曰く、『マンチェスターに於ける中流階級の上の部に屬する者の平均死亡年齢は三十八歳、労働階級の平均死亡年齢は十七歳であり、リヴァプールに於いては前者は三十五歳、後者は十五歳であつた。即ち、富裕階級の人々は下級市民に比して二倍以上の生命權を有してゐる譯である』(八十五a)と。

(八十五a) 一八七五年一月十五日、バーミンガム市衛生會議に於ける、當時の同市々長、今(一八八三年)の商務大臣ジ

斯ふいふ次第であるから、このプロレタリア部分の相對的増大は、個々の分子が急速に磨滅して、而も全體の数は増殖するといふ形態を探らねばならなくなつて来る。要するに、労働者は急速に代を更めてゆくのである。この法則は人口中の他の階級には當て嵌らぬ。而してこの社會的必要は、大工業労働者の生活事情に必然相伴ふ所の早婚と、労働兒童たちに對する搾取が彼等の生産に附するプレミアムとに依つて充たされるのである。

資本制生産が農業方面に侵入するや否や、又はその侵入の程度に比例して、農業上に機能を盡す資本の蓄積は増大して、同時に農村労働者の人口に對する需要は絶對的に減少するのであるが、而もこの人口反撥は、非農業的産業に於けるとは異なりヨリ大なる人口吸引に依つて補充されることのないのである。農村人口の一部は、絶えず都市又はマニユファクチュアのプロレタリアたらんとして、この轉化に好都合な事情を窺つてゐる。茲にマニユファクチュアといふのは、非農業的産業のことを謂ふのである(八十六)。斯くして相對的過剰人口のこの源泉は、不斷に流動することになる。けれどもそれが都市に向つて不斷に流出するといふ事實は、田舎それ自身に絶えず潜伏的の過剰人口が存在してゐることを前提するものであつて、この過剰人口の範圍は、その排出溝が異常に廣く開かれた時にのみ、目に見えるものとなつて来る。斯くして農村労働者は、最低の賃銀を受くべき位置に引き下げられ、常に片足を以つて被救恤的窮乏の泥潭中に立つ有様となつたのである。

(八十六) 一八六一年のイングラント及びウエールズ國勢調査の中に曰く「七百八十一の都市の住民は一千九十六萬九百九十八人の多きに達してゐるが、村落や農村教區の住民は九十一萬五千二百二十六人に過ぎぬ。……一八五一年に於ける都市の数は五百八十であつて、その人口は周圍の農村諸地方の人口と略々同一數であつた。然るに、その後の十年間に農村地方の人口は五十萬人の増殖を來たしただけであるが、五百八十都市の人口は一百五十五萬四千六十七人の増殖を來たした。即ち農村地方教區の人口増殖は六・五パーセント、都市の人口増殖は一七・三パーセントであつた。人口増殖率の上に斯かる差異を生ぜしめた原因は、農村から都會への移住が行はれたことにある。人口總増殖の四分の三は都市の占むる所となつてゐる」(「イングラント及びウエールズの國勢調査」第三卷、第一一及び一二頁)。

相對的過剰人口の第三部類たる停滞的の過剰人口は、現役労働者軍の中にあつて就業の全く不規則なる人口を代表するものである。この種の相對的過剰人口は利用し得べき労働力の、盡くる所なき貯水池を資本に提供するのであつて、彼等の生活状態は労働者階級の平均水準以下に沈んでゐる。而してこの事實こそ正に、彼等を資本の特殊搾取部門の廣大なる基礎たらし

めるものであつて、最高限度の労働時間と最低限度の賃銀とは彼等の特徴なのである。彼等の主要形態は、既に家内労働の項の下で知るを得た。彼等は大工業並びに農業方面の過剰労働者や、特に手工業経営がマニユファクチュア経営のために、またマニユファクチュア経営が機械経営のために征服された亡び行く諸産業の過剰労働者から、不斷に新たな兵員を得てゐる。彼等の人員は、蓄積の範囲及び力度が増大して、『過剰化』が進むに従ひ、ますます増殖して来る。と同時にまた、彼等は他の諸要素に比してヨリ著しく總増殖の上に貢献する所の、労働者階級中に於ける己れ自身を再生産し不朽にする一要素ともなつてゐるのである。單に出産及び死亡件数の大小のみでなく、家族の絶對的大小も亦、實際に、労働者の量と、換言すれば種族なる部類の労働者に依つて支配さるべき生活資料の量と反比例に立つものである。資本制社會のこの法則は、野蠻人はもとより、文明化した植民者にとつても、不條理に聞えるであらう。この法則は、個體的に虚弱であつて絶えず追ひ憐まされてゐる動物種族の、大量的な生殖を想起せしめるものである(八十七)。

(八十七)『貧困は生殖にとつて有利のものであるやうに見える』(アダム・スミス著『法國論』第一部、第八章)。しかのみならず、この事實はまた、伊達者にして才氣に富んだ富師ガリアニに依れば、神の定め給うた特に賢慮な一配劑なのである。彼れは曰く『最も有用な職分を盡す人々は豊かな境遇に生れるといふ風に、神は配劑したのである』と(ガリアニ著『貨幣論』クストゾ編イタリイ經濟名著近世篇、第三卷、ミラノ一八〇一年刊、第七八頁)。(2)『飢餓や悪疫の極點に迄及ぶ窮乏でさへも、人口の増殖を妨げるものではなく、寧ろこれを促進せしむる傾向を有つてゐる』(サミュエル・レーンダ著『國民的不景氣』一八四四年刊、第六九頁)(2)。(3)レーンダは統計を以つてこの事實を例解した後、續いて曰く『萬人悉く安樂な境遇に置かれるとすれば、地球上の人口は消滅するであらう』と。

最後に、ドン底に沈没した相對的人口部分是被救恤的窮乏の部に宿るものであつて、浮浪人や、犯罪者や、賣淫婦など、約していへば嚴密の意味の檻褻プロレタリア(5)を別にして考へるとき、この社會部層は、三つの部類から成るものである。一は労働能力者。試みにイギリスの被救恤的窮乏統計を皮相的に一瞥しただけでも、被救恤的窮民の數が恐慌の度毎に増大して營業の恢復毎に減少するといふ事實が見出される。二は孤兒や被救恤的窮乏兒。彼等は産業豫備軍の候補者たるものであつて、例へば一八六〇年の如き大なる營業振興期に當つては、急激に多數一括して現役労働者軍の中に編入されるのである。三は墮落者、檻褻者、労働無能力者。これは主として、分業のため融通が利かなくなつた人々、労働者たる標準年齢以上に生き延びた人々、最後にまた、危険なる機械や、鑛山や、化學工場その他の増加につれて數を加へる所の、産業上の犠牲たる不具

者、疾病者、寡婦等から成るものである。被救恤的窮乏は現役労働者軍の癡兵院たり、産業豫備軍の死重たるものであつて、その生産は相對的過剰人口の生産中に、その必然は相對的過剰人口の必然中に包含され、相對的過剰人口と相合して資本制生産と富の資本制的發達との存在上の一條件となつてゐる。被救恤的窮乏は資本制生産の空費(空費)に屬するものであつて、資本はその大部分を自己の負擔から労働者階級や中流階級下層部類の負擔に轉嫁することを心得てゐるのである。

社會的の富や、機能資本や、この資本の増大の範圍及び力度や、随つてまたプロレタリアの絶對數及び彼等の労働の生産力や、此等のものが大なれば大なるほど、産業豫備軍たる相對的の過剰人口も亦、ますく大となるのである。利用し得べき労働力は、資本の伸張力を發展せしむる所のものと同一の原因に依つて發展せしめられる。そこで産業豫備軍の相對量は、富の潜在力の増進につれて、ますく大となつて來る譯である。然し、現役労働者軍に比べてこの豫備軍が大となればなるほど、労働苦に反比例した窮乏の下に置かれる所の常備的過剰人口も亦ますく大となつて來る。最後に、労働者階級中の貧苦部類と産業豫備軍とが大なれば大なるほど、官廳に依つて認められる正規的被救恤的窮乏も亦、ますく大となる。これ、資本制の積の絶對普遍的な法則なのである。而してこの法則も亦、他の凡ゆる法則と同じく、種々多様の事情に依つて實現上に變化を受ける。が、此等の事情の分析は、いま茲に與ふべきではない。

労働者たちに向つて、彼等の數を資本の價值増殖慾に適合せしめよと説教する經濟學的の愚ろかしさも、成る程と頷かれる。資本制生産と蓄積との機構は、絶えず労働者の數を資本の價值増殖慾に適合せしめてゐる。で、この適合の冒頭語は産業豫備軍たる相對的過剰人口の造出であり、その結尾語は現役労働者軍中の不斷に増大しつつある部類の窮困と被救恤的窮乏の死重とである。

社會的労働の生産力が増進する結果、ますく少量の人間力支出を以つてますく多量の生産機關を運轉することを得せしめる法則——この法則は、労働者が労働要具を充用するのではなく、寧ろ労働要具が労働者を充用することを特徴とする資本制的基礎の上に於いては、次の形に言ひ現される。即ち、労働の生産力が大なれば大なるほど、労働者たちが彼等の雇傭手段の上に加へる壓迫はますく大となり、随つてまた、他人の富を増加するため、換言すれば資本の自己増殖を行はしめるために、彼等自身の労働力を販賣するといふ、彼等の生存條件は、ますく不安になるといふことこれである。そこで、生産機關と労働の生産力とが生産者の人口よりも急速に増進するといふことは、資本制度の下に於いては寧ろ、労働者の人口は資本の價值増殖慾よりも常に急速力を以つて増殖するといふ反對の形に言ひ現されることになるのである。

資本制度の内部に於いては、勞働の社會的生產力を増進すべき一切の方法は個々の勞働者を犠牲として行はれるものであることは、第四篇で相對的餘剩價値の生産を分析する際に見た所である。更らに、生産發展上の一切の手段は、生産者を支配し搾取する所の手段と化して、勞働者を一の部分人に不具化せしめ、彼れを機械の附屬物たる位置に引き下げてしまふ。斯くして、彼れの勞働は一切の内容を奪はれて、單なる苦痛に轉化され、科學が生産上の獨立した力として勞働行程に併合されるのと同一の比例を以つて、勞働行程の靈性力は勞働者から引き離されることになり、彼れの勞働力が行はれる條件は歪められ、勞働行程の進行中に彼れは卑陋極まる憎むべき專制に服従せしめられ、彼れの生涯は勞働時間に轉化され、彼れの妻子は資本の轢殺車の下に投ぜられることになるのであつて、此等の事實も亦、右の分析の所見たる所である。だが、餘剩價値生産上の凡ゆる方法はまた、同時に蓄積の方法であり、蓄積の擴大はまた餘剩價値生産上の方法を發展せしめる所となるのである。そこで、次の結論が生じて来る。即ち資本の蓄積が進むに比例して、勞働者の位置は——彼れが如何なる支拂を受けてゐるかを問はず、善き支拂を受けてゐるにしろ、惡しき支拂を受けてゐるにしろ——ますます惡化せねばならぬといふことがそれである。最後に、産業豫備軍たる相對的過剩人口を常に蓄積の範圍及びエネルギーと均衡せしめる法則は、火神へフェーストスの楔が巨神プロメシユースを嚴に打ちとめたよりもヨリ堅く勞働者を資本に鎖づけにする。それは、資本の蓄積に照應した窮乏を生ぜしめるのである。斯くて一方の極に於ける富の蓄積は、同時にまた、その對極たる、己れ自身の生産物を資本として造る階級の側に於ける窮乏、勞働苦、奴隸狀態、無知、凶暴、道德的墮落等の蓄積たるのである。

資本制蓄積のこの對抗的性質は、(八十八)、經濟學者たちに依つて種々なる形に説き示されてゐる。尤も、彼等は此の性質を以つて、或る程度までそれと類似してゐることは事實であるが然し本質に於いて相異なる資本制前期の生産諸方法に基く諸現象と混同してゐるのである。

(八十八) 『ブルジョアの依つて運動する生産事情は、統一的な性質を有するものでなく、寧ろ矛盾した性質を有するものであること、而して富が生産されるのと同じの比例を以つて窮乏も亦生産されること、更らに生産力の發展が進むに比例して一の抑壓力が發展して來ること、且つこの事情の下に、ブルジョアの富、換言すればブルジョア階級の富が造り出されるのは、ブルジョア階級の個々の成員の富を不斷に破壊し、ますます増殖する所のプロレタリアを造り出すことに依つてのみ行はれるといふこと——此等の事實は、斯くして日一日とますます明かになつて來るのである』『拙著『哲學の窮乏』第一二

經濟學上に於ける十八世紀の一大著述家オルテス(ヴェネチアの僧侶)は、資本制生産に含まれる對立を以つて、社會的富の普遍的な自然律なりとしてゐる。彼れは曰く『經濟上の利害得失は、一國の内部に於いては常に平衡を保つてゐる。若干の人々に於ける財の充實は、他の人々に於ける財の不足と常に相等しきものであり、若干の人々に於ける巨富は、他の遙かに數多き人々に於ける必需品の絶對的缺乏を常に伴ふものである。一國に於ける富は人口に照應し、窮乏は富に照應する。若干の人々の勤勉は、他の人々の懶惰を強制することになる。貧困者と懶惰者とは、富裕者と活動者と共に必然相伴ふ所の一結果なのである。云々』(八十九)と。

(八十九) ジアムマリア・オルテス著『國民經濟論』第六部、一七七七年刊、クストチ編イタリー經濟名著近世篇、第二一卷第六、九、二二、二五頁等分。オルテスは、この書の第三二頁に曰く、『人民の幸福にとつて無益な制度を考案するよりも、寧ろ彼等の不幸の原因を究めるに止めようと思ふ』と。

オルテスから約十年を経て、イングランド國教會の新教僧侶タウンセンドは、全く傍若無人の遺方で貧困を富の必然的條件として讚美した。彼れは曰く『法律上から勞働を強制することは、餘りに多くの煩勞と無理と喧騒とを伴ふ。……然るに空腹なるものは、單に平和的な、靜温な、且つ斷絶する所なき壓迫たるのみでなく、更らに、勤勉や勞働を刺戟すべき最も自然的な動機として、最大の努力を喚び起すものである』と。要するに、勞働者階級の空腹を永久に存續せしめるといふ點に一切の問題が懸つてゐるのであつて、これが解決は、タウンセンドに依れば、別して貧民の間に作用してゐる人口の原則に依つて與へられるのである。『貧民が或る程度まで輕卒無思慮であつて(語を換へていへば、黄金の匙を含まないでこの世に生れ來たるほど輕卒無思慮であつて)、これがため社會に於ける最も卑賤な、最も不潔劣等な任務を盡すべき若干の人々が常に絶えないといふことは、一の自然律であるやうに見える。これに依つて人類幸福の基金は非常に増大し、ヨリ優雅な人々は單に苦役から救はれるのみでなく……尙また、彼等の種々なる性向に適した職務に、間斷なく従事すべき自由を與へられることにもなる。……貧民救助法なるものは、神と自然が世界に與へた制度の調和と美、均齊と秩序とを破壊する傾向を有つてゐるのである』(九十)と。

(九十) 人類の幸福を望む一人(牧師ジョセフ・タウンセンド君)著『貧民救助法論』一七八六年刊、ロンドン、一八一七年再刊、第一五、三九、及び四一頁等。茲に引抄したタウンセンドの著書、並びに同じ著者の手に成つた『スペイン旅行記』の中から、マルサスは屢々數頁に互つて寫し書きましたのであるが、この『優雅な』牧師彼れ自身はまた、その學說の大部分を

サー・ジェームズ・スチュアートから採用して牽強附會したものである。例へばスチュアートは『斯かる奴隸制度の下には、人間を勤勉ならしむる「非労働者のために」強制的の方法が存在してゐた。……人類は當時、他人の奴隸であつたが故に、労働（即ち、他人のためにする無償労働）を強いられてゐた。今や彼等は、己れ自身の欲望の奴隸なるが故に、労働（即ち非労働者のためにする無償労働）を強いられてゐる』と言つたが、然し彼等は、この點から、かの肥満した終身受祿僧（タウセンンド）の説く如く賃銀労働者は常に空腹たるべきであるとは結論しなかつた。彼等は寧ろ、賃銀労働者の欲望の數を大ならしめ、この増大した欲望を以つて、同時に『ヨリ優雅な人々』のためにする彼等の労働の刺戟たらしめようとしたのである。

要するに、ヴェネチアの僧侶オルテスは、窮乏を永久に存続せしめる免れ難き運命の内に、クリスト教的慈善や、獨身や、修道院や、寄捨などの存在の理由を見出したのであるが、これに反して、新教受祿僧たるタウセンンドの方は、貧弱なる公けの救恤に與かるべき權利を貧民に授けたイギリスの救貧法を非とすべき口實を、同じ事實の内に見出したのであつた。

ストルヒは曰く『社會的富の發達は……最も倦怠的にして、最も下賤な、最も嫌惡すべき職分を盡す所の、一言でいへば、人生に於ける不快にして屈從的な一切のものを己が肩に擦ひ、斯くすることに依つて他の階級のために閑暇と、心意の晴朗と、品性の習俗的（至言！）尊嚴の』とを齎らす所の……社會のかの有用な階級を造り出すものである』（九十一）と。彼れは自ら問うて曰く、民衆の窮乏と墮落とを伴ふこの資本主義的文明なるものは、そも／＼如何なる點に於いて野蠻制度に優るものであるか？ と。彼れはただ一の答へを見出した。曰く、安全！

（九十一）ストルヒ著『經濟學教課』ペテルブルグ版、一八一五年刊、第三卷、第二二三頁。

シスモンデは曰く『産業及び科學の進歩に依つて、各労働者は彼れ自身の消費に要するよりも遙かに多くを日々生産し得るやうになつた。が、同時にまた、彼れの労働は富を生産するといへ、若し彼れ自身この富を消費すべきであるとされるならば、彼れはこれがため、労働に適しないものとなるであらう』と。彼れに依れば『若し労働者のなす労働の如き不斷の労働を以つて、産業が齎らす一切の享樂を購ふことを要するものとすれば、人類（即ち労働せざる人々）は、恐らく藝術上の凡ゆる完成と此等一切の享樂とを斷念するに至るであらう。……今日に於いては、努力はその報酬から分離されてゐる。同一の人が初めに労働して、後に休息するのではなく、寧ろ一方の人が労働すればこそ、他方の人は休息することになるのである。……要するに、労働生産力の限りなき増大は、滑稽なる富者の奢侈及び享樂を増進するといふこと以外には、何等の結果をも有し

ないのである』(九十二)と。

(九十二) シスモンチ著『經濟新原論』第一卷、第七九、八〇、及び八五頁。

最後に、冷血なるブルジョアの談理家デスチュト・ド・トレシーは、殘忍に述べて曰く、「貧國とは人民が安樂に生活してゐる處であり、富國とは一般に彼等が貧しく生活してゐる處である」(九十三)と。

(九十三) デスチュト・ド・トレシー著『意志及びその效果論』パリ、一八二六年刊、第二三一頁。

(五) 資本制蓄積の一般的法則の例解

a 一八四六年より一八六六年に至るイギリス

近世社會の凡ゆる時代を通じて、最近二十年の期間ほど、資本制蓄積の研究上に好都合の時代はなかつた。この期間は、宛らフォルトナトウスの財布を見出したかの如くである。而してまた、凡ゆる國のうち、イギリスはこの方面に於ける典型的の實例を示してゐる。蓋し、イギリスは世界市場に第一位を占め、而して資本制生産はひとりこの國にのみ十分の發達を遂げ、最後にまた、一八四六年以降に於ける自由貿易一千太平年國の實現に依つて、俗學的經濟學の最後の隠れ場は斷ち切られてしまふことになつたからである。最近二十年の期間に、生産は驚くべき進歩を遂げ、その後半期に及んでは更らに前半期を遙かに凌駕する有様となつたのであるが、斯かる生産發達の事實については、既に第四篇の中で十分これを仄かして置いた。

イギリスに於ける人口の絶對的増殖は、最近半世紀に甚しく大となつたが、相對的の増殖即ち増殖の比率は不斷に低下してゐる。それは政府の國勢調査から得た左表に示される如くである。

各十年間に於けるイングラント及びウェールズの人口年増殖百分率

一八一一年——一八二一年	一・五三三%
一八二一年——一八三一年	一・四四六%
一八三一年——一八四一年	一・三二六%
一八四一年——一八五一年	一・二一六%
一八五一年——一八六一年	一・一四一%

ところで他方に、富の増大を考察しよう。富の増大について最も確實な支點を與へるものは、所得税を課せられる利潤、地

代等の變動である。一八五三年から一八六四年に至る間、大英國に於ける納稅義務ある利潤（小作農業者その他若干の項目は含まず）の増加は五〇・四・七パーセント（即ち一年の平均四・五八パーセント）であつた（九十四）が、同じ期間に於ける人口の増殖は約一二パーセントであつた。一八五三年から一八六四年に至る間、課稅し得べき土地賃子（家屋、鐵道、鑛山、漁場等を含む）の上に現れた増加は三八パーセント、即ち一年に三パーセント十二分の五であつて、なかなづく左記項目の増加が最も著しかつた（九十五）。

	一八五三年に對する一八六四年の年所得増加	一年の平均増加
家屋	三八・六〇%	三・五〇%
石坑	八四・七六%	七・五〇%
鑛山	六八・八五%	六・二六%
製鐵所	三九・九二%	三・六三%
漁場	五七・三七%	五・二一%
瓦斯製造所	一二六・〇二%	一一・四五%
鐵道	八三・二九%	七・五七%

（九十四）『國王陛下內國收入委員第十報告、ロンドン、一八六六年』第三八頁（5）。

（九十五）前掲。

一八五三年から一八六四年に至る間の各四ヶ年を採つて比較するならば、所得の増加程度が不斷に増進しつつあることを見出すであらう。例へば利潤から來る所得の増加程度は、一八五三年より一八五七年に至る間は年に一・七三パーセント、一八五七年より一八六一年に至る間は年に二・七四パーセント、一八六一年より一八六四年に至る間は年に九・三〇パーセントであつた。イギリス聯合王國に於ける所得稅を賦課さるべき所得の總額は、一八五六年には三億七百六萬八千八百九十八磅、一八五九年には三億二千八百十二萬七千四百十六磅、一八六二年には三億五千一百七十四萬五千二百四十一磅、一八六三年には三億五千九百十四萬二千八百九十七磅、一八六四年には三億六千二百四十六萬二千二百七十九磅、一八六五年には三億八千五百五十三萬二十磅であつた（九十六）。

（九十六）以上の數字は、比較上の目的にはこれで十分であるが、絶對的に見れば誤れるものである。年々恐らく一億萬磅

の所得が『黙秘』されることになつてゐるからである。これについて、殊に商工業者の側から組織的の欺瞞が試みられてゐることは、アイルランド収入委員たちがその各の報告中に反覆懸嗟してゐる所である。例へば一の報告中に曰く『或る株式会社如きは、その課税さるべき利潤を六千磅として申告したが、税務吏員はこれを八萬八千磅に算定して、遂にこの計算通り徴税されることになつた。また他の或る会社は、十九萬磅として申告したが、現實の額は二十五萬磅であることを目状せざるを得なくなつた』(前掲、第四二頁)と。

資本の蓄積は同時にまた、資本の集積並びに集中を伴つた。政府の農業統計としては、アイルランドに關するものはあつたが、イングランドに關するものはなかつた。然しイングランドに於ける十ヶ州から任意に供給されたものはあつた。その結論として示される所に依れば、一八五一年から六一年に至る間、一百エーカー以下の小作地は、三萬一千五百八十三個であつたものが二萬六千五百六十七個に減少した。即ち五千十六個といふ數がヨリ大なる小作地に併合されてしまつたのである(九十七)。一八一五年から二五年に至る間、相續税を課せらるべき一百萬磅以上に及ぶ動産は一つもなかつた。然るに、一八二五年から五五年に至る期間には、この種の動産が八つ、一八五六年から五九年六月に至る四年半の期間には四つ見出された(九十八)。だが、一八六四年から六五年に至るD種所得税(小作農業者の場合を除いての利潤その他)を簡単に分析することに依つて、我々は資本集中の傾向を最もよく見ることが出来る。尙、豫め一言して置きたいことは、この種の所得六十磅以上に及ぶものは總べて所得税を課せられることになつてゐるといふ一點である。イングランド、ウェールズ及びスコットランドに於けるこの種の納税義務ある所得は、一八六四年には九千五百八十四萬四千二百二十二磅、一八六五年には一億五百四十三萬五千五百七十九磅(九十九)、而して納税者の數は、一八六四年には人口總數二千三百八十九萬一千九の中、三十萬八千四百十六人、一八五六年には人口總數二千四百十二萬七千三の中、三十三萬二千四百三十一人であつた。この兩年に於ける同じ所得の配分は、左表に示す如くであつた。

一八六四年四月五日を以つて了る一ケ年		一八六五年四月五日を以つて了る一ケ年	
利 潤 所 得	人 員	利 潤 所 得	人 員
總所得 九五、八四四、二二三磅	三〇八、四一六	一〇五、四三五、七三八磅	三三二、四三一

内 譯	
五七、〇二八、二八九磅	二二、三三四
三六、四一五、二二五磅	三、六一九
二二、八〇九、七八一磅	八三二
八、七四四、七六二磅	九一
六四、五五四、二九七磅	二四、二六五
四二、五三五、五七六磅	四、〇二一
二七、五五五、三一三磅	九七三
一一、〇七七、二三八磅	一〇七

(九十七) 前掲『イングランド及びウェールズ國勢調査』第三卷、第二九頁。イングランドに於ける土地の半ばは一百五十人の地主に依つて所有され、スコットランドに於ける土地の半ばは十二人の地主に依つて所有されてゐるといふ、ジョン・ブゥイトの主張は否定されなかつた。

(九十八) 『國王陛下内國收入委員第四報告』ロンドン一八六〇年、第一七頁。
 (九十九) 以上は法律の認むる一定額を控除した細所得である。

イギリス聯合王國の石炭産額は、一八五五年には六千一百四十五萬三千七十九噸(その價一千六百一十一萬三千一百六十七磅)、一八六四年には九千二百七十八萬七千八百七十三噸(その價二千三百十九萬七千九百六十八磅、鉄鐵産額は一八五五年には三百二十一萬八千一百五十四噸、その價八百四萬五千三百八十五磅)、一八六四年には四百七十六萬七千九百五十一噸(その價一千一百九十一萬九千八百七十七磅)であつた。また、同國に經營されてゐる鐵道の延べ距離は一八五四年には八千五百四哩(その拂込資本二億八千六百六萬八千七百九十四磅)、一八六四年には一萬二千七百八十九哩(その拂込資本四億二千五百七十一萬九千六百十三磅)であつた。更らに、同國の輸出入總額は、一八五四年には二億六千八百二十一萬一千四百五十五磅、一八六五年には四億八千九百九十二萬三千二百八十五磅であつた。左に掲ぐる表(百)は輸出の變動を示すものである。

一八四六年	五八、八四二、三三七磅
一八四九年	六三、五九六、〇五二磅
一八五六年	一一五、八二六、九四八磅
一八六〇年	一三五、八四二、八一七磅
一八六五年	一六五、八六二、四〇二磅

一八六六年

一八八、九一七、五六三磅(百)

(百) この當時(一八六七年三月)インド及び支那の市場はイギリスに於ける木綿製造業者からの貨物輸送に依つて既に再び荷嵩みとなつてゐた。一八六六年、木綿労働者に對する五パーセントの賃銀低減が開始せられ、これがため一八六七年に至りブレンドンに於ける二萬の労働者は罷工を起した。「これ、次いで襲來せる恐慌の序曲であつた。——D・H.」此等の僅少な實例に依つて、大英國戶籍署長の叫んだ勝鬨も、成る程と頷かれる。彼れは曰く「人口の増殖は急速であつたといへ、到底産業や富の發達と歩調を揃へることは出来なかつた」(百一)と。

(百一) 『インゲランド及びウエールズ國勢調査』第三卷、第一頁。

これより、この産業の直接の運用者たり、この富の直接の生産者たる労働者階級に目を轉じよう。グラッドストーンは曰く『人民の消費力が減少して、勞働階級の苦痛及び窮乏が増進しつあるとき、上流階級の富は不斷に著積され、彼等の習慣的奢侈と享樂資料とがますます／＼増大しつあるといふ、この疑ひを容れざる事實は、我國社會狀態に於ける最も悲しむべき特色の一たるものである』(百二)と。

(百二) 一八四三年二月十三日、下院に於けるグラッドストーンの演説(『タイムズ』紙一八四三年二月十四日號。『ハンサード』速記録、同年二月十三日)。

この有難味タツぷりな大臣は一八四三年二月十三日の下院で右の如く主張したのであるが、それから二十年後の一八六三年四月十六日に、彼れは豫算案提出演説の中に述べて曰く『一八四二年から五二年に至る間、我國の課税すべき所得は六パーセントの増加を來たした。……更らに一八五三年から六一年に至る八年間には、一八五三年を標準として計算するならば二〇パーセントの増加を來たしたことになるのである！ この事實は、殆んど信じ難きものであるほど、驚くべきものである。……全く有産階級にのみ限られてゐる……富と權力の斯かる癡醉的増殖は……勞働民にとつて間接に有利なものとなるに違ひない。これがため、一般消費の資料が價安くなるからである。富者はますます／＼富み、而して貧者はますます／＼貧の程度を減じて來たのである。だが、貧の極限が變じたか否かについては、私は敢えて斷言しないのである』(百三)と。

(百三) 一八六三年四月十六日、下院に於けるグラッドストーンの演説。『モーニング・スター』紙、同年四月十七日號。

何といふ跋な文意漸墜(漸)だらう！ 勞働者階級が依然貧困であつて、ただ有産階級のため『富と權力の癡醉的増殖』を造り出すに比例して『貧の程度を減じて來た』に過ぎないとすれば、彼等の貧困は相對的には變化する所がなかつた譯である。

資の極限は、若し減退しなかつたとすれば増進したことになる。富の極限が増進したからである。生活資料が低廉になつたといふ主張については、政府の統計(例へば、ロンドン孤兒院の報告に示される如き)は一八六〇年から一八六二年に至る三年間に生活必需品の價格が一八五一年乃至一八五三年に比して寧ろ騰貴したことを示してゐる。その後の三年間についていへば(即ち一八六三年に至る間)、食肉、バター、ミルク、砂糖、鹽、石炭、その他幾多の生活必需品は、ますます價高くなつた(百四)。左に掲ぐるグラッドストーンの豫算演説(一八六四年四月七日)は、利殖の進歩と『貧困』に依つて緩和された人民の幸福とに對する、ピンダー式の熱調的頌歌ともいふべきものである。彼れは、『被救恤的窮乏の淵に』あることを語り、『賃銀の増騰しなかつた』諸種の營業部門について喋々し、而して最後に、勞働者階級の幸福を概括して曰く、『人生といふものは、十中九までは生存上の競争に過ぎない(百五)』と。

(百四) 青表紙本『イギリス聯合王國の雜錄統計』(第四部、ロンドン、一八六六年刊、第二六〇——二七三頁及び隨所)の中に掲げられてゐる政府の報告を見よ。孤兒院その他の統計以外、孤兒の手當支給を主張した教職雜誌も亦、これが證左となり得るであらう。此等の雜誌は、生活品の騰貴について語ることを決して忘れなかつたのである。

(百五) 一八六四年四月七日、下院に於けるグラッドストーンの演説。『ハンサード』速記文に依ると斯うなつてゐる。『この場合にも亦、且つヨリ全般的に、人生は十中九までは生存上の競争に過ぎぬ。』——イギリスの或る著述家は、モリエールからの引抄を以つて、一八六三年及び六四年に於けるグラッドストーンの豫算演説に含まれてゐる不斷の見逃し難き矛盾の特徴を示した。曰く

『この人こそは、白にあると思へば黒にあり、
朝には夕の念を責め、

人を煩はし、己れみづからをも惱まして、

絶ゆる間なく心も衣も更へてゐる。』

(匿名著『交換論』ロンドン、一八六四年刊、第一三五頁)33。

教授フォーセットは、グラッドストーンの如く政府的の考慮に拘束されることなく、あからさまに述べて曰く『この資本増殖(最近十年間に於ける)に依つて、貨幣賃銀が増進するに至つたことは、勿論、私の否認しない所である。だが、多くの生活必需品は不斷に價高くなるのであるから、彼れは、その原因を貴金屬の價值低落に求めてゐる、斯くの如き外觀的の利益は

大なる範圍に互つて再び失はれることになるのである。——富者はますます、富裕となるが勞働階級の享くる慰樂には何等の知覚し得べき増進も現れて居らぬ。……勞働者は債權者たる小賣商人の殆んど奴隸の如き者となつてしまふのである(百六)と。

(百六) ヘンリー・フォーセット著『イギリスに於ける勞働者の經濟的位置』ロンドン、一八六五年刊、第六七及び八二頁。
勞働者がますます、小賣商人に依つて左右されるやうになるのは、彼等の就業の動搖と中絶とが増進する結果なのである。

イギリスの勞働者階級が如何なる事情の下に有産階級のため『富と權力の癡醉的増殖』を造り出したかは、勞働日及び機械を取扱つた諸章の中に指摘した所である。だが、その際には主として社會的機能を盡しつつある勞働者について考察したのであつた。資本制蓄積の法則を十分明かにするには、作業場の外部に於ける勞働者の状態を、即ち彼れの榮養状態や住宅状態を念頭に置く必要がある。紙數に制限があるから、茲には主として、工業上のプロレタリアと農業勞働者とに於ける最薄給分子此等の分子こそ、勞働者階級の大多數を構成してゐるのである(を考慮するに止める)。

被救恤窮民として政府の認むる人々、換言すれば自己の生存條件(勞働力の販賣)を失ひ、公けの救恤に依つて露命を繋いでゐる勞働者部分につき、先づ一言して置く。政府の調査した所に依ると、イングランド(百七)の被救恤窮民は、一八五五年には八十五萬一千三百六十九人、一八五六年には八十七萬七千七百六十七人、一八六五年には九十七萬一千四百三十三人であつた。一八六三年及び一八六四年には、木綿窮乏の結果それ／＼一百七萬九千三百八十二人及び一百一萬四千九百七十八人に増殖した。一八六六年の恐慌に依つて最も痛撃を蒙つたものはロンドンであつたが、スコットランド王國全體よりも多くの人口を占めてゐるこの世界市場中心地に於ける同年の被救恤民は、一八六五年に比し一九パーセント半、一八六四年に比し二四・四パーセントの増殖を來たし、而して一八六七年に入つてから數ヶ月間の増殖は前年度よりも更に著しくあつたのである。被救恤窮民の統計表を分析するに當り、二つの事實について注目することを要する。一は被救恤窮民の滿干運動が産業循環の週期的叫變を反射するるといふこと、他は資本の蓄積に伴ひ階級闘争隨つてまた勞働者の自己意識が發達するにつれて被救恤窮乏の現實的範圍に關し、政府の統計が益々欺瞞的になつて來るといふことである。例へば、最近二年間にイギリスの諸新聞『タイムズ』紙、『ボール・モール・ギアゼット』紙その他は被救恤窮民の虐待について喧しく叫んだが、この虐待は今更らることではなく古くから行はれてゐたのである。フリードリヒ・エンゲルスは既に一八四四年、これと全く同一の虐待、これと全く同一の一時的な聖人振つた『際物的文章』の口吻について述べてゐた。だが、最近十年間に餓死が驚くべく増殖したといふ事實は、窮乏の憲治監たる貧民收容所(百八)内の奴隸状態が勞働者に依つて益々雄患されるやうになつたことを、無條

件的に論證するものである。

(百七) イングランドといふ時には、イングランドのほか常にウェールズをも含み、グレート・ブリテン(大英國)といふ時には、更らにスコットランドをも含み、聯合王国といふ時には以上三國のほか尙アイルランドをも含むのである。

(百八) アダム・スミスは時折 *workhouse* (貧民收容所) といふ語を *manufactory* (マニユファクチュア場) と同じ意義に使用してゐるが、このことは、彼れの當時よりも以後に行はれた進歩の上に特殊の光明を投ずるものである。例へば、彼れは分業を取扱つた章の冒頭に曰く『同じ勞作の相異なつた各部門に使用される人々は、屢々これを同一の *workhouse* に集合せしめ得る』と。

b イギリスに於ける工業勞働者階級中の薄給部分

これより工業勞働者階級中の薄給部分に論を轉じよう。一八六二年に於ける木綿窮乏の當時、ドクター・スミスはランカシャー及びチェシャー兩州に於けるいじけた木綿工たちの榮養状態について調査すべく樞密院から囑託を受けた。これより曩、彼れは多年に亙る觀察に依つて次の結論に到達してゐたのであつた。即ち『飢餓病を避けるためには』平均婦人一日分の榮養は、少なくとも三十九百グレインの炭素と一百八十グレインの窒素とを含むことを要し、平均成年男子一年分の榮養は、少なくとも四千三百グレインの炭素と二百グレインの窒素とを含むことを要する。婦人にとつては、三斤の優良な小麦パンに含まれる所と略々等量の榮養素を必要とし、成年男子にとつては更らに九分の一多くの榮養素を必要とするものであつて、成年男女一週間の平均榮養は、少なくとも二萬八千六百グレインの炭素と一千三百三十グレインの窒素とを含まねばならぬ。——彼れのこの計算は意外にも事實の上で證明されることになつた。即ちそれは、窮乏のために切り詰められて行つた木綿勞働者たちの哀むべき消費榮養量と一致してゐることが見出されたのである。一八六二年十二月に於ける彼等の一週間の榮養量は、二萬九千二百一十一グレインの炭素と一千二百九十五グレインの窒素とを含むものであつた。

一八六三年、イギリスの樞密院は、同國の勞働者階級中最不良の榮養を受けてゐる人々の窮乏状態について調査すべく命じ、樞密院醫吏ドクター・サイモンは、この目的のために、上記のドクター・スミスを選任した。彼れの調査は、一方には農業勞働者から、他方には絹織工、仕立女工、革手袋製造工、鞣編工、手袋織工、製靴工等にまで及んだ。この後ちの部類に屬するものは、鞣編工を除く以外に總べて都會に就業せるものであつた。いづれの部類についても、健康の最も優れた比較的良き境遇に置かれてゐる家族を選ぶことが、調査上の原則とされてゐたのである。

概括的結論として確められた所は左の通りである。——『調査を受けた都市の労働者部類中、窒素の平均供給量が飢餓病發生の限界となつてゐる絶対的最低限度を幾分か超過してゐたものはただ一つだけで、かつこの限界に達してゐたものが一つ、而して窒素も炭素も共に不足してゐる部類が二つ、而もその一方の部類に於ける不足量は極めて著しい程度に達してゐた。また、調査を受けた農業労働者の家族についていへば、その五分の一強は最低限度以下の炭素栄養量を受け、三分の一強は最低限度以下の窒素栄養量を受けるといふ有様であつた。而してパークシア、オックスフォードシア、サマーセットシア三州に於いては、窒素栄養量の不足といふことは平均の状態であつた(百九)。農業労働者の中では、イギリス聯合王國中の最富裕國たるイングランドに屬するものが最不良の栄養状態にあつた(百十)。農業労働者の中で栄養不足を示してゐるものは、主として婦女及び幼童であつた。蓋し『成年男子は労働をする必要上、食ふことを要する』からである。調査を受けた都會の労働者部類に於ける窮乏は更らに甚しかつた。『彼等の栄養は極めて不良であつて、健康に有害なる幾多の驚くべき窮乏を生ぜしめねばならぬといふ有様であつた(百十一)』。「この種の窮乏は總べて、資本家の『節慾』を、別言すれば労働者が生きて行く上に絶對不可缺なる生活資料の支拂についての節慾を意味するものである!」。

(百九)『公衆健康、一八六三年第六報告』ロンドン、一八六四年刊、第一三頁。

(百十)前掲、第一七頁。

(百十一)前掲、第一三頁。

左に掲ぐる表は、ドクター・スミスの假定した栄養最低限量と、最も甚しき窮乏時代に於ける木綿労働者の栄養程度とに比較して、上に述ぶる純都會的労働者諸部類の栄養状態を示したものである(百十二)。

	男	女
五種の都會的營業部門	一週間の炭素平均量 二八・八七六	一週間の窒素平均量 一・一九二
ランカシア州の失業工場労働者	二八・二一一	一・二九五
男女同數と假定してランカシア州の労働者に供給すべき最低限標準量	二八・六〇〇	一・三三〇

(百十二)前掲、附録、第二三二頁。

調査を受けた工業労働者諸部類の中、絶對的にビールを與へられざる者は五〇パーセント（百二十九分の六十）、ミルクを與へられざる者は二八パーセントであつた。一家族一週當り流動菜食物平均量は、仕立女工に於ける七オンスから鞣編工に於ける二十四オンス四分の三に至る間を上下する程度であつた。毫もミルクを與へられない人々の大多數は、ロンドンに於ける仕立女工に依つて占められてゐた。一週間のパン原料消費高は、仕立女工に於ける七斤四分の三から製靴工に於ける十一斤四分の一に至る間を上下し、成年工一人に對する一週間の平均總額は九・九斤であつた。一週間の砂糖（舍利別その他）消費高は、革手袋製造工に於ける四オンスから、鞣編工に於ける十一オンスに至る間を上下し、凡ゆる部類を通じての成年工一人に對する一週間の平均總高は八オンスであつた。成年工一人に對するバター（脂肪その他）の一週間消費平均總高は五オンス、成年工一人に對する食肉（脂肪その他）の一週間平均高は、絹織工に於ける七オンス四分の一から革手袋製造工に於ける十八オンス四分の一に至る間を上下し、各部類平均總高は十三・六オンスであつた。成年工一人に對する一週間の榮養費について、左の如き一般的平均數が得られた。即ち絹織工は二志二片半、仕立女工は二志七片、革手袋製造工は二志九片半、製靴工は二志七片四分の三、鞣編工は二志六片四分の一、マツクルスフールド市の絹織工一週間の平均は、一志八片半に過ぎなかつた。榮養不良の部に屬するものは、仕立女工と、絹織工と、革手袋製造工とであつた（百十三）。

（百十三）前掲、第二三二及び二三三頁。

この榮養状態について、ドクター・サイモンはその一般的健康報告の中に曰く『榮養不足のために疾病を激成したり助長したりする場合が無限に存在してゐることは、救貧法に依る醫療手續や、病院の病室及び來診室などを熟知せる如何なる人も、斷言し得る所である。……だが、私の見る所に依れば、これについて尙附け加へを要する極めて重要な衛生上の一事項がある。

——即ち食物の缺乏に堪へることは非常な苦痛を伴ふものであつて、甚しき榮養缺乏は、他の種類の缺乏が先づ生じた場合にのみ、それに伴つて現れて來ることを常とするものである。これ、我々の念頭に置くことを要する事實である。榮養不足が衛生上の問題となり、生理學者が生死の境界たるべき窒素及び炭素の最低グレーション量を計算しようとして企てるに至つた久しい以前から、労働者の家庭には凡ゆる物質上の慰樂が奪はれてゐた。衣類や燃料は、食物よりも更らに貧弱となつて居り、酷烈なる天候を防ぐべき何等の十分な保護もなく、住宅の範圍は病氣を激成し又は助長する程度にまで切り詰められ、家具什器の類は殆んど絶無となり、清潔を守ることさへも、不經濟であり困難であるとされるやうになつてゐたのである。假りに、清潔を守らうと努める自尊心があつたとしても、その努力は總べて空腹の追加を意味するといふ有様であつた。労働者の家庭は、

最も價安く住ひ得る處にのみ設けられるのであつて、衛生上の取締が行き届かず、排水や、汚物掃除や、公害取締やが最も少くなく、給水が最も貧弱であるか又は最も不良な區域、都市に在つては更に光線や空氣の最も乏しい區域こそ、彼等の家庭の存在し得る所となつてゐるのである。斯かる衛生上の危険は、貧困が食物の缺乏を伴ふほど甚しき處に在つては、殆んど不可避的の現象となつてゐる。而して斯くの如き悪弊を總計して考へるならば、それは生命に對して極めて危険なる、驚くべき量に達するのであるから、食物の單なる缺乏といふ一事も、結果に於いては由々しき一大事となつて來るのである。……而も茲に問題となる貧困は、怠惰に因る自業自得の結果でないことを思ふとき、如上の事實は寔に痛々しき感じを喚び起すことになり。要するに、問題は労働者の貧困といふことである。しかのみならず、屋内労働者に在つては、僅かばかりの食物を得べき労働も、驚くべき程度に延長されることを常とするのであつて、この労働が労働者に自營生活を與へるといふことは、極めて局限された意味にのみ言ひ得ることである。……有名無實の自營生活なるものは、一括的に被救恤窮乏に到らしむべき、或は長距離或は短距離の迂路たり得るに過ぎぬのである』(百十四)と。

(百十四) 前掲、第一四及び一五頁。

最も努むる所多き労働者部類の空腹苦と、資本制蓄積に基く、富者の或は下品或は上品な奢侈的消費との間に存する内部的の關聯は、經濟上の法則を認識するにあらずんば明かにされ得ないのであるが、住宅の状態についてはさうでない。生産機關の集中が大なれば大なるほど、労働者を狭小な場所に密集せしめることも亦それに應じてますます甚しくなり、斯くして資本制的の蓄積が急速となればなるほど、労働者の住宅状態がますます悲慘に赴いて行くことは、因はれざる觀察者の等しく認むる所である。富の發達に伴ひ建築の不良な區域は取り壊されて、市街は『改善』され、銀行や倉庫などの大建物が築造され、營業上の交通や奢侈用の馬車のために街路が擴張され、市街鐵道が敷設されるといふやうなことになるので、貧民はますます不良な密集した片隅に追ひ込められることになるは、明かな事實である。他方に、住宅なるものは品質に逆比例して價高くなること、而して窮乏の鑛山が嘗てポトシの鑛山に要せられた所よりも以下の費用を以つて、ヨリ以上の利潤を得べく、家屋投機業者たちに依つて利用されることは、これまた何人も知る所の事實である。

資本制蓄積隨つてまた資本制所有關係一般に含まれる對抗的性質は(百十五)、この場合極めて分明になつて來るので、労働者の住宅状態に關する英國政府の報告でさへ『所有及び所有權』に對する異端的の攻撃を以つて充滿してゐるといふ有様である。産業が發展し、資本が蓄積され、都市が發達し『美化』されると同じ歩調を以つて、悪弊は増進して來た。そこで、上

流者の『體面』をも容赦する所なき傳染病を恐れるといふ、單にそれだけの動機から、一八四七年より一八六四年に至る間、十ヶ條を下らざる衛生警察上の議會條例が制定され、リヴァプール、グラスゴー、その他若干都市のブルジョアは、驚駭の餘り彼等の都市當局を通してこれに干渉することになつた。

(百十五) 『勞働階級の住宅に於けるほど、人格權が公然と恥づる所なく所有權の犠牲に供せられた方面はない。如何なる大都會も、人間の犠牲所——年々幾千の人間を貪慾のモロクに贊として供げる所の祭壇——と見做し得るのである』(サミュエル・レーング著『國民的不景氣』一八四四年刊、第一五〇頁)。

而もドクター・サイモンは一八六五年の報告中に叫んで曰く『イギリスの惡弊は、大體に於いて何等の取締をも受けて居らぬといひ得る』と。樞密院の命令に依つて、一八六四年には農業勞働者の住宅状態、一八六五年には都會に於ける貧民階級の住宅状態についての調査が行はれた。ドクター・ジュリアン・ハンターの名工的な調査の結果は、『公衆健康』第六及び第八報告の中に掲げられてある。農業勞働者については後段に述べる。都會の住宅状態については、先づドクター・サイモンの概述を掲げることにしよう。彼れは曰く、『私は職務上専ら醫術的の見地を守つてゐたが、更らに一般人道の立場からこの惡弊の他の方面をも考慮に入れることが必要になつて來る。……住宅の密集が甚しくなると、寧ろ動物的ともいふべきほどな、凡ゆる優しみの否定や、身體及び身體機能についての不潔極まる混濁や、性的裸出の習慣などを、殆んど必然的に伴ふ。斯かる影響の下に置かれることは一の墮落を意味するものであつて、作用することが久しきに互れば互るほど、この墮落は益々甚しくなつて來るのである。この種の呪咀的境遇がその下に生れた兒童にとり、無恥への洗禮とならねばならぬことはしばしば見る所である。而して一度び斯ういふ境遇の下に置かれた人々が、將來他の點に於いて、肉體上及び道德上の清潔を本質とする文明の雰圍氣に向上しようとするやうになるであらうとは、到底望まれぬことなのである』(百十六)と。

(百十六) 『公衆健康、第八報告、ロンドン、一八六五年』第一四頁註。

人間の住むに全く適しない密集した住宅状態については、ロンドンが第一位を占めてゐる。ドクター・ハンターは曰く『二つの明確な事實がある。即ち(一)ロンドンには各一萬人近くを包擁する貧民窟が約二十もある。此等の貧民窟に於ける状態は慘憺たるものであつて、嘗てイギリスの他の方面に見られた所の、殆んど如何なる光景より甚しいのであるが、これは殆んどみな家屋設備の不良といふ點に原因を置いてゐるのである。(二)此等の貧民窟に於ける家屋の密集し頹朽した状態は、今や二十年前に比して遙かに甚しい』(百十七)と。『ロンドンやニューキヤースルの諸方に見られる生活は全く地獄的であるといつても

過言でない』(百十八)。

(百十七) 前掲、第八九頁。此等の貧民窟に於ける兒童について、ドクター・ハンターは次の如く述べてゐる。——『貧民の稠密な群居が行はれるやうになつた以前、彼等の兒童が果して如何なる具合に養育されてゐたかを語り得る人は、今は存在して居らぬ。彼等の兒童は今や、半裸體の、泥酔した、卑猥極まる、喧嘩好きな、各年齢の人々と共に夜の半ばを起きて暮らすといふ有様である。彼等は斯くすることに依つて、我國に恐らく前例のない境遇の下に將來『危険階級』の成員たるべき教育を施されてゐる譯であるが、彼等が長じて如何なる行爲をなすに至るかを語らんとする者があるとすれば、それは實に大膽な豫言者だといふべきであらう』(前掲、第五六頁)。

(百十八) 前掲報告、第六二頁。

ロンドンの市街が『改善』され、舊來の道路や家屋が取り壊されて、工場が殖え、人口の流入が著しくなり、最後にまた、地代が増進して家賃が昂騰するといふ、此等の傾向が進むに従つて、労働者階級中の比較的裕福な人々や、小商人、その他中流階級の下層に屬する人々も、ます／＼同様な卑陋極まる住宅状態の呪咀の下に落ち込んで行くのである。『家賃が暴騰して、労働者が一室以上を賃借することは殆んど不可能となつて來た』(百十九)。多數の『仲介業者』が介在して居らぬ所有家屋といふものは、ロンドンには殆んど全く見受けられぬ所である。ロンドンの土地價格は、土地の年収入に比し益々高くなつてゐるため、土地を購買せんとする者は、早かれ晚かれ審査價格(收用に當つて、審査官が査定する價格)でこれを再販賣せんと目論んである。然らずんば、附近に何等かの大企業が起つて、土地價格が暴騰するに至ることを目論んで購買するのである。その結果、満期に近づいた賃貸契約の賣買が普く行はれるやうになる。『この營業に従事する人々について期待し得る所は、彼等がなすやうになすといふことである。換言すれば、彼等が家主となつてゐる間に出來得る限り借家人から搾り取つて、後繼者たる人の手には出來得る限り残る所のものがないやうにすることである』(百二十)。

(百十九) 『セント・マルチンズ・イン・ザ・フィールド區健康吏報告、一八六五年』(34)。

(百二十) 『公衆健康第八報告、ロンドン、一八六五年』第九一頁。

家賃は週拂ひであるから、此等の紳士は何等冒險する所がない譯である。市内に鐵道が敷設された結果、『最近ロンドン東部の労働者たちは舊來の住宅から驅逐され、或る土曜日の夕、貧民收容所のほかに落ちつくのもなく、僅かばかりの持物を背負つて彷徨ひ歩いてゐた』(百二十一)。收容所は既に満員となつてゐた。而して議會の協賛を経た『改善』も漸く著手されたばかり

の所であつた。労働者は住宅を取り壊されて驅逐されたとき、舊來の教區を去ることなく、去つても成るべく接近した處に居を構へる。『彼等が出來得る限り作業場の近くに居を構へようとすることは論を俟たぬ。これがため、從來二室を占めてゐたものが一室に制限され、其處に密集されることになる。……驅逐された人々は、従前以上の家賃を拂つて、ヨリ不良な家屋に住はせられる。海岸に居を構へてゐる労働者の半數は、……作業場まで二哩も徒歩するといふ有様であつた。』

(百二十一) 前掲、第八八頁。

海岸方面の本通りは、見慣れぬ人にはロンドンの富についての威壓的な印象を與へるのであるが、この方面こそ、ロンドンに於ける人間密集の適例として役立ち得るのである。この方面に屬する或る教區の人口が一エーカー當り五百八十一人上つてゐることは、健康史に依つて確められた所である。而もこの計算には、テムズ河幅の半ばが算入されてゐたのであつた。

從來ロンドンでは、役に立たなくなつた家屋を取り壊すことに依つて、労働者を一の區域から驅逐するといふ方法を探つて來たのであるが、この衛生警察策は、彼等をして益々他の區域に密集せしむるよりも以外の目的に役立つものでないことは自明である。ドクター・ハンターは曰く、『この方法は、不合理な處置として必然的に中止されねばならなくなるであらう。然らずんば、資本なきが故に住宅を所有することは出來ないとしても定期的家賃を支拂ふ能力ある人々のために、住宅を供給するといふ、誇張なしに國民的と稱し得べき義務を盡すやうに、公衆の同情(！)を喚び覺ますべきである(百二十二)』と。この資本主義的公正を嘆美せよ！ 鐵道敷設や街路開通などの如き『改善』に依つて、土地所有者、家屋所有者、實業家等が收用を受けるとき、彼等は單に十分の代償を與へられるといふのみでなく、尙それ以上に、努めて行はしめられる『節慾』の報酬としても、神と法との上から莫大な利潤を以つて慰籍されねばならぬのである。労働者は妻子や持物と共に驅逐される。そして紳士的に生活することを當局が必要と見做してゐる區域に群を成して流れ込むとき、彼れは衛生警察の上から取締られるのである！

(百二十二) 前掲、第八九頁。

十九世紀の初葉、ロンドンを除いてはイギリスには人口十萬を有する都市は一つもなく、人口五萬以上のものも僅か五つに過ぎなかつた。然るに今や、五萬以上の都市は二十八に上つてゐる。『この轉變の結果は單に都市の人口が著しく増殖したといふことのみでなく、舊來の堅く一塊りになつてゐた小都市は、今や四方を建物で圍繞され、いづれの方面にも開闊な天空と接觸する餘地のない中心地となつてしまつた。斯くして、此等の都會は最早富者たちにとつて居心地よき場所でなくなつたため、

彼等は其處を去つてヨリ氣持のいい郊外に引き移つてしまふ。その後に来たる人々は、一家一室といふ割合で大家屋に居を構へる。而も一家といふ中には、二三の止宿人を同居させてゐる場合もしばしば見るのである。斯くして、本来己れ自身のために設けられたのではない、全く不適當な家屋の中に多數の人々が密集して、成年者にとつては品性の墮落を助長し、兒童にとつては前途の破滅を齎らす所の環境が造り出されることになるのである』(百二十三)。

(百二十三) 前掲、第五五及び五六頁。

工業上又は商業上の都市に資本の蓄積されることが急速であればあるほど、搾取し得べき人間材料の流入も亦ますます急速となり、勞働者等のために即設される所の住宅はそれにつれて、ますます見すばらしいものとなつて來るのである。

不斷に産額を増進しつつある石炭その他の礦物採掘地方の中心たるニューキアッスル・オン・タイン市が、住宅地獄の點に於いてロンドンに次ぐ位置を占むるに至つた所以は茲にある。この市に於いて個々の住室に居を占めてゐる人々の數は、三萬四千人を降らない。最近、ニューキアッスル及びグレートヘッドに於いては、多數の家屋が公衆に絶對有害であるとの理由を以つて、警察の手で取り壊された。新たなる家屋の築造は極めて緩慢に進行したが、營業の進行は極めて急激であつた。そこで、一八六五年には空前の人口過充を來たし、賃借すべき室は最早一つも見出されないといふ有様に達した。ニューキアッスル熱病院のドクター・エンブルトンは曰く、『チブスが久しく猖獗を極めた原因が、人口の密集と住宅の不潔とに在つたことは、疑ひを容れない。勞働者の住む部屋は周圍を閉された不衛生極まる路次の奥に設けられてゐて、場積、日光、空氣及び清潔の點に於いては、不十分と不衛生との典型であり、文明國の汚辱たるものであつた。斯かる部屋の内、夜間、成年男女や子供たちが混合して寝るのである。成年男子に在つては、晝間勤務と夜間勤務とが間斷なく交代されるので、ベッドの冷める時がない。給水は不良であり、便所の設備は更に悪しく、不潔であつて、換氣の設備もなく、すべては悪疫養成的に出來てゐる』(百二十四)と。斯様な六部屋の賃賃價格は、一週八片から三志の間である。ドクター・ハンターは曰く、『ニューキアッスル・オン・タイン市は、家屋や街路の外部的環境に依つて殆んど野蠻的といふべき墮落状態に屢々沈淪せしめられた所の、我國に於ける最も美しき種族の標本を含むものである』(百二十五)と。

(百二十四) 前掲、第一四九頁。

(百二十五) 前掲、第五〇頁。

或る産業都市の住宅状態が今日は堪え得られる程度のものであるとしても、資本及び勞働の満干運動に依つて明日は最早到

底堪えられぬものとされてしまふ。市の當局が勇を鼓して、この恐るべき悪弊の救治に努めることはあるかも知れないが、さうした所で、明日は早や襤褸を纏つたアイルランド人や頹朽したイングランドの農業労働者たちが、蝗の如く群をなして押し寄せて来る。彼等は地窖や穀倉に詰め込まれるか、又は従前端正に生活してゐた労働者の家屋に入り込んで、これを、宿泊者の顔觸れが宛ら三十年戦争に於ける宿營の如く絶えず變化する所の木賃宿に轉化してしまふのである。實例——ブラッドフォード市。この市の當局は町の『改善』に従事してゐる所であつた。加ふるに、一八六一年には尙、一千七百五十一軒の明き家が其處に存在してゐたのである。然るに今や、穩健な自由主義者で黒人の同情者たるフォルスター君が近頃あの様に殷勤に呼び立ててゐた營業の恢復が實現されることになつた。營業の恢復と同時にまた、不斷に波動しつつある所の『豫備軍』たる『相對的過剩人口』の流れが溢れて來たことは言ふ迄もない。ドクター・ハンターが或る保險會社の代理店から得た表(百二十六)の中に記載されてゐる戰慄すべき地窖や貸部屋は大抵みな厚給労働者たちの住まふ所となつてゐた。若しヨリ上等な住宅があるならば、それを借りたいのだが——とは、彼等の言明してゐる所であつた。斯かる間に、彼等は一人のこらず墮落して襤褸者となり、病に冒かされてしまふのである。かの穩健な自由主義者で下院議員なるフォルスターが、自由貿易の祝福とブラッドフォード市の有力な毛絲業者たちの利潤とのために歡喜の涙を流してゐる時に！

(百二十六) ブラッドフォード市の或る労働者保險會社代理店から得た表

ヴァルカン街百二十二番	一室	一六人
ルムレー街十三番	一室	一人
バワー街四十一番	一室	一人
ポートランド街百十二番	一室	一人
ハーデイ街十七番	一室	一人
ノース街十八番	一室	一人
同上十七番	一室	一人
ワイマー街十九番	一室	八人(成年)
ジオウエット街五十六番	一室	二人
チオーヂ街百五十番	一室	三家族

ライフル・コート・メリーゲート十一番

マーシャル街二十八番

同上四十九番

ヂォーヂ街百二十八番

同上百三十番

エドワード街四番

ヨーク街三十四番

ソルト・ビー街

レヂェント・スクエアー

エーカー街

ロバーツ・コート三十三番

バック・ブラット街、鍛銅場として利用

イーベネザー街二十七番

一室 一一人

一室 一〇人

三室 三家族

一室 一八人

一室 一六人

一室 一七人

二室 二家族

二室 二六人

一(地窖) 八人

一(地窖) 七人

一(地窖) 七人

一(地窖) 七人

一(地窖) 六人

(前掲報告、第一一頁)

ブラッドフォード市救貧醫の一人ドクター・ベルは、一八六五年九月五日の報告の中で、彼れの管區に於ける熱病患者の驚くべき死亡率は住宅状態に起因するものであると述べた。彼れは曰く『一千五百立方呎の地窖内に：：十人の者が棲住してゐる。ヴキンセント街、グリーン・エイア・プレス及びレースには、一千四百五十人の居住者と、四百三十五個のベッドと、三十六個の便所とを有する労働者家屋が二百二十三軒もある。：：：ベッドといつても、それは一卷きの汚ならしい古檻襪又は一抱への屑などで、そこに平均三・三人の労働者が寝るのであるが、中には五人乃至六人も寝る場合がある。また、全然ベッドなしに寝る者のあることも、私の聞いた所である。彼等は男も女も、獨身者も配偶者も、ゴツちやになつて平服の儘、板敷の彼方此方にゴロ寝するのである。此等の住宅が大抵みな人間の棲むに適しない、ジメ／＼した薄暗い、汚ならしい、惡臭ある穴部屋であることは附言を要すまい。それは死と病を齎らす所の中心なのであつて、斯かる疫腫を都市の眞中で化膿する儘に放任して置いた良き境遇の人々にも病毒を傳播させて行くことになるのである』(百二十七)と。

(百二十七) 前掲、第一一四頁。

住宅の慘憺たる點に於いて、ロンドン以下第三位を占めてゐるものはプリストル市である。『歐洲に於ける最も富裕な都市の
一であるこのプリストルには、全くの貧困と家庭的悲慘とが充滿してゐる』(百二十八)。

(百二十八) 前掲、第五〇頁。

c 浮浪労働者

これより、田舎から起つて大抵は工業方面に就業するやうになる所の、特殊な労働者部類に論を轉ずる。此等の人々は資本の輕歩兵たるものであつて、資本の必要に應じて或る時はこの方面、或る時はかの方面といふ風に絶えず就業の地點を換へてゐる。そして行軍しない時には『野營』を張るのである。この浮浪労働、建築や排水に關聯した種々なる作業、及び煉瓦製造、石灰焼、鐵道敷設等の方面に利用されるのであつて、その野營附近の各處に痘瘡、チブス、コレラ、猩紅熱等、種々なる悪疫の飛柱を輸入するものである(百二十九)。鐵道の如き多大の投資を要する企業に在つては、企業者みづから労働者軍のために木造の假小屋その他類似の住宅を供給することを常とする。斯くして何等衛生上の設備もなく、官憲の取締圏外に屢する村落が急設されることになるのである。斯くの如き村落は、企業者にとつては極めて有利なものであつて、彼等はこの方法に依つて、労働者に對し産業兵としてと借家人としてとの兩面から搾取する。此等の小屋の穴部屋が一室か二室か三室かに従つてその居住者たる土工その他の労働者は、一週に一志、三志又は四志の賃借料を支拂はさせられることになつてゐる(百三十)。

(百二十九) 『公衆健康、第七報告、ロンドン一八六四年』第一八頁。

(百三十) 前掲、第一六五頁。

これについては、一例を擧ぐれば十分であらう。ドクター・サイモンの報告せる所に依れば、内務大臣デオヂ・グレイ卿は一八六四年九月、セヴノークス教區の健康除害委員長から左の摘發狀を受けた。——『約十二ヶ月前までは、この教區には痘瘡の存在は殆んど知られて居らなかつた。然るに、その少し以前、リユーイシヤムからタンブリッヂに至る鐵道の工事が開始された。この工事の主要部分は本市の隣接地に於いて行はれ、本市に工事の本部が設けられたため、多數の労働者が必然、茲に就業せしめられることになつた譯である。而も、此等の労働者の全部を本來の小屋に收容することは不可能であつた。そこで、企業者ジェー氏は線路に沿うた數個の地點に、彼等を宿泊せしむべき假小屋を築造した。此等の假小屋には、何等の換氣も排水設備もなく、必然にまた混雜せるものであつた。各小屋の間數は二室きりであつた上に、多數の家族員を有する一家が

更らに他の止宿人を收容せねばならぬといふ状態であつたからである。我々に與へられた醫師の報告によれば、これがため、夜になると不潔な溜水や窓に密接した便所から、悪疫的な臭氣が發して來るので、それを耐えようとして窒息の苦しみを忍ばねばならなくなる。そこで、たま／＼此等の假小屋を參觀した一醫師は、この状態について健康除害委員に訴ふる所があつた。彼れは此等の住宅状態の不良を痛論し、何等かの衛生策を講ずるにあらざんば遂に由々しき結果を齎らすであらうと警戒した。約一年前にジュー氏は、彼れの使用せる労働者の間に傳染病が生じたとき患者の收容に充用すべき別個の小屋を設けようとして約束したのであつた。彼れは去る七月二十三日にも同一の約束を反復したが、爾後彼れの假小屋には數名の痘瘡患者が生じ、二名の死亡者を出だしたにも拘らず、依然としてその約束を履行しようとしな。九月九日、醫師ケルソン氏は同一の假小屋に新たなる痘瘡患者が發生した旨を報告し、此等の小屋が驚くべき状態に在ることを指摘した。貴下（内務大臣）の參考までに尙一言したいことは、この教區にはペスト・ハウスと稱して、傳染病に冒された區民を收容すべき一軒の隔離建物が設けられてゐて、過去數月來引きつづき傳染病患者を以つて充滿されてゐる。甚しきになると、痘瘡及び熱病のために五人の兒童を奪はれた家族さへある。本年四月一日に至る五ヶ月間に、この教區で痘瘡のために死亡した者は十名を降らぬ。而してその中、四人は、上記の假小屋に居住せるものであつた。痘瘡に襲はれた家族は、出來得る限りこれを秘密にしようとするので、患者の數を正確に知ることは不可能である（『百三十一』）。

（百三十一）前掲、第一八頁、註。チャペル・エン・レフリッス聯合教區（デウォンシャー州）の救貧吏は、戶籍監督官に報告して曰く、『ダウホールズでは石炭敷を積んだ山に幾個かの小洞を鑿つて、附近の鐵道工事に就業してゐる土工その他の労働者の住宅に充てた。此等の洞は狭くジメ／＼してゐて、下水も便所もなく、頂上に鑿られた煙突用の小穴以外に換氣孔といふものはない。斯かる状態の下に、痘瘡は久しく猖獗を極め、彼等の間に數名の死亡者を出した（前掲、註二）。

炭坑やその他の鑛山に就業してゐる労働者は、イギリスのプロレタリア中最厚給の部類に屬するものである。彼等がその勞銀を購ふために如何なる代價を支拂ふかは、曩に本書の或る頁に述べた所である（百三十二）。これより、彼等の住宅状態について、急過的に一瞥を投ずる。採鑛業者（鑛山の所有者であると賃借者であるとを問はない）は、その労働者のために若干の小屋を設けることを常とする。この小屋と燃用石炭とは『無料』で労働者に給與されることになつてゐる。換言すれば此等の物は現物支拂の賃銀部分となつてゐるのである。この小屋に居住し得ざる者は、その代價として一年に四磅を與へられる。鑛山地方には、坑夫自身や、彼等の周圍に群居する手工業者、小賣商人などから成る多數の人口が急速に集中して來る。人口稠密な

る他の總べての方面に於ける如く、鑛山地方に於いても、地代は高いのであるから、企業者は坑口に接近した出来る限り狭少な区域内に、勞働者全家を收容するに足るだけの小屋を建てようとする。附近に新坑が開掘されるか、又は再掘が行はれたりすると、雜沓は甚しくなつて来る。小屋の築造については、絶對不可避にあらざる一切の現金支出はこれを「節慾」するといふ、資本家的の見地から、總べてを割り出すのである。

(百三十二) 第四八一頁以下に掲げた細目は、主として炭坑勞働者に關するものである。金屬鑛山に於けるヨリ不良な状態については、一八六四年の勅命委員に依つて與へられた誠意ある報告を参照せよ。

ドクター・ジュリアン・ハンターは曰く、『ノーサンバーランド及びデューラム兩州の炭坑に就業してゐる坑夫その他の勞働者に供給された住宅は、モンマウスシア州の鑛山地方を除いて考へるならば恐らくイギリスに見出され得る最惡にして且つ最高價な見本たるものであらう。：：此等の住宅について極端に不良な點は、一室に收容される人員が夥多であること、狭小な地域に多數の小屋が密集してゐること、給水が不十分で便所が設けられて居らぬこと、屋上屋を架したり、又は一つ家を何階にも區分したりする方法が行はれること等である。：：此等の小屋部落は、永住者の部落ではなく單なる野營部落に過ぎぬものであるかのやうに、企業者から取り扱はれてゐる』(百三十三)と。

(百三十三) 前掲、第一八〇及び一八二頁。

ドクター・スチーヴンズは曰く、『私は命令に従つて、デウラム聯合教區の大なる炭坑部落を大抵みな視察した。：：住民の健康を保護すべき何等の策も講ぜられて居らぬといふ一般の批評は、極めて僅少の場合を除き總べてに當て嵌る所である。：：一切の坑夫は十二ヶ月間に互つて、炭坑の賃借者なり所有者なりの下に「拘備」されてゐる。「この「拘備」といふ言葉は、隷農」なる語と同じく農奴制の時代に由來したものである。：：若し坑夫が不満を洩したり、又は何等かの形で「監督人」を煩はしたりすると、彼等の姓名の下に記號又は附箋が附けられて、一年の拘備が更新される際、解備されてしまふのである。：：如何なる現物賃銀制と雖も、此等の人口稠密な地方に行はれてゐるものよりも以上に不良であり得るとは考へられぬ。坑夫は賃銀の一部として、惡疫養成的の環境に置かれてゐる住宅の供給を受けねばならぬ。彼等は自分自身では如何ともすることが出来ぬのであつて、いづれの點から見ても一個の農奴なのである。雇主以外に、果して彼等の生活を助け得る者があるかは疑はしい。雇主が先づ相談相手にする所のものには損益表である。而して結果は可なりに確實なのである。彼等はまた屢々、雇主から水の供給を受ける。供給された水については、その良否を問はず、代價を支拂はねばならぬ。それは寧ろ、

賃銀から差引かれるのである』(百三十四)。

(百三十四) 前掲、第一五及び五一ト頁。

『輿論』はもとより、衛生警察と衝突してさへも、資本は労働者の労働的並びに家庭的生活上に課する所の、一部のには危険にして一部のには屈辱的なる諸條件をば、労働者からヨリ有利に搾取するに必要な手段だとして『辯護』することを決して躊躇するものでない。資本は斯くして、工場の危険な機械に對する保護的設備や、鑛山などに於いて換氣及び安全を維持するに必要な手段やを節慾するのであるが、茲に述べる鑛山労働者の住宅についても、同様の事實が見られるのである。

樞密院醫吏ドクター・サイモンは政府の報告中に述べて曰く、『鑛山企業者が悲惨なる家屋設備の辯解理由として述ぶる所に依れば：：鑛山といふものは通常、賃借して採掘に従事するのであつて、その賃借契約期間が短い(炭坑に於いては通例二十一ヶ年)故に、労働者や周囲に集まる小賣商人やのために設備の整つた住宅を供給しても、結局は無駄に了つてしまふ。また假りに、自分だけはこの點に氣前のいい處置を採らうとしても、それは地主に依つて無効に歸せられてしまふ。蓋し地主に、地下に屬すべき労働者の住宅として地上に適當な心地よき家屋を建てる特權の代償として、法外な追加地代を要求することになるからである。斯かる禁止的の價格(直接的の禁止ではないにしろ)を要求されるが故に、他の意味で家屋を建てたいと思つてゐる人々も、同様に手が出せなくなるのである。：：以上の辯解について、その論據の價値を穿鑿することは、この報告の目的外に屬する所である。また、適當な家屋設備が供給された場合、その費用が終局に於いて地主と借地人と労働者と公衆との、いづれの負擔に歸するかを考察することも、この場合必要でない。それはいづれにしろ、茲に取り揃へた諸報告(ドクター・ハンター、スチーヴンズその他の)中に證明されてゐる如き恥づべき事實を見ては、これが救済策を講ずることの急務を主張せざるを得ないのである。：：土地所有權なるものは、公衆に對する一大非行を齎らすやうに惡用されてゐる。地主は先づ鑛山所有者たる資格を以つて、自己の所有地で労働すべき産業上の一部落を召集し、次に地上所有者たる資格を以つて、斯く召集した労働者が彼等の生活上に缺くべからざる適當な住宅を見出すことを、不可能ならしめるのである。借地人たる資本家的採掘業者は、この契約分割に反對すべき何等金錢上の動機を有して居らぬ。蓋し彼れは、この後ちの條件が法外の程度に達したとしても、その結果は自己の負擔に歸するものでないこと、また、これを負擔すべき労働者は、衛生權の價値を理解し得る程の教育を受けて居らず、不潔な住宅も腐敗した飲用水も、到底罷工を生ぜしめ得べき誘因となるものでないことをよく知つてゐるからである』(百三十五)。

〔百三十五〕前掲、第一六頁。

d 恐慌が労働者階級中の最厚給部分に及ぼす影響

嚴密の意味の農業労働者に論を移すに先ち、尙一例を以つて、恐慌が労働者階級中の最厚給部分たる労働貴族に對してさへ如何なる影響を及ぼすかを示さねばならぬ。産業循環の終了期毎に生じて來る大恐慌の一が、一八五七年にも襲來したことは我々の記憶する所である。次の循環期間は、一八六六年に満期となつた。この度の恐慌は、主として金融的の性質を採つた。これ蓋し、嚴密の意味の工場地方には木綿窮乏が豫め襲來して、多大の資本を慣例の投資部面から金融市場の大中心地に驅逐してゐたためである。この恐慌は一八六六年五月に勃發したのであるが、その信號となつたものは、ロンドンに於ける一大銀行の破産であつた。次いで續々無數の金融泡沫會社が倒壞した。この大瓦解の運命を免れなかつたものの中には、ロンドンの一大營業部門たる造鐵船業も含まれてゐた。この部門に屬する有力な經營は、いづれも好景氣の際法外に過剰生産したのみでなく、信用も亦等しく活潑に流動すべきことを見越して、巨額の註文を引受けたのであつた。然るに今や驚くべき反動が生じて、これがロンドンに於ける他の諸産業〔百三十六〕に於いても今日（一八六七年三月末）に至るまで持續してゐるのである。

〔百三十六〕『ロンドンに於ける貧民の大規模な飢餓……この數日來、ロンドン市内諸方の塀に左の注目すべき文言を記した大ポスターが張り出された。——「肥えた牛！ 肥えた人！ 肥えた牛はその玻璃宮を出て、贅澤な屋敷に住む富者を養ひに行き、肥えた人々はその見る影もなき穴部屋の中で朽ち果てる儘に放置されてゐる」と。この不祥文字を記したポスターは、絶えず張り換へられてゐた。前に張り出されたものがなくなつてしまふか、他のポスターで張り隠されてしまふかすると、同じ場所なり、他の類似の場所なりに、また新しいのが張り出される。これ……かの一七八九年の事變の準備となつたフランスに於ける秘密革命團の行動を想起せしめるものである。……イギリスの労働者が妻子と共に餓死し凍死しつつあるとき、同國に於ける労働の産物たる幾百萬の金は露、西、伊、その他諸外國の企業に放下されてゐるのである。』〔レーノルド・ニューズペーパー〕紙、一八六七年一月二十日號〕³⁸。

一八六七年初葉、『モーニング・スター』紙の一通信記者は窮乏の主要中心地を視察した。左に労働者が如何なる状態に在つたかの特徴を示すため、彼れの詳細なる報告中から一節を引抄する。——『ロンドン東部のポップラー、ミルウォール、グリーニッチ、デプトフォード、ライムハウズ、カニング・タウン等に於いては、少なくとも一萬五千人の労働者及びその家族の人々が

極端なる窮乏状態に陥つてゐる。その中には三千の熟練機械工も含まれてゐた。彼等は既に半ヶ年に互る窮乏を経て、今や貧民收容所の圍ひ場で道路に敷く石を碎くことに使役されてゐる。：私は辛うじて貧民收容所（ポプラー地方の）の入口に達することが出来た。餓えた人々が群がつてゐたからである。：彼等はパン券を買ひに來たのであるが、まだ配布の時間にならなかつたのである。圍ひ場は大きな四角形を成し、明け放つた小屋がそれを取りまき、そして大きく積まれた幾個かの雪の山が中央の舗石を覆うてゐた。中央には羊檻のやうな、柳の枝の垣で圍んだ小さな場所があつた。此處で天氣のいい日には彼等が労働するのである。私の視察した日には、此等の檻は雪に埋れて、到底内部で労働することなどは出来さうもない有様であつた。彼等は開放した小屋の中で石を碎いてゐた。いづれも大きな舗石に腰を下ろし、大槌を揮つて霜に覆はれた花崗岩を碎くのであるが、その量が五ブシエルに達しないうちは労働を止めることは出来ぬのである。これが彼等の一日の仕事であつて、この労働を終へると、彼等は一日の支拂として三片と、ほかに食料手當を受ける。圍ひ場の一方には、よろ／＼した木造の小屋が一つあつた。私はこの家の扉を明けたとき、其處に澤山の人々が暖を探るため目白押しに密集して労働してゐるのを見た。彼等は船索を造るのであつた。労働中、彼等は與へられただけの食糧で誰れが一番長時間働けるかといふことを議論してゐた。労働の耐久は、彼等にとつて名譽となつてゐたのである。この貧民收容所には、七千の労働者が收容されて救助を受けてゐた。彼等のうち數百人の者は、六ヶ月乃至八ヶ月前迄は熟練労働者として最厚給を受けてゐた人々である。彼等のほかに尙、貯金は使ひ果たしても僅少の質入れすべき品物を有してゐる間は、公けの救助に頼むことを欲しない人々があるから、若し此等をも收容するとすれば、總數は恐らく二倍に達することになるであらう。私は此處を辭して町を一巡した。町の建物は大抵みな、ポプラー地方に數多く見られる小さな一階家であつた。私の案内に立つた人は「失業者委員」の一人であつた。：最初に視察したのは、この二十七週來失業してゐた或る鐵工の一家であつた。私は彼れが一家の人々と共に小さな奥部屋にゐるのを見た。この部屋には、まだ多少家具類が残つて居り火もあつた。その日は寒さが酷かつたので、子供達の素足が凍えるのを防ぐためには火が必要であつたのである。火に向ひ合つて置かれてゐる盆の上には、一塊りの粗麻が載つてゐた。これを妻子總がかりで船索に造つてゐたのである。この労働を以つて、彼等は教區から貰ふパンの償ひにするのである。亭主は毎日、食料手當と三片の賃銀とを得るために、收容所の石割場で労働する。彼れは今、空腹を抱へて——それは彼れ自身、陰氣な微笑を浮べて我々に語つた所であるが——晝飯を食べに歸つて來た所である。晝食は二切れのパンと、豚脂と、乳を入れない一杯の茶と、これだけであつた。：次に隣家のドアを叩くと、中年の一婦人がそれを開けて、無言のまま小さ

な奥部屋に案内してくれた。其處には彼女の一家が沈黙の裡に、刻々消えてゆく火を見詰めながら座に就いてゐた。此等の人と、彼等の小さな部屋とは、我々が決して二度と見ることを欲しないやうな、驚くべき荒寥と絶望とに覆はれてゐた。彼女は子供たちを指しながら「どれもこれも、この二十六週間といふものは、する仕事もなく暮らしてゐるため、不景氣の時の用意にと思つて主人と一緒に貯めた二十磅の貯金も、今はみんな使ひ果してしまひました。まあ御覽下さい」と、彼女は泣き叫ぶやうに言つて、拂込と拂出とを規則正しく書き入れた預金帳を出して見せた。この預金帳を見ると、彼女の小財産が第一回の拂込五志から始まつて、次第に増額し遂に二十磅となり、それからまた、次第に溶け去つて行つて、總額は何磅から何志となり、最後の拂出に依つて預金帳の全部を紙切れ同様な無價値のものにしてしまつた経路を、明かに知ることが出来る。この一家は、日に一回の貧弱な食事を收容所から支給されてゐた。……次に視察したのは、元造船所に働いてゐた或る鐵工の一家で、彼れの妻は榮養不足のため病に冒され、不斷著のまま席の上に寝てゐた。僅かに一枚の毛布が掛けられてゐただけであつた。寢具は悉く質入れしてしまつたのだといふ。彼女は二人の哀れな子供に依つて看護されてゐた。彼等自身、母親と同様に看護を要するものの如く見えた。彼等は十九週間に互る強制的懶惰のため、斯かる窮境に沈んでしまつたのである。彼女は苦痛に充ちた過去の物語をしてゐる間に、ヨリよき將來に對する何等の希望もなくなつたかの如く、深き嘆息を洩した。……この家を出たとき、一人の若者が追ッかけて来て、何んとか助けて頂けまいか、兎にかく来て見て下さいと言ふ。一人の若い妻と、二人の愛らしい子供と、一束の質札と、空虚な一室——それが彼れの家で私に見せられた總べてであつた。』

一八六六年の恐慌の餘波については、トリー派の一新聞から得た次の抜萃に示される通りである。以下に問題となつてゐるロンドン東部は、單に上述の如き造鐵船業の中心たるのみでなく、また常に最低限以下の支拂を受けてゐる所謂『家内勞働』なるものの中心ともなつてゐることを念頭に置かねばならぬ。——『ロンドンの一角に昨日驚くべき光景が目撃された。イースト・エンドに於ける幾千の失業者は、隊を成し黒旗を振り翳して市内を練り歩いたといふ程ではないが、それでも人波は十分威壓的なものであつた。此等の人々が如何なる窮乏状態にあるかを想起せしめよ。彼等は餓死に瀕してゐたのだ。これ、單純にして且つ驚くべき事實である、彼等の數は四萬に達してゐた。我々の眼前に、この驚異すべき首都の一角に、富の空前の大蓄積と密接して四萬の頼るべき餓卒が横つてゐるのである。此等の人々は今や市内の他の區域にも侵入してゐる。絶えず餓死に瀕してゐる彼等は、我々の耳に苦痛を叫び傳へ天に向つて哭泣する。彼等はその慘憺たる住宅の中から、就業口を見出し得ざることを、乞食をするも益なきことを語り聞かせるのである。救貧稅納付義務者は、彼等自身、教區から課された負擔

のため被救恤的窮乏の淵に追ひ込められてゐるのである』(百三十六a)。

(百三十六a) 『スタンダード』紙、一八六七年四月五日號。

ベルギーでは『労働の自由』又は——畢竟同じことに歸するが——『資本の自由』が労働組合の専制に依つても工場法に依つても妨げられて居らぬといふ譯でこれを労働者の樂園と呼ぶことが、イギリスの資本家間に流行となつてゐる。そこで、以下、ベルギー労働者の『幸福』について一言しよう。この幸福の神祕については、ベルギーに於ける監獄署及び慈善營造物の總監督官にして中央統計委員の一人であつた故エドゥアル・デュク・ペシオー氏以上に深く立入つて究めた人がないことは確かである。彼れの著『ベルギーに於ける労働階級の家計豫算』(ブリュッセル、一八五五年刊)を採らう。この書の中には、なにかんづく、ベルギーに於ける労働者の標準的家族についての叙述が見出される。著者は極めて正確な材料に基いてこの家族の年收支を計算し、榮養状態については、兵士、水夫、囚人等との間に比較を採つて測定したのである。この家族は『父母及び四人の子女』から成り、この六人の中『四人は一年を通じて有用に就業せしめられ得る。』『一家の中には、病人もなければ、労働不能者もなく』また『教會に納むべき僅少の席費を除くほか、宗教上、道德上、知識上の目的のためには、何等支出する所がなく』貯蓄銀行や養老保険に對する何等の出金もなく『奢侈その他の方面に於ける何等の不用支出もない』と假定する。だが、父親と長男だけは喫煙し、日曜日には酒場に入出入するものとして、この費用を一週八十六サンチームと見る。『種々異なつた職業の労働者に支拂はれる賃銀の比較對照に依つて、次の結論が得られる。……一日の賃銀の最高平均額は、成年男子が一フラン五十六サンチーム、婦人が八十九サンチーム、少年が五十六サンチーム、少女が五十五サンチームである。これに従つて計算すると、一家の年収入最高限度は一千六十八フランといふことになる。……右の一家は標本的のものとして假定したのであつて、凡ゆる可能な収入を合算したのであるが、然し事實に於いては母が賃銀を得ることになるとすれば、家政上の指揮者が失はれてしまふ。その場合、誰れが一家の始末をなし、誰れが子供の面倒を見るか? 誰れが煮き、洗濯、縫結び等をやるか? この問題は、日々労働者の面前に現れて來るのである。』

右の假定に依れば、一家の豫算は次の如くなる。——

	一日の賃銀	三百労働日の賃銀
父	一・五六 フラン	四六八・〇〇 フラン
母	〇・八九	二六七・〇〇

男兒	〇・五六	一六八・〇〇
長兒	〇・五五	一六五・〇〇
合計		一〇六八・〇〇

いま、労働者が左の榮養を攝るとすれば、一家の年所得は各項に示す如き不足を來たすことになる。

水夫の榮養……………一八二・八^{フラン}……………不足……………七六・〇^{フラン}

兵士の榮養……………一四七・三……………不足……………四〇・五

囚人の榮養……………一一二……………不足……………四四

『水夫や兵士は勿論、囚人にさへ相當した榮養を攝り得る労働者家族が殆んど存在して居らぬことは、これに依つて知られる所である。一八四七年から四九年に至る間、ベルギーの各囚人は一日に平均六十三サンチムを要した。これを労働者一日の生計費に比較すると、十三サンチムの差が生じて來る。囚人の場合には、執務及び監視上の費用も含まれる譯であるが、これは囚人が家賃を要しないといふ事實に依つて相殺される。……而も労働者中の少なからざる部分、否寧ろ大部分のものが、更らにヨリ儉約に生活するやうになるといふことに、抑々如何にして行はれる所であるか？ それは労働者のみ秘訣を知る所の應急策に依つて行はれるのである。彼等は日々の糧食を節減する。即ち小麦パンの代りに裸麥パンを攝り、肉、バター、香料などは減ずるか又は全廢してしまふのである。更らに、家族全員を一室又は二室に詰め込み、其處に少年少女を混合して眠らせるのであるが、甚しきは同じ空俵の上に混合して眠らせることも、しば／＼見る所である。衣服や、洗濯や、清潔資料などについても、思ひ切つた節約を斷行し、日曜の氣晴らしも止めてしまふ。要するに、いづれの方面についても苦痛極まる缺乏を忍ぶことにするのである。一度びこの極限に達したとき、生活資料が些かでも騰貴したり、就業が停滯したり、或は病氣に冒されたりすると、窮乏は甚しくなつて、全くの破滅を招致するに至るのである。借財は嵩み、掛賣は拒まれ、衣類や缺くべからざる家具類は質入され、斯くして遂に、一家全員を以つて救貧名簿に編入されんことを願ひ出でるやうになる(百三十七)。

(百三十七) チェクベシオー著『ベルギーに於ける労働階級の家計豫算』ブリュッセル、一八五五年刊、第一五一、一五四及び一五五頁。

實際のところ、この『資本家の樂園』に於いては、生活必需品の價格の上に生ずる些かの變化も死亡及び犯罪件數の上に一

の變化を伴ふこととなるのである！ (百三十七a)。

(百三十七a) 船員組合宣言『邁進せよ、フランマン人！』ブリュッセル、一八六〇年刊、第一五及一六頁⁽⁴⁾を見よ。

ベルギーの家族總數は九十三萬であつて、政府の統計に依れば、その中、九萬(人口四十五萬)は富者たる有權者を代表してゐる。而して都市及び村落に於ける中流階級の小的部に屬する家族數は十九萬(人口一百九十五萬)であつて、その大なる部分は間斷なくプロレタリアの境遇に落ち込んでゐるのである。最後に、労働者の家族數は四十五萬、人口二百二十五萬であつて、その中の標本的なものはデュクペシオーの描寫せる如き幸福を享受してゐる。而してこの四十五萬の労働者の家族中、二十萬以上は救貧名簿に記入されてゐるのである！

イギリスの農業プロレタリア

資本制的の生産及び蓄積に含まれる對抗的性質は、何處に在つても、イギリスの農業(飼畜業を含む)の進歩と農業労働者の退歩とに於けるよりもヨリ粗暴な形には實現されて居らぬ。そこで、この農業労働者の現状に論を進めるに當り、豫め彼等の過去について急過的に一瞥を投ずる。イギリスの近世的農業は十八世紀中葉から始まつたものである。尤も、その基礎たる生産方法變化の起點となつた土地所有事情の革命は、それよりも遙か以前に始まつてゐたのである。

皮相的な思想家であつたとはいへ、而も正確な觀察者たることを失はなかつたアーサー・ヤングが一七七一年に與へた叙述に依れば、當時イギリスの農業労働者は、『都市及び農村に於けるイギリス労働者の黄金時代』たる十五世紀は尙もかく、『彼等が豊かに生活して富を蓄積することの出來た』(百三十八)十四世紀末の先行者に比較しても、尙極めて慘憺たる役割を演じてゐたとのことであるが、我々はそれほど遠い過去に溯る必要はない。一七七七年に刊行された内容の極めて豊富な一書の中に曰く『大規模の小作農業者は殆んどデントルマン⁽⁴⁾』と同一の地位に上つてゐたが、哀れむべき農業労働者は殆んど地べたに押しつけられてしまつた。……彼等が如何に不幸な状態に在るかは、僅かに四十年前の過去と比較して見れば、明かに知られる。土地所有者と小作農業者とは……相携へて彼等を壓迫したのである』(百三十九)。次に、この書は一七三七年から一七七七年に至る間、農業上の現實賃銀が約四分の一(即ち二五パーセント)下落したことを、詳細に互つて論證してゐる。ドクター・リチャード・ブライスも述べて曰く、『近世の政策は、上流階級にとつてヨリ有利なるやうに仕組まれてゐる。斯くしてイギリスの全王國は、早晩ただ上流者と乞食、太公と奴隸とのみから成るやうになつてしまふであらう』(百四十)と。

(百三十八) ジェームズ・エドウキン・ソロルド・ローチアーズ(オックスフォード大學經濟學教授)著『イギリスの農業及び物

『實史』オックスフォード、一八六六年刊、第一卷、第六九〇頁(註)。この力作は今日まで最初の二巻を刊行したのみで、一八五九年から一四〇〇年に至る期間しか含んで居らず、第二巻には統計的材料が掲げられてゐるだけである。この書は、上記の時代について我々に與へられてゐる第一の信憑すべき物價史なのである。

(百三十九) 匿名著『最近に於ける救貧税増加の理由』(ロンドン、一七七七年刊、第五及び一頁)(註)。

(百四十) ドクター・リチャード・ブライス著『生殘支拂についての觀察』(第六版、ダブリュー・モルガン編、ロンドン、一八〇五年刊、第二卷、第一五八及び一五九頁)(註)。ブライスはこの書の第一五九頁に述べて曰く、『現在に於ける日労働の名目價格は、一五一四年に比べて、四倍又は高々五倍位にしかなつて居らぬ。然るに穀物の價格は七倍、食肉及び衣類の價格は約十五倍に上つてゐるのである。要するに労働の價格は、生活費の増進に比例しては増騰しなかつたのみか、當時に於ける生活費との間の比例の半ばにも今日では達して居ぬやうに見える』と。

而も一七七〇年から一七八〇年に至るイギリス農業労働者の位置は、榮養や住宅上の状態から見ても、また自尊心や娛樂などの點から見ても、爾後再び到達されたことのない理想となつてゐるのである、彼等の平均賃銀をばポイント量の小麦で現はして比較すれば、一七七〇年より一七七一年に至る間は九十ポイントであつたが、イーデンの時代(一七九七年)には僅かに六十五ポイント、更らに一八〇八年には六十ポイントに過ぎなかつた(百四十一)。

(百四十一) バートン著『社會に於ける労働階級の狀態に影響する事情の觀察』(ロンドン、一八一七年刊、第二六頁)。十八世紀の終末については、前掲イーデンの著書(『貧民の狀態』)を参照せよ。

反ジャコビン黨戰爭の際、土地貴族や、小作農業者や、製造業者や、商人や、銀行業者や、株式仲買人や、軍需品請負師などは異常な富を積んだのであつたが、この戰爭の終末に當り農業労働者が如何なる状態に在つたかは曩に示した所である。一部分的には銀行券の下落、部分的にはまたそれから獨立して生じた生活必需品の騰貴に依つて、名目賃銀は増騰した。が、現實賃銀の變動については、この場合必要でない細目に立ち入らなくとも、極めて單純な方法でこれを確めることが出来る。救貧法及びその厲行については、一七九五年と一八一四年との間に異なる所はなかつた。この法律が農村地方に於いて如何なる具合に厲行されたかは、我々の記憶する所である。即ち労働者の賃銀は、單に生きてゆくといふ目的に必要な名目額に達するまで、教區からの救恤を以つて補充されてゐたのであつた。小作農業者に依つて支拂はれた賃銀と、教區に依つて補充された賃銀不足分との比率に依つて、我々は二つの事柄を教へられる。一は、賃銀が最低限度以下に低落してゐたといふこと、他は農業

勞働者なるものが如何なる程度に於いて、賃銀勞働者と被救恤的窮民との合成であつたか、換言すれば彼等が如何なる程度に於いて、教區の農奴に轉化されてゐたかといふことである。

各州を通じての平均状態を代表してゐる一州を選ぼう。一七九五年ノーサンプトンシャー州に於ける一週間の平均賃銀は七志六片、六人より成る一家の年支出總額は三十六磅十二志五片、一年の總収入は二十九磅十八志、教區に依つて補充された不足額は六磅十四志五片であつた。然るに、同州に於ける一八一四年の週賃銀は十二志二片、五人より成る一家の年支出總額は五十四磅十八志四片、一年の總収入は三十六磅二志、教區に依つて補充された不足額は十八磅六志四片となつた(百四十二)。即ち、一七九五年に於ける不足額は賃銀の四分の一弱であつたが、一八一四年には二分の一強となつた譯である。斯かる状態の下に、イーデンが農業勞働者の小屋に尙存在してゐることを見出した僅少の慰樂が、一八一四年に至つて全く消滅してしまつたことは自明の事實である(百四十三)。この時以後、小作農業者に飼用されてゐる一切の動物中、有聲器具たる勞働者こそ、最も苛酷に使役され、最も不良に給食され、最も残忍に待遇されるものとなつたのである。

(百四十二) ハーリ著『穀物條例存続の必要』ロンドン、一八一六年刊、第八六頁。

(百四十三) 前掲、第二二三頁。

同一の事實は、『一八三〇年にスキング一揆が焰え輝く穀木の炎を以つて、農業英國の表面下にも亦、工業英國の表面下に於ける如く、窮乏と暗澹たる反抗的不満とが旺んに燃え上つてゐることを、我々(即ち支配階級)に示したとぞ』(百四十四)まで、靜穩に持續して行つたのである。當時セドラーは下院に於いて農業勞働者に『白奴隷』といふ名稱を與へ、或る監督僧はまた上院でこの言葉を反復したのであつた。この時代に於ける最も重要な經濟學者エドワード・ギボン・ウエーキフキールドは言つた。——『南部イングランドの農業勞働者は……自由民でもなければ奴隷でもない。彼等は被救恤的窮民なのである』(百四十五)と。

(百四十四) サミュエル・レリンク著『國民的不景氣』一八四四年刊、第六二頁。

(百四十五) ウエーキフキールド著『イギリスとアメリカ』ロンドン、一八三三年刊、第一卷、第四七頁(46)。

穀物條例の撤廢された直前の時代は、農業勞働者の位置について新たな光明を與へたものである。一方に、この保護法律が現實的の穀物生産者を保護したこと如何に少なきかを論證するは、ブルジョアの煽動者の利益とする所であつたが、他方にまた、土地貴族が工場状態を非難したことや、この根本的に腐敗した、無情でお上品な懶け者が、工場勞働者の苦痛に對して

同情を装ひ、工場立法制定のために『外交的の熱心』を示したことなどについて、工業方面のブルジョアは無念やる方なしといふ有様であつた。二人の賊が相争ふときには、必らず漁夫の利が占められるとは、イギリスの古い諺である。斯くして實際のところ、労働者から最も破廉恥的に搾取するものは、彼此いづれなりやとの問題について支配階級のこの兩派が喧しく激論してゐる間に、彼等の言ひ分が雙方から眞理の産婆になつたといふ結果を來たしたのである。シャフツベリー伯(當時のアッシュレー卿)は、貴族的な反工場の博愛戰に於ける先鋒の闘士であつた。随つて彼等は、一八四四年から四五五年に至る間、『モーニング・クロニクル』紙が農業労働者の状態について與へた真相暴露の文章の中で屢々問題にされたのである。この新聞は當時に於ける最も有力な自由黨機關たりしもので、農業地方に特派員を送つてゐた。彼等は一般的の叙述や統計だけでは満足せず、親しく調査した労働者の家族とその地主との姓名を公表したのである。左に掲ぐる表(百四十六)は、ブランフォード、ウキンポールン及びブール市附近の三ヶ村で支拂はれてゐた賃銀を示すものである。此等の村は、チー・バンクズ氏とシャフツベリー伯との所有にかかるものであつた。アイルランド國教會の法王たり、イギリスに於ける敬神家の頭目たるこの伯爵が、仲間のバンクズと同様に、労働者の犬貨銀の中から如何に大なる部分を家賃といふ名義で著服してゐたかは、この表に依つて認められる所であらう。

第 一 村			
(a) 兒童	(b) 家族 成員數	(c) 成年男 子の週賃銀	(d) 兒童の 週賃銀
二	四	八・〇〇	—
二	四	八・〇〇	—
三	五	八・〇〇	—
二	四	八・〇〇 <small>志片</small>	— 志片
		八・〇〇	八・〇〇 <small>志片</small>
		八・〇〇	二・〇〇 <small>志片</small>
		八・〇〇	一・〇六
		八・〇〇	六・〇〇 <small>志片</small>
		七・〇〇	六・〇〇 <small>志片</small>
		七・〇〇	一・〇三 1/2
		一・〇九	一・〇六 <small>志片</small>
		一・〇九	一・〇六 <small>志片</small>
		一・〇九	一・〇九

(e) 家族全
體の週所得

(f) 週家賃

(g) 週賃銀か
ら家賃を控除
した殘額

(h) 一人當り
週賃銀

三	六	五	八	七・〇〇〇	二乃至二・〇〇〇	一・〇〇〇	二・〇〇〇	八・〇〇六	一・〇〇〇 ² / ₄
七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	六・一〇〇	一・〇〇〇 ¹ / ₄

第 二 村

三	四	八	六	六	五	六	一〇	八	八	七・〇〇〇	二乃至一・〇〇六	一・〇〇〇	一・〇〇六	八・〇〇六	一・〇〇〇 ³ / ₄
七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	一乃至一・〇〇六	一・〇〇〇	一・〇〇六	五・〇八 ¹ / ₂	〇・〇〇八 ¹ / ₄

第 三 村

〇	三	四	二	五	六	七・〇〇〇	一乃至二・〇〇〇	七・〇〇〇	一・〇〇六	一・〇〇〇	六・〇〇〇	一・〇〇〇
五・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	五・〇〇〇	七・〇〇〇	七・〇〇〇	一乃至二・〇〇六	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	四・〇〇〇	二・〇〇〇

(百四十六)『ロンドン・エコノミスト』誌、一八四五年三月二十九日號、第二九〇頁。

穀物條例の廢止は、イギリスの農業に絶大の刺戟を與へた。最大規模の排水(百四十七)や、舍飼及び人造飼草栽培上の新たな方法や、機械的施肥装置の採用や、粘土性土壤の新たな取扱や、礦物性肥料の使用増進や、蒸氣機關及び各種の新たな作業機その他の物の充用や、耕作一般の上に於けるヨリ收約的な方法の採用などは、この時代の特徴となるに至つたのである。

る。『農業協會』の總裁ビュージー氏の主張する所に依れば、當時農業上の相對的費用は新機械の採用に依つて殆んど半減するに至つたとのことである。而して一方、現實に於ける土地の收穫は急激なる増加を來たした。要するに、一エーカー當り投資額の増大と、隨つてまたヨリ急速なる小作集積の傾向とが、新しき農業方法の基礎條件となつたのである(百四十八)。同時に——東部諸州で從來養兎場や貧弱な牧場として利用されてゐた廣大の地積が、鬱葱たる穀物栽培地に一變されたといふ事實は暫く措くとしても——一八四六年から五六年に至る間、耕地の面積は四十六萬四千一百九十一エーカーの擴大を來たした。而も一方に於いて、農業に従事する人員總數が減少したことは、我々の既に知る所である。男女並びに各年齡期の嚴密の意味の農業労働者についていへば、一八五一年に於けるその總數は二百二十四萬一千二百六十九人であつたが、一八六一年にはそれが一百十六萬三千二百七十七人に減少した(百四十九)。そこで、イギリスの戶籍長官が『一八〇一年以降に於ける小作農業者及び農業労働者の増殖は……農産物の増加に比して何等の均衡を保たない(百五十)』と述べたことは當を得るとしても、斯かる不均衡は、耕地面積の擴大や、收約的耕作の發達や、土地に併合され土地の耕作に供げられた資本の空前的蓄積や、イギリスの農業史上類例なき土地産物の増大や、土地所有者の手に歸すべき地代の充溢や、資本家的小作農業者に屬する富の増大などと相並んで、農村労働者の人口が積極的の減少を來たした最近の時代については更らに著しく行はれてゐるのである。加ふるに、都會の販路や自由貿易の支配が間斷なく急速に擴大されてゐた事實を併せ考へるとき、農村労働者は斯かる幾多の危險を経験した後、遂に、理論上彼等を幸福ならしむべきであると考えられる所の状態に置かれるに至つた筈である。

(百四十七) 土地貴族はこの目的のため、國庫から——勿論、議會を通して——極めて低利で資金を借出した。而も小作農業者はこれを二倍の率で彼等に償還せねばならなかつたのである。

(百四十八) 中流の小作農業者が減少した事實については、國勢調査中の特に『小作農業者の息、孫、兄、弟、甥、姪、孫、姪、姉妹、姪等』約していへば、小農業者の營業に使用される自家族員)と題する項目に依つて知ることが出来る。この項目に屬する人口は、一八五一年には二十一萬六千八百五十人であつたが、一八六一年には十七萬六千一百五十一人に過ぎなくなつた。一八五一年から一八七一年に至る間、イギリスに於ける二十エーカー以下の小作地は九百以上減少し、五十乃至七十五エーカーの小作地は八千二百五十三から六千三百七十に減少した。一百エーカー以下の他の凡ゆる小作地についても同様である。然るに、同じ二十年間に大きな小作地の數は増大した。即ち三百乃至五百エーカーのものは七千七百七十一から八千四百十に、五百エーカー以上のものは二千七百五十五から三千九百十四に、一千エーカー以上のものは四百九十二から五百

八十二に増大したのである。

(百四十九) 牧夫の数は一萬二千五百七人から二萬五千五百五十九八に増加した。

(百五十) 『インゲランド及びウィエールズの國勢調査』第三六頁。

然るに教授ローデアーズは、次の結論に到達した。即ち、イギリスに於ける今日の農村労働者は、十四世紀後半及び十五世紀に溯る迄もなく、一七七〇年から一七八〇年に至る迄の先行者と比較しても、その位置は極めて悪化し、今や『舊來の農奴に復歸するに至つた。』而も食物及び住宅のいづれから見ても、ヨリ不良な農奴となつてゐるのである(百五十一)。ドクター・ジュリアン・ハンターは、農村労働者の住宅を取扱つた副時代的の報告中に曰く『農僕も農奴時代から傳はつた農村労働者の名稱の生活費は、生存し得べき最低限度に定められてゐる。…彼れの賃銀や住宅は、彼れの労働から打出される所の利潤に關しては計算に入らない。彼れは、小作農業者の計算上零に等しいものとなつてゐる(百五十二)。…彼れの生活資料は常に一の固定量として取扱はれるのである(百五十三)』と。『彼れの所得を更らに節減しようとするれば、彼れは「何も無い、何でも構はない」と言ひ得るのである。彼れは現在に於いて絶対に缺くべからざる僅かな物以外には何も持たないのであるから、將來について何等懸念する所がない。彼れは小作農業者の計算の起點たるべき零に達してゐるのである。どうにでもなれ、利益にも不利益にも關與する所はないのだ(百五十四)』。

(百五十一) ローデアーズ著『農業及び物價史』オックスフォード、一八六六年刊、第一卷第六九三頁。ローデアーズ君は自由派に屬し、コブデン及びブライトの友人であつた。隨つて彼れは『過去のよき時代を讚美する人』ではなかつたのである。

(百五十二) 『公衆健康第七報告、ロンドン、一八六四年』第二四二頁。されば、労働者の所得が幾分でも殖えたと聞くと、彼れの家主が家賃を引き上げること、また『労働者の妻が働き口を見出したといふ理由で』(前掲)小作農業者が彼れの賃銀を引き下げけるに至ること、何等異とすべきことではないのである。

(百五十三) 前掲、第一三五頁。

(百五十四) 前掲、第一三四頁。

一八六三年、政府は流刑又は懲役に處せられた囚徒の榮養及び労働上の状態について調査を遂げた。その結果は二冊の浩翰なる青表紙本に納められてゐるが、中に曰く、『インゲランドに於ける監獄の囚徒と同國に於ける貧民收容所の被救恤的窮民と

自由なる農村労働者との常食を細密に比較した結果、…囚徒の榮養が後ちの二階級のいづれに於けるよりも遙かに優良であり(百五十五)、而も懲役囚に課される労働量は、普通の農村労働者に依つてなされる労働の約半分に過ぎぬことが、確かめられた(百五十六)と。證人の特徴的な供述若干—エヂンバラ監獄の典獄ジョン・スマイス供述(第五〇五六號)『イン格蘭に於ける監獄の常食は、同國に於ける普通の農村労働者の常食に優る。』(第五〇七五號)『スコットランドに於ける普通の農村労働者が幾分でも肉を食用することは極めて稀である。』(第三〇四七號)『問、普通の農村労働者に於けるよりも遙かによき榮養を囚人に給與するを必要とする理由について心當りなきか? 答、なし。』(第三〇四八號)『問、懲役囚の常食を自由なる農村労働者の常食と略々等しからしむることは不可能であるか否かを確かめるため、更らに實験をなす必要ありと思惟せらるや?』(百五十七)、『農村労働者は言ふであらう。自分は激しく労働したが十分に食を得ることは出来なかつた。入獄中にはこれ以上激しく労働しなかつたが、それでも食は十分であつた。自分は此處に労働するよりも、寧ろ再び入獄した方がいいと思つてゐると』(百五十八)。左に掲ぐる比較概括は、右の報告第一卷所載の諸表に基いて作つたものである。——

一週間の榮養量(百五十八a)

	含窒素成分	無窒素成分	鐵物性成分	合計
ポートランド監獄署囚徒	二八・九五 ^{オンス}	一五〇・〇六 ^{オンス}	四・六八 ^{オンス}	一八三・六九 ^{オンス}
イギリスの水兵	二九・六三	一五二・九一	四・五一	一八七・〇六
兵士	二五・五五	一一四・四九	三・九四	一四三・九八
馬車製造工	二四・五三	一六二・〇六	四・二三	一九〇・八二
植字工	二一・二四	一〇〇・八三	三・一二	一二五・一九
農村労働者	一七・七三	一一八・〇六	三・二九	一三九・〇八

(百五十五)『流刑及び懲役に關する…調査委員報告』ロンドン、一八六三年、第四二及び五〇頁(セ)。

(百五十六) 前掲、第七七頁、控訴院長覺書。

(百五十七) 前掲、第二卷、證述。

(百五十八) 前掲、第一卷、附錄第二八〇頁。

(百五十八a) 前掲、第二七四及び二七五頁。

榮養不良なる人民部類の榮養状態について、一八六三年の醫務委員が與へた調査の一般的結果については、讀者の既に知る所である。農業労働者家族の大なる部分に於いて、その常食が『飢餓病を防ぐに』必要な最低限度以下にあることは、讀者の記憶する所であらう。而してこれは、特にコーンウオール、デヴォン、サマーセット、ウキルツ、スタッフオード、オックスフォード、パークズ、ハーツ等、純農業地方の總べてについて、言ひ得ることである。

ドクター・サイモンは曰く、『農業労働者自身の受けてゐる榮養は、平均量が示す所よりも大である。なぜならば、彼れは一家の他の人々に比し、労働をする上に缺くべからざる、ヨリ多くの食物部分(貧困の甚しい地方では、一家の使用すべき肉及び豚脂の殆んど全部を占める)を攝取するからである。…労働者の妻や發育期にある兒童の榮養量が不十分で、なかつく窒素に不足してゐる場合の多いことは、殆んど總べての州を通じて見られる所である』(百五十九)。

(百五十九) 『公衆健康、第六報告、一八六三年』第二三八、二四九、二六一、及び二六二頁。

小作農業者の自家に居住する僕婢等は、豊富な榮養を受けてゐる。彼等の數は一八五一年には二十八萬八千二百七十七人であつたが、一八六一年には二十萬四千九百六十二人に減少した。ドクター・スマイスは曰く、『婦人が屋外の耕作労働に従事することは、他の方面に如何なる不利益があるにしろ、現在の状態に於いては、彼等の一家にとつて極めて有利なことである。蓋しこれに依つて、靴や衣類を供給し、地代を支拂ひ、斯くして一家の榮養を佳良にすることを可能ならしむる所得が追加されることになるからである』(百六十)と。この調査の最も注意すべき結果の一は、イングランドの農村労働者はイギリス聯合王國の他の部分の農村労働者に比して『榮養が遙かに不良である』といふことであつた。それは左表に示す通りである。

平均的の農業労働者に依る一週間の炭素及び窒素消費量(百六十一)

	炭	素	窒	素
イングランド				
		四〇六・七三		一五九・四

ウ エ ー ル ズ
スコットランド
アイルランド

四八三五四
四八九八〇
四三三六六

二〇三一
二三四八
二四三九

(百六十) 前掲、第二六二頁。

(百六十一) 前掲、第一七頁。アイルランドの農業労働者に比べると、イングランドの農業労働者は四分の一のミルク、二分の一のパンを受けてゐるに過ぎぬ。アイルランド農業労働者の榮養状態が如何にヨリ優良であるかは、十九世紀の初葉、アーサー・ヤングがその著『アイルランド旅行』の中に述べてゐる通りである。これ畢竟、貧困なるアイルランド小作農業界は富裕なるイングランド小作農業者に比べて比較にならぬほど人情的であつたためである。ウェールズについては、本文の中に述べた所は南西部地方には當嵌らない。結核や癩癩などに因る死亡率の増進は人民の身體状態が悪化するに従ひ強くなるとは、同地に於ける總べての醫師の主張に一致する所であつて、彼等はいづれもこの身體状態の悪化の原因を貧困に歸してゐる。『同地に於ける農村労働者の一日の生活費は約六片であるが、多くの地方の小作農業者は、彼れ自身でさへ貧困なのであるから』ヨリ少額の賃銀を支拂つてゐるのである。鹽漬にして桃心木のやうに堅く乾し固め而して消化の困難な割りに榮養の足しにならぬ一片の肉又は豚脂が、多量の稀薄なスープ(又は粥)や、碾割麥や、韭などの味付けに利用され、これが農業労働者の毎日の正餐となるのである。『…工業の進歩は、この寒氣酷烈な濕氣の多い地方の労働者にとつては『手織の堅牢な布に代ふるに價安き見掛けばかりの木綿品を以つてし』、強き飲料に代ふるに『有名無實の』茶を以つてしたに過ぎぬのである。『數時間に互つて風雨に曝された後、彼等は小屋に歸つて来て、泥炭や、又は粘土に少量の石炭屑を混ぜて造つた炭團の火にあたるのであるが、此等の燃料からは、旺んに炭酸瓦斯及び硫酸瓦斯が吐き出される。小屋の壁は泥と石で造られ、床は小屋の出来る前から在つた儘の地べたであり、屋根は濕氣でアヨクと膨らんだ一地の藁を置いたものである。暖を保つため隙間といふ隙間は總べて詰め寒いではまふから、屋内は恐ろしい惡臭に充ちてゐる。斯ういふ空氣の中で、直接地べたに脚をつけ、唯一つの著物を背で乾かしながら、彼等は妻子と寢食を共にするのである。この小屋の中で夜の一部を過ごしたことがある助産醫たちは、彼等の脚が地べたの泥濘中に没してしまひ、呼吸を得べく竊かに壁に孔を穿つ(これ

は何でもないことだつた！) ことを餘儀なくされた経験を語つてゐる。榮養不足の農民が毎夜この種の又は他の様々の健康上有害な影響のもとに置かれてゐることは、凡ゆる方面の證人の供述に依つて明かである。且つこれがため、虚弱な瘰癧の人民を生ぜしむる事實についても、證據は決して乏しくないのである。…カーマーゼンシア及びカーチガンシア兩州に於ける救貧吏たちの報告は、この事實を適切に論證するものである。更らに、ヨリ恐るべき傳染病たる癩患も流行してゐる。尙、氣候についていへば、年々八ヶ月乃至九ヶ月間は酷烈なる南西風が吹き荒び、主として山丘の西腹を襲ふ所強雨を伴ふ。圍はれた場所を除くほか、樹木は稀であるが、これは強風のために攫はれてしまふ結果である。農民の小居は一般に丘陵にあるが、峽谷や石坑にあるものも少なくはなく、牧場に生活し得るものは僅少の羊と土著の牛のみである。…年少の人々はグラモルガン州やモンマウス州の東部鐵山地方に移住してゆく。カーマーゼンシア州は、鐵山で働く人々の養成所でもあり病院でもある。…人口は辛うじて維持されるといふ有様である。例へばカーチガンシア州に於いては――

男子	一八五一年	一八六一年
女子	四五、一五五	四四、四四六
合計	五二、四五九	五二、九五五
	九七、六一四	九七、四〇一

(一八六四年公衆健康第七報告、ロンドン、一八六五年刊) 第四九八―五〇二頁及び隨所、ドクター・ハンターの報告) ドクター・サイモンは政府の健康報告中に曰く、『我が農村勞働者の住宅の量が不十分で且つ質の慘憺たることについては、ドクター・ハンターの報告の殆んど毎頁にこれを證明すべき事實が與へられてゐる。而してこの方面に於ける農業勞働者の状態は、多年に互つて次第に悪化し來たつたもので、彼等が住宅を見出すことの困難は、今や過去數世紀間に比して遙かに甚しく、辛うじて見出したとしてもそれが自己の望む所に適しないことは、これまた遙かに甚しくなつてゐる。殊に最近二三十年來、この弊状は益々甚しく農業勞働者の住宅状態は今や悲慘の極に達してゐるのである。彼等の勞働に依つて富を積む人々が一種の同情的寛大を以つて彼等を待遇することを可とすると考へてゐる場合を除き、彼等はこの問題について最早如何ともすることの出來ぬ状態に陥つてゐる。彼等が農業上の勞働に従事してゐる土地に住宅を見出すかどうか、彼等の得る住宅が人間相應のものであるか、それとも豚の住むに適したものであるか、其處には彼等の貧困の壓迫を和けてくれる小庭があるかどうか――凡そ此等の問題は、彼等が自己の要求する住宅に相應した賃借料を進んで支拂ふか、又は支拂ふ能力あるかに依つて決定され

るものではなく、寧ろ他の人々が「自己の所有物を欲する儘に處分する」權利を如何に行使せんとするかに依つて決定されるのである。如何に大なる小作地と雖も、其處に一定數の勞働者住宅——人間の住むに相應した住宅については尙更らであるが——を設けねばならぬといふ規則はない。また如何なる法律と雖も、土地に對する些かの權利をも勞働者のために保留するものではない（この土地は、日光や雨をと同様に彼れの勞働を必要としてゐるのであるが）。……尙いま一つ、農業勞働者にとつて不利となる外部的事實がある。……それは、居住及び救貧稅負擔に關する條項を含む所の救貧法に依つて與へられる影響である（百六十二）。この影響の下に、如何なる教區も、己が區内に居住する農業勞働者の數を最低限度に縮少することを以つて金錢上の利益とするやうになる。蓋し農業勞働なるものは、そのために苦役する所の勞働者や彼等の家族にとつて、確實なる永續的の獨立を保證するものでなく、大抵は大なり小なりの迂路を経て結局被救恤的窮乏に達せしむる迄の道程に過ぎぬからである。この窮乏は絶えず彼等の目近に迫つてゐるのであつて、たま／＼病氣に冒されたり、職を失つたりすれば、彼等は直ちに教區の救助に頼よることを餘儀なくされるといふ有様である。されば、一教區内に居住する農業勞働者の人口が多いといふことは、これ取りも直さず、彼等のために充用すべき救貧稅の負擔を多からしむる所以となるのである。……大地主（百六十三）としては、……自己の所領内に勞働者の住宅を設けさせないことに定めてしまひさへすれば、それで彼等は爾後貧民に對する負擔の半ばを免脱されることになるのである。イギリスの憲法その他の法律が、「自己の所有物を欲する儘に處分する」所の地主のために、土地の耕作者を異邦人の如く取扱ひこれを己が所領から驅逐するといふ、この種の無條件な土地所有權をば、如何なる範圍まで認めてゐるか、それは私が茲に論究せんとする問題でない。……この種の驅逐權は、單なる學理に基くものではなく、農業勞働者の住宅狀態を支配する所の主要な一事情として、實際上極めて大規模に行はれてゐるのである。

……この惡弊の範圍については、ドクター・ハンターが最近の國勢調査に基いて編纂した例證を擧ぐれば十分であらう。これに依れば、家屋の需要が著しく増加したにも拘らず、最近十年間、イングランドの八百二十一地方に於いて、家屋の取壊しが旺んに行はれた。斯くて自から勞働しつゝある教區内に居住することを得ぬ人々は暫く措き、此等の地方では一八六一年に於いては一八五一年に比し、四パーセント半小さな住宅内に五パーセント五分の一大きな人口を收容するといふ結果を來たしたのである。ドクター・ハンターの述ぶる所に依れば、人口驅逐の行程がなし遂げられたとき、茲に極めて少數の小屋を残すに止まる所の『飾り村』——其處には特殊の階級として通例の良き待遇を受けてゐる牧夫や、庭師や、獵番などの如き正規の奴僕以外には何人も居住することを許されない——が生ずることになつた（百六十四）。だが、土地は耕作を要する。而してこの耕作

勞働に従事する勞働者は、地主の家屋に居住する所の人々ではない。彼等は閉鎖村で小屋が取り壊されてしまつた後、多數の小さな家に依つて收容された恐らく三哩も遠方の開放村から來て働くのである。斯ういふ事態に陥らんとしてゐる農村の小屋は、廢朽に任せられて毫も修繕されず、慘憺たる光景を以つて壊滅の運命を語つてゐる。それは自然的腐朽の様々な段階を通過してゐるのである。然し如何なる腐朽段階にあるにしろ、それが家の形を成してゐる限り、斯かる小屋に對して勞働者は家賃を支拂ふことを許される。優良な家屋に相當したほどの家賃であつても、彼等が尙進んでこれを支拂ふことは、しばしば見られる所である。此等の小屋は、無一文な占有者に依つて與へられ得る所のもの以外には、何等の修復も改善も加へられないのであつて、遂に全く居住し得ざるに至れば、これ即ち取壊し小屋が一つ殖えただけのことであつて、將來の救貧税がそれだけ輕減されることになるのである。斯くの如く、大地主が自己の所有地からの人口驅逐に依つて救貧税を免れつつあるとき、附近の町や開放村では驅逐された勞働者を受け入れてゐる。尤も『附近』といつた所で、日々勞働する小作地までは三哩乃至四哩も隔つてゐることがあるので、勞働者は日々のパンを得る勞働の上に、尙六哩乃至八哩づつの徒歩勞働をたわいもないことのやうにして追加されてしまふ。彼等の妻子に依つてなされる一切の農業勞働も亦、同様な不利益事情の下に行はれるのである。而も距離が彼等に與へる勞苦は、單にこれだけではない。開放村では、家屋投機師たちが僅かばかりの土地を買つて、其處に出來得る限り安價な小屋を出來得る限り密集して建て込める故に、開闢な田野に隣接してゐる此等の小屋も、最悪な都市住宅の最悪な特徴を有することになつてしまふ。要するに、イングランドの農業勞働者は、この種の慘憺たる小屋の中に詰め込まれてゐるのである(百六十五)。……また、農村勞働者が自己の耕作する土地に居住する處に在つても、彼等がその生産上の努力多き生活に相應した住宅を得てゐるなどと考ふべきではない。王侯領に於いても、彼等の小屋が悲慘極まるものであることはしばしば見られる。勞働者及びその一家の住む處などほとんどな小屋でも結構だといひながら、彼等から出來得る限り多額の家賃を搾り取ることを恥としない地主がある(百六十六)。爐も便所も明窓もなく濼以外には何等の給水設備もなく、庭もない、寢間一つ切りの破れ小屋を供給されても、勞働者はこの不法を如何ともすることが出來ぬのである。……健康除害條例なるものは……一の死文たるに過ぎぬ。その實施は主として、斯かる小屋の賃貸者に任かせられてゐるからである。……稀れに見る所の燦爛たる光景から眼を轉じて、イギリス文明の汚辱たるべきこの種の壓倒的事實に注意を向けることは、正義のため必要とする所である。勞働者の住宅の不良なことが明かとなつてゐるにも拘らず、この點よりも寧ろ住宅の不足してゐることの方が遙かに差し迫つて匡治を要する所の大きな惡弊であると、その道の觀察者たちが異口同音に結論してゐることは、

寔に悲しむべき事態といはねばならぬ。農村勞働者住宅の雜沓密集した事態は、單に健康の點のみでなく、また端正な道德的生活に注意を拂つてゐる人々にとつても、多年に亙つて重大な問題となつてゐた所である。農村地方に於ける傳染病蔓延の事實を報告した人々は、いづれも、ステロ版に印刷したやうな一律の言葉を以つて、斯くの如き住宅の雜沓密集した事態のため、傳染病の蔓延を阻止せんとする企圖が全く無効に了らしめられたことを反復主張してゐるのである。また、田園生活には健康に適する幾多の良き影響あるにも拘らず、傳染病の蔓延を助長する所の斯かる原因のため、傳染性でない他の種々なる疾病の發生も助長されるやうになることは、從來幾度か指摘された所である。而してこの状態を指摘した人々は、更らに他の惡弊についても黙して居らなかつた。本來はただ健康の保護といふことだけが問題であつたとしても、やがて他の方面の問題にも注意を向けねばならなくなつて来る。既婚者たると未婚者たるを問はず、成年男女が狹隘なる寢室内に密集させられる如き場合がよくあることは、彼等の報告中に指摘されてゐる所であるが、斯ういふ状態の下に男女間の端正が維持されず、道德が破壊されることになるは必然であるとの感を喚び起す(百六十七)。…例へば、ドクター・オードの報告する所に依ると、バッキンガムシアア州ウキングに熱病が流行したのは、或る青年がウキングレーヴから病毒を背負ひ込んだのがもとで、彼れは發病後も數日間、他の九名の人々と共に同じ一室内に寢てゐたことである。斯くて二週間を出でざる中に、病毒は他の數人の者にも感染し、やがて九人の中、五人迄がこれに冒されて、一人は遂に死亡した。…當時一私醫としてウキングの患者を診察した聖デオヂ病院のドクター・ハーヴェーの報告に示されてゐる所も、やはり同じ意味のことであつた。彼れは曰く、「一人の熱病婦人は夜間、父母と、一人の私生兒と、二人の兄弟と、それ／＼一人づつの私生兒を有つた二人の姉妹と共に、合計十人の者が一室内に寢てゐた。數週前には、この同じ一室内に十三人の者が寢てゐたのである」と(百六十八)。

(百六十二) この法律は一八六五年に幾分か改善された。この種の細工が何の役にも立たぬことは、やがて經驗に依つて教へられるであらう。

(百六十三) 以下の敘述を理解するについての参考として述べて置く。謂ふ所の閉鎖村(6)とは、一人又は數人の大地主の所に屬する村を指し、開放村(7)とは幾多の小地主の所有にかかる村を指すのであつて、建築投機師が小屋や宿舍長屋を造り得るのは、斯かる開放村に見る所である。

(百六十四) この飾り村なるものは、表面は立派だが内容の空なることは、恰もカタリナ二世がクリミア旅行中に見たといふ村の如くである。最近に至り、牧夫でさへ、しば／＼この種の飾り村から驅逐されるやうになつた。例へばハーブロー市

場附近には、約五百エーカーを占むる羊牧場でありながら、一人分の労働しか必要としないものがある。従来牧夫たちはライセスター及びノーサンプトンの廣大なる美しい牧場を横過すべき長途の歩行を減ずるため、小作農地の内部に一つの小屋を給せられる習はしであつた。然るに今や、彼等は住宅費として一週に十三分の一志の支給を受け、遠く隔つた開放村の内部に住宅を求めねばならなくなつたのである。

(百六十五)『開放村に於ける労働者の家屋が常に充満してゐることは論を俟たぬ所であるが、此等の家屋は通常、建築設備師が自己の所有地と名づけてゐる土地の最端に背を向けて並列的に築造される。隨つて前面を除くほか、日光と空氣の入る道がないのである』(『公衆健康第七報告、ロンドン、一八六五年』第一三五頁ドクター・ハンターの報告)。村のビール店や雜貨店の經營者が家主を兼ねる場合もしばしば見られる。この場合には、農業労働者の外に尙第二の主人をも有つことになる譯で、同時にまた彼れはこの第二の主人の顧客ともなる。『彼れは一週十志の収入の中から年四磅の家賃を除いた殘餘の額を以つて……販賣者が勝手に定めた價格で缶かばかりの茶や、砂糖や、パン粉や、石鹼や、蠟燭や、ビールを購はねばならぬ』(前掲第一三四頁)。この種の開放村は實際のところ、イギリスに於ける農業プロレタリアの『徒刑場』となつてゐるのである。小屋の多くは純然たる宿舍長屋であつて、附近の凡ゆる浮浪漢を出入させてゐる。従來穢れ盡した境遇の裡に在つて、不思議にも品性の堅實と純潔とを維持してゐた農業労働者及びその一家の人々は、茲で全く墮落させられてしまふのである。建築技師や、小地主や、開放村などについて、パリサイ的の肩をすくめることが上流のシアイロク仲間であつた。流行となつてゐることは言ふ迄もない。而も彼等の『閉鎖村や飾り村』は『開放村』の生地であり、且つ開放村なくしては存在し得なかつたものであることは、彼等の善く知る所である。『開放村の小地主なくんば……農業労働者の大多數は自己の耕す農地の樹下に眠らねばならなかつたであらう』(前掲、第一三頁)、『開放村』及び『閉鎖村』の制度は、イングラッドの中部諸州と東部一帯とに専ら行はれてゐる。

(百六十六)『雇主(小作農業者又は地主)は……一週十志で雇つた一労働者の労働に依つて直接又は間接に利潤を確保し、然る後またこの労働者から、眞に自由な市場では二十磅にも値しないやうな家屋の家賃として年々四磅又は五磅を受けてゐるのである。家主は「俺の家に住むのが厭だつたら、労働證明書を渡さないから、何處へでも行つて勝手に働け」と命令する權力を以つて、家賃の人爲の相場を維持して行くのである。……労働者が若しヨリ善き境遇を得ようとして、鐵道線路工夫なり石坑夫なりにならうとすれば、同じ權力は待つてゐましたとばかり一この安賃銀で俺のために働け。さもなければ、

一週前に豫告して去れ。豚があるなら、それも一緒につれてゆけ。貴様の庭の馬鈴薯で何が儲かるか、やつて見るがいい」と言ふ。が、實はさうして貰はない方が有利だと考へれば、斯ういふ場合に家主（又は小作農業者）は逃亡を企てた罰として、家賃値上を要求することが往々ある（『前掲ドクター・ハンター報告、第一三二頁』）。

（百六十七）『新婚夫婦と同じ部屋に寝る年頃の兄弟姉妹は、これがため宜しからぬ教訓を與へられる。而して茲に實例を擧げる譯には行かないが、骨肉相姦を取てした婦人が非常な苦痛と、時にはまた死とを以つて報いられたといふ風説を證明すべき材料は十分に與へられてゐるのである（ドクター・ハンター報告、第一三七頁）。多年ロンドンの最不良方面で探偵をしてゐた農村地方の或る警察官は、彼れの村落の少女たちについて曰く『彼等の性的大膽と無恥とは、自分がロンドンの最不良方面に奉職してゐた當時にも匹敵すべきものを見たことがない程のものである。……彼等は豚の如く生活してゐる。而して年頃の男子も女子も父も母も、大抵はみな同じ部屋に寝るのである』（『兒童雇傭委員第六報告、ロンドン、一八六七年』附録第七七頁、第一五五號）と。

（百六十八）『公衆健康、第七報告、一八六四年』第九——一四頁隨所。

ドクター・ハンターは、純粹の農業地方のみでなく、イングランドの凡ゆる州について、五千三百七十五の農業労働者住宅小屋を調査した。此等の中、二千一百九十五は寢室が一つしかなく、それがまたしばしば住室に兼ねられるといふ有様であつた。更らに、寢室が二つあるものは二千九百三十、二つ以上あるものは百五十であつた。以下、十二州について簡單な標本を掲げよう。

（一）ベッドフォードシャー州

レスリングスウォース教區——寢室、縦約十二呎、横十呎。これより小なるものも少なくない。小さな平小屋を板で二つの寢室に區切り、高さ五呎六吋の臺所に一つの寢床を置いたものをしばしば見る。家賃は一年に三鎊。便所は借家人の自辨で、家主は使用の穴を供給するだけである。誰れか一人便所を設けると、近所中でこれを共用する。リチャードソンといふ一家の住んでゐた小屋は、及びもつかぬ美しいものであつた。『その漆喰塗は、膝を屈めて挨拶する時に見られる淑女服の如く膨らんでゐた。破風の一端は出張り、他端は凹み、そしてこの凹んだ方の一端には、粘土と木で造つた象の鼻のやうに曲つた煙突が立ち、それを倒れないやうに一本の長い棒で支へてある。戸口と窓とは長菱形を成してゐた。』視察した十七軒の中、一つ以上の寢室があつたものは四軒切りで、而もこの四軒には溢れる程つめ込まれてゐた。寢室が一つ切りない或る一階建の小屋

には、三人の大人と三人の子供が居り、他の同様な小屋には、夫婦と六人の子供とが住まつてゐた。

ダントン教區——家賃は高く、四磅から五磅まで。成年男子一週間の賃銀は十志。彼等は家族のものに麥糲をさせて、家賃を捻出しようとしてゐた。家賃が高ければ高いほど、それを捻出すために共稼ぎさせられる人数が益々殖えて来る。六人の成年者が四人の子供と共に、一つの寢室に住んでゐたが、その家賃は三磅十志であつた。ダントン教區で最も家賃の低廉な小屋は縦十五呎、横十呎といふ外廊のもので、これは三磅で賃貸されてゐる。視察した十四軒の中、寢室の二つあるものは一軒切りであつた。村はづれの或る小屋では、家の周囲で自由に脱糞するといふ有様であつたが、この小屋の入口のドアは下部五時ほど腐朽して無くなつてゐた。夜になると、このドアを閉めて煉瓦で抑へ、藁を懸けて置く。窓の半分は、硝子も枠も全く朽ち果て、室内には家具がなく、其處には大人が三人、子供が五人、都合八人詰め込まれてゐた。斯ういふダントン教區も、リッダルスウエード聯合教區中の他のものに比して不良の方ではないのである。

(二) パークシア州

ピーナム教區——一八六四年六月、或る一階建の小屋に夫婦と四人の子供が住んでゐた。娘の一人が仕事先から猩紅熱を背負込んで来た。彼女は死んだ。他の一人の子供も病みついて死んだ。ドクター・ハンターが呼んで來られたときには、母と一人の子供はチブスに罹つてゐた。父と一人の子供は屋外に寝た。けれども隔離を確保することは困難であると信じられた。この悲惨な村の込み合つた市場には、熱病に襲はれた家の敷布類が洗濯待ち顔に積まれてあつたからである。——Hの家は一週の家賃一志、寢室一つ切りで其處には夫婦と六人の子供とが住んでゐた。また、或る家は一週の家賃八片、奥行十四呎六吋、間口七呎、臺所の高さ六呎、寢室には窓も、爐も、扉もなく、廊下に向つたものを除くほか出入口がなく、庭もない。最近までこの家には、一人の男が二人の娘及び一人の息子と住んでゐた。娘も息子も共に成年に達してゐた。父と息子はベッドに、娘たちは廊下に寝た。娘たちはいづれも妊娠の身であつた。一人は分娩のため貧民收容所へ行つて、歸つて來た。

(三) バッキンガムシア州

この州では、千エーカーの地積に建てられた三十軒の小屋に、約百三十乃至百四十人の人々が住んでゐた。ブライデナム教區千エーカーの地積には、一八五一年には三十六軒の小屋があつた。その居住者は、男子八十四人、女子五十四人であつた。男女數のこの不均衡は、一八六一年に及んで緩和され、男子は九十八人、女子は八十七人となつた。即ち十年間に男子は十四人、女子は三十三人増加した譯である。然るに小屋の數は、同じ十年間に一軒減じてゐる。

ウキンスロー教區——この教區に於ける小屋の大なる部分は、新たに體裁よく築造されたものである。小屋の需要は著しいやうで、極めて見ぢめな一階小屋でも、一週に一志乃至一志三片で賃貸されてゐるといふ有様であつた。

ウォーター・イトン教區——この教區の地主たちは、人口増殖を目前にして、既存家屋の約二〇パーセントを取り壊した。勞働場所まで約四哩徒歩せねばならぬ一人の哀れな勞働者に向つて、もつと近い處に小屋が見出せないかと聞いたら、答へて曰く、『私共のやうな、こんなに多人數の家族を彼等が受け入れるもんですか』と。

ウキンスロー教區附近チンカーズ・エンド——或る小屋では、一つの寢室に四人の大人と四人の子供が住んでゐた。奥行十一呎、間口九呎、高さは最高の所で六呎五吋。いま一つは奥行十一呎三吋、間口九呎、高さ五呎十吋で其處に六人住んでゐた。此等の家族の占むる場積は、いづれも囚徒一人に必要とされる場積よりも小であつた。どの家も一寢室切りで、裏口がなく、水は極めて乏しい。一週の家賃は一志四片から二志まで。視察した十六軒の中、一週に十志の收入を得てゐた男はただ一人切りであつた。斯かる事情の下に各人の受くる空氣量は、夜間四呎立方の箱の中に閉ぢ込められた場合に得る空氣量に相當する。昔の小屋でも或る量の原生的な換氣を供給してゐたのである。

(四) ケンブリッヂシャー州

ガンブリンゲイ教區は數人の地主の所有に屬するものであつた。この教區にも、到る處に見出され得る悲惨な一階建の小窟があつた。麥蘗編が旺んであつた。『死の如き倦怠、不潔に對する絶望的な屈服』が、この教區を支配してゐた。區の中心にある家屋は全く等閑に附せられて居り、南北兩端に進むに従つて益々慘憺たる状態に達し、ボロ／＼に朽ち果てたものが少なくない。地主は他に住んでゐて、此等の哀れな巢から自由に吸血するのである。家賃は非常に高く、一寢室に八人乃至九人住んでゐる。おの／＼一人又は二人の子供を有する六人の大人で、小さな一寢室に住まつてゐるものが二件あつた。

(五) エッセクス州

この州では多くの教區に於いて、人口の減少と小屋の減少とが並行してゐた。だが、家屋を取り壊しても、人口の増殖は阻止せられず、又は『都市移住』といふ名義で到る處に行はれてゐた農民驅逐を生ぜしめることもなかつた教區は、二十二を下らなかつた。地積三千四百四十三エーカーを占むるマインダリンゴイ教區の小屋は、一八五一年には一百四十五軒あつたが、一八六一年には百十軒に過ぎなくなつた。けれども、人々は其處を去らうとせず、斯かる待遇の下にあつても尙、人口は増殖するを得たのである。ラムズデン・クラッグズ教區では、一八五一年には六十一軒の小屋に二百五十二人居住してゐたが、一八

六一年には四十九軒の小屋に二百六十二人詰め込まれることになった。また、バシルデン教區では、一八五一年には一千八百二十七エーカーの地積に三十五軒の小屋があつて、其處に一百五十七人居住してゐたが、十年目の終末には二十七軒の小屋に一百八十人居住するといふ有様であつた。フィングリントン區、サウス・ファーンブリッジ區、ウキッドフォード區、バシルデン區、ラムズデン・クラッグズ區等に於いては、一八五一年には總地積八千四百四十九エーカーに對する小屋の總數三百十六軒、居住者の總數一千三百九十二人であつたが、一八六一年には同じ地積に於ける小屋の數は二百四十九軒に減じて、而も居住者の數は一千四百七十三人に増加した。

(六) ヒーアフォードシア州

この小さな州の農民は、イングランドに於ける他のいづれの州の農民よりも『驅逐の精神』に苦しめられること甚しかつたものである。ナッビー區の小屋は大抵二室であつて、多くは小作農業者の所有に屬するものであつた。この種の小屋を一年に三磅又は四磅で賃貸することは容易であつた。而も小作農業者の支拂ふ賃銀は一週九志であつた！

(七) ハンチングドンシア州

ハートフォード教區には、一八五一年には八十七軒の小屋があつたが、その後間もなく、この小教區(地積一千七百二十五エーカー)では十九軒の小屋を取り壊した。住民の數は、一八三一年には四百五十二人、一八五二年には八百三十二人、一八六一年には三百四十一人であつた。寢室一つ切りの小屋を十四軒視察して見たが、その一つには一組の夫婦のほか三人の息子(成年)と一人の娘(成年)と四人の児童と、合計十人住んでゐた。また他の一軒には、三人の大人と六人の児童とが詰め込まれてゐた。八人住まつたゐた或る寢室の大きさは、奥行十呎十吋、間口十二呎二吋、高さ六呎九吋で、一人當り平均は、室内の突出部を控除しないで約一百三十立方呎であつた。十四の寢室に、三十四人の大人と三十三人の児童とが住んでゐた。此等の小屋には、小庭の附いたものは減多にないが、僅かな地片を一ルード(四分の一エーカー)當り十志又は十二志で小作することを許された。この種の小作地は小屋が隔つた處に在り、而して小屋には便所がないのであるから、用便の時は一々其處まで出掛けるか、さもなければ、尾籠な話だが押入の抽斗の中にやらかして、一杯になつたとき抽斗を抜いて其處へあけに行く。日本でさへ、生命條件の循環はもつと清潔に行はれてゐるのである。

(八) リンカンシア州

ラングトフト教區——この教區のライトの小屋に、一組の夫婦が五人の子供と住んでゐた。この小屋には臺所と洗場とがあ

り、臺所の向ふに寢室がある。臺所と寢室は、奥行十二呎二吋、間口九呎五吋であつて、總地積は縦二十一呎二吋、横九呎五吋。寢室は屋根部屋で、壁は屋根に向つて棒砂糖のやうに集中し、屋根窓は前面に向つて開いてゐる。彼等は何故、此處に住んでゐるか？ 庭があるからか？ 否、あつても至つて小ッぽけな庭である。家賃のためか？ 否、家賃は高く一週一志三片であつた。労働場所に近いためか？ 否、労働場所は六哩も融つてゐるため、毎日往復十二哩も徒歩せねばならぬ。彼等がこの家に住むやうになつたのは、要するにこんな家が借りられたからである。何處に在つても、どんな状態に在つても構はない、兎にかく自家専用の小屋が欲しかつたからである。左に掲ぐるものは、ラングトフト教區に於いて三十八人の大人と三十六人の兒童とを住まはせてゐる十二寢室十二軒の小屋の統計である。――

ラングトフト教區に於ける十二軒の小屋

小屋 數	寢室	成年人	兒童	人員合計	小屋 數	寢室	成年人	兒童	人員合計
一	一	三	五	八	七	一	三	三	六
二	一	四	四	七	八	一	二	二	五
三	一	四	四	八	九	一	二	〇	二
四	一	五	二	九	十	一	三	三	五
五	一	二	二	四	十一	一	三	三	六
六	一	五	三	八	十二	一	二	四	六

(九) ケント州

ケンニングトン教區――一八五九年には、住民の過充は極度に達してゐた。この年、デフテリアが流行して、區醫は職務上貧民の状態につき調査を行つた。この地方に於いては労働を要すること多きにも拘らず、小屋が取り壊され、而も新たな小屋の築造されたものがないことを、彼れは見出した。或る地方には鳥籠と名づけられる四軒の小屋があつた。その各は左の廣さ

ある四室を有つてゐた。——

寢所 奥行九呎五吋、間口八呎十一吋、高さ六呎六吋

洗場 奥行八呎六吋、間口四呎六吋、高さ六呎六吋

寢室 奥行八呎五吋、間口五呎十吋、高さ六呎三吋

寢室 奥行八呎三吋、間口八呎四吋、高さ六呎三吋

(十) ノーサンプトンシア州

プリンウォース、ピックフォード、フローア——此等の村では、冬になると二十人乃至三十人の者が勞働不足のため路上にブラ／＼してゐる。小作農業者は常に不足なく穀物や蕪薯の栽培地を耕作せしめるとは限らぬ。地主は總べての小作地を二三に集一してしまふ方が得策であることを知つた。そこで就業不足を來たしたのである。濠の彼岸からは田畑が勞働を呼び求め、此岸では欺瞞された勞働者が田畑に向つて渴望の眼なごしを送つてゐる。夏は熱病的に過度の勞働をなし、冬は飢餓に瀕するといふ有様であるから、彼等が獨特の方言で以つて「坊主と貴族が結託して、俺たちを苛め殺すやうだ」といふのも、無理からぬ次第である。

フローア村では極めて小さな一寢室内に一組の夫婦が四人五人又は六人の兒童と共に居住してゐるものや、三人の大人が五人の兒童と共に、或は一組みの夫婦が祖父と、猩紅熱に罹つてゐる六人の子供と共に住んでゐるなどの例を見た。二寢室二軒の小屋には、それ／＼八人の大人と九人の大人との二家族が住んでゐた。

(十一) ウキルトシア州

ストラットン教區——三十一軒について視察した。その中、八軒は寢室一つ切りのものであつた。ペンチル教區——或る小屋は一週一志三片の家賃で、四人の大人と四人の兒童との一家に賃貸されてゐた。それは壁が比較的よかつた一點を除くほか荒切りの石で造つた床から、腐朽した藁屋根に至るまで、何一つ取り柄がなかつた。

(十二) ウォーセスターシア州

この州では、小屋の取り壊しは酷いといふ程ではなかつたが、一八五一年から一八六一年に至る間、一家の平均人員は四・二人から四・六人に増加した。

パッドセイ教區——この教區には、一階建の小屋で小庭付きのものが、澤山あつた。若手の小作農業者たちは曰く、『小屋は

貧民を殖やすから厄介物だ』と。また或る紳士は『小屋を建てても、貧民の状態が善くなる譯でない。五百軒の小屋を建てたところで、直に塞がつてしまふ。實際、多く建てれば建てるほど、益々多くを要するやうになる』即ち家は住民を喚び起し、住民はまた自然的に住宅を壓迫するといふ譯)と述べたが、これについてドクター・ハンターは言ふ。『が、此等の貧民は何處から来たものでなくてはならぬ。然るに、パッドセーには救恤設備の如き彼等の心目を惹く特殊なものがないのであるから、他のヨリ悪い地方で彼等を反撥して寄越さなければならぬ筈である。若し彼等の労働場所附近に小屋と一片の貸附地とが見出せるなら、彼等は好んでパッドセー區に入り込むことはないであらう。この區では、一片の土地についても、小作農業者の支拂ふ率に二倍した賃貸料を要求されるからである。

都市への不斷移住と、小作の集積や耕地の牧場化や機械の採用やに因る農村人口の間斷なき『過剰化』と、小屋の取り壊しに因る農民の不斷驅逐とは、互ひに相携へて進むものであつて、一定地方の人口が空虚にされればされるほど、その地方に於ける『相對的過剰人口』は益々大となり、それが雇傭手段の上に與へる壓迫も、住宅に對する農民の絶對的過剰も益々大となり、隨つて農村に於ける地方的過剰人口及び極度に惡疫養成的なる人間密集も亦益々著しくなつて來る。散在した小農村や田舎町に於ける人口の稠密化は、農村地方一帯に互る強行的な人口驅逐に相伴ふものである。農村労働者の數が減じ、彼等に依る生産物の量が増大するにも拘らず、彼等の人口が不斷に『過剰化』してゆくといふ事實こそ、彼等の陥るべき被救恤的窮乏の搖籃なのである。而してこの終局に於いて避け難き被救恤的窮乏の事實こそ、彼等を驅逐せしむる一動機となり、彼等の住宅窮乏を齎らす主要の源泉となるものであつて、斯かる住宅の窮乏はまた、彼等の反抗力を挫き、彼等をして地主及び小作農業者の純然たる奴隸たらしめ(百六十九)、斯くして、勞銀の最低限度をば彼等に對する支拂の自然律として固定せしめるやうになるのである。

(百六十九)『農村に於ける日傭労働者の古く尊き労働は、彼等の地位にさへも尊嚴を與へる。彼等は奴隸ではなく、平和の戰士である。彼等は既婚者たるに相應した住宅を地主から供給さるべきである。地主は國家が兵士に對して要求する所と同一の強働労働を彼等に要求してゐるからである。彼等がその労働に對して市場價格を受けて居らぬことは、尙、兵士の労働に於ける如くである。彼等は兵士と同様に、幼少無知にして自己の職分と故郷とのほかには何も知らぬ頃から、勞働に従事せしめられる。居住に關する法律の效力や早婚の事實などは、恰も兵士に於ける新兵徵募や軍隊處罰令などの影響と同様の影響を彼等の上に及ぼすものである』(公衆健康、第七報告、一八六四年、ロンドン、一八六五年)第一三二頁ドクター・ハンター

1の所述)。例外的には心優しい地主もあつて、自己の造り出した荒寥につき憐みを感じることがある。ライセスター卿はフーカム城の完成を祝された時に曰く「自分の領地に獨居するは心淋しいことである。自分の屋敷以外には、四邊を見廻しても家は一軒もない。要するに、自分は巨城の巨人であつて、隣人をすべて食ひ盡してしまつたのである」と。

他方にまた、農村地方に於いては、不斷に「相對的過剩人口」が生じてゐるにも拘らず、それと同時に人口過少をも呈してゐるのである。この現象は單に地方都市や、鑛山や、鐵道敷設地など、人口が急激に流入する局部的の地點に見られるのみでなく、更らに收穫の季節や春夏中、イギリスに於ける極めて周到な收約的の農業が臨時の勞働力を必要とする幾多の時期に於いても、到る處に見出されるのである。斯くして農業勞働者は、耕作上の通常の需要に對しては常に過多であり、耕作上の例外的又は暫行的需要に對しては常に過少であるといふことになる(百七十)。同一の地方に於いて、同時に勞働不足と勞働過充とを訴へてゐる矛盾した怨言が、政府の文書の中に見出される所以は此處に在る。暫行的又は局部的の勞働不足は、勞銀を昂騰せしめるものでなく、耕作上に婦女及び兒童を採用せしめ、勞働者の年齢を益々低下せしめるといふ結果を來たすものである。婦人及び兒童の搾取がヨリ大なる作用範圍を占めるや否や、それはまた農業上の成年男子勞働者を過剩ならしめ、彼等の勞銀を低下せしめる所の一新手段となる。イングラントの東部には、斯かる循環論法の美しき一果實たる勞働隊制度(60)なるものが旺んに行はれてゐる。以下、この制度について簡單に述べる(百七十一)。

(百七十) 同様の現象は、フランスに於いても、最近十數年來農業上に資本制生産が侵入し「過剩」な農民人口が都市へ驅逐されるやうになるにつれて、ますます著しく見られるやうになつて來た。フランスに於いても、「過剩人口」の産源地には住宅狀態その他の事情の悪化が現れてゐる。土地分割制度に起因する特殊の『土地プロレタリア』(61)については、主として、彙に引抄したイポリット・コランの『經濟學』及び拙著『ルキ・ボナパルトの霧月十八日』(第二版ハンブルヒ、一八六九年刊、第五六頁以下(52))を見よ。一八四六年に於けるフランスの都市人口は二四・四二パーセント、農村人口は七五・五八パーセントであつたが、一八六一年には都市人口は二八・八六、農村人口は七一・一四パーセントとなつた。最近五平間に於ける農村人口率の減少は更らに著しい。既に一八四六年、ピエール・デュボンはその著『勞働者』(62)の中に歌つて言つた。

『弊衣を纏ひ、穴に宿り

屋根裏に、芥の中に、

我等は、梟や、

盗人と共に棲み、闇を好む。』

〔百七十一〕一八六七年三月末刊行の『兒童雇傭委員』第六（最終）報告は、専らこの農業勞働隊制度のみを取扱つたものである。

勞働隊制度は専らリンカンシャー、ハンチングドンシャー、ケンブリッジシャー、ノアフォルク、サツフォルク、ノッチンガムシャー諸州に行はれ、ノーサンプトン、ベッドフォード、ルットランド等隣接諸州にも此處彼處に行はれてゐる。茲ではリンカンシャー州を例に採る。この州の大なる部分には新たに生じた土地であつて、従前沼地であつたものか、又は上記東部諸州の他のものに見られる如く、最近海から獲得したばかりの陸地である。蒸氣機關は排水上に奇蹟的作用を示した。曩には沼澤であり砂地であつたものが、今や鬱葱たる穀物の海な原と最大の地代とを擔つてゐる。これはアッキスホルム島ヤトレント河畔の他の諸教區に見られる如き人工沖積地についても、同様に言ひ得る所である。新たな小作が起つたけれども、單に新たな小屋が造設されなかつたといふのみでなく、寧ろ舊來の小屋は、それに比例して益々取り壊され、而して勞働の供給は、數哩隔つた開放村から丘背に沿うて紆る村道を通じて入り來たるといふ有様であつた。此等の開放村に於いてのみ、農民は従前冬季中の久しきに互る氾濫から保護されてゐたのである。四百乃至千エーカーの小作地に定住してゐる勞働者（彼等はこの地方では『閉束勞働者』^①と呼ばれてゐる）は、馬を用ゐてする所の過激な不斷の耕作勞働に専ら使用されてゐる。小屋の數は一百エーカー當り平均一軒足らずの比例である。一例を擧ぐれば、沼澤地の或る小作農業者は調査委員に供述して曰く『私は三百二十エーカーの耕地を小作してゐる。其處には小屋が一軒もない。私の小作地には現在一人の勞働者がゐるだけである。四人の馬丁が附近に住んでゐる。多數の勞働者を要する輕易な仕事は勞働隊にさせる。』〔百七十二〕。土地の耕作には、草取りや、地ならしや、一定の施肥作業や、石拾ひなどの如き、幾多の輕易な勞働を要するものであるが、この種の勞働は、開放村に住宅を有する所の勞働隊（一團に組織された勞働者）に依つてなされる。

〔百七十二〕『兒童雇傭委員第六報告』證述、第三七頁、第一三七號。

勞働隊は婦人や、少年少女（十三歳乃至十八歳。尤も少年は大抵十三歳でハネられてしまふ）や、最後に男女の幼童（六歳乃至十三歳などから成る十人乃至四五十人の一隊であつて、隊長^②がこれを率ゐてゐる。隊長となるものは常に普通の農村勞働者であり、多くは悪徒と謂はれる不定な、飲んだくれの、ナラズものであるが、然し一定の企業心と營業的才幹とを有してゐる。彼れは勞働隊を募集する。勞働隊は彼れの下に働くのであつて、小作農業者の下に働くのではない。彼れは小作農業者

者との間に請負労働を契約するのが常である。彼れの所得は平均、普通の農業労働者の所得以上には幾許も出でないのであるが(百七十三)、要するに労働隊をして、最小期間に出来得る限り最大の労働を支出せしめ得る熟練の如何に従つて、所得の上にも大小の差が生じて来るのである。婦人は男子の指揮の下に立つ時にのみ相當な労働をするが、彼等にしろ、兒童にしろ、フリーエーの認めてゐた如く、一度び労働に著手すると短兵急に自己の生命力を支出してしまふ傾向があるに引き換へ、成年男子労働者は狡猾であつて出来得る限り生命力の支出を節約しようとする。——といふ事實は、小作農業者の既に發見してゐる所であつた。労働隊長は一の小作地から他の小作地へと轉々しつ、一年の中、六ヶ月乃至八ヶ月間、隊の人々に労働させるのであるから、労働者の家族にとつては彼れの下に労働する方が、時折り兒童を使用するに過ぎぬ個々の小作農業者の下に在るよりも遙かに收益が多く且つ安全でもある。斯かる事情のため、開放村に於ける彼れの勢力は頗る鞏固となり、農民の兒童は概して彼れの媒介に依らずしては、雇傭され得ない有様となつた。労働隊から獨立して兒童を個人的に貸出すことは、彼れの副業となつてゐるのである。

(百七十三) だが、中には、五百エーカーの土地を小作したり、又は幾棟かの貸長屋を所有したりする地位に立身した隊長もある。

この制度の裏面には、兒童及び少年少女が過度の労働をさせられるといふ事實や、彼等が往々一日に五哩、六哩又は七哩も、小作地との間を徒歩往復せねばならぬといふ事實や、最後に労働隊の風儀が紊れてゐるといふ事實などが見出される。若干の地方では、隊長が馭者と呼ばれ、長い棒を携へてゐるが、それを實際使用することは極く稀であつて、虐待の非難が起ることは滅多にない。彼れは一個の民主的皇帝であり、又は一種の『ハメルンの鼠退治者』である。彼れは部下の人望を集める必要があるので、自己の保護の下に開放する所のデプシー的生活に依つて部下を手懐づけるのである。粗野な放縱と、囚はれる所なき感興と、無遠慮な猥褻行爲とは、労働隊に魅力を與へる。隊長は多くは居酒屋で散財してしまひ、頑丈な女に左右を支へられ、一行の先頭に立つて、よろけながら歸つて来る。そして兒童や少年少女は、がや／＼とからかひ混じりの卑猥な唄を歌ひながら彼れの後について来るのであるが、この様な歸途にはフリーエーの所謂『公擲』の行はれることがお定まりである。十三四歳の少女で同じ年頃の男員と關係して妊娠することは、しば／＼見る所である。労働隊に部員を供給する開放村は、ソドムとなりゴモラとなるのであつて(百七十四)、イギリス王國內の他の地方に比べて二倍の私生兒を供給してゐる。斯かる學校で養成された少女たちが、結婚後如何なる道德的結果を來たすかは、曩に示した所である。彼等の子女は、阿片で參

らされてしまはない限りは、労働隊の生れながらの新兵となつてゐるのである。

(百七十四)『ルードフォールド州に於ける少女の半ばは、労働隊に加はつて、身を亡ぼした』(前掲、附録、第七頁、第三二號)。

以上の如き典型的な形態の労働隊は、公労働隊、普通労働隊又は浮浪労働隊(6)と呼ばれてゐる。ほかに私労働隊(7)なるものがあるからである。この私労働隊といふのも、普通労働隊と同じ組織のものであるが、人員はヨリ少なく、隊長の下に労働するのではなく、小作農業者にとつて他にヨリ適當な使ひみちのない老農僕の下に立つのである。この種の労働隊に在つてはデブシーの気分は消滅してゐるが、児童に對する支拂及び待遇が更らに不良となつてゐることは、總べての證人に依つて確められた所である。

労働隊制度は最近數年來不斷に擴大してゐるのであるが(百七十五)、この制度は隊長の利益のために存在するものでないことは明かである。それは大なる小作農業者(百七十六)と、隨つてまた土地所有者との富を増大せしめるために存在するものである(百七十七)。小作農業者はその雇傭労働者の數を通例の水準以下に低く保持し、而も臨時に行はるべき凡ゆる勞作に對しては常に臨時の労働者を準備して置き、出來得る限り僅少の貨幣を以つて出來得る限り多大の労働を打出し(百七十八)、且つ成年男子労働者の人口を『過剩』ならしめようとしてゐるのであるが、此等の目的にとつて労働隊制度よりも以上に思ひ付の善い方法はないのである。一方に農業労働者の大なり小なりの失業が存在してゐると認められるとき、他方に成年男子労働の不足と都市への移住とに依つて労働隊制度が『必要』とせられる所以は、『曩の説明に依つて理解し得る所である(百七十九)。リンカンシャー州その他に於ける、雜草を取り除かれた土地と人間の雜草とは、資本制生産の相對立した兩極となつてゐるのである(百八十)。

(百七十五)『労働隊は最近數年來、著しく増大した。それが最近漸く採用される様になつた地方もある。而してこの制度が……多を行はれてゐる地方に在つては、……労働隊に編入される児童の數が多く、彼等の年齢はヨリ若いのである』(前掲報告、第七九及び一七四頁)。

(百七十六)『小規模の小作農業者は労働隊を使用することがない。』(婦人及び兒童を最も多く使用してゐるのは、貧困な土地ではなく、一エーカー當り四十乃至五十志の地代を齎らす所の土地である) (前掲、第一七及び一四頁)。

(百七十七) 地代の味に陶酔してゐるこの種の地主の一人は、調査委員に向ひ憤然として述べて曰く、非難の起る所は畢竟こ

の制度の名稱に過ぎぬのであると、『勞働隊』といふ代りに『年少者農工共同自營協會』とも名づけたら、文句はないであらう。

(百六十八)『勞働隊の勞働は他の勞働よりも價が安い。さればこそ、この勞働が充用されるのである』とは、嘗て勞働隊の隊長たりし或る一人が述べてゐる所である(前掲、第一七頁第一四號)。或る小作農業者は曰く『勞働隊の制度は小作農業者にとつては確かに最も價安きものであるが、兒童にとつては最も有害なものである』(前掲、第一六頁、第三號)と。

(百七十九)『今日、勞働隊の兒童に依つてなされてゐる勞働の大なる部分が、従前には成年男子及び婦人に依つてなされてゐたことは疑ひを容れない。兒童及び婦人を充用してゐる處では、今や従前に比し、ヨリ多數の成年男子が失業してゐる』前掲、第四三頁、第二〇二號)。反對に斯う主張する者もある。——『多くの農業地方、殊に穀物生産地方に於いては、農民が他に移住し、且つ鐵道に依つて大都市に赴くことが容易となつた結果、勞働問題が極めて重大となつて來た。それで私(茲に「私」といふのは、或る大地主の差配が自分自身を指して言つてゐるのである)は兒童の使用が絶対に必要であると考へるやうになつた』(前掲、第八〇頁、第一八〇號)。蓋しイギリスの農業地方に於いては、他の文明世界に於けるとは異なり、勞働問題なるものは地主及び小作農業者の問題となつてゐるのである。即ち、農民の流出が絶えず増進しつとあるとき如何にして十分なる『相對的過剩人口』を農村地方に維持し、以つて『勞銀の最低限度』を永久に存続せしむべきかといふが如きである。

(百八十)藝に引抄した『公衆健康報告』の中で兒童の死亡率を取扱ふ際、一寸勞働隊制度のことに言及されてゐるのであるが、この『報告』は新聞紙隨つてまたイギリスの公衆の知る所とならなかつた。反對に、『兒童雇傭委員』の最後の報告は、人氣を呼ぶ新聞種として歡迎されたのである。リンカンシャー州には、『南洋土人の道徳を改善すると』いふ特殊の目的を以つて宣教師を南半球に派遣しつとある美しい紳士淑女や國教習の受祿僧たちが充ちてゐるのであるが、彼等は何故、眼前の自領内に斯かる制度の發達するを放任してゐるか、自由主義の新聞紙が主張してゐるとき、一方にヨリ醇化された他の新聞紙は、自己の子女を斯くの如き奴隸状態の中へ賣り込むことをなした得た農民の粗暴な墮落について専ら考察を向けてゐる! 此等のデリケートな人々に依つて、與へられた呪ふべき境遇の下に、農民が假令わが子を食ふやうなことになつたとしても、敢えて異とするに足りないであらう。異とすべきは寧ろ、彼等が大抵、品性の堅實を維持してゐるといふことである。勞働隊を採用せる地方に於いても、農民の父母がこれを忌み嫌つてゐることは、政府の報告者たちに依つて論證されてゐる。

所である。『兒童の父母たちが、法律に依つて種々なる壓迫や誘惑を防止し得るやうになつたことを感謝してゐるとの事實は我々に與へられた供述の中に幾多論證されてゐる所である。彼等が子女を學校に通はせないで、勞働に携はらせるやうになるのは、さうしなければ彼等自身解雇されるといふ脅威の下に、雇主や教區の吏員に依つて強制されるのである。：：時間や力の凡ゆる濫費、無益な極度の疲勞が農村勞働者及び彼等の子女の上に與へる一切の苦痛、小屋の内部に於ける人員過充や公勞働隊制度の汚辱的影響に依つて、彼等の子女の品性が破壊されるといふ事實——これら一切の事情が、彼等の上に如何なる感情を刺戟するか、我々のよく理解し得る所であつて、茲に立ち入つた説明を與へる必要はない。要するに彼等は自己に責任なき原因に依つて、能ふべくんば決して同意しないであらうが、無刀のため如何ともすることの出来ない原因に依つて、肉體上及び精神上の幾多の苦痛を受けてゐるといふことを意識してゐるに違ひない』(前掲、別丁第二〇頁第八二號及び別丁第二三頁第九六號)。

f アイランド

本節の叙述を結ぶに當り、尙暫くの間、アイランドに渡航せねばならぬ。先づ、茲に問題となる重要な事實について述べる。

アイランドの人口は一八四一年には八百二十二萬二千六百六十四人に増殖し、一八五一年には六百六十二萬三千九百八十五人、一八六一年には五百八十五萬三千九百人に減退し、一八六六年には更らに五百五十萬人となつて、一八〇一年と略々同じ水準に歸してしまつた。この人口減少は、一八四六年の凶歳を以つて始まつたものであるが、兎にかく、アイランドは二十年足らずの間に、總人口の十六分の五以上を失つた譯である(百八十一)。一八五一年五月から一八六五年七月に至る間、アイランドより他へ移住した人員總數は、一百五十九萬一千四百八十七人であつて、その中、一八六一年から一八六五年に至る最終五年間に屬する分は五十萬人以上であつた。一八五一年から一八六一年に至る間、同國の住宅數は五萬二千九百九十軒の減少を來たした。一八五一年から一八六一年に至る間、十五乃至三十エーカーの小作地の數は六萬一千の増加、三十エーカー以上の小作地の數は十萬九千の増加を來たしたにも拘らず、各種小作地の總數は十二萬の減少を來たした。要するに、この減少は専ら十五エーカー以下の小作地の消滅(換言すれば集中)に起因せるものであつた。

(百八十一) アイランドの人口は、一八〇一年には五百三十一萬九千八百六十七人、一八一一年には六百八萬四千九百九十六人、一八二一年には六百八十六萬九千五百四十四人、一八三一年には七百八十二萬八千三百四十七人、一八四一年には八

百二十二萬二千六百六十四人であつた。

人口の減少が、大體に於いて生産物量の減少を伴つたことと言ふ迄もない。我々の目的にとつては、一八六一年から一八六五年に至る五年間について考察すれば十分である。この五年間に五十萬以上の人口が國外に移住し、絶對的の人口數に三十三萬以上の減少を來たしたのである。(表Aを見よ)。

表 A
家畜類

年	馬			牛		
	總數	減少	增加	總數	減少	增加
一八六〇	六一九、八一	—	—	三、六〇六、三七四	—	—
一八六一	六一四、二三二	五、九九三	—	三、四七一、六八八	一三八、三一六	—
一八六二	六〇二、八九四	一一、三三八	—	三、二五四、八九〇	二一六、七九八	—
一八六三	五七九、九七八	二二、九一六	—	三、一四四、二三一	一一〇、六九五	—
一八六四	五六二、一五八	一七、八二〇	—	三、二六二、二九四	—	一一八、〇六三
一八六五	五四七、八六七	一四、二九一	—	三、四九三、四一四	—	二三一、一二〇

年	羊			豚		
	總數	減少	增加	總數	減少	增加
一八六〇	三、五四二、〇八〇	—	—	一、二七一、〇七二	—	—

一八六一	三、五五六、〇五〇	—	一三、九七〇	一、一〇二、〇四二	一六九、〇三〇	—
一八六二	三、四五六、一三二	九九、九一八	—	一、一五四、三二四	—	五二、二八二
一八六三	三、三〇八、二〇四	一四七、九八二	—	一、〇六七、四五八	八六、八六六	—
一八六四	三、三六六、九四一	—	五八、七三七	一、〇五八、四八〇	八、九七八	—
一八六五	三、六八八、七四二	—	三二一、八〇一	一、二九九、八九三	—	二四一、四一三

以上の表から左の結果が生じて来る。

馬	絶對的減少	牛	絶對的減少	羊	絶對的增加	豚	絶對的增加
	七二、三五八		一二六、六二六		一四六、六〇八		二八、八一九

(百八十二)

(百八十二) 更に過去に遡れば、結果はヨリ不利となるであらう。即ち、羊は一八六五年には三百六十八萬八千七百四十二頭であつたが、一八五六年には三百六十九萬四千二百九十四頭、豚は一八六五年には一百二十九萬九千八百九十三頭であつたが、一八五八年には一百四十萬九千八百八十三頭であつた。

次に、家畜と人類との生活資料を供給する農業に論を轉じよう、左に掲げる各年の増減は、右に掲げた最終の表に照らして計算したものである。穀物といふ中には、小麥、燕麥、大麥、裸麥、長豆及び丸豆が含まれ、野菜類といふ中には、馬鈴薯

燕青、黍稷、甜菜、キャベツ、人参、ばらふり、菓菜等が含まれるのである。

表 B

耕作地及び草原(又は牧場)として利用される地積の増減(単位エーカー)

年	穀類耕作地		野菜類耕作地		草原及び苜蓿地		亞麻耕作地		農耕及び牧畜利用地積	
	減	増	減	増	減	増	減	増	減	増
一八六一	一五、七〇一	三六、九四			四七、九六九			一九、二七二	八一、六七三	
一八六二	七三、七三四	七四、七六五				六、六三三		二〇、五五	一三六、八四一	
一八六三	一四四、七一九	一九、三五八			七、七三四			六三、九三三	九三、四三二	
一八六四	一三三、四三七	二、三三七			四七、四八六			八七、七六一		一〇、四九
一八六五	七三、四五〇		二五、二四二		六、九七〇		五〇、一五九		二六、二三八	
一八六一至六五	四二八、〇四一	一〇七、九八四			八二、八三四			一二三、八五〇	三三〇、八六〇	

一八五六年に、『草原』は十二萬七千四百七十七エーカーの追加を與へられた。これは主として、『利用せられざる荒蕪地及び泥炭地』が十萬一千五百四十三エーカーの減少を來たした結果である。一八六五年と一八六四年とを比較するとき、穀類は二十四萬六千六百六十七クオター(中、四萬八千九百九十九クオターは小麥、十六萬六千六百五クオターは燕麥、二萬九千八百九十二クオターは大麥その他)の減少、馬鈴薯は四十四萬六千三百九十八トンの減少を來たした。尤も、馬鈴薯の栽培地積は、一八六五年には却つて擴大されてゐるのである(表Cを見よ)。

表 C

耕地面積と一エーカー當り生産物と總生産物との一八六五年對一八六四年増減(百八十三)

生産物	耕地		エーカー數		一エーカー當り生産物		總生産物	
	一八六四年	一八六五年	一八六四年	一八六五年	一八六四年	一八六五年	一八六四年	一八六五年
小麥	二七六、四八三	二六六、九八九	—	—	—	—	—	—
燕麥	一、七四五、八六一	一、七四五、二三八	—	—	—	—	—	—
大麥	一七二、七〇〇	一七二、一〇一	—	—	—	—	—	—
ビーン	—	—	—	—	—	—	—	—
裸麥	八、八九四	一〇、〇九一	—	—	—	—	—	—
馬鈴薯	一、〇三九、七四一	一、〇六六、二六二	—	—	—	—	—	—
蕪菁	三三三、五五五	三三三、二二二	—	—	—	—	—	—
芥菜	一四、〇七三	一四、八三九	—	—	—	—	—	—
キャベツ	三二、八二二	三三、六三二	—	—	—	—	—	—
亞麻	三〇、六九三	二五、四三三	—	—	—	—	—	—
乾草	一、六八九、五九九	一、六七八、四九三	—	—	—	—	—	—

(二百八十三) 本文中の數字は、『アイルランド農業統計摘要、ダブリン』(一八六〇年以降) (6)及び『アイルランド農業統計、平均産出豫算表、ダブリン一八六六年刊』(6)から得たものである。此等の統計は、いづれも政府の手に成り、年々議會

に提出されるものであることは人の知る所である。第二版追加——政府の統計に依れば、一八七二年の耕地面積は、一八七一年に比し十三萬四千九百十五エーカーの減少を來たした。野菜類（蕪菁、蕪菜等）の栽培は『増加』し、耕地面積は小麥に於いては一萬六千エーカー、燕麥に於いては一萬四千エーカー、大麥及び裸麥に於いては四千エーカー、馬鈴薯に於いては六萬六千六百三十二エーカー、亞麻に於いては三萬四千六百六十七エーカー、牧草、苜蓿、巢菜、荳種等に於いては三エーカーの減少を來たした。小麥栽培地は最近五年間に左の如き遞減を示してゐる。一八六八年には二十八萬五千エーカー、一八六九年には二十八萬エーカー、一八七〇年には二十五萬九千エーカー、一八七一年には二十四萬四千エーカー、一八七二年には二十二萬八千エーカー。一八七二年には、概數に於いて馬二千六百頭、牛八萬頭、羊六萬八千六百九頭の増加を來たし、豚二十三萬六千頭の減少を來たした。

アイルランドに於ける人口及び農産物の變動は以上の如くであるが、更らに同國に於ける土地所有者、大規模の小作農業者及び工業資本家の財布の變動に論を轉じよう。この變動は所得税の増減に反射されてゐる。左に掲ぐる表Dを理解する上に注意すべきは、D種（小作農業者以外の方面に於ける利潤）の中には、『自由職業』と稱するものに依つて得られる利潤（換言すれば辯護士、醫師等の所得）も含まれ、而して表中細目を掲げざるC及びE種の中には、官吏、武官、國家の冗官、國債券所有者等の所得が含まれてゐるのである。

表 D

所得税を課さるべき所得（單位磅）（百八十四）

地 種	代	所得税を課さるべき所得（單位磅）（百八十四）					
		一八六〇年	一八六一年	一八六二年	一八六三年	一八六四年	一八六五年
A 種	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	
B 種	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	1,111,111,111	

小作農業者の利潤	二、七六五、三六七	二、七七三、六四四	二、九三三、八九九	二、九三六、八三三	二、九三〇、八七	二、九四六、〇七二
D 種						
工業利潤その他	四、八九一、六五三	四、八三六、二〇三	四、八五八、八〇〇	四、八四六、四九七	四、五四六、一四七	四、八五七、一九
A種よりE種に至る合計	三三、九六二、八八五	三三、九九八、三九四	三三、五九七、五七四	三三、六五八、六三二	三三、二三八、二九八	三三、九三三、三三〇

一八五三年から一八六四年に至る年平均D種所得の増加は、アイルランドに於いては〇・九三に過ぎなかつたが、グレート・ブリテン全體に於いては四・五八に上つた。左に掲ぐる表は、一八六四年及び一八六五年の利潤(小作農業者以外の方面に於ける)配分を示す。――

表 E

D種(百八十五)。アイルランドに於ける利潤所得(六十磅以上)

年 總 所 得	一 八 六 四 年		一 八 六 五 年	
	磅	配分人員	磅	配分人員
年 總 所 得	四、三六八、六一〇	一七、四六七	四、六六九、九七九	一八〇八一
六十磅以上百磅以下の年所得	二三八、六二六	五、〇一五	二二二、五七五	四、七〇三
年 總 所 得 の 中	一、九七九、〇六六	一一、三二一	二、〇二八、四七一	一一、一八四
年 總 所 得 の 殘 額	二、一五〇、八一八	一、一三一	二、四一八、九三三	一、一九四
	一、〇八三、九〇六	九一〇	一、〇九七、九三七	一、〇四四

その内譯

一、〇六六、九一二	一二一	一、三二〇、九九六	一八六
四三〇、五三五	一〇五	五八四、四五八	一二二
六四六、三七七	二六	七三六、四四八	二八
二六二、六一〇	三	二七四、五二八	三

(百八十四) 『内國政入委員第十報告、ロンドン、一八六六年』

(百八十五) 本表のD種年總所得は前表のものと同じなのであるが、それは法律に依つて許されてゐる一定の控除をなした結果なのである。

資本制生産が發達して、工業を主としてゐるイングランドに若しアイルランドに行はれた如き人口上の刺絡が加へられたとすれば、恐らく出血のため死を致すことになつたであらう。だが、アイルランドは、今や、廣大なる海峡に依つて區割されたイングランドの一農業地方に過ぎず、穀物や、羊毛や、家畜や、産業上及び軍事上の新兵やをイングランドに供給する地位に置かれてゐるのである。

人口減少のため、アイルランドでは多大の土地が耕作外に置かれ、土地の生産物は甚しく減少することになつた(百八十六)。而して一方、牧畜に利用さるべき地積は擴大されたにも拘らず、或る種の牧畜部門に於いては生産は絶對的の減少を來たし他の種の部門に於いては不斷の退歩に依つて斷續される所の、取り立てていふほどのこともない微弱な進歩を齎らしたに過ぎぬのである。而も人口の減少につれて、地代及び小作利潤は不斷に増大してゐる。尤も、小作利潤の増大は、地代に於けるほど恒定的ではなかつた。その理由は容易に理解し得る。蓋し小作の集一及び耕地の牧場化につれて、總生産物中の餘剰生産物に轉化される部分が増大することになつたため、總生産物は減少しても、その一部たる餘剰生産物は増大するといふ結果を來たした。他方にはまた、最近二十年(殊に十年)來、肉、羊毛等の市場價格が昂騰した結果、餘剰生産物は量の増大に比し、貨幣價值に於いては更に急速の増進を來たした譯である。

(百八十六) 一エーカー當りの比例を採つても生産物は減じてゐるとはいへ、イングランドが一世紀半に五つてアイルランドの土地を間接に輸出し、而も土地の成分を代償すべき手段を耕作者に與へることすらしなかつたといふ事實は、忘るべからず。

らるる所である。

生産者自身の就業手段たり生活手段たるに止まり、他人の労働を併合することなく、斯くすることに依つてまた己れ自身の價値を増殖することもなき分散した生産機關は、生産者自身に依つて消費される生産物が商品でないのと同じ意味で資本ではないのである。人口が減少すると共に、農業上に充用される生産機關の量もまた減少を來たしたが、農業上に充用される資本の量は却つて増大した。これ従前分散してゐた生産機關の一部が資本に轉化されることになつた結果なのである。

農業以外、商工業方面に投せられたアイルランドの總資本は、最近二十年來不斷の大なる變動の下に、徐々と蓄積されて來たものであるが、この資、の個々の組成部分の集積は反對に、それだけ益々急速に發達したのである。最後に、この總資本は、絶對的に増大せることは如何に小であるにしろ、縮少した人口の數に比べると、相對的には著しく増大したのである。

正統派經濟學のドグマに依れば、窮乏は絶對的の過剰人口から生ずるものであつて、人口が減退するとき均衡は恢復されることになるといふのであるが、この主張を支持するについてヨリ美しきものを願望し得ないやうな一行程が、アイルランドに於いては、我々の眼前に大規模に展開されてゐる譯である。これは、マルサス論者に依つて非常に讚美されてゐる所の、十四世紀中葉に流行した悪疫とは全く趣きを異にせる重要な一實驗なのである。ついでに一言すべきは、十九世紀の生産事情及びそれに照應した人口事情の上に十四世紀の尺度を適用せんとするは、斯くすることそれ自身すでに學校教師的に素朴なことであるが、單にそれのみでなく、更らに次の事實を看過したことにもなるのである。それは即ち、如上の悪疫と人口減少とに伴ひ、海峽の此岸イングランドに於いては農民が解放され、彼等の富が増大せしめられたに反し、海峽の彼岸フランスに於いては反對に、隸従状態と窮乏とが増進するに至つたといふことである(百八十六a)。

(百八十六a) アイルランドは『人口原理』の天國とされてゐる。さればこそ、トマス・セドラーは人口を取扱つた論著を公けにするに先だつて、名著『アイルランド、その惡弊及び矯治』(第二版、ロンドン、一八二九年)を刊行した次第である。彼れはこの著の中で、アイルランドの個々の地方に於ける個々の州を比較することに依り、同國の窮乏はマルサスの欲する如く人口數に正比例するものでなく、寧ろ逆比例するといふ論證を與へた。

一八四六年の飢饉に依りアイルランドでは一百萬以上の人命が犠牲にされた。だが、犠牲者は貧乏人のみであつた。アイルランドの富は、この飢饉に依つて些かの損害も蒙らなかつたのである。次いで二十年間に亙る國外移住が行はれ、それが尙不斷に増進してゐる有様であるが、これがため人間と共に生産機關までも減少することはなかつた。この點は、三十年戰爭など

の場合と異なる所である。アイルランドの天才は、貧民を窮乏の舞臺から幾千哩隔つた處に被ひ遣るといふ全く新たな方法を發明した。アメリカ合衆國へ移住した人々は、年々幾許かの旅費を故國の殘存者に送金して来る。斯くて今年移住した一隊は、明年また他の一隊を連れ出すといふ有様であるから、外國移住はアイルランドにとつて何等の負擔をもかけないのみか寧ろその輸出貿易の最も有利な部門となるのである。最後にまた、外國移住なるものは、單に暫行的に人口の一部を剝りぬく行程となるのみでなく、また土産に依つて補はれるよりも以上の人口を年々汲み出して、絶對的の人口水準を逐年低下せしめる所の組織的な一行程ともなるのである(百八十六b)。

(百八十六b) 一八五一年から一八七四年に至る國外移住者の總數は、二百三十二萬五千九百二十二人であつた。

然らば、國內に殘留してゐる所の、過剩人口から解放された労働者の上には如何なる結果が生じたか? 曰く、相對的過剩人口の大きさは今日に於ても一八四六年以前に於けると異なる所がなく、勞銀は同一の低い水準に止まり、労働上の苦痛は却つて増大し、農村地方の窮乏は更らに新たな恐怖を喚び起さうとしてゐる。その原因は單純である。要するに、國外移住と歩調を揃へて農業上の革命が行はれ、相對的過剩人口の生産は絶對的の人口減退よりも急速力を以つて進行したのである。アイルランドに於ける耕地の牧場化が、イングランドのそれよりもヨリ急性的に作用せねばならぬといふ事實は、表Cを一瞥すれば明かである。イングランドに於いては、牧畜と共に野菜類の栽培が發達してゐるのであるが、アイルランドに於いては寧ろ減退してゐる。従前耕作された土地で、今や休耕され又は永久草地に轉化されてゐるものが澤山あるのに、従前利用されなかつた荒蕪地や泥炭地の大なる部分が、今や牧畜の擴張に役立つてゐるといふ有様である。小作農業者中及び小の部——一百エーカー以上を耕作することなき一切の小作農業者を、私はこの部類に含める——に屬する人々は、今なほ總數の約十分の八を占めてゐる(百八十六c)。彼等は従前とは比較にならぬ程度で、資本的經營の下に立つ農業のためにますます壓迫され、斯くして賃銀労働者階級に絶えず新たな兵員を供給してゐるのである。

(百八十六c) 第二版註——マーフィー著『産業上、政治上及び社會上のアイルランド、一八七〇年刊』(註)の中に掲げられてゐる一の表に依れば、一百エーカー以下のものは、小作地の九四・六パーセントを占め、一百エーカー以上のものは僅々五・四パーセントに過ぎぬ。

アイルランド唯一の大工業たるリンネル製造業は、成年男工を要すること比較的少なく、一八六一年から六六年に至る木綿騰貴以來その營業は擴張されたにも拘らず、この工業に使用されてゐる者は人口中の比較的重要な一部に過ぎぬ。この

工業に於いても亦、他の凡ゆる大工業に於けると同じく、吸収される人口の数が絶對的に増大する場合と雖も、それ自身の内部に不斷の變動が生じて絶えず相對的の過剰人口を造り出すことになるのである。農民の窮乏は、巨大なるシヤツ製造場その他の工場の基礎となるのであつて、此等の方面に於ける勞働者軍は大抵みな國內の平地に散在してゐる。茲にも亦、過少の支拂と過度の勞働とを『人口過剰化』の組織的手段たらしめてゐる所の、曩に叙述した家内勞働の制度が見出されるのである。最後に、アイルランドの人口減退は資本制生産の發達した國に於ける如き甚しい破壊的結果を有つことはないとはいへ、それでも、國內市場の上に不斷の反應作用を及ぼすことなくして進行するものでない。國外移住に依つてこの國に造り出される所の空隙は、單に局部的の勞働需要を縮小せしめるのみでなく、更らに小賣業者や手工業者など小營業者一般の收入を縮小せしめることにもなる。表Eに示す六十磅乃至一百磅の所得減退は、即ち此處に由來してゐるのである。

『アイルランド救貧法監督官等の報告』(一八七〇年×百八十六d)の中に、アイルランドに於ける農村勞働者の状態について與へられた透徹せる一叙述が見出される。此等の監督官は、何しろ銃劍と公然又は隱密なる包圍状態とに依つてのみ維持される政府の官吏のことであるから、イングランドの同僚が蔑視してゐる如き用語上の注意を嚴重に守らねばならなかつたのであるが、それでも彼等は自國の政府が幻想の裡に安眠してゐることを許さなかつたのである。

(百八十六d) 『ダブリン農業勞働者の賃銀に關する救貧法監督官報告、一八七〇年』(66)。『アイルランドの農業勞働者報告一八六二年三月八日』(66)をも參照せよ。

彼等に依れば、農村の賃銀率は、今なほ極めて低いのであるが、それでも最近二十間に五〇乃至六〇パーセント増騰し、一週間の平均賃銀は今では六乃至九志となつてゐる。けれども斯かる外觀的増騰の背後には、現實的の賃銀低落が伏藏されてゐるのである。なぜならば、賃銀の昂騰は決して、同一の期間に行はれた生活必需品の價格昂騰と均衡を保たなかつたからである。例證として、アイルランドの或る貧民收容所について與へられた政府の計算を抜萃しよう。

一週一人當り平均生活費

年	食	衣	合計
自一八四八年九月二十九日 至一八四九年九月二十九日	一志三片四分の一	三片	一志六片四分の一

即ち、二十年前に比較すると、生活必需品の價格は優に二倍、衣類の價格も正確に二倍となつてゐるのである。

この不均衡を暫く措くとしても、單に貨幣に言ひ現された貨銀率を比較しただけでは、まだく正確な結果は得られない。飢饉以前に在つては、農村に於ける貨銀の大部分は現品で支拂はれ、貨幣を以つて支拂はれたものは、極小部分に過ぎなかつた。然るに今日では、貨幣支拂が常則となつてゐる。單にこれだけの事實に依つても、現實貨銀の運動の如何に拘らず、貨銀の貨幣率は増騰せねばならなかつたといふ結論が生じて來るのである。『飢饉以前に在つては、農業労働者は馬鈴薯を栽培し、豚や家禽を飼養すべき一片の土地を有してゐた。然るに今や、彼れは一切の生活資料を購買せねばならぬ上に、豚や家禽や卵の販賣に依つて得べき一切の收入を失ふことになつた』(百八十七)。

(百八十七) 前掲、第二九及び一頁。

實際のところ、農業労働者は従前には小規模の小作農業者と一體になつて、多くは自己に就業を與へる所の、中又は大の部に屬する小作地の後衛となつてゐたに過ぎぬのである。彼等が純然たる貨銀労働者階級の一部となり、貨幣關係を通じてのみ賃銀主と結合されるに過ぎぬ特殊の一階級となり始めたのは、一八四六年に於ける饑饉以來のことである。

一八四六年以前(命)に於ける彼等の住宅が如何なる状態にあつたかは、我々の既に知る所である。爾後、彼等の住宅状態は更らに悪化した。農業上の日傭労働者は日を逐うて減少しつつある有様であるが、彼等の一部は今日尙、小作農業者の保有地に在つて、イングランドの農村地方がこの方面に提供せる最悪のものよりも遙かに戰慄すべき過充した小屋の内に居を占めてゐる。而してこの事實は、アルスター地方の若干部分を除き普遍的に行はれてゐる所であつて、南部に於いてはヨーク、リメリック、キルケニー等の諸州、東部に於いてはウエックロー、ウエックスフォード等の諸州、中部に於いてはキングズ、クキーンズ、ダブリン等の諸州、北部に於いてはダウソ、アントリム、チロリン等の諸州、西部に於いては、スリゴー、ロスコンモン、マヨ、ガルウェー等の諸州に普く行はれてゐる。救貧監督官の一人は叫んで曰く、『農村労働者の住舎小屋は、クリスト教及び本邦文明の面目を傷くるものである』(百八十七a)と。此等の小屋を彼等にとつてヨリ好ましいものとするために何時とも知れぬ時代からそれに附屬せしめられてゐた一片の土地も、組織的に没收されることになつてしまつたのである。『彼等

が地主やその差配などのためこの種の無權的狀態に置かれてあるといふ自覺は、單にそれだけで、自己を斯かる無權の一人種として待遇した人々に對する反抗憎惡の念を彼等の胸裡に喚び起す原因となつたのである(百八十七b)。

(百八十七a) 前掲、第二二頁。

(百八十七b) 前掲、第二二頁。

農業革命の第一段となつたものは、労働場所に設けられてあつた此等の小屋を一掃してしまふことであつた。それは最大の規模を以つて、且つ上からの命令に従へるかの如くにして、行はれたのである。幾多の労働者は、農村や都市に隠れ場を求めのほかはなくなつた。彼處に於いて、彼等け宛ら廢物の如く、最不良な區域の屋根部屋や、穴や、地下室や、片隅に投げ込まれることになつた。家庭的團樂に對する稀有の愛著や、屈託なき快活や、家庭生活の純潔などを特色としてゐた幾千のアイランド人家族が、斯くして突然、惡徳の溫室内に移植されてしまつたことは、國民的僻見に囚はれてゐるイングラント人ですら證言してゐる所である。成年男子は今や、附近の小作農業者の下に労働を見出さねばならず、而も日傭を以つて最も不確實な形態の賃銀を支拂はれるのである。加ふるに『彼等は労働場所まで長距離の徒歩往復をなさねばならず、途中づぶ濡れになつたり、その他種々なる困難に出くわすことも屢々あつて、これがため衰弱や疾病を惹き起し、窮乏に陥らしめられることは決して稀でない(百八十七c)』

(百八十七c) 前掲、第二五頁。

『農村地方で過剩労働者とされてゐる所の人々は、年々都會に收容されねばならなかつた(百八十七d)。而も世人は『都市及び農村に労働者が過剩してゐるとき、若干の農村地方には労働者が缺乏して居り、又は缺乏せんとしつつかること(百八十七e)』を怪んでゐる。それは斯ういふことになるのである。——斯かる労働の缺乏が感じられるのは『春秋二季の如き、農業労働の差し迫つた季節』にのみ限られ『他の季節には多數の労働者が無爲に暮らしてゐる(百八十七f)。而して『主要の作物たる馬鈴薯を十月に取り入れてから翌年の早春に至る期間は……彼等にとつて何等の労働もないのである(百八十七g)』。が他の繁忙な季節にも『幾日かは全く労働しない時があり、その他凡ゆる種類の労働中に逢ふことを免れ得ないのである(百八十七h)』。

(百八十七d) 前掲、第二七頁。

(百八十七e) 前掲、第二六頁。

(百八十七f) 前掲、第一頁。

(百八十七g) 前掲、第三二頁。

(百八十七h) 前掲、第二五頁。

農業革命(即ち耕地の牧場化や、機械の充用や、極めて嚴密の勞働節約など)に伴ふこの結果は、標本的の地主たる、地代を國外で消費することなく、有難くもアイルランドの自領内に居を占め給ふ土地所有者たちに依つて、更らに一層銳くされる。需給律が妨げられる所なく進行し得るやうにするため、此等の地主は、『今や主として小規模の小作農業者から勞働の供給を受ける。此等の小作農業者は何時でも要求に従つて地主のために勞働せねばならぬのであるが、彼等の賃銀は普通の日傭勞働者に支拂はれてゐる率よりも遙かに低く、且つ播種期又は收穫期の如き重要な時期に當つて己れ自身の農作を等閑に附することから生ずる所の不利益又は損害については、些かも顧慮される所がないのである』(百八十七i)。

(百八十七j) 前掲、第三〇頁。

さればこそ、救貧法監督官の報告の中には、就業の不定不規則といふ事實や、勞働の停滞が頻々として反復され又は久しきに互つて持續するといふ事實など——相對的過剩人口の此等一切の徴候が、それ／＼アイルランドに於ける農業プロレタリアの苦痛の原因として指摘されてゐる譯である。イングランドの農業プロレタリアに於いても同様の現象に逢著したことは、我がの記憶する所である。ただ異なる所は、工業國たるイングランドに於いては、工業上の豫備軍は農村で補充されるのであるが、農業國たるアイルランドの農業豫備軍は、驅逐された農村勞働者の避難所となつてゐる都會で補充されるといふ一點のみである。イングランドに於いては、農業上の過剩勞働者は工場勞働者に轉化され、アイルランドに於いては、都會に驅逐された農業勞働者は都會の賃銀を壓迫するといへ、依然として農業勞働者たることに變りはなく、絶えず勞働を求めて田舎に送り還される。

救貧法監督官は農業日傭勞働者の物質的狀態を概括して曰く、『彼等は極端に儉約な生活をしてゐるがその賃銀は一家に食物を與へ、家賃を支拂ふにも足りない位みである。それで彼等自身及び妻子の衣類を得るため、勢ひ他にも收入の道を求めねばならなくなつて来る。……彼等の住宅小屋の雰圍氣は他の方面の缺乏と相合して、彼等の階級をば特別チブスや肺結核に襲はれ易いものにしてしまふ』(百八十七k)。斯ういふ狀態の下に、監督官たちの報告が異口同音に證明してゐる如く、この階級の隊列に陰鬱な不満が滲徹して、彼等が過去に憧れ、現在を嫌惡し、將來に絶望して、遂に『煽動家の邪惡な影響』に身を委

ね、只管アメリカへ移住せんと考へるほか何等の固定觀念をも有しなくなることは、怪むを須るないのである。斯かる運命こそ、人口減退といふ偉大なるマルサスの萬病藥に依つて、綠滴るアイルランドが轉化されて行つた安樂鄉なのである！

(百八十七) 前掲、第二三及び一三頁。

アイルランドの工業勞働者が如何なる幸福生活を送つてゐるかを示すには、一例を擧ぐれば十分である。――

イギリスの工場監督官ロバート・ペーカーは曰く『最近、私はアイルランドの北部を視察した際、同地の或る熟練勞働者が如何なる努力を以つてその子女に教育を興へんとしつつかあるかを見た。左に掲ぐる彼れの供述は、私が聽き取つた儘の言葉で示したものである。この勞働者が熟練工であつたことは、彼れがマンチェスターの市場に供給すべき商品の製造に使用されてゐたことに依つて見ても知られる。ジョンソン——私は植工で、月曜から金曜までは毎日午前六時に勞働を始めて午後十一時に終業します。土曜は午後六時に勞働を終へ、なほ食事及び休息の時間として三時間の餘裕を興へられます。私には五人の子供が有ります。この勞働で一週に十志六片の賃銀を受けます。私の妻も同じ處で勞働し、これは五志の週賃銀を得てゐます。長女は十二歳ですが、萬事萬端は彼女が切り盛りしてくれます。彼女は一家のコックであり、唯一の召使であつて、弟や妹たちを學校へやる始末もします。毎朝私の家の側を通りかかる小娘が五時半に私を起してくれます。妻も一緒に起床します。勞働に著手する前には何も食べません。長女が終日他の子たちの世話をしてくれます。八時に朝飯をしますが、それまでは何も食べません。八時に歸宅して朝飯を食べるのです。茶を啜むのは一週に一度きり、他は都合次第でオートミルなりコーンミルなりの粥を啜ります。冬にはコーンミルに水と少し許りの砂糖を混ぜて食べます。夏には、家の小庭に作つた少し許りの馬鈴薯を食べるが、それがなくなるとまた粥をやり出します。都合次第で、僅のミルクを採ることもあります。私共は斯様にして、日曜も、平日も、年百年中、同じ様な暮らしをしてゆくのです。夜、仕事の終つた時には、いつも大變に疲勞して居ります。たまには一切れの肉にありつけることもあります。そんなことは至つて稀れです。子供は三人學校へ通つて居ります。その費用は、一人當り一週に一片。家賃は一週九片で、泥炭はいくら安く見積つても二週間に一志六片は要ります』(百八十八)。

これがアイルランドの賃銀であり、これがアイルランドの生活なのである！

(百八十八) 『工場監督官報告、一八六六年十月三十一日』第九八頁。

實際のところ、アイルランドの窮乏は、今またイングランドでは日々話題となつてゐるのである。一八六六年の終末から一八六七年の初葉にかけて、アイルランドに於ける大地主の一人ダブフェリン卿は、『タイムズ』紙上で、この問題の解決に著手

した。『この様な大地主にしては、なんといふ人間らしいことだらう!』

曩に、表Eの中で認めた所に依ると、一八六四年に於ける總利潤四百三十六萬八千六百十磅の中、三人の貨殖家に著服された額は二十六萬二千六百十磅に過ぎなかつたが、一八六五年には、この『節慾』の三名人は總利潤四百六十六萬九千九百七十九磅の中、二十七萬四千四百四十八磅を著服し、更らに一八六四年には二十六人の貨殖家が六十四萬六千三百七十七磅、一八六五年には二十八人の貨殖家が七十三萬六千四百四十八磅、一八六四年には百二十一人の貨殖家が一百六萬九千九百十二磅、一八六五年には一百八十六人の貨殖家が一百三十二萬九百九十六磅、一八六四年には一千一百三十一人の貨殖家が二百十五萬八千八百十八磅(即ち年利潤總額の約半分)、一八六五年には一千一百九十四人の貨殖家が二百四十一萬八千九百三十三磅(即ち年利潤總額の半分)以上を著服するに至つた。だが、イングランド、スコットランド及びアイルランドに於ける極めて少數の大地主が、年々國民的地代總額の中から呑み込む配當は非常に莫大なものであつて、この事實を眩ますためには、地代の分配については利潤の分配に於けると同一の統計的資料を供給しない方が得策である、イギリスの經國策は信するやうになつたのである。ダフエリン卿は實に、斯かる大地主の一人であつた。地代と利潤が兎にかく『過剩』であり得るとの觀念、又は此等のもの過剩が人民の窮乏の過剩と何等かの意味で關聯してゐるとの觀念は、もとより『不健全』でもあり『人聞きの悪い』ことでもある。彼れは事實に固く立脚する。而してアイルランドでは、人口の減少につれて地代は増大するのであるから、人口の減少は土地所有者にとつて『有利』であり、隨つて土地にとつても、また土地の附屬物たるに過ぎぬ人民にとつても、有利であるといふこと——これが即ち事實なのである。そこで彼れは宣明して曰く、アイルランドの人口は今なほ過剩であり、國外移住の流れは今なほ緩慢に過ぎる。アイルランドに完全な幸福を與へるには、今後少なくとも更らに三十三萬の勞働者人口を排出せしめねばならぬと。サングラドロー派の醫師は、その患者が快方に向はないことを見る度び毎に刺絡を命じ、刺絡また刺絡で、遂には患者の血と同時に病氣をも矢はしめるといふ方法を探るのであるが、我々はこの地主(おまけに詩人的な)を斯ういふ一派の醫師と同一視してはならぬ。約二百萬の人口を排出せしめないでは、アイルランドの一千太平年は得て望むべきでないのに、ダフエリン卿は僅かに三十三萬の刺絡を要求してゐるに過ぎぬ。何故、二百萬の刺絡を要するかとの證據を提供することは容易である。

一八六四年に於けるアイルランド小作地の數及び大小

一 エーカー 以下 の小作地	(1)	一 エーカー 以下 の小作地	(2)	一 エーカー 以下 の小作地	(3)	五 エーカー 以下 の小作地	(4)	十五 エーカー 以下 の小作地	(5)	三十 エーカー 以下 の小作地	(6)	五十 エーカー 以下 の小作地	(7)	百 エーカー 以上の小作地	總計 (百八十)
數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數
エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー	エーカー
四六五三二五五四八二〇三三二八八九一七六六六六二一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	三三二八八九一七六六六六二一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	二一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	五六四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	五六四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	五六四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四	一三六五七八三〇五二三四三七一九六一三九六二七四五四二四七三九八三八〇三九七三六三七八〇七二二九九九四

(百八十八a) の總地積の中には『泥炭地や荒蕪地』も含まれてゐる。

一八五一年から一八六一年に至る間、集中の行はれた結果、主として最初の三部類たる一エーカー以下乃至十五エーカーの小作地が剝絶されることになつた。この種の小作地が先づ消滅せねばならぬのである。その結果、三十萬七千五十八の『孤剩』小作農業者が生ずる譯であるが、彼等の一家を低く見積つて平均四人とすれば、その人口總數一百二十二萬八千二百三十二人となる。ところで、これは突飛な假定だが、その中の四分の一は農業革命の完成後再び吸収され得るものとすれば、結局九十二萬一千一百七十四といふ人口が國外に移住すべきものとして残る譯である。第四乃至第六部類に屬する十五エーカー以上百エーカー以下の小作地は、資本制的の穀物耕作を行ふには餘りに小さく、さればといつて、牧羊上の目的には尙更ら零に近い大さとなつてしまふことは、イングランドに於いて久しく知られてゐる所である。そこで、右に述ぶる所と同じ假定の下に、更らに七十八萬八千七百六十一といふ人口が移住することになり、これを前記の部類と合計すれば一百七十萬九千五百三十二人となる。而も食欲は食事中に生ずるものであるから、三百五十萬の人口を以つても尙且つアイルランドは依然として窮乏であり、しかもこの窮乏は人口過剩の結果であるから、アイルランドをしてイギリスの羊牧場たり放牧場たるべき眞の使命を全うせしめるためには、更らに更らにその人口を減退せしめねばならぬといふことは、やがて地主たちの目に發見せられる所となるであらう(百八十八b)。

(百八十八b) 個々の土地所有者やイギリスの立法が、飢饉及びその結果たる諸種の事情をば、強行的に農業革命を遂行しアイルランドの人口を地主の氣に入る程度まで稀薄にしてしまふ目的に、計畫的に利用した事實については、本書第三卷)

土地所有を取扱ふ黨の中で尙詳しく論證することにする。更らに、小規模の小作農業者や農業労働者の状態についても同じ黨の中で再論する。技にはただ一つの引抄を與へるに止める。ナソー・ウヰリアム・シーニョアはその遺稿『アイルランドに關する雜誌、對話、論文』(全二卷、ロンドン、一八六八年刊、第二卷、第二八二頁⁽⁶⁸⁾)の中に述べて言ふ。——『ドクター・ヂーは適切に述べて曰く、我々は救貧法を得てゐる。これは地主のために勝利を確保すべき一大要具である。而していま一つのヨリ有力な要具は國外移住であると。……地主とケルト人たる小規模の小作農業者との間に於ける抗争を久しきに亘らしめたいとは、アイルランドの如何なる友人も望み得る所でない。況や、この抗争を小作農業者側の勝利に了けらしめたいと望み得る者のないことは尙更らである。この抗争が早く終熄すればするほど、アイルランドをして一の牧場國たるに相應した比較的稀薄の人口を有する國にしてしまふことが早ければ早きほど、それは總べての階級にとつて有利なのである』と。一八一五年の穀物條例に依つて、アイルランドはグレート・ブリテンへ穀物を自由に輸出すべき獨占權を確保せしめられることになつた。斯くして、この條例は穀物栽培を助長するところの人工的刺戟となつたのである。如上の獨占權は、一八四六年に穀物條例が撤廢されるに及び、突如として廢除されてしまつた。他の事情は暫らく措き、單にこれだけの事情を以つてしても、アイルランドに於ける耕地の牧場化や、小作地の集積や、農民の驅逐などに對する一大刺戟となるに十分であつた。一八一五年から一八四六年に至る間、世人はアイルランドの土地の肥沃を稱揚し、且つアイルランドの土地は本來小麥の栽培に適してゐるものと高らかに主張したのであつたが、その後に至り、イギリスの農學者、經濟學者、政治家などは突如として、アイルランドの土地は林を作る以外には何の役にも立たぬものであるとの發見をなすに至つた。レオン・ド・ラヴェルニュ君は英佛海峡の彼岸で、逸早くこの發見を繰返した。この種の兒戲に囚はれるには、ラヴェルニュ君の如き『眞劍な』人物が適任であつた譯である。

斯ういふ有利な方法も、この世に於ける總べての善きことと同様に、短所を具へてゐる。アイルランドで地代が蓄積されるに従ひ、それと歩調を揃へてアメリカではアイルランド人が蓄積されるのである。羊と牡牛とに依つて驅逐されたアイルランド人は、ファイアナ團員⁽⁶⁹⁾として大西洋の彼岸に再起する。斯くして海の老女王の對岸には、若き巨大な共和國がますます脅威的に擡頭して來るのである。

運命の辛酸はローマ人を漂浪させる

そして同胞殺戮の悪行が。(70)

第二十四章 謂はゆる本來的の蓄積

(一) 本來的蓄積の祕密

貨幣が如何に資本化され、資本に依つて如何に餘剩價值が生産され、餘剩價值に依つて如何にヨリ多くの資本が造られるかは、我々の既に見た所である。だが、資本の蓄積は餘剩價值の存在を前提し、餘剩價值の存在は資本制生産の存在を前提し、資本制生産の存在はまた、資本及び勞働力の大部分が商品生産者の手の中に存在することを前提する。斯くの如く、この全運動は循環論法を以つて回轉してゐるやうに見える。そこで、この循環論法から脱出するには、資本制蓄積に先行する所の『本來的』蓄積（『アダム・スミスのいふ『先行的蓄積』』）と、語を換へていへば資本制生産方法の結果ではなく寧ろ出發點たる所の蓄積を假定するほかはないのである。

この本來的蓄積は、原罪が神學の上に演ずる所とほほ同一の役割を、經濟學の上に演ずるものである。アダムは林檎を噛んだ。斯くして人類に罪といふものが生じたのである。本來的の蓄積も亦、過去に屬する話柄として物語られる間にその起原を説明されてゐる。久しい昔のこと、世の中には二種類の人間がゐた。一方は勤勉恰悌で、わけても節儉な精英的人物であり、他方は自己の有てる一切のもの、否それ以上のものを浪費する所の怠け者であつた。神學的原罪の昔噺は人類が如何にして額に汗ンしてバを食はねばならぬ運命に置かれたかを知らしめるのであるが、經濟學上に於ける原罪の歴史は、寧ろそんなことをする必要のない人々が存在するに至つた所以は抑も那邊に在るかを示すものである。斯くして、一方の種類に屬する人々は富を蓄積し、他方の種類に屬する人々は結局自分自身の皮以外には販賣すべき何物をも有たぬといふことになつた。如何に勞働しても自分自身のほかには販賣すべき何物をも有たぬ多數民衆の貧と、既に久しく勞働しなくなつた後にも尙、不斷に増大する少數者の富とが生ずるに至つたことは、この原罪以來の現象なのである。

この様な兒戯に屬する無味乾燥な物語をも、例へばチエール君の如きは、政治家的の儼かな眞剣さを以つて、嘗ては才氣湧くが如くであつたフランス人の面前に繰返すことを辭しなかつた。彼れは社會主義に對抗して所有權を辯護した一書の中で、これを説いてゐるのである。兎にかく、所有といふことが問題となるや否や、お伽噺の立場をも凡ゆる年齢、凡ゆる發達段階の

人々にとつての唯一の正しき立場として主張することが、神聖なる義務となつて来る。征服や、隸従や、盜掠や、殺戮など、約していへば、暴力といふものが、現實の歴史の上に大なる役目を演じてゐることは、人の知る所である。もの優しい經濟學の上には、最初から牧歌が支配してゐた。正義と『勞働』とは最初から唯一の致富手段とされてゐた（勿論いつの場合にも、『今年』だけは例外とされるのであるが）。だが、實際のところ、本來的蓄積の方法は、ただ牧歌的といふ一點を除くほか、何もかも含んでゐるのである。

貨幣及び商品は、最初から資本たるものではない。それは生産機關及び生活資料が、最初から資本たるものでないのと同様である。貨幣及び商品は資本に轉化されることを要する。而してこの轉化はまた、次の一點を中心にして集まる所の限定された事情の下にのみに行はれ得るのである。即ち一方には、他人の勞働力を購買することに依つて、己れ自身の有する價值量を増殖せんとする貨幣、生産機關、生活資料等の所有者、他方には、己れ自身の勞働力の販賣者たり隨つて勞働の販賣者たる自由な勞働者——この極めて相異なつた二種の商品所有者が相對立して接觸せねばならぬといふ事實。後者を自由な勞働者といふのは二様の意味に於いてである。彼れは奴隸や、農奴などの如く、直接に生産機關の一部となつてゐるものではなく、また自營農民などの如く生産機關を所有してゐるものでもない。彼れに寧ろ、生産機關から自由となり、分離されてゐるのである。商品市場が斯く對極的に分化するとき、資本制生産の基礎的條件が與へられることになる。資本關係なるものは、勞働者が勞働實現上の物的條件の所有から分離されることを前提する。資本制生産は、一度びそれ自身の脚を以つて立つやうになるや否や、單にこの分離を維持するのみでなく、尙また、ますます大となる所の規模を以つてこれを再生産するのである。要するに、資本關係を造り出す所の行程は、勞働者を勞働條件から分離せしめる所の行程、換言すれば一方には社會的生活資料及び生産機關をば資本に轉化し、他方には直接の生産者を賃銀勞働者に轉化せしめる所の行程以外の何ものでもあり得ないのである。されば、謂ふ所の本來的蓄積なるものは、生産者を生産機關から分離せしめる歴史的の行程に外ならぬ。それが『本來的』たる所以は、資本と資本に照應せる生産方法との有史前期たる點に存する。

資本制社會の經濟的構造は封建制社會の經濟的構造から生じ來たものであつて、後者の分解に依つて前者の要素が遊離された譯である。

直接の生産者たる勞働者は、もはや土地の附屬物ではなくなり、他人の農奴または隸農ではなくなつた後、茲に初めて自己一身を處分し得るやうになつた。更らに彼れは、販路の見出された如何なる處へも自己の商品を携へてゆくといふ、自由な勞

働力販賣者とならねばならぬのであるが、それにはツンプトの支配、ツンプトに於ける徒弟制度、職人制度及び阻礙的な勞働規定から脱却することを要したのである。斯くして、生産者を賃銀勞働者に轉化せしめる歴史的の運動は、一方に隸農並びにツンプト強制から彼等を解放せしめる所の運動として現れる。而して我がブルジョアの歴史家の目には、ただこの方面の運動だけしか存在して居らぬのである。他方にまた、この新たに解放された人々は、彼等の有する一切の生産機關と、舊來の封建的制度に依つて與へられた自己生存上の凡ゆる保證とを剝奪され、後、茲に初めて自分自身の販賣者となるのであつて、彼等に對するこの收奪の歴史は、血と火の文字を以つて人類の記録に書き込まれてゐるのである。

然らば、新たなる覇權者となつた産業資本家は如何にといふに、彼等も亦ツンプトの手工親方を驅逐したのみではなく、更に富源の所有者たる封建領主をも驅逐せねばならなかつた。この方面から見れば、彼等の把權は、封建的勢力とその反抗的特權とに對する戰勝の結果として、またツンプトと、それに依つて生産の自由なる發展及び人類に依る人類の自由なる擷取の上に課された桎梏とに對する戰勝の結果として現れる。だが、産業上の騎士は、彼等の何等關與する所なかつた事變を利用することに依つてのみ劍の騎士を驅逐し得たのである。彼等はローマの被解放民が舊主に對する主君となるに利用した所のものと同様に下劣な手段を以つて、優勝者たる地位に登つたのである。

賃銀勞働者並びに資本家を生ぜしめた發達の起點となつたものは、勞働者の隸従といふ事實であつた。その後には於ける進行は、この隸従の形態が轉化されるといふこと、換言すれば封建的擷取が資本制擷取に轉化されるといふことに存してゐた。この發達の進行を理解するには、殊更ら遠き過去に溯るを要しない。資本制生産の初萌は、十四世紀及び十五世紀に於いても既に地中海沿岸の若干都市に、此處彼處、見られたといへ、資本制時代が初めて開始されたのは十六世紀以來のことである。この時代の現れ來たつた處に在つては、農奴制は既に久しき以前に廢止され、中世紀の縲頂たる自由都市の存在も最早久しく無くなつてゐたのである。

形成途上にある資本家階級にとつて槓杆的作用をなす所の凡ゆる革命は、本來的蓄積の歴史上、劃時代的のものとなつてゐるのであるが、多數の民衆を突如として強行的に生活資料から分離しこれを放なしたプロレタリアとして勞働市場に投ぜしめる瞬間は殊にさうなのである。農業上の生産者たる農民からの土地收奪は、この全行程の基礎を成してゐる。この收奪の歴史は國に依つて種々異つた色彩を採り、順位が異なり歴史の時代が異なれば、隨つてその通過すべき段階も亦色々に異なつて來る。それが典型的の形態を採つてゐるのは、イギリスだけである(百八十九)。我々がイギリスを例に採る所以は、此處に在

るのである。

(百八十九)資本制生産が最も早く發達したイタリーに於いては、農奴事情の分解も亦最も早くから行はれた。イタリーの農奴は、土地に對する時効權を確保されるに先だつて解放されてしまつたのである。そこで、彼等は解放されるや否や自由なプロレタリアとなつたのであるが、加ふるに、大抵みなローマ時代から傳來した諸都市には、彼等を迎へつつある新たな主人が既に存在してゐたのである。十五世紀末以降に於ける世界市場の革命に依つて北部イタリーの商業的至上權が破壊された時には、これと方向の相反した運動が起つた。即ち、都市の労働者は一括して農村に驅逐され、其處で園藝的に經營される小規模の耕作の發達に空前の刺戟を與へたのである。

(二) 農民に對する土地收奪

イギリスの農奴制は十四世紀末に事實上消滅した。當時に於ける、更らに著しくは十五世紀に於けるイギリスの人口の大多數(百九十)は、自由なる自營農民——その所有權は如何なる封建的看板に依つて隱蔽されてゐたにしろ——から成つてゐた。大領主の土地に於いては、従前農奴であつたベリフ³が自由なる小作農業者に依つて驅逐されることになつた。農業上の賃銀労働者は、一方には大なる領主の下に労働して閑暇時間を利用する所の自營農民と、他方には獨立した位置にある所の、相對的にも絶對的にも數少なき嚴密な意味の賃銀労働者の階級とから成つてゐた。この賃銀労働者も事實に於いて、自營農民を兼ねてゐた。彼等は賃銀以外に、小屋と四エーカー又はヨリ以上の農耕地とを分與されたからである。加ふるに彼等は、嚴密の意味の自營農民と同じく共同地の用益を許されてゐた。彼等は其處で家畜に牧草を與へると同時に、また燃料たる薪や泥炭をも得てゐたのである(百九十一)。

(百九十)『自己の手を以つて自己の畑を耕し、相當な生活を管んでゐた小地主は……當時に在つては現今に比し國民中の遙かに重要な一分子たりしものであつた。當時の統計を信じ得るとすれば、十六萬を降らない地主たち(彼等の家族員を合すれば、總人口の七分の一以上を占めたに違ひない)は、小さき自由保有地(フリースホールド)を耕作することに依つて生活してゐた。斯かる小地主の年平均所得は……六十磅乃至七十磅とされてゐる。己れ自身の土地を耕作する人々の數は、他人の土地を小作する人々の數よりも大であつたとされてゐるのである』(マコーレー著『英國史』第一〇版、ロンドン、一八五四年刊、第一卷第三三三—三四頁)。十七世紀最終の三分の一に於いても、イギリスに於ける人口の五分の四は農民であつた(前掲

第四一三頁)。茲に殊更らマコーレーを引抄したのは、彼れが歴史の組織的贗造者としてこの種の事實を出來得る限り『小さく見做してゐる』からである。

(百九十二) 農奴でさへも自己の家に附屬した小き土地の所有者——貢賦義務ある所有者であつたとはいへ——である上に、尙、共同地の所有にも與つてゐたといふ事實は、我々の決して忘るべからざる所である。『この地(シュレージン)の農民は農奴である。』而も此等の農奴は共同地を有してゐるのである。『シュレージン人は尙未だ共同地を分割する迄に至らしめられて居らぬ。然るに、ノイマルクには、この分割が最大の成功を以つて達成せられなかつた村は殆んど一つも無いといふ有様である』(ミラボー著『プロイセン君主國』一七八八年刊、第二卷、第一二五、一二六頁)。

ヨーロッパの如何なる國に於いても、封建生産は出來得る限り多くの封建に土地を分割することを以つて特徴としてゐる。封建領主の權力は、他の總べての主權者のそれと同様に、收納すべき地代の大小に懸るものでなく、寧ろ臣下の數の大小に懸るものであり、而してこの臣下の數の大小はまた自營農民の數の大小に懸つてゐたのである(百九十二)。さればノルマン人に征服された後、イギリスの土地は巨大なるバロン領に分割され、一バロン領にして舊來のアングロサクソン侯領九百を含むものも屢々見られた程であつたとはいへ、小き自營農地は全國到處に撒布され、僅かに此處彼處、大なる領主の土地を介在せしめるに過ぎぬ有様であつた。斯ういふ事情の存在と同時に、一方にはまた十五世紀の特色たる都市が繁榮し、兩者相合して、かの最高法院長フォルテスキューが『イギリス法讚美』(7)の中に雄辯的な描寫を與へてゐる民富の成立を可能ならしめた。然し、資本的の富を成立せしめるには至らなかつたのである。

(百九十二) 日本はその土地所有の純封建的な體制と、發達した小農經營とを以つて、多くはブルジョアの僻見の下に書かれた我々の歴史書の總べてに比べると、遙かに忠實な描寫をヨーロッパの中世について提供するものである。中世紀を犧牲として『自由主義的』たることは、極めて便利なことである。

資本制生産方法の基礎を造り出した革命の序曲は、十五世紀最終の三分の一期及び十六世紀初葉の十數年間に演ぜられた。サー・ジェームズ・スチーアートが適切に述べてゐる如き『到る處、用もなく家屋や城砦に充滿してゐた』封建的家臣團の分解に依つて、多數の放たれたプロレタリアが勞働市場に投げ出された。それ自身ブルジョアの發展の一產物たる王權は、絶對的覇權を掌握せんとする努力を以つて、斯かる封建家臣團の分解を強行的に促進したのであつたが、然し、王權は決してこの分解の唯一の原因ではなかつた。王權や議會に極めて執拗な反抗を向けてゐた大なる封建領主は、自營農民をば彼等の土地——

彼等が封建領主に於けると同一の封建的權利を有してゐた土地——から暴力的に驅逐し、彼等の共同地を横奪することに依つて、寧ろ比較にならぬほど多數のプロレタリアを造り出してゐたのである。

イギリスに於いてこれが直接の刺戟となつたものは、主としてフランダー羊毛マニユファクチャーが隆昌に赴き、それに伴つて羊毛の價格が昂騰したといふ事實なのである。舊來の封建貴族は、大なる封建的戰爭のために食ひ盡されてしまつた。而して新たなる貴族は、彼等の時代の子であつた。彼等にとつては、貨幣こそ凡ゆる權力中の權力となつてゐたものである。斯くして、耕地の羊牧場化といふことが、彼等の合言葉となつた。ハリソンは、その著『英國記（ホリンシェッド編年史、緒言）』の中で、小農に對する收奪が如何に土地を荒廢に歸せしめたかを述べてゐる。『我が大なる横奪者は何を憚る所があらう！』彼等は自營農民の住宅や勞働者の小屋を暴力的に取り壊し、又は廢朽する儘に放任して置いた。ハリソンは曰く、『若し各封領の古き記録を採つて比較するならば、無數の家屋や小農經營が消滅して、國內の人口は遙かに減少し、僅少の新たなる都市は繁榮してゐるにも拘らず、一方に多數の都市が廢滅に歸したことを見出すであらう。…破壊されて羊牧場に轉化され而して領主の家屋のほかには何等の住宅をも有せざる都市や農村についても、茲に敘述することが出来るのである。』

此等の古き歴史家たちの訴ふる所は常に誇張されてゐるとはいへ、生産事情の革命が當時の人心に與へた印象は確然と其處に反射されてゐるのである。最高法院長フォルテスキューの文獻をトマス・モルス（モア）の文獻と比較することに依つて、我々は十五世紀と十六世紀との間の空隙を明かにすることが出来る。ソントンが適切に言つてゐる如く、イギリスの勞働者階級は何等の過渡的段階を経ずして、黄金時代から鐵の時代に投げ込まれたのである。

立法はこの革命の面前に驚愕した。イギリスの立法は尙未だ『國民の富を換言すれば、資本の形成と民衆の顧慮する所なき擲取及び窮乏化』が凡ゆる經國策の絶頂とせられる文明の水準に達して居らなかつたのである。ペーコンはヘンリー七世史の中に曰く、『當時（一四八九年）共同地の私有化』は益々頻繁に行はれ始めた。これがため、多數の人民及びその家族なくしては施肥し能はなかつた耕地も、僅々二三の牧夫に依つて容易に監視し得る所の牧場と化し、而してヨーマン階級』の多くの人々の生活の基礎となつてゐた有期小作地や、終身小作地や、任意小作地』は領主の所有地』に轉化されることになつた。その結果、人民を頽廢せしめ、延いて都市や教會や十分一税など、いづれも頽廢の運命を免れ得なくなつたのである。…この弊狀を矯治する上に示された王及び當時の議會の智慧は曠賞すべきものであつた。…彼等は斯かる人口絶對的の共同地私有化』と、それに伴つて行はれた人口絶對的の牧場經營』とを防止せんとする策を執つたのである』と。

一四八九年ヘンリー七世の治下に制定された一條例第十九章に依ると、少なくとも二十一エーカーの土地を有する一切の農民の家屋を破壊することは禁じられてゐる。この法律は、ヘンリー八世の統治第二十五年に制定された一條例の中に更新された。その中に曰く『多くの小作地や畜群(殊に羊)は至つて少數の人々の手に蓄積され、これがため地代は著しく昂騰して、教會や家屋は取り壊され、驚くべき多數の人々は彼等自身及び一家の生計を維持すべき手段を奪はれるに至つた』と。そこで、この法律は荒廢した農場の再開始を命じ、穀作地、牧場地、その他の間に一定の比率を設けることにしたのである。一五三三年の一條例は、二萬四千頭の羊を有する地主のあることを嘆じ、所有すべき羊の數は二千頭を越ゆべからずと規定した(百九十三)。

(百九十三) トマス・モルス(モアア)はその著『ユトピア』の中で、『羊が人間を食ひ盡す』所の奇怪な國(イギリス)のことを語つてゐる。(ロビンソン譯『ユトピア』アーバー版、ロンドン、一八六九年刊、第四一頁)。

人民の怨嗟も、またヘンリー七世以降百五十年間に亙つて持續した小規模の小作農業者や自營農民に對する收奪を禁じた立法も、共に實るところ無くして了つた。ペーコンはこの失敗の祕密を、それと氣づかず我々に示してゐる。彼れはその著『市民及び道徳文集』第二十九論(6)の中に曰く、『一定の標準に立つ農業經營と農民家屋とを造り出さんとした、國王ヘンリー七世の計畫は、深遠にして嘆賞すべきものであつた。即ち彼れは、人民が奴隸狀態ではなく裕福な狀態に生活することを可能ならしめ、單なる被僱者ではなく所有者自身をして手に剋執することを得せしむる如き土地を各農家に附與しようとしたのである』(百九十三a)と。

(百九十三a) ペーコンは自由にして裕福なる自營農民と優秀なる歩兵との關聯を説明して曰く『堦能なる人々を窮乏に陥らしむることなきやうに十分の小作地を準備して置くことは、我が王國の權力及び威儀の上に重要なことである。これに依つて、我が國に於ける土地の大なる部分は、デェントルマンと小屋住み農業労働者と農僕との中間を占むるヨーマン階級又は中流人士の所有に移轉せしめられることになるのである。……蓋し軍隊の主勢力は歩兵にありとは……軍事専門家の等しく主眼する所である。而して良き歩兵を得るには、奴隸的又は窮乏的な境遇ではなく、自由にして裕福なる境遇の中に成育した人々を要するのである。されば、一國が餘りに貴族や上流人士を重要視しすぎて、農民や耕作者は彼等の労働者、農僕又は有宿の食食ともいふべき小屋住み農業労働者に過ぎぬといふやうな見地を探るとき、それでも良き騎兵は得られるであらうが、堅忍不拔な歩兵を得ることは決して出來ないのである。……この事實はフランス、イタリイその他の諸國に見られる所

であつて、此等の諸國には貴族か窮乏の農民かの兩端があるのみで、歩兵隊を造るにはスキス人を傭兵として雇ふのほかに、多數の人民を有しながら兵士は殆んど無いといふ状態に陥るのである(ペーコン著『ヘンリー七世の治世、ケンネット著「英吉利」(一七一九年版)の逐語的醜刻、ロンドン、一八七〇年刊』第三〇八頁)。

然るに、資本制生産の要求する所は寧ろ、民衆を奴隸状態に置き、彼等を傭兵に轉化し、彼等の勞働要具を資本に轉化することであつた。斯かる變移の時代に、イギリスの立法は農村に於ける賃銀勞働者の小屋に五エーカーの土地を保存せしめんとし、而して彼等の小屋に同居人を置くことは禁止したのである。ジエームズ一世の治下一六二七年に、フロント・ミルのローチアール・クローカーなる者は、獨立した附屬地として四エーカーを有することなき一軒の小屋を領主の土地に築造した廉に依つて罪を宣告され、チャールズ一世の治下一六三八年にも、舊來の諸法律、就中四エーカーの土地に關した條例の實施を厲行すべく一の勅命委員が任命されるといふ有様であつた。クロムウエル時代に及んでも、四エーカーの土地を具へざる家屋をロンドン等の四哩周圍に築造することは禁止されてゐた。十八世紀の前半に於いても、農業勞働者の小屋に一乃至二エーカーの土地を附屬せしめざる時は苦情が起つた。然るに今日では、小屋に小庭があつたり、又は小屋から遠く隔つた處に僅少ルードの土地を賃借し得たりすれば、それは農業勞働者にとつて寔に幸福なこととなつてゐるのである。ドクター・ハンターは曰く、『これについて、地主と小作農業者とは相提携する。小屋に僅少の土地を附屬せしめることは、勞働者を餘りに獨立せしめる結果を來たすであらう』(百九十四)と。

(百九十四)『公衆健康第七報告、一八六四年、ロンドン、一八六五年刊』第一三四頁。『舊法に依つて割り當てられた土地の量は、今日では、勞働者にとり餘りに大であつて、寧ろ彼等を小規模の小作農業者たらしめるに適したものと見做されるのである』(『デューヂ・ロバート著『過去の諸世紀に於けるイングランド南部諸州民の社會史』ロンドン、一八五六年刊、第一八四及び一八五頁)。

民衆に對する強行的の收奪行程は、十六世紀に於ける宗教改革と、それに伴つて行はれた寺領の絶大な盜掠とに依つて驚くべき新刺戟を與へられた。宗教改革の當時、カトリック教會は、イギリスに於ける大なる土地部分の封建的所有者であつた。修道院その他に對する抑壓は、其處に居住してゐた人々をプロレタリアの隊列に投げ込んだ。而して寺領そのものは、大抵みな王の強慾なる寵臣に惠與されるか、又は投機的な小作農業者や市民たちに乗て値で賣り飛ばされることになつた。此等の人は舊來の世襲的な寺領小作者を一括的に驅逐して、彼等の經營を大纏めに總合してしまつた。貧困なる農業勞働者は従前、

教會に納められる十分一税の一部に對する所有權を法律上保證されてゐたのであるが、今やそれは暗々裡に沒收されることになつたのである(百九十五)。エリザベス女王はイギリスの國內を一巡した後、叫んで曰く「窮民は到る處に見られる」と。彼女の治世第四十三年に至り、政府は遂に救貧税を實施して、被救恤の窮乏が現實に存在してゐることを公認せしめざるを得なくなつた。『この法律の立案者たちはその理由を明かにするを恥としてゐるが如く見えた。それは彼等が慣例に反して、この法律に何等の理由をも附しなかつた一事に依つて知られる所である』(百九十六)。チャールズ一世第十六年の條例(第四章)に依つて、この法律は永久的のものとなされ、更らに一八三四年に至つて新らしきより峻嚴な形態を與へられた(百九十七)。宗教改革に依つて與へられたこの直接的影響は、他の影響に比して最も殘續的であつたといふ譯ではない。寺領は、古代から行はれてゐる土地所有關係の宗教的藩屏となつてゐた。そこで寺領の消滅と共に、この所有關係も亦維持し難くなつてしまつたのである(百九十八)。

〔百九十五〕『十分一税の分配に與かるべき貧民の權利は、舊來の法文の文意に基いて定められたものである』(タケット著『勞働民の過去及び現在狀態史』ロンドン、一八四六年刊、第二卷、第八〇四及び八〇五頁)。

〔百九十六〕ウキリアム・コベット著『宗教改革史』第四七一章(1)。

〔百九十七〕宗教改革の『精神』は、殊に左の事實から認め得る。イングランド南部地方に於ける地主や富裕な小作農業者たちは鳩首し相圖つて、エリザベス女王の救貧法に對する正當な解釋につき十ヶ條の質問を起草し、これを當時の著名なる一法學者にして高等辯護士なるスニッグ(後年ジームズ一世の治下に判事となつた人)に提出して所見を求めた。「第九問——本教區内の比較的富裕な小作農業者たちは、エリザベス治世第四十三年條例の實施を妨ぐる一切の事情を除去し得べき巧妙な一方法を立案した。彼等は本教區に一の監獄を設置すべきことを提唱した。而してこの監獄内に監禁されることを欲しないものには、一切の保護を與へぬことにして、入監者に小作せしめんとする者は、これを引きとるべき最低價格を封書にて一定の時日に通報すべきであるとした。勞働することを欲せず、而も勞働せずして生活するに必要な土地なり船舶なりを得べき財産も信用も有たない人々が近隣諸州に存在してゐることは、この方法の立案者たちが認めてゐる所である。この種の人も、教區に對して極めて有利な申出をなすやうに誘導し得るのである。貧民が若し雇主の保護の下に死滅したとすれば、罪は雇主の側にありとすべきであらう。若し雇主が保護しなかつたとすれば、教區が彼等に對して義務を盡したであらうから。だが、現行條例に依つては、この種の思慮ある方策が許されぬのではないかと、我々は危惧してゐる。けれども本州及

び隣接諸州に於ける獨立した農民中の殘餘の人々は、喜んで我々の一團に加盟し、貧民の監禁と強制労働とを許して監禁を欲せざる者には保護を受くべき權利を與へないといふ法律の提出を、彼等の議員に慫慂するであらう。これ諸君の知らねばならぬ所である。これに依つて、窮乏者は救恤を要求しなくなるであらうと期待される『ロバート・ブレイキ著「極初期の時代からの政治文獻史」ロンドン、一八五五年刊、第二卷、第八 及び八五頁(20)』。スコットランドは、イングランドよりも數世紀後れて農奴制の廢止を行つた。一六九八年に及んでも、ソルトウーインのアンドルー・フレッチャーは、スコットランドの議會に宣明して言つた。——『スコットランドに於ける乞食の數は二十萬人を下らない。主義に於いては共和論者たる私の提唱し得る唯一の救済策は、農奴制の舊狀態を回復して、獨立の生計を營む能力なき一切の人々を奴隸にするといふ方法である』と。同様に、イーデンも『貧民の狀態』第一卷、第一章、第六〇及び六一頁に曰く、『農奴制の減退は、必然に窮乏を齎した如く見える。マニユフアクチュア及び商業は、我國に於ける貧民の父母である』と。イーデンも、如上の主義に於いて共和論者たるスコットランド人と同様に、農民をプロレタリアたらしめ、隨つて被救恤的窮民たらしめたものは、農奴制の廢止ではなく、農民の土地有權の廢止であつたことを知らなかつた。——收奪が違つた形に行はれたフランスで、イギリスの救貧法に照應せるものは、一五七一年のモーリン法令と一六五六年の勅令とである。

(百九十八) ローチアーズ君は當時、新教正統派の本源たるオックスフォード大學の經濟學教授であつたにも拘らず、その著『農業史』の緒論の中で、宗教改革に依る民衆の被救恤的窮民化を強調してゐる。

十七世紀最終の十數年に及んでも、獨立農民たるヨーマン階級は小作農民階級よりもヨリ多數の成員を包擁してゐた。ヨーマン階級はクロムウエルの主勢力となつたもので、酔ひどれな百姓貴族や、その被傭人として主人から拂下げられた『愛妾』と結婚せねばならぬ位置にあつた田舎僧侶やに比し、遙かに有利な對照をなしてゐたことは、マコーレーでさへ認めてゐる所である。農村の賃銀労働者でさへ、共同地の所有に與かつてゐた。一七五〇年の頃、ヨーマン制度は消滅に歸し(百九十九)、十八世紀最終の十數年間に至つては、この共同地所有の最後の痕跡も抹去されてしまつたのである。茲では農業革命の純經濟上の動機は問はず、この革命の強行的な槓杆となつた事項だけについて論ずることとする。

(百九十九) サッフオルク州の一紳士著『男爵サー・ティー・シー・パンブリーに與ふる書、食糧の高價について』(イブスウキッチ、一七九五年刊、第四頁) 27。大規模な小作制度の狂熱的擁護者であり且つ『大なる小作地その他の者の關係研究』(ロンドン、一七七三年刊) 22 の著者であつた匿名氏は、同書の第一三三頁に曰く、『我が國民の獨立を支持してゐたこのヨーマン

ン階級なる一團が消滅したことは、我々のこの上なく悲しむ所である。彼等の土地が今や獨占的地王の手に歸し、有害な機會毎に解備されるといふ状態にあつた農僕等に比して殆んど優る所がない様な條件の下に小作權を保有してゐる所の小農民に依つて小作されるのを見るに至つたことは、寔に悲しむべき現象である」と。

スチュアート王朝の復興後、イギリスの土地所有者たちは、ヨーロッパ大陸に於いて到る處、法律上の迂路を經ずして成就された横奪をば、法律上の手段を以つて達成することになつた。彼等は土地の封建的制度を廢止した。換言すれば、土地に課されてゐた國家に對する一切の給付義務を廢除し、農民その他の一般民衆より得る所の租税を以つて、國家にこれが「賠償」を與へ、從來封建的所有名義を有してゐたに過ぎぬ所領地の上に近世的の私有を要求し、而して最後に、韃靼王ボリス・ゴツデウノフの勅令がロシアの農民を土地の附屬物に轉化せしめた如く、イギリスの農業労働者を化して社會の附屬物たらしめた所の居住法(註)なるものを厲行するに至つたのである。

かの『光輝赫々たる革命』は、オレンヂ公ウヰリアム三世(二百)と共に、また地主的並びに資本家的貨殖家をも、支配者たる地位に即かした。彼等は從來控へ目に遂行してゐた國有地盜掠を今や大規模に遂行することに依つて、新たなる時代を開きはじめたのである。國有地は贈與されたり、棄て値で販賣されたり、甚しきはまた直接の横奪に依つて私有地に併合されたりした(二百一)。此等はみな、法律上の形式を些かも遵守することなくして敢行されたものである。而して斯く詐欺的に占有された國有地は、盜掠した寺領のうち共和革命の際喪失されなかつた部分と相合して、イギリスに於ける現寡頭政府の御料地となつてゐるのである(二百二)。ブルジョアの資本家は、土地をも純粹の商品に轉化し、大規模なる農業經營の範圍を擴大し、自由にされた農村プロレタリアの供給を増大する等の目的を以つて、以上の行程を助長した。加ふるに、新たなる土地貴族は、新たなる銀行間や、新たに孵化し來たつた高等財政や、當時保護税に依つて支持されてゐた大なるマニユファクチュア家などの間に自然的に結合された盟友となつてゐた。イギリスのブルジョアは、己れ自身の利益のために行動することを毫も誤らなかつたのであつて、この點は、かのスウェーデンのブルジョアが、反對に自己の經濟的藩屏たる農民と相提携して、國王のために舊來の御料地を寡頭政府から強行的に奪還することに努めた事實(一六〇四年以降)。後にはまた、カール十世及びカール十一世の下に」と好一對である。

(二百) このブルジョアの英雄の私行については、就中、次の事實を見よ、——、彼れは一六九五年、オークネー夫人にアイランダの重要な土地を與へた。この夫人は王の寵を一身に集め、上流社會に非常なる勢力を揮つてゐたからである。

：彼女の任務は穢れたる愛の任であつたとせられてゐる（『イギリス博物館に於けるスローン稿本集第四二二四號。この稿本の表題は『サマーズ、ハリファックス、オックスフォード及びセクレタリ・ヴァーノン等よりのシュールスベリ公あて書翰の中に示されたウキリアム王の品性及び行狀』²¹といふ。これは寔に珍奇な品なのである）。

(二百一)『販賣と贈與とに依つて御料地を不法に讓渡したこと——これイギリス國史上の汚辱的な一章であり……且つ國民に對する絶大の一詐欺である』(フランシス・ウキリアム・ニュートマン著『經濟學講義』ロンドン、一八五一年刊、第一二九及び一三〇頁)等。『イギリスに於ける現在の大地主の所有が如何にして取得されたかは、『ノーブレス・オブレー』著、我が舊來の貴族、ロンドン、一八七九年刊』²²なる匿名著書について詳細を見られよ——D・H・C』

(二百二)例へば『自由主義の山雀』たるジョン・ラッセル卿を苗裔とするベッドフォード公家を取扱つたエドマンド・パークの一小著を見よ。

共同地(これは上述の國有地とは全く異つたものである)なるものは、元來、古代チュートンの制度であつて、それが封建的上被の下に存続して來たのである。この共同地の暴力的横奪は、多くの場合、耕地の牧場化を伴つた。而してそれが十五世紀の終末から十六世紀にかけて行はれたことは、我々の既に見た所である。だが當時、この行程は個人的暴行として行はれたのであつて、立法はこれに對し百五十年の久しきに亙つて抗争を續けたのであるが、遂に功を奏する所がなかつた。十八世紀の進歩とは、要するに法律それ自身が共同地盜掠の機關となつたといふ事實(尤も、大なる小作農業者は同時に、獨立した私的小方法をも採用したのであるが)に存してゐる(二百三)。この盜掠の議會の形態となつたものは、即ち『共同地私有化法案』²³なるものであつた。これ共同地を地主の私有に歸せしめんとする法律であり、人民に對する收奪の法律に外ならぬものである。フレデリック・モルトン・イーデンは共同地を以つて、封建領主に代つて現れた大地主の所有に屬すべきものとしたのであるが、一方にはまた、『共同地の私有化に對する一般的議會條例』を要求し、共同地を私有化するには一の議會的クーデターを要すると論じ、而も收奪を受けた貧民に對しては『賠償』を與ふべき法律を制定せねばならぬと主張した。斯くして彼等は、最初に與へた大地主辯護の主張を、自分みづから否定することになつたのである(二百四)。

(二百三)『小作農業者は、小屋住み労働者が彼等自身及び彼等の子女以外には他の生き物を保有することを禁じた。蓋し何等かの家畜又は家禽を飼養するとき、彼等は小作農業者の穀倉から飼料を盜むことになるであらうといふのが、その口實であつた。また曰く、小屋住み労働者を貧困ならしめよ、然らば彼等は勤勉なるべしと。だが、私の信ずる所に依れば、事實は

寧ろ斯くすることに依つて、小作農業者は共同地に對する一切の權利を掌握しようとしたのである（匿名者著『荒蕪地私有化の結果に關する經濟學的研究』ロンドン、一七八五年刊、第七五頁）。

（二百四）イーデン著『貧民の狀態』緒論。

獨立したヨーマンに代つて任意小作農民なるものが現れた。これは、地主の意の儘に左右される所の奴隸的群民たる、一ヶ年契約の微細な小作農業者であつた。この轉替と同時にまた、國有地の盜掠殊に共同地の組織的掠奪が行はれて、十八世紀の人人が資本小作地（二百五）若しくは商人小作地（二百六）と名づけてゐた、かの大なる小作地を更らに擴大せしめ、農民を『解放』して工業上のプロレタリアたらしめる結果を助けたのである。

（二百五）『資本小作地』。（一實業家著『製粉商及び穀物高價に關する二書翰』ロンドン、一七六七年刊、第一九及び二〇頁）。

（二百六）『商人小作地』。（匿名者著『食糧高價の研究』ロンドン、一七六七年刊、第一一頁註）。匿名で刊行されたこの良著は、牧師ナサニエル・フォルスターの手に成つたものである。

けれども、國民の富と人民の貧とが互ひに表裏してゐる事實を理解する點に於いて、十八世紀はまだ十九世紀ほどに及んで居らなかつた。さればこそ、當時の經濟文獻には、『共同地私有化』に關する極めて激烈な論争が現れてゐるのである。左に、私の手許にある幾多の材料の中から、當時の狀態を彷彿たらしむる若干の章句を抜萃する。

或る著者は憤然として曰く、『ハートフォードシャー州の若干教區に於いては、平均五十乃至一百五十一エーカーの小作地二十四を合同して三つの大なる小作地となした』（二百七）。『ノーサンプトンシャー及びライセスターシャー州に於いては、共同地の私有化は極めて大規模に行はれ、斯くして生じた新たな所有地は牧場に轉化された。これがため、従前一年に一千五百エーカーの地積を耕作せしめてゐた多くの所領も、今では五十エーカーの耕作さへ覺束ない有様となつた。住舎や、穀倉や、厩やの廢墟は、舊來の居住者の唯一の痕跡となつてゐる。一百軒の家屋が八乃至十軒に減じた村も少なくない。……漸く十五年乃至二十年前から私有化が行はれ始めた大抵の教區に於いては、土地を圍ひ込む人々の數は開放して置く人々に比して遙かに少ない。従前二十人乃至三十人の小作農業者や小地主、小借地人などの手に保有され最近に至つて圍ひ込まれた大なる土地が、四人又は五人の富裕な飼畜業者に依つて横奪されるといふやうなことは、決して珍らしい現象でない。此等の人々は、自己の家族及び彼等に使用され彼等に依つて生活してゐた他の多くの家族と共に所有地から驅逐されてしまつたのである』（二百八）。

(二百七) トマス・ライト著『大なる小作地の獨占について公衆に與ふる小辭』(一七七九年刊、第二及び三頁)。

(二百八) 牧師アッヂングトン著『開放地圍ひ込み賛否の論據研究』(ロンドン、一七七二年刊、第三七—四三頁隨所)。

圍ひ込みといふ口實の下に近隣の地主に依つて併合されたものは、單に荒蕪地のみではなかつた。共同的に耕作されてゐた土地や、共同體に一定の地代を納めて耕作されてゐた土地の如きも亦、同様にして併合されたことは、しばしば見る所であつた。『效では既耕開放地の圍ひ込み(私有化)について語るのであるが、斯かる土地の圍ひ込みが小作地の獨占を増進せしめ、食糧品の價格を昂騰せしめ、人口の減少を喚び起したことは、私有化を擁護する著述家たちでさへ認めてゐる所である。…而して現在行はれてゐる如き荒蕪地の圍ひ込みでさへも、貧民の生活資料を減少せしめ、既に過大となつてゐる小作地を更らに擴大するといふ結果を齎らすに過ぎぬのである』(二百九)。

(二百九) ドクター・リチャード・ブライス著『生殘支拂についての觀察』第二卷、第一五五頁。フォルスターや、アッヂングトンや、ケントや、ブライスマ、ジェームズ・アンダーソンなどの所論を讀み、これをマカロックの目錄的著書『經濟學文獻、ロンドン、一八四五年刊』の中に與へられてゐる所の慷慨たる阿諛者の饒舌と比較せよ。

ドクター・ブライスは曰く『土地が數少なき大なる小作農業者の手に屬する時、微細なる小作農業者(ブライスが曩に「自ら耕す土地の產物や、共同地に飼養した羊、家畜、豚などに依つて己れ自身及び一家の生活を維持し、生活資料を購買すること」を殆んど必要としなかつた小地主及び微細なる小作農民」と名づけた所の者)は結局、他人のためにする所の勞働に依つて生計を得、且つ市場に赴いて一切の必要品を購買せねばならぬ位置に立つ人となつてしまふであらう。…勞働の強制は甚しくなり、これがため實行される勞働の量も恐らくヨリ大となるであらう。…驅逐された人々は、職を求めて都市やマニユファクチュアに流れ込み、此等のものの範圍を擴大せしめることになる。これ即ち、小作集積の現象が自然に作用する様式なのであつて、多年我が國內に事實上行はれてゐた所である』(二百十)。

(二百十) 蘭掲、第一四七頁。

彼れは、土地圍ひ込み(私有化)の全結果を次の如く概括してゐる。——『概していふと、下級民の位置は凡ゆる點を通じて悪化した。彼等は小地主及び微細小作農民たる位置から日傭労働者又は雇人の位置に引き下げられてしまひ、而して斯かる状態の下に、彼等の生活は従前に比して更らに困難となつたのである』(二百十一)。

(二百十一) 蘭掲、第一五九頁。茲にローマが想起される。『分割されざる土地の大部分は富者に依つて占有された。彼等は

事慮の上から此等の土地が最早奪還されることなきを信じ、そこで附近の貧民の手に屬する個々の小地を一部分は合意的に購買し、一部分はまた暴力を以つて奪取するに至つた。彼等は今や個々の小地ではなく、廣大なる領域を耕作することになつたのである。彼等は農耕及び飼畜に奴隸を使用した。自由民は勞働をやめて、兵役につきしめられたからである。奴隸は兵役を免れてゐて、自田に増殖することができ、多数の子女を有し得たのであるから、この點に於いて、奴隸を所有することは非常に有利であつた。斯くして強者は一切の富を獨占し、奴隸は全土に充満することになつた。反對に、自由民は貧窮、貢賦、兵役等に依つて擦り減らされ、益々數少なくなつた。平和になつても、彼等は全く無爲の生活をなさねばならなかつた。富者は土地を所有し、自田民の代りに奴隸を農業上に使用してゐたからである(『アスピアン著『ローマ内亂』第一部第七章(56))。以上の叙述はリシニア法典以前の時代に關するものである。兵役は斯くローマ平民の滅落を速かならしめたのであるが、シアーレマン大帝がドイツ自由農民の隸農化及び農奴化を溫室的に助長した所の主要手段とされたものも、同様によこの兵役であつた。

共同地の横奪及びそれに伴つた農業上の革命は、實際のところ農業勞働者の上に極めて急性的な影響を及ぼしたものであつて、イーデン自身の言に依つても、一七六五年から一七八〇年に至る間、彼等の賃銀は最低限度以下に低落し、政府の救恤に依つて補充され始めるといふ有様であつた。彼等は曰く『彼等の賃銀は絶對的の生活必需品を得るに足るだけであつた』と。以下暫らく、土地私有化の擁護者にしてドクター・プライスの反對論者なる、或る著述家の語を聴かう。——『開放地で勞働を濫費することが見受けられないからといつて、人口が減退したといふ結論は生じて來ない。……微細な自營農民が他人のために勞働せねばならぬ位置に立つた人となつた結果、ヨリ多くの勞働が得られるとすれば、それは國民(といふ中には無論斯かる位置に立たされた人々には含まれないのであるが)が望む所の一利益であらう。彼等の結合勞働が一の小作地に充用されるとき、生産物は増大し、マニユファクチュアに利用すべき餘剰が生ずるのであつて、國民の鑄山の一なるマニユファクチュアは、穀物の生産量が大となるに比例して益々擴大されることになるのである』(二百十二)。

(二百十二) 匿名者著『食糧の高價と小作地大小との關係』第一二四及び一二九頁。これと傾向は相反してゐるが、所論の共通した一主張——『勞働者は小屋から驅逐され、職を求めて都市に流れ込む。これがため大なる餘剰が造り出されて、資本は増大することになるのである』(匿名者著『國民の危地』第二版、ロンドン、一八四三年刊)別丁第一四頁(56)。

『神聖なる所有權』に對する恥づる所なき凌辱や、人の身體生命に對する極めて手荒らな暴行も、それが資本制生産方法の基

變たるに必要となるや否や、經濟學者はストイック的な冷靜を以つてこれを觀察する様になる。それは例へば、經濟學者たる上に、トリー黨的色彩を有する政治家であり、且つ『博愛家』でもあるサー・フレデリック・モルトン・イーデンの言葉に示されてゐる所である。十五世紀七十年代から十八世紀末にかけて行はれた暴力的の收奪に伴へる盜掠や、暴行や、人民の窮乏などいふ諸種の現象も、ただ彼れを左の快き結論に導いたに過ぎなかつたのである。「耕地と牧場との間に適當な比例を立てねばならなかつた。十四世紀の全部及び十五世紀の大部分についていへば、二、三、甚しきは四エーカーの耕地に對して牧場は一エーカーといふ比率であつた。十六世紀中葉に至つては、耕地二エーカーに對して牧場二エーカーとなり、更に後年に及んでは、耕地一エーカーに對して牧場二エーカーと變じ、斯くして遂には耕地一エーカー牧場三エーカーといふ適當な比例に到達するに至つたのである』

十九世紀になつてからは、農民對共同地の闘争についての記憶さへ消滅してしまつたことは言ふ迄もない。後年のことは暫らく措き、一八〇一年より一八三一年に至る間、地主が農民の手から盜掠し、議會を通して己れ自身の手で贈與せしめた三百五十一萬一千七百七十一エーカーの共同地だけについていふも、農民はこれが代償として銀一文でも與へられたであらうか？

農民に對する最終の大掛りな土地收奪として學ぐべきは、所有地解放(實地)(實際は所有地からの人間掃蕩)と稱せられてゐる所のものである。イギリスに行はれた如上一切の方法は、この『解放』に於いて網頂に達したのである。前章に掲げた近世狀態の叙述に見られる如く、今や掃蕩すべき一人の獨立農民も存在しなくなり、事態は小屋の『解放』にまで進んでゐる。農業勞働者は、彼等自身の耕作する土地では最早自己の居住に必要な場積さへも見出さないといふ有様である。然し『所有地の解放』なるものが嚴密に如何なることを意味するかは、近世ロマンスの約束の地たるスコットランド高地に於いてのみ知り得る所である。所有地の解放が極めて組織的に行はれたこと、それが大規模に一舉にして遂行されたこと(アイルランドの地主は數村を同時に掃蕩するの舉に出でたが、スコットランド高地に於いては、ドイツの公國にも相當する大さの地積が一撃的に掃蕩されたのである)、最後にまた掃蕩に依つて得た土地所有が特殊の形態を採つたこと——凡そ此等の事實はスコットランドに於ける所有地解放の特徴となつてゐるのである。

スコットランド高地のケルト人は、おの／＼その居を定めてゐる土地の所有者たる諸氏族から成つてゐた。各氏族の代表者たる族長又は『グレート・マン』はその定住地の名義所有者たるに過ぎなかつた。この點はイングランド女王が國民全土の名義所有者たるに過ぎぬのと全く同様であつた。イングランド政府が此等の族長間の競争と、スコットランド平原地方への彼等

の間断なき侵入とを抑壓し得た後にも、彼等は決して舊來の盜掠職を放棄することなく、ただその形態を變更したに過ぎなかつたのである。彼等は自己の權力を以つて、舊來の名義所有權を私有權に轉化した。然るに、氏族民はこれに反抗した。そこで族長は公然たる暴力を以つて、彼等を驅逐しようとしたのである。『この筆法でゆけば、イギリスの國王は人民を海中に驅逐しても構はなかつた譯であらう』と、教授ニューマンは言つてゐる(二百十三)。この革命はスコットランドに於ける篡奪者一味の最終の武裝叛亂後に開始されたものであるが、その初期の段階については、サージェームズ・スチュアート(二百十四)及びジェームズ・アンダーソン(二百十五)の文章に依つてその經過を辿ることが出来る。十八世紀にはまた、農村を驅逐されたゲール人が國外に移住することを禁じられた。これ即ち、彼等を強行的にグラスゴーその他の工場都市に集中せしめんと目的に出でたのである(二百十六)。

(二百十三) フランシス・ウキリアム・ニューマン著『經濟學講義』ロンドン、一八五一年刊、一三二頁。

(二百十四) スチュアートは曰く『此等の地方の地代(彼れは地代といふ經濟學上の範疇を以つて、小農が族長に納める所の貢賦に適用するの錯誤に陥つてゐる)は、地方そのものの大きさに比すれば極めて小なるものであつた。だが、小作地に依つて養はれる人口の數に比すれば、スコットランド高地の所有地は肥沃なる地方に於ける同じ價値の所有地に比し、恐らく十倍の人口を維持せしめ得るものであることが見出されるであらう』前掲『スチュアート全集』息チエネラル・サー・ジェームズ・スチュアート編、ロンドン、一八〇一年刊、第一卷、第一六章、第一〇頁と。

(二百十五) ジェームズ・アンダーソン著『國民的産業心振興策觀察』エヂンバラ、一七七七年刊。

(二百十六) 一八六〇年に、被收奪者たちは虚偽の約束を以つて強行的にカナダへ輸出された。中には、山や附近の島に逃走して行つたものもあつた。彼等は警官に追跡され、格闘して逃れたのである。

十九世紀に専ら行はれた方法(二百十七)の一例としては、この場合、サーランド女公のなした『解放』を挙げれば十分であらう。この、經濟に通曉した女公は、公位に即くや直ちに經濟上の一の根本療治を行つて、過去に於ける同様の方法に依り既に人口一萬五千に縮小してゐた全州をば、羊牧場に轉化せしめようと決心した。一八一四年から一八二〇年に至る間、この一萬五千の人口(約三千家族)は、組織的に驅逐し剝奪された。彼等の村は破壊し焼き拂はれ、彼等の田畑は悉く牧場に轉化された。イギリスの兵士はこれが執行を命ぜられ、住民と戦を交へるに至つた。或る老女の如きは小屋を去ることを拒み、火焰に包まれて焼死した。斯くしてこの高貴なる女公は、何時とも知れぬ時代から氏族の所有に屬してゐた七十九萬四千エーカー

●土地を占有してしまつたのである。驅逐した住民のため、彼女は海濱の土地約六千エーカー（一家族當り二エーカー）を當てがつた。この土地は、當時に至るまで荒蕪のままに放置されてゐたもので、所有者に何等の所得をも齎らさなかつたものである。彼女はその氣高き心ばせを以つて、この土地をば一エーカー當り平均三志六片の地代で、幾世紀來彼女の一家のために血を流した氏族民に小作せしむるの擧に出でた。彼女は掠奪した氏族地の全部を二十九の大きな羊牧小作地に分割した。そのおの／＼には、一家族（大抵はイングラントの小作農僕）しか居住させぬといふ有様であつた。一八二五年には既に、一萬五千のゲール人が十三萬一千頭の羊に依つて位置を代はられた。海濱に驅逐されて行つた住民は、漁獵に依つて生活しようとした。彼等は兩棲動物となり、イギリスの或る著述家が言つた如く、半分は陸地、半分は水中に生活したが、而も雙方を合して半分しか生活しなかつたのである（二百十八）。

（二百十七）一八一四年、アダム・スミスの註釋者なるブーカナンは曰く、『スコットランド高地に於いては、今や舊來の所有状態が目を送うて破壊されつつある。…地主は永代小作人（この言葉も、適用を誤つてゐる）の立場を顧慮する所なく、土地を最高價格の入札者に提供してゐる。而して斯かる入札者が若し一の改良家であつたとすれば、直ちに新たな耕作制度が採用されることになるのである。土地には従來、微細な小作人や農業労働者が充ち互つてゐて、生産物と人口との均衡が保たれてゐた。然るに、耕作が改良され地代が増大した新制度の下に於いては、出來得る限り最小の費用を以つて最大の生産物が得られることになり而してこの目的のために不用な人手を除去したのであるから、人口は土地に依つて維持される程度といふよりも、寧ろ土地に依つて使用される程度に減少して行つた。驅逐された小作農氏は附近の都市に生活を求めた。云々（デヴィッド・ブーカナン著『アダム・スミス「富國論」について』エジンバラ、一八一四年刊、第四卷、第一四四頁）。』スコットランドの貴族は小樹を根こぎにする如くにして人民の家族を驅逐し、野獸に惱まされたインド人が、復讐的に野獸の住む藪を荒らす如くにして、村や住民を待遇した。…人間は羊一頭の毛又は肉、否、それ以下のものと交換されるやうになつた。…蒙古人は支那の北部地方に侵入したときその住民を剿絶し、土地を牧場化することを提議したが、スコットランド高地の地主はこれよりも遙かに不良な意圖に動かされてゐたのである。スコットランド高地に於ける多くの地主は、同一の提案を自國に於いて自國民の上に執行したのである（チォーヂ・エンサー著『諸國民の人口研究』ロンドン、一八一八年刊、第二一五及び二一六頁（59））。

（二百十八）スザーランドの現女公が、アメリカ共和國の黒人奴隷に對する同情を示さんがため（『高貴』なるイギリス人總

體の心臓が奴隸所有者のために鼓動してゐた南北戦争の際には、彼女は仲間の貴婦人たちと同じくこの同情の表示を忘れてゐたほど慎重だつたのであるが)かの『アングル・トムス・ケビン』の著者ピーチァー・ストー夫人をロンドンに華々しく歓迎したとき、私は『ニューヨーク・トリビューン』紙上でスザラランドの奴隸状態を叙述してゐたのである。(ケリーはその著『奴隸貿易、ロンドン、一八五三年刊』の第二〇二及び二〇三頁に、この私の叙述を所々引抄してゐる)。この文章はスコットランドの一新聞に再録されて、その新聞とスザラランドの阿諛者たちとの間に面白い論争を惹き起した。

だが、勇敢なるゲール人は、族長に對する彼等の山嶽浪漫的な崇拜を更らにヨリ苦がく償はねばならなかつた。魚の鰓は族長の鼻に傳つた。族長は其處に何等かの儲け口があることを嗅ぎつけた。そこで海濱をロンドンの大なる魚商人に賃貸した(二百十九)。ゲール人は、またも驅逐されることになつたのである。

(二百十九) この魚取引について、面白いことがデグエイッド・アーカード著『挟み帖、新叢書』(40)の中に見出される。——ナソー・ウキリアム・シーニョアは、曩に引抄した遺稿の中で『スザラランドの處置をば開闢以來最も有益なる所有地解放の一』だと稱揚してゐる。

最後にまた、羊牧場の一部は獵場に再轉化された。イングラランドに「嚴密の意味の森林といふものがないことは、我々の知る所である。高貴なる人たちの獵苑にゐる鹿は、ロンドンの市參事會員の如く肥え太つた生來の家畜なのである。そこでスコットランドが、『高貴なる慾情』の最後の隠れ場となつて来る。

一八四八年、サマーズは曰く、『スコットランド高地には、雨後の筍の如く新たな森林が簇生してゐる。ガイックのこちら側にはグレンフェシーの新林があり、向ふ側にはアードヴェリキーの新林がある。同じ方面に、これも亦最近開耕され始めたブラック・マウンツの廣大なる荒蕪地がある。東から西、アバーデーン附近からオーバン巖嶺地にかけて、今や一連の森林が延互し、他の地方にはまた、ロチ・アーチェイグ、グレンガリ、グレンモリストン等の新林が見出される。從來、小農民社會の中心となつてゐた峽谷には、羊が持ち込まれた。彼等は其處を逐はれて、ヨリ礮角不毛な他の地帯に生活を求めることになつた。今や鹿が羊に代つて、新たにまた微細な小作農民を驅逐し始めた。斯くして、彼等はヨリ礮角なる土地に、ヨリ甚しき窮乏に驅逐されて行くのである。鹿獵林(二百十九a)と人民とは共存し得ざるものである。いづれか一方が降服せねばならぬ。來たるべき二十五年間に、森林の數及び範圍が過去二十五年間に於けると同一の率を以つて増大するとすれば、ゲール人は全く郷土から跡を斷つに至るであらう。……スコットランド高地の地主間に行はれるこの運動は、一部分は功名心に基き、一部

分は娛樂に基くものであるが、……他のヨリ實際的な人々は、専ら利潤を目的として鹿の取引を營むのである。蓋し一の山脈を羊牧場たらしめるよりは森林たらしめた方が、所有者にとつてヨリ有利たることを常とするからである。……鹿獵林を求むる獵師の申出價格を制限するものは、彼等の懐ろ具合だけである。斯くしてスコットランド高地に與へられた苦痛は、ノルマン王の政策に依つて與へられた苦痛にも劣らない位である。鹿が廣大なる地域を受けてゐるとき、人間は益々狹隘なる地域へと逐ひ込められてゆく。……人民の自由は、次から次へと奪はれて行つたのである。……壓迫は今や日を遂うて甚しくなつてゐる。アメリカやオースタリアの山林開伐と同様に、人民の掃蕩驅逐は固定した原則として、農業上の必然として遂行されてゐるのであつて、すべては靜穩に事務的に進んで行くのである(二百二十)。

(二百十九a) スコットランドの鹿獵林には一本の樹木もない。禿山から羊を逐ひ出し、鹿を逐ひ入れるのであつて、これを『鹿獵林』と名づける。養林などは、もとより少しも行はれないのである！

(二百二十) ロバート サマーズ著『スコットランド高地よりの書翰、又は一八四七年の飢饉』ロンドン、一八四八年刊、第一二——二八頁、附所註。これは最初『タイムズ』紙上に發表されたものである。イギリスの經濟學者は、一八四七年に於けるゲール人の飢饉の原因を過剰人口に歸してゐる。兎にかく、彼等は『彼等自身の生活資料を壓迫してゐた』ことは事實である。——『所有地解放』は、ドイツでは『農民追放』(註)と言はれる。それは特に三十年戰爭後に行はれたものであつて、一七九〇年に至つてもザクセン選舉侯國にはこれがため農民一揆が喚び起された程である。別して東ドイツに旺んであつた、プロイセンの多くの地方では、フリードリヒ二世に依つて初めて農民に所有權が確保されたのである。シュレージンの征服後、彼れは地主に小屋や穀倉の再築を行はしめ、農民のため家畜や器具類を供給せしめた。彼れは軍隊に兵を要し、岡庫に納税義務者を要したのである。兎にかく、農民がフリードリヒの財政と專制主義的、官僚主義的、封建主義的な混合行政との下に、如何に愉快な生活を送つたかは、彼れの崇拜者たるミラボーの左の叙述に依つても知り得る所である。——『亞麻は北ドイツ農民の最も大なる富の一となつてゐる。だがそれは、人類にとつて、極端なる窮乏を防ぐ手段たるに過ぎず、福祉の源泉たるものではないのである。ドイツの農民は直接税や凡ゆる種類の徭役に依つて壓迫されてゐる。彼等はまた、自己の購買する一切の物について間接税をも支拂ふのである。……而して彼等の滅亡を完全にする更らにいま一つの事實は、自己の欲する場所、自己の欲する方法を以つて、生産物を販賣することが出来ぬといふことである。彼等はまた、ヨリ價安く商品を提供する所の商人から必要品を購買することをも敢てし得ない。此等一切の原因に依つて、彼等は不知不識、破

減せしめられるのである。で、若し紡績業がないとすれば、彼等は規定の期日に直接税を納入することは不可能となるであらう。蓋し紡績業なるものは彼等の妻、彼等の子女、彼等の僕婢、及び彼等自身をば有用に労働せしむることに依つて、彼等に一の財源を與へるからである。が、この種の補助手段あるにも拘らず、彼等の生活は何といふ貧弱なものだらう！夏季には、彼等はガリー船の奴隷の如くに耕作や收穫の労働をする。九時に寝ね二時に起きて労働に従事する。冬季には、大いに休息して力を恢復せねばならぬのだが、租税の財源を得るために作物を販賣するのほか無き時は、食用並びに播種用の穀物は毫も残らぬことになるから、この不足を補ふために勢ひ紡績労働に従事せねばならなくなつて来る。彼等は此の労働に最大の努力を向けねばならぬ。斯くして彼等は、冬季には深夜又は午前一時に寝て五時又は六時に起きるか、又は九時に寝て二時に起きるといふやうな状態に置かれる。而もこれは日曜を除くほか毎日行はれる所である。斯かる過度の不眠と労働とは人間の性質を消耗し去り、農村の男女は都會の男女に比して遙かに早く老い込むといふ結果を來たすのである』（ミラボー著『プロイセン君主國』ロンドン、一七八八年刊、第三卷、第二一二頁以下）。

第二版追加——一八六六年四月、右に引抄したロバート・サマーズの著書が刊行されてから十八年後に、教授レオネ・レウキは技術協會に於いて、羊牧場が鹿獵林に轉化される事實につき一の講演をなした。彼れはこの講演の中で、『スコットランドに於ける荒蕪の増進を述べてゐる。その一節に曰く、『人口の消滅と耕地の羊牧場化とは、費用なくして所得をうる最も便利な手段であつた。……羊牧場に代つて鹿獵林が現れ來ることは、スコットランド高地に於ける通例の轉變であつた。地主は嘗て農民を所有地から驅逐した如く、今羊を驅逐して新たな小作人（野獸）を歓迎してゐる。フォールフアーシアのダルハウジー伯所領からジョン・オグロツに至る地帯には森林が間断なく續いてゐる。……此等の森林の多くには通例、狐山猫、黃鼬、臭猫、鼬、野兔等が見出されるのであるが、最近また家兔や、栗鼠や、鼠なども入り込んで來た。スコットランドの統計中に大抵は稀有の肥沃と廣袤とを有する牧場として示されてゐる尠大な地帯は、斯くして一切の耕作及び改良から排除され、一年のうち短小な期間、僅かの人々の娛樂に役立つだけのものとなつてしまつたのである。』

『ロンドン・エコノミスト』一八六六年六月二日號紙上に曰く、『先週の或るスコットランド新聞の報道記事に、『スザーランドに於ける最良な小作羊牧場の一にして最近一千二百磅といふ年地代を提供されたものが、小作契約の満期となつた今日では鹿獵林に轉化されてゐる』といふ一節があつた。嘗てノルマン人ウヰリアム公がニュー・フォレスト林を造るため三十六ヶ村を破壊した當時に於けると同一の封建的本能が、この場合にも作用してゐたのである。スコットランドに於ける最も肥沃な

部分を含む二百萬エーカーの土地は：今や全く荒蕪に委せられてゐる。グレン・チルト地方の野生草は、バトス州に於ける最も榮養に富む草の中に數へられるものであつた。ベン・アウルダーの鹿獵林は、廣大なるベードノッチ地方に於ける最良の牧地であつた。ブラック・マウント林の一部は、スコットランドに於いては黒面羊を養ふに最も適するものであつた。純粹の娛樂を目的として荒蕪に委せられてゐるスコットランドの土地が如何なる範圍に互つてゐるかはそれがバース全州よりも廣大な地積を占めるといふ一事に依つても知り得る所である。ベン・アウルダーの森林に含まれる資源を見ても、強制荒廢に依る損失が如何に大であるかを、推知することが出来る。この森林は一萬五千頭の羊を養ひ得るものであるが、而もそれはスコットランドに於ける全森林地積の十三分の一以上には出でなかつたのである。…此等の森林地は今や悉く不生産的のものとされ、北海の底に沈められたも同然な有様である。…この種の即席的に造り出された荒廢又は荒蕪は、斷乎たる立法の干渉に依つて絶滅すべきである。』

寺領の奪取や、國有地の詐欺的割讓や、共同地の盜掠や、封建的並びに氏族的所有を横奪し、顧慮する所なき威嚇主義を以つてこれを近世的の私有に轉化せしめたといふ事實や——此等の事實は、夫々に、本來的蓄積の牧歌的方法なのであつた。これに依つて、資本制農業は活動の部面を興へられ、土地は資本に併合せしめられ、都市的産業のためには、放なされたプロレタリアの必要な供給が造り出されることになつたのである。

(三) 十五世紀終末以降に於ける被收奪者に對する殘虐な立法。

賃銀引下げの法律

封建的家臣團の分解や發作的な暴力的の土地收奪やに依つて驅逐された人々——この放なされた自由プロレタリアは、彼等が世に突き出されるや否や直ちに新興マニユファクチュアに依つて吸收されるといふことは不可能であつた。他方にまた、舊來の習慣となつてゐた生活軌道から突然投げ出された此等の人々が、突如として新狀態の訓練に順應するといふことも、不可能に屬する所であつた。彼等は、一部分には性癖の上から、然し大抵は四圍の事情に餘儀なくされて、一括的に乞食、盜賊、浮浪者などに轉化された。そこで十五世紀の終末から至十六世紀に亙り、浮浪人に對する殘虐な法律がヨーロッパ各國を通じて制定されることになつた。現在勞働者階級となつてゐる人々の父たちは、彼等が餘儀なく浮浪人や被救恤の窮民となつたことについても懲罰を受けたのであつた。立法は、當時既に存在して居らぬ舊事情の下に彼等が勞働を續くると否とは彼等自身

の善意に懸るといふ假定の下に、彼等を『自發的』犯罪者として取扱つたのである。

この立法は、イギリスではヘンリー七世の下に開始された。

ヘンリー八世治下の法律（一五三〇年）——老年にして勞働能力なき乞食は、乞食するの免許を與へられる。が、身體強健なる浮浪人は鞭打と監禁との罰を受くべきである。彼等は荷馬車の後部に繋がれて鞭打たれ、血の滴る迄に至らしめられた後、郷里へなり最近三年間居住してゐる場所へなり歸還して『勞働すべき』旨の誓を立てねばならぬ。何といふ恐ろしい反語だらう！ヘンリー八世の治世第二十七年に、従前の法律は更らに繰返され、加ふるに新たな諸種の補則を以つてヨリ苛烈にされた。彼等は再度浮浪罪で捕へられると、鞭打を受けて耳を半分切り取られる。三度目には、重罪犯人及び公安の敵として所刑されることになる。

エドワード六世——即位第一年に制定された法律には、勞働を拒みたる者はこれを懶惰者として摘發した人に奴隸として引渡すとの規定が與へられてゐる。主人はパンと、水と、稀弱なる飲料と、自己が適當と見做した厨肉とを以つて、奴隸を養ふべきである。彼れは鞭と鎖とを以つて如何なる勞働をも奴隸に強要する權利を有つてゐる。逃亡十四ヶ日に及ぶと、奴隸は終身奴隸にされ、額なり背なりにSの字を烙印される。三度び逃亡すると、叛逆者として所刑される。主人は他の動産、家畜と全く同様に、彼れを販賣し贈與し、奴隸として貸貸することを許される。主人に逆つて何事かを企圖する時は所刑される。治安裁判官は、訴へに従つて斯かる犯人を搜索せねばならぬ。浮浪人にして三日間無爲に暮らすことあらば、出生地に連れ行き、赤焼した鍔を以つて胸にVの字を烙印し、鎖に繋いで道路勞働やその他の勞役に服せしめる。虚偽の出生地を申立てた者は、刑罰としてその地の住民なり自治體なりの終身奴隸たらしめSの字を烙印される。何人も浮浪人の子女を取り徒弟となして、男子は二十四歳まで、女子は二十歳まで已が手許に保留し置く權利を有してゐる。彼等が逃亡すると右の年齢まで主人の奴隸とされる。主人は欲する儘に彼等を鎖に繋いだり鞭打つたりすることが出来る。主人は奴隸の首、腕、又は脚に鐵の環を嵌めて、識別し易くし、保有を確實にすることを許される（二百二十一）。この法令の最終部分は、一定の貧民が自己に飲食を給し勞働を與へんとする町村なり個人なりの下に勞働すべきことを規定してゐる。この種の教區奴隸は『巡歴夫』なる名稱の下に、十九世紀に入つてからも久しくイギリスに保存されてゐた。

（二百二十一）『商工業論、一七七〇年刊』の著者は述べて曰く『イギリス人はエドワード六世の治世に、マニユファクチュ

アの獎勵や貧民の使用を眞劍に開始した如く見える。これは「總べての浮浪人は烙印せらるべし」云々と規定した注目す

べき一法律に依つて知り得る所である。』

エリザベス女王治下の法律(一五七二年)——十四歳以上にして免許證を有せざる乞食に對しては、これを二年間雇傭せんとする者なき時は、烈しく鞭打つて左の耳朶に烙印すべきである。十八歳以上の者にして再度捕へられた場合これを二年間雇傭せんとする者なき時は刑に處し、三度び捕へられた時は、容赦なく叛逆者として所刑すべきである。エリザベス女王治世第十八年法(第三章)及び一五九五年の法律も、同様の規定を與へてゐる(二百二十一 a)。

(二百二十一 a) トマス・モルス(モア)はその『著ユトーピア』の中に述べて曰く、『斯くして、彼れの出生地に於ける眞の疾病ともいふべき飽く所なき貧窮家は、幾千エーカーの土地を一括して柵又は川で圍ひ、或は暴力及び不法手段を以つて所有者たちを苦め、彼等の有する一切のものを販賣せざるを得なくしてしまふといふ事態が生じて來るのである。此等の哀むべき異直な窮乏者は、男も、女も、良人も、妻も、父なし兒も、寡婦も、乳呑兒を抱へた傷ましい母親も、凡ゆる手段を以つて容赦なく立ち退きを強要される。彼等は資力は乏しいけれども、人口は極めて多い。農業には多數の人手を要するからである。彼等は住みなれた家から驅逐され、身を依める場所も見出し得ず、トボクと彷徨ひ行く。彼等の家具類は何の値打もないものであるといへ、時間の餘裕があれば賣つて幾許かの錢に換へることも出来るであらうが、何しろ咄嗟の場合のことであるから二東三文で手放すのほかはない。そして一寸なしになるまで彷徨ひ歩いた揚句の果は、盜みをして凡ゆる法律上の形式で纏られるか、それとも乞食をするかのほかに道はないのである。が、乞食をすれば、勞働せずに彷徨ひ歩いたといふ塵で浮浪人として獄に繋かれる。彼等は勞働したいのは山々だが、誰も勞働させて呉れないのだ。』トマス・モルスが盜人たるを餘儀なく強制された人々としてゐる此等の哀れむべき被追放者の中『七萬二千人の大小犯人がヘンリー八世の治下に所刑された』(ホリングシェッド著『英國記』第一卷、第一八六頁(4))。エリザベス女王の時代に『無賴者は列をなして繋かれ、三百乃至四百人の者が絞首臺に吸ひ込まれざる年はないといふ有様であつた』(ジョン・ストライプ著『エリザベス女王の聖代に於ける宗教の改革國定、及びイングランド教會に生じたその他各種の事變史』第二版、一七二五年刊、第二卷(45))。同じストライプにれば、サマーセット州に於いては、一年間に所刑を受けた者四十人、烙印された者三十五人、鞭打たれた者三十七人、『矯治の望みなき浮浪人』として釋放された者百八十三人に及んでゐる。が、彼れは曰く、『斯かる多數の被告人も、裁判官の怠慢と人民の愚劣なる同情とがあつたため、現實に於ける犯罪者總數の五分の一にも及んで居らぬ』と。彼れは更らに附言して曰く『この點に於いては、イングランドの他の諸州もサマーセット州以上に良好ではなく、寧ろヨリ不良な

州も澤山あつた」と。

ジェームズ一世治下の法律——放浪し乞食する者は、無頼者及び浮浪人と見做される。輕罪即決法廷に於ける治安裁判官は、彼等を公然鞭打たしめ、初犯者は六ヶ月、再犯者は二年の禁獄に所する權能を有つてゐる。入獄中は、治安裁判官が適當と認めた時には何時でも、適當と認めた數だけ彼等を鞭打たしめることが出来る。……矯治の望みなき危険性なる無頼者は左肩にRの字を烙印して懲役に就かしめ、再度乞食として捕へられた場合には、容赦なく所刑すべきである。此等の法律は、十八世紀初葉に至るまで有効であつたが、アン女王治世十二年法(第二章)に依つて始めて廢止された。

フランスに於ける同様の法律。同國に於いては十七世紀の中葉、パリーに一の浮浪人王國(6)が設けられるといふ有様であつた。ルキ十六世の初期の法律は、十六歳より六十歳に至る強壯者にして、生活資なく何等の職にも従事して居らぬものは、ガリー船の奴隷勞働に服せしめられることを規定した。ネザーランドに對するカール五世の法律(一六一四年三月十九日)や、オランダの州及び都市に關する第一勅令(一六一四年三月十九日)や、聯合州の『告示』(一六四九年六月二十五日)なども亦、同様のものであつた。

斯くして、強行的に土地を收奪され、驅逐されて浮浪者に轉化せしめられた農民は、奇怪極まる威嚇的な法律に依り、鞭打と烙印と苛責とを以つて、賃銀勞働の制度に必要な訓練を仕込まれたのである。

一方の極には勞働條件が資本として現れ、他方の極には自己の勞働力以外に販賣すべき何物をも有せざる人々が現れて來るといふことだけでは十分でない。更らに、彼等が任意的に己れ自身を販賣すべく強制されるといふことだけでも十分でない。

資本制生産が進むにつれて、教育や、因襲や、習慣などの結果、この生産方法の要求を自明の自然律と認める所の勞働者階級が發達して來る。十分に發達した資本制生産行程の體制は一切の抵抗を打破し、相對的過剩人口の間斷なき造出は勞働の需給律、隨つてまた勞働者の賃銀を、資本の價值増殖慾に應當した軌道の内部に拘束せしめ、經濟事情の無言の強制力は勞働者に對する資本家の支配を完成せしめる。經濟外の直接的暴力も亦、依然使用されたことは事實であるが、もはや例外的の現象に過ぎなくなつてゐる。相當の事態についていふ限り、勞働者はこれを「生産の自然律」に一任し得る。換言すれば、資本に對する隷從——生産條件をれ自身から發し、生産條件に依つて保證され永久化される所の——に一任し得るのである。資本制生産の歴史的發生時代にあつては、さうではなかつた。新興ブルジョアは、勞銀を「調節」するため、換言すれば勞銀が貨殖に適合した制限を越えないやうにするため、また勞働日を延長し、勞働者自身をば標準程度の隷從状態に維持するため、國家の強

力を必要とし且つ利用する。これ、謂はゆる本來的蓄積なるものの本質的一要素なのである。

十四世紀後半に成立した貸銀労働者階級は、その當時及び次の世紀に於いては極めて少數の人民部分たるに過ぎず、農村に於ける獨立自營農制度と都市に於けるツンフト制度とに依つて、著しくその位置を保護されてゐたものである。農村に於いても、都市に於いても、雇主と労働者とは社會的に密接してゐた。資本に對する労働の隷従は、形式的のものに過ぎなかつた。換言すれば、生産方法それ自身が尙未だ何等の特殊資本制的な性質を有して居らなかつたのである。資本の可變部分是不變部分を著しく凌駕してゐた。貸銀労働の需要は資本の蓄積が行はれる毎に急速に増大したとはいへ、而も貸銀労働の供給は徐々と伴つて行つたに過ぎぬ。國民的生産中の大なる部分は、後に至り資本の蓄積基金に轉化されたのであるが、當時に在つては尙、労働者の消費基金中に加へられてゐるといふ有様であつた。

本來労働者に對する搾取を目的とし、進行中にも絶えず労働者に敵抗してゐた貸銀労働取締立法（二百二十二）は、イングランドに於いては一三四九年のエドワード三世治下の労働者法を以つて始つてゐる。フランスに於いてこの法律に相當するものは、國王ジャンの名を以つて發布された一三五〇年の勅令である。英佛兩國の立法は互ひに並行して進み、内容に於いても一致してゐた。労働者法が労働日の延長を勵行しようとする點は、曩に（第八章、第五節）述べた所であるから茲には重ねて説かない。

（二百二十二）アダム・スミスは曰く『立法が雇主對労働者間の争議を調停せんとするとき、その相談相手となつたものは、常に雇主である』と。リンゲは言つた。『法の精神は所有である』と。

労働者法は下院の切なる要求に依つて制定されたものである。或るトリー黨員は素朴に述べて曰く、『貧民は従前、産業と富を危くするほどの高き賃銀を要求してゐた。然るに今日、彼等の得てゐる賃銀は、従前と同じく、或は寧ろ従前以上に（尤も違つた形で）産業と富とを危くするほど小さなものとなつてゐるのである（二百二十三）』と。都市と農村、請負仕事と日労働とについて一の法定賃銀率が確立された。農村労働者は一年契約で雇傭され、都市労働者は『自由契約で（自由）雇傭さるべきである』とされた。法定以上の高き賃銀を支拂ふことは禁ぜられ、これに違反するものは投獄に所せられる。而も法定以上の高き賃銀を受くる者は、これを支拂ふ者よりも更らに酷なる所罰を受ける。例へば、エリザベス女王治下の徒弟法第一八及び一九節には、法定以上の高き賃銀を支拂つた者は十日間の投獄に所せられ、これを受けた者は二十一日間の投獄に所せらるべきことを規定してゐる。一三六〇年の法律に於いては、刑罰は更らに酷となり、雇主は體罰を以つて法定賃銀率通りに労働せしむる權

を附與された。石工や大工を互ひに結合せしめてゐた一切の聯合作業、契約、誓約等は無効とせられ、労働者の集團は、十四世紀から集團禁止法の廢止された一八二五年に至る迄の間、重犯罪として取扱はれてゐたのである。一三四九年の労働者法及びそれから派生した諸法律の精神は、國家は貨銀の最高限度を規定したといへ、最低限度は決して規定しなかつたといふ事實の上に、明かに示されてゐる。

(二百二十三) 一辯護士著『自由貿易の詭辯』ロンドン、一八五〇年刊、第五三頁(48)。彼れは惡意的に附言して曰く、『我々は常に雇主のために容喙しようと思つてゐた。今や雇人のためには、何事もなされ得ないのであるか?』と。

十六世紀に至り労働者の状態が極めて悪化したことは、人の知る所である。貨幣貨銀に昂騰したとはいへ、然し貨幣が下落して進んで物價が騰貴した割りには、昂騰しなかつたのである。即ち、貨銀は實際に於いて低下したのである。而も貨銀の引下げを目的とする法律は、『何人も傭入れることを欲しない。人々に課すべき耳切りや烙印と共に存續してゐたのである。エリザベス女王治下第五年の徒弟法第三章の中で、治安裁判官は或る種の貨銀を確定し季節及び物價に應じてこれを變更するの權を授けられた。ジェームズ一世はこの労働規定をば機織工や、紡績工や、その他出來得る限り多くの種類の労働者にも及ぼさしめ(二百二十四)、デオーズ二世は労働者の集團を取締つた法律をば、一切のマニユファクチュアにも及ぼさしめた。

(二百二十四) ジェームズ一世治下第二年の法律第六章中の或る項に依ると、若干の製布業者は治安裁判官たる資格を以つて如何に自己の作業場にも公定の貨銀率を課するの併越を敢てしたかが知られる。——ドイツに於いては、勞銀引下げを目的とした法律が別して三十戰役後に屢々制定された。『人口稀少なる土地の地主にとり、僕婢や労働者の不足は極めて厄介なことであつた。如何なる村民も獨身の男女に部屋を賃貸することを禁せられ、斯かる宿泊者ある時は必ずこれを官廳に届出で、彼等が若し僕婢たることを欲せざる時は、たとひ日賃銀を受けて農民のために播種をなすか、又は穀物賣買の如き他の活動に依つて生活してゐる場合と雖も、捕へて獄に投ずべきであるとした(シュレージンに對する帝國の特權及び法令、第一章第一二五條(49))。苛酷な條件に従ふことを欲せず、法定貨銀に満足するを欲しないといふ、惡意ある我儘な無賴者について訴へる主張が、全一世紀を通じて地主たちの布告の中に幾度びか繰返された。個々の地主は、州の定めた貨銀率以上の高き貨銀を支拂ふことを禁じられた。而も三十年戰役後に於ける服務條件は、百年後に比べて往々優る所があつたのである。一六五二年には、シュレージンの農僕は一週に二度肉食してゐたのであるが、現世紀になつてからも、一年に三度切り肉食しないといふ地方が、同じシュレージンの中に見られた。日賃銀についても三十年戰役後の方がその後の各世紀に比べ

て優つてゐたのである』(ゲスタフ・フライターグ)。

嚴密な意味のマニユファクチュア時代の入つて、資本制生産方法は勞銀の法律的規定を不要とし且つ實行不可能とするに十分の力を得たのであるが、それでも權力階級は、必要の場合の用意として舊來の工廠で造られた武器を缺かさずに備へて置かうとしたのである。デオージェ二世治下第八年の法律に於いても、ロンドン及び附近の裁縫職人に對して公喪の場合を除き二志七片以上の日賃銀を支拂ふことは禁じられてゐた。また、デオージェ三世治下第十三年の法律(第六八章)は、絹織工に對する勞銀の規定を治安裁判官に一任したのである。一七九六年に至つても、勞銀に關する治安裁判官の命令が農業以外の方面に於ける勞働者に對しても適用し得べきか否かを定めるには、高級法廷に於ける二重の判決を必要とし、一七九九年の議會條例はスコットランドの坑夫の賃銀を以つて、エリザベス女王治下の一法律と一六六一年及び一六七一年のスコットランド二條例とに準據すべきものと規定してゐた。斯かる間に、事態が如何に激變したかは、イギリスの下院に於ける未曾有の一件に依つて證明された。イギリスの下院は四百餘年の久しきに亙つて、勞銀昂騰の最高限度を規定した法律を製造してゐたのであるが、一七九六年に至り、ホイットブレットは農業日傭勞働者に對する最低賃銀案を同院に提出した。ピットはこの案に反對したが、然し「貧民の狀態が悲惨であつた」一事は、彼れも認めてゐた。最後に、一八一三年に至り、賃銀取締を規定した諸法律が廢止された。蓋し資本家が己れ自身の私的立法に依つて工場を取締り、農業勞働者の賃銀が絶對的に必要なる最低限度に達しない場合には救貧税を以つてその不足分を補せし得るやうにして以來、如上の諸法律は馬鹿らしい變則となつてしまつたからである。然し雇主が契約に違犯した場合には民事訴訟を許すのみであるのに、勞働者が契約に違犯した場合には刑事訴訟をも許す所の、雇主對賃銀勞働者間の契約告知解除その他に關する勞働取締法の諸規定は、今日に至るまで滿開的に厲行されてゐる。

集團を取締つた殘酷な諸法律は、一八二五年、プロレタリアの脅威的態度の前に倒れた。が、それは一部分倒れたに過ぎず舊法律の若干の美しき殘片が初めて消滅に歸したのは、一八五九年になつてからである。最後に、一八七一年六月二十九日の議會條例は、法律上勞働組合を承認することに依つて階級立法の最後の痕跡を抹去しようとした。然るに、同じ日附の議會條例(暴行、脅迫及び妨害に關する刑法改正條例)は、事實に於いて舊來の狀態を新なる形に再興したのである。斯かる議會的手段に依つて、罷工又は締出(相互盟約した工場主が同じ時に工場を閉鎖して行ふ罷業のこと)の際、勞働者の利用し得べき手段は、普通法の取締から例外的なる刑法の取締に移轉されることになつた。而してこの刑法上の取締の解釋は、治安裁判官たる

工場自身の判断に一任されてゐたのである。その二年前に、同じグラッドストーン君は同じ下院に於いて、人の長く知る公明正大な遣り口で、労働者階級取締上の凡ゆる例外的刑法を廢止すべき一法案を提出したのであつた。けれどもそれは、二讀會以上に互ることを許されなかつた。斯くて問題は荏苒久しきに互つた結果、遂に『大自由黨』はトリー黨と聯合し斷然男を鼓して、自己を權勢の地位に引上げて呉れたプロレタリアに背反するの擧に出でたのである。『大自由黨』はこの背信だけで満足する所なく、權力階級のために絶えず尾を振つてゐる裁判官たちが、既に有效期間を經過してゐた『陰謀』取締法律を再發掘して、これを労働者の集團に適用せんとするを許したのである。要するに、五世紀間の久しきに互り恥づる所なき利己心を以つて、労働者に對する資本家の常設労働組合たる位置を保持してゐたイギリスの議會が、遂に罷工及び労働組合の取締法律を斷念するに至つたのは、厭々ながら且つ民衆の壓迫を受けて、したことに過ぎぬのである。

フランスに於いては、革命の風雲の初期に、早くもブルジョアは労働者が征服したばかりの團結權を奪還することを取つたのである。彼等は一七九一年六月十四日の法律に依つて、一切の労働者集團をば『自由と人權宣明とに對する加害』なりとし五百リヴルの罰金と一年間の公民權剝脱とを以つて處罰すべきであるとした(二百二十五)。國家警察權を以つて、資本對労働の競争戰を資本に好都合な範圍内に強制的に制限したこの法律は、革命及び王朝轉變後にも存続した。恐怖政治でさへも、これに手を觸れなかつたのである。それが刑法典の中から削除されるやうになつたのは、極めて最近のことに屬する。

(二百二十五) この法律の第一條に曰く、『同一の階級又は同一の職業に屬する一切種類の集團を廢除することは、フランス憲法の一の基礎となつてゐるのであるから、如何なる口實、如何なる形式を以つてもこれを復興することは禁ずる所である』と。また第四條に曰く、『同一の職業、技術又は手工業を督む市民たちが、同盟して彼等の産業又は労働に従事することを拒絶し、或は一定の價格を支持はれる場合にのみこれに従事せんと目的を以つて、相互に評議し協約をなすとき、斯かる評議及び協約は違憲にして、自出と人權宣明とに對する加害と(隨つて、舊労働者法に規定された國事犯と)せらるべきである』云々。(『パリーの革命』パリー、一七九一年刊、第三卷、第五二三頁(50)。

このブルジョアのクーデターの口實よりも以上に特徴的なものはない。この法律に關する報告委員シアブリエーは曰く、『労働が現在以上に増進し、これを受くる者が生活必需品の缺乏に因る殆んど奴隸状態に等しき絶對的隷従から解放されるに至るの望ましいことではある』が、然し労働者は自己の利害について互ひに協議をなし、又は同盟の行動に出で、以つて『殆んど奴隸状態に等しき絶對的隷従』を輕減せしめようとすべきではない。なせならば、彼等は斯くすることに依つて、『舊來の親方、今

の企業者の自由「労働者を奴隷状態に維持するの自由」を毀損することになり、且つ舊來の手工業組合親方の專制に敵抗する團結は（それがどう思へば！）フランスの憲法に依つて廢止せられた手工業組合を復興する結果を來たすからである！（二百二十六）と。

（二百二十六）ビュシェー及びブルー共著『議會史』第一〇卷、第一九三——一九五頁（51）。

（四）資本家の小作農業者の發生

土地から放たれたプロレタリアを強行的に造り出し、殘虐なる訓練を以つて彼等を賃銀労働者に轉化せしめた事實や、警察力に依つて労働の搾取率を増進し、以つて資本の蓄積を増進せしめた主要な國家的な汚辱行動やについては、以上考察した通りであるが、次に資本家なるものは、本來何處から來たかといふことが問題になる。蓋し、農民に對する收奪は、直接には大地主を造り出すに過ぎぬのである。小作農業者の發生については、謂はば手探りを以つて確め得るに過ぎぬ。それは幾世紀間に亙つて轉々し來たつた徐々たる一行程であるから。農奴たちは、自由なる小地主たちもさうであつたが、種々異つた所有事情の下に置かれてゐた。随つて彼等はまた、種々異つた經濟的條件の下に解放されたのである。

イギリスに於ける小作農業者の最初の形態となつたものは、農奴たるベリーリフ（領主の差配）であつた。彼れの位置は古ローマのヴィリクス（52）の位置に類似せるものであつて、異なる所はその活動部面がヨリ小であつたといふ一點のみである。十四世紀の後半期に至り、彼れの位置は地主から種子や、家畜や、農具やの供給を受くる小作農業者に依つて代はられた。この小作業者の位地は自營農民のそれと著しくは異なる所がなかつた。ただ、ヨリ多くの賃銀労働を搾取したといふ一點が違ふだけであつた。彼れは鹽で、半小作農業者たるメチャ（53）となつた。即ち、彼れ自から農業資本の一部を提供し、地主はまた他の部分を提供して總生産物をば契約した比率で相互に分配するのである。この形態はイギリスに於いては急速に消滅し、次いで現れたものは、即ち賃銀労働者を充用して自己の資本を増殖せしめ、而して餘剰生産物の一部を貨幣なり現物なりの形で地代として地主に支拂ふ所の、嚴密の意味の小作農業者であつた。

十五世紀に於いては、獨立農民も、賃銀労働の傍ら自作をなしてゐた農僕も、ともに己れ自身の労働に依つて富を積んでゐたのであるが、斯かる事情の持續する限り、小作農業者の境遇と生産範圍とは、いづれも、可もなく不可もなしといふ状態に止まつてゐた。十五世紀の七十年代に始まり、十六世紀の始んど全體（最終の數十年を除く）に亙つて持續した農業革命は、農

民を貧困ならしめると同一の速力を以つて小作農業者を富裕にした(二百二十七)。共同地の收奪その他に依り、彼等は殆んど無料で家畜を著しく増大することが出来た。而して斯く増大した家畜はまた、土地の耕作に利用すべきヨリ豊富な肥料を彼等に供給したのである。

(二百二十七)ハリソンは『英國記』の中に曰く『従前四磅であつた地代は恐らく四十磅にも増大したであらう。それでも小作契約満了の際、六ヶ年又は七ヶ年分の地代五十磅乃至百磅を貯蓄し居らぬ時は、小作農業者は營業が思はしくなかつたと考へる』と。

十六世紀に至り、極めて重要な一要素が加はつた。當時の小作契約は長期のものであつて、九十九年に互るものも屢々見られた。貴金屬隨つてまた貨幣の價值は不斷に低落し、小作農業者はこれに依つて黄金の果實を與へられた。曩に考察した一切の事情は暫く措くとしても、これがため勞銀の低落を來たした。勞銀の一部は、小作利潤の中に加へ込まれることになつたのである。穀物、羊毛、肉など、約していへば凡ゆる農産物の價格が不斷に昂騰した結果、小作農業者は何等の努力なくして貨幣資本を増大するに至つたのであるが、彼れの支拂ふべき地代は、舊來の貨幣價值を標準として契約されたものであつた(二百二十八)。要するに彼れは、賃銀勞働者と地主との雙方を同時に犠牲として富を積んだ譯であつて、この事情の下に、十六世紀末のイギリスが當時の状態に鑑みて富裕なる『資本小作農業者』階級を有してゐたといふことは、敢て奇とするに足りないのである(二百二十九)。

(二百二十八)十六世紀に於ける貨幣の價值低落が社會の各種階級に及ぼした影響については『スコットランドの訟師なる一紳士著、現今我國の各種方面に行はれる不平についての簡單な調査』(ロンドン、一五八一年刊)を見よ。この書は、問答體に書かれてゐるため世人は久しくこれをシェークスピアの手にされるものと信じ、一七五一年に至つても尙、彼れの名の下に刊行されてゐた。この書の眞の著者はウヰリアム・スタッフフォードである。その或る個所で、騎士が次の如く推論してゐる。——

騎士『予の隣人にして農夫なる汝、雜貨商なる汝、銅鍛治匠その他の手工業者なる汝——汝等は眞に汝等自身の利益を擁護することが出来る。なぜならば、今や一切の物は、従前に比し騰貴してゐるとはいへ、汝等が販賣する所の物品や勞働も亦それだけ騰貴してゐるからである。然るに、我々は販賣すべき何物も有せず、高價となつた物品を購買するのみであるから價高くなつた物品の販賣に依つて損失を埋合はず道がない。』また、他の場所で、騎士はドクターに問うて曰く『貴下は如何

なる人々を指して言はれるのか？ 先づ、この場合少しも損失を蒙らない人といふのは？』ドクター『それは賣買に依つて生活する總べての人々をいふ。此等の人々は、物を高價に買ふが、次いでまた高價に賣るからである。』騎士『然らば、その際儲けをすると言はれるのは如何なる人々なりや？』ドクター『舊來通りの地代を納めて小作地を耕作する總べての人々のことである。此等の人々は舊來の價格で支拂ひ、新たな價格で販賣するからである。つまり支拂ふべき地代は安く、その土地から得る作物は高く販賣されるのである。』騎士『然らば、斯かる利益よりもヨリ大きな損失を蒙ると言はれるのは如何なる人々であるか？』ドクター『それは、總べての貴族騎士、その他固定した地代なり給料なりで生活してゐて土地を耕作したり物を賣買したりすることのない人々のことである。』

(二百二十九) フランスに於いては、中世紀の初葉、封建領主に與へらるべき給附の管理人たり徴集者たるレヂシェーア(56)なるものが、收斂や欺瞞に依つて一躍資本家に成り上つたオムダフェール(57)(管業家)となつたのである。レヂシェーアの中には貴族たるものも往々はあつた。例へば斯ういふ一句がある。——『これは、パーガンの侯伯に納附すべき一三五九年十二月二十五日より一三六〇年十二月十八日に至る地代について、ベサンソンの城守ジャック・ド・トレイン氏が借地人に提出した計算書である。』(アレキシス・モンテュー著『稿本史』第二四四頁(58))。社會生活の凡ゆる部面を通じて、如何に最大の配當が仲介者の有に歸するかは茲にも既に現れてゐる。例へば、經濟方面に於いては、金融業者、株式取引業者、卸商人、小賣商人等が營業の正味を掬ひ取つてしまひ、民法の方面に於いては辯護士が依頼人から捲き上げ、政治に於いては議員は選舉人よりも、大臣は主權者よりも重要であり、宗教に於いては神は『仲介者』(クリスト)の背後に押し遣られ、『仲介者』はまた、よき牧者と羊との間の避け難き仲介者たる祭司の背後に押し遣られてしまふ。フランスに於いてもイギリスに於ける如く、大なる封建諸領は無数の小農地に分割されたが、それは農民にとつてイギリスの場合とは比較にならぬほど不利なる條件の下に行はれたのである。十四世紀に小作地(59)が出現した。その數は不斷に増大し、十萬を遙かに超えたのである。此等の小作地は、生産物の十二分の一乃至五分の一に互る地代を貨幣なり現物なりの形で支拂つた。此等の小作地は大抵、數モルゲン(60)の面積を有するに過ぎなかつたが、その價値及び大小に従つて、或は封土(61)、或は副封土(62)などと言はれた。此等の小作地はいづれも、住民に對して何等かの等級の裁判權を有してゐた。裁判には四つの等級があつたのである。斯かる小暴君の下に、農民が如何なる壓迫を受けてゐたかは、我々の推知し得る所である。モンテューに依れば、當時フランスには十六萬の法廷があつた。今日のフランスでは、治安裁判法廷をも合して四千もあれば十分なのである。

(五) 農業革命が工業の上に及ぼした反應作用。

工業資本のための國內市場の形成

發作的な、不斷に更新される所の、農民に對する收奪及び驅逐に依つて、ツンプト事情の全く圏外に立つプロレタリア群が繰返し繰返し都市の工業に供給されてゐたことは、既に述べた通りである。この巧みに配劑された事實こそ、老アダム・アンダーソン（ジェームズ・アンダーソンと混同すべからず）をして、彼れの商業史中で攝理の直接的干渉を信せしめた所のものである。我々は尙暫く、本來的蓄積のこの要素について考察せねばならぬ。デオフロア・サン・ヒラルは、一の方面に於ける宇宙物質の濃密化を説明するに、他の方面に於ける稀薄化を以つてした(二百三十)。恰度その如く、獨立自營農民の稀薄化は工業プロレタリアの濃密化を齎したのであるが、然し單にそれのみではなかつた。耕作者の數が減少したにも拘らず、土地は従前と等量又はヨリ多量の生産物を齎らした。なせならば、土地所有事情の革命は、耕作方法の改善や、協業の増進や、生産機關の集積などを伴ひ、農業上の賃銀労働者はヨリ大なる能率を以つて労働することになつた(二百三十一)上に、彼等が己れ自身のために労働する生産範圍は、ますます小さくなつたからである。斯くして農民の一部は遊離されることになり、それと同時に従前に於ける彼等の榮養資料も亦遊離されることになつた。この榮養資料は、今や可變資本の素材の要素に轉化されたのである。驅逐された農民は、この榮養資料の價値を自己の新主人たる工業資本家の手から賃銀の形で購買せねばならぬ。國內農業の産物たる工業上の原料についても亦、生活資料に於けると同様であつた。即ちそれは、不變資本の一要素に轉化されたのである。

(二百三十) 彼れの著『自然哲學概論』(パリ一八三八年刊)の中に。

(二百三十一) これはサー・ジェームズ・スチュアートが強調した一點である。

一例として、フリードリヒ二世の時代にいづれも亞麻を紡績してゐたウエストファリアの農民の一部が暴力的の攻撃を受けて、土地から驅逐され、殘餘の人々は大なる小作農業者の日傭労働者に轉化されたと假定し、同時に大規模なる亞麻の紡績所や機械所が起つて、『遊離』された人々は今や其處で賃銀労働するやうになつたと假定しよう。亞麻の外貌に従前の通りであつて、その絨維の一條と雖も變化する所はなかつた。然し、その體內には、一の新たなる社會的靈魂が宿ることになつたのである。亞麻は今や、マニユファクチュア經營者の不變資本の一部と成つてゐる。それは従前では、自から栽培して一家の人々

と共に少量づつ紡績してゐた多數の小生産者間に配分されてゐたのであるが、今や自己のために他人をして紡績せしむる一資本家の手に集積されることになつた。亞麻紡績業に支出される臨時労働は、従前では無数の農家に於ける臨時所得として、更らにフリードリヒの二世の時代についていへば、馬鹿らしい租税⁽²⁾として、實現されてゐたものであるが、今や敷少なき資本家の利潤として實現されるやうになつた。紡錘や織機は従前に於いては農村地方一帯に配分されてゐたのであるが、今では労働者や原料と同様に、僅少の大なる労働バラックに密集せしめられることになつた。而して紡錘や、織機や、原料は、本來紡績工や機織工に、獨立した生存を興へる手段となつてゐたのであるが、今では彼等の上に命令し(二百三十二)彼等から不拂労働を吸取すべき要具に轉化されてしまつた。大なるマニユファクチャー場や大なる小作農地を眺めただけでは、此等のものが多數の小きき生産場を打つて一丸となしたものであり、多數の獨立した小生産者に對する收奪に依つて成立したものであるといふ事實は見られない。然し、囚はれざる見解は、まごつくといふことがないのである。

(二百三十二) 資本家は曰く、『予が汝等の上に命令する努力の報酬として、汝等の手に存する僅少のものを予に與へるといふ條件の下に、予は汝等を予に奉仕させてやるであらう』と。ジアン・ジック・ルソー著『經濟學論究』ヂェネヴァ、一七六五年刊(3)。

革命の獅子ミラボーの時代には、大なるマニユファクチャー場は尙未だ聯合マニユファクチャー場(と稱せられ、集一した作業場(集一した田圃といふ名稱ある如く)と呼ばれてゐた。ミラボーは曰く、『幾百の人々が一人の指揮者の下に労働する所の、通常聯合マニユファクチャー場と稱する大マニユファクチャー場についてのみ、世人は注意を向けてゐるが、極めて多數の労働者がそれなく個別的に己れ自身の計算を以つて従業する所のマニユファクチャー場に對しては、目もくれなといふ有様である。が、これは大きな誤りである。蓋し人民の富の眞に重要な一成分たるものは、此等の個別的マニユファクチャー場のみであるから。……聯合工場に於いては、二の企業者は大なる富を積むことになるであらうが、労働者は厚給にしろ薄給にしろ、更にかく日傭人たるに止まり、毫も企業者の幸福に與ることがない。反對に、個別的工場に於いては、特別富者となるものはないが、多數の労働者は全體として幸福に生活する。……勤勉にして節約を重んずる労働者の數は増大するであらう。彼等は、賢明なる生活様式を以つて、活動を以つて、幾分かヨリよくその日暮しをさせる位が關の山で將來に對しては重要な對象となり得ない所の僅少な賃銀増騰を獲得すべき手段とはなさず、寧ろ己れ自身の位置を本質的に改善すべき手段となすからである。……個別分散的のマニユファクチャーは大抵は小農業と結合するものであつて、それは唯一の

自由なマニユファクチュアなのである』(二百三十三)。一部農民に對する收奪及び驅逐は、工業資本のために労働者を遊離せしめ、それと共にまた労働者の生活資料や労働材料をも遊離せしむるのみでなく、更らに國內市場をも造り出すのである。

(二百三十三) ミラボー著『プロイセン君主國』ロンドン、一七八八年刊、第三卷、第二〇——二一〇頁隨所。ミラボーは分散的作業場を以つて、『集一的』作業場よりも經濟的であり生産的であるとなし、集一的作業場なるものは政府の下に培養される人工的の温室植物に過ぎぬとしてゐるのであるが、これは、ヨーロッパ大陸に於けるマニユファクチュアの大なる部分の當時の状態に依つて説明し得る所である。

小農民を賃銀労働者に轉化せしめ、彼等の生活資料及び生産機關を資本の物的要素に轉化せしめる行程は、同時にまた資本のために國內市場を造り出すものである。農民家族は、従前、大部分を自から消費すべき生活資料や原料を生産し加工してゐたのであるが、此等の物は今や商品となつてしまつた。それは大なる小作農業者に依つて販賣される。彼れはマニユファクチュアの内に市場を見出すのである。絲や、リンネルや、粗製毛織物など、約していへば各農家が自家の原料を以つて自家使用のために紡織してゐた諸種の物品は、今や農村地方を販路とする所のマニユファクチュア製品に轉化される。従前己れ自身の計算を以つて労働に従事せる多數小生産者の間に見出された澤山の個別分散的な顧客は、今や工業資本から供給を受ける所の一大市場に集積せしめられる(二百三十四)。即ち、舊來の自營農民が收奪を受けて生産機關から分離される事實と相並んで、農村の副工業の破壊が行はれ、農工業間の分離行程が進んで來るのである。而して斯かる農村家庭的工業の破壊のみが、資本制生産方法の必要とする範圍と鞏固とを國內市場に與へ得るのである。

(二百三十四) 『労働者の一家が他の労働の合ひ間に、己れ自身の努力を以つて年々必要な衣類に轉化せしめる二十斤の羊毛——それは何等の注目をも引かないのである。然しこれを市場に持ち行き、工場に送り、それから仲買人や商人の手を通過するといふことになる』と、商業上の大なる操作とこの物品の價值に二十倍する名目資本とを必要とするに至るであらう。

……労働階級なるものは、斯くして悲惨なる工場民や、寄生的の小賣商人階級や、空虚なる商業制度、貨幣制度、金融制度などを維持することに利用されるのである』(デウィッド・アーカト著『通語集』ロンドン、一八五五年刊、第二一〇頁)。

けれども、嚴密な意味のマニユファクチュアの時代に於いては、斯かる轉形は根本的には實現されるに至らぬ。この時代は極めて斷片的に國民的生産を征服するだけであつて、都市の手工業並びに農村の家庭的副工業が常にその廣大なる背景的基礎となつてゐることは、我々の記憶する所である。若しこの背景の或る形態が、特殊の營業部門の内部に於いて、一定の點に

於いて、破壊されるとすれば、他の何處かにまた同一の背景が生じて来る。嚴密な意味のマニユファクチャーの時代に於いては、原料の加工生産上斯かる背景を或る程度まで必要としてゐるからである。そこでマニユファクチャーの時代には土地の耕作を副業とし、工業上の勞働を主業として、この後ちの勞働の生産物を直接に、又は商人の手を経て間接に、マニユファクチャーに販賣する所の小農民といふ新たな階級が造り出される。而してこの事實は、英國史の研究者をして最初に昏迷せしむる現象の主要原因ではないにしても、少なくともその一原因となつてゐるのである。イギリスの歴史を見ると、農村に於ける資本經營の増大と小農階級破壊の増進とを訴ふる聲が、十五世紀の七十年代以降斷續的ではあるが絶えず擧つてゐることを見出すのであるが、他方にまた、同じ小農階級が、成員は減じ形態はますます悪化してゐるとはいへ(二百三十五)絶えず新たに現れてゐることも見出されるのである。その主なる理由は次の如くである。元來、イギリスといふ國は、時代に依つて穀物の栽培を主とすることもあれば、家畜の飼養を主とすることもあつて、その度び毎に、農民の經營範圍は變動するのである。大工業が起るに及び、茲に初めて機械に依つて資本制農業の不易的な基礎が與へられ、農民の驚くべき多數は根本的に收奪を受けて、農業と農村家庭的工業との分離は完成されることになる。この家庭的工業の根柢たる紡績業及び機械織業は、大工業のために根こぎにされてしまふ(二百三十六)。茲に初めて、大工業は工業資本のために國內市場の全部を征服することになつたのである(二百三十七)。

(二百三十五) クロムウエルの時代は、これが例外となつてゐる。共和制の持續する限り、イギリスの民衆は凡ゆる部層を通じて、チュードル王朝の下に陥つた墮落の中から救はれてゐたのである。

(二百三十六) 機械の採用と同時に、嚴密な意味のマニユファクチャーの中から、また農村家庭的のマニユファクチャーの破壊の中から、大規模の羊毛工業が発生し來たつたことは、タケットの知る所である(タケット著『勞働民の過去及び現在状態史』ロンドン、一八四六年刊)。「犁と軛は神々の發明にかかるもので、英雄の使用する所であつた。織機、紡錘、紡車などの由來は、これほど高貴ではないのであるか? 汝等は紡車と犁、紡錘と軛とを分離するとき、工場と救貧院、信用と恐慌とを生ぜしめ、農業的と工業的との、相對抗した國民を造り出すことになるのである」(デヴィッド・アーカート著『通語集』第一二二頁)。そこへケリーがやつて來てイギリスのことを懇訴するのであるが、この懇訴は確かに不當ではないのである。即ち彼れは曰く、イギリスは他の總べての國々を單なる農業國に轉化せしめ、己れ自身は工業國たんとしてゐる。而もトルコは斯くして破滅せしめられた。蓋しイギリスは、トルコに於ける土地の所有者及び耕作者が、犁と織機と、軛と耙

との間の自然的聯合に依つて己れ自身を鞏固にすることを許さなかつたからであると(『奴隷貿易』第一二四頁)。ケリーに依れば、アーカート自身こそ、イギリスの利益のために自由貿易を宣傳してトルコを破滅せしめた主動者の一人なのである。茲に面白いことは、保護制度に依つて助成される如上の分離行程をば、ケリー(ついでに言つて置くが、彼れは大のロシア心酔家である)が保護制度に依つて防止しようとしてゐる一事である。

(二百三十七) ミルや、ローザアーズや、ゴドウキンや、スミスや、フォーセットなどの如き、イギリスの博愛主義的な經濟學者、及びジョン・ブライト一味の如き自由主義的の製造業者たちは、神がカインに向つて弟アベルのことを問うた如く、イギリスの土地貴族に向つて我が幾千の獨立農民は何處へ行つてしまつたかと問ふのであるが、全體、貴公等は何處から來たのであるか? 獨立農民の破滅の中から來たのである。貴公等は何故、一步を進めて獨立の機械業者、紡績業者、手工業者は何處へ行つてしまつたかと問はないのであるか?

(六) 工業的資本家の發生

工業的(二百三十八)資本家の發生は、小作農業者の發生の如く漸次には行はれたものでない。多くの小ツンフト親方や、奥らに著しくは獨立した小手工業者や、甚しきは賃銀労働者でさへも——此等の人々は、最初小資本家に轉化され、然る後、賃銀労働の搾取を漸次に擴大し蓄積を増進せしめることに依つて、遂に素面の資本家に轉化されたものであることは疑ひを容れない。中世都市の幼少期に於いては、逃亡した農奴の中、たれが主人となり、たれが召使となるかは、主として逃亡時日の早いか遅いかに依つて定まつたのであるが、資本制生産の幼少期に於ける事態も、往々にしてこれに等しきものがあつた。

(二百三十八) industrial といふ言葉は、ここでは『農業的』に對立した意味(即ち我が『工業的』の意味)に使用する。『絶對的』の意味(即ち我が『産業的』の意味)に解すれば、小作農業者も製造業者と同じく *Industrial Kapitalist* である。

然しこの方法の蝸牛の進行は、十五世紀末の諸大發見に依つて造り出された新たな世界市場の商業的要求に相應せるものでは決してなかつた。けれども、種々異つた經濟的社會形態の下に成熟し、資本制生産方法の時代以前にあつては資本それ自身とされてゐた二つの相異なる資本形態なる、高利貸附資本と商業資本とが、中世から傳へられたのである。

『現在についていへば、社會の凡ゆる富は先づ資本家の手に入る。……彼れは地主に地代を、労働者に賃銀を、收税吏及び十

分一稅徵收者にその要求する金額を支拂ひ、勞働年産額中の少なからざる部分、實際のところ最大にして且つます／＼膨脹する所の部分を、自己の手に保留するのである。今や資本家は、社會に於ける一切の富の最初の所有者といひ得る。尤も彼れは法律に依つてこの所有權を附與された譯ではないのだが。：：斯かる所有變化は、資本を以つて利子を得ることに起因せるものであつた。：：ヨーロッパに於ける一切の立法者が、高利貸附業を取締る法律に依つてこれを防止しようとしたことは、少なからず注目すべき事實である。：：一國の凡ゆる富が資本家に依つて支配されるやうになつたといふことは、所有權の完全なる革命である。而してこの革命は如何なる一法律、又は一列の各種法律に依つて起されたものであるか？』(二百三十九)。

(二百三十九) 匿名者著『自然的所有權と人爲的所有權との比較』ロンドン、一八三二年刊、第九八及び九九頁(6)。この書はトマス・ホッデスキンの手に成つたものである。

高利貸附業と商業とに依つて形成された貨幣資本は、農村に於いては封建制度、都市に於いてはツンフト制度のために、工業的資本に轉化されることを妨げられた(二百四十)。然るに此等の制限は、封建的家臣團が分解されると共に、農民が收奪を受けて一部分驅逐されると共に消滅に歸した。新たなるマニユファクチュアは、海港に、又は舊來の都市やそのツンフト制度の手の届かなかつた平地の諸處に設けられた。斯くしてイギリスに於いては、此等の新たなる工業的育種場に對する舊來の特權諸都市の激烈な抗爭を醸すことになつたのである。

(二百四十) しかのみならず、一七九四年に至つてもリーツ市の小製布業者たちは、如何なる商人に對しても製造業者たることを禁ずべき法律の制定を請願するため、彼等の代人を議會に送つたのであつた。

アメリカに於ける金銀産地の發見、土著民の剿絶、その奴隸化並びに鑛山内への埋没、東インドに對する征服及び劫掠の開始、アフリカを商業的の黑人狩獵場に轉化せしめた事實——凡そ此等の事實こそ資本創生産時代の曙光を示すものである。この牧歌的な諸行程こそ、本來的蓄積の主なる要素なのである。此等の行程に相次いで、ヨーロッパ諸國民の地球を舞臺とせる商業戦が起つた。それはスペインに對するネザーランドの離反に依つて開始され、イギリスの反ジャコピン黨戰爭に於いて巨大なる範圍を占め、更らに支那に對する阿片戰爭等に於いて今なほ續演されてゐるのである。

本來的蓄積の種々なる要素は、今や多かれ少なかれ時間的の順序を以つて、特にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランス、イギリス等の間に配分されることになつた。イギリスに在つては、此等の要素は十七世紀の終末、植民制度や、國債制度

や、近世租税制度や、保護制度などに依つて體系的に綜合された。此等の方法は、一部分は凶暴極まる強力、例へば植民制度の如きに立脚するものであつたが、いづれも封建制生産方法の資本制生産方法への轉化行程を溫室的に助長し、その推移を早めるために、社會の集積され組織された強力なる國家權力を利用した點に於いて共通してゐる。強力なるものは、新たな一社會を孕める總べての舊社會に對する產婆なのである。それは、一の經濟力である。

クリスト教的の植民制度について、クリスト教の研究を専門としてゐたウキリアム・ハウキットなる人は曰く『世界の凡ゆる方面を通じて謂はゆるクリスト教人種なるものが自己の征服し得た總べての種族の上に加へた所の殘虐と無鐵砲な暴行とは、世界史上如何なる時代に於ける他の如何なる人種（それが如何に殘猛、如何に無教育、如何に無情無恥なるものであつても）の殘虐暴行とも比較にならぬほど甚しいのである』（二百四十一）。十六世紀に於ける資本制度の標本國であつたオランダの植民經營史は『背信、賄賂、虐殺、卑劣等の極度な一光景を展示してゐる』（二百四十二）。オランダ人がジャヴァで使用すべき奴隸を得ようとしてセレベス島に實施した人間盜掠の制度よりも以上に、特徴的な事實はないのである。この目的のために、人間盜人が訓練された。盜賊と、通譯者と、販賣業者とは、この營業の主なる取引者であり、土著の王侯はその主なる販賣者となつてゐた。盜み來たつた少年たちは奴隸船に送り出し得るほど十分成育する迄は、これをセレベス島の祕密監獄内に拘禁して置いた。政府の一報告中に曰く、『例へば、マカッサラのこの都市には祕密監獄が充滿して居り、その最も恐ろしきものの中には、無理強いに一家から引き裂かれて鎖に繋がれた、貪慾と暴虐の犠牲たる哀れな人々が一杯詰め込まれてゐる』と。オランダ人はマラッカ市を得んとしてホルトガルの總督を買収した。一六四一年、總督は彼等が市内に入るを許した。彼等は直ちに總督邸に駈つけ、二萬一千八百七十五磅といふ賄賂の支拂を『節慾一すべく彼れを虐殺した。彼等が足を觸れた所には何處にも、荒廢と人口消滅とが隨伴した。ジャヴァの一地方なるバンジュワングは、一七五〇年には八萬以上の住民を有してゐたが、一八一一年には僅かに八千人を有するに過ぎなくなつた。まことに物やさしい商賣である！』

(二百四十一) ウキリアム・ハウキット著『植民とクリスト教。ヨーロッパ人が彼等の凡ゆる植民地に於いてなせる土人待遇の通俗史』（ロンドン、一八三八年刊、第九頁）(66)。奴隸の待遇についてはシヤール・コット著『立法論』（第三版、ブリュッセル、一八三七年刊）(67)の中に、よき材料が編纂されてゐる。ブルジョアは自己の像に做つて憚る所なく世界を形作り得る場

合、彼等自身と勞働者とを如何なるものとしてしまふか、それを知るにはこんなことも立ち入つて研究する必要がある。

(二百四十二) 前ジャヴァ副總督トマス・スタムフォード・ラッフルズ著『ジャヴァとその屬領』（ロンドン、一八一七年刊）(68)。

イギリスの東インド商會は、人の能く知る通り、東インドに於ける政治上の覇權以外に尙、茶貿易はもとより支那貿易一般についても、更らにヨーロッパとの間の貨物輸送についても、絶對的の獨占權を保有してゐた。而もインド沿海貿易や、諸島嶼間の沿海貿易や、インド内地の貿易は、いづれも同會社の高級吏員の獨占到歸してゐたのである。鹽、阿片、葡萄酒の他の商品の獨占は、富の無盡藏な鑛山であつた。東インド商會の吏員たちは自身で價格を定め、意の儘に不幸なるインド教徒を劫掠したのである。インド總督も、この私商賣に關與した。彼れの寵を受けてゐる人々は、鍊金術師よりも更らに巧妙に無から金を造らしめた條件の下に、請負契約を下附された。大資産は雨後の筍の如く一夜にして簇生し、本來的の蓄積は豫め一志をも投ずることなくして進行した。ウォーレン・ヘスチングに關する裁判記録には、この種の實例が充滿してゐる。茲に一例を擧げよう。スリヴァンなる者は、阿片地方から遠く隔つたインドの或る地方へ公務を帯びて出發する間に、一の阿片請負契約を下附された。彼れはこの契約をピンと稱する者に四萬磅で賣却し、ピンは同日更らにこれを六萬磅で他に賣却した。この契約の最後の購買者たり履行者たりし人は、次いでまた、これから莫大な利益を打出したと言明してゐる。議會に提出された一の表に依れば、一七五七年から一七六六年に至る間、東インド商會及びその吏員たちは、インド人をして自己のために六百一磅を寄附せしめた！一七六九年から一七七〇年に至る間、イギリス人は米を買ひ占め、法外の價格でなければこれが再販賣をなさぬと主張して、一の飢饉を造り出したのである(二百四十三)。

(二百四十三) 一八六六年にはオリッサ一地方だけでも一百萬人以上のインド教徒が餓死した。而もイギリス人は、此等の餓死しつゝある人々に高價の生活資料を販賣し、その價格を以つてインドの國庫を富まさうとしたのである。

土著人に對する待遇は、西インドの如き輸出貿易のみを行ふ位置にある植民地や、メキシコ及び東インドの如き強盜殺人に委せられた人口稠密な富裕國に於いて、最も兇暴を極めたことは言ふ迄もない。だが、嚴密の意味の植民地に於いても、本來的の蓄積のクリスト教的性質は拒むべくもなかつた。かの新教主義の正氣の名匠たるニュー・イングランドの清教徒たちは、一七〇三年に彼等の集會の決議を以つて、インド人の頭蓋一個又は捕虜一人につき四十磅の賞を懸け、一七二〇年には頭蓋一個につき一百磅、また一七四四年、マサチューセツツ灣で或る種族を叛徒と宣言した時には、左の如き賞を懸けた。——十二歲以上の男の頭蓋一個一百磅、男の捕虜一人一百五十磅、女子供の捕虜一人五十磅、女子供の頭蓋一個五十磅！斯かる間に煽動のとなつて來た敬虔なる清教徒の子孫は、數十年後に及び植民制度に依つて復讐された。彼等はイギリスの煽動と支拂との下に七人の鉞で打ち殺された。イギリスの議會は、殺戮と頭蓋取は『神と自然に依つて授けられた手段』であると宣言した。

植民制度は、貿易と航海とを温室的に成熟せしめた。『獨占會社』(ルーテル)は資本集積の強力な槓杆であつた。當時發芽しつつあつたマニユファクチュアは、植民地に依つて販路を興へられ、販路の獨占に依つて強められた所の蓄積を確保された。ヨーロッパの外部で劫掠や、奴隸化や、強盜殺人などに依つて直接獲得された財寶は、母國に流れ來たつて資本に轉化された。植民制度を初めて十分に展開した所のオランダは、一六四八年には既に商業的勢力の焦點に達してゐた。同國は『東インド貿易』と、ヨーロッパに於ける南西部及び北東部間通商との殆んど全部を獨占してゐた。オランダの漁業、海運、マニユファクチュア等は、他の總べての國のそれを凌駕してゐた。オランダ共和國の總資本は、恐らく他のヨーロッパ諸國全體の富よりも大であつたらう。『ギューリヒ』は更に次の一事を附言することを忘れてゐた。それは即ち、オランダの民衆は一六四八年に於いても既に、他のヨーロッパ諸國全體の民衆に比べてヨリ過勞し、ヨリ貧困であり、且つヨリ凶暴的に壓迫されてゐたといふ事實である。

今日では、工業上の至上權が商業上の至上權を伴ふのであるが、嚴密の意味のマニユファクチュア時代に在つては、寧ろ商業上の至上權が工業上の優越を興へてゐたのである。當時、植民制度が主なる役目を演じた所以は茲に在る。ヨーロッパの古き神々と相並んで祭壇に座を占め、一日、彼等を一撃一蹴の下に打ち倒してしまつたものは、『異教の神』であつた。彼れは貨幣を以つて人類の究極的な且つ唯一の目的なりと宣布したのである。

公信用制度(國債制度)の起原は、中世紀に於いても既にゲヌア及びヴェネチアに見出されたのであるが、マニユファクチュアの時代には、これが全ヨーロッパを征服してしまつたのである。植民制度に伴ふ海上貿易や商業競争は、この制度の温室として役立つた。斯くしてこの制度は、先づオランダに根を下ろしたのである。專制國たると、立憲國たると、共和國たるとを問はず、兎に角、國家の讓渡を意味する所の國債こそ、資本制時代に極印を捺したものである。謂はゆる國富と稱するものうち、現實に於いて近世國民の總所有に入る唯一の部分、即ち彼等の國債なのである(二百四十三)。これが必然の歸結として、債務を負ふこと甚しければ甚しきほど、一國は益々富むといふ、近世的の教義が生じて來た。公信用は資本の信條となる。而して國債の成立と共に、聖靈を潰す所の赦され得ざる罪に代つて、國家債務上の背信が現れて來るのである。

(二百四十三) ウェリアム・コベットは曰く、イギリスの凡ゆる公設營造物は『王立的』と呼ばれてゐるが、その代リイギリスには『國民的』債務(國債)があると。

公債は本來的蓄積の最も強力き槓杆の一となる。それは魔杖を振つてする如く、不妊の貨幣に生殖力を附與して、これを資

本に轉化せしめる。而も貨幣はこれについて、産業上の投資は勿論、私的高利貸附業にも、不可分的に伴ふ所の骨折と危険とに身を晒すことを要しないのである。國家に對する債權者は現實に於いて何物をも與へぬ譯である。なぜならば、彼れが國家に貸附けた金額は、容易に移轉し得べき公債證書に轉化され、而してこの公債證書なるものは等額の正金と全く同様に彼等の手の中で作用を續けるからである。斯くして生ぜしめられる無爲の貸子生活者階級や、政府及び國民の間に立つて仲介者たる機能盡す金融業者の一夜にして造られた富や、各國債中の可なりな部分をは天から降つて來た資本として利用し得る所の收稅請負人、商人、私的製造業者や——此等一切のものは暫く措くとしても、國債は尙ほ株式會社や、凡ゆる種類の有價證券の賣買や、エーヂオターヂュ(會)などを、約していへば株式投機と近世的銀行間とを造り出すことになつたのである。

國民的の名義を以つて裝飾された大銀行なるものは、その出生の當初からして既に、政府の側に立ちそれに依つて與へられた特權のお蔭で政府に貨幣を貸附け得た私的投機者たちの、會社に外ならなかつた。されば國債の増加については、斯かる銀行の株式の間斷なき昂騰以上に確實な分度器はないのである。この種の銀行が十分の發展を見るに至つたのは一六九四年に於けるイングラント銀行設立以後のことである。イングラント銀行は、政府に八分の利で貨幣を貸附くることを以つて營業を開始した。同時に、イングラント銀行はこの資本を更らに銀行券の形で公衆に貸附くることに依り、これを以つて貨幣を鑄造するの權能を議會から授けられた。更らに、この銀行券を以つて、手形を割引し、商品に相當に取り、貴金屬を買込むことも許されたのである。而してイングラント銀行自身に依つて製造されたこの信用貨幣は、やがて同銀行が國家に貸附をなし國家の計算を以つて公債の利子を支拂ふ所の鑄貨となつた。一方の手で與へ他方の手でヨリ多くを受け戻すといふことだけでは、イングラント銀行にとつてまだ十分でなかつた。一方に受け戻しつ、前貸した最後の一錢に至る迄も國民の永久的債權者となつてゐたのである。イングラント銀行は次第にイギリスに於ける退城金屬の避け難き容器となり、商業上の凡ゆる信用の重力中心となつた。イギリスでは、魔女を焚殺することが廢された恰度その頃に、銀行券の製造者を絞殺することが行はれ始めたのである。銀行間や金融業者や貸子生活者や仲買人や投機師や株式取引人などといふ一團の突如たる勃興が、同時代の人心に如何なる影響を及ぼしたかは、當時に於ける諸種の文獻(例へばボリングブロークの著書)に示されてゐる所である(二百四十三b)。

(二百四十三b)『今日、韃靼人がヨーロッパに溢れて來たとして、その場合、ヨーロッパの金融業者とは果して如何なるものであるかを彼等に理解せしむるには、可なりな努力を要するであらう』(モンテスキュー著『法の精神』ロンドン版一七六九年刊、第四卷、第三三頁)。

國債の出生と共に、また國際的の信用制度が成立した。ここにも亦、或はこの國民、或はかの國民に於ける本來的蓄積の源泉が包藏されてゐることは、屢々見る所である。例へば、ヴェネチアに於ける盜掠制度に伴ふ諸種の卑劣行爲は、オランダの資本的富に對するこの種の隠れたる一基礎と成つたものであつて、壊滅に瀕したヴェネチアは巨額の貨幣をオランダに貸附けてゐたのである。オランダ對イギリスの關係も同様であつた。十八世紀の初葉に至り、オランダのマニユファクチュアは遙かに凌駕されてしまひ、オランダはもはや優越な商工國ではなくなつた。斯くて莫大な資本をば、他國、殊にヨリ優勢な競争者たるイギリスに貸出すことは、一七〇一年から一七七六年に至るオランダの主なる營業の一となつたのである。同様の關係は、今日イギリスとアメリカ合衆國との間にも見られる。今日、アメリカ合衆國に見出される出生の明かでない澤山の資本は、昨日迄は資本化された兒童の血としてイギリスに存在してゐたものである。

國債は、利子その他についての年々の支拂を支辨すべき國庫收入を支柱とするものであるから、近世の租稅制度は必然にまた、國債制度の缺くべからざる補充となつたのである。政府は國債に依り、納稅者には直接感知せしめずして臨時費を支辨し得るに至るのであるが、その結果は、増稅を必要ならしめることになる。他方にまた、次から次へと負債が累積されて、増稅を避け難くする結果、政府は新たな臨時費に對して絶えず新たな公債を募集せざるを得なくなつて來る。されば、最必要の生活資料に對する租稅（隨つてまた、斯かる生活資料の價格昂騰）を樞軸として回轉する近世の國家財政は、それ自身の裡に自動的進行の脈種を藏してゐる。租稅の過重は、一の附隨事件ではなくて、寧ろ一の原則なのである。さればこそ、この制度を初めて採用した國家なるオランダの大愛國者ド・ウキットは、彼れの金言の中に激賞を與へて、これ正に賃銀労働者を從順、節儉、勤勉ならしめると同時に、彼等に過度の労働をもなさしむる最良の制度だと言つたのである。だが、この制度が賃銀労働者の状態に及ぼす破壊的影響よりも、當面の場合我々にとつてもつと重要なことは、この制度を通して小農民、手工業者等、小中等階級の凡ゆる分子の上に強行される所の收奪これである。この後ちの現象については、二つの相異つた見解は存在して居らぬ（ブルジョア經濟學者の間にさへも）。この方面に於ける收奪的の效力は更らに、斯かる制度の必須要素の一なる保護制度に依つて力を加へられるのである。

公債及びそれに照應せる國家財政制度が、富の資本化と民衆に對する收奪との上に大きな役割を演ずるといふ事實から、コ

ベット、ダブルデーその他多くの著述家たちは、近世に於ける民衆窮乏の根本原因をこの點に求めるといふ不當に陥つた。保護制度は、製造業者を製造し、獨立労働者から收奪し、國民的の生産機關及び生活資料を資本化し、且つ古代的生産方法

から近世的生産方法への推轉を強行的に短縮する所の人爲的な手段であつた。ヨーロッパの諸國はこの發明の特許を得んとして嘸み合つた。而して彼等は、一度び貨殖家の下に奉仕するに至るや、間接には保護税、直接には輸出プレミアムなどに依つて、この目的のために自國民を誅求するといふのみには止まらなかつた。彼等は更らに、例へばイングラントがアイルランドの羊毛マニユファクチュアに對してなした如く、屬領の産業をも悉く強行的に根こぎにしてしまつたのである。ヨーロッパ大陸に於いては、この行程はコアベットの先例に倣つて極めて單純化された。ヨーロッパ諸國に於ける本來の工業的資本は、一部分には直接國庫から流れ來たつたものである。ミラボーは叫んで曰く、『七年戦争前に於けるザクゼンのマニユファクチュア的光輝の原因をば、何故しかく遠き處に求めんとするか？ 一億八千萬の國債！』(二百四十四)と。

(二百四十四) ミラボー著『プロセイン君主國』ロンドン、一七八八年刊、第六卷、第一〇一頁。

植民制度、國債、重税、保護制度、商業戰など——嚴密の意味のマニユファクチュア時代に於ける此等の嫩芽は、大工業の幼少期に及んで巨大なものに成長して來る。大工業の誕生は、ヘロデ王の大掛りな兒童掠奪に依つて祝される。イギリスの工場は海軍と同じく、強募に依つて新兵を集めた。サー・フレデリック・モルトン・イーデンは、十五世紀七十年代から彼の時代たる十八世紀終末にかけて行はれた、農民からの戰慄すべき土地收奪に樂しみ疲れ、資本制的農業と『耕地及び牧場間の適當なる比率』とを與へるに『必要』なこの行程をば、自己満足的に視迎してゐるにも拘らず、マニユファクチュア經營を工場經營に轉化し且つ資本と勞働力との間に眞の關係を樹立するために兒童の掠奪と奴隸化とを必要とするといふ事實については、同一な經濟的洞察を示して居らぬのである。

彼れは曰く『昏困なる兒童の居住する小屋や勞働する作業場を捲上げること、夜間の大部分に互つて彼等を交代的に就業せしめ、何人にも必要であるが就中彼等にとつて最も必要な休息を奪ひ取り、様々の年齢や性癖の多數男女を狭き處に密集せしめ、以つて放埒や淫蕩の感染を助長すること——此等の條件を成功上必要とする一のマニユファクチュアに依つて、果して個人的又は國民的の福祉が増進せしめられ得るか否かといふ問題は、恐らく公衆の考慮に値する所であらう。(二百四十五)』と。

(二百四十五) イーデン著『貧民の状態』第二部、第一章、第四二一頁。

フキールデンは曰く、『ダービシャー、ノッチンガムシャー諸州、特にまたランカシャー州に於いては、水車を運轉し得る河流に沿うて大工場を設け、其處に新發明の機械を採用することになつた。都市から遠く隔つた此等の地方に於いては、突然に幾千の職工を必要とした。殊に當時人口が比較的稀薄であつた不毛礫角なランカシャー州に於いては、今や人口が、必要とされる所

の一切となるに至つた。就中、幼童の小さな敏活な指を最も必要とした。そこで、ロンドンやバーミンガムその他の方面に於ける貧民收容所から徒弟(一)を得る習慣が忽ちにして起つて來た。斯くして七歳から十三乃至十四歳に至る此等幾千の頼りなき兒童が北方へ輸送されることになつたのである。徒弟に衣食を給し彼等を工場附近の「徒弟小屋」に宿泊せしむることが、主人(換言すれば兒童盜人)の習慣となつてゐた。徒弟の労働を監督すべき取締人が置かれた。兒童を精一杯に働かせることは、此等の取締人の利益とする所であつた。なぜならば、彼等の受くる給料の額は、彼等が強搾し得る労働の量に比例することになつてゐたからである。その必然の結果として殘虐が行はれた。……多くの工場地方、殊に私の住むランカシャー州に於いては、斯くして工場主の手に委せられた無辜の寄る邊なき兒童に對し苛酷な虐待が與へられた。彼等は労働過度に依つて、死する迄に苦しめられ、……極めて精巧な殘酷を以つて鞭打たれ、桎梏を嵌められ、苛責された。鞭を以つて勞役を強いられ、死するとき骨の髓まで餓え抜いてしまふといふ場合が多かつた。……斯くして遂には自殺を餘儀なくされた者もある。……ダービーシャー、ノッチンガムシャー及びランカシャー諸州の人里離れた美しい浪漫的な谿谷は、苛責と幾多殺人との陰慘な寂寞境と化した。工場主の利潤は莫大であつた。而もこの利潤は、それに依つて充たさるべき欲望を更らに刺戟したに過ぎぬのである。斯くて工場主は、何等制限の可能もなく此等の利潤を保障せしむる如く見える一策に頼つた。即ち彼等は夜間就業を實行し始めたのである。一の組の労働者を終日過勞せしめた後、引續き他の組の労働者をして終夜過勞せしめるといふ制度が實れである。この制度の下に、晝勤者は夜勤者の去つた許りなベッドに入り、夜勤者はまた晝勤者の去つた許りなベッドに入るといふ有様で、ベッドの冷める時がないといふことは、ランカシャー州一般の習慣となつた(二百四十六)と。

(二百四十六) ジョン・フキールデン著『工場制度の呪咀』 ロンドン、一八三六年刊第五及び六頁、工場制度本來の醜態について、ドクター・ジョン・エーキン著『マンチェスター周圍三十乃至四十哩地方の叙述』(ロンドン、一七九五年刊、第二一九頁)及びトマス・ギズボルン著『人類義務の研究』(一七九五年刊、第二卷)を参照せよ。蒸氣機關は工場を農村の落流から都市の中心に移轉せしめた。その結果、節慾的な貨殖家は最早、貧民收容所から強制的の奴隷供給を受けるまでもなく、手近かに兒童材料を見出し得るやうになつた。——サー・ロバート・ピール(『口巧者の大臣』の父)が、一八一五年に兒童保護案を提出したとき、フランシス・ホーナ(地金委員の光明にしてリカルドの親友たる人)は下院に言明して曰く、『或る破産者の有價物件と共に、此等の兒童の一隊(若し斯ういふ言葉を使ふことが許されるとすれば)が販賣に附せられ、財産の一部として公然廣告されたことは、普く知れ渡つた事實である。二年前に、極めて厭ふべき一事件がイギリスの高等法院刑事

裁判廷に持ち出された。それはロンドンの或る教區から或る工場主に徒弟として送られ、更らに他の工場主に移轉されたこの種の多數な兒童に關する事件であつて、此等の兒童は絶對的の餓死に陥つてゐることを若干の慈悲深い人々に依つて見出されたのであつた。いま一つ、もつと恐ろしい事件が議院委員たる私の知る所となつた。それは即ち、健全なる兒童二十人中には平均、白痴者が一人含まれてゐることを見越した兒童賣買契約が、ロンドンの一教區とランカシャー州に於ける工場主との間に先年締結されたといふ事實である。

マニユファクチャーの時代に資本制生産が發達するにつれて、ヨーロッパの輿論からは廉恥心と良心との最後に残つた部分までも失はれてしまつたのである。ヨーロッパの諸國民は、資本蓄積の手段たるべき凡ゆる醜行爲をも皮肉に自慢するやうになつた。例へば、一紳士アダム・アンダーソンの素朴な商業年鑑を讀め。彼れはその中で、從來アフリカと英領西インドとの間にのみ行はれてゐた奴隸貿易を爾後アフリカと英領アメリカとの間にも行ひ得るやうにした特權をば、ウトレヒト媾和條約に依り一七一三年の英西條約を以つてスペイン人から強取した事實を、イギリスの國策の勝利なりとして吹聴してゐる。イギリスは、一七四三年に至るまでスペイン領アメリカに年々四千八百人の黑人を供給する權利を取得した。が、これはまた同時に、イギリスの密輸出入について政府の與へた假面ともなつたのである。リヴァプール市は奴隸貿易を基礎として繁榮した。奴隸貿易は同市に於ける本來的蓄積の方法たりしものである。而して今日に於いても尙、リヴァプールの『體面』は、『同市の商業を急速に現在の繁榮状態に達せしめたその特徴的な冒險心と一致し、且つ航運業と海員とに莫大の就業を與へ、イギリスの工業に對する需要を著しく増大せしめた』(二百四十六) 奴隸貿易についての、ピンダーの抒情詩人たる點に存してゐるのである。リヴァプールで奴隸貿易のために利用された船舶は、一七三〇年には十五艘、一七五一年には五十三艘、一七六〇年には七十四艘、一七七〇年には九十六艘、一七九二年には百三十二艘であつた。

(二百四十六) ドクター・ニーキン前掲參照。

木綿工業はイギリスに兒童奴隸制度を實施せしめたのであるが、アメリカ合衆國に於いては、それは従前多かれ少なかれ家父長制的であつた奴隸制度をば商業的の搾取制度に轉化せしめる刺戟となつた。ヨーロッパに於ける賃銀労働者の隠蔽された奴隸制度は、總じてアメリカに於ける蔽ふ所なき奴隸制度をば脚臺に必要としたものである(二百四十七)。

(二百四十七) 一七九〇年、英領西インドに於いては自由民一人に對して奴隸十人、佛領西インドに於いては自由民一人に對して奴隸十四人、蘭領西インドに於いては自由民一人に對して奴隸二十三人の比率であつた。(ヘンリー・ブルーム著『ヨ

ロッパ列強の植民政策研究』エヂンバラ、一八〇三年刊、第二卷、第七四頁(五)。

資本制生産方法の『永遠の自然律』を展開せしめて、労働者と労働条件との分離行程を完成し、一方の極に於いては社會的の生産機關及び生活資料を資本に轉化せしめ、他方の極に於いては民衆を賃銀労働者(近世史の人為的産物たる自由な『労働貧民』(二百四十八)に轉化せしめるためには、この種の思ひ切つた努力を要したのである。貨幣が若しオーヂェーの言ふ如く「一方の類に生來の血痕を帯びてこの世に來たつた(二百四十九)ものであるとすれば、資本は頭の天邊から足の爪尖に至る總べての毛孔から血と汚物を滴らしつこの世に來たつたものと言ひ得るのである(二百五十)。

(二百四十八)『労働貧民』といふ言葉は、賃銀労働者階級が人の注意を引くやうになつたときからイギリスの法律に現れて來たものである。『労働貧民』なるものは、一方には『遊惰の貧民』たる乞食などと、他方には尙未だ他人から搾取されるに至らない、己れ自身の労働要具の所有者たる労働者と對立してゐる。この『労働貧民』なる語は、法律から經濟學に移轉されて、カルペパー、ジョサイア・チャイルド等よりアダム・スミス、イーデンにまで及んだ。この事實に従つて、『労働貧民』なる語をば『呪ふべき政治上の言葉』なりとした『呪ふべき經濟學上の用語製造業者』エドマンド・パークの善意を評價せよ。イギリスの寡頭政府に雇はれてフランス革命に對し浪漫主義者たる役割を演じたり、或はまたアメリカ動亂の初期、北アメリカ植民地に雇はれてイギリスの寡頭政府に對し自由主義者たる役割を演じたりしたこの阿諛者は、徹頭徹尾、凡庸なブルジョアであつた。『商業の法則は自然の法則であり、隨つて神の法則である』(エドマンド・パーク著)『飢饉に關する見解及び委曲』ロンドン版、一八〇〇年刊、第三一及び三二頁)。彼れが神と自然との法則に忠であつて、つねに我が身を最も有利な市場に繋いでゐたことは、怪しむを須むないのである！ 牧師タッカー(僧侶にしてトリー派に屬してゐたが、他の點では端正な人物であり、堪能な經濟學者であつた人)の文章の中には、自由主義者であつた當時に於けるこのエドマンド・パークについての絶好な特徴描寫が見出される。極めて敬虔に『商業の法則』を信仰する所の恥づべき無節操は、今日に於いても夢つてゐるのであつて、これがため繰返し繰返し新しいパークを發賣することが義務となつてゐる。古いパークと新しいパークとの違ふ所は、ただ才能といふ一點のみである！

(二百四十九) マリー・オーヂェー著『公債』パリ、一八四二年刊(六)。

(二百五十) 『資本は混亂と紛擾とを避け性質極めて臆病なものであるとは、クォーターリ・レビュー記者の言ふ所である。これは、極めて適切な言ひ現しであるが、眞理の全面を穿つたものとはいへない。自然は眞空を怖れるといはれてゐたが、

恰度それと同様に、資本は利潤なき處を怖れるのである。適當な利潤があれば、資本は極めて大膽である。一割の利潤が確實であれば、資本は何處に於いても充用され得べく、二割の利潤があれば活潑となり、五割の利潤があれば積極的に大膽となり、十割の利潤があれば人間の定めた一切の法律を蹂躪し、三十割の利潤があれば如何なる犯罪をも顧慮せず、所有者が死に所せられる危険をも辭しないのである。若し混乱と紛擾とが利潤を齎らすとすれば、資本は自由はこの兩者を獎勵するであらう。密輸入と奴隸貿易とは、茲に述ぶる所を十分に證明せるものである。(ビー・ジェー・ダニング著「労働組合と罷工」ロンドン、一八六〇年刊、第三六頁)。

(七) 資本制蓄積の歴史的傾向

資本の本來的蓄積、換言すれば資本の歴史的發生とは、畢竟、如何なることに歸著するか？ それは奴隸及び農奴の賃銀労働者への直接的轉化を、即ち單なる形態變化をいふのでない限り、直接的の生産者からの收奪を、換言すれば生産者自身の労働に立脚した私有の解體を、意味するに過ぎぬのである。

社會的、集合的の所有に對立したものである。私有は、労働要具及びその他の外部的労働條件が私個人の所有に屬する處にのみ成立するものである。然し、この私個人が労働者であるか、又は非労働者であるかの如何に従つて、私有も亦異つた性質を帯びて来る。最初に私有を一旦見したとき認められる無數の濃淡は、この兩極の間に存在する諸種の間状態を反射するものに過ぎぬのである。

労働者が彼れの生産機關を私有することは、小經營の基礎であり、而して小經營なるものは、社會的生產と労働者自身の自由なる個性との發展上に必要なる一條件である。この生産方法は、奴隸制度、農奴制度、及びその他の隷従事情の内部にも存在することは事實であるが、然しそれが滿開し、全精力を奔放せしめ、適當なる典型的の形態を採るやうになるのは、労働者が已れ自身の運用する労働條件——即ち農民ならば已れ自身の耕す土地、手工業者ならば彼れ自ら専門技術者として取り扱ふ器具——の自由なる私有者たる處に限られるのである。

この生産方法は、土地及びその他の生産機關の分散を前提する。此等の生産機關の集積も、また協業や、同じ生産行程の内部に於ける分業や、自然に對する社會的の支配及び統制や、社會的生產力の自由なる發展やも、この生産方法の下に排除される。それは、生産及び社會の狹隘なる原生的制限とのみ兩立するものである。この生産方法を永久に存續せしめんとするのは

これ即ち、ペクトールが適切に言つてゐる如く『二般的の凡庸を勵行する』ものであらう。この生産方法は一定の發達程度に達すると、己れ自身を破壊する所の物質的手段を齎らす。その瞬間以後、社會の胎内には諸種の力と情熱とがどよめき始める。が、此等のものは、この生産方法のために束縛されてゐることを感ずる。そこで、これを破壊せねばならぬ。それは破壊されるのである。この破壊こそ、換言すれば個人的分散的な生産機關の、社會的に集積された生産機關への轉化、隨つてまた、多數人の株傭的所有の、少數人の大量的所有への轉化、隨つてまた、民衆の土地と生活資料と勞働器具との收奪——民衆に對するこの恐るべき苛酷な收奪こそ、資本史の序曲たるものである。この收奪は一連の強力的方法を包含するものであつて、その中の劃時代的なものだけを、我々は、資本の本來則蓄積の方法として考察したのである。直接の生産者からの收奪は、無慈悲極まる兇暴を以つて、最も恥づべき、最も醜惡な、最も卑陋にして忌はしき慾念の衝動の下に遂行された。己れ自身の努力に依つて得た所の、謂はば個々獨立した勞働個體と彼れの勞働條件との融合に立脚する所の私有は、他人の形式的に自由な勞働の搾取に立脚する所の資本制的私有に依つて驅逐される(二百五十一)。

(二百五十一)『我々は全く新たな社會的事務の下に生存してゐる。……即ち、我々は各種の所有をば、各種の勞働から分離しようとしてゐるのである』(シスモンデ著『經濟新原論』第二卷、第四三四頁)。

この轉形行程が、舊來の社會をば深さに於いても廣さに於いても十分に分解させてしまふや否や、勞働者がプロレタリアに轉化され、彼等の勞働條件が資本に轉化されるや否や、資本制生産方法が自己の脚を以つて立つやうになるや否や、勞働の更らに進んだ社會化、及び土地その他の生産機關の、社會的に利用される所の、隨つて共同的たる所の、生産機關への更らに進んだ轉化、隨つてまた、私有者からの更らに進んだ收奪は、一の新たなる形態を探るやうになる。今や收奪を受ける者は、もはや自家經營的の勞働者ではなく、多くの勞働者を搾取する所の資本家なのである。

この收奪は、資本制生産それ自身の内在的法則的作用たる資本の集中に依つて完成される。つねに一人の資本家が多くの資本家を打ち殺すのである。この集中、換言すれば少數資本家に依る多數資本家からの收奪と相並んで、勞働行程の益々大規模となりつつある協業の形態、科學の意識的な技術的應用、土地の計畫の利用、勞働要具の共同的にのみ利用し得べき勞働要具への轉化、凡ゆる生産機關を結合的社會的なる勞働の生産機關として使用することに依る節約、凡ゆる國民が世界市場の網に絡められるといふ事實、それと共にまた資本制度の國際的性質、等——此等一切の事象が發達して來るのである。この轉形行程に伴ふ一切の利益を横奪獨占する大資本家の數が益々減少すると同時に、窮乏や、壓迫や、隸従や、壞類や、搾取などの量益々

増大して来る。が、それと共にまた、資本制生産行程それ自身の機構に依つて訓練、統合、組織される所の、不斷に膨大しつつある労働者階級の反抗が増進する。資本獨占は、それと共に、またその下に、開花繁榮した生産方法の桎梏となる。生産機關の集中と労働の社會化とは、その資本制的外設とは兩立し難き點に達する。資本制的外設は破裂する。資本制の私有の終焉を告ぐる鐘が鳴る。收奪者が收奪される。

資本制生産方法から生じた資本制占有方法、随つて資本制的の私有は、生産者自身の労働を基礎とする個人的私有に對する第一の否定である。が、資本制生産は、一の自然行程の必然性を以つて己れ自身の否定を造り出す。これ即ち、否定の否定である。この否定は、私有を復興するものではない。が、然し、資本制時代の獲得物たる協業や、並びに土地と労働それ自身に依つて生産された生産機關との共有や、それらのものを基礎とする所の個人的所有を造り出すことは確かである。

個々人の自家労働に立脚した分散的私有の資本制的私有への轉化は、事實に於いて既に社會的生產經營を基礎としてゐる資本制所有の、社會的所有への轉化に比すれば、比較にならぬほど彌久的で、ぎこちなき、且つ困難な一行程であることは言ふまでもない。前者に於いては、少數横領者に依る民衆からの收奪が問題であり、後者に於いては、民衆に依る少數横領者からの收奪が問題なるが故である(二百五十二)。

(二百五十二)『ブルジョアを無意志にして無抵抗なる負擔者とする産業の進歩は、競争に依る労働者の相互隔絶に代ふるに、協業に依る彼等の革命的結合を以つてするものである。斯くて大工業が発達するに従ひ、ブルジョアが生産を督み、生産物を占有してゐた基礎は、ブルジョア自身の脚下から奪ひ去られることになる。即ち、ブルジョアは、何よりも先づ、己れ自身の墓州人を生産してゐる譯である。ブルジョアの没落と、プロレタリアの勝利とは、共に均しく不可避的なものである。……今日ブルジョアに對立してゐる各種階級の中で、現實に於いて革命的なのは、ひとりプロレタリアのみである。他の諸階級は大工業の出現と共に壞滅し消滅する。プロレタリアは大工業の最も嚴密の意味の産物なのである。……中流階級たる小産業經營者や、小商人や、手工業者や、小農民など——彼等はいづれも中流階級としての存在の消滅を防ぐためにブルジョアと抗争してゐるのである。……彼等は歴史の車輪を逆轉せんとするものなるが故に反動的である』(カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス共著『共產黨宣言』ロンドン、一八四七年刊、第九及び一一頁)。

第二十五章 近世植民説

經濟學は、原則上極めて相異つた二種の私有を混同してゐる。その一は生産者自身の勞働に基くものであり、他は他人の勞働の搾取に基くものである。後者は單に前者の正反對たるのみではなくまた全く前者の稟上のみ發育するものであることは經濟學の忘れてゐた所である。

經濟學の郷國たる西部ヨーロッパに於いては、本來的蓄積の行程は既に多かれ少なかれ完成された。資本制度は國民的生産の全部を既に直接征服した。又は、事情が其處まで發展して居らぬ處にあつては、少なくとも間接に、資本制生産方法及と相並んで存続し而も壞滅に向ひつつある所の、陳套に歸した生産方法に屬する諸種の社會部屬を支配してゐるのである。この完成した資本世界に於いては、經濟學者は事實に依つて彼れの觀念世界が面詰されるればされる程、ますます氣遣はしげな熱心と執拗とを以つて、資本前期の世界に屬する權利及び所有の觀念を應用するといふ有様である。

植民地(二百五十三)に於いては、さうでない。資本制度は其處では到る處、生産者の障礙に逢著するのである。植民地に於ける生産者は、己れ自身の勞働條件の所有者として、己れ自身の勞働に依り、己れ自身を富ましてゐるのであつて、資本を富ましてゐるのではない。この兩極的に相對立した二つの經濟制度の矛盾は、植民地に於いては實際に兩者間の抗争として發動してゐるのである。資本家は、母國の權力を背後に有してゐる處では、生産者自身の勞働に基く生産方法及び占有方法を強行的に一掃しようとする。資本の阿諛者たる經濟學者をして母國に在つては資本制生産方法を稱して理論上その反對物なりと言はしむる、その同じ利害關係が、植民地に在つては彼れをして、ありの儘を白狀し『この兩生産方法の對立を聲高く宣明せしめる。この目的のために彼れば、社會的勞働生産力の發達を齎らす所の協業や、分業や、機械の大規模充用などが、勞働者からの收奪及びそれに伴ふ生産機關の資本化なくしては如何に不可能であるかを論證する。彼れは國富と稱するものために、國民の貧困を生ぜしむる人工的手段を求めてゐる。彼れの辯護論的な甲冑は、この場合、腐つた火絨の如くボロ／＼にくつれしまつてゐるのである。

(二百五十三) 茲に問題となるのは眞の植民地(即ち自由なる移住者に依つて拓殖される處女地)である。アメリカ合衆國は、經濟上からいへば依然としてヨーロッパの植民地たるを失はぬ。然しまた、其處には、奴隸制度の廢止に依つて事情の一變

した舊來の拓殖地も含まれてゐるのである。

植民地について何等の新たな発見をもなさなかつたとはいへ(二百五十四)、而も植民地の裡に母國の資本制事情に關する眞理を發見したことは、エドワード・ギボン・ウエーキフキールドの偉大なる功績である。保護制度なるものが、本來をいへば(二百五十五)母國に資本家を造り出さんと努めたものである如く、イギリスが一時、立法に依つて實行しようとしたウエーキフキールドの植民説は、植民地に賃銀労働者を造り出さんとしたものである。彼れは、これを「體系的の植民(1)」と名づけてゐる。

(二百五十四) 植民地そのものの本質に關する、ウエーキフキールドの幾許の炯眼は、フキジオクラットたる父ミラボーに依り、更らに久しき以前に在つてはイギリスの經濟學者たちに依つて、全く先鞭をつけられてゐたものである。

(二百五十五) 保護制度は後に至り國際的競争戰に於ける暫行的の一必要となつて來る。されど、動機はどうであらうとも結果に變化はない。

ウエーキフキールドは先づ、植民地に於いて次の事實を發見した。即ち、何人も貨幣や、生活資料や、機械その他の生産機關を所有すればとて、その補充たるべき賃銀労働者(自發的に己れ自身を販賣することを強制される人)を缺く時は、資本家たるを得ないといふことである。資本は一の物ではなく、物の媒介に依つて與へられる人と人との間の一の社會的關係であることは、ウエーキフキールドの發見した所である(二百五十六)。彼れは、ピール君が五萬磅の價ある生活資料や生産機關を、イギリスから西オースタラリアのスワン・リヴァーに携へて行つたことを嘆じてゐる。ピール君はほかに尙、労働階級の成年男女や兒童三千人をも携へて行くほど用意周到であつた。而も一度び目的地に達するや、『ピール君はベッドを支度したり、河から水を汲んで來たりする一人の奴婢も居らぬ状態に置かれた』(二百五十七)のである。何もかも用意したが、ただ一つ、イギリスの生産事情をスワン・リヴァーに輸出することだけを忘れた不幸なるピール君よ!

(二百五十六) 『一の黒人は一の黒人である。一定事情の下に置かれたとき、彼れは初めて奴隸となるのである。一の木綿紡績機械は木綿を紡績する所の一機械である。一定事情の下に置かれたとき、それは資本となるのである。この事情から裂き離されたとき、それは資本でないこと、恰も金がそれ自身に於いては貨幣でなく、砂糖が砂糖の價格でない如くである。……』

資本は一の社會的生產關係である。それは、一の歴史的生產關係なのである(拙稿『賃銀労働と資本』一八四九年四月七日『新ライン新聞』第二六六號所載)。

(二百五十七) エドワード・ギボン・ウエーキフキールド著『イギリスとアメリカ』第二卷、第三三頁(註)。

左に掲ぐるウエーキフキールドの發見を理解し易くするため、豫め二つの事項を述べて置く。(一)生産機關や生活資料は、それが直接的生産者の所有に屬する限り資本でないことは、我々の知る所である。それは労働者に對する搾取手段たると同時に支配手段としても役立つ條件の下に置かれたとき、初めて資本となるのである。然るに、生産機關及び生活資料のこの資本的靈魂は、經濟學者の腦裡に於いては此等の物の素材的實體と極めて密接に結合されてゐる。そこで、此等の物は、如何なる事情の下にも、それが資本とは正反對なものである場合にも、資本と名づけられることになるのである。ウエーキフキールドに於いてもさうである。(二)更らに彼れは、生産機關が相互獨立した多數の自家經營的労働者の個人的所有物として分散される事實を、資本の均分と名づけてゐる。經濟學者のなす所は、恰も封建的法學者のなす所の如くである。後者は純粹の貨幣事情に對しても、封建的の法律標箋を貼りつけたのであつた。

ウエーキフキールドは曰く『若し社會の一切成員が等量に資本を有するとすれば、……何人も自己の手を以つて充用し得るよりも多くの資本を蓄積しようとする關心を有たぬことになるであらう。而もこれ、或る程度まではアメリカの新植民地に行はれてゐる所であつて、其處では土地所有の熱望が賃銀労働者階級の存在を妨げてゐるのである』(二百五十八)と。

(二百五十八) 前掲、第一卷、第一七及び一八頁。

要するに、労働者が己れ自身のために蓄積し得る限り(而して彼れはその生産機關の所有者たる限り、斯くすることが出来るのである)資本制的の蓄積並びに生産方法は不可能なのである。そのために必要缺くべからざる賃銀労働者階級が、缺けてゐるからである。然らば、舊ヨーロッパに於いては、如何にして労働者からの労働諸條件の收奪が行はれ、如何にして資本と賃銀労働とが並立するに至つたか? 曰く、全く斬新な種類の社會契約に依つて。『人類は……資本の蓄積を促進する單純な方法を採用した。』この方法は勿論、アダムの時代から、人類生存の終局的な唯一の目的として、人類の想像に浮んでゐたものである。即ち『人類は資本の所有者と労働の所有者とに分割された。……而してこの分割は、協約と結合の結果として行はれたものである』(二百五十九)。

(二百五十九) 前掲、第一八頁。

一言でいへば、人類の多數は、『資本の蓄積』の名譽のために己れ自身から收奪したのである。そこで、次の如く考へられて来る。即ち、この克己的狂熱の本能は、就中、植民地に於いて奔放的に發動すべき筈である。蓋し一の社會契約を夢想か

ら現實境に移轉せしめ得べき人類と事情とは、ひとり植民地にのみ存在してゐるからであると。けれども、それにしては何故原生的植民に對立した意味で『體系的植民』なるものを提唱するのであるか？ だが、だが、『アメリカ聯合國の北部諸州に於いて、貧賤労働者の部類に屬する人口が果して總人口の十分の一に達するか否かは疑はしい。…イギリスに於いては：人口の大部分は賃銀労働者から成つてゐる』(二百六十)。

(二百六十) 前掲、第四二、四三及び四四頁。

労働人類が資本の名譽のために自己收奪の衝動などといふものは、事實に於いて存在するものでない。さればこそ、ウエーキフェールド自身も、奴隸制度は植民地に於ける富の唯一の原生的基礎だとしてゐるのである。彼れの體系的植民なるものは單なる應急策に過ぎぬ。彼れの問題となつてゐる所のは、自由民であつて奴隸ではないからである。『サン・ドミンゴに最初植民したスペイン人は、スペインから何等の労働者をも受けなかつた。が、労働者〔換言すれば奴隸制度〕がないとすれば、資本は消滅したに相違ない。少なくとも、各個人が己れ自身の手で充用し得る所の少額なものに收縮してしまつたに相違ない。これは現實に於いて、イギリス人の建設した最後の植民地(スワン・リヴァー植民地)に見られた所である。この植民地に於いては、種子や、器具や、家畜などの形を採つた巨額の資本は、賃銀労働なきために亡びてしまひ、如何なる植民者も己れ自身の手で使用し得るよりも以上の資本は所有しなかつたのである』(二百六十一)。

(二百六十一) 前掲、第二卷、第五頁。

民衆からの土地收奪が、資本制生産方法の基礎をなすことは、我々の既に見た所である。然るに、自由植民地の本質とする所に、土地の大部分が民衆の所有に屬し、隨つて各植民者はその一部を己れ自身の私有及び個人的生産機關に轉化するを得て、而も後來者が同一のことをなすのを妨げるといふ點に存してゐるのである(二百六十二)。この事實こそ、植民地の繁榮及び癩症(資本植民に對する反抗)の秘密なのである。『土地は極めて價安く、萬人は自由であり、何人も欲する儘に自己の土地を獲得し得ること容易なる處にあつては、單に労働の價が非常に高い(己れ自身の生産物に對する受分についていふ)といふのみではなく、如何なる代價を以つてしても結合労働を得ることが困難なのである』(二百六十三)。

(二百六十二) 『植民の要素たるためには、土地は未耕地たるを要するのみでなく、更らに私有に轉化し得べき公有たることを要するのである』前掲、第二卷、第一二五頁)。

(二百六十三) 前掲、第一卷、第二四七頁。

労働者が労働條件並びにその根柢たる土地から分離されるといふ事實は、植民地には未だ存在せず、或は單に此處彼處、又は餘りに局限された範圍にのみ存在するに止まり、農工業の相互分離も、農村家庭的産業の破壊も、尙未だ存在して居らぬのである。斯かる植民地に於いて、資本のための國內市場なるものは、果して何處より來たり得るであらうか？ 『特殊の經營に於いて資本及び労働を結合してゐる奴隸とその使用主とを除くほか、専ら農業にのみ従事してゐる人民はアメリカには存在して居らぬのである。土地耕作に従事する自由なアメリカ人は、同時に他の幾多の職業にも従事する。彼等が使用する家具や道具の一部は、通例、彼等自身に依つて製造される。彼等はまた己れ自身の家屋を建築することも、往々にして見る所である。如何なる距離をも辭することなく、彼等は自己の造つた生産物を市場に運搬してゆく。彼等は紡績業者であると同時に襪織業者でもある。彼等は石鹼や蠟燭を造り、家用の靴や衣類をさへ造ることがある。アメリカに於いては、土地耕作は屢々、鍛冶匠や、磨穀業者や、小賣商人などの副業となつてゐるのである』(二百六十四)。斯かる珍妙な人々の間に於いて、資本家にとつての『節慾の餘地』なるものは、果して何處に存するであらうか？

(二百六十四) 前掲、第二及び三頁。

資本制生産の大なる美點は、賃銀労働者を賃銀労働者として不斷に再生産するといふ點のみでなく、また資本の蓄積に比例して常に賃銀労働者の相對的過剩人口を生産するといふ點にも存してゐる。これがため、労働の需給律は正しき軌道を守り、賃銀の變動は資本制搾取の目的に一致した限界内に拘束せられ、最後にまた、資本家にとつて必要不可欠の條件たる労働者の社會的隷從——母國の經濟學者が甘言を以つて購買者と販賣者との自由なる契約關係に、おの／＼同等に獨立した商品所有者である所の、資本といふ商品の所有者と労働といふ商品の所有者との、自由なる契約關係に、欺き變へ得る絶對的の隷從關係——が確保されることになる。が、植民地に於いては、この美しき妄想は裂き割られてしまふ。其處では多くの労働者が出來合の成人としてこの世に來たる故、母國に比べると絶對的人口の増殖は遙かに急速である。而も、労働市場は常に供給不足を告げてゐる。労働の需給律は破れてしまふ譯である。一方に、舊世界からは、搾取を渴望し節慾を要求しつゝある資本が不斷に投げ込まれる。他方に、賃銀労働者を賃銀労働者として規則正しく再生産することは、極めて不躱な、或る程度までは打克ち難き障礙に逢著する。然らば、資本の蓄積に應じて過剩の賃銀労働者が生産されるといふ問題は如何？ 今日賃銀労働者は、明日は獨立自營の農民又は手工業者となつてしまふ。彼れは労働市場から消えて行く。が、貧民收容所の内に消えて行くのではない。賃銀労働者が斯く資本のためではなく自分自身のために労働して、主人たる資本家ではなく自分自身を富ませる所の獨

立生産者に轉化されるといふ事實は、労働市場の状態に極めて有害な反應作用を及ぼす。單に、賃銀労働者に對する擧取程度が不體裁に低微だといふのみではない。尙また、賃銀労働者は節慾的の資本家に對する隷從關係を失ひ、それと共に隷從心をも失つてしまふのである。我がエドワード・ギボン・ウエーキフィールドに依つて、あの様に勇敢に、雄辯に、哀嘆的に、描述されてゐる所の惡弊なるものは、總べてこの點に由來してゐるのである。

彼れは、賃銀労働の供給が不斷的でなく、規則正しくなく、且つ十分でないことを嘆じてゐる。『賃銀労働の供給は常に過少たるのみでなく、また不確實でもある』(二百六十五)。『資本家と労働者との間に分配さるべき生産物は大であるとはいへ、労働者は極めて大きな分け前を受け、忽ちにして資本家となつてしまふ。……而も、巨額の富を蓄積し得る人は殆んど絶無ともいふべき有様で、極めて長命な人々の間にも見られぬ所である』(二百六十六)。資本家が労働者の労働の大部分についての支拂を節慾するといふことは、労働者の斷じて許さない所である。假りに、資本家が狡猾であり、資本と共に賃銀労働者をもヨーロッパから輸入するにした所で、それは何にもならぬ。此等の労働者は纏て『賃銀労働者ではなくなる。彼等は……労働市場に於いて舊來の雇主に對する競争者となるか、然らずんば獨立した地主となつてしまふのである』(二百六十七)。その恐ろしさを考へて見よ！ 善良な資本家は大切な貨幣を以つて、みづから、自己の競争者を現身の儘ヨーロッパから輸入して來たこととなるのである！ 今や萬事窮す！ ウエーキフィールドが、植民地に於ける賃銀労働者には隷從關係と隷從心が缺けてゐると悲嘆したのは、寔にさもあるべきことである。彼れの門弟メリヴェールは曰く、植民地では賃銀が高いため、ヨリ價安くヨリ從順な労働に對する、資本家に條件を課するのではなく寧ろ資本家に依つて條件を課され得る所の一階級に對する、情熱的渴望を存在せしめることになる。……舊來の文明國に於いては、労働者は自由であるといへ、資本家に對しては自然律的に隷從せしめられてゐるのであるが、植民地に於いては、人爲的手段を以つてこの隷從を造り出さねばならぬのである(二百六十八)と。

(二百六十五) 前掲、第二卷、第一一六頁。

(二百六十六) 前掲、第一卷、第一三一頁。

(二百六十七) 前掲、第二卷、第五頁。

(二百六十八) メリヴェール著『植民及び植民地に關する講義』(ロンドン、一八四一及び一八四二年刊第二卷、第二三五—

三一四頁附所)。物穩しい自由貿易主義的な俗學的經濟學者モリナリでさへも述べて曰く『奴隷制度を廢止して、而も強

制労働に代ふるに、相應した量の自由労働を以つてすることなき植民地に在つては、日々我々の眼前に現れてゐる所のものと反對の事實が生じてゐるのを見る。即ち單純たる労働者が却つて産業上の企業者から搾取してゐるのであつて、彼等は自己の有に歸すべき正當な生産物部分とは比較にならぬほどの高賃銀を要求してゐる。植民者は生産した砂糖のため賃銀の昂騰を償ひ得べき一價格を得ることが出来なかつた故に、己むなく最初は利潤、後には資本それ自身を以つてこれを埋め合はさねばならなくなつた。斯くして、若干の植民者は破綻し、他の植民者は眼前に迫れる破綻を免れんとし、經營を中止するに至つた。人類數代の破滅を見るよりは、寧ろ蓄積資本の破滅を見るに如かざることは疑ひを容れない。「何んといふ寛大なモリナリ君だらう！」。だが、どちらをも破滅しないとすれば、なほ更ら結構ではなからうか？（モリナリ著『經濟學研究』パリ、一八四六年刊、第五一及び五二頁）。モリナリ君よ、モリナリ君よ！ ヨーロッパに於いては企業者が労働者に對して、西インドに於いては労働者が企業者に對して、自己の得べき『正當な受分』を縮小し得るとすれば、十誠は、モーゼと豫言者は、需要供給の法則は、果して如何になることであらう？ 而してヨーロッパの資本家が日々支拂つて居らぬと貴下が認められてゐる所の、この『正當な受分』とは、抑も如何なるもので御座いますか？ 労働者が資本家を搾取する程に『朴直』だといふ彼方の植民地に對しては、モリナリ君は、他の場合ならば自動的に作用する所の需給律をば警察權を以つて正しき軌道に維持せしめんとする、強烈なムツ痒ゆきを感じてゐるのである。

然らば、ウエーキフキールドの見地を以つてして、植民地に於けるこの惡弊の結果たるものは果して何ぞ？ それば即ち、生産者と國民的財産とを分散せしめんとする野蠻化的の一傾向（二百六十九）である。生産機關を無數の自營的所有者の手に分散せしめることは、資本の集中を破壊すると共にまた結合労働の一切の基礎をも破壊する所以となる。固定資本の放下を必要とする所の、多年に亙る一切の永續的企業は、その遂行上諸種の障礙に逢著するものである。ヨーロッパに於いては、資本は一瞬間も躊躇する所がない。労働者階級は資本のため、常に過充してゐる所の、常に利用し得べき、生きた附屬物となつてゐるからである！ だが、植民地に於いては！

（二百六十九）ウエーキフキールド前掲、第二卷、第五二頁。

ウエーキフキールドは、極めて傷ましい一の奇談を語つてゐる。彼れは、移住の波が屢々停滞して『過剩』労働者の沈澱を與へる所のカナダ及びニューヨーク州に於ける若干の資本家と話し合つてゐた。このメロドロマ中の一人物は嘆息して曰く『我々の資本は、完成のため長期の時間を要する幾多の企業を目的として準備されてゐたのである。然し忽ち他に移轉してし

まふことの知れてゐる労働者を以つてしては、斯かる企業を開始することが出来ぬ。若し確實に斯かる移住者の労働を保持し得たとすれば、我々は直ちに喜んでそれを價高く傭入れたであらう。また、假令この労働が他に轉ずること必定であつたとしても、必要な場合新たな供給が確かに得られたとすれば、我々はそれを傭入れることを辭しなかつたであらう(二百七十)と。

(二百七十) 前掲、第一九一及び一九二頁。

ウエーキフキールドはイギリスの資本制農業と、『結合』労働とを、アメリカの分散的な自營農業と美々しく比較對照せしめた後、思はずメタルの裏を見せてゐる。彼れはアメリカの民衆をば、裕福にして獨立心を有し且つ企業的にして比較的教養ある者として描寫してゐる。然るに『イギリスの農業労働者は慘憺たる窮乏者であり、被救恤の窮民である。…北アメリカ及び若干の新たな植民地を除くほか、果して如何なる國に於いて、農業に使用される自由労働の賃銀が労働者にとつて必要不可欠なる生活資料を遙かに超越してゐるであらうか？…イギリスでは農業上に使用する馬は貴重な財産の一となつてゐて、農業労働者より遙かによりき榮養を給されてゐることは疑ひを容れない』(二百七十一)。だが、心配無用、國富なるものは本來、人民の窮乏と同じことなのである。

(二百七十一) 前掲、第四七及び二四六頁。

然らば、植民地の反資本的な癌症は、如何にして治療すべきであるか？ 若し凡ゆる土地を一擧にして公有から私有に轉化せしめようとすれば、弊毒の根源がそれで破壊されることは事實である。が、同時に植民地も破壊されてしまふのである。如何にして一擧兩得すべきかといふことが、呼吸なのである。政府の力で、需給律から獨立した人爲的の價格を處女地に課し、移住者が土地を購ひ獨立農民となるに十分の貨幣を勞收し得るに至る迄、彼等をして長期間賃銀労働をなさざるを得ない様にしたら、どうであらうか？(二百七十二)。更らに、政府をして土地の販賣價格をば賃銀労働者の資力を殆んど超越した程度に確定せしめ、この様な價格で土地を販賣することに依つて得られる基金、需給の神聖律を犯すことに依つて勞銀の中から強取する所の斯かる貨幣基金をば、それが増大するにつれて、ヨーロッパから無一文者を植民地に輸入し、以つて資本家のために労働市場を充實せしめる目的に利用するやうにしたら、どうであらうか？ 斯かる状態の下に、萬事は凡ゆる世界中の最善な世界に於ける最善なものとなるであらう。

(二百七十二) 『自己の腕以外には何物をも所有せざる人が、職を見出し所得を得るやうになるのは、土地及び資本を占有せる結果だと汝は主張する。…然し事實は寧ろ、自己の腕以外に何物をも所有せざる人が存在するやうになることが、土地

を個人的に占有せる結果なのである。……眞空中に人を押し込めるとき、彼れの呼吸すべき空氣は奪はれることになる。土地を占有するときにも、これと同じ事がなされる。……即ち、彼れの生命を汝の專擅に倚存せしむるため、彼れを富の眞空中に押し込めることになるのである(『コラン著『經濟學』第三卷、第二六八—二七一頁隨所)。

これ『體系的植民』なるもの大きな祕密である。ウエーキフキールドは得々と叫んで曰く、『勞働の供給は不斷で且つ規則正しくなければならぬ。蓋し、第一に、如何なる勞働者も貨幣を得べく勞働した後でなければ、土地を取得する力がないから、一切の移住勞働者は賃銀を得べく結合して勞働することに依り、ヨリ多くの勞働者を充用すべき資本を造り出すことになる。第二に、賃銀勞働をやめ地主となつた總べての勞働者は、土地を購ふことに依つて、新たな勞働を植民地に輸入せしむべき一の基金を確保することになるのである(『二百七十三』)と。

(二百七十三) ウエーキフキールド前掲、第二卷、第一九二頁。

國家に依つて課される土地價格は、『十分の價格』たることを要するは言ふ迄もない。換言すれば、それは『賃銀勞働市場に交代者が來る迄は、勞働者をして獨立の農民たらしめざる』ほど高き價格でなくてはならぬ(『二百七十四』)。この『十分の價格』とは、畢竟するところ、勞働者が賃銀勞働市場から土地に引退する許可料として資本家に支拂ふ贖金のことを、婉曲に言ひ現したものに過ぎぬ。勞働者は先づ、主人たる資本家のためにヨリ多くの勞働者から搾取することを得せしむべき『資本』を造り出さねばならぬ。次に、彼れは舊來の主人たる資本家のために、自己の費用を以つて、海の彼方から『補充員』を勞働市場に輸送せしめねばならぬ。

(二百七十四) 前掲、第四五頁。

ウエーキフキールド君が特に植民地に充用すべきものとして處方した『本來的蓄積』の如上の方法が、イギリスの政府に依つて多年實行されてゐたといふことは、極めて特徴的な事實である。その失敗は、ビールの銀行條例の失敗と同様に、不面目のものであつたことと言ふ迄もない。移住の流れが、英領植民地からアメリカ合衆國へ轉向せしめられたに過ぎなかつた。斯かる間にヨーロッパでは資本制生産が進歩して政府の壓迫の増大を伴ふに至つた結果、ウエーキフキールドの處方は不用に歸せしめられることになつた。一方に、年々アメリカへ驅逐される所の巨大なる連續的な人間の流れは、アメリカ合衆國の東部に停滞的な沈澱を残してゆく。蓋し、ヨーロッパからの移住の波は、西部への移住の波に依つて洗ひ去られ得るよりも以上の急速力を以つて、東部の勞働市場に人間を流し込んでゆくからである。他方にまた、南北戰爭のため莫大な國債が生ずると共に、

租税の壓迫が加はり、最劣等なる金種貴族が造り出され、鐵道や鑛山などの利用を目的とした投機會社に公有地の巨大な部分が濫贈される等の諸結果を伴つた。約していへば、資本集中が非常なる急速力を以つて進行するに至つたのである。斯くしてこの大なる共和國は、もはや移住労働者の約束の地ではなくなつた。其處では貨銀の低落と貨銀労働者の隸従とは、まだくヨーロッパの水準までは達して居らぬが、それでも資本制生産は驚くべき急速力を以つて進行してゐるのである。

ウエーキフキールド自身があのように聲高く非難してゐる所の、イギリス政府に依る貴族及び資本家への、未耕植民地の破廉恥的な濫贈——この事實は、就中オースタラリアに於いては(二百七十五)、金の採掘に依つて吸引された人間の流れや、イギリス製品の輸入が最小な手工業者に對してさへも喚び起した競争やと相合して、十分なる『相對的過剩労働者人口』を生ぜしめ、郵船毎に『オースタラリア労働市場の過充』の凶報を齎らさざるものは殆んどないといふ有様であつた。而して賣淫はロンドンのヘーマーケットに於ける如く、オースタラリアの此處彼處にも翳鬱と繁茂してゐるのである。

(二百七十五) オースタラリアは立法上自立するに至るや否や、移住者のために有利な法律を制定したことは言ふ迄もない。

然し一度びイギリスの政府に依つて實行された土地の濫贈は、これが障碍となつてゐる。『一八六二年の土地條例に於ける第一の且つ主要な目的は、人民の移住をヨリ容易に行はしめんとするにある』(公有地大臣オナラブル・ゲーヴォン・ダフキークのウイクトリア土地法、ロンドン、一八六二年刊)。

だが、植民地の状態は、この場合、我々の問題となることでない。我々の關心を引く唯一の事項は、舊世界の經濟學が新世界の内に發見して聲高く宣揚してゐる所の祕密、これである。それは即ち、資本制的の生産方法及び蓄積方法、隨つてまた資本制的の私有は、自己労働に立脚せる私有の破壊を、換言すれば労働者からの收奪を條件とするといふ一事である。

資本論 第一卷 終

資本論第一卷原語及び譯註

第 一 篇

第 一 章

- (1) Waare.
- (2) Karl Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie. Berlin, 1859. p. 4.
- (3) Nicolas Barbon, A Discourse on coining the new money lighter, in answer to Mr. Locke's Considerations etc. London 1696. p. 2, 3.
- (4) N. Barbon, l. c. p. 16.
- (5) Gebrauchswert.
- (6) John Locke, Some Considerations on the Consequences of the lowering of Interest. 1691., Works. ed. London 1777 Vol. II. p. 28.
- (7) Tauschwert.
- (8) stofflicher Träger.
- (9) ein der Waare innerlicher, immanenter Tauschwert (valeur intrinsèque).
- (10) Le Trosne, De l'Intérêt Social, Physiocrates. ed Daire. Paris 1846. p. 889.
- (11) One sort of wares are as good as another, if the value be equal. There is no difference of distinction in things of equal value..... One hundred pounds worth of lead or iron, is of as great a value as one hundred pounds worth of silver and gold. (N. Barbon l. c. p. 53 u. 7).
- (12) Wert.
- (13) Waarenwert.
- (14) Arbeitszeit.
- (15) Durchschnittsexemplar.
- (16) Some Thoughts on the Interest of Money in general, and particularly in the Public Funds etc. Lond., p. 36.
- (17) Le Trosne l. c. p. 893.
- (18) K. Marx, l. c. p. 6.

- (19) constan.
- (20) Eschwege.
- (21) für andere.
- (22) Zinskorn
- (23) Zehntkorn.
- (24) nützliche Arbeit.
- (25) eine bestimmte zweckmässig produktive Thätigkeit.
- (26) Stoffwechsel zwischen Mensch und Natur.
- (27) Naturnotwendigkeit.
- (28) Pietro Verri, *Meditazioni sulla Economia Politica* (zuerst gedruckt 1773) in der Ausgabe der italienischen Oekonomen von Custodi, *Parte Moderna*, t. XV, p. 22.
- (29) menschliche Arbeit schlechthin.
- (30) einfache Durchschnittsarbeit.
- (31) complicirtere Arbeit.
- (32) potenzierte. 自乗されたもの。
- (33) multiplicirte.
- (34) Hegel, *Philosophie des Rechts*, Berlin 1840, p. 250, § 190.
- (35) in besonderer zweckbestimmter Form.
- (36) A. Smith, *Wealth of Nations* b. I. ch. V.
- (37) normale Lebensbetätigung.
- (38) Werthträger.
- (39) Naturalform.
- (40) Werthform.
- (41) Werthgegenständlichkeit.
- (42) Dame Quickly. シェークスピアの『メリー・ワイヴズ・オブ・キンゾーア』に出るカイウス博士の女中で洗濯、料理、裁縫、婚姻、媒妁なんでもするといふ至極調法な女。
- (43) Werthling.
- (44) Geldform.
- (45) Werthausdruck.
- (45) relative Werthform.
- (47) Aequivalentform.

- (48) Moment (英譯 element).
- (49) S. Bailey, Money and its Vicissitudes. London 1837. p. 11.
- (50) Existenzform.
- (51) Werthsein. 『値すること』と譯した所もある。
- (52) Werthabstraktion.
- (53) Werthcharakter.
- (54) The Works of B. Franklin etc., edited by Sparks. Boston, 1837, vol. II. p. 297.
- (55) Gegenständlichkeit.
- (56) 原文では A と B とを取り違へてゐるやうに思はれる。英譯本では茲に譯した通りになつてゐる。私も意味の上から英譯本の方が正しいと信じ、暫くそれに依ることとした。
- (57) Werthsein.
- (58) Valere (イタリヤ)。Valer (スペイン)。Valoir (フランス)。いづれも『値する』の意。
- (59) Werthsein. 『値すること』『作値性』。
- (60) Paris vaut bi n une messe! パリは眞に貧祭に値する。
- (61) beziehen.
- (62) Berziehung.
- (63) *Produktivkraft.
- (64) reguliren.
- (65) J. Broadbent, Political Economy, London. 1842, p. 11 and 14.
- (66) Anstanschbarkeit.
- (67) quid pro quo.
- (68) ist schwer.
- (69) hat Gewicht.
- (70) Schwere.
- (71) das Ganze der einfachen werthform.
- (72) Lombard street ロンドン市の有名な銀行街。英國金融の中心。広く銀行金融社會の意に用ゐられる。
- (73) F. C. A. Ferrier (sous-inspecteur des douanes), Du Gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce. Paris 1805. Charles Ganilh, Des Systèmes de l'Economie. Politique, 2 ème éd. Paris 1821.

- (74) Werthgestalt.
- (75) totale oder entfaltete Werthform.
- (76) A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value; chiefly in reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers. By the Author of Essays on the Formation etc. of Opinions. London 1825 p. 33.
- (77) Werthkoerper.
- (78) Werthgegenständlichk it.
- (79) allgemeine gesellschaftliche Verpuppung aller menschlichen Arbeit.
- (80) aufprägen.
- (81) Kleinbuerger.
- (82) allgemein gesellschaftliche Gültigkeit.
- (83) in engeren oder weiteren Kreisen.
- (84) Preisform.
- (85) Fetischcharakter der Waare.
- (86) ein sinnlich übersinnliches Ding.
- (87) Morgen. フイツに於ける土地面積の名、多くは 25,2 アールに當る。
- (88) Tagwerk. Tagwanne (jurnale 或は journals, terra jurnalıs 或は diornalis) 一日の仕事の意。
- (89) Mannwerk. 男一人の仕事の意。
- (90) Mannskraft. 男一人の力の意。
- (91) Mannsmaat, Mannshauet. 男一人の收穫量の意。
- (92) Mark. チュートン種族の村落共有地。
- (93) Georg Ludwig von Maurer, Einleitung zur Geschichte der Mark, Hof-, u. s. w. Verfassung, München, 1859, p. 129. sq.
- (94) quid pro quo.
- (95) Galiani, Della moneta p. 220 v. III. von Custodi's Samml ng der Scrittore Classici Italiani di Economia politica, Parte Moderna Milano 1801.
- (96) regelndes Naturgesetz.
- (97) Friedrich Engels, Umriss zur Kritik der Nationaloekonomie, in Deutschfranzösische Jahrbücher, Herausg. von A. Ruge u. K. Marx, Paris 1844.
- (98) post festum.
- (99) Werkzeug.

- (100) Nutzeffekt.
- (101) Max Wirth. 1822 年ブレスラウに生れハイデルベルヒ大學で法律學及び經濟學を修め、1865 年ブルンの統計局長に就任す。經濟學上の立場は溫和なる保護主義とも言ふべく利潤發生については節慾説を主張し、地代論についてはリカルドに反對してケリー説を信奉した。
- (102) Parallelogramme des Herrn. Owen.
- (103) Naturaldienst.
- (104) Na'tural'eit'ung.
- (105) ländlich patriarchalische Industrie einer Bauernfamilia,
- (106) Karl Marx. Zur Kritik etc. p. 10.
- (107) in dieser sachlichen Form.
- (108) Naturnotwendigkeit.
- (109) 3 tes u. 4 tes Buch. 資本論第三卷及び餘剩價值學說史に當る。
- (110) Destutt de Tracy.
- (111) Ricardo, The Principles of Political Economy 3 Ed. London 1821. p. 334.
- (112) Ganilh.
- (113) Karl Marx, Misère de la Philosophie. Réponse à la Philosophie de la Misère par M. Proudhon. 1847. p. 113.
- (114) Waarendinge.
- (115) Observations on some verbal disputes in Pol. Econ., particularly relating to value and to supply and demand. Lond., 1821. p. 16.
- (116) S. Bailey, l. c. p. 165.
- (117) Dogberry, Seacoal. シェークスピア劇マッチ・アドー・アバウト・ナツング中の人物。

第二章

- (1) Hüter.
- (2) Waarenbeitzer.
- (3) 娼婦のこと。
- (4) Maritorne. ドン・キホーテに出る醜惡な下女の名。
- (5) Aristoteles, de Rep. l. 1. c. 9.
- (6) gesells haftlich gültige Aequivalentform,

- (7) der unmittelbare Produktaustausch. 物々交換のことをいふ。
- (8) Tauschmittel.
- (9) dieselbe gleichförmige Qualität.
- (10) I metalli.....naturalmente moneta, Galiani, Della Moneta. in Custodi's Sammlung Parte moderna, t. III. p. 72.
- (11) Verri, Meditationi sulla Economia politica. p. 16.
- (12) A Discourse of the General Notions of Money, Trade, and Exchange as they stand in relations to each other. By a merchant. London. 1695. p. 7.
- (13) A Discourse concerning Trade, and that in particular of the East Indies, etc. London, 1689. p. 2.
- (14) Stock.
- (15) The East India Trade, a most profitable Trade. London. 1677. p. 4.
- (16) une valeur additionelle.
- (17) Jean Law, Considération sur le numéraire et le commerce in E Duire's Edit, des Economistes Financiers du XIII siècle p. 470. (Collection des principaux Economistes).
- (18) V. de Forbonnais, Eléments du Commerce. Nouv. Edit. Leyde, 1666. t. II. p. 143.
- (19) Montesquieu, Esprit des Loix, Oeuvres. Lond. 1767. t. II p. 2.
- (20) Le Trosne, De l'Interet social, p. 910.
- (21) Hegel, Philosophie des Rechts. p. 100.
- (22) フランス國王フェリッパ第六世のこと。
- (23) Pagnini, Saggio sopra il giusto pregio delle cose. 1751, bei Custodi Parte Moderna, t. II.
- (24) natural price.
- (25) William Petty, A Treatise on Taxes and Contributions. Lond. 1667, p. 31.
- (26) W. Roscher, Die Grundlagen der Nationalökonomie. 3. Aufl. 1858, p. 267—10.
- (27) anatomisch-physiologische Methode der politischen Oekonomie.

第三章

- (1) Baffinsbay. アメリカとグリーンランドとの間に延互する海峡。

- (2) nur vorgestelltes oder ideelles Gold.
- (3) Masstab.
- (4) Ma luren, History of the Curreney. London 1858, p. 16.
- (5) Mass der Werte (measure of values).
- (6) Massstab der Preise (standard of prices).
- (7) David Urquhart, Familiar Words.
- (8) Atheneaus, Deipnosophistai I. IV. 49. v. 2. ed Schwoizhüser, 1802.
- (9) begriffslos sachliche aber auch einfach gesellschaftliche Form.
- (10) Münzpreis.
- (11) Wm. Petty, Qantulum cumque concerning Money. To the Lord Marquis of Halifax, 1682.
- (12) Le Trone, De l'Interet social, p. 922.
- (13) Cirkulati n mittel.
- (14) Metamorphose der Waaren.
- (15) Wie der Kamm ihnen gewachsen ist.
- (16) Metamorphose—Verwandlung.
- (17) F. Lasalle, Die Philosophie Herakleitos des Dunkeln. Berlin 1858, Bd. I. p. 222.
- (18) salto mortale.
- (19) ein naturwüchsiger Produktionsorganismus.
- (20) natntiirtes Glied der gesellschaftlichen Arbeitsteilung.
- (21) The course of true love never does run smooth.
- (22) Transsubstantiation.
- (23) Dr. Quesney, Dialogues sur le Commerce et les Travaux des Artisans. Physiocrates (Collection des Principaux Economistes). Physiocrates, ed. Daire, I. Partie. 1846. p. 170.
- (24) Maximes Générales.
- (25) Mercier de le Rivière, L'Ordre naturel et essentiel des sociétés politiques, Physiocrates, ed. Daire, II Partie, p. 554.
- (26) Kreislauf.
- (27) Goldchrysalide.
- (28) Waaren cirkulation.
- (29) 獨 Umlauf. 英 currency. 佛 cours.

- (30) Kaufmittel.
- (31) Sir Dud'ey North, Discourses Upon Trade. Lond. 1691. p. 11—15 passim.
- (32) William Petty, A Treatise on Taxes and Contributions. London 1687, p. 17
- (33) Arther Young, Political Arithmetic, Lond. 1774.
- (34) Adam Smith, Wealth of Nations 1. IV. ch. 1.
- (35) Jacob Vanderlint, Money answers all Things Lond. 1734, p. 5.
- (36) J. St. Mill, Principle of Pol. Econ.
- (37) Kars. 露土國境、裏海の東方百メートルの地點にある難攻不落の要塞。1855年土軍はウヰリアムス將軍の指軍の下にこの城砦を死守し露軍の占領を免れたが、1877年遂に露軍の手に歸した。
- (38) J. St. Mill, Some Unsettled Questions of Pol. Econ.
- (39) John Locke, Some Considerations on the Consequences of the lowering of Interest 1691, Works ed. 1777, Vol. II, p. 25.
- (40) Münzgestalt.
- (41) The Tower. 初め國王の居城であつたが、後ち國事犯人の牢獄となり更らに武庫及び古遺物の陳列所に充てられた。
- (42) Marke.
- (43) Symbol.
- (44) David Buchanan, Inquiry into the Taxation and Commercial Policy of Great Britain. Edinburch, 1844, p. 248, 249.
- (45) Ce n'est que le premier pas qui coûte.
- (46) Staatspapiergeld mit Zwangs-Kurs.
- (47) Arbeiten der Kaiserlich Russischen Gesandtschaft zu Peking über China. Aus den Russischen von Dr. K. Abel und F. A. Mecklenburg. Erster Band. Berlin 1858. p. 47. sq.
- (48) Sovereign. この語は『元首』『主權者』を意味す。そこでマルクスはこの一句に註を加へて曰く『これ政治上のものではない。sovereign は磅金貨の名稱である』と。この語を含む本文引用の箇所を『主もに Sovereign の値打が下がる』といふ風に意譯して見ると、マルクスの辛辣な皮肉振りが窺はれる。英譯本はこの抑注を省略してゐる。
- (49) H. o. Lords' Committee 1818, n. 429.
- (50) Fullarton, Regulation of Currencies, 2 ed London 1345, p. 21.
- (51) objektiv gesellschaftliche Gültigkeit.

- (52) Goldpuppe.
- (53) Schatz.
- (54) Schatzbildner.
- (55) Schulzbildung.
- (56) Jacob Vanderlint, I. c. p. 95, 93.
- (57) John Bellers, *Essays about the Poor, Manufactures, Trade, Plantation, and Immorality*. Lond. 1669. p. 13.
- (58) Verkehr.
- (59) 原文には『經濟上及び道德上の秩序のシャイデミュンツェ』としてある。シャイデミュンツェ (Schei emünz) は『小錢』『補助貨』の意味で、Schei o (分離、分解) 及び Münze (鑄貨、錢) の二語より成る。マルクスはこの語を以つて貨幣と破壊との兩概念を結びつけたもので其所に面白味がある。この前後數頁はマルクス一流の文藻を發揮した所である。
- (60) Graf. クリストが最後の晚餐のとき用ゐた玉盃。
- (61) Shakerpeare, *Timon of Athens*.
- (62) Sophokles, *Antigone*.
- (63) Athen, Deimos.
- (64) barbarisch einfacher Waarenbesitzer.
- (65) Goldfetsch.
- (66) Dudley North, *Discourses upon Trade*. Lond. 1691. p. 22.
- (67) J. St. Mills *Evidence, Reports on Bank Acts 1857*, n. 2084.
- (68) Zahlungsmittel.
- (69) Schadewacht = Zinswucher.
- (70) Martin Luther, *An die Pfarrherrn, wider den Wucher zu predigen*. Wittenberg 1540.
- (71) plebejischer Schuldner.
- (72) *An Essay on Credit and the Bankrupt Act*. Lond. 1707. p. 2.
- (73) Geldkrise.
- (74) in prosperitätstrunknem Aufklärungsdüffel.
- (75) John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry* Lond. 1696. p. 3.
- (76) *The Theory of the Exchanges, the Bank Charter Act of 1844*. Lond. 1834 p. 81.
- (77) *The Currency Question Reviewed, a Letter to the Scotch People*. By a

Banker in England. Edinburgh 1815 p. 29, 30 passim.

- (78) Kreditwesen.
- (79) Morrison, Dillon & Co.
- (80) Report from the Select Committee on the Bankacts. July 1858, p. LXXI.
- (81) An Essay upon Public Credit 3. ed. Lond. 1710 p. 8.
- (82) Boisguillebert, Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs. Collection des principaux Economistes t. I. Économistes financiers edit Daire Paris. 1843. t. I. p. 413, 419, 417.
- (83) John Fullarton, Regulation of Currencies 2nd ed. Lond. 1845. p. 86 Ntc.
- (84) 一年を五十二週と見て四千萬鎊を割る。
- (85) 即ち四分の一年。
- (86) William Petty, Political Anatomy of Ireland. 1672 edit Lond. 1691. p. 13, 14.
- (87) Reichtum überhaupt (universal wealth).
- (88) MacCulloch, The Literature of Political Economy, a classified catalogue Lond. 1815.
- (89) currency principal.
- (90) money of the world.
- (91) N. Barbon, A Discourse on coining the new Money lighter. London 1696. p. 39.
- (92) W. Petty, Political Anatomy of Ireland p. 14.

第 二 篇

第 四 章

- (1) Goldvermögen.
- (2) Kaufmannskapital.
- (3) Wucherkapital.
- (4) Nulle terre sans seigneur.
- (5) L'argent n'a pas de maître.
- (6) Mercier de la Rivière, L'ordre naturel et essentiel des sociétés politiques p. 543.
- (7) definitiv.
- (8) vorgeschossen werden.
- (9) money advanced.
- (10) to be expended.
- (11) James Steuart, Works etc. edited by General Sir James Steuart, his son. Lond. 1801. v. I. p. 274.
- (12) Mehrwert (surplus value).
- (13) sich verwerten.
- (14) Th. Corbet, An Inquiry into the Causes and Modes of the Wealth of Individuals, or the Principles of Trade and Speculation explained. Lond. 1811. p. 5.
- (15) Mac Culloch, A Dictionary practical etc. of Commerce. Lond. 1847, p. 1058.
- (16) Le commerce est un jeu.
- (17) Pinté, Traite de la Circulation et du Crédit, Amsterdam, 1771, p. 231.
- (18) Verwertung des Werts.
- (19) Richtigkeit schlechthin.
- (20) F. Engels, Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie in Deutschland. Französische Jahrbücher, herausg. v. A. Ruge u. K. Marx, Paris 1844. p. 99.
- (21) ὁ ἀληθινὸς πλοῦτος
- (22) ἡ καπηλική

- (23) ποιητική κρηματων.....ειδ κρημάτων εναβλήης
- (24) το γὰρ νόμισμα στοικει ον και πέρας της αλλαγης εστιν
- (25) Aristot. Is, De Rep. edit. Bekker, lib. I. c. 8 und 9. pas im.
- (26) Th. Chalmers, On Politic. Econ. etc. 2nd edit. Lond. 1832. p. 163.
- (27) Genovesi, Lezioni di Economia Civile (1765). Ausgabe der italienischen Oekonomen v. Custodi, Parte Moderna, t. VIII. p. 139.
- (28) auri sacra fames.
- (29) MacColloch, The Principles of Pol. Econ. Lond. 1830, p. 179.
- (30) J. B. Say, Traité d'Écon. Polit. 3 ème é. l. Paris 1817, t. I. p. 428.
- (31) Macleod, The Theory and Practice of Banking, London 1855. v. I. c. 1.
- (32) James Mill, Elements of Pol. Econ. Lond. 1821, p. 74.
- (33) übergreifendes Subjekt.
- (34) Identität mit sich selbst.
- (35) Money which begets money.
- (36) Sismondi, Nouveaux Principes de l'Econ. Polit. t. I. p. 90.
- (37) Kaufmannskapital
- (38) industrielles Kapital.
- (39) zinstragendes Kapital.
- (40) im Lapidalstil. 『簡潔な文體で』の意。
- (41) Destutt de Tracy, Traite de la Volonté et de ses effets, Paris 1826, p. 63.
- (42) Traité d'Economie Politique.
- (43) Mercier de la Rivière, L'ordre naturel et essentiel. Physiocrates. ed. Daire II. Partie, p. 544.
- (44) Le Trosne, De l'Intérêt social, Physiocrates. ed. Daire, Paris 1847, p. 906.
- (45) Dove è equalità, non è lucro.
- (46) Galiani, Della Moneta, in Custodi. Parte Moderna t. IV. p. 241.
- (47) Condillac, Le Commerce et le Gouvernement (1776) Edit. Daire et Molinari in den Mélanges d'Économie Politique. Paris 1817, p. 267.
- (48) Wilhelm Roscher, Die Grundlagen der Nationalökonomie. Dritte Auflage, 1858.
- (49) S. P. Newmann, Elements of Polit. Econ. Andover and New-York 1835. p. 175.
- (50) The Essential Principles of the Wealth of Nations etc. Lond. 1797. p. 61.

- (51) power and inclination (Vermögen und Neigung).
- (52) R. Torrens, An Essay on the Production of Wealth. Lond. 1821, p. 349.
- (53) G. Ramsay, An Essay on the Distribution of Wealth, Edinburgh, 1836, p. 181.
- (54) An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand and the Necessity of Consumption, lately advocated by Mr. Malthus etc., Lond. 1821, p. 55.
- (55) trotz des besten Willens.
- (56) イギリス最小の舊貨。一片の四分の一に當る。
- (57) イギリスの舊金貨。二十一志に當る。
- (58) F. Wayland, The Elements of Pol. Econ. Boston, 1853, p. 163.
- (59) Handelskapital.
- (60) Wureberkapital.
- (61) G. Opdyke, A Treatise on Polit. Econ. New York 1851.
- (62) Benjamin Franklin, Works, vol. II, edit. Sparks in: Positions to be examined concerning National Wealth.
- (63) Hic Rhodus, hic salta! 或る一人がローズ島(小アジアを距る十二メートル地中海に横はる風光明媚の小島)では見事に踊つたと誇りに述べた。それを聞いて他の一人がローズ島は此處にある。論より證據、茲で踊つて見よと言つた(イソップ)。つまり、これが餘剩價値の謎だが、解けるなら解いて見よの意。
- (64) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. 3 ed. London 1821, p. 267.
- (65) Wertschöpfung.
- (66) Arbeitsvermögen.
- (67) Arbeitskraft.
- (68) Peonage.
- (69) Juarez.
- (70) Hegel, Philosophie des Rechts. Berlin 1810. p. 101. § 67.
- (71) Th. Hobbes, Leviathan in Works edit. Molesworth. Lond. 1839—41, v. III p. 76.
- (72) Lebensansprüche.
- (73) villicus. 農業管理人。
- (74) Th. Mommsen, Römische Geschichte 1856, p. 810.
- (75) W. Th. Thornton, Overpopulation and its Remedy Lond. 1846.

- (76) R. Torrens, *An Essay on the external Corn Trade*. Lond. 1815. p. 62.
- (77) Rossi, *Course d'Econ. Polit.* Bruxelles 1842. p. 370.
- (78) Sismondi, *Nouv. Princ. etc.*, t. I. p. 112.
- (79) *An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand etc.*, p. 104.
- (80) Ch. Ganih, *Des Systèmes des de l'Écon. Polit.* 2ème edit. Paris 1821, t. I, p. 150.
- (81) Storch, *Cours d'Econ. Polit.* Petersbourg, 1815. t. II. p. 37.
- (82) p. XXXII. im Report des Regie ungs-Kommissairs H. S. Tremenheere über die Grievances complained of by the journeymen bakers etc. Lond. 1862.
- (83) Committee of 1855 on the Adulteration of Bread.
- (84) Dr. Hassall, *Adulterations Detected*, 2nd edit. Lond. 1862.
- (85) Sixth Report, on Public Health by The Medical Officer of the Privy Council etc. 1864, p. 264.
- (86) Truck-system.
- (87) Children's Employment Commission, III Report. Lond. 1864, p. 38, n. 192.

第 三 篇

第 五 章

- (1) Arbeitsprocess.
- (2) Verwertungsprocess.
- (3) Naturstoff.
- (4) aneignen.
- (5) Potenzen.
- (6) thierartig instinktmässige etc.
- (7) das Natürliche.
- (8) Anstrengung.
- (9) James Steuart, Principles of Polit. Econ. edit. Dublin 1770. v. I. p. 116.
- (10) Machtmittel.
- (11) abarbeiten.
- (12) Hegel, Encyklopädie, Erster Theil. Die Logik. Berlin 1810, p. 38.
- (13) a tool-making animal.
- (14) Turgot, Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses, p. 766.
- (15) gegenständliche Bedingung.
- (16) locus standi.
- (17) Wirkungsraum (field of employment).
- (18) Sie (die Arbeit) ist vergegenständlicht und der Gegenstand ist verarbeitet.
- (19) Produktionsmittel.
- (20) extraktive Industrie.
- (21) Halbfabrikat.
- (22) Stufenfabrikat.
- (23) begriffs- und berufsmässige Funktionen.
- (24) Cincinnatus 西歴前 460 年の頃、ローマの執政官たりし人物、後ち退職歸郷して田園生活を營む。田園に隱退して風月を友とする偉人の意味に用ゐられる。
- (25) R. Torrens, An Essay on the Production of Wealth etc. p. 70, 71.
- (26) Kapitalisten in spe.

- (27) zweckmässig.
- (28) Cherbuliez, Riche ou Pauvre, edit. Paris 1841, p. 53, 54.
- (29) James Mill, Elements on political Economy. London 1821, p. 70, 71.
- (30) qu'on aime pour lui-Même.
- (31) Wert ildungsprocess.
- (32) John Ramsay MacCulloch, 1789 年、スコットランドの一小市ホイトーンに生れた經濟學者、『經濟原論』の著者としてまた商業及び地理に關する辭典の編纂者として知られてゐる。
- (33) Martin Luther, An die Pfarherrn, wider den Wucher zu predigen etc. Wittenberg 1540.
- (34) tout pour le mieux dans le meilleur des mondes possibles.
- (35) J. C. Cairns, The Slave Power, Lond. 1832, p. 46 sqq.
- (36) Omsted, Sea Bord Slave States.
- (37) potenzierteter Arbeiter 『高級労働者』又は『熟練労働者』と同意義。
- (38) S. Laing, National Distress etc. Lond. 1844.
- (39) James Mill, C lony, Supplement to the Encyclop. Brit. 1831.
- (40) Outlines of Polit. Economy. Lond. 1832, p. 22, 23.

第六章

- (1) An Essay on the Polit. Econ. of Nations. Lond. 1821. p. 13.
- (2) Observations on certain v rbal Disputes in Pol. Econ, particularly relating to Value, and to Demand and Supply. Lond. 1821, p. 54.
- (3) wiserere.
- (4) services productifs.
- (5) Edmund Burke, Thoughts and Details on Scarcity, originally presented to the Rt. Hon, W. Pitt in the Month of November, 1795, edit. Lond. 1800, p. 10.
- (6) F. Weylund, The Elements of Political Economy, Boston 1853, p. 31, 32.
- (7) konstantes Kapital.
- (8) variables Kapital.
- (9) Le Tresne, De l'Intérêt Social, Physiocrates ed. Daire, Paris 1846, p. 893.

第七 章

- (1) Malthus, Principles of Political Economy. 2nd ed. London 1836, p. 269.
- (2) 第三卷のこと。
- (3) Reite des Mehrwertes.
- (4) nothwendige Arbeitszeit.
- (5) nothwendige Arbeit.
- (6) Surplusarbeitszeit.
- (7) Mehrarbeit (surplus labour).
- (8) Gottsched ドイツの貴族で文學者。170`年ケーニグスベルグ附近に生る。ライプチヒで哲學及び文學の教授を勤めた人で純粹ドイツ風の保護を説きたる脚本の改良を主張した。生氣のないゴソゴソした文學を奨励し、自身も亦さういふ冷たい文章を書いた。
- (9) gewissenhaft 英譯ではこの語を wissenschaftlich (科學的) と見誤り scientific と譯してゐる。
- (10) Mule-Spindel.
- (11) Vorspinnmaschinerie.
- (12) Fates.
- (13) Taxes この語は學術上租税全體にも各種の租税にも使用されるが、制度上では通常地租及び所得税にのみ用ゐられる。
- (14) Nassau W. Senior, Letters on the Factory Act, as it affects the cotton manufacture. London 1837.
- (15) 毎日の勞働時間を十一時間半と假定するから。
- (16) ドイツ譯は『總益 (!) 一萬五千磅中の五千磅』となつてゐる。
- (17) Leonhard Horner, A Letter to Mr. Senior etc. Lond. 1837.
- (18) Fabrikinspektor (inspector of factories).
- (19) Fabrikensor (censor of factories).
- (20) Stimmen は『投票』を意味した『聲』を意味す。Hände は『職工』を意味しまた『手』を意味する。聲と手とを對立させた所に一流の洒落が現れてゐるが、判語ではその味を十分に示すことが出来ぬ。
- (21) Reports of the Insp. of Factory for the half year ending 30th April 1855.
- (22) Wirth, Schulze. 共に複數である。前者は經濟學者マックス・ウヰルト (Max Wirth) 後者はシュルツェ・ゲヴァーニツ (Schulze-Gävernitz) シュルツェ・デーリツ

(Schulze-Delitzsch) 等に因んだもの、普通名詞として前者は酒場の亭主、後者は村長を意味するので双方にかけて味はふと餘程面白い罵倒語になる。

- (23) Mehrprodukt (surplus produce, produit net)
- (24) Arthur Young, Political Arithmetic. London 1774, p. 47.
- (25) Th. Hopkins, On Rent of land etc. Lond. 1823, p. 126.
- (26) Arbeitstag (Working-day).

第八章

- (1) An Essay on Trade and Commerce, containing Observations on Taxation etc. Lond. 1770. p. 73.
- (2) little shilling men 志級の小錢を取扱つてゐる小商人。
- (3) D'obtenir du capital dépensé la plus forte somme de travail possible.
- (4) J. G. Courcelle-Seneuil, Traité théorique et pratique des entreprises industrielles. 2ème édit. Paris 1857. p. 63.
- (5) An Essay on Trade & Commerce etc. p. 47 and 153.
- (6) N. Linguet, Théorie des Loix Civiles etc. Lond. 1757. t. II. p. 406.
- (7) καλλὸς κάγαθός
- (8) Civis romanus.
- (9) Bojar.
- (10) Di dorus Siculus, Historische Bibliothek, Buch 3. c. 13.
- (11) Ager Publicus.
- (12) Règlement organique.
- (13) Jobagie.
- (14) E. Regnault, Histoire politique et sociale des Principautés Danubiennes. Paris 1855.
- (15) J. v. Liebig, Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agrilkultur und Physiologie. 1862, 7. Aufl. Band I, p. 117, 118.
- (16) F. Engels, Die Lage der arbeitenden Klasse in England. Leipzig. 1845.
- (17) Children's Employment Commission.
- (18) Suggestion etc. by Mr. L. Horner, Inspector of Factories, im Factories Regulation Act. Ordered by the House of Commons to be printed 9 Aug. 1859. p. 4, 5

- (19) Report of the Inspector of Factories for the half year, October, 1856. p. 35.
- (20) この一句、ドイツ譯は餘りに意譯しすぎてゐる。即ち『機械の運轉が止んだ後、職工たちが尙工場に残つてゐるとすれば、それは畢竟午前六時と午後六時との間に、即ち法定労働時間内に斯様な仕事をなすべき何等の猶豫時間も彼等に許されてゐないからに外ならぬ。』
- (21) shoddy-hole.
- (22) nibbling and cribbling at meat-times.
- (23) Wehrwolf 狼に變じたギリシア神話中の人物。
- (24) John Wade, History of the Middle and Working Classes. 3rd ed. Lond. 1835. p. 114.
- (25) Sir M. Eden, History of the Poor. Lond. 1799.
- (26) Public Health, 3rd Report I. 112—113.
- (27) 茲は英譯では『前者にあつては死亡總數の半分以上、後者にあつてはその約五分の二は製陶工間の肺病の結果である』となつてゐて、意味が全く違ふ。元來この句の材料はイギリスから採つたものであるから、恐らく英譯の方が正しいのであらう。
- (28) Public Health. 3rd Report etc. p. 102, 104, 105.
- (29) Children's Employment Commission. 1863. p. 24, 22 u. XI.
- (30) Crispinus (單數 Crispin). 西暦前 287 年ローマ官憲のために捕はれて處刑された靴匠の守護聖者。
- (31) pluralis majestatis 王侯や新聞記者などが自分のことを複數の形に言ふ語法。日本では陛下は御自身のことを『朕』と仰せられるが、西洋では『我等』(we, wir)といふ。論文などで『我等』『吾人』『我々』などといふのは内外同様である。
- (32) The Brough ロンドン行政区内テムズ河南岸にあるサウスワーク市邑。
- (33) Dr. Hassal, Adulterations detected.
- (34) sophisticate は『詭辯する』の意より轉じて『不純製造する』となつたもの、この兩意味を念頭に置かなくては次の皮肉が呑み込めない。
- (35) 『不純製造術』と『詭辯的』との兩意義を含ませて斯くいふ。
- (36) 詭辯哲學の創始者の一人。
- (37) 純粹實在のみを眞實のものとして肯定し、有限的、現象的な一切を空幻視する古代ギリシアの哲學派。
- (38) Ronard de Card, De la falsification Substances sacramentelles. Paris 1856.
- (39) Royal Commissioner of Inquiry.
- (40) Report etc. relating to the Grievances. Complained of by the Journoymen

bakers etc. Lond. 1862 and Second Report etc. Lond. 1873.

- (41) underselling masters.
- (42) ドイツ譯は『日曜の夜』となつてゐる。
- (43) George Read, The History of Baking. Lond. 1847, p. 16.
- (44) The case of our English Wool etc. p. VIII.
- (45) Miller-bakers.
- (46) Sabbat-Heilige.
- (47) ドイツ譯は『六日』となつてゐる。
- (48) ウリセスともいふ。ホーマー叙事詩オディシー中の人物でトロイの圍より歸る途すがら色々の冒険をする。本文の比喩はこの冒険旅行中の出来事に因んだもの。
- (49) Iliis americana in nuce.
- (50) 労働者に對する同情もその實奴隸制度の辯護にすぎぬの意。
- (51) der nominelle Arbeitstag 英譯は normal working-day (標準労働日) となつてゐる。
- (52) ドイツ譯は『變化のある』となつてゐる。誤譯であらう。
- (53) ドイツ譯は『十五歳未滿』となつてゐる。
- (54) deinen Grund? これは Kannst du deinen Grund geben? (君の理由を與へ得るか) を省略したものと思はれる。或は Gibt es deinen Grund? (君の理由があるか) を省略したものとも考へられる。
- (55) Exeter Hall ロンドンに於けるクリスト教青年會本部の物建。
- (56) in cute curanda.
- (57) obsequium ventris istis perniciosius est.
- (58) human chattel マルクスはこれを Menschenvieh (人畜) とドイツ譯してゐるが、chattel (家財) を cattle (家畜) とハキ違へたのではなからうか。括弧して human chattel としてゐる所を見るとさうらしく考へられる。
- (59) このところ原文とマルクスのドイツ譯との間に些か意味の相違がある。
- (60) John Ward, History of the Borough of Stoke-upon Trent. London 1813.
p. 42.
- (61) この一句、ドイツ譯と多少の違ひがある。
- (62) Après moi le déluge! 洪水は我があとに!
- (63) En land and America, London, 1833. vol. I, p. 55. By E. G. Wakefield.
- (64) W. T. Thornton, Overpopulation and its Remedy l. c. p. 74, 75.
- (65) Times. Nov. 5th, 1861.

- (66) West Riding.
- (67) Report of the Registrar-General, for October, 1861.
- (68) General Statutes of Massachusetts. 63. ch. 12.
- (69) State of New Jersey. An act to limit the hours of labour etc., 61 and 2.
- (70) Revised Statutes of the State of Rhode Island etc. ch. 39, § 23, 1st July 1857.
- (71) Statute of Labourers (23 Edward III, 1349).
- (72) Viernhrbrod.
- (73) Sophism of Free Trade, 7th edit. Lond. 1850, p. 205.
- (74) Chronicon Pretiosum etc. By Bishop Fletwood. 1st edit. London 1707, and edit. London 1745.
- (75) ドイツ譯は『朝の一時まで』となつてゐる。
- (76) ドイツ譯では『上記の租税の十分の一は』云々となつてゐる。
- (77) W. Petty, Political Anatomy of Ireland, 1672, edit. 1691, p. 10.
- (78) A Discourse on the Necessity of Encouraging Mechanic Industry. Lond. 1689, p. 13.
- (79) Macaulay, History of England, vol. I p. 419.
- (80) An Essay on Trade and Commerce, containing Observations on Taxation etc. London 1770.
- (81) Consideration on Taxes. London 1765.
- (82) Jacob Vanderlint. Money answers all things. London 1734.
- (83) Rev. Nathaniel Forster, D. D., An Enquiry into the Causes of the Present Rise of Provisions. London 1766.
- (84) Postlethwayt Universal Dictionary of Trade and Commerce.
- (85) Ditto, Great Britain's Commercial Interest explained and improved 2nd edit. London 1755.
- (86) Postlethwayt, l. c. First Preliminary Discourse. p. 14.
- (87) ドイツ譯は『怠惰、放逸、亂行及び浪漫的な自由の夢』云々となつてゐる。
- (88) paupers.
- (89) マイスター・エックルト (Meister Eckart) に囚んだもの、彼れは中世紀に於けるドイツの思辯的、神祕的哲學者で、ドミニカン派の有力な學者であつた。1325年異端の罪で訴へられ、後ち一旦釋放されたが、彼れの死後著述は異端の故を以つて禁壓された。

- (90) Des classes ouvrières France, pendant l'année 1848. Par M. Blanqui.
- (91) Judgement of Mr. J. H. Otway, Belfast, Hilary Sessions, County Antrim 1860
- (92) Department du Nord.
- (93) Central Board of the Commission.
- (94) Juggernaut (Juggernaut car) インドのワリシュナ神の偶像を載せた車、年々この車を引廻し、轢殺さるれば極樂に行けると信じて信徒自ら車下に身を投じたといふ。
- (95) Charter.
- (96) Courtes Séances. 暫時の會議。
- (97) Court of Exchequer. 今は高等法院の刑事裁判所 Division of King's Bench に併合されてゐる。
- (98) F. Engels, Die englische Zehnstundebill.
- (99) Neue Rh. Zeitung. Politisch-ökonomische Revue. Aprilheft 1850, p. 13.
- (100) hand-mule spinners.
- (101) self-actor minders.
- (102) Factory Regulations Acts (6 Aug. 1859).
- (103) Suggestions for Amending the Factory Acts to enable the Inspectors to prevent illegal working, now become very prevalent.
- (104) ein parlamentarischer Abort 英譯は a parliamentary abortion (議會的流産となつてゐる)。
- (105) die Tapete (複數 Tapeten) 英譯本ではこれを das Tapet (carpet=絨氈) の意味に誤譯してゐる。
- (106) Court of Common Pleas 1855 年廢止。
- (107) Peter Paul Rubens フランダースの大畫家、『人間の活動のどよめきと力と』を表現するに非凡な技能を有してゐた人。
- (108) häusliche Industrie 家内工業 (Hausindustrie) と混同すべからず。
- (109) juristischer Rattenkönig (法律上の合尾鼠)。Rattenkönig とは生れつき尾で癒合された數匹の鼠のこと。
- (110) Quantum mutatus ab illo!

第九章

- (1) 古代ギリシアの有名な數理的哲學者アルキメデスは『我れに支點を與へよ。然ら

ば我れは世界を揺がさん』と壯語したとか。即ち本註の皮肉はこれに因んだものである。

- (2) カウツキー編纂『餘剩價值學說史』。
- (3) An Essay on the Political Economy of Nations. London 1821. p. 47, 49.
- (4) Kostenpreis.
- (5) 原文は『この労働者が』となつてゐるが前に労働者といふ言葉がなく辻褄が合はぬ故、かく意譯す。
- (6) Zunftwesen.
- (7) An Enquiry into the Connection between the Price of Provisions and the Size of Farms etc. By a Farmer. London 1773, p. 12.
- (8) Text-book of Lectures on the Political Economy of Nations. By the Rev. Richard Jones. Hertford 1852 Lecture III, p. 39.
- (9) Kopp, Entwicklung der Chemie, München 1878, S. 709 und 716.
- (10) Schorlemmer, Rise and Progress of Organic Chemistry. London 1879, p. 54
- (11) Die Gesellschaft Monopolia.

第 四 篇

第 十 章

- (1) William Petty, Political Anatomy of Ireland, 1672, p. 64.
- (2) Turgot, Réflexions etc. Oeuvres ed. Daire, t. I, p. 10.
- (3) Malthus, Inquiry into etc. Rent. Lond. 1815, p. 48 Note.
- (4) Sismondi, Études etc t. I, p. 22.
- (5) absoluter Mehrwert.
- (6) relativer Mehrwert.
- (7) Outlines of Polit. Econ. Lond. 1832, p. 49, 50.
- (8) potenzierte Arbeit. 自乗された労働。
- (9) The Advantages of the East-India Trade to England. Lond. 1720, p. 67.
- (10) Considerations concerning taking off the Bounty on Corn exported etc. Lond. 1752 p. 7.
- (11) A prize Essay on the comparative Merits of Competition and Cooperation. Lond. 1831, p. 27.
- (12) Il est convenant que plus on peut, sans préjudice, épargner de frais ou de travaux dispendieux dans la fabrication des ouvrages des artisans, plus cette épargne est profitable par la diminution des prix de ces ouvrages. Cependant ils croient, que la production de richesse qui résulte des travaux des artisans consiste dans l'augmentation de la valeur vénale de leurs ouvrages (Quesnay, Dialogues sur le Commerce et sur les Travaux des Artisans, p. 188, 189)
- (13) J. N. Bidaut, Du Monopole qui s'établit dans les arts industrielles et le commerce. Paris 1828, p. 13.
- (14) Dugald Stewart: Works ed. by Sir W. Hamilton Edinburgh, v. III 1855, Lectures on Polit. Econ. p. 318.
- (15) R. Jones l. c. Lecture III.

第 十 一 章

- (1) *Manufacture (Manufaktur)*. この語はラテン語の *manus* (手) 及び *factus* (製したる) より成り、機械工業の正反対のものを稱したのであるが、さればといつて單なる手工業 (*handicraft*) と混同すべきでない。歴史的には手工業に基くギルドの仲間から排除された職人の間に出来たものであつて、一の資本主又は商人が資本を下ろして多數の職人を一處に集め銘々に一部分の仕事をさせて、資本主がその全體を管理するといふ仕組であつて、ギルド手工業と機械工業 (工場制度) との中繼を成すものである。この意味で、私は曾てこれを『工場手工業』と譯した (拙譯マルクス資本論解説改造社版一六三頁参照)。マニユファクチャーアの最も重要な一部門を成したものは織維工業である。そこで織物業のことをマニユファクチャーアと呼ぶやうになつた。この語法は今でも行はれてゐる。
- (2) *Arbeitsfertigkeit*.
- (3) *Kooperation*.
- (4) *Concours de forces*.
- (5) *Massenkraft*.
- (6) *tun*. イギリス往時の量名、二百五十二ガロンに當る。
- (7) *E. G. Wakefield, A View of the Art of Colonization*. Lond. 1819 p. 168.
- (8) *John Bellers, Proposals for raising a College of Industry*. Lond. 1696, p. 21.
- (9) *Lebensgeister (animal spirits)*.
- (10) *An Enquiry into the Connection between the present Price of Provisions and the Size of Farms*. By a Farmer. Lond. 1773 p. 7, 8.
- (11) *F. Skarbek, Théorie des richesses sociales 2 ème éi.* Paris 1810, t. I. p. 97, 98.
- (12) *Liebig, Ueber Theorie und Praxis in der Landwirthschaft*. 1856, p. 23.
- (13) *Bengal Hurkaru*. Bi-Monthly Overland Summary of News. 22nd July 1861.
- (14) *R. Jones, An Essay on the Distribution of Wealth, part I. On Rent*. Lond. 1831, p. 191.
- (15) *Gattungsvermögen*.
- (16) *G. R. Carli, Note zu P. Verri, l. c. t. XV*, p. 196.
- (17) *immediately*. マルクスのドイツ譯では *ausserordentlich* (非常に) となつてゐる。
- (18) *Dirigent, manager*.

- (19) Arbeitsaufseher, foreman, overlooker, contremaitre.
 (20) James Steuart, Prince. of Pol. Econ. Lond. 1767, v. I, p. 137, 168.
 (21) R. Jones, Text-book of Lectures on Polit. Econ. of Nations, p. 77, 73.
 (22) Berkeley, The Querist, Lond 1750, p. 56, § 521.

第 十 二 章

- (1) A. Blanqui, Cours d'Econ. Industrielle. Recueilli par A. Blaise. Paris (1837-39), p. 79.
 (2) Produktionsmechanismus.
 (3) The Advantages of the East India Trade. Lond. 1720 p. 71.
 (4) Kaste. 族性的階級。
 (5) Diodorus Siculus, Historische Bibliothek, I. I., c. 74.
 (6) Historical and descriptive Account of Brit. India etc. by Hugh Murray, James Wilson etc. Edinburgh 1832, v. II, p. 449.
 (7) établisseur.
 (8) Report from Geneva on the Watch Trade in Reports by H. M's Secretaries of Embassy and Legation on the Manufactures, Commerces etc. No. 6. 1863.
 (9) The Advantages of the East India Trade p. 106.
 (10) The Industry of Nations. Lond. 1855, Part. II, p. 200.
 (11) Ch. Babbage, On the Economy of Machinery, Lond., 1832, ch. XXI, p. 172, 173.
 (12) Children's Employment Commission. 4th Report, 1865, p. 247.
 (13) Ure, Philosophy of Manufacture, p. 19--23, passim.
 (14) Storch, Cours d'Econ. Pol. Pariser Ausgabe, t. I, p. 173.
 (15) Berkeley, The Querist. 1750, § 520.
 (16) A. Ferguson, History of Civil Society, Edinb, 1750, part, IV, sect. II, p. 285.
 (17) B. de. Mandeville, Fable of the Bees, or Private Vices, Public Benefits.
 (18) Labour defended against the Claims of Capital. Lond. 1825 p. 25.
 (19) Lieut. Col. Mark Wilks, Historical Sketches of the South of India. Lond. 1810--17, v I, p. 118--20.
 (20) George Cambell, Modern India. Lond. 1852.
 (21) Th. Stamford Raffles, late Lieut. Gov. of Java. The History of Java. Lond

- 1817, v. II, p. 285.
- (23) Storch, Cours d'Econ Polit. Pariser Ausg t. I, p 250, 251.
- (24) W. Thompson, An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth. Lond. 1824, p. 274.
- (25) J. D. Tucket, A History of the Past and Present State of the Labouring Population. Lond. 1846, v. I, p. 149.
- (26) P. Ramazzini. De morbis artificum.
- (27) Encyclopédie des Sciences Médicales. 7me Dis. Auteurs Classiques.
- (28) Hygiène physique et moral de l'ouvrier dans les grandes villes en général. et das la ville de Lyon en particulier. Par le Dr. A. L. Fonterel. Paris 1858.
- (29) Die Krankheiten, welche verschiedenen Ständen, Altern und Geschlechtern eigentümlich sind. 6. Bänd. Ulm 1860.
- (30) Twickenham Economic Museum.
- (31) Eduard Rich M. D., Ueber die Entartung des Menschen, Erlangen 1863.
- (32) D. Urquart, Familiar Words. Lond. 1855, p. 119.
- (33) Advantages of the East India Trade etc. Lond, 1720.
- (34) Cesare Beccaria, Elementi di Econ. Publica, ed Custodi, Part. Moderna, t. XI, p. 28.
- (35) James Harris, Dialogue concerning Happiness Lond, 1741.
- (36) James Harris, Three Treatises etc. 3 ed. Lond. 1772.
- (37) division of employments.
- (38) Homer. O. yssee XIV, 228.
- (39) Arcilochus, Sextus Empiricus.
- (40) Plato, Republik I. 2. ed. Baiter, Orelli etc.
- (41) Xenophon, Cyropaedia I. VIII, c. 2.
- (42) Isokrates, Busiris, c. 8.
- (43) Essay on Trade and Commerce, Lond. 1770.

第 十 三 章

- (1) Ch. Hutton, Course of Mathematics.
- (2) Claussen's Circular Loom.
- (3) John Wyalt.

- (4) Wilhelm Schulz, Die Bewegung der Produktion. Zürich 1813, p. 33.
- (5) Giovanni Battista Vico.
- (6) Bewegungsmaschine (motor mechanism)
- (7) Transmissionsmechanismus.
- (8) Werkzeugmaschine (tool machine)
- (9) Arbeitsmaschine (working machine)
- (10) A. Redgrave in Reports of the Insp. of Fac'. 30th Apr. 1863, p. 36.
- (11) Reports of Inspectors of Factories for 31st. October 1856, p. 16.
- (12) self-acting mule.
- (13) slide rest.
- (14) self-actor.
- (15) self-acting stop.
- (16) The Industry of Nations. Lond. 1855, Part II, p. 229.
- (17) Benutzung und Abnutzung.
- (18) indizierte Pferdekräfte (indicated horsepower)
- (19) Karl Friedlich von Haller, Restauration der Naturwissenschaft.
- (20) Descartes, Discours de la Méthode.
- (21) Sir Dudley North, Discourses upon Trade (1691)
- (22) feeder.
- (23) Report of the Social Science Congress at Edinburgh. Oct, 1863.
- (24) Th. de Quincey, The Logic of Politic Econ. Lond. 1815, Note p. 117.
- (25) Public Economy Concentrated. Carlisle 1838, p. 53.
- (26) certifying surgeon.
- (27) undertaker (Gangmeister)
- (28) Ten Hours' Factory Bill. The Speech of Lord Ashley, March 15, Lond., 1844, p. 20.
- (29) Robert Owen, Observations on the Effects of the Manufacturing System 2nd. ed. L. n.l. 1817.
- (30) J. Fielden, The Curse of the Factory System. Lond. 1836, p. 11.
- (31) R. Torrens, On Wages and Combination. Lond. 1834, p. 53.
- (32) Senior, Letters on the Factory Act. Lond. 1837, p. 13, 14.
- (33) potenzierte Arbeit. 才文一四頁参照。
- (34) ギリシア神話中の美術神。

- (35) ギリシア神話中の神、金屬細工を善くす。
- (36) F. Biese, Die Philosophie des Aristoteles. Zweiter Band. Berlin 1842, p. 468.
- (37) Gedichte aus dem Griechischen. übersetzt von Christian Graf zu Stolberg. Hamburg 1782.
- (38) Alexander Redgrave, Factory Inspector in the Journal of Arts, 5th January, 1872.
- (39) Statistical Abstract for the U. Kingd. Nos. 8 and 13. Lond. 1861 and 1866.
- (40) Automat.
- (41) Autokrat.
- (42) minder.
- (43) Sisyphus 地獄の刑場で、岩石を山に轉ばし上げ落つるを更らに轉ばし上ぐるやう命ぜられたといふギリシアの王。
- (44) G. de. Molinari, Études Économiques, Paris 1246.
- (45) master.
- (46) The Master Spinners' and Manufacturer's Defence Fund. Report of the Committee. Manchester 1854, p. 17.
- (47) Dogberry 沙翁のマッチ、アドー、アバウト、ナッシング中に出る、頑固一徹な夜衛。茲では普通名詞に用ゐられる。
- (48) John Houghton, Husbandry and Trade improved. Lond. 1721.
- (49) The Advantages of the East India Trade 1720.
- (50) Rev. Nathaniel Forster, An Inquiry into the Causes of the present High Prices of Provisions, 1767, p. 61, 62.
- (51) Bandmühle.
- (52) Schurmühle.
- (53) Mühlenstuhl.
- (54) Luddite movement. ライセスターシャー州の白痴者 Ned Ludd に因める機械破壊運動。この暴動は 1812 年から 61 年迄続いた。
- (55) Boxhorn, Institutions Political 1663.
- (56) Piercy Ravenstone, Thoughts on the Funding System and its Effects. Lond. 1824, p. 15.
- (57) Bauernlegen.
- (58) a temporary inconvenience.

- (59) A Prize Essay on the comparative Merits of Competition and Cooperation
Lond. 1834, p. 29.
- (60) Royal Commission on Railways Minutes of Evidence. n. 17,862. & 17,863
Lond. 1867.
- (61) Gaskell, The Manufacturing Population of England. Lond. 1823, p. 3, 4.
- (62) An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand etc.
Lond. 1821, p. 72.
- (63) MacCulloch, Principles of Political Economy. Lond., 1830, p. 166.
- (64) A. Thiers, De la Propriété.
- (65) 石炭は労働要具ではない。労働対象である。随つてこの『労働要具』は機械にのみ掛るものと解すべきである。
- (66) 同上。
- (67) Zusammensetzung des Kapitals.
- (68) Des Systèmes d'Economie Politique etc. Par M. Ch. Ganih, 2ème éd, Paris
1821, t. II, p 224. ch. ib. p. 212.
- (69) Trade Societies of England.
- (70) ドイツ譯は『二志六片以上に及んだ』となつてゐる。
- (71) experimenti in corpore vili.
- (72) Fortunatusäskel フォルトナトスはドイツ傳説中の人物で欲する儘に錢を吐き出す財布を携へてゐた。
- (73) The Borough ロンドン行政区内テームズ河南岸にあるサウスワーク市邑。
- (74) cottage-factory.
- (75) cheap labour.
- (76) Hausindustrie.
- (77) slaughter-house.
- (78) mistress's house.
- (79) lace school.
- (80) straw-plait school.
- (81) natural school.
- (82) truck system.
- (83) the poorest of the poor.
- (84) John Bellers, Essays about the Poor, Manufacturers etc. p. 9.
- (85) Report of Proceedings etc. Lond. 1863, p. 63, 64.

- (86) National Association for the Promotion of Social Science.
- (87) Dugald Stewart's Works. Hamilton's Ed., Vol. VIII, p. 327, 328.
- (88) mysteries (mystères)
- (89) Etienne Boileau, Livre des métiers.
- (90) F. Engels u. Karl Marx Manifest der Kommunistischen Partei. Lond. 1881,
p. 5.
- (91) A. Corbon, De l'enseignement professionnel. 2ème. p. 50.
- (92) écoles d'enseignement professionnel.
- (93) Ne sutor supra crepidam.
- (94) Johan Pernar.l Basedow. 1723 年ハンブルグに生る、熱心なる教育改良論者、その教育法はルソーの原理に従つたもの、この原理に則リデサウ市に模範學校を設立したが失敗に歸した。
- (95) John Bellers, Proposals for raising a College of Industry etc. Lond. 1696,
p. 12, 14, 18.
- (96) Senior, Social Science Congress, p. 55, 56.
- (97) Report from the Select Committee on Mines, together with.....Evidence,
23 July 1866.
- (98) Vissering, Handboek van Praktische Staatshuishoudkunde. 1860—62.
- (99) Dr. Wm. von Hamm, Die landwirthschaftliche Geräte und Maschinen
Englands, 2. Aufl. 1856.
- (100) この一句、英譯本では『工藝、及び種々なる行程の、社會的全一體への結合を展開する』(.....developes technology and the combining together of various processes into a social whole etc.) となつてゐる。誤譯であらう。
- (101) Liebig, Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agrikultur und Physiologie.
7. Auflage 1862.

第五篇

第十四章

- (1) drachum 古代ギリシアの銀貨、約九片四分の三に當る。
- (2) Gängelband (leading-string) 昔、子供に歩行を仕込むために附けた綱。いつまでもこの綱に手引きされた子供は容易に一人立ちが出来ぬと同じく、自然が餘りに豊饒なる時は、人間はいつまでも自然に縋るの意。
- (3) England's Treasure by Foreign Trade. Or the Balance of our Foreign Trade is the Rule of our Treasure. Written by Thomas Mun, of London, Merchant and now published for the common good by his son John Mun. Lond. 1669. p. 181, 182.
- (4) An Inquiry into the Present High Price of Provisions. Lond. 1767 p. 10.
- (5) Cuvier. Discours sur les révolutions du globe ed. Hoefer. Paris 1863, p. 141
- (6) An Essay on the Governing Causes of the Natural Rate of Interest. Lond. 1750, p. 60.
- (7) Joseph Massey (Massie)
- (8) F. Shouw, Die Erde, die Pflanze und der Mensch, 2. Aufl. Leipzig 1854, p. 148.
- (9) J. St. Mill, Principles of Political Economy, Lond. 1868, p. 252-53, passim.
- (10) ミルの原文から直接翻譯したものには、この編輯者註は不要。

第十五章

- (1) Outlines of Political Economy etc. London. 1832, p. 67.
- (2) Grove, On the Correlation of Physical Forces. London 1834.
- (3) Essays on Political Economy in which are illustrated the principal Causes of the Present National distress. Lond. 1803, p. 248.
- (4) Malthus, Inquiry into the Nature and Progress of Rent. Lond. 1815 p. 48. n

第十六章

- (1) Léonce de Lavergne.
- (2) Dritter Brief an v. Kirchman von Rodbertus. Widerlegung der Ricardo'schen Theorie von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie. Berlin 1851.
- (3) Briefe etc. von Dr. Rodbertus-Jagetzow, herausgg. von Dr. Rud. Meyer, Berlin 1881, I. Bd. p. 111, 48. Brief von Rodbertus.
- (4) A. de Laborde, De l'Esprit de l'Association dans tous les intérêts de la Communauté. Paris 1818
- (5) Turgot, Reflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses, p. 11.

第六篇

第十七章

- (1) notwendiger oder natürlicher Preis.
- (2) Marktpreis.
- (3) A Critical Dissertation on the Nature etc. of Value, p. 50, 51.
- (4) Observations on some verbal Disputes in the Political Economy p. 75. 76.
- (5) E. G. Wakefield in s. Edit. von A. Smith's Wealth of Nations, Lond. 1833, v. I., p. 231 Note.
- (6) Simonde de (i. e. Sismondi), De la Richesse Commerciale. Genève 1803, t. I. p. 37.
- (7) value of labour.
- (8) Do ut des, do ut facias, facio ut des, faiso ut facias ローマ債權法の四つの基本公式。

第十八章

- (1) Zeitlohn (time-wage)
- (2) Sir Edward West, Price of Labour and Wages of Labour Lond. 1826, p. 67.
- (3) Essay on the Application of Capital to Land. by a Fellow of Univ. College of Oxford. Lond. 1815.
- (4) N. W. Senior, Three Lectures on the Rate of Wages. Lond. 1830.
- (5) Stundenlohn (the hour's wage)
- (6) normal working day, the day's work, the regular hours of work.
- (7) Ueberzeit (overtime)
- (8) extra pay.
- (9) Report, etc., relative to the Grievances complained of by the Journeymen Bakers Lond. 1863, p. LII & ibid. Evidence, n. 479, 359, 27.

第 十 九 章

- (1) Stücklohn (piece-wage)
- (2) John Watts, Trade Societies and Strikes, Machinery and Co-operative Societies. Manchester 1865, p. 52, 53.
- (3) John Watts, Facts and Fiction of Polit. Econ. 1842.
- (4) T. J. Dunning, Trade's Unions and Strikes Lond. 1860, p. 22.
- (5) Abrégé élémentaire des Principes de l'Economie Politique, Paris 1796, p. 32,
- (6) Germain Garnier.
- (7) Verpachtung (sub-letting)
- (8) sweating-system.
- (9) à la journée ou à la pièce.
- (10) Cantillon, Essai sur la Nature du Commerce en Général, éd. Amsterdam 1756, p. 185, 202.
- (11) The Analysis of Trade, Commerce etc. by Philip Cantillon, late of the City of London, Merchant.
- (12) H. Gregoir, Les Typographes devant le Tribunal Correctionnel de Bruxelles. Bruxelles 1865, p. 9.
- (13) Report and Evidence from the Select Committee on Petition respecting the Corn Laws.
- (14) Reports from the Lords' Committee, on the State of the Growth, Commerce, and Consumption of Grain, and all Laws relating thereto
- (15) Remarks on the Commercial Policy of Great Britain. Lond. 1815, p. 48.
- (16) A Defence of the Landowners and Farmers of Great Britain, Lond 1814, p. 4, 5.
- (17) Malthus, Inquiry into the Nature and Progress of Rent. Lond. 1815.
- (18) H. Fawcett, The Economic Position of the British Labourer, Cambridge and London 1865, p. 178.
- (19) On Combination of Trades. New Edit. Lond. 1834, p. 42.

第 二 十 章

- (1) David Buchanan in seiner Ausgabe von A. Smith's Wealth of Nations 1814,

v. I, p. 417 Note.

- (2) James Anderson, Observations on the means of exciting a spirit of National Industry etc. Edinb. 1777, p. 350, 351.
- (3) N. 2079 in Royal Commission on Railways Minutes. 1867.
- (4) H. Carry, Essay on the Rate of Wages; with an Examination of the Causes of the Differences in the Conditions of the Labouring Population throughout the World. Philadelphia 1835.

第七篇

第二十一章

- (1) Revenue.
- (2) Sismondi, Nouveaux Principes d'Economie Politique, Vol I. p. 81, 82.
- (3) J. Mill, Elements of Political Economy, Uebers. von Parissot, Paris 1823, p. 34.
- (4) John Cazenove in Note zu seiner Ausgabe von Malthus' Definitions in Political Economy. London 1853, p. 22.
- (5) マルクスはこの句を『労働者の生活資料は今日でも地球上の四分の一に於いては資本家に依つて前貸されて居らぬ』とドイツ譯してゐるが、これでは『四分の一』の意味が反對になりはしないか。この形に書き換へるならば『四分の三』とするが至當であるやうに思はれる。
- (6) Richard Jones, Textbook of Lectures on the Political Economy of Nations, Hertford 1852, p. 16.
- (7) Reasons for a limited Exportation of Wool. Lond. 1677, p. 19.
- (8) Reasons for the late Increase of the Poor Rates: or a comparative View of the Prices of Labour and Provisions, Lond. 1777, p. 37.
- (9) Th. Hodgskin, Labour Defended etc. p. 13.
- (10) Ferrand, Motion on the Cotton Famine. H. o. C., 27th April, 1863.
- (11) ドイツ譯『……必然以上に多數の工場主を造り出し得るであらう。』
- (12) hind's house.
- (13) bondage (Hörigkeit).
- (14) bondman (Höriger). 隸農
- (15) Karl Marx, Lohnarbeit und Kapital, in N. Rh. Z. Nr. 266, 7. April 1849.

第二十二章

- (1) *Akkumulation des Kapitals.*
- (2) Malthus, *Principle of Political Economy* 2nd, ed. Lond. 1836, p. 319.
- (3) E. G. Wakefield, *England and America.* London. v. II. p. 110,
- (4) Cherbuliez, *Riche ou Pauvre.* Paris 1841, p. 58.
- (5) R. Jones, *An Introductory Lecture on Political Economy* London 1833, p. 15.
- (6) *The Source and Remedy of the National Difficulties. A Letter to Lord John Russell.* London 1821.
- (7) *London Economist*, 19 July, 1859.
- (8) *Tableau économique.*
- (9) Storch, *Cours d'Economie Politique.* Ed. Petersbourg 1815, vol. I, p. 140 n.
- (10) Dr. John Aikin, *Description of the Country from 30 to 40 Miles round Manchester.* Lond, 1795, p. 182 sqq.
- (11) *An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand lately advocated by Mr. Malthus,* p. 67.
- (12) *Abstinence (Enth ltung)*
- (13) Senior, *Prncipes fondamentaux de l'Econ. Pol.* trad. Arrivabe, Paris 1836 p. 308.
- (14) Scrope, *Political Economy* edit. A. Potter, New-York 1841, p. 133, 134.
- (15) Richard Jones, *Text Book of Lectures on the Political Economy of Nations.* Hertford, 1852, p. 16, 21.
- (16) J. St. Mill, *Essays on some unsettled Questions of Political Economy.* Lond. 1844, p. 90.
- (17) *An Essay on Trade and Commerce,* Lond. 1770, p. 44.
- (18) Benjamin Thomson. *Essays, political, economical and philosophical etc.* 3 vols. Lond. 1796—1802, vol I, p, 288.
- (19) Sir. F. M. Eden, *The State of the Poor, or an History of the Labouring Classes in England etc.*
- (20) Charles H. Parry M. D., *The Question of the Necessity of the existing Cornlaws considered.* Lond. 1816, p. 69.
- (21) G. B. Newnham, *A. Review of the Evidence before the Committees of the*

two Houses of Parliament on the Cornlaws. London 1815, p. 28 Note.

- (22) extractive Industrie.
- (23) J. B. Say, *Lettres á M. Malthus*. Paris 1820, p. 168, 169.
- (24) An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand lately advocated by Mr. Malthus, p. 116, 110.
- (25) J. Bentham, *Theorie des Peines et des Récompenses*, trad. Ft. Dumont. 3^{ème} éd., Paris 1826, t. II, l. IV, ch. II.
- (26) H. Fawcett, Prof. of Polit Econ. at Cambridge, *The Economic Position of the British Labourer*. Lond. 1865. p. 120.

第二十三章

- (1) Zusammensetzung des Kapitals.
- (2) Wertzusammensetzung des Kapitals.
- (3) technische Zusammensetzung des Kapitals.
- (4) organische Zusammensetzung des Kapitals.
- (5) Colins, *L'Economie Politique, Source des Révolutions et des Utopies prétendues Socialistes*. Paris 1857, t. III, p. 331.
- (6) B. de Mandeville, *The Fable of the Bees*. 5th ed. London 1728, Remarks, p. 212, 213, 328.
- (7) civil institutions.
- (8) Bruckner, *Théorie du Système animal*, Leyde 1767.
- (9) A Letter to A. Smith, L. L. D. On the Life, Death and Philosophy of his Friend, David Hume. By one of the People called Christians, 4th ed. Oxford 1784.
- (10) James Anderson, *The Bee*, Edinburgh 1791—93, Vol. III, p. 164, 165.
- (11) Peculium. ローマ法では、家長が非獨立民殊に奴隸の自由處分に委ねた特殊財物のことを斯く呼んでゐる。
- (12) Von Thünen, *Der isolierte Staat. Zweiter Theil. Zweite Abtheilung*. Rostock 1863, p. 5, 1.
- (13) Koncentration.
- (14) ursprüngliche Akkumulation.
- (15) Zentralisation.

- (16) eine relative, d. h. für die mittleren Verwertungsbedürfnisse des Kapitals ueberschuessige, daher ueberfluessige oder Zuschuss-Arbeiterbevölkerung.
- (17) Census of England and Wales for 1862, vol. III. Lond. 1863, p. 36.
- (18) John Barton, Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society, London, 1817, p. 16, 17.
- (19) Herman Merivale, Lectures on Colonization and Colonies. Lond, 1841 and 1842, v. I, p. 148.
- (20) Harriet Martineau, The Manchester Strike, 1842, p. 10.
- (21) Sancho Panza. ドン・キホーテの従者、粗野なる常識を有するが、想像力なき百姓である。
- (22) Dr. Lee, Medical Officer of Health for Manchester.
- (23) Galiani, Della Moneta, vol. III. von Custodi's Sammlung der Scrittori Classici Italiani di Economia Politica, Parte Moderna. Milano 1801, p. 78.
- (24) S. Laing, National Distress. 1844, p. 69.
- (25) Lumpenproletariat 糞糞プロレタリア。
- (26) Faux frais 結果の上に何等貢献する所なきも、與へられたる事情の下に避け得られざる營業費のこと。
- (27) G. Ortes, Della Economia Nazionale libri sei, 1777, bei Custodi Parte Moderna, vol. XXI, N. 6, 9, 22, 25 etc.
- (28) A Dissertation on the Poor Laws. By a Wellwisher of Mankind, 1786, re-published Lond. 1817, p. 15, 39, 41.
- (29) dignité conventionelle.
- (30) Les nations pauvres, c'est là où le peuple est à son aise: et les nations riches, c'est là où il est ordinairement pauvre.
- (31) Tenth Report of the Commissioners of H. M's. Inland Revenue London 1866, p. 38.
- (32) Anticlimax.
- (33) The Theory of Exchanges. The Bank Charter Act of 1844. The Abuse of the Metallic Principle to Depreciation. London. 1864, p. 135.
- (34) Report of the Officer of Health of St. Martin's in the Fields, 1865.
- (35) bind (bound).
- (36) bondage (束縛、隸農)。
- (37) finanzieller Charakter.

- (38) Reynolds' Newspaper, January 20th, 1867.
- (39) Edouard Ducpétiaux, Budgets économiques des classes ouvrières en Belgique, Bruxelles, 1855.
- (40) De Vlamingen Vooruit! Brüssel 1860, p, 15, 16.
- (41) gentleman 貴族にあらざるも紋章を有し得る階級。
- (42) James E. Th. Rogers, A History of Agriculture and Prices in England. Oxford 1866 v. 1, p. 690.
- (43) Reasons for the late Increase of the Poor-Rates; or a comparative View of the Price of Labour and Provisions, Lond., 1777, p. 5, 11.
- (44) Dr. Richard Price, Observations on Reversionary Payments, 6 ed. By W. Morgan. London 1805, v. II, p. 158, 159.
- (45) E. G. Wakefield, England and America. London 1833, v. I, p. 47.
- (46) hind.
- (47) Report of the Commissioners.....relating to Transportation and Penal Servitude. Lond. 1863, p. 42, 50.
- (48) close village.
- (49) open village.
- (50) gang-system.
- (51) Pr. létariat foncièr.
- (52) Karl Marx, Der Achtzehnte Brumair des Louis Bonaparte, 2. Aufl., Hamburg, 1869, p. 56 sqq. Brumair は従前のフランス新曆十一月を指し、今の十月二十二日より十一月二十日迄を含む。1799 年の Brumair 十八日（十一月九日）ナポレオン一世は共和政府を倒して自ら執政官となつた。それを茲ではナポレオン三世のクーデターに當て嵌めたのである。
- (53) Pierre Dupont, Ouvriers
- (54) confined labourers.
- (55) gangmaster.
- (56) Rattenfänger von Hameln ドイツ昔噺中の主人公。ドイツの或る町に來たり、一定の報酬を受けて鼠退治を引受けたところ、退治してしまつてから報酬を出さぬので、彼れは怒つて魔笛を吹き鳴らした。音を聞いて町の子供等が洞穴の中に集つて來た。彼れは子供等を入れたなり洞の錠を下ろし、永へに幽閉した。
- (57) Phonerogumie.
- (58) public, common or tramping gang.

- (59) private gang.
- (60) Agricultural Statistics Ireland. General Abstracts, Dublin for the years 1860, et seq.
- (61) Agricultural Statistics, Ireland. Tables showing the Estimated Average Produce etc. Dublin 1866.
- (62) professional.
- (63) Thomas Sadler, Ireland, its Evils and Their Remedies, 2nd ed. London 1829.
- (64) Murphy, Ireland, Industrial, Political, and Social, 1870.
- (65) Reports from the Poor Law Inspector on the Wages of Agricultural Labourers in Dublin, 1870.
- (66) Agricultural Labourers (Ireland) Return etc. 8 March, 1862.
- (67) 平民版に依る。正版では『1846年に於ける』となつてゐる。
- (68) Nassau W. Senior, Journals, Conversations and Essays relating to Ireland, 2 vols. London 1868, v. II, p. 282.
- (69) Fenier アイルランドをイギリスの治下から脱せしめんと圖つた在米アイルランド人結社の團員。
- (70) ホレース詩集第七篇。

第二十四章

- (1) ursprüngliche Akkumulation.
- (2) previous accumulation.
- (3) bailiff (Vogt) 領主に代つて土地を保管する人即ち差配。
- (4) freehold estate.
- (5) Macaulay, History of England, 10th ed. London 1854, vol. I, p. 333—334.
- (6) Mirabeau, De la Monarchie Prussienne. Londres, 1788, t. ii, pp. 125, 126.
- (7) Fortescue, Laudibus Legum Angliae.
- (8) Harrison, Description of England. Prefixed to Holinshed Chronicles.
- (9) inclosure (Einhegung) 圍込み、共同地の私有化。
- (10) tenancy at will 地主の任意に處分し得る小作地。
- (11) yeomanry 獨立自營農民階級。
- (12) demens (Herren güter) 領主の屋敷に隣接せる小作を許さない土地。
- (13) depopulating inclosure.

- (14) depopulating pasturage.
- (15) Thomas Morus, *Utopia*, transl. Robinson, ed. Arbor, London, 1869, p. 41.
- (16) Bacon, *Essays, Civil and Moral*.
- (17) Bacon, *The Reign of Henry VII etc.* Verbatim Reprint from Kennet's England, ed. 1719, London, 1870, p. 308.
- (18) George Roberts, *The Social History of the People of the Southern Countries of England in past Centuries.* Lond., 1856, p. 184, 185.
- (19) William Cobbett, *A History of the Protestant Reformation*, § 471.
- (20) Robert Blakey, *The History of Political Literature from the earliest times.* London 1855, v. II, p. 84, 85.
- (21) A Letter to Sir T. C. Bambury, Brt. On the High Price of Provisions. By a Suffolk Gentleman. Ipswich 1795, p. 4.
- (22) *Inquiry into the Connection of large Farms etc.* London, 1773.
- (23) law of settlement.
- (24) The character and behaviour of King William, Sunderland etc., as represented in Original Letters to the Duke of Shrewsbury from Somers, Halifax, Oxford, Secretary, Vernon etc.
- (25) F. W. Newman, *Lectures on Political Economy*, London 1851, p. 129, 130.
- (26) *Our old Nobility.* By Noblesse Oblige. London 1879.
- (27) *Bills for Inclosures of Commons.*
- (28) *A Political Enquiry into the Consequenses of enclosing Waste Lands.* London 1759, p. 75.
- (29) Capital farm.
- (30) *Two Letters on the Flour Trade and the Dearness of Corn.* By a Person in Business. London 1767, p. 19, 20.
- (31) Merchant farm.
- (32) Thomas Wright, *A short Address to the Public on the Monopoly of large Farms.* 1779, p. 2, 3.
- (33) Rev. Addinton, *Enquiry into the Reason for or against enclosing open Fields.* London. 1772, p. 37—43 passim.
- (34) MacCulloch, *Literature of Political Economy.* London 1845.
- (35) Appian, *Römische Bürger-Kriege*, I, 7.
- (36) *The Perils of the Nation*, 2nd ed., Lond. 1843, p. 14.

- (37) clearing of estates (Lichten der Güter).
- (38) James Anderson, Observations on the Means of exciting a Spirit of National Industry etc. Edinburgh 1777.
- (39) George Enzor, An Inquiry concerning the Population of Nations. Lond. 1818, p. 215, 216.
- (40) David Urquhart, Portofolio. New Series.
- (41) Robert Somers, Letters from Highlands; or, the Famine of 1847, London 1848, p. 12—28 passim.
- (42) Bauernlegen.
- (43) raundsman.
- (44) Hollingshed, Description of England, v. I, p. 186.
- (45) Strype, Annals of the Reformation and Establishment of Religion, and other Various Occurrences in the Church of England during Queen Elisabeth's Happy Reign. 2nd ed. 1725, vol. II.
- (46) royaume des truands.
- (47) in open market.
- (48) Sophisms of Free Trade. By a Barrister. Lond. 1850.
- (49) Kaiserliche Privilegien und Sanktions für Schlesien. I, 1251.
- (50) Révolutions de Paris. Paris 1791, vol. II, p. 523.
- (51) Buchez et Roux, Historie Parlementaire, t. X, p. 193—195.
- (52) villicus 農業奴隸の監督人。
- (53) metayer.
- (54) A compendious or brief Examination of Certain Ordinary Complaints of Diverse of our Countrymen in these our Days. By W. S., Gentleman (London 1581).
- (55) regisseur.
- (56) homme d'affaires.
- (57) Alexis Monteil, Historie des Matériaux manuscrits etc, 214.
- (58) ferme 又は terrier.
- (59) fief.
- (60) arrière fief.
- (6) Geoffroy Saint-Hilaire, Notions de Philosophie Naturelle. Paris 1838.
- (62) Steuern pour le roi de Prusse 直譯すれば『プロイセン王のための租税』。フラ

ンス語で travailler pour le roi de Prusse (プロイセン王のために働く) とは『ただ働き』の意である。

- (63) J. J. Rousseau, Discours sur l'Economie Politique. Genève 1765.
 (64) manufactures réunies.
 (65) The Natural and Artificial Rights of Property Contrasted. London 1832, p. 98, 99.
 (66) William Howitt, Colonization and Christianity. A Popular History of the Treatment of the Natives by the Europeans in all their Colonies. London 1838, p. 3.
 (67) Charles Comte, Traité de la Législation. 3 me ed. Bruxelles 1837.
 (68) Thomas Stamford Raffles, late Lieut. Gov. of that island, Java and its dependencies.
 (69) agiotage 公債證書等の相場を昂低せんとする投機者の掛引。
 (70) Thomas Gisbourne, Enquiry into the Duties of Men. 1795, v. II.
 (71) Henry Brougham, An Inquiry into the Colonial Policy of the European Powers. Edinb. 1803. v. II, p. 74.
 (72) Marie Augier, Du Credit Public. Paris, 1843.

第二十五章

- (1) systematic colonization.
 (2) E. G. Wakefield, England and America, v. II, p. 33.
 (3) Merival, Lectures on Colonization and Colonies. London 1841 and 1842, vol. II, p. 235—314 passim.
 (4) The Land Law of Victoria by the Hon. G. Duffy, Minister of Public Lands. London 1862.